愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 44 集

名古屋城三の丸遺跡(IV)

——愛知県警察本部地点の調査——

1 9 9 3

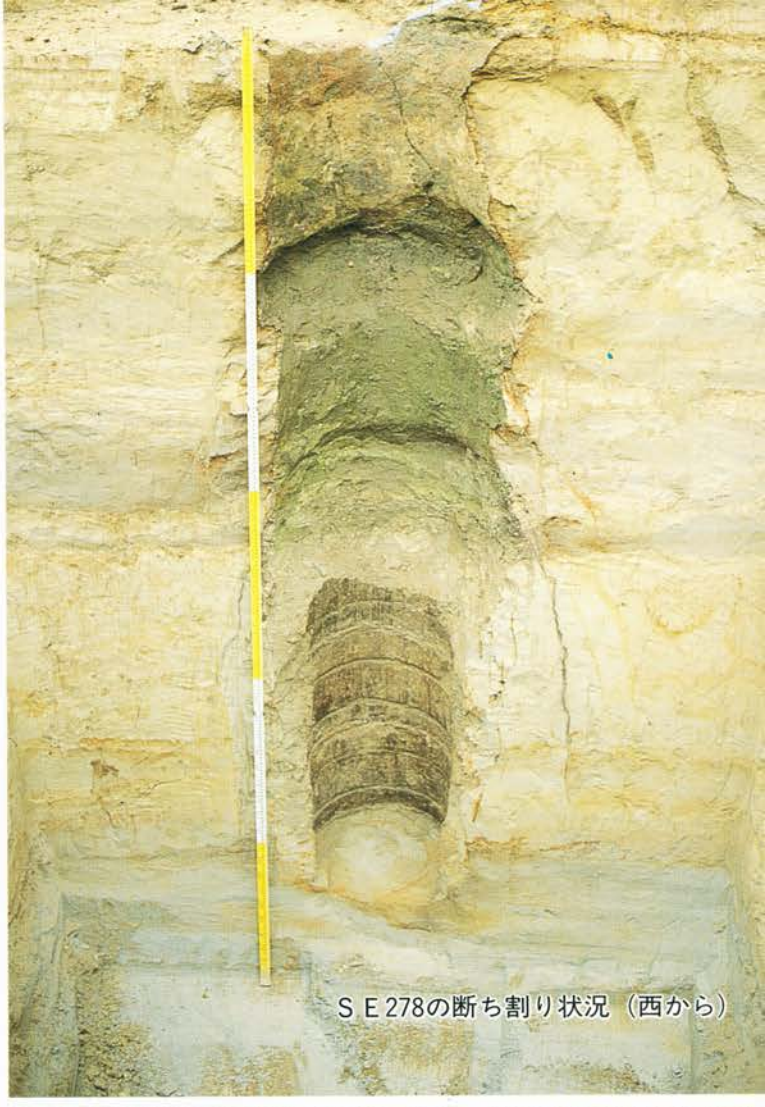
財団法人　愛知県埋蔵文化財センター

調査区全景（北上空から）

天守閣と愛知県警察本部

調査区全景（南西上空から）

S E 266の断ち割り状況（北から）



S E 278の断ち割り状況（西から）

S D 407断面（調査区東壁）

S D 001断面（調査区東壁）

ＳＢ301全景

ＳＢ301中央東西ベルト西半部（北から）

序

名古屋城は、徳川御三家の一つである尾張徳川家62万石の藩城として、近世以来、全国にその名を馳せてきました。今にその優雅な姿を伝えている代表的な近世城郭としても、よく人の知るところであります。国の重要文化財も数多く、三の丸を囲む外堀も国の特別史跡に指定されています。しかしながら、旧状をよくとどめた本丸・二の丸に比べ、三の丸は早くから開発が進み、今日では一大官庁街となっています。甍を連ねて立ち並んでいた藩の重臣達の屋敷地も、今では偲ぶよすがもなく、ことごとく消え失せています。とはいえ、地表下には弥生時代以来近世にいたるまでの人々の足跡がはっきりと残されており、往時を物語る遺跡として再び脚光を浴びつつあります。

こうした三の丸の一角において、愛知県警察本部の敷地内に総合科学センターを建設することが計画されるにいたり、埋蔵文化財の事前調査が必要となりました。このため、(財)愛知県埋蔵文化財センターでは、愛知県教育委員会を通じ、県警察本部より委託を受け、平成3年度事業として発掘調査を実施するとともに、翌4年度には報告書作成事業を実施してまいりました。

調査の結果、江戸時代の遺構、遺物だけでなく、戦国時代の那古野城にかかわる遺構、遺物も発見され、多くの新たな知見を得ることができました。本書は、その成果をまとめたものであり、歴史研究の資料として活用されるとともに、埋蔵文化財の理解への一助となれば幸いです。

なお、発掘調査の実施にあたっては、関係諸機関並びに関係者の方々には、多大な御指導と御協力をいただきました。厚く御礼申し上げる次第であります。

平成5年3月

財団法人　愛知県埋蔵文化財センター

理事長　髙　木　鐘　三

例　　言

1．本書は、愛知県名古屋市中区三の丸に所在する名古屋城三の丸遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、愛知県警察本部総合科学センター建設にともなう事前調査として、(財)愛知県埋蔵文化財センターが県教育委員会を通じ委託を受けて実施した。調査対象面積は3600㎡である。

3．発掘調査期間は平成3年6月から同年12月にかけてであり、調査に引続き、平成4年度には報告書作成のための整理作業を実施した。

4．調査は、鷲見　豊（本センター主査）・遠藤才文（調査研究員）・余合昭彦（同）・酒井俊彦（調査研究員）・岡本直久（嘱託員）が担当した。

5．調査にあたっては、県教育委員会文化財課・愛知県埋蔵文化財調査センターの指導を得るとともに、名古屋市教育委員会、愛知県警察本部をはじめとして多くの方々の御指導、御協力を得た。

6．遺構の計測は、新平面直角座標第Ⅶ座標系による。

7．遺構は次のアルファベットによる分類記号と、地区別の通し番号との組合せによって表示する。

ＳＡ：柵列、ＳＢ：建物、ＳＤ：溝・堀、ＳＥ：井戸、ＳＫ：土坑、
ＳＰ：柱穴、ＳＳ：石列、ＳＸ：その他

8．本書の編集・執筆は主として遠藤才文が担当し、一部、川井啓介（調査研究員）、松田　訓（調査研究員）、加藤安信（調査課長）が分担執筆した（文責は各節末に明示）。また第Ⅲ章第3節（7）は（財）元興寺文化財研究所北野信彦氏から、第Ⅳ章補論については名古屋市博物館の下村信博氏からそれぞれ玉稿をいただいた。

9．本書の作成にあたっては、大橋康二氏、楢崎彰一氏をはじめとして多くの方々の御指導、御協力を得た。

10．調査記録は本センターで保管している。

11．出土品は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

12．出土品の登録番号は、戦国期のもの及び木製品・金属製品は挿図・図版番号と同一であり、近世のものは陶磁器類が1000番、焼塩壺が3000番、瓦が4000番、人形が5000番、石製品類が1000番をそれぞれ挿図・図版番号に加算したものである。また、図面掲載以外の注目すべき遺物は、写真図版に掲載し、登録番号はそれぞれの挿図・図版番号の末番号からの通し番号扱いとした。

目　　次

Ⅰ．立地と調査概要
1．遺跡の立地…… 2
(1) 自然立地…… 2
(2) 歴史立地…… 4
2．調査の経過…… 8
(1) 調査前史…… 8
(2) 調査方針と経過…… 10
3．基本層序…… 13

Ⅱ．戦国時代の遺構と遺物
1．遺構…… 16
概要……建物跡……溝と堀……柵列……井戸……土坑
2．遺物…… 34
(1) 陶磁器類…… 34
分類……統計方法……概要……ＳＤ001……ＳＤ401……ＳＤ006……その他のＳＤ……ＳＢ301……井戸……土坑
(2) 瓦・石製品…… 69

Ⅲ．近世の遺構と遺物
1．近世前期の遺構…… 74
概要……柵列……溝……井戸……土坑
2．近世後期の遺構…… 90
概要……屋敷地境……石列……建物跡……土坑
3．遺物…… 106
(1) 陶磁器類の分類と概要…… 106
(2) 各遺構出土の陶磁器類…… 117
ＳＥ503・275・405・ＳＤ402……ＳＤ104……ＳＤ106……ＳＫ210……ＳＫ209……ＳＫ021……ＳＫ401……ＳＫ304……ＳＫ211……ＳＫ206……ＳＫ219……ＳＫ123……ＳＫ212……ＳＫ010……ＳＫ002……ＳＫ207……ＳＫ202……ＳＫ009……ＳＫ014……ＳＫ346……ＳＫ118……ＳＫ101……ＳＫ303……その他の遺構……検出
(3) 焼塩壺…… 231
(4) 瓦類…… 239
(5) 人形類…… 247
(6) 木製品と漆器…… 253
(7) 加飾漆器の科学分析…… 259
(8) 金属製品…… 268
(9) ガラス・石製品…… 273

Ⅳ．補論とまとめ
1．文献上からみた那古野城―戦国期を中心に―…… 276
2．まとめ

図版…… 291

図版目次

図版１　上面遺構（近世）全景
図版２　調査区完掘状態
図版３　ＳＢ301完掘状態（東から）
　　ＳＢ301遺物出土状態（西から）
図版４　ＳＤ401全景（西から）
　　ＳＤ001全景（西から）
図版５　ＳＤ006全景（北から）
　　ＳＤ407断面（調査区東壁）
　　ＳＤ009断面（調査区西壁）
図版６　ＳＤ001中央セクションベルト（東から）
　　ＳＤ001分岐地点遠景（西から）
図版７　ＳＤ001分岐地点近景
　　ＳＤ001断面（調査区東壁）
図版８　ＳＡ101・102・103完掘状態（南から）
　　ＳＡ301・302完掘状態（南から）
図版９　ＳＫ229・228・304完掘状態（西から）
　　ＳＫ229・228・304完掘状態（東から）
図版10　ＳＢ001縁石検出状況（南から）
　　ＳＢ001縁石検出状況（東から）
図版11　ＳＢ001柱穴列検出状況（南から）
　　ＳＢ001柱穴列断ち割り状況（南から）
図版12　ＳＸ001検出状況（上が西）
　　ＳＸ001検出状況（西から）
図版13　ＳＢ301・302完掘状態（上が北）
　　ＳＢ301近景
図版14　ＳＳ101西端部検出状況（南から）
　　ＳＳ101中央部検出状況（南から）
　　ＳＳ101東端部検出状況（南から）
　　ＳＳ101東端部側面（南から）
図版15　ＳＤ203西端部階段遺構検出状況（南から）
　　ＳＤ203西セクションベルト（西から）
図版16　ＳＥ114断ち割り状況（北から）
　　ＳＥ145断ち割り状況（西から）
　　ＳＥ244断ち割り状況（西から）
　　ＳＥ266断ち割り状況（東から）
図版17　ＳＥ223・227断ち割り状況（東から）
　　ＳＥ278断ち割り状況（西から）
　　ＳＥ278最下部近景
図版18　近世遺物　供膳具（椀）
図版19　近世遺物　供膳具（椀）
図版20　近世遺物　供膳具（椀）
図版21　近世遺物　供膳具（椀）
図版22　近世遺物　供膳具（椀）
図版23　近世遺物　供膳具（椀）
図版24　近世遺物　供膳具（椀・小椀）
図版25　近世遺物　供膳具（小椀・皿）
図版26　近世遺物　供膳具（小椀・皿）
図版27　近世遺物　供膳具（皿）
図版28　近世遺物　供膳具（皿・鉢）
図版29　近世遺物　供膳具（鉢）・調理具
図版30　近世遺物　供膳具（皿）
図版31　近世遺物　供膳具（皿・鉢）
図版32　近世遺物　供膳具（鉢）・調理具
図版33　近世遺物　調理具・貯蔵具
図版34　近世遺物　貯蔵具（瓶・壺・鉢）
図版35　近世遺物　貯蔵具（鉢）・その他
図版36　近世遺物　貯蔵具（瓶・壺・甕）
図版37　近世遺物　貯蔵具（甕・鉢）
図版38　近世遺物　貯蔵具（鉢）・灯火具
図版39　近世遺物　灯火具・火具・化粧具
図版40　近世遺物　化粧具・喫煙具・調度具
図版41　近世遺物　神仏具・喫煙具
図版42　近世遺物　喫煙具・調度具
図版43　近世遺物　調度具・蓋類
図版44　近世遺物　蓋類
図版45　近世遺物　焼塩壺(1)
図版46　近世遺物　焼塩壺(2)
図版47　近世遺物　瓦(1)
図版48　近世遺物　瓦(2)
図版49　近世遺物　瓦(3)
図版50　近世遺物　人形類
図版51　近世遺物　人形類・金属製品
図版52　近世遺物　金属製品・木製品
図版53　近世遺物　ガラス製品
図版54　戦国遺物

挿図目次

図1　名古屋城三の丸遺跡の自然立地
図2　周辺の遺跡分布
図3　那古野城をめぐる戦国城館
図4　名古屋城をめぐる道
図5　絵図（名護屋絵図、1729年・享保14作製）のなかの調査区
図6　今回の調査区と過去の調査地点
図7　三の丸遺跡における各時期別遺構群の分布（推定）
図8　調査区の細分と調査経過
図9　作業員説明会と現地説明会
図10　「三の丸今昔」と現地説明会パンフレット
図11　基本層序と東壁セクション
図12　調査区完掘状態
図13　戦国時代の遺構の変遷
図14　戦国時代遺構全体図
図15　戦国時代の掘立柱建物跡実測図
図16　ＳＢ301実測図
図17　戦国時代の堀と溝位置図
図18　ＳＤ006断面実測図
図19　ＳＤ009断面実測図
図20　ＳＤ401断面実測図
図21　ＳＤ503・ＳＤ407断面実測図
図22　ＳＤ405断面実測図
図23　ＳＤ001断面実測図
図24　ＳＡ002・ＳＡ201実測図
図25　ＳＥ358・ＳＥ266断面実測図
図26　ＳＥ223・ＳＥ227断面実測図
図27　ＳＥ114断面実測図
図28　ＳＥ145・ＳＥ278断面実測図
図29　土坑群実測図
図30　戦国陶磁器類分類図(1)
図31　戦国陶磁器類分類図(2)
図32　戦国遺構出土陶磁器類の用途組成
図33　ＳＤ011出土陶磁器類の用途組成
図34　ＳＤ001出土陶磁器類実測図(1)
図35　ＳＤ001出土陶磁器類実測図(2)
図36　ＳＤ401・ＳＫ418出土陶磁器類の用途組成
図37　ＳＤ401出土陶磁器類実測図(1)
図38　ＳＤ401出土陶磁器類実測図(2)
図39　ＳＤ401出土陶磁器類実測図(3)
図40　ＳＤ401出土陶磁器類実測図(4)
図41　ＳＤ401出土陶磁器類実測図(5)
図42　ＳＤ401出土陶磁器類実測図(6)
図43　ＳＫ418出土陶磁器類実測図(1)
図44　ＳＫ418出土陶磁器類実測図(2)
図45　ＳＫ418出土陶磁器類実測図(3)
図46　ＳＫ418出土陶磁器類実測図(4)
図47　ＳＤ006出土陶磁器類の用途組成
図48　ＳＤ006出土陶磁器類実測図(1)
図49　ＳＤ006出土陶磁器類実測図(2)
図50　ＳＤ006出土陶磁器類実測図(3)
図51　ＳＤ006出土陶磁器類実測図(4)
図52　その他戦国溝出土陶磁器類の用途組成
図53　その他戦国溝出土陶磁器類実測図
図54　ＳＢ301出土陶磁器類の用途組成
図55　ＳＢ301出土陶磁器類実測図(1)
図56　ＳＢ301出土陶磁器類実測図(2)
図57　戦国井戸出土陶磁器類の用途組成
図58　ＳＥ420・ＳＥ278出土陶磁器類実測図
図59　ＳＥ421出土陶磁器類実測図
図60　戦国土坑出土陶磁器類の用途組成
図61　戦国土坑出土陶磁器類実測図
図62　戦国瓦実測図
図63　戦国石製品実測図（硯１／２・他１／４）
図64　近世遺構群の変遷
図65　近世前期遺構全体図
図66　近世柵列実測図(1)
図67　近世柵列実測図(2)
図68　ＳＤ103断面実測図
図69　ＳＤ203遺構・断面実測図
図70　ＳＤ301遺構・断面実測図
図71　ＳＤ202断面実測図
図72　ＳＤ201・ＳＤ307実測図
図73　近世の井戸と土坑位置図
図74　ＳＫ010断面実測図
図75　ＳＫ212・ＳＫ101断面実測図
図76　ＳＫ333断面実測図
図77　近世前期土坑群実測図

図78　ＳＫ209・ＳＫ312実測図
図79　ＳＫ204断面実測図
図80　近世後期遺構全体図
図81　ＳＡ003断面実測図
図82　ＳＳ101実測図(1)
図83　ＳＳ101実測図(2)
図84　ＳＳ201実測図
図85　ＳＳ002実測図
図86　ＳＢ001実測図
図87　ＳＤ003根石実測図
図88　ＳＳ001実測図
図89　ＳＢ001柱穴列断面実測図
図90　ＳＸ001実測図
図91　ＳＢ302実測図
図92　ＳＫ117・ＳＫ119断面実測図
図93　ＳＫ174断面実測図
図94　近世後期土坑群実測図
図95　近世陶磁器類分類図(1)
図96　近世陶磁器類分類図(2)
図97　近世陶磁器類分類図(3)
図98　近世陶磁器類分類図(4)
図99　近世陶磁器類の用途組成
図100　近世遺構出土陶磁器類の用途組成(1)
図101　近世井戸出土陶磁器類実測図
図102　ＳＤ402出土陶磁器類実測図
図103　ＳＤ104出土陶磁器類の用途組成
図104　ＳＤ104下層出土陶磁器類実測図
図105　ＳＤ104上層出土陶磁器類実測図(1)
図106　ＳＤ104上層出土陶磁器類実測図(2)
図107　ＳＤ106出土陶磁器類の用途組成
図108　ＳＤ106出土陶磁器類実測図(1)
図109　ＳＤ106出土陶磁器類実測図(2)
図110　ＳＫ210出土陶磁器類の用途組成
図111　ＳＫ210出土陶磁器類実測図(1)
図112　ＳＫ210出土陶磁器類実測図(2)
図113　ＳＫ210出土陶磁器類実測図(3)
図114　ＳＫ210出土陶磁器類実測図(4)
図115　ＳＫ209出土陶磁器類の用途組成
図116　ＳＫ209出土陶磁器類実測図
図117　ＳＫ021出土陶磁器類の用途組成
図118　ＳＫ021出土陶磁器類実測図
図119　ＳＫ401出土陶磁器類の用途組成
図120　ＳＫ401出土陶磁器類実測図
図121　ＳＫ304出土陶磁器類の用途組成
図122　ＳＫ304出土陶磁器類実測図(1)
図123　ＳＫ304出土陶磁器類実測図(2)
図124　ＳＫ304出土陶磁器類実測図(3)
図125　ＳＫ304出土陶磁器類実測図(4)
図126　ＳＫ211出土陶磁器類の用途組成
図127　ＳＫ211出土陶磁器類実測図
図128　ＳＫ206出土陶磁器類の用途組成
図129　ＳＫ206出土陶磁器類実測図(1)
図130　ＳＫ206出土陶磁器類実測図(2)
図131　ＳＫ206出土陶磁器類実測図(3)
図132　ＳＫ206出土陶磁器類実測図(4)
図133　ＳＫ219出土陶磁器類の用途組成
図134　ＳＫ219出土陶磁器類実測図(1)
図135　ＳＫ219出土陶磁器類実測図(2)
図136　ＳＫ219出土陶磁器類実測図(3)
図137　ＳＫ123出土陶磁器類の用途組成
図138　ＳＫ123出土陶磁器類実測図(1)
図139　ＳＫ123出土陶磁器類実測図(2)
図140　ＳＫ123出土陶磁器類実測図(3)
図141　ＳＫ212出土陶磁器類の用途組成
図142　ＳＫ212出土陶磁器類実測図(1)
図143　ＳＫ212出土陶磁器類実測図(2)
図144　ＳＫ212出土陶磁器類実測図(3)
図145　ＳＫ010出土陶磁器類の用途組成
図146　ＳＫ010出土陶磁器類実測図(1)
図147　ＳＫ010出土陶磁器類実測図(2)
図148　ＳＫ002出土陶磁器類の用途組成
図149　ＳＫ002出土陶磁器類実測図(1)
図150　ＳＫ002出土陶磁器類実測図(2)
図151　ＳＫ002出土陶磁器類実測図(3)
図152　ＳＫ002出土陶磁器類実測図(4)
図153　ＳＫ207出土陶磁器類の用途組成
図154　ＳＫ207出土陶磁器類実測図(1)
図155　ＳＫ207出土陶磁器類実測図(2)
図156　ＳＫ202出土陶磁器類の用途組成
図157　ＳＫ202出土陶磁器類実測図(1)
図158　ＳＫ202出土陶磁器類実測図(2)
図159　ＳＫ009出土陶磁器類の用途組成
図160　ＳＫ009出土陶磁器類実測図(1)
図161　ＳＫ009出土陶磁器類実測図(2)
図162　ＳＫ009出土陶磁器類実測図(3)
図163　ＳＫ014出土陶磁器類の用途組成

図164　ＳＫ014出土陶磁器類実測図(1)
図165　ＳＫ014出土陶磁器類実測図(2)
図166　ＳＫ014出土陶磁器類実測図(3)
図167　ＳＫ014出土陶磁器類実測図(4)
図168　ＳＫ346出土陶磁器類の用途組成
図169　ＳＫ346出土陶磁器類実測図(1)
図170　ＳＫ346出土陶磁器類実測図(2)
図171　ＳＫ346出土陶磁器類実測図(3)
図172　ＳＫ346出土陶磁器類実測図(4)
図173　ＳＫ118出土陶磁器類の用途組成
図174　ＳＫ118出土陶磁器類実測図(1)
図175　ＳＫ118出土陶磁器類実測図(2)
図176　ＳＫ118出土陶磁器類実測図(3)
図177　ＳＫ118出土陶磁器類実測図(4)
図178　ＳＫ101出土陶磁器類の用途組成
図179　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(1)
図180　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(2)
図181　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(3)
図182　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(4)
図183　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(5)
図184　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(6)
図185　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(7)
図186　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(8)
図187　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(9)
図188　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(10)
図189　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(11)
図190　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(12)
図191　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(13)
図192　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(14)
図193　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(15)
図194　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(16)
図195　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(17)
図196　ＳＫ333出土陶磁器類の用途組成
図197　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(1)
図198　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(2)
図199　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(3)
図200　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(4)
図201　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(5)
図202　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(6)
図203　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(7)
図204　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(8)
図205　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(9)
図206　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(10)
図207　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(11)
図208　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(12)
図209　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(13)
図210　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(14)
図211　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(15)
図212　近世遺構出土陶磁器類の用途組成(2)
図213　検出陶磁器類の用途組成
図214　焼塩壺実測図(1)
図215　焼塩壺実測図(2)
図216　焼塩壺実測図(3)
図217　焼塩壺実測図(4)・刻印拓影
図218　近世瓦実測図(1)
図219　近世瓦実測図(2)
図220　近世瓦実測図(3)
図221　近世瓦実測図(4)
図222　近世瓦実測図(5)
図223　近世瓦実測図(6)
図224　土坑出土人形類の組成パターン
図225　近世土製品実測図
図226　近世人形類実測図(1)
図227　近世人形類実測図(2)
図228　近世人形類実測図(3)
図229　近世人形類実測図(4)
図230　漆器の出土傾向
図231　近世木製品実測図
図232　加飾漆器の紋様集成(1)
図233　加飾漆器の紋様集成(2)
図234　加飾漆器の紋様集成(3)
図235　漆塗り構造の分類
図236　漆器のＸ線分析結果(1)
図237　漆器のＸ線分析結果(2)
図238　加飾漆器製作技法の傾向
図239　出土した溶鉱炉
図240　近世金属製品実測図(1)
図241　近世金属製品実測図(2)
図242　近世金属製品実測図(3)
図243　銭貨
図244　近世石製品実測図
図245　ガラス製品・石硯実測図

表 目 次

表 1　戦国遺構出土陶磁器類集計表
表 2　ＳＤ001出土陶磁器類集計表
表 3　ＳＤ401出土陶磁器類集計表
表 4　ＳＤ006出土陶磁器類集計表
表 5　その他のＳＤ出土陶磁器類集計表
表 6　ＳＤ301出土陶磁器類集計表
表 7　戦国井戸出土陶磁器類集計表
表 8　ＳＥ421出土陶磁器類集計表
表 9　戦国土坑出土陶磁器類集計表
表10　近世出土陶磁器類集計表
表11　近世遺構出土陶磁器類集計表(1)
表12　近世井戸出土陶磁器類集計表
表13　ＳＤ402出土陶磁器類集計表
表14　ＳＤ104出土陶磁器類集計表
表15　ＳＤ106出土陶磁器類集計表
表16　ＳＫ210出土陶磁器類集計表
表17　ＳＫ209出土陶磁器類集計表
表18　ＳＫ021出土陶磁器類集計表
表19　ＳＫ401出土陶磁器類集計表
表20　ＳＫ304出土陶磁器類集計表
表21　ＳＫ211出土陶磁器類集計表
表22　ＳＫ206出土陶磁器類集計表
表23　ＳＫ219出土陶磁器類集計表
表24　ＳＫ123出土陶磁器類集計表
表25　ＳＫ212出土陶磁器類集計表
表26　ＳＫ010出土陶磁器類集計表
表27　ＳＫ002出土陶磁器類集計表
表28　ＳＫ207出土陶磁器類集計表
表29　ＳＫ202出土陶磁器類集計表
表30　ＳＫ009出土陶磁器類集計表
表31　ＳＫ014出土陶磁器類集計表
表32　ＳＫ346出土陶磁器類集計表
表33　ＳＫ118出土陶磁器類集計表
表34　ＳＫ101出土陶磁器類集計表
表35　ＳＫ333出土陶磁器類集計表
表36　近世遺構出土陶磁器類集計表(2)
表37　検出陶磁器類集計表
表38　焼塩壺観察表(1)
表39　焼塩壺観察表(2)
表40　近世軒平瓦出土遺構対応表
表41　近世人形類集計表
表42　近世漆器集計表
表43　漆器供膳具の細工分類一覧
表44　近世木製品一覧
表45　出土漆器資料観察表
表46　金属製品出土遺構一覧
表47　金属製品観察表

Ⅰ　立地と調査概要

1　遺跡の立地

(1)　自然立地

名古屋城三の丸遺跡は、名古屋市中区三の丸に所在する。一帯は、県庁、市役所、国の出先機関など各種官公庁のビルが林立する一大官庁街として発展し、遺跡の往時をしのぶよすがは刻々と消えつつある。我が代のごとく謳歌する巨大なコンクリートとアスファルトの塊を地表からはぎ取って、あらためて遺跡の立地を眺めてみよう。

かつて、人々の交通形態において水運が陸路に比して優るとも劣らぬ重要な位置を占めていた頃、伊勢の海は、はげしく人々の行き交う主要な道であった。伊勢湾の拠点港である桑名の港（三重県）を海原へと大きく漕ぎ出してみると、前方には青緑色の稜線もあざやかに低く知多半島の丘陵（スカイラインは標高80mほどである）が一望され、左手には年魚市潟へと続く干潟が見えるのみである。この稜線と汀線の交わるところに、もうひとつの拠点港である熱田の港がある。港は熱田台地の南端に位置し、すぐ北には草薙剣をまつる熱田神宮が鎮座する。熱田台地は中央部を大曽根凹地が貫通し、東西に分断された台地は南北方向に細長く併走して展開する。台地はおおむね黒っぽい表土に覆われているが、その下には洪積世に形成された砂層と粘土層から成る地層—熱田層と呼ばれる—が厚く堆積し（層厚は100m以上に達する）、地表近くの砂層は黄褐色を呈している。

熱田の港に降りて、やや急な斜面を登って台地上に立ち、台地の西端を北へと歩を進めると、僅かに高まりながらやがて7.5kmほどで台地は途切れる。西と北は比高10mほどの切岸となっていて、眺望は一気に開かれる。右手奥には尾張丘陵の山並がつらなり、山あいからは矢田川や庄内川などが流れでる。正面には、川をはさんで対峙する鳥居松段丘の平坦な地形をうかがうことができ、一際高く屹立する独立丘の小牧山が目を奪う。その奥には、西へとゆるやかに傾斜する木曽川扇状地が望まれ、さらにその傾斜の先へと視界を移せば、ぼうばくたる氾濫原と三角州性の低平地が一面に見渡され、足下へと迫る。発達した自然堤防が後背湿地と複雑に絡み合って描く一種独特な絵模様。そのなかを脈管のごとく幾条にも分かれ、あるいは集まって流れゆく中小の河川。一皮むけば砂ばかりの沖積平野。この濃尾平野を生みだした木曽川は、はるかかなた、平野のとぎれるあたりを北から西へ、そして南へと大きく屈曲して流れている。目を凝らせば、美濃や伊勢の山々の麓にそれとおぼしき堤を見ることもできるであろう。木曽川は、尾張国を両国からわかつ役割をも担わされ、不動の山稜に設定された国境とは異なり、動いて定まらぬが故に、この点でも人々の歴史と深くかかわる。

こうした景観をもつ位置、ある意味では尾張国を、その歴史をも含めてまるごと360°の視野に収める位置、ここ熱田台地の西北端に名古屋城三の丸遺跡は立地しているのである。

〔註〕 (1) 地質に関する記述は、坂本　享他『地域地質研究報告　名古屋北部地域の地質』地質調査所、1984を参照した。

(2) 図は、該当区域にかかわる地質調査所発行の各『地域地質研究報告』添付の5万分の1図幅をもとに編図した。中小河川は、土地条件図をもとに推定した旧流路を図示している。

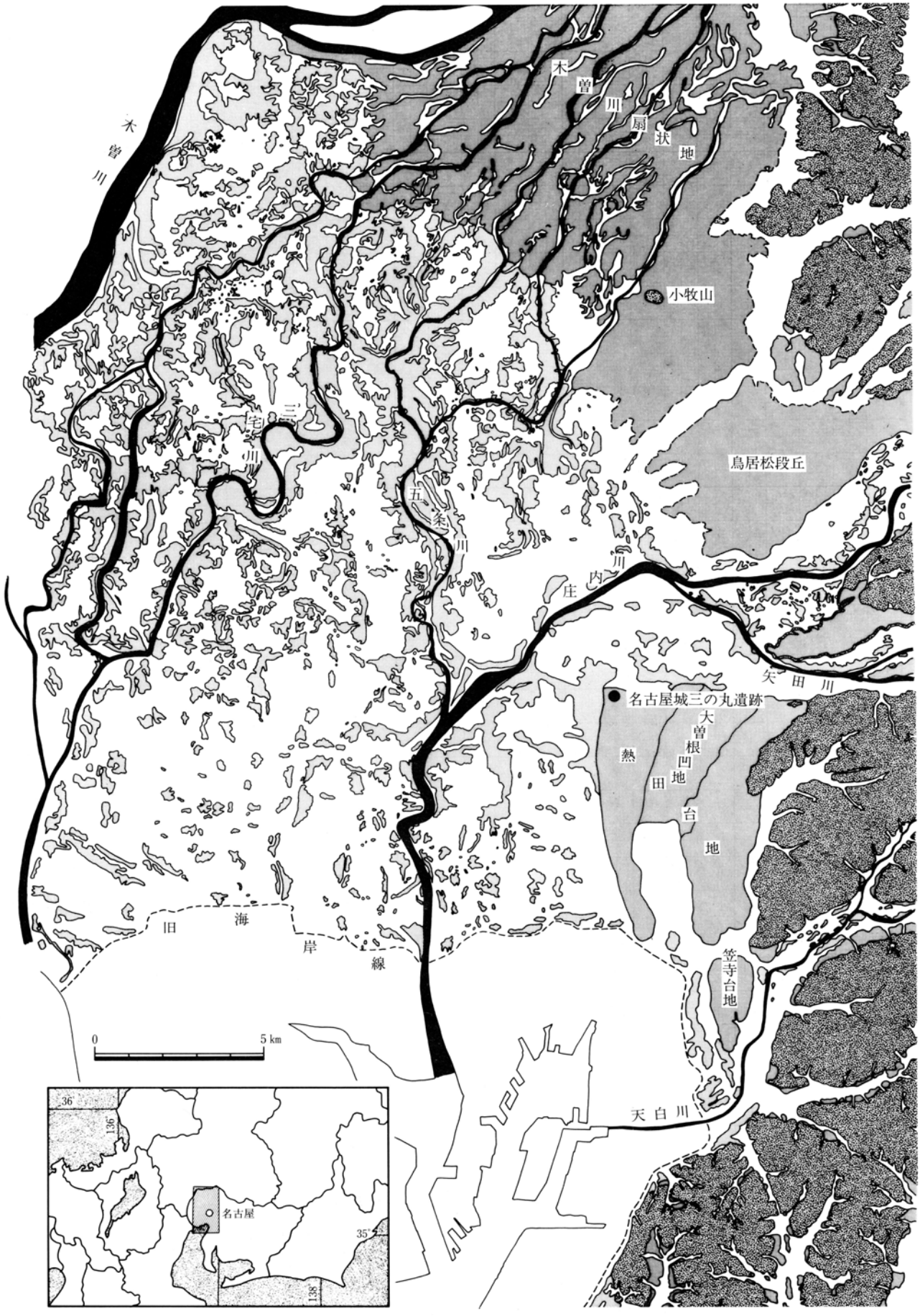


図1　名古屋城三の丸遺跡の自然立地

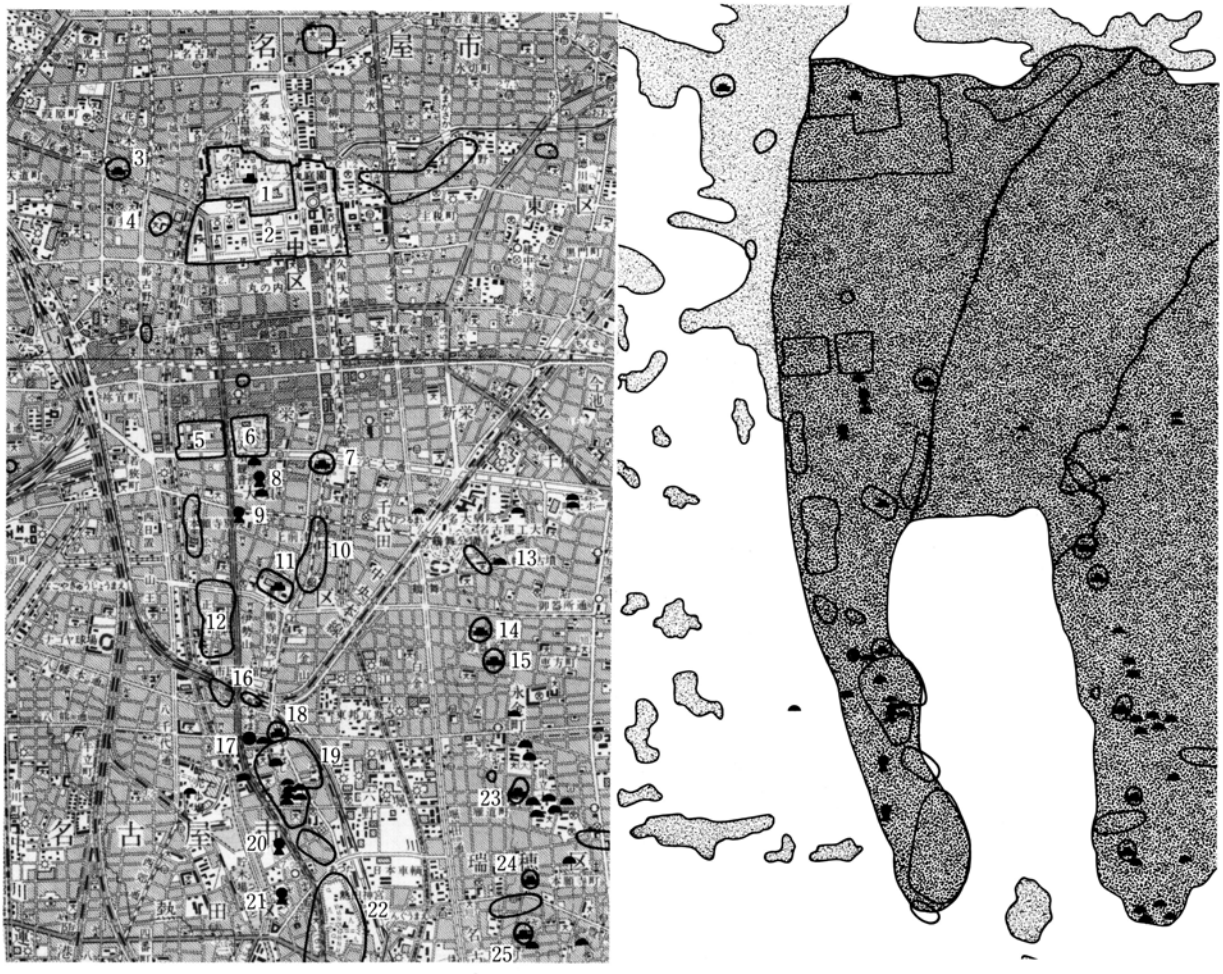
(2) 歴 史 立 地

大曽根凹地によって分断された熱田台地の西半部では、名古屋城三の丸遺跡をはじめとした数多くの遺跡が知られている。今も、いずれかの遺跡で調査が進行中であり、日々刻々、新たな知見で台地の歴史像は豊かにふくらんでいく。

台地に人々の足跡がはじめて記されたのは、古く旧石器時代に遡ることができそうだ。尖頭器やナイフ形石器が竪三蔵通遺跡で発見されているからである。出土状態は縄文土器などとの伴出であり、決して原位置を保つものではないが、東から南にかけての開析谷をのぞむ高みに、縄文時代へと続く遺跡が存在していたのであろう。

こうして始まった台地の歴史は、弥生時代には拠点集落たる高蔵遺跡を中心に、いくつかの集落遺跡を周辺に点在させたネットワークをうみだす。そしてその後も、大きく三たびにわたって衆目環視の的となる。

古墳時代中期にいたって、台地の西縁はにわかに活気づく。南端では、全長150mと東海随一の規模を



1 名古屋城　2 名古屋城三の丸遺跡　3 押切城跡　4 幅下小学校遺跡　5 竪三蔵通遺跡
6 白川公園遺跡　7 小林城　8 那古野山古墳　9 大須二子山古墳　10 富士見町遺跡
11 古渡城跡　12 正木町・伊勢山中学校遺跡　13 八幡山古墳　14 御器所西城　15 御器所東城
16 東古渡町遺跡　17 沢観音堂貝塚　18 熱田城　19 高蔵遺跡　20 断夫山古墳
21 白鳥古墳　22 熱田遺跡群　23 高田城　24 大喜東北城　25 田光城

図2 周辺の遺跡分布

誇る断夫山古墳をはじめとして白鳥古墳など、中央部では那古野山古墳や大須二子山古墳など、大規模な前方後円墳が次々と築造される。両古墳群の間には、正木町・伊勢山中学校遺跡、あるいは尾張元興寺・東古渡町遺跡など、当該期の集落が展開する。古墳築造の動きは、現地表では確認することは出来ないが、北部にも、東縁にも広がって、台地をおおいつくしたであろう。台地上のほとんどすべての遺跡から、大なり小なり古墳の存在を予測せしめる埴輪などの遺物が出土し、場合によっては削平の憂き目を免れた周溝を見いだすことができるからである。台地が人々の注目を集めた最初が、この時期であった。

古代から中世にかけては、熱田神宮や元興寺等留意すべきものもあるが、尾張国衙—守護所下津—清須へと歴史の主たる舞台は沖積低地に移る。むろん、台地上でも広い範囲で遺構・遺物が検出されはす

1　那古野城　2　清須城　3　犬山城　4　小折城　5　小牧城　6　岩倉城　7　下津城
8　勝幡城　9　小田井城　10　守山城　11　末盛城　12　古渡城　13　岩崎城　14　鳴海城
15　大高城　16　沓掛城　17　津島　18　萱津　19　熱田　20　瀬戸

図3　那古野城をめぐる戦国城館

るが、しかし、それらは散漫で明瞭な像を結ぶことがない。台地が再び人々の関心を引くようになるのは戦国の世となるまで俟つこととなるのである。

中世も末期になると、注目すべき遺構が出現する。伊勢山中学校遺跡の一角で検出された大溝がそれである。幅５m、深さ3.5mにおよぶ大溝は、断面が鋭いV字形を呈し、溝というよりは堀跡とすべき性質のものであり、文献にはそれと知る記載がないものの、明らかに戦国城館につながるものである。台地における戦国時代の到来を、それは告げている。当時、尾張の地は守護代織田氏につながる一族の内紛によって四分五裂していた。15世紀後半に始まる織田一族の分裂・抗争は、文明年間の守護所下津の焼亡にいたって、岩倉に拠る伊勢守系と清須を本拠とする大和守系とのあいだで繰り広げられることとなる。優勢を保つ大和守のもとでは三奉行制がとられ、それぞれ同族の因幡守、藤左衛門、弾正忠が任ぜられている。なかでも勝幡城を本拠地とする弾正忠は、本城が津島（港津都市としてあるいは牛頭天王社の門前町として栄えていた）を扼する位置にあるという、地の利にのって頭角をあらわす。そして、この勝幡系織田氏に信秀が登場すると、尾張の戦雲は領国の制圧を目指す彼をめぐって渦巻くこととなり、彼の動向に人々は耳目を聳たせた。その彼が、天文年間、今川氏を撃って台地の西北端にある那古野城に入城したのである。さらに信秀が古渡城・末盛城を築き嫡男信長が那古野城主となるにおよんで、台地は一躍脚光を浴びることとなった。信長がここを起点に全国制覇への長途についたことは周知の事

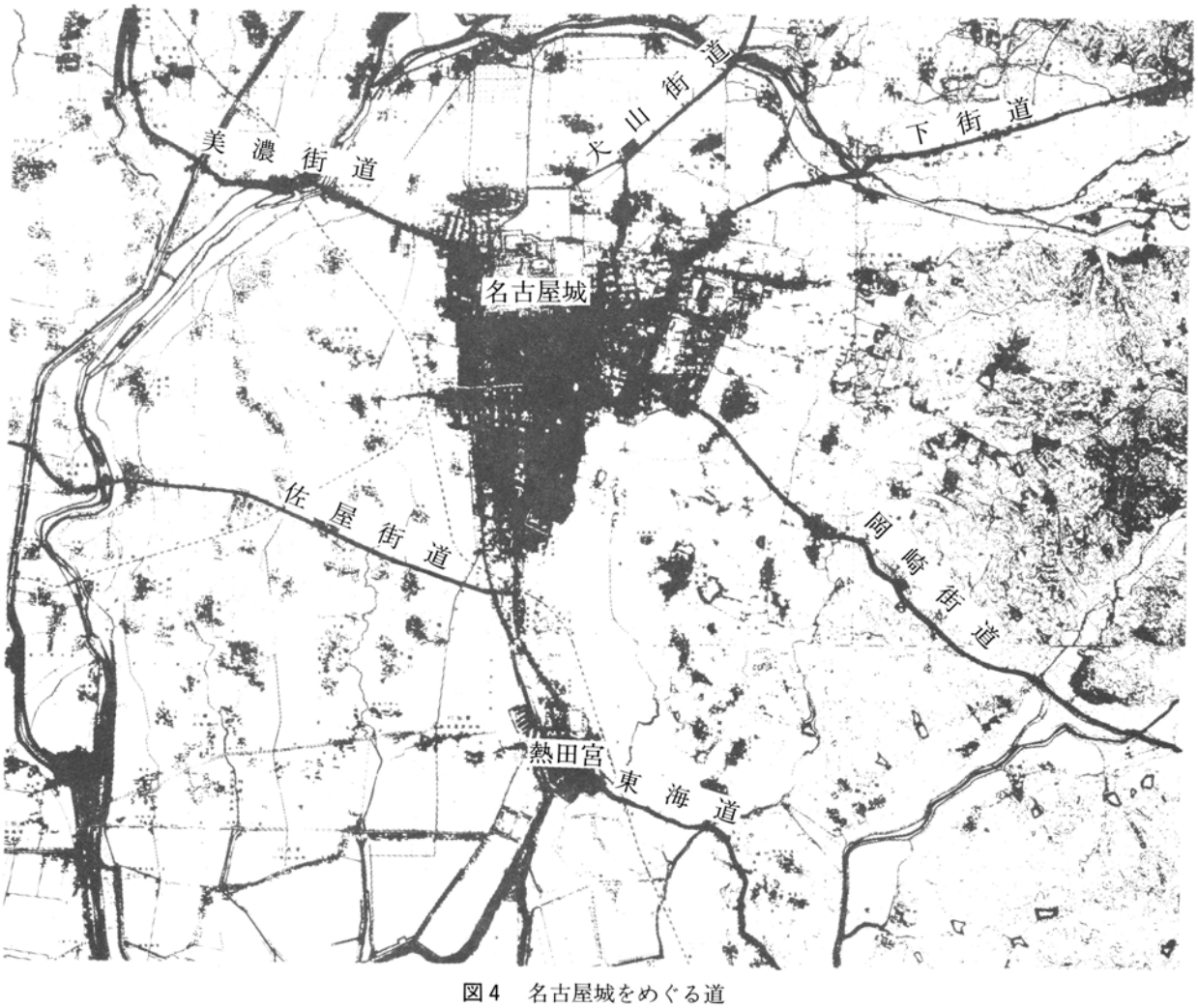


図４　名古屋城をめぐる道

実であろう。と同時に、その後しばらくは尾張の領主たちの城と町が清須に築かれ、尾張の中心はそこへと移る。近世尾張藩も、三重の堀で総構えされた清須城下に産声をあげたのである。

しかし、慶長15年、みたび、台地は注目の的となる。徳川家康の命のもと、清須にある尾張藩48万石の藩城を町ぐるみ台地の上に移転させることとなったのである。世にいう「清須越し」の開始であった。台地の西北端に城郭を置き、その南前方に町屋を配置した名古屋城下町は台地の北３分の２を占めたのであり、南端に置かれた熱田の宿も、海陸両道の玄関口として一層の発展をみる。名古屋城は、天守閣や藩主の御殿のある本丸を中心に、二の丸、西の丸、御深井丸、三の丸などから構成され、それぞれの曲輪は深く掘り抜かれた堀割と虎口によって複雑に結合されている。三の丸には、祖廟などをまつる祭祀空間と上級家臣団の武家屋敷地が配され、町屋に正対する。総面積は62万㎡におよぶが、ここを拝領する家臣は全給人1311人（安政元年段階）の１割にも満たっていないのである。そして、名古屋城三の丸遺跡はこの遺構をもって成立し、遺跡を取り巻く外堀は国特別史跡に指定されている。

（遠藤才文）

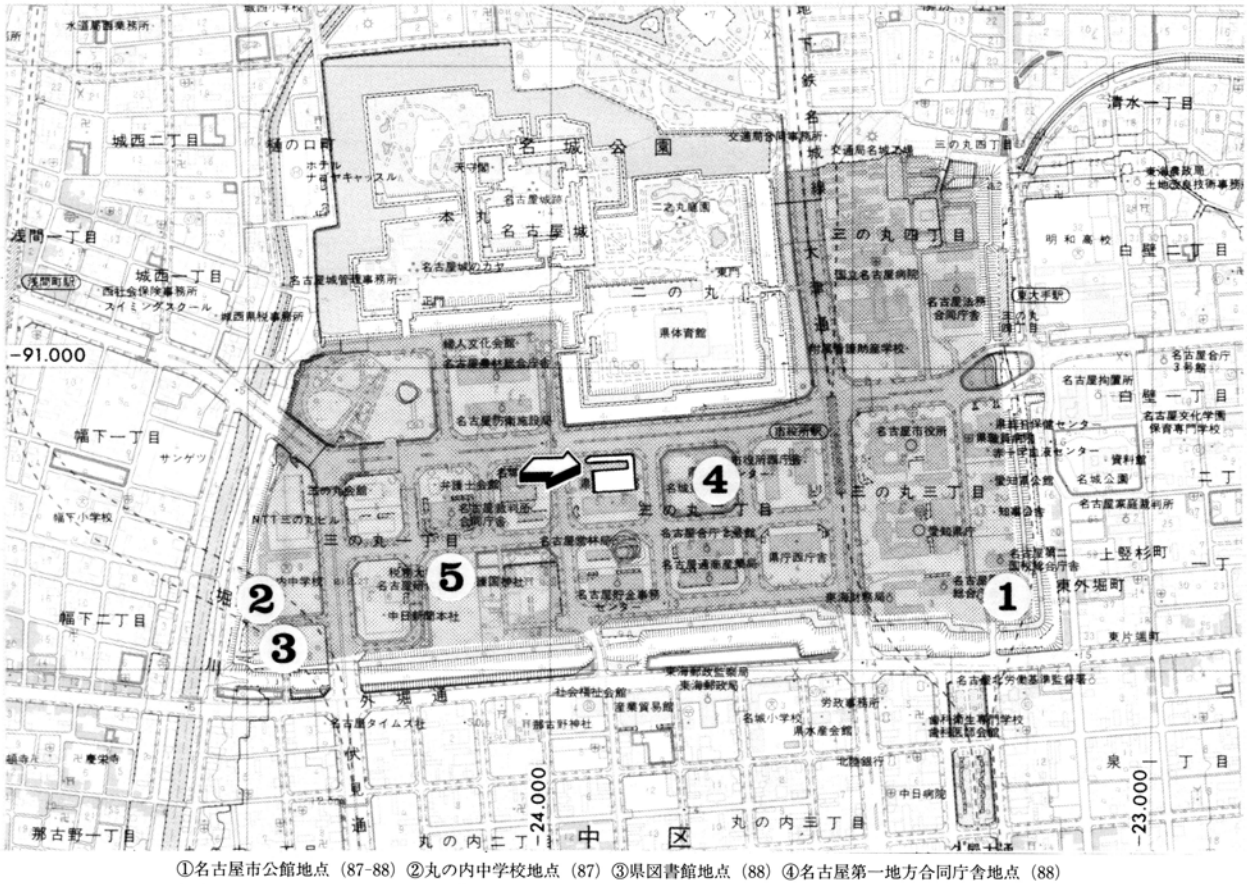
図5

2　調査の経過

(1)　調　査　前　史

名古屋城は、尾張徳川家62万石（当初48万石、その後元和年間に62万石となる）の藩城として著名であり、また普請に際して西国大名が動員されたことなど、城をめぐる逸話もことかかない。しかし、明治維新以降、城郭は帝国陸軍によって接収・解体され、織豊系城郭として粋を凝らした縄張りも近代軍隊にふさわしく改変されてしまう。わずかに残った建造物も、天守・本丸御殿は、太平洋戦争の末期、1945年の名古屋大空襲によって焼失する。一方こうした中で、名古屋城の有する文化財としての価値を保護する努力も戦前からたゆみなく続けられてきた。本丸・西の丸・深井丸などの主要な曲輪と三の丸を含めた堀と土塁は特別史跡に、二の丸庭園は名勝に、隅櫓や門、さらには旧本丸御殿障壁画や天井板絵などは重要文化財に、それぞれ指定され、保護がはかられている。遺跡としても、二の丸を含めた中心部は名古屋城跡として比較的早くから注目されていた。にもかかわらず、一大官庁街として変貌の著しい三の丸については、長い間、遺跡として認められることはなかった。

1987年、三の丸内は再開発計画が目白押しとなっていた。東南端の一角では名古屋市による公館建設計画が具体化し、西南端では県の新図書館建設が、さらには中央部分で建設省による名古屋第一合同庁舎の建設が計画されたのである。ことに前二者は、特別史跡の土塁と隣接しており、史跡保護の点から

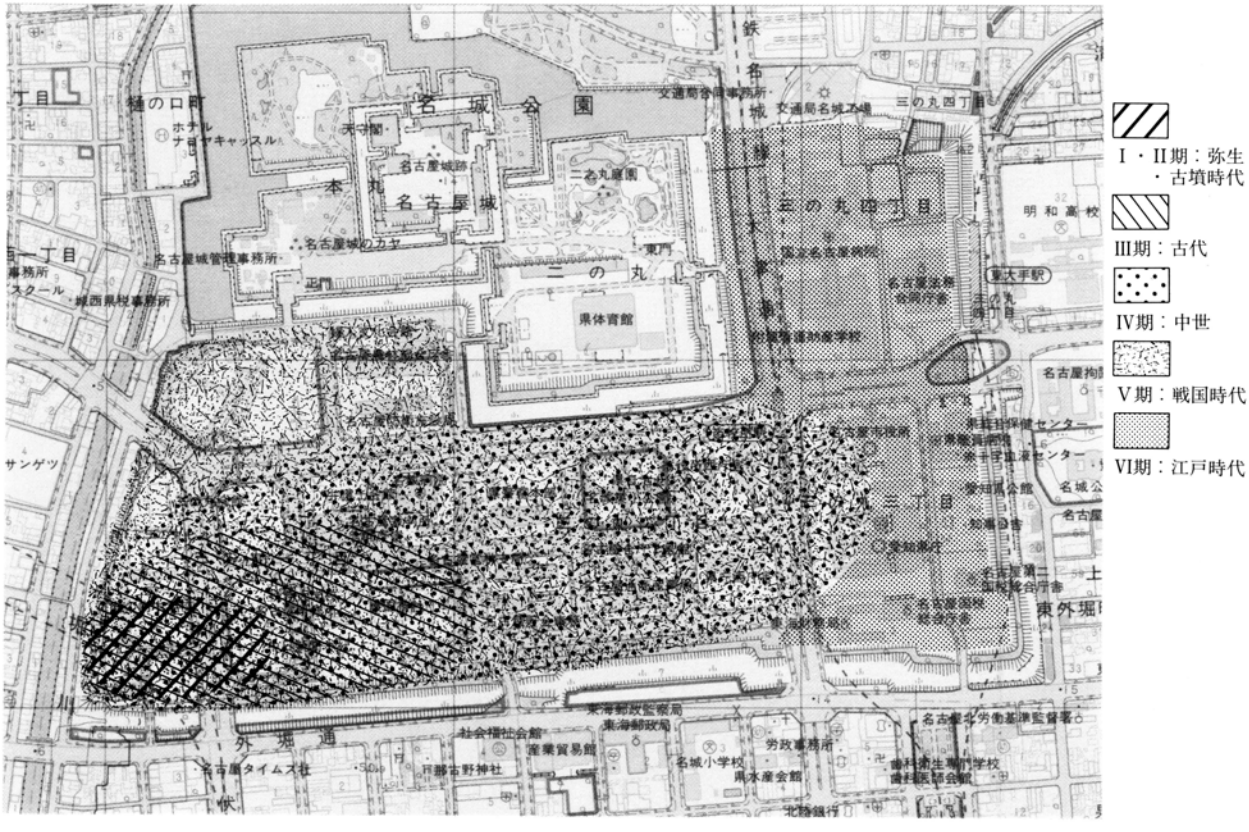


①名古屋市公館地点（87-88）②丸の内中学校地点（87）③県図書館地点（88）④名古屋第一地方合同庁舎地点（88）
⑤簡易・家庭裁判所地点（90）　□は三の丸遺跡の範囲　（　　）内は調査西暦年

図6　今回の調査区（矢印）と過去の調査地点

も遺構の有無を確認し、文化財の保護に万全を期すべく対応がせまられたのである。各計画地点では、県教育委員会と名古屋市教育委員会とによってそれぞれ試掘調査が実施され、その結果、近世を主体とした各時期の遺構・遺物が良好に残存していることが判明した。これをうけて、ただちに各教育委員会は開発事業主体と発掘調査を実施すべく協議にはいるとともに、翌88年４月には遺跡分布図の改訂をおこなったのである。こうして、名古屋城三の丸遺跡は、人々がひろく知るところとなり、以後、丸の内中学校地点（87年調査）、簡易・家庭裁判所地点（90年調査）、今回の県警本部地点と調査は続く。調査の対象と成った面積も２万２千㎡におよばんとし、地中深く埋もれていた文化財は再び日の目をみることとなった。

そうした結果の詳細は各報告書に譲るとして、概要をここで紹介しておきたい。名古屋城三の丸遺跡で検出される遺構・遺物は、近世の三の丸にかかわるものばかりでなく、他の台地上の遺跡と同様に、各時代にわたっている。それは、概ね六つの時期に区分することができる。Ⅰ期は弥生時代中期～古墳時代前期、Ⅱ期は古墳後期、Ⅲ期は古代、Ⅳ期は中世、Ⅴ期は戦国時代、Ⅵ期は近世と、多少の断絶はあるものの、今日に至るまでの約２千年間、人々の足跡は連綿と続いているといってよい。とはいえ遺跡の主たる性格は、Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ期が集落跡、Ⅰ・Ⅱ期が墳墓跡、Ⅴ・Ⅵ期が城館跡と、時代によって異なる。またそれぞれの時期の遺構群は、名古屋城三の丸遺跡の範囲のなかで特徴ある分布を示していて、決して一様ではない。Ⅰ期は西南の一角に集中し、Ⅱ期からⅣ期にかけては西南端から中央部にかけて広がり（ただし、Ⅱ期についてはその実態は不鮮明である）、Ⅴ期は中央を中心に展開している。もちろん、Ⅵ期の遺構が遺跡全域に広がっていることはいうを俟たない。


名城公園
本丸
名古屋城
二の丸
三の丸
三の丸四丁目
三丁目
名古屋城跡
名古屋城のカヤ
天守閣
正門
東門
県体育館
名古屋城管理事務所
名古屋城総合庁舎
名古屋法務合同庁舎
名古屋地方裁判所
名古屋地方検察庁
名古屋拘置所
名古屋市役所
愛知県庁
愛知県警察本部
愛知県総合庁舎
名古屋第二地方合同庁舎
名古屋国税総合庁舎
名古屋北労働基準監督署
名古屋東労働基準監督署
名古屋中税務署
名古屋東税務署
名古屋中小企業振興会館
名古屋市健康福祉センター
名古屋市保健センター
名古屋市職員研修所
名古屋市赤十字血液センター
名古屋市公館
名古屋市公会堂
名古屋市知事公舎
名古屋市知事公館
名古屋市知事公舎
名古屋市公館
名古屋市公会堂
名古屋市知事公舎
名古屋市

(2) 調査方針と経過

今回、調査の対象となった愛知県警本部地内の開発予定地は、調査直前まで駐車場として利用されていたところで、全体の３分の１ほどが過去の地下構造物によって遺構面が破壊されているものの、残る調査対象部分3600㎡については、明治以降一貫して広場などに土地利用されていて、名古屋城三の丸遺跡のなかでも攪乱がほとんどない稀有の一角であった。

ここは、二の丸の正面に位置し、調査地点の属する街区の西側には大手筋である大名小路が通るなど、近世城郭の縄張りからみて三の丸内でも最重要な場所にあたる。事実、1663年（寛文３）の屋敷割の改変以降、この一角には幕府から藩に直接つけられた御付家老である竹腰氏（美濃今尾領主、３万石）の屋敷地がおかれ、大名小路をはさんで対面には同じく御付家老の成瀬氏（尾張犬山城主、３万石）が拝領していたとされているのである。幸いにも、名古屋城に関しては多くの絵図類や文献が蓬左文庫を中心に所蔵され伝存している。それらの絵図のなかで、1697年（元禄10）作製の『御城絵図』（蓬左文庫所蔵。京間10間を単位とする方眼に縄張りを記載したもの）や個々の屋敷地の間口や奥行きが記入された絵図（愛知県図書館所蔵『享保14年名護屋絵図』など）とこれまでの発掘調査の成果などとを突き合わせて検討してみると、調査区は三つの屋敷地にまたがっており、北半は竹腰氏、南西端は家老職級の家臣の一人、山澄氏（４千石）、南東部は物頭以上のクラスに属する熊谷氏（６百石）の拝領屋敷地となっている。

とはいえ、調査区がカバーする範囲は個々の屋敷地からみれば背割線近くのごく一部分にしかあたら

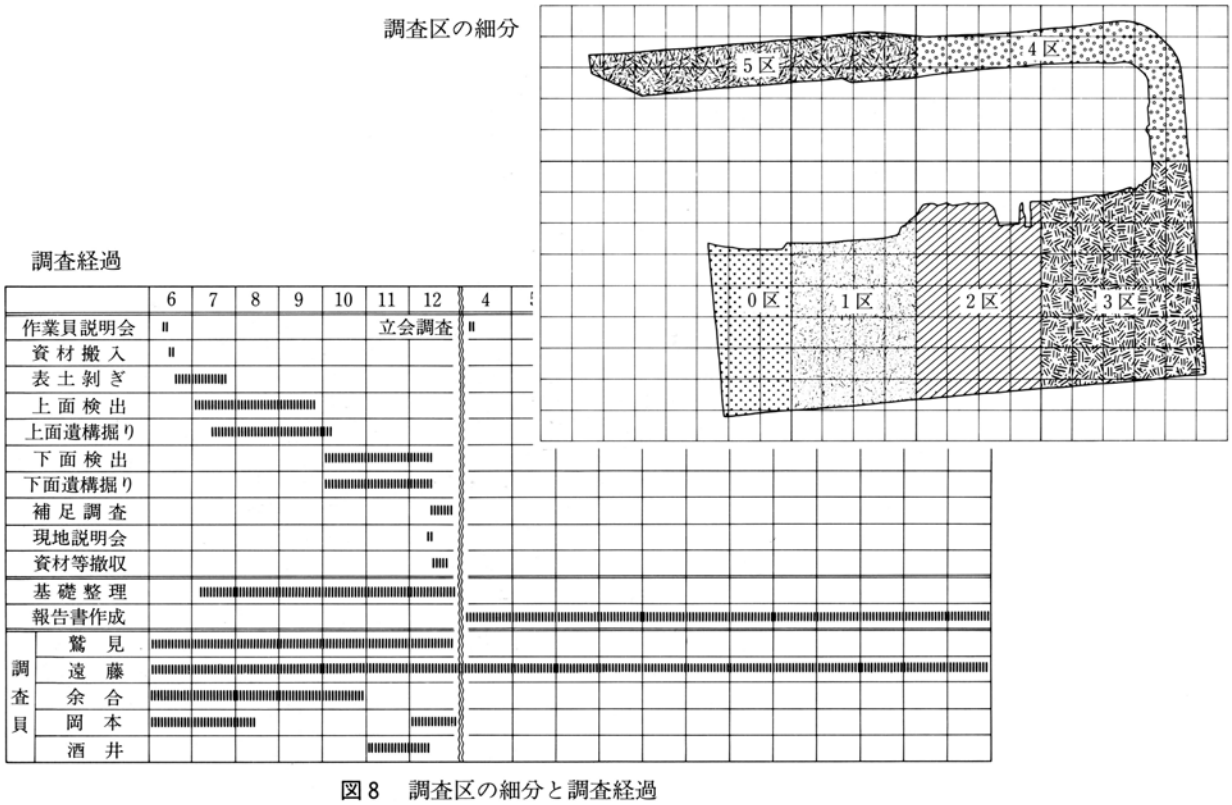


図８　調査区の細分と調査経過

ず（おおむね屋敷地は一区画60×60mを単位とし、竹腰氏は4区画分、山澄氏は2区画分、熊谷氏は一区画分を拝領している）、屋敷割そのものについても寛文の屋敷割改変にいたる三の丸創建時でみれば四つに区画されていたり、拝領者が次々と入れ替わっていることなどが判明し、検出される遺構・遺物については一律には論ずることの出来ない複雑な様相を呈するであろうことが予測された。

一方、近世以前の遺構についても、二の丸周辺が那古野城の故地とされていること、過去の調査事例でも名古屋第一合同庁舎地点においてそれとかかわると思われる堀跡が検出されていることなどから、今回の調査区においても戦国期のものが検出されることが予想された。こうして当調査はとりわけ注目されるところとなったのである。

以上の点をふまえて、調査は

①屋敷境の構造と変遷について見通しをたてるとともに、絵図等に記された三の丸の街区を現況地形に復元するための資料をうること、

②屋敷地内の空間利用のあり方を検討すること、

③戦国以前の遺構については那古野城の構造・年代などの解明につながる資料を得ること、

等を重点的な課題として実施することとした。このため、発掘調査は、諸般の事情から1991年6月20日

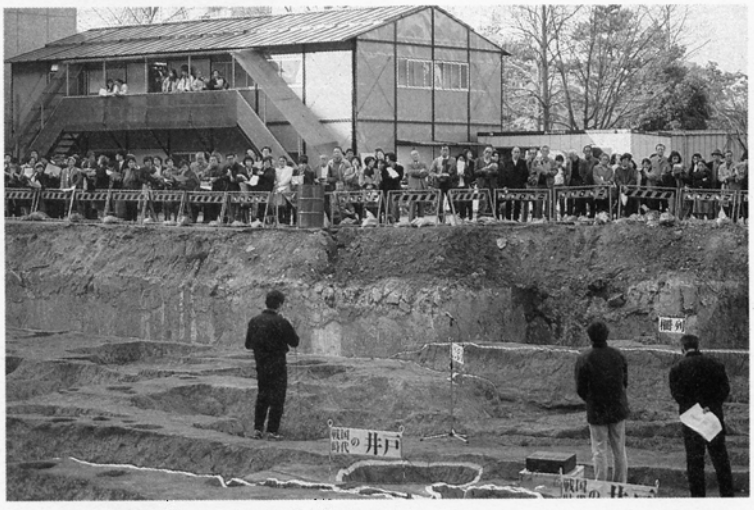


図9　現地説明会

から半年間と限定されてはいたが、遺構面の残りの良さも考慮にいれて、上面―近世の遺構、下面―戦国以前の遺構と２面にわけて調査することとしたのである。

発掘調査に際しては、遺構密度も高く、出土遺物も膨大な量となること、かつ広範囲を一気に開けることからくる混乱が予測されたため、それを避けるために

①調査区内を０～５区に細分し、

②遺構番号もそれぞれ０番台、100番台等々と各区に対応させてふること、

③遺構の表記はＳＤ（溝）、ＳＫ（土坑）、Ｐ（小穴）に限定し、遺構の性格にかかわるＳＡ（柵）、ＳＥ（井戸）などについては後に整理の段階で表記のみ変更すること、

等を原則とした。

発掘調査は、諸準備をへて、６月25日より表土剥ぎを開始し、表土剥ぎの完了を俟つことなく、７月８日には作業員を投入して表土剥ぎの終了したところから逐次遺構の検出に入った。上面の遺構は、予想どおり遺構の巨大さと遺物の量の多さに手間取り、航空測量のための撮影実施日である10月４日段階にいたっても、なおいくつかの遺構は完掘することができなかった。これらの遺構については下面の調査時に測量することとし、撮影終了後ただちに下面の遺構検出にはいる。そして12月12日には無事完掘することができ、下面の航空撮影をおこなった。その後、12月14日には400名ほどの参加をえて現地説明会を開催し、さらに現場事務所を撤収するとともに補足調査や堀跡断面の剝ぎ取りも実施したのである。全ての作業が完了したのは歳の瀬も押し迫った12月28日のことであった。遺物の出土総数はコンテナ1500箱。この間、作業員対象の勉強会を毎週一度のペースで開き、そのための会報も「三の丸今昔」と題して発刊した。

（遠藤才文）

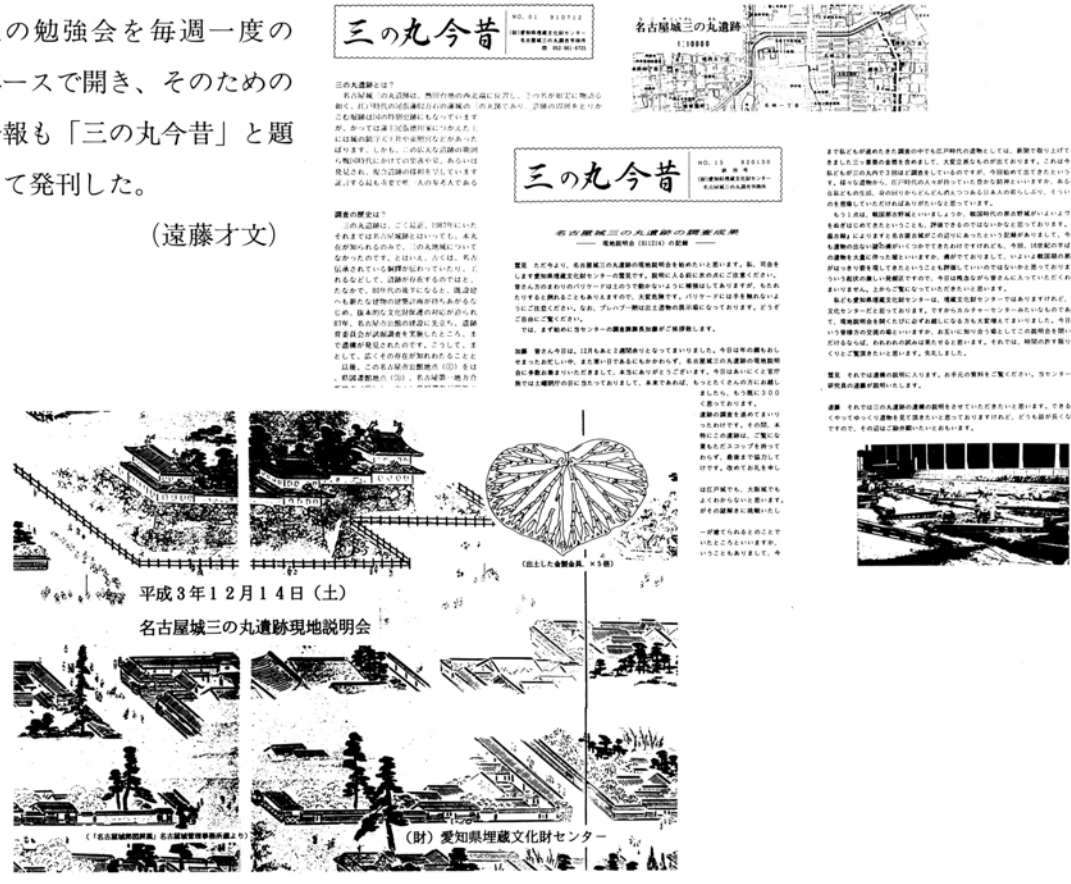
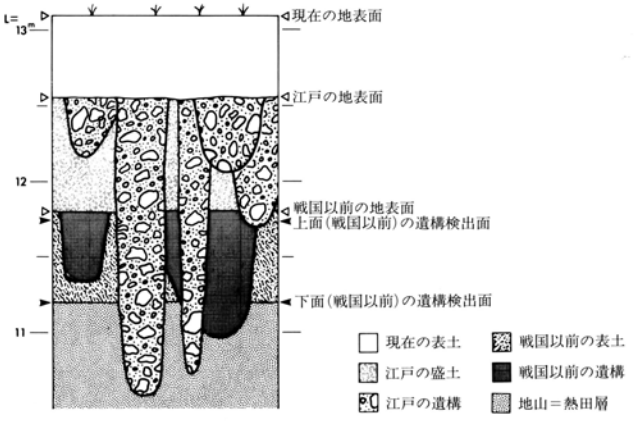


図10　「三の丸今昔」と現地説明会パンフレット

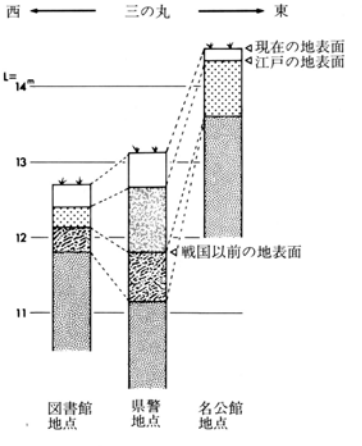
3　基　本　層　序

県警察本部地点における基本的な層序は、4層からなっている。第1層は明治以降の整地層からなる表土で、現地表から40～50cmほどの厚さを有する。第2層は黄褐色もしくは灰褐色の地山ブロックを主体とする斑土で、土質は一定しない。層厚は80cm前後ある。この層のトップが近世の地表面＝生活面であり、一部では小砂利が敷かれているところもあった。第3層は黒色土層で、下層は暗褐色を呈する地山の漸移層となる。厚さは50～60cmほどで、戦国以前の生活面はこの層にのっている。ここでも、表層には玉砂利がみとめられた。第4層は基盤となる地山で、黄褐色の粘質土あるいは砂質土である。いわゆる熱田層といわれているのがこれである。各層位の平均的な標高は、第1層が13.20m、第2層が12.60m、第3層が11.80m、第4層が11.20mで、調査区内では顕著な傾斜はなかった。また、第1層を除けば、他の層位はいずれも無遺物層である。

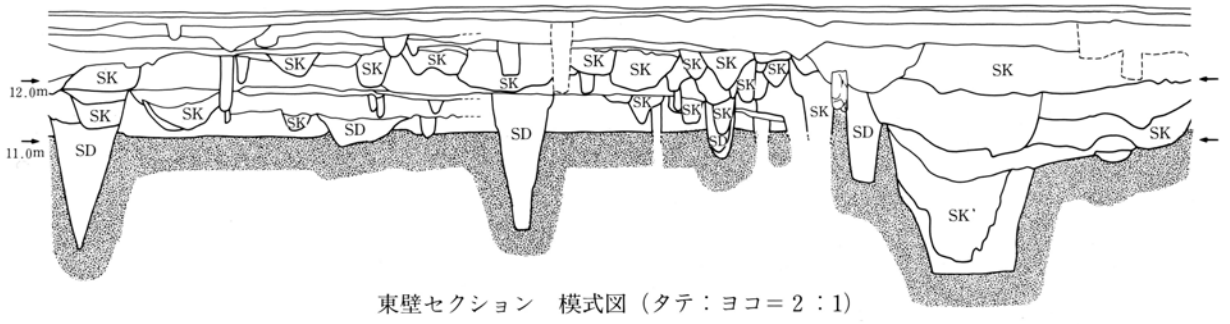
これらの層位のうち、注目すべきは第2層で、他の調査地点ではみとめることができない（名古屋第一合同庁舎地点の調査で第II層としているものが、これに相当するか。ただし、そこでは部分的な現象として認識されている）。層位中の遺構のあり方をみてみると、明治以降の攪乱として取り扱ったものを除けば、第2層に掘り込まれた遺構はいずれも近世のものばかりで、しかも掘り込み面はすべて土層の上面となっていた。また、近世遺構のなかでも深いものは第3層・第4層にまで達しているのであるが、しかし、第3層上面から掘り込まれた近世遺構はまったく存在しなかったのである。かかる所見からい



基本層序模式図



三の丸地区地形概念図



東壁セクション　模式図（タテ：ヨコ＝2：1）

図11　基本層序と東壁セクション

えば、第2層は長期間にわたって累積されたというような土層とは考え難く、地山ブロックをふくむ斑土であることや無遺物層であることも考慮すれば、三の丸創建時の造成にともなう盛土とすべきものであろう。

ひるがえって、戦国期までの旧地形をみてみると、南西端の愛知県図書館地点では標高が12.20m前後あり、南東端の名古屋市公館地点では14.30m前後となる。つまり、大局的にみれば東から西へと緩傾斜しつつも、当地点ではややくぼんだ地形となっているのである。この凹地は、名古屋第一合同庁舎地点や簡易・家庭裁判所地点の調査所見をも参照すれば、二の丸前面から南西方向にむかって低まりながらひろがっていたものと思われる。かかる微地形をも許容することなく、名古屋城の普請に際しては、埋め立て整地して巨大な曲輪を創出しているのである。近世城郭の土木事業のすごさを思わざるをえない。今日、三の丸の官庁街は平坦な地形をみせているが、かかる地形の形成は名古屋城普請にあったわけである。

こうした基本層序において、しかしながら遺構の検出面はそれぞれの生活面＝旧地表に対応しているわけではない。調査期間や調査体制をふまえたとき、上面の近世の遺構の検出は戦国以前の生活面のレベルにおいて、下面の戦国以前の遺構検出は地山直上でせざるをえなかった。このため、記録にとどめることの出来なかった遺構もあるであろうことを、あらかじめことわっておきたい。

にもかかわらず、上面では近世の屋敷地の遺構群が、下面では戦国那古野城にかかわる遺構群が検出され、多くの成果をえることができた。また、本報告ではとりあげることができなかったが、古墳～古代に遡る遺構・遺物も検出されており、あらためて当該期の遺跡の広がりについても検討を要するであろう。以下、章をあらためて、遺構・遺物の概要を報告したい。　（遠藤才文）

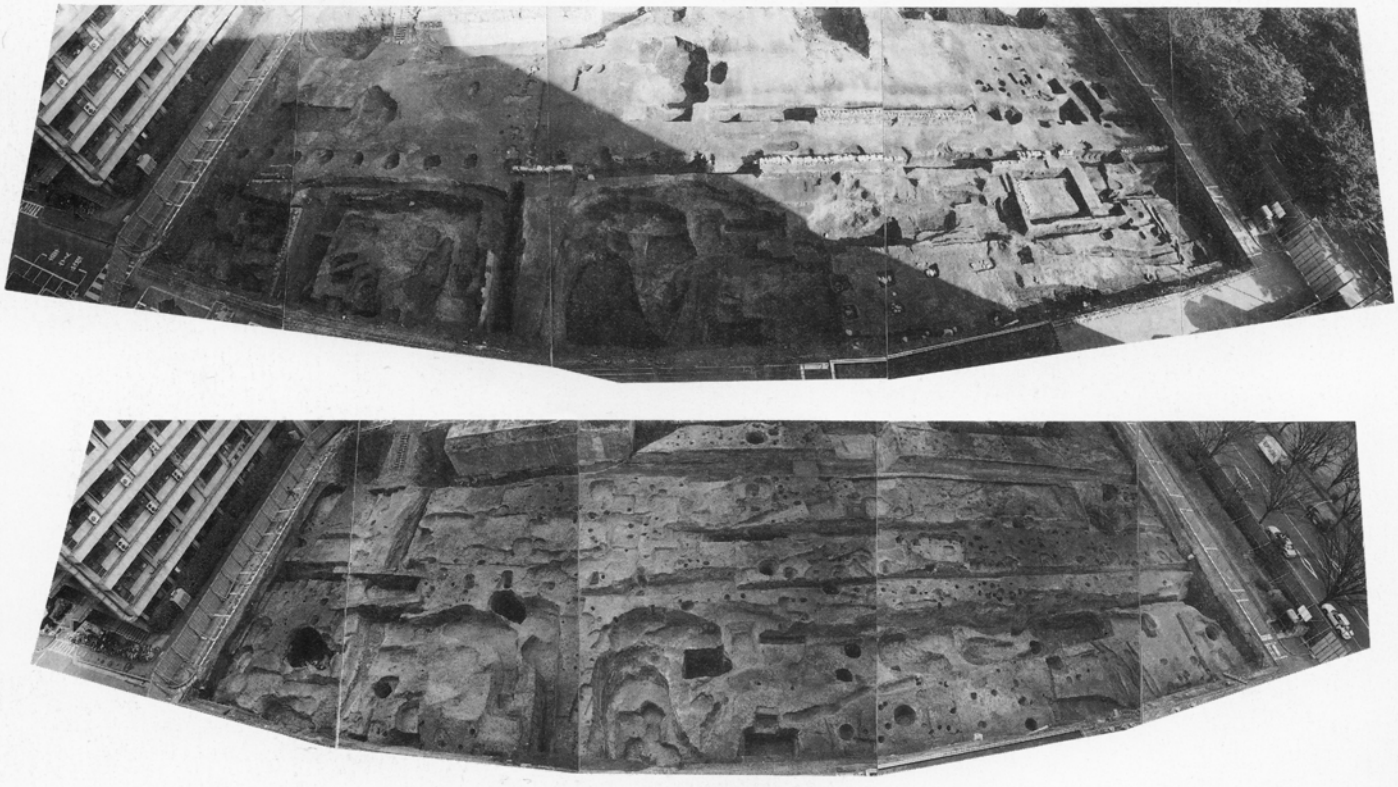


図12　調査区完掘状態

II　戦国時代の遺構と遺物

1　遺　　構

概要

本章では、下面の調査で検出された遺構の内、おもに戦国時代に属する遺構群をとりあげることとする。主たる遺構には掘立柱建物跡、方形竪穴建物跡、堀、柵列、井戸、方形土坑群などがある。それらは、堀の存在に注目すれば、その有無によってⅠ期、Ⅱ期に時期区分することができ、さらに堀の存在するⅡ期は堀の切り合い関係からⅡ－１期、Ⅱ－２期に細分できる。

Ⅰ期の遺構は、南西端の０区と北東部の４区で井戸や溝などが検出されていること、また５区においてもいくつかの遺構が検出されていることからすれば、遺跡の中心は当調査区の北もしくは西方向にあるとしたほうがよい。遺構の配置をみても部分的かつ分散的であって、意味ある空間構成を読み取ることは困難な状況にある。ただ留意すべきは、Ⅰ期以降には地割りの基軸が中世のそれとは異なる方位を取るようになると思われることである。ＳＤ312に代表される中世の溝は主軸がＮ－60°－Ｅ前後を示すのに比べ、Ⅰ期ではＳＤ006などＮ－５°－Ｗ前後となっているのである。愛知県図書館地点では中世の地割り線はＮ－12°－Ｅ前後の数値をとっていて、当地点とは大幅に異なっており、中世のあり方について即断することは避けなければならないが、しかし、Ⅰ期段階で中世のあり方を否定する動きがあったことに相違なかろう。

Ⅱ期には、土塁をともなう堀が出現し、それによって区画される各空間に建物跡、柵列、井戸等が配置されている。Ⅱ－１期では、東西に併走するＳＤ401、407によって防御機能を高めた虎口を有する曲輪が北方に展開し、またＳＤ006、009から南西部にも曲輪の存在が予測される。郭外にあたる中央部分では方形土坑群や井戸などが存在し、単なる広場ではなく、宿営地的な空間を想定することも可能であろう。そしてⅡ－２期では、そうした空間をも曲輪内に取り込むように縄張りが再編される。堀は枝別れして複雑となり、堀によって連結される複郭構造の城館が浮かび上がってくるのである。

こうした遺構は二の丸一帯に所在したとされる那古野城に関係するものと思われ、名古屋第一合同庁舎地点や簡易・家庭裁判所地点で検出された堀跡ともあわせて、戦国那古野城の構造を解明す

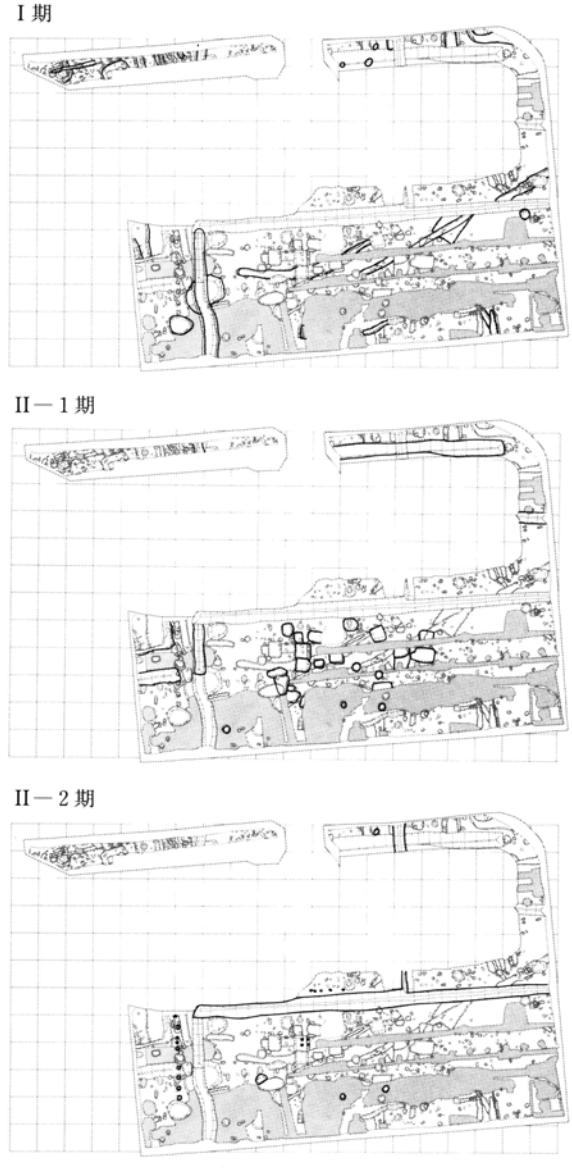


図13　戦国時代の遺構の変遷

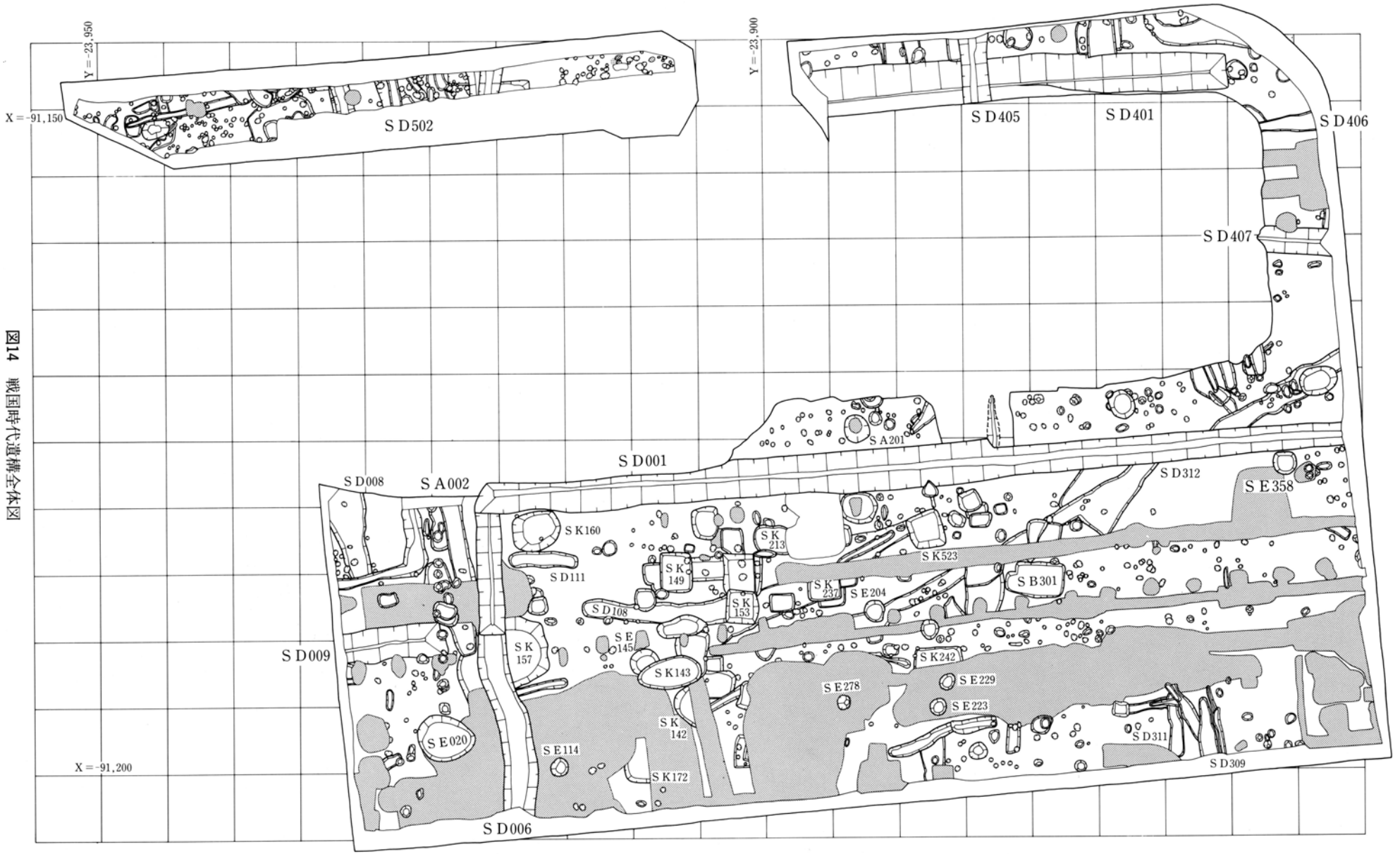


図14　戦国時代遺構全体図

るうえで貴重な資料を呈示している。そして、II－2期の堀を切って掘り込まれた下面の遺構はまったくなく、当地点の戦国時代はこの時期をもって終焉する。

建物跡

ＳＢ101　1区で検出された掘立柱建物跡で、ＳＫ152を切るかたちで検出された。東西に並ぶ二つの柱穴は、西側がやや大きく、東側の柱穴は西へと傾斜していて、この二本が一対となるものと思われる。東西の柱間は1.1m、南北は0.9mを測る。これらの柱穴に対応する他の柱穴は明確ではなく、どのような構造の建物になるかは判然としないが、北側に東西方向で並ぶ柱間1.2～1.9mの柱穴列がこれとかかわるか。そうであれば建物は、ほぼ東西方向を取ることとなる。II－2期に属するか。

ＳＢ202　2区で検出された1間×2間の南北棟で、柱間は梁行1.7～1.9m、桁行1.2～1.5mを測る。桁行方位はＮ－4°－Ｗとなる。II－1期か。

ＳＢ302　調査区の東端で検出された1×3間の南北棟で、北西角に0.5×1間の張り出しがある。柱間は梁行1.5m、桁行が1.1～1.2mあり、Ｎ－15°－Ｗの傾きをもつ。調査区外へ建物がのびている可能性もある。桁行方位からすれば中世の建物であろう。

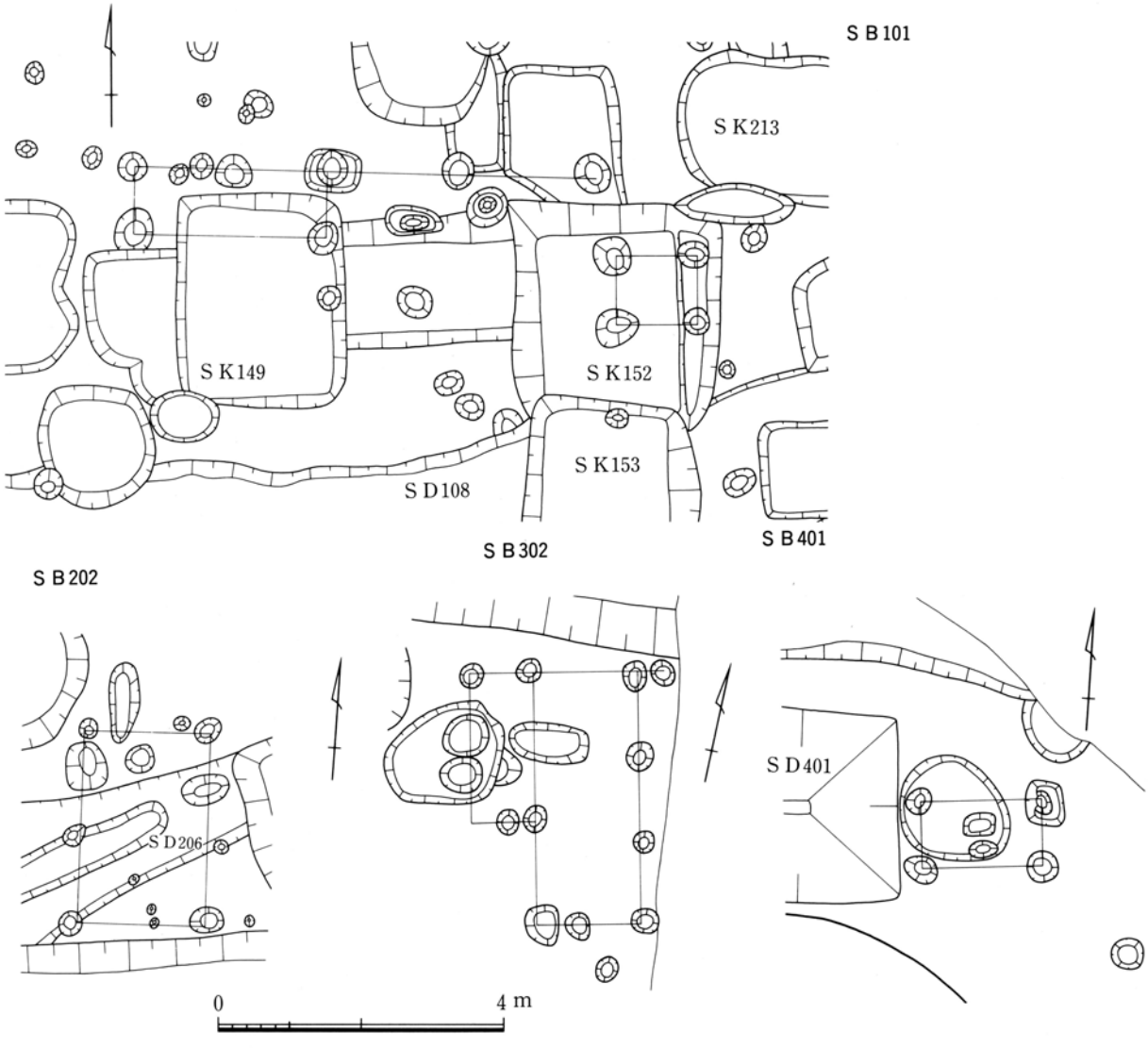


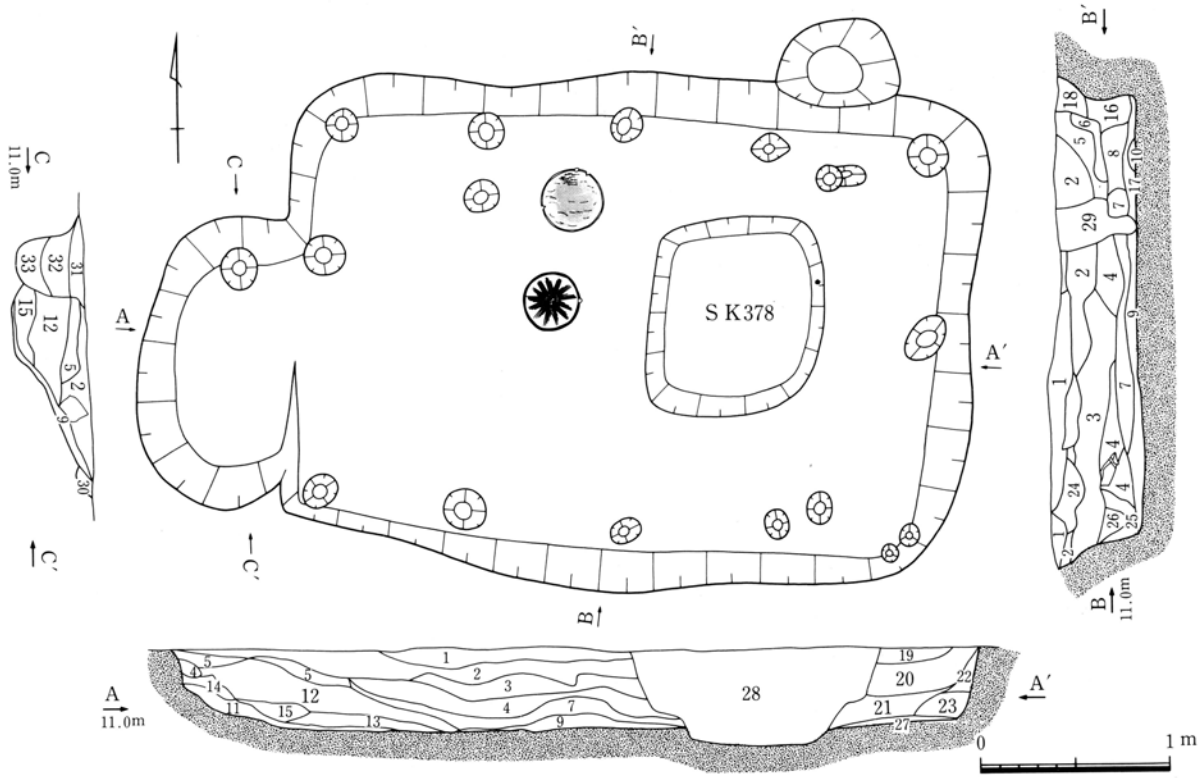
図15　戦国時代の掘立柱建物跡実測図

ＳＢ401　ＳＤ401の北端で検出された東西に細長い１間四方の建物で、南壁はほぼ堀の南側ラインにのる。柱間は南北が１ｍ、東西が1.8ｍと小規模な建物であり、位置からしてもＳＤ401に附属する施設と思われる。なお、中央近くにある柱穴も、この建物にかかわるか。建物方位は長軸でＥ－４°－Ｎである。Ⅱ－１期に属する。

ＳＢ301　３区中央で検出された建物跡で、竪穴施設を伴っている。竪穴床面で見つかった柱穴は、いずれも10cm程度の小さなものであって、小屋組を支えるには不充分であり、他に柱を求めねばならない。しかしながら、礎石建物であったのか、竪穴の周辺にはそれと思われる柱穴は検出されず、建物の規模等については明らかにすることができなかった。

竪穴のプランは、2.6×3.6ｍの長方形を呈し、西側の短辺には0.8ｍほどの楕円状の張り出し部がつく。長軸方位はＷ－５°－Ｎをしめす。検出面からの深さは40cmほどであるが、旧地表からの深さでいえば0.9ｍほどとなる。壁は、ほぼ垂直に切り立っており、張り出し部分では擂鉢状に傾斜面を持つ。床面は平坦につくられているが、板床などが敷かれていた痕跡は認められなかった。壁際の床面では小柱穴が検出され、それらは、四隅と、長辺では80cm等間隔で３ヶ所、東側の短辺では中央に１ヶ所、西側の短辺では張り出し部の際に１ヶ所、それぞれ穿たれていた。さらに東寄りのところでは、南北壁よりやや内側に２ヶ所あって、それをも含めて小柱穴は南北で対をなしている。

竪穴を覆っていた埋土は、焼土や炭化材の細粒、および壁土のブロックを含んでいて、全体としては



1　黒灰色土（炭化物を含む）
2　黒褐色土（礫、炭化物を含む）
3　明黒褐色土（炭化物を含む）
4　暗灰色粘土小塊層（炭化物を含む）
5　暗灰色粘土小塊層（炭化物を含む）
6　暗灰色粘土小塊層
7　明赤褐色焼土層
8　炭層
9　暗灰色土（植物遺体、炭化物を含む）
10　暗灰色土（炭化物を含む）
11　暗灰色土（炭化物を含む）
12　灰色粘土小塊層（植物遺体、炭化物を含む）
13　灰色粘土粒層（植物遺体を含む）
14　暗灰色粘土層（炭化物を含む）
15　暗黄赤色土（焼土を含む）
16　暗灰色粘土粒層（焼土を含む）
17　灰色穀物粒層（米或いは稗の堆積層）
18　暗黄褐色土ブロック、明赤褐色ブロック（焼土を含む）
19　黒褐色土
20　黒褐色土、暗黄褐色土ブロック
21　黒褐色土、暗黄褐色土粒
22　暗黄褐色土ブロック
23　明黄褐色土、明赤褐色土
24　明黄褐色土ブロック
25　明赤褐色土（焼土ブロックを含む）
26　植物の遺体（炭化物を含む）
27　黒褐色土
28　黒褐色土、明黄褐色土粒（炭化物を含む）
29　黒褐色土
30　黒褐色土
31　黒褐色土
32　黒褐色土
33　黒色土

図16　ＳＢ301実測図

それらが西から流れ込んだ状態を示していた。また、床面には未使用の擂鉢が二つ、中央の北壁寄りに南北に並んで据え置かれており、北側の擂鉢周辺には炭化した米や粟が散乱していた。擂鉢内に詰まっていた炭化米を取り除くと、擂鉢の内面には密着するように桶材かと思われる炭化した板材もみとめられた。しかも、同じ様な条件下にあった擂鉢であるにもかかわらず、炭化米に覆われた擂鉢は割れており、もうひとつの擂鉢は無傷であった。

こうした調査所見に基づけば、第一にこの建物がなんらかの事由で焼失していること、第二にはこの竪穴に接して棚などの施設があり、そこに米櫃などが置かれていて、それが建物の焼亡にともなって擂鉢上に落下したのであろうこと、等が推定された。だとすれば、先の小柱穴は、ひとつには壁面に横板をはりつけそれを固定するためのものか、もしくは棚などを支えるためのものかと考えられるのである。竪穴の性格として収蔵庫を想定するのもこの故である。

なお、竪穴からは供膳具をはじめとして、茶壺、李朝の雑釉徳利などが出土している。II－1期に属すか。

溝と堀

調査区内において、もっとも顕著な姿を現したのが、縦横に走る溝状遺構であった。これらは規模において大小様々であり、長さも長短多様なあり方をしている。

戦国Ⅰ期およびそれ以前の溝は、断面形状がおおむねU字形を呈しており、規模は小さいものが多い。埋土は黒色土を主体としていて、溝の使用時のありかたや埋没経緯を物語るような所見はほとんど得ることができなかった。溝からの出土遺物は、戦国以前では山茶椀がみられ、戦国Ⅰ期に属するとしたものからは古瀬戸後期様式を主体として、大窯期のものも出土している。

これに対して、戦国II期の溝は、規模が大きく、断面が鋭くV字状となるいわゆる薬研堀と称するも

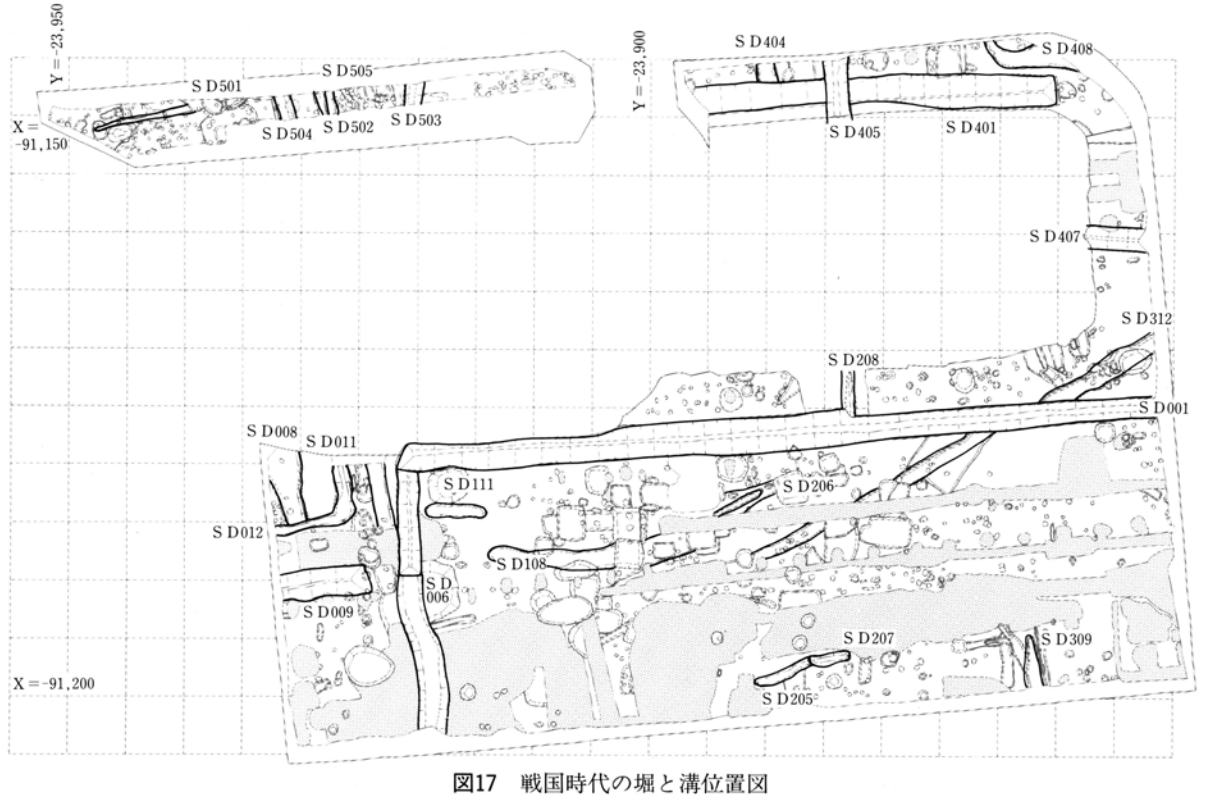


図17　戦国時代の堀と溝位置図

のである。埋土は何層にも識別することができ、その観察結果からはそれぞれの堀に土塁が伴っていたこともわかってきた。伴出遺物も豊富で、大窯２期を主体とするものが出土している。

溝の時期区分については、詳述を避けたが、伴出遺物、切り合い関係、さらには主軸方位等を考慮して判断した。

［戦国以前］

ＳＤ206　２区のほぼ中央、やや西よりで検出された溝で、西端は１区へと延びている。幅は2.30m前後あり、延長17mにわたって検出されているが、西方は戦国以降の遺構によって激しく破壊されているため判然とせず、なお西へと延びていた可能性もある。深さは70cmほどあり、底面はほぼ平坦となっているものの、東端近くでは二段掘りとなっていて、深さもさらに40cmほど深くなっている。主軸方位はＮ―61.5°―Ｅを示す。

ＳＤ312　調査区の中央を斜めにまっすぐ走る溝で、ＳＤ206同様、１区以西では後の攪乱によって検出することができなかった。幅は1.5mほどあり、検出された総延長は52m強におよぶ。深さは0.8mほどあり、底面は僅かに東へと傾斜している。主軸方位はＮ―61.5°―Ｅを示してＳＤ206と平行し、両溝間は3.6mを測る。

ＳＤ205　２区の南端近くで検出された小規模な溝で、北端はＳＤ207によって切られている。幅0.95m、長さ５mほどであるが、深さは1.1mとやや深い。主軸方位はＮ―67.5°―Ｅを示す。

ＳＤ310　３区の南端近くで検出された溝で、この時期では唯一南北方向を取っている。幅は１mほどで、長さは、両端をＳＫ341、ＳＤ309によってそれぞれ切られているため、3.5mほどしか検出できなかった。深さは75cmほどで、主軸方位はＮ―28.5°―Ｗとなる。

［戦国Ⅰ期］

ＳＤ501　５区西端で検出された溝で、幅は溝が収束する西端では狭く、東へいくほど広がって0.75mほどになる。延長は8.3mほどあり、東端はＳＫ502によって切られている。深さは40cmと浅く、底面はわずかに東へと傾斜している。主軸方位はＥ―13.5°―Ｎを示す。

ＳＤ504　５区中央で検出された溝で、溝の上部はＳＤ505によって切られていて、溝の東側の肩は削平をうけている。このため、詳細は不明であるが、幅は推定で1.7mほどある。深さは1.1mほどあり、主軸方位はＮ―12°―Ｗとなる。ＳＤ501と併存するか。

ＳＤ505　ＳＤ504を切る浅い箱堀状の溝で、土坑の可能性もある。溝の東肩がＳＤ502によって切られているため規模は判然としないが、検出した幅は3.3mあり、深さは70cmほどである。主軸方位はＳＤ504と同じで、Ｎ―12°―Ｗである。

ＳＤ502　ＳＤ505を切る溝で、西側に犬走り状のテラスをもつ。溝全体の幅は1.7mほどあり、テラス部分は0.9mを測る。旧地表からの深さも、テラス部分で45cm、溝底までで60cmある。主軸方位はＮ―9.5°―Ｗを示す。

ＳＤ404　４区の北西部で検出された溝で、幅1.6m、深さ１mほどある。ただし、断面が箱堀状を呈して底面が平坦となっており、幅も1.3mを測るなど、当該期の通常の溝とは形状がやや異なっていて、土坑と考えたほうが妥当であろう。主軸方位はＮ―８°―Ｗである。

ＳＤ408　４区の北東端で検出された溝で、Ｌ字状に屈曲していて、コーナー部分は丸みをもっている。

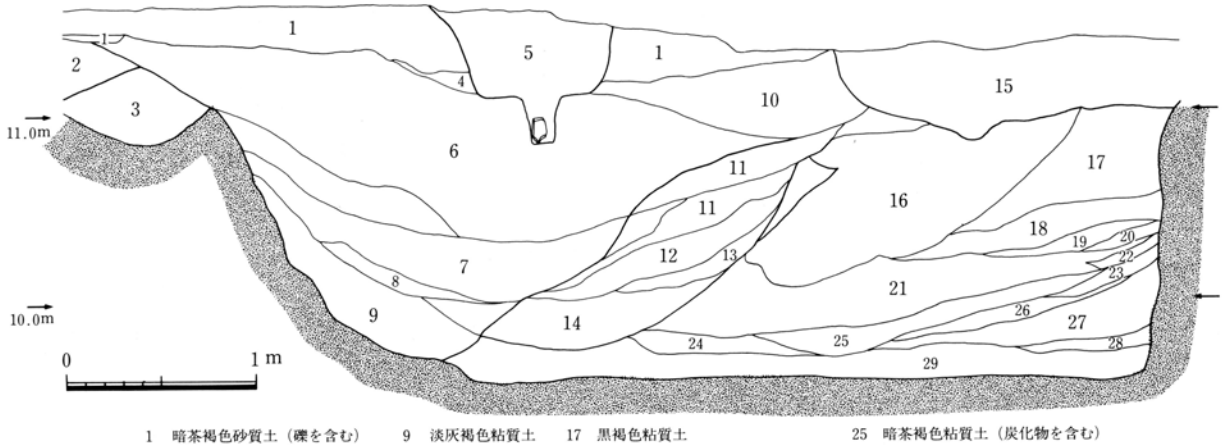
幅は南北方向が90cmであるのに対し、東西方向が1.5mほどと広くなっている。深さは85cmほどで、方位は東西方向の溝でE－2°—Nをとる。

ＳＤ008　0区の北西端で検出された溝で、北へいくほど幅広く、深さも深くなる。また、溝の南端はＳＤ012及び近代攪乱によって切られている。幅1.5～3m、長さ7.5m、深さ0.8～1.3mを測る。主軸方位はN—13°—Wを示す。なお、北端で溝が西へと枝別れしている可能性も捨てがたい。

ＳＤ010　ＳＤ008の東側で検出された溝で、他の遺構との切り合い関係が激しく、ほとんど旧状をとどめていないが、幅1.5m、旧地表からの深さ60cmほどの規模と考えられる。南端は近代攪乱やＳＤ006によって切られていて、検出された溝の長さは5.7mほどである。主軸方位はN—11°—Wを示す。

ＳＤ006(古)　0区東端をＳＫ157を切って南北に走る大溝で、中央でやや鍵の手状に蛇行している。溝は一度やや西よりに掘り返されており、さらに北半は戦国II期に掘り返されている。このため、溝の延長がはっきりしないが、ＳＤ006（新）が掘り込まれたあたりで底面がやや立ち上がってきていること、断面U字状の掘肩の痕跡がＳＤ006（新）の北端から4.5mほどのところで消えていること等からいえば、ＳＤ006(古)は調査区を縦断することなく、南端より18mほどのところで収束していたものと思われる。幅はＳＫ157との切り合いから推定すれば3.5mほどあり、深さも2.2mある。溝とするには規模が大きく、特異な性格を考慮する必要がある。埋土は大きく2層にわかれ、下層は暗褐色粘質土を主体とする自然な堆積状態を示す。上層は地山ブロックを含む斑土となっていて、人為的な埋め立てがなされたものと思われる。上層の溝内への入り込みかたを観察すると、西からのブロックの流れが認められ、溝の西側に土塁がつくられていたことも予想される。主軸方位はN－5°—W前後となる。伴出遺物は、大窯2期のものを主体としている。

ＳＤ207　2区の南端近く、ＳＤ205を切って掘り込まれた小規模な溝で、幅1m、長さ3.5mを測る。深さは0.9～1.2mほどあり、中央がややくぼむ。主軸方位はE－7°—Nを示し、戦国II期の可能性もある。



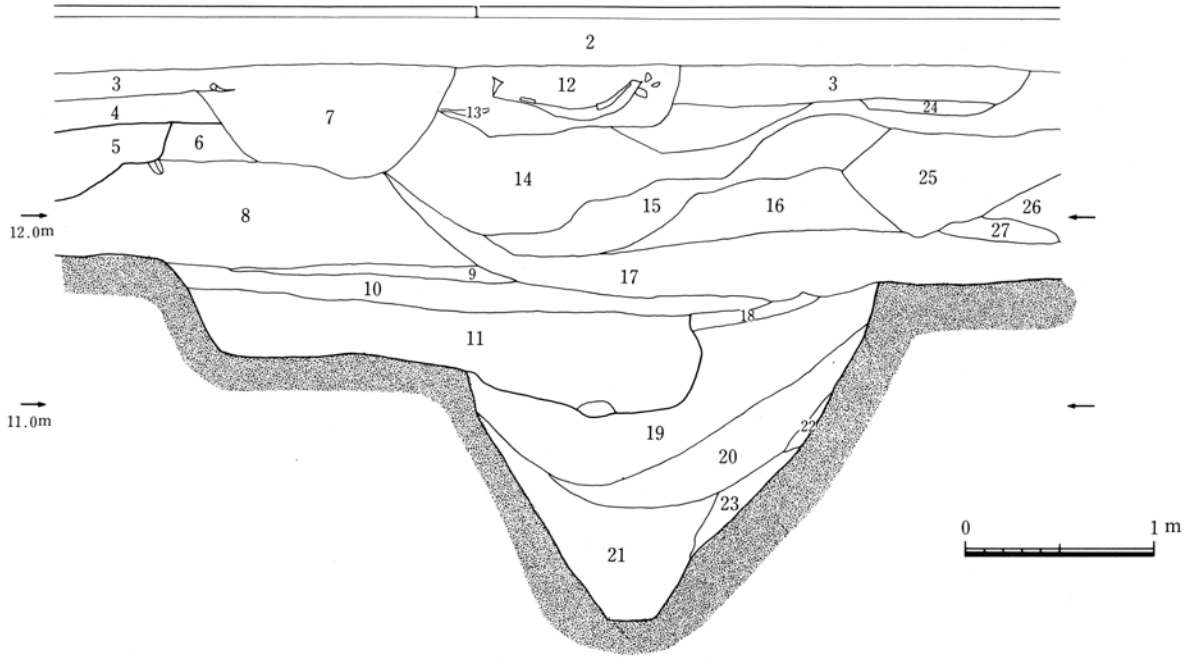
1　暗茶褐色砂質土（礫を含む）
2　黒茶褐色粘質土
3　黒褐色粘質土
4　暗茶褐色砂質土（礫を含む）
5　暗茶褐色砂質土
6　斑土
7　斑土
8　暗灰褐色粘質土
9　淡灰褐色粘質土
10　斑土
11　暗灰褐色粘質土
12　斑土
13　茶褐色粘質土
14　暗灰褐色粘質土
15　黒茶褐色粘質土
16　斑土
17　黒褐色粘質土
18　斑土
29　暗茶褐色粘質土
20　斑土
21　暗茶褐色粘質土（礫、炭化物を含む）
22　斑土
23　斑土
24　淡灰褐色粘質土
25　暗茶褐色粘質土（炭化物を含む）
26　暗茶褐色粘質土
27　灰白色粘土
28　斑土
29　暗茶褐色粘質土

図18　ＳＤ006断面実測図

［戦国II期］

ＳＤ006（新）　ＳＤ006（古）の延長上に掘り込まれた断面Ｖ字形の堀で、幅２ｍ、深さ2.2ｍの規模をもつ。底は幅20～30㎝の平坦面を有し、北から南へとわずかに傾斜している。延長は、底面のあり方から推定すれば10ｍ程度と考えられ、主軸方位はＮ－２°－Ｗとなって、ＳＤ006（古）とはやや異なる。埋土は、大きく２層に区分され、下層は暗褐色粘質土を主体としていて、一時的とはいえ帯水状態にあったことが想定される。また、上層は細かな地山ブロックを含む厚い黒色土層で、しかも地山ブロックの流れ込みが西から東へと一方向的であることなどからいえば、堀はある段階で一気に埋め立てられたこと、さらには埋め立てに用いられた土量が堀の西側に保持されていたこと、つまり土塁が存在していたこと等が予想された。堀の検出された北端はＳＤ001によって切られており、戦国II－１期に属すると思われる。なお、出土遺物には、土器類の他、石硯、五輪塔の一部、瓦片などがある。

ＳＤ009　ＳＤ006（新）とセットとなると考えられる堀で、ＳＤ006（新）の南端西側に、推定2.5ｍ離れてそれとほぼ直交するかたちで検出された。主軸方位はＥ－8.5°－Ｎを示していて、幅2.5ｍ、深さ1.9ｍの規模をもち、7.5ｍにわたって検出されたが、なお西へと調査区外に延びている。底面は幅30㎝ほどの西へと傾斜する平坦面を有していて、ＳＤ006(新)とは構造上、親近性をもっている。堀の埋土は、大きく３層にわかれ、最下層は暗灰褐色の粘質土で、自然堆積によるものである。中層は地山ブロックを含む土層で、人為的に埋め立てたと思われる層であり、上層は下層と同様の土壌で、埋め立てた跡の窪地に自然堆積したものと考えられる。ＳＤ006（新）では、この上層に対応する層位が認められなかっ



1　アスファルト
2　砂利層
3　茶褐色砂質土
4　茶褐色粘質土（炭化物を含む）
5　暗灰褐色粘質土
6　暗灰褐色粘質土
7　攪乱
8　灰白色砂質土と淡茶褐色砂質土との斑土
9　暗茶褐色粘質土
10　暗茶褐色粘質土
11　暗茶褐色粘質土
12　暗茶褐色砂質土
13　砂利層
14　淡茶褐色粘質土
15　淡茶褐色粘質土
16　淡茶褐色粘質土（炭化物を含む）
17　淡茶褐色粘質土（炭化物を含む）
18　暗灰褐色粘質土
19　暗茶褐色粘質土
20　暗茶褐色粘質土
21　暗灰褐色粘質土
22　灰褐色粘質土
23　茶褐色粘質土
24　灰褐色砂質土
25　淡茶褐色粘質土
26　淡茶褐色粘質土
27　淡茶褐色粘質土

図19　ＳＤ009断面実測図

たが、それは検出レベルにかかわることであり、検出段階で削除された可能性がたかい。中層の観察所見からいえば、堀の北側には土塁があったものと思われる。出土遺物には、土器類、瓦片などがあり、堀底近くからは馬の歯も出土している。

ＳＤ401　4区で検出された東西方向の堀で、II－1期に属する。現代の攪乱が激しく、南壁の大半と西端部はすでに破壊されていた。幅3.4m、深さ3.2mで、断面は上方が大きく開くＶ字形を呈し、壁面が55°前後の傾きをもつ。底のレベル差は20cmに満たず、西へとわずかに傾斜している。確認できた堀の長さは35m程度であるが、これと一体となると思われるＳＤ503の位置からすれば、少なくとも56mはあったであろう。主軸方位はＥ－4°－Ｎである。埋土は、東端近くでは3層にわけることができ、上位の2層は人為的な埋め立てによるものである。上層は地山の小ブロックを含む斑土で、北からの一方向で流入しており、堀の北側に土塁が想定される。中層は東端近くだけで認められた土層で、上面は東から西へと大きく傾斜していて、しかも大量の遺物を包含していた。堀の埋め立てに先だって一括投棄したのであろうか。なお、ＳＤ009同様、堀底の直上で1個体分の馬の歯が検出されている。

ＳＤ503　5区の中央より東寄りのところで検出された堀で、幅3m、深さ2.5mをはかる。主軸方位はＮ－5.5°－Ｅであり、ＳＤ401とはやや鋭角的に接続することとなる。埋土はＳＤ006(新)と同様に2層にわかれ、上層の観察によれば東側に土塁を伴っていたと考えられる。

ＳＤ407　ＳＤ401の南方10mのところで検出された堀で、断面は壁面角度62°の鋭いＶ字形を呈する。Ｓ

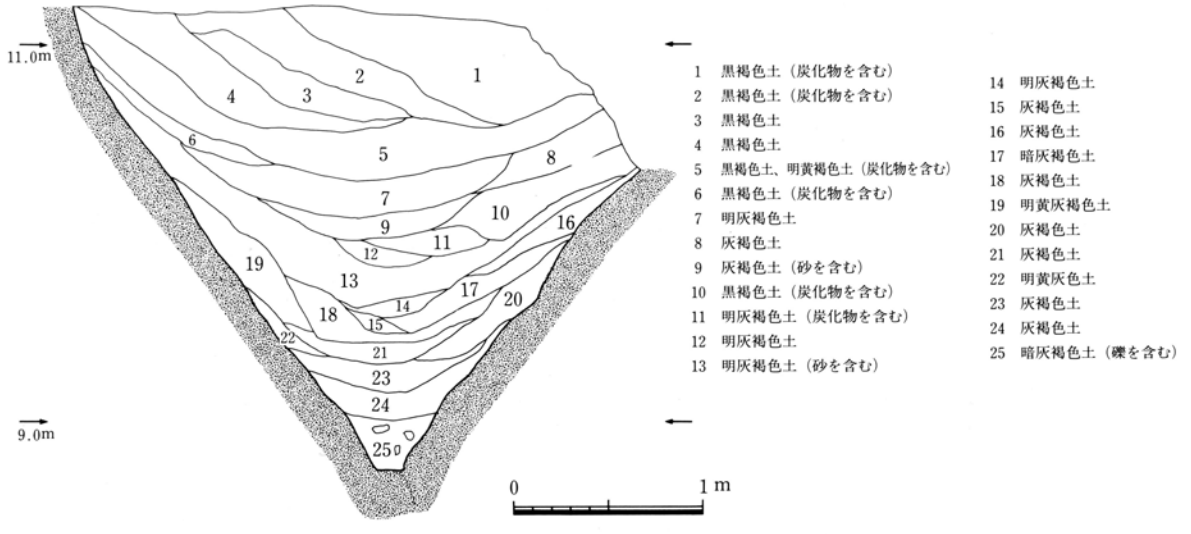


図20　ＳＤ401断面実測図

D401とは主軸方位がE－4°—Wとずれてはいるが、堀の構造等からいって両者は並存していたものと思われる。規模は、幅2.6m、深さ2.5mとＳＤ401より一回り小さい。埋土はＳＤ009と同じ層位を示しており、北側に土塁が存在していたと思われる。なお、底面直上からは角礫を含む20cm大の礫が一面に検出されたが、意図的なものか否かは確認できなかった。

ＳＤ001　調査区の中央を東西に横断する長大な堀で、65mにわたって検出されたが、なお東へと調査区

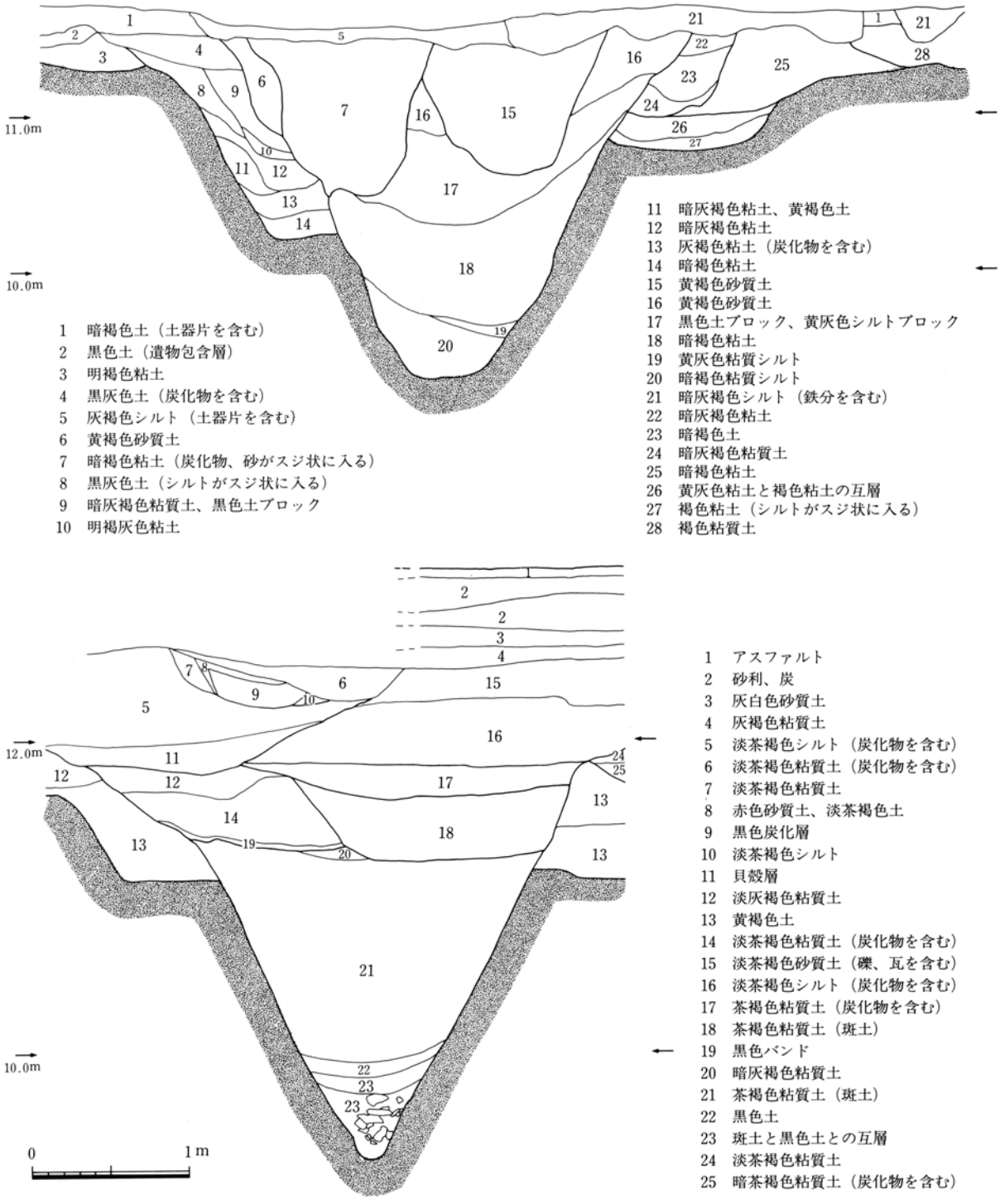
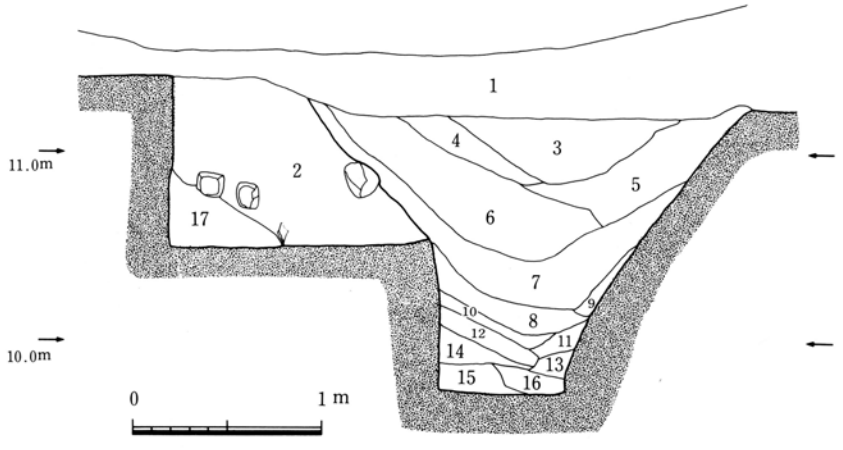


図21　ＳＤ503・ＳＤ407断面図

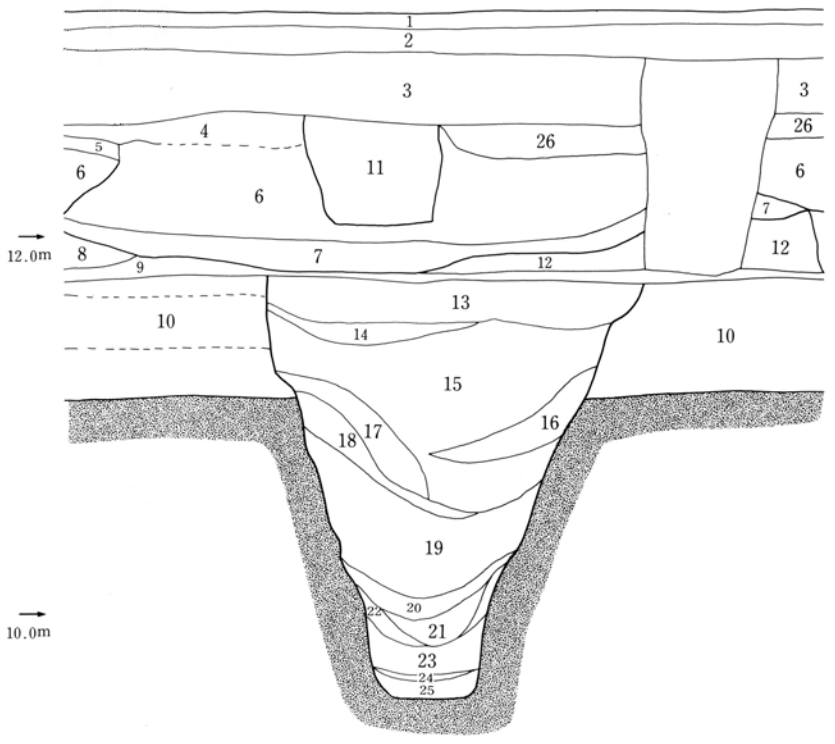
外にのびている。堀は西端より40mのところで、北へとT字状に枝別れする堀ＳＤ208と接するとともに、それ以東では北壁ラインが一段と内側へ入り込むかたちで規模を一回り小さくしている。西側は幅3.1m、深さ3.0mを測り、東側では幅2.0m、深さ2.3mとなっている。主軸方位は、E—3.5°—Nである。断面形態はV字形とはいえ底面幅が広く、西側で30cm、東側で50～60cmの数値をとる。このため、壁面角度が62°～75°と一層切り立っていて、箱堀に近いものとなっている。埋土は大きく３層にわかれ、下層は自然堆積による層で、淡灰茶褐色粘土層をはさんでさらに２層にわかれる。中層は人為的な埋め立てによる斑土で、いずれの地点をとっても南側からの一方的な流入状態を示していて、堀の南に土塁の存在を想定せしめる。このことは、堀の東西で南壁ラインが直線的に通っていることとも整合的であり、だとすれば、堀は土塁構造に強く規制されてつくられているといわねばならない。埋土の上層は、埋め立て後の自然堆積層であるが、留意すべきは層厚が70cmと厚いことで、ＳＤ001の廃絶時期を検討していくうえで、ひとつの参考資料となろう。

ＳＤ208（ＳＤ405）　ＳＤ001から分岐した堀で、南側は上部が既に削平されていて詳細は不明であるが、北側のあり方からいえば、幅2.3m、深さ2.1～2.3mを測る。長さは30.5mを測り、なお調査区外へと延びている。主軸方位は、N—３°—Wを示し、ＳＤ001とは必ずしも直角となっていない。こうしたことは、他の一体となる堀群の場合にも認められるところである。埋土はＳＤ006（新）同様に２層に分かれ、西側に土塁を伴っていたものと考えられる。

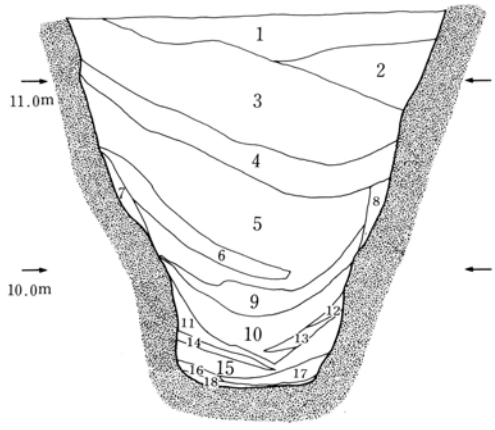


1　暗茶褐色土
2　暗茶褐色土
3　暗茶褐色土
4　暗茶褐色粘質土
5　茶褐色粘質土（炭化物を含む）
6　茶褐色土（斑土、炭化物を含む）
7　茶褐色土（炭化物を含む）
8　暗灰褐色土
9　茶褐色土
10　暗灰褐色粘質土
11　茶褐色粘質土
12　暗灰褐色粘質土（炭化物を含む）
13　暗灰褐色粘質土
14　暗灰褐色粘質土
15　灰白色粘質土
16　暗灰褐色粘質土（炭化物を含む）
17　黄褐色粘質土

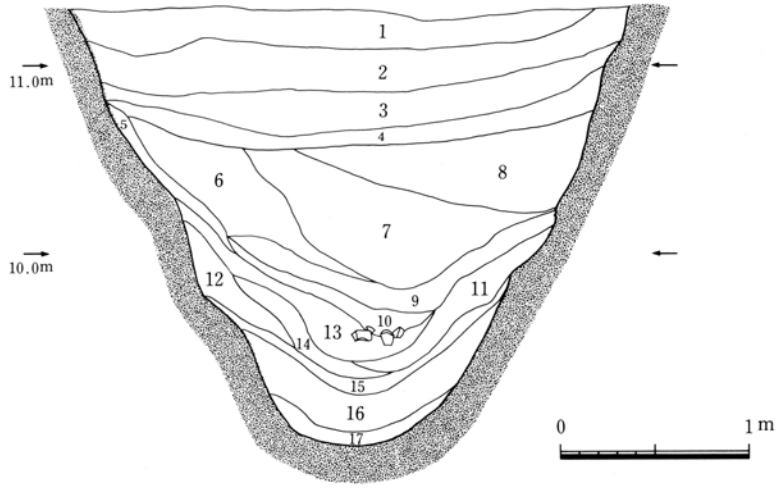
図22　ＳＤ405断面実測図



1 アスファルト
2 礫層
3 茶褐色砂質土（玉砂利面）
4 暗茶褐色シルト
5 淡灰褐色砂質土
6 淡灰褐色粘質土（瓦・炭化物を含む）
7 暗灰褐色粘質土（炭化物を含む）
8 灰白色シルト
9 暗灰褐色粘質土（礫を含む）
10 黒褐色粘質土
11 暗灰茶褐色粘質土（炭化物を含む）
12 淡灰褐色粘質土
13 黒褐色粘質土
14 黒褐色粘質土
15 黒褐色粘質土
16 明灰褐色粘質土
17 暗灰褐色粘質土
18 暗茶褐色シルト質土（炭化物を含む）
19 暗茶褐色シルト質土（炭化物を含む）
20 暗黄褐色粘質土
21 暗灰茶褐色粘質土
22 明黄灰色粘質土
23 暗灰褐色粘質土
24 黒灰色粘質土
25 暗灰褐色粘質土
26 明茶褐色シルト



1 暗灰褐色粘質土
2 暗灰褐色粘質土（炭化物を含む）
3 暗灰褐色粘質土
4 黒褐色粘質土
5 明灰褐色
6 黒灰色粘質土
7 暗黄褐色粘質土
8 暗黄褐色粘質土
9 暗灰褐色粘質土
10 暗茶褐色粘質土
11 暗黄褐色粘質土
12 暗黄褐色粘質土
13 黒灰色粘質土
14 暗茶褐色粘質土
15 暗茶褐色粘質土
16 暗灰色粘質土
17 明灰褐色粘質土
18 暗灰褐色粘質土



1 黒褐色粘質土
2 黒茶褐色粘質土
3 黒茶褐色粘質土（炭化物を含む）
4 暗茶褐色粘質土（炭化物を含む）
5 淡茶褐色粘質
6 淡茶褐色粘質土
7 淡茶褐色粘質土
8 淡茶褐色粘質土
9 淡茶褐色粘質土
10 暗灰褐色粘質土
11 淡茶褐色シルト
12 暗灰褐色粘質土
13 淡茶褐色粘質土
14 暗灰褐色粘質土
15 淡灰茶褐色粘質土
16 淡茶褐色粘質土
17 淡灰茶褐色粘土

図23　ＳＤ001断面実測図

柵列

戦国時代の柵列遺構は、II－2期に属するとおもわれるものが、わずかに2ヶ所で検出されただけである。いづれもＳＤ001に附属する施設と考えられる。

ＳＡ002　ＳＤ001の北側で15.5mにわたって検出された柵列で、方位はN－2°－Wを示してＳＤ001とほぼ直交する。柱穴は全部で9ヶ所あり、おおむね円形プランをもち、直径70～80cm、深さ1.1～3.1mとやや大型のピットである。柱間は心心間で1.6～2.0mとばらつきがあるが、2.0mの数値をとるものが多い。柱穴の大半はＳＤ009を始めとして他の遺構群と激しく切り合っているが、いづれも最新の遺構として他の遺構を切って掘り込まれていた。

ＳＡ201　ＳＤ001の中央部北側で堀と併走するように6個の柱穴が検出されているが、柱穴の間隔がアトランダムであり、柵列と断定するには不安が残る。直径30～40cmの円形もしくは楕円形プランで、1m前後の深さを測る。方位は、E－3°－Nを示す。

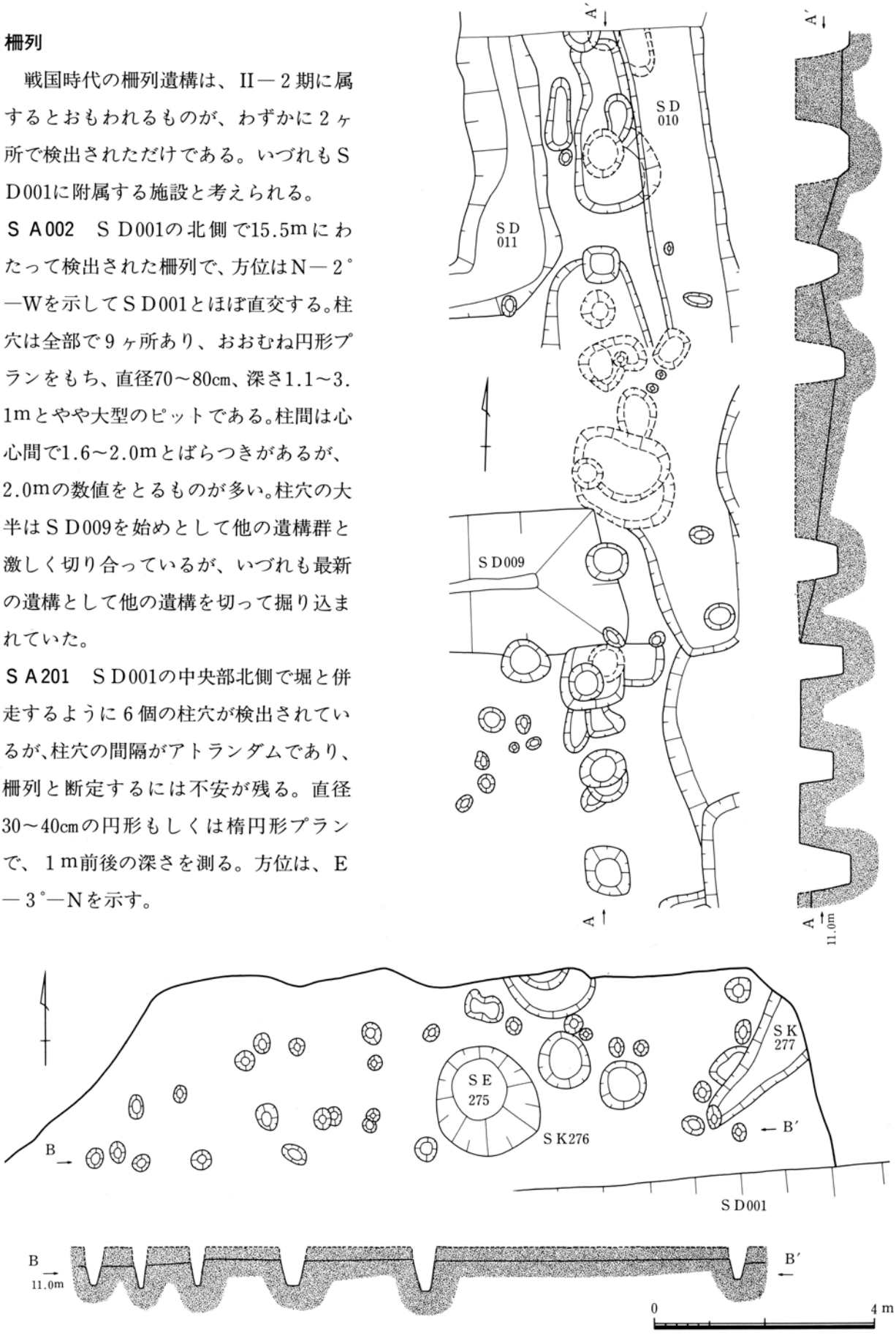


図24　ＳＡ002・ＳＡ201実測図

井戸

戦国時代及びそれ以前の井戸は、11基検出されている。それらは作業員の人力で掘り下げていくにはあまりに深く、崩落などによる事故を避けるため、検出面から２ｍほどのところで調査をあきらめざるをえなかった。しかし、幸いにも調査区中央部分で検出したいくつかの井戸については、調査の最終段階で重機による断ち割りを実施することができ、井戸の構造等について新たな知見を得ることができた。

井戸の掘形には、２種類のタイプがある。ひとつは円筒状に掘削しているもの（Ⅰ類）であり、第２のタイプは円筒状に一旦掘り下げた後、大きく袋状に掘り広げ、湧水点近くで再び小さく円筒状に掘り込んでいるもの（II類）である。II類については、本来Ⅰ類であったものが壁面の崩落などによってそうした形状を残している、とする説もある。しかしながら、埋土の状態を観察した限りでは、地山の崩落現象をものがたるような層位は認めることができず、掘削当初からの姿をとどめていると考えざるをえない、つまり、掘形のII類として設定することが妥当であるとせざるをえないのである。

一方、井枠・井筒などの施設についてみると、井枠の痕跡はまったくみられず、ＳＥ114、ＳＥ278において井筒の使用が認められただけであった。

ところで、確実に戦国時代に属するものはいずれもII類の形態をとっており、仮にこうした状況が台

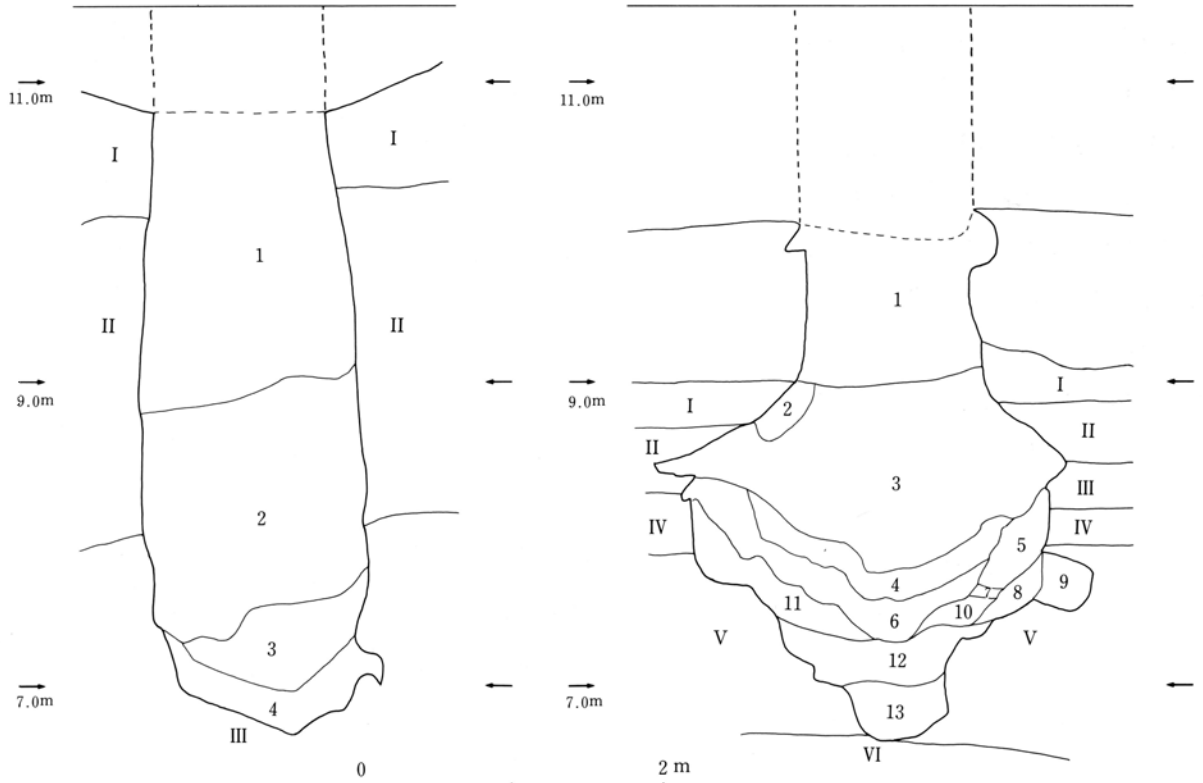


図25　ＳＥ358・ＳＥ266断面実測図

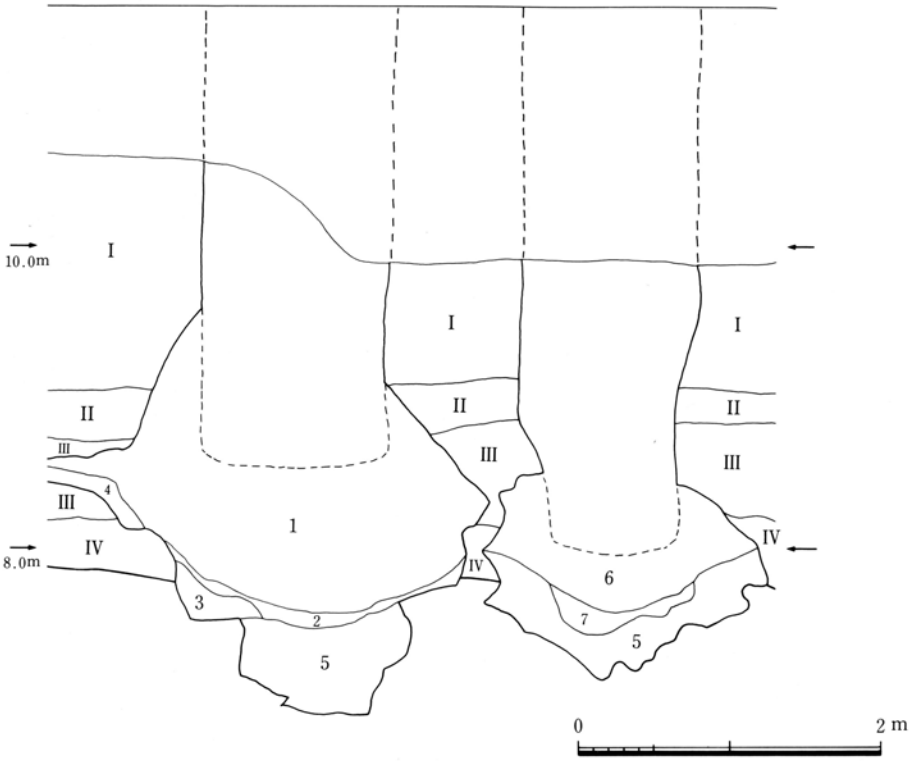
地上の一般的な傾向だとすれば、平野部の擂鉢状の掘形と桶組の井筒を基本とするあり方と大きく異なることとなる。このような差異が、単に自然立地の相違に基づくものか、それとも井戸掘り職人の技術的系譜の差異を含めて彼らそれぞれの歴史的あり方によるものかは、今後、検討を要する重要な課題となるであろう。

ＳＥ358　３区の北東端、ＳＢ302の北西に接して検出された井戸で、掘形はＩ類である。直径1.1m、深さ５ｍを測り、上部2.7mには黒褐色土層が充填していた。出土遺物は少なく、所属時期の決め手にかけるが、埋土からいえば中世に遡る可能性がたかい。

ＳＥ426・ＳＥ420・ＳＥ020　直径４ｍほどの円筒形を呈しているが、下層には地山がおおきく崩落して入り込んでおり、本来は掘形II類の井戸と考えられる。ＳＥ426・ＳＥ420はＳＤ401によって切られており、また伴出遺物からみてもＩ期に属すると思われる。

ＳＥ421　断ち割り調査が不可能であったため、掘形等の詳細は不明である。上端径は１ｍ程度で、上部の埋土である暗褐色土層中からは多くの土師皿が出土していて注目される。位置からいえば、推定されるＳＤ401・ＳＤ405の土塁下にあることとなり、Ｉ期に属することとなる。この点は出土遺物の年代観とも齟齬しない。

ＳＥ266　２区のほぼ中央で検出された井戸で、掘形はII類である。上端径1.2m、深さ5.2mを測る。埋



I　淡茶褐色粘質土
II　灰褐色砂質土
III　灰白色粘質土
IV　淡灰色砂質土
1　黒灰色粘質土（炭化物を含む）
2　淡灰色粘土
3　灰白色粘土
4　灰白色砂質土
5　淡灰色砂質土
6　暗灰褐色粘質土
7　灰褐色砂質土

図26　ＳＥ223・ＳＥ227断面実測図

土の第３層は焼土や炭化物の細粒を多くふくみ、甕類を主体とする土器類とともに炭化米などが出土した。ＳＢ301の埋没状況と類似するところがあり、留意される。II－１期に属するか。

ＳＥ223・ＳＥ227　ＳＥ266の南側で南北方向に並んで検出された井戸で、掘形は両者ともII類である。但し、ＳＥ227は下端のえぐれを使用時の崩落によるとみなせばＩ類とすることも可能である。ＳＥ223は上端径1.2m、深さ4.9mあり、ＳＥ227は上端径1.2m、深さ4.7mを測る。前者は、埋土の第１層がＳＥ266と同様の状態を示しており、II－１期に属するか。後者はII期かと思われるが、詳細は不明である。

ＳＥ114　１区南端近くで検出された掘形II類の井戸で、上端径0.9m、深さ７mを測る。伴出遺物もなく、II期に属すると思われるが、詳細は不明。

ＳＥ145　掘形II類の井戸で、上端径1.4m、深さは７mある。他に比して掘形が大きく、またII類のなかで唯一井筒が用いられていて、注目される。井筒の材料は判然としなかった。時期はII期以降と思われるが、詳細は不明。

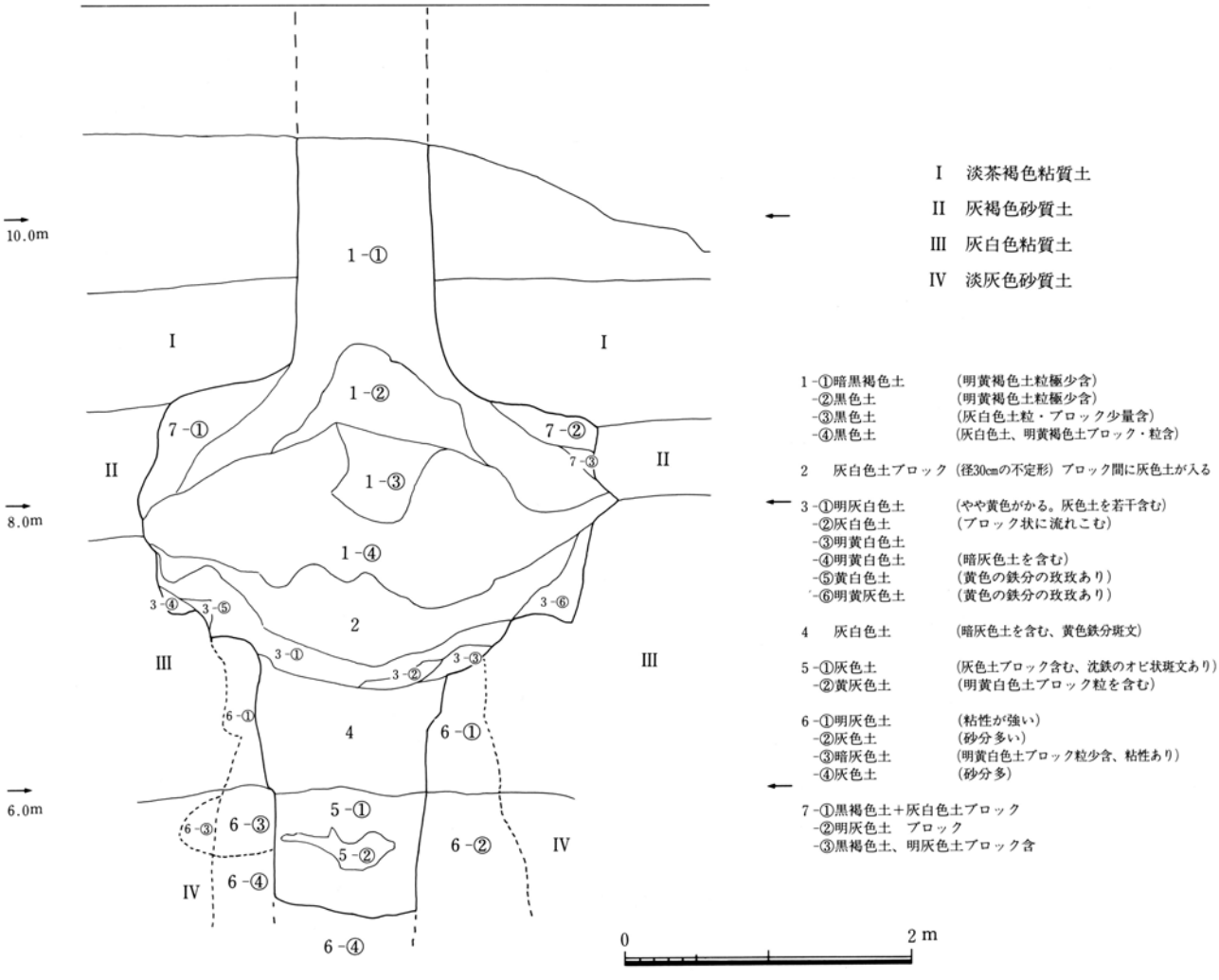
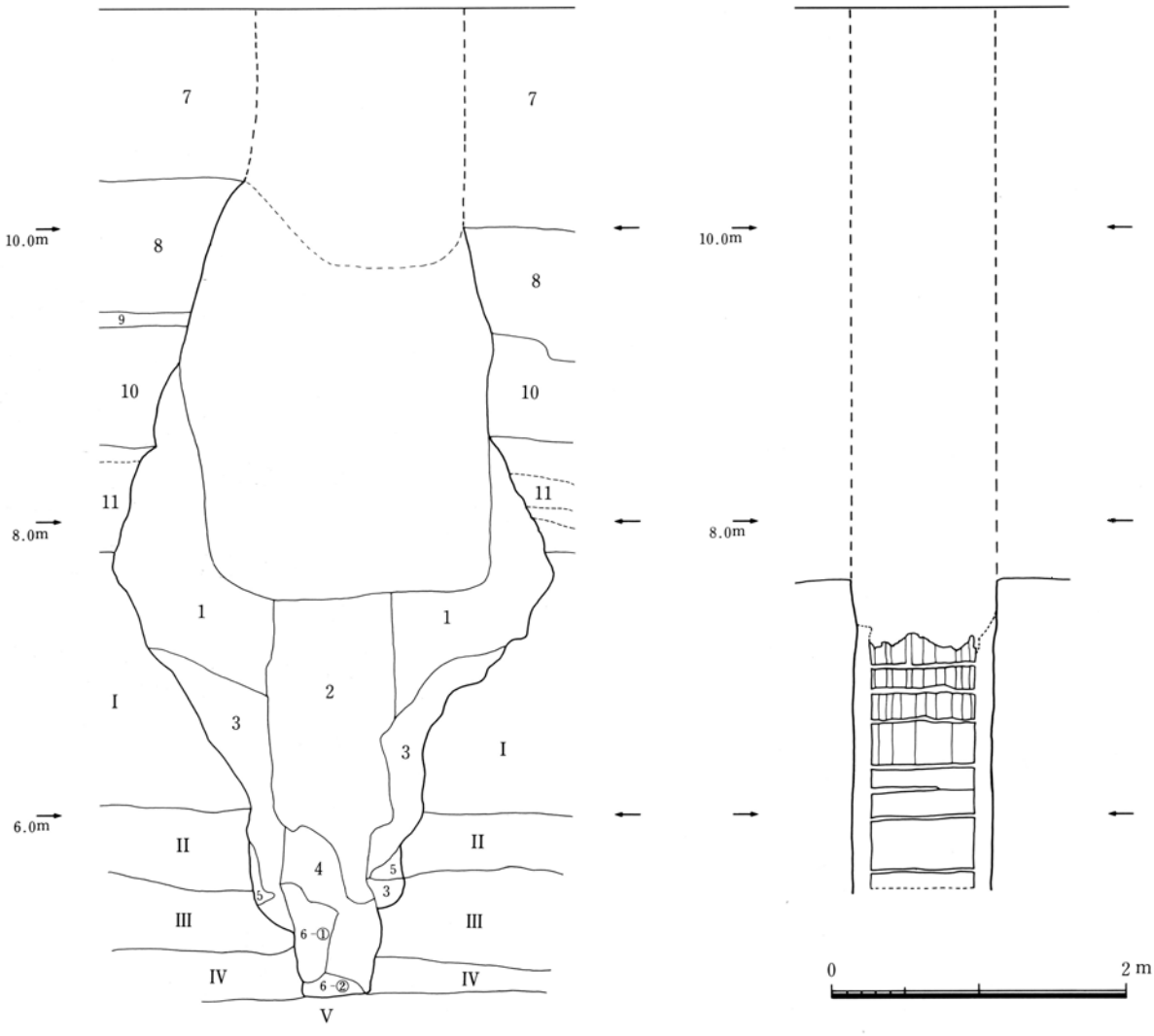


図27　ＳＥ114断面実測図

ＳＥ278　掘形Ｉ類の井戸で、粘土質の裏込め土に、井筒に用いた桶組の圧痕が明瞭に残存していた。掘形径は１ｍ弱で、深さ6.3m、桶は径70㎝、推定高65～70㎝を測る。なお、井戸を半截するように西側に接して掘り込まれたＳＫ209は、標高7.2mのところまで掘りさげられており、井戸の掘形と考えることも可能であるが、断定するにはいたらなかった。II－２期の所属かとおもわれるが、決め手となる資料にかけ、ＳＫ209を掘形とすれば近世前半までさがることとなる。



I　明黄灰色粘土
II　明青灰色砂
III　明青灰色粘土
IV　明灰色粘土
V　明青灰色砂

1　灰色砂＋灰白色土ブロック＋明灰褐色土＋黒褐色土ブロック
灰色砂と灰白色土ブロック（基盤土）を主体に明灰褐色土、黒褐色土（地上土）との混合。
2　明灰褐色砂（灰白色土ブロックと灰褐色土と黒褐色土を含む。部分的に、沈鉄の為黄褐色を帯びる。）
3　灰白色土＋灰色砂（両者の混合状況、部分的に沈鉄のため黄褐色をおびる。）
4　灰色砂（灰色土が横縞状に入る。）
5　灰色砂（沈鉄のため黄褐色をおびる。）
6-①灰色土（粘土に近い）
-②灰色土（灰色砂多く含む）
7　明黄褐色シルト
8　明青灰色シルト
9　明黄色シルト
10　青灰色砂層
11　明青灰色砂とシルトの互層

図28　ＳＥ145・ＳＥ278断面実測図

土坑

1区から2区にかけての北半からは、多くの方形土坑が群をなして検出された。平面プランは方形もしくは長方形を呈していて、大きさは、SK231のように1.4×1.8mとやや小型のものからSK152の2.5×3.0mのものまで、大小さまざまである。深さも、SK155の0.7m程度のものもあれば、SK152の1.4mのものまで多様である。にもかかわらず、それらはおおむね方位を一致させてつくられていることに特色がある。また、切り合い関係も激しく、なんらかの区域規制があったとも予測されるのである。伴出遺物もきわめて少なく、その性格や機能をただちに導き出すことは困難であるが、城館のあり方とかかわる施設であることには相違なく、今後の検討材料として注意しておきたい。

（遠藤才文）

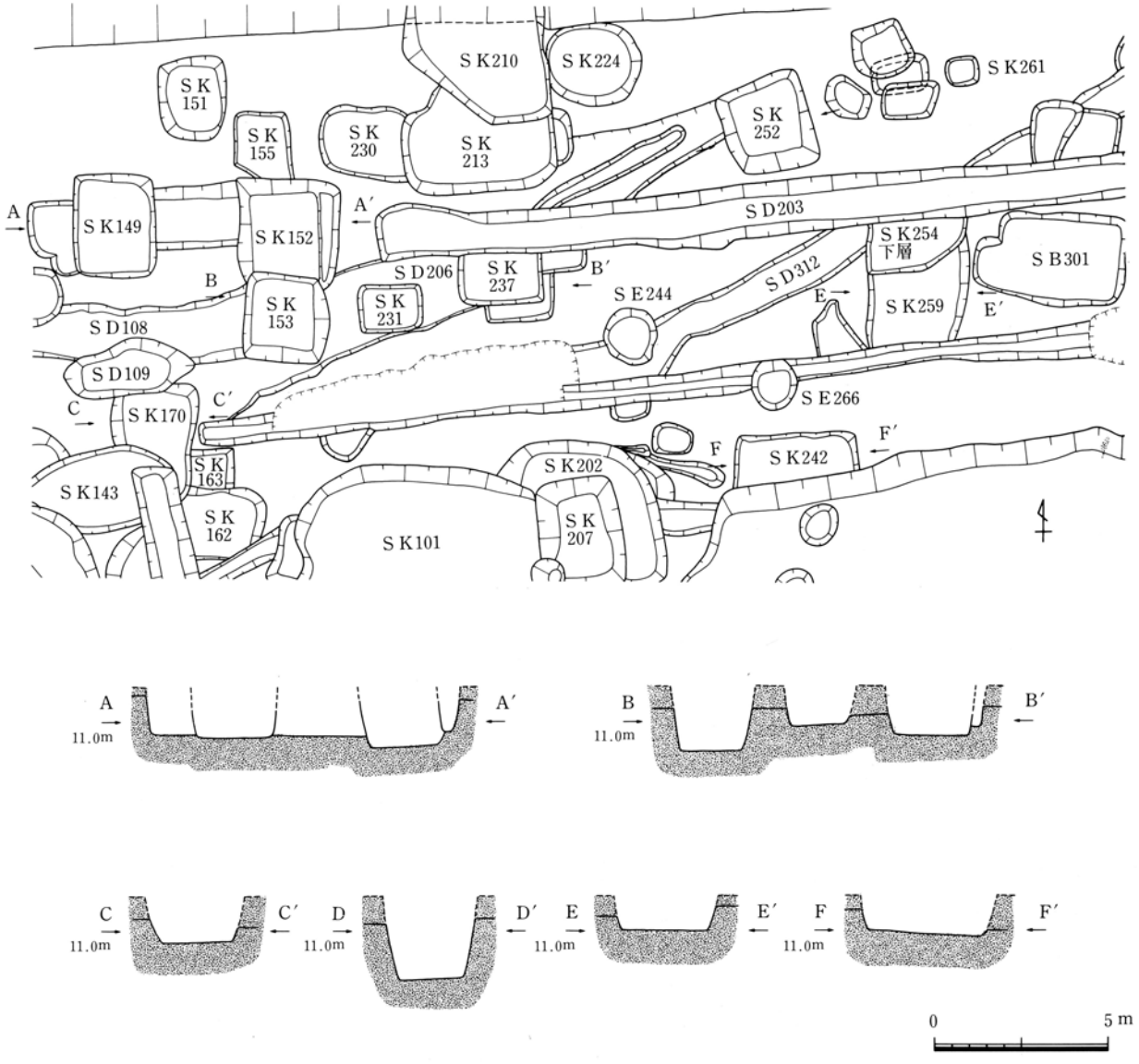


図29　土坑群実測図

2　遺　　物

戦国時代の出土遺物では、陶磁器類（土器等を含む）が大半を占め、その他に、瓦・石製品・金属器などがある。これらは暮しに即してみれば、供膳具や調理具、あるいは貯蔵具等々に分類することができるし、なかには鋳造具など生産にかかわる用具類もある。また、炭化米や粟など食物そのものの出土もみることができた。

とはいえ、遺構とのかかわりでいえば、これらの遺物はおもに堀の人為的な埋土などから出土している。つまり、直接的には遺構の廃絶に伴うものであって、遺構そのものがつくられ、暮しのなかで生きいきと機能していた時期や状況をただちに物語るものではないのである。唯一、焼失したと思われるＳＢ301出土の遺物が、遺構との密接な関連を窺わせているといえる。

本節では、こうした遺物のうち、陶磁器類を中心にその概要をみることとしたい。その際、各遺構から出土した遺物群の一括性を重視し、用途分類に基づく組成を明らかにすることを課題とした。このため、個々の遺物の細かな編年等については、やむをえず等閑に付さざるをえなかった。

(1) 陶　磁　器　類

分類

出土した陶磁器類は、接合前の口縁部破片で総数6580点にのぼった。これら口縁を、用途を第１項、器種を第２項、器形を第３項として分類し、個々の遺物が３桁の数字で表示できるよう、原則としてそれぞれの分類項目に１桁の数字を付与することとした。このため、また口縁部破片での分類であることも手伝って、器種・器形分類に不統一なところもある。

用途については、判然としないものもあるが、おおむね１―供膳具、２―調理具、３―貯蔵具、４―灯火具、５―火具、６―神仏具、７―調度具に分類することとした。器種としての蓋は、身となる器種と一体のものであり、組成の統計処理上、ダブルカウントすることとなるため、独立の用途・７として１項をたてて集計している。

それぞれの用途に基づく分類は以下のごとくである。

１　供膳具

１　椀	１	天目椀	窖窯製品と大窯製品とがある。大窯のものは、いずれも体部下半にサビ釉の化粧がけがほどこしてあり、高台には輪高台のものと内反り高台のものとがある。
	２	丸椀	体部が丸みをもって立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。
	３	平椀	高台部からはほぼ直線的に大きく開く体部を有する椀で、窖窯・大窯両製品がある。
	４	筒椀	腰がはって体部が円筒状を呈する椀である。
	５	端反椀	体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部が外反して開く。貿易磁器だけにみられる器形である。
	０	その他	

2	小椀		器形的には、椀の分類をそのまま踏襲している。
3	皿	1 縁釉皿	平底の皿で、口縁部だけに釉薬をかけたもので、窖窯の製品である。
		2 丸皿	高台がつき、体部はまるみをもって立ち上がる。
		3 稜皿	体部は高台から直線的に開いて立ち上がり、口唇部がゆるやかに外反する。
		4 端反皿	体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。
		5 折縁皿	口縁部は外方へ強く屈曲し、端部にいたってさらに上方へと短く立ち上がっている。
		6 菊皿	菊花状につくりなしている皿で、花弁表現には丸ノミによるものと型打ちのものとがある。
		7 稜花皿	口縁部を外反させ、花弁状に切り取ってつくってある。また、外反した口唇部をひだ状にしたものもここに分類している。
		8 同心円皿	内面に凹線もしくは凸線の同心円がつく。高台はなく、無釉の陶器のみにみられる器形である。
		0 その他	
4	鉢	1 折縁鉢	口縁部を外方へ強く屈曲させ、端部は短く立ち上がる。ここでは原則的に窖窯の製品である。
		2 平鉢	体部は直線的に開いて立ち上がっている。これも窖窯のものである。
		0 その他	

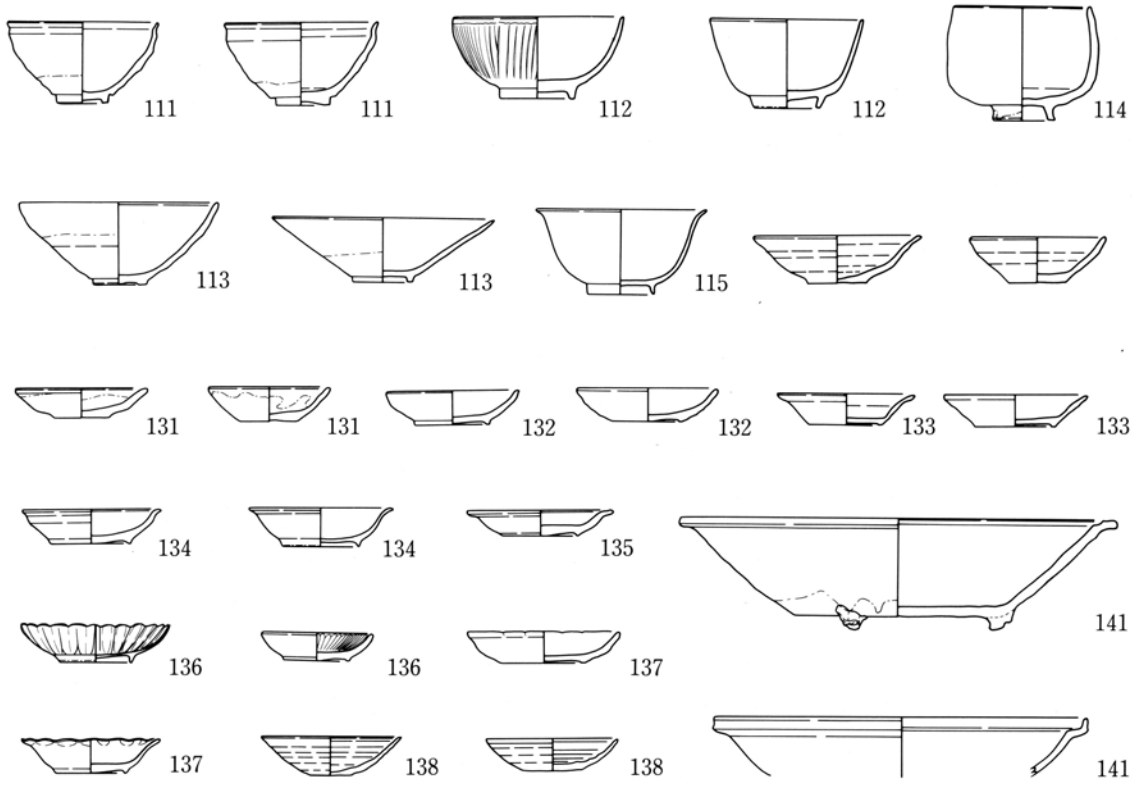


図30　戦国陶磁器類分類図(1)

2　調理具

1　鍋・釜　1　内耳鍋　半球形の体部を有し、内面の口縁部直下に対となる横耳がつく。やや偏平な底部には3足がつく。陶器製品は形態が異なるが、ここではそうした相違は捨象している。

2　羽釜　半球形の体部に幅の狭いつばがつく。口縁部の立ち上がりは長く、やや内傾している。

3　茶釜等　球形の体部に直立する口縁部がつき、胴部中央近くにはつばを有する。肩に一対の縦耳がある。同様の口縁部をもつ器形に、つばのつかないものがあるが、これもこの分類に含めている。後者は肩に円孔のある板状の耳が横位に直立してつく。

2　鉢　1　片口鉢　円筒状の体部に片口がつく。今回はそれと断定したものはなかった。

2　こね鉢　体部は丸みをもって立ち上がり、口唇部は内面に肥厚化して平坦面をもつ。用途は確かではないが、供膳用の丸鉢とするには抵抗があり、こね鉢として分類した。

0　その他

3　擂鉢　1　Ⅰ類　美濃・瀬戸産の擂鉢は口縁部の年代による形態変化が顕著であり、口縁部破片の統計処理に年代観を与えていく上で重要な位置をしめている。それ故、必要最小限の形態分類を組み入れることとした。Ⅰ類は口縁部を上方もしくは内傾気味に屈曲させていて、口唇部は断面三角形につくりなしている。

2　Ⅱ類　体部から口縁部へと直線的に開き、口端部は内傾するやや幅広な平坦面をもち、内面の口端直下には段がつく。

3　Ⅲ類　口縁部を上方へと一旦屈曲させた後、外側へと折り返すことによって縁帯をつくるもので、口唇部の断面は三角形を呈する。

0　その他

3　貯蔵具

1　瓶　1　徳利　破片点数も少なく、ここでは器形の細分はしていない。

2　壺　1　無蓋壺　口縁部に縁帯をもち、口唇部に平坦面かもしくは横面をもつ広口壺で、なかには甕とも称しうるものもある。

2　茶壺　いわゆる茶壺形のもので、口縁は折り返して肥厚化させ、端部は丸くおさめている。

3　小型壺　小型の壺で、茶入れと称するものも含んでいる。また、水注に属するものもこの項にいれた。

0　その他

3　甕　1　Ⅰ類　口縁部を折り返して縁帯としているが、縁帯はすでに頸部に癒着している。口唇部の外端は段をなくして短く立ち上がっている。

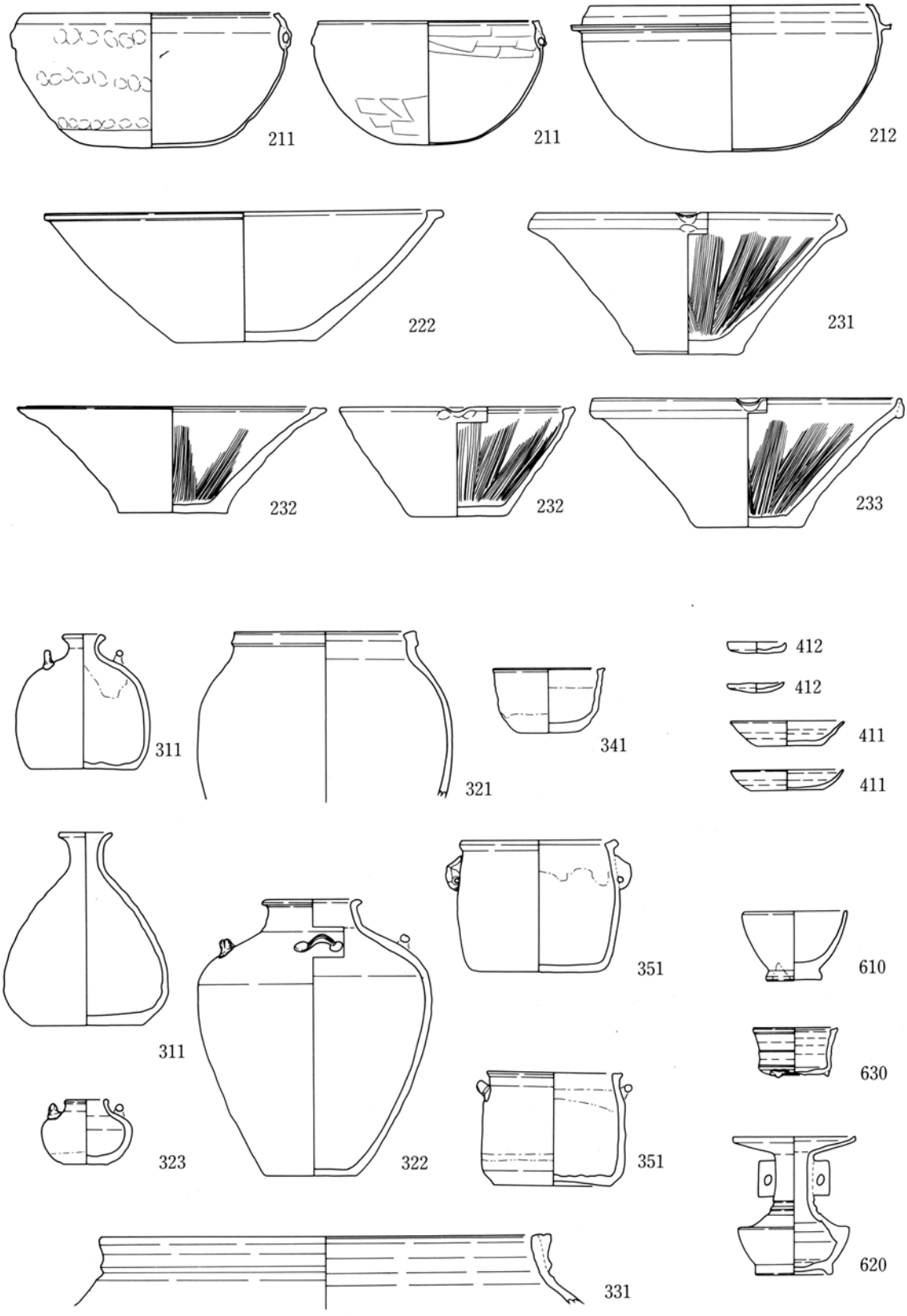


図31　戦国陶磁器類分類図(2)

	2	II類	口縁部は折り返し、端部はわずかに外側へと反らせている。口唇部はそのまま丸くおさめている。
	3	その他	
4 鉢	1	筒形容器	口縁部の形態は種々あるが、円筒状の体部を有するものをすべてここに分類した。
4 灯火具			
1 皿	1	ロクロ皿	ロクロ成形による土器皿は、すべてここに分類した。また、陶器の皿で口縁部に油煙などが付着し、灯明皿としての使用痕があるものも含めている。
	2	手捏皿	手捏ねによる土器皿で、径6cm前後の小型のものである。
5 火具			
0	0		火鉢などを一括して分類し、器種・器形の細分はしていない。また、筒形容器などで内面が被熱しているものも、ここに入れている。
6 神仏具			
1 仏餉具	0		神仏具については、器形細分はしていない。仏餉具は円板形の台に杯状の体部がつくものである。
2 花瓶	0		肩がはって稜がつく体部に、円筒状の細頸がつき、口縁部は大きく皿状にひらいて端部を短くたちあげている。
3 香炉	0		筒形の体部に3足がつく。口縁部は肥厚化して内側に突出し、口唇部は内傾気味の平坦面をもつ。体部外面には、口縁部、中央、腰部と3ヶ所に沈線がめぐる。
7 調度具			
0	0		1—6に分類できない器種・器形を調度具として仮に分類してある。

統計方法

統計方法は、口縁部計測法を用いた。統計処理上の精度もさることながら、膨大な出土遺物のすべての破片を器種分類することは不可能と判断したためである。また、後述するように遺構によって器種組成が大きく異なり、特定の遺構を抽出して分析することが内包する問題点を排除せんがためである。

計測は、残存する口縁を接合した後、12分の1単位でおこない、12分の1未満は0、12分の1以上で12分の2未満は1とし、以下順次2、3、4……とカウントした。この集計が接合後口縁残存率である。個体数はこれを12で割って小数点以下第2位まで求めたものである。つまり、ここでいう個体数は組成分析を目的とした統計上の数値であって、個々の数値そのものは自律的ななんらかの意味があるわけではない。個体識別に基づく数値とは異なって、実態的な個体の数量とは隔壁もおおきい。数値をあつかう際には、このことに留意して用いる必要があろう。なお、比較検討のため接合前の破片点数も併せて集計した。

概要

遺構検出段階の遺物については、近世遺物の混入も多く、ここでは当該期の遺構から出土した遺物だ

けを対象として、その概要をまとめておこう。

遺構から出土した全陶磁器類は、先にも述べたように口縁部破片では6580点あり、総個体数は55.83個体ある。ちなみに、今回の調査で出土したすべての陶磁器類に占める割合を示せば、それぞれ14.4%、11.0%となる。

それらの個体数組成における特徴をあげれば、

第1に、灯火具とした土器皿が、蓋をのぞく全体の67%と圧倒的に多く、しかも、そのうち手捏皿が土器皿の67.2%、全体でも45.1%と高い比率を占めていることであり、

第2には、調理具の鍋・釜において大きな容量をもつ羽釜が40.4%と高い割合をもって出土していること、

第3には、第1点ともかかわって、用途・器種がごく限られているにもかかわらず、土器製品が全体の72.9%と高い比率を占めることとなっていること、

最後に、磁器が意外に少なく、供膳具に占める割合でみても、4.3%にすぎないこと、

等を指摘することができる。

（遠藤才文）

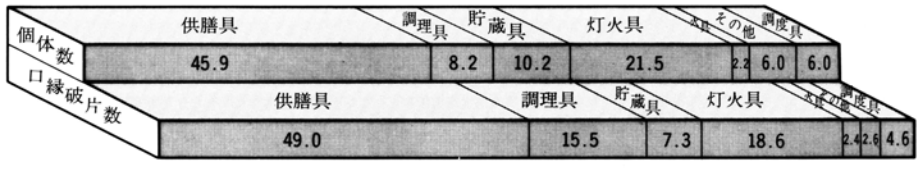


図32　戦国遺構出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率 土器	陶器	磁器	その他	計	接合前口縁破片数 土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	1196	54	0	1250	2	1180	81	0	1263
	椀	0	364	21	0	385	2	354	29	0	385
	小椀	0	13	0	0	13	0	11	3	0	14
	皿	0	809	29	0	838	0	775	41	0	816
	鉢	0	10	4	0	14	0	40	8	0	48
調理具		394	220	0	0	614	1249	526	0	0	1775
	内耳鍋	201	4	0	0	205	809	3	0	0	812
	羽釜	159	0	0	0	159	374	0	0	0	374
	茶釜等	34	1	0	0	35	66	2	0	0	68
	鉢	0	17	0	0	17	0	35	0	0	35
	擂鉢	0	198	0	0	198	0	486	0	0	486
貯蔵具		0	247	0	0	247	0	230	0	0	230
	瓶	0	13	0	0	13	0	9	0	0	9
	壷	0	116	0	0	116	0	73	0	0	73
	甕	0	26	0	0	26	0	70	0	0	70
	鉢	0	92	0	0	92	0	78	0	0	78
灯火具		4442	48	0	0	4490	3257	30	0	0	3287
	ロクロ皿	1455	48	0	0	1503	2262	30	0	0	2292
	手捏皿	2987	0	0	0	2987	995	0	0	0	995
火具		0	0	0	0	0	1	2	0	1	4
神仏具		0	6	0	0	6	0	8	0	0	8
調度具		0	20	0	0	20	0	9	0	0	9
蓋		0	7	0	0	7	0	4	0	0	4
合計		4836	1744	54	0	6634	4509	1989	81	1	6580

表1　戦国遺構出土陶磁器類集計表

ＳＤ001：本遺構の時期は16世紀中葉に比定される。

本遺構出土の遺物は、口縁部破片数で475点、総個体数で45.75個体である。用途別にその組成を見てみれば、供膳具14.58個体、55.2%、調理具3.0個体、11.4%、貯蔵具2.67個体、10.1%、灯火具6.0個体、22.7%となる。また、神仏具・調度具については、口縁部破片でそれぞれ２点、１点ずつの出土に留まっており、火具・蓋については出土が見られない。

材質面では、土器26.5%、陶器71.9%、磁器1.6%と、この遺構では陶器がその中心を占め、土器が¼に留まっている点が注目される。これは灯火具の比率の低さが影響していると考えられる。

器種別で見た場合、供膳具内では椀:皿＝１：2.18であり、従来提唱されている椀と皿の比率と同様の結果が得られている。調理具では煮沸具である鍋・羽釜（羽釜、茶釜型羽釜）を併せて、55.6%を占めており、その消費量の多さが目を引いている。また貯蔵具では59.4%が壺で占められており、これも器種の多様化が見られる江戸時代と様相を異にしており、興味深い点である。

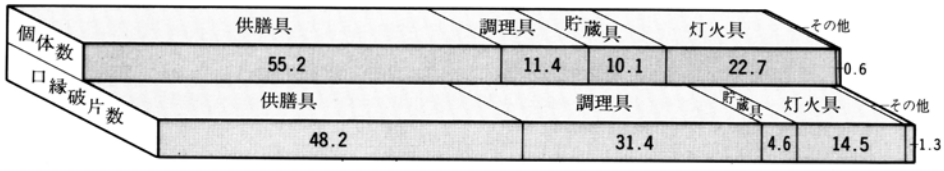
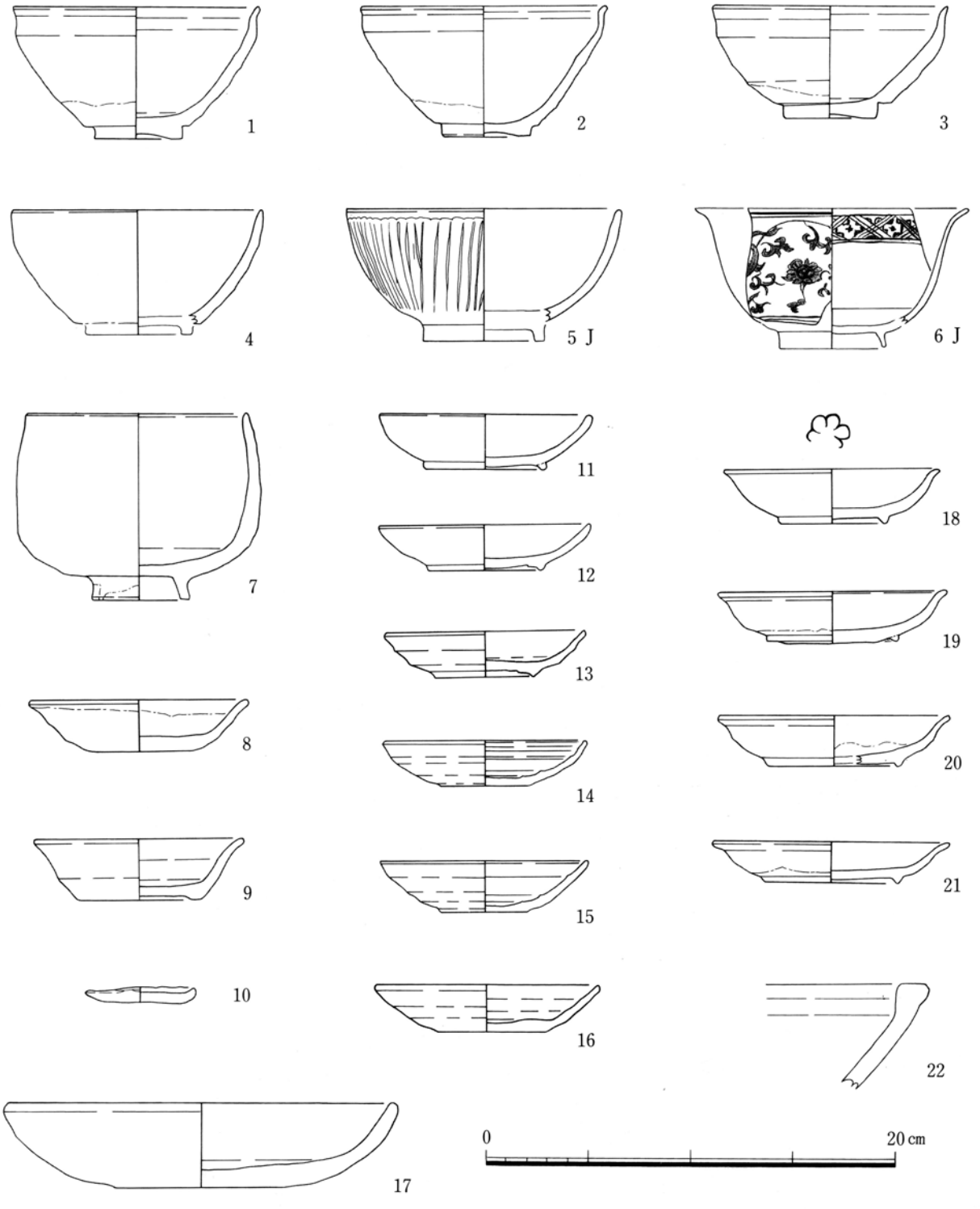


図33　ＳＤ001出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率 土器	陶器	磁器	その他	計	接合前口縁破片数 土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	170	5	0	175	0	216	13	0	229
	椀		51	4		55		59	5		64
	小椀		0			0		4			4
	皿		119	1		120		146	8		154
	鉢		0			0		7			7
調理具		17	19	0	0	36	88	61	0	0	149
	内耳鍋	8	1			9	62	1			63
	羽釜	5				5	17				17
	茶釜等	4				4	9				9
	鉢		2			2		8			8
	擂鉢		16			16		52			52
貯蔵具		0	32	0	0	32	0	22	0	0	22
	瓶		2			2		1			1
	壷		19			19		4			4
	甕		2			2		8			8
	鉢		9			9		9			9
灯火具		67	5	0	0	72	65	4	0	0	69
	ロクロ皿	15	5			20	42	4			46
	手捏皿	52				52	23				23
火具		0	0			0	1	2			3
神仏具			1			1		2			2
調度具			1			1		1			1
蓋						0					0
合計		84	228	5	0	317	154	308	13	0	475

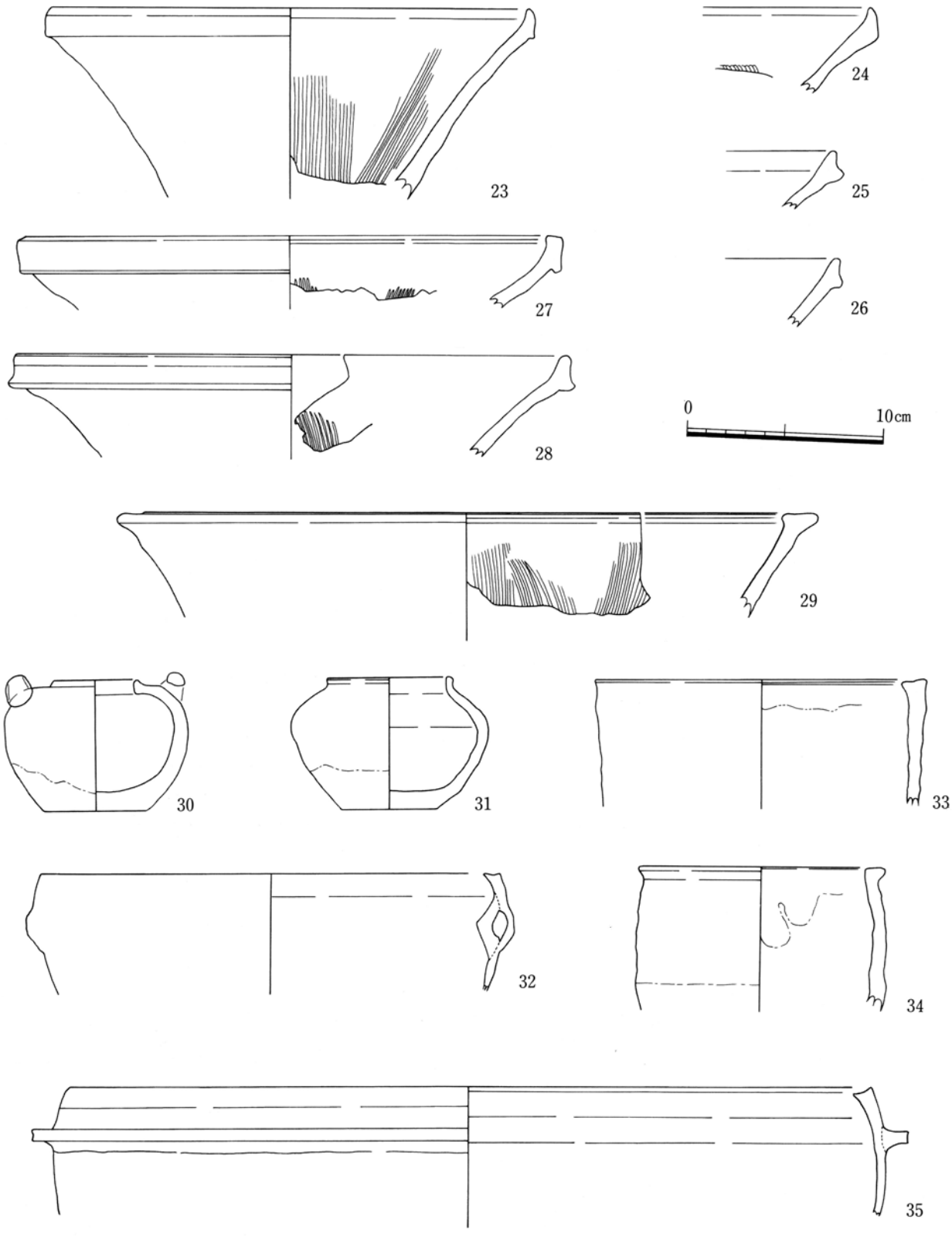
表２　ＳＤ001出土陶磁器類集計表



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
1	111	鉄釉・化粧掛け		瀬	
2	111	鉄釉・化粧掛け		瀬	
3	111	鉄釉・化粧掛け		瀬	
4	112	鉄釉		瀬	
5	112		印刻蓮弁・青磁	中	
6	115		○花菱文	中	
7	114	灰釉	高台墨痕あり	瀬	54
8	135	緑釉　灰釉		瀬	
9	133	鉄釉		瀬	
10	410	手づくね		その他	
11	131	高台内釉はぎ・灰釉		瀬	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
12	131	灰釉		瀬	
13	131	見込釉はぎ・灰釉		瀬	
14	138	凸線タイプ		瀬	
15	138	凸線タイプ		瀬	
16	411			その他	
17	131	鉄釉	底部糸切り痕	瀬	
18	132	灰釉	見込印花	瀬	
19	132	見込釉はぎ・鉄釉		瀬	
20	132	見込釉はぎ・灰釉		瀬	
21	132	見込釉はぎ・鉄釉		瀬	
22	222	鉄釉		瀬	

図34　ＳＤ001出土陶磁器類実測図(1)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
23	232	鉄釉		瀬	
24	238	鉄釉		瀬	
25	232	鉄釉		瀬	
26	232	鉄釉		瀬	
27	239	鉄釉		瀬	
28	232	鉄釉		瀬	
29	231	鉄釉		瀬	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
30	323	鉄釉		瀬	
31	323	鉄釉・化粧掛け		瀬	
32	211			その他	
33	351	体部外面鉄釉・内面サビ釉		瀬	
34	351	口唇部釉はぎ・鉄釉	口唇部重ね焼痕	瀬	
35	212			その他	

図35　ＳＤ001出土陶磁器類実測図(2)

ＳＤ401：本遺構の時期は16世紀第3四半期に比定される。

出土遺物は、口縁部破片数で4040点、総個体数で399.50個体にのぼる。この遺構の特徴は、灯火具が304.17個体、76.1％を占めており、その内の302.08個体、99.3％が土器皿に拠っている点である（ロクロ皿と手捏皿の比率は１：2.17)。これに対し供膳具54.08個体、13.5％、調理具30.25個体、7.6％、貯蔵具9.08個体、2.3％といずれも少量の出土に留まっている。但し、この３者の用途内組成については、供膳具の椀と皿の比率が１：2.17であること、調理具の71.3％を鍋･羽釜が占めていること、貯蔵具は壺が34.9％を占めることで理解されるように、戦国時代の様相と一致している。

その他の用途を持つ遺物については、いずれもその出土は少量で、後述する江戸時代の遺物の組成とは大きく様相を異にしており、戦国時代との生活様式の相違点として理解しうる可能性を秘めている。

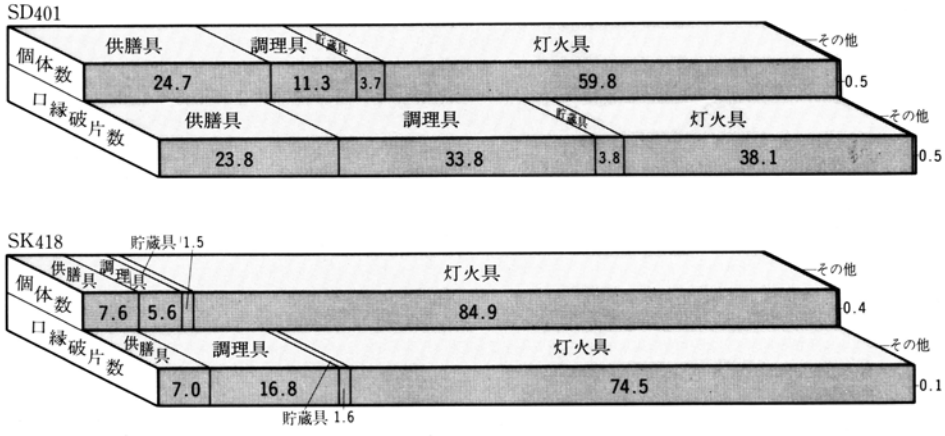
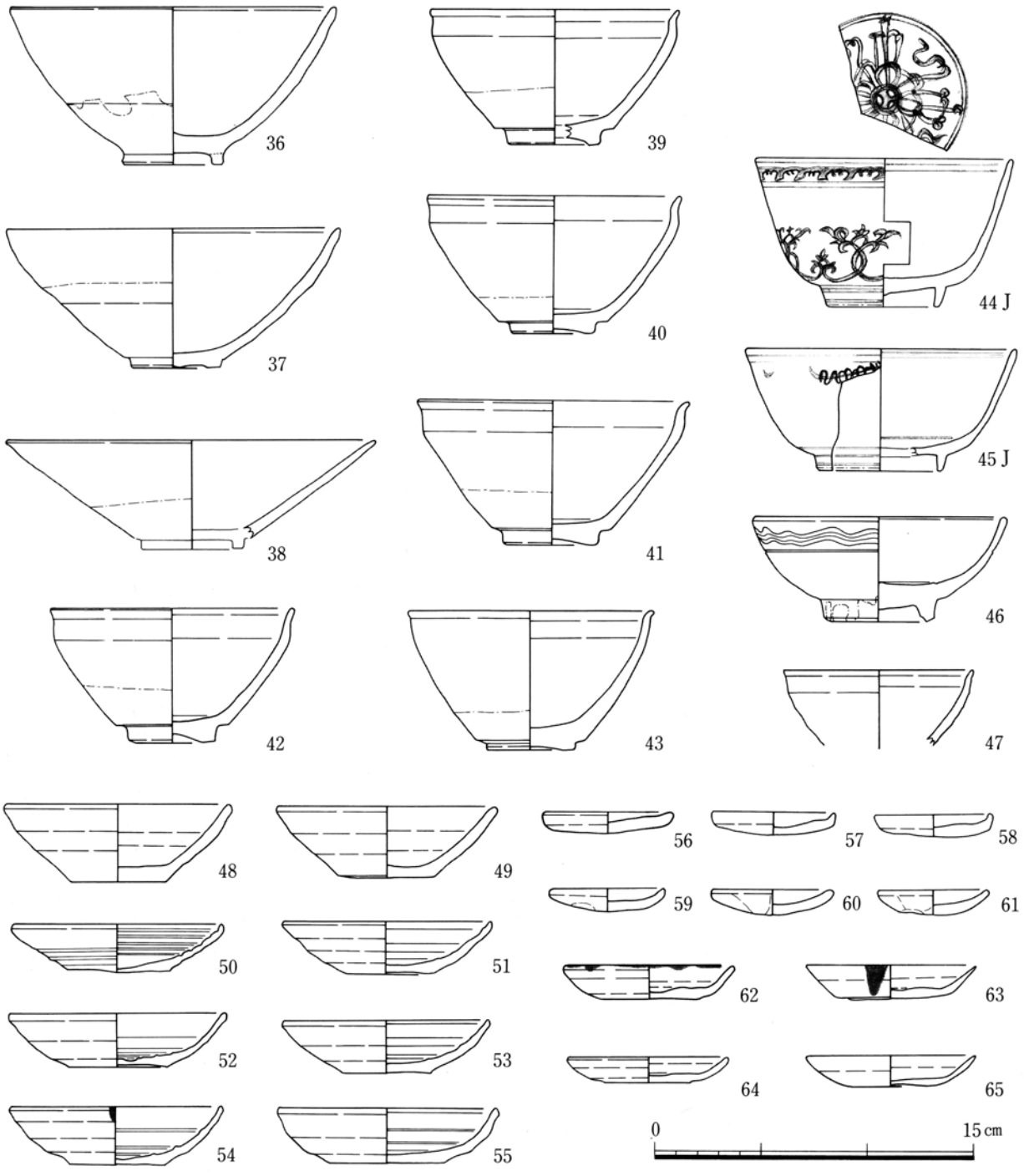


図36　ＳＤ401・ＳＫ418出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	617	32	0	649	1	523	38	0	562
	椀	0	188	12		200	1	155	16		172
	小椀		4			4		2			2
	皿		423	19		442		356	19		375
	鉢		2	1		3		10	3		13
調理具		259	104	0	0	363	673	287	0	0	960
	内耳鍋	129				129	427				427
	羽釜	115				115	213				213
	茶釜等	15				15	33				33
	鉢		7			7		11			11
	擂鉢		97			97		276			276
貯蔵具		0	109	0	0	109	0	101	0	0	101
	瓶		8			8		6			6
	壷		38			38		23			23
	甕		13			13		31			31
	鉢		50			50		41			41
灯火具		3625	25	0	0	3650	2395	10	0	0	2405
	ロクロ皿	1145	25			1170	1571	10			1581
	手捏皿	2480				2480	824				824
火具						0					0
神仏具			2			2		3			3
調度具			18			18		7			7
蓋			3			3		2			2
合計		3884	878	32	0	4794	3069	933	38	0	4040

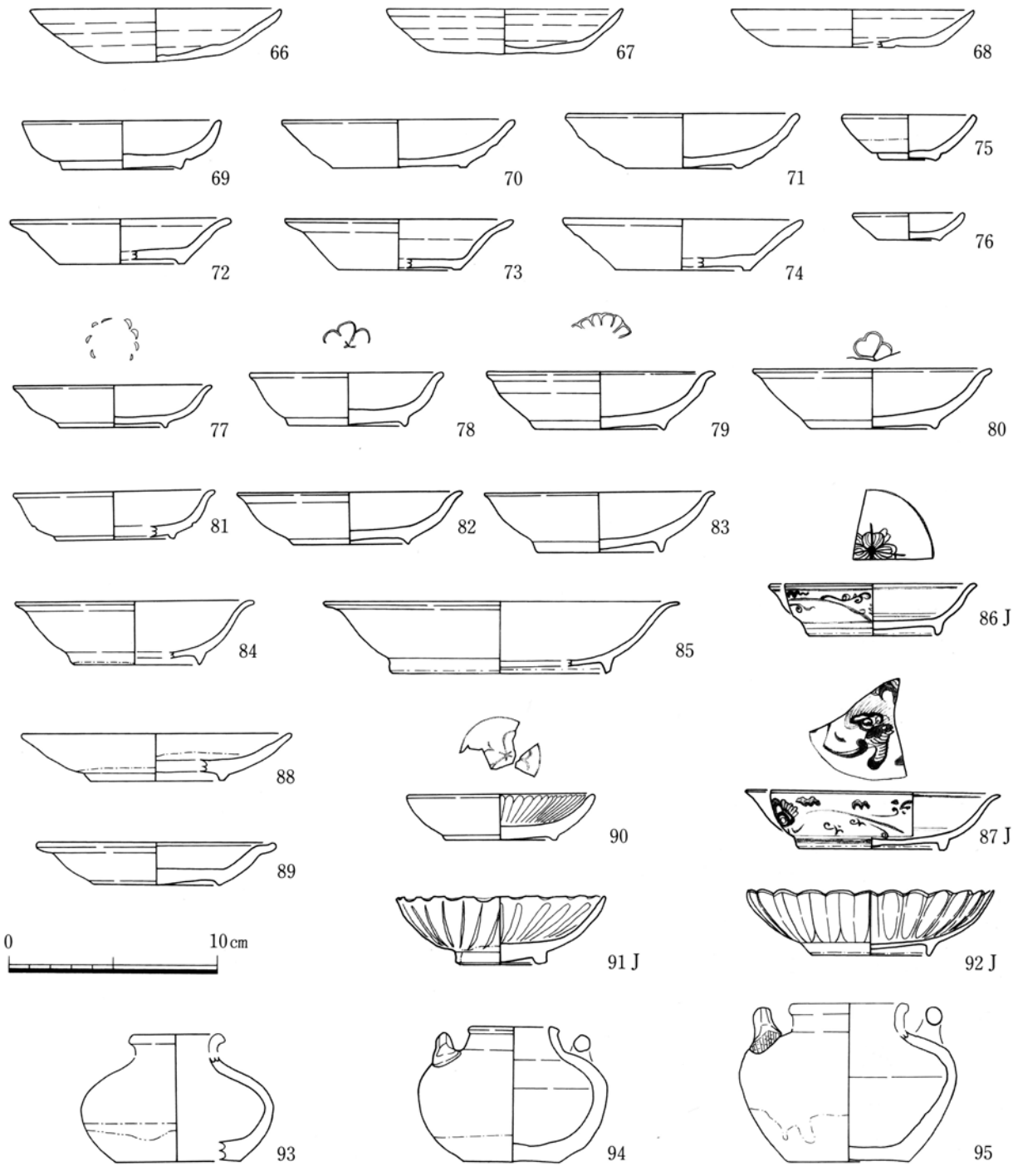
表３　ＳＤ401（ＳＫ418）出土陶磁器類集計表



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
36	114	灰釉	重ね焼痕(トチン３ケ所)あり	瀬	
37	114	灰釉		瀬	54
38	114	鉄釉		瀬	
39	111			瀬	54
40	111			瀬	
41	111			瀬	54
42	111			瀬	
43	111			瀬	54
44	112	高台畳付無釉	手描・染付け	中	
45	112	高台畳付無釉	手描・染付け	中	
46	112	高台無釉	波文	中	
47	111			瀬	
48	411	底部回転糸切り		その他	54
49	411	底郡回転糸切り		その他	
50	1-3-8	凹線タイプ・底部糸切り		瀬	54

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
51	138	凸線タイプ・底部糸切り		瀬	54
52	138	凸線タイプ底部糸切り		瀬	
53	138	凸線タイプ・底部糸切り		瀬	54
54	138	凸線タイプ・底部糸切り	油煙付着	瀬	54
55	138	凸線タイプ・底部糸切り		瀬	
56	410	手づくね		その他	
57	410	手づくね		その他	
58	410	手づくね		その他	
59	410	手づくね		その他	
60	410	手づくね		その他	
61	410	手づくね		その他	
62	411		油煙付着	その他	
63	411		油煙付着	その他	
64	410	底部糸切り		その他	
65	411		油煙付着	その他	

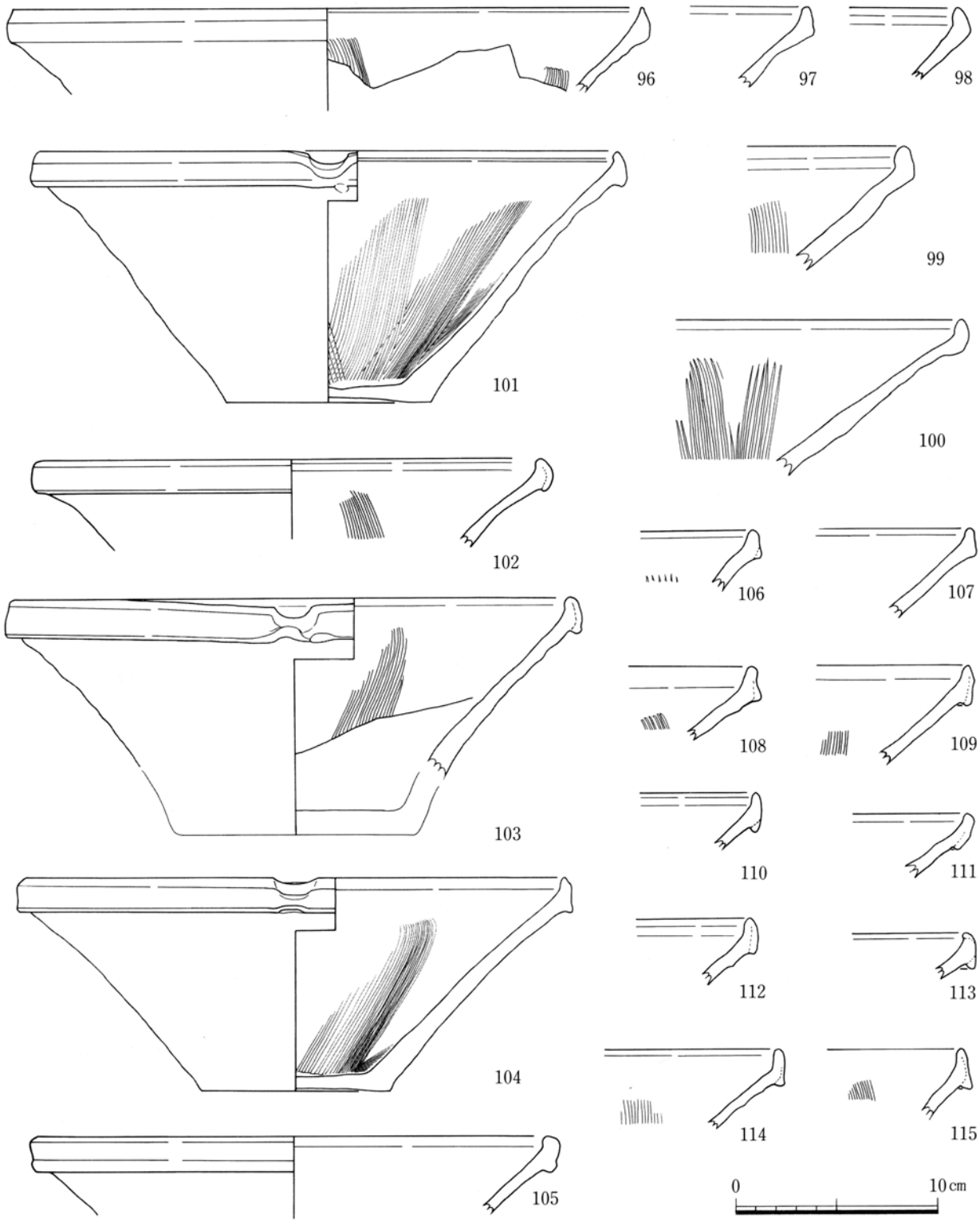
図37　ＳＤ401出土陶磁器類実測図(1)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
66	411		油煙付着	その他	
67	411	底部回転糸切り		その他	
68	411		油煙付着	その他	
69	131	灰釉	高台内輪トチン痕	瀬	
70	133	鉄釉	見込トチン痕３ケ所・高台内輪トチン痕	瀬	
71	133	鉄釉	見込トチン痕３ケ所・高台内輪トチン痕	瀬	54
72	132	鉄釉	見込トチン痕・高台内輪トチン痕	瀬	
73	132	鉄釉	見込トチン痕３ケ所・高台内輪トチン痕	瀬	
74	133	鉄釉	見込・高台内輪トチン痕	瀬	
75	122	鉄釉化粧掛け		瀬	
76	131	ゴケ底・　灰釉		瀬	
77	132	灰釉	高台内輪トチン痕・見込印花	瀬	
78	132	灰釉	見込印花	瀬	
79	132	灰釉	見込印花	瀬	
80	132	灰釉	見込印花	瀬	54

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
81	132	灰釉		瀬	
82	132	灰釉	高台内トチン痕	瀬	
83	132	灰釉	高台内トチン痕	瀬	
84	132	高台畳付無釉	白磁	肥	
85	132		白磁	中	
86	132	青花	唐草文・カツマ文(？)	中	
87	132	青花	唐草文	中	
88	131	内禿げ	白磁	肥	
89	134	内禿げ・ゴケ底・灰釉	底部トチン痕	瀬	
90	135	灰釉	見込印花	瀬	
91	135		青磁・印刻	中	
92	135	型打ち	白磁	中	
93	323	鉄釉		瀬	
94	323	鉄釉		瀬	
95	323	鉄釉化粧掛		瀬	

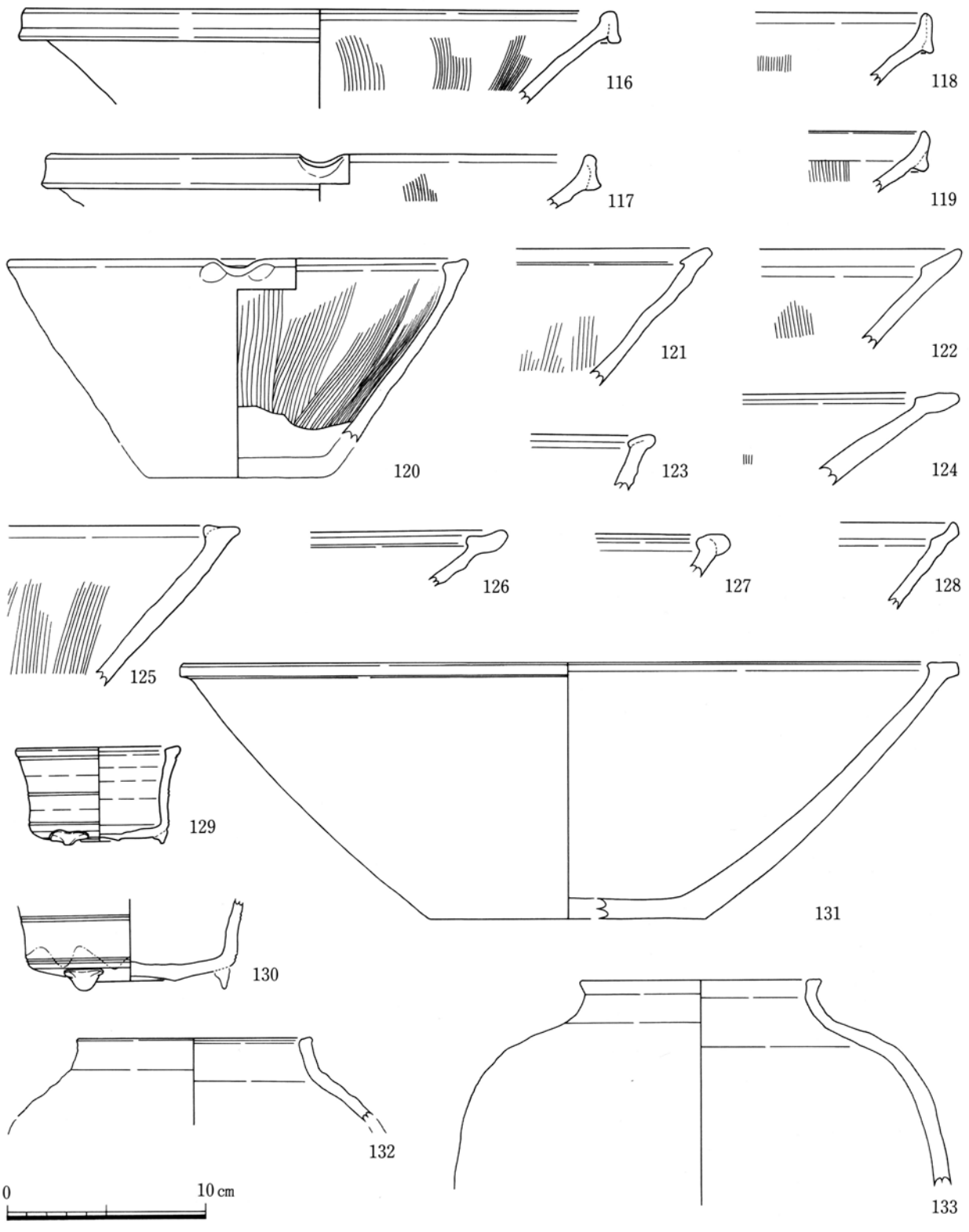
図38　ＳＤ401出土陶磁器類実測図(2)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
96	232	鉄釉		瀬	
97	232	鉄釉		瀬	
98	232	鉄釉		瀬	
99	238	鉄釉		瀬	
100	238	鉄釉		瀬	
101	232	鉄釉		瀬	
102	232	鉄釉		瀬	
103	232	鉄釉		瀬	
104	239	鉄釉		瀬	54
105	232	鉄釉		瀬	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
106	232	鉄釉		瀬	
107	232	鉄釉		瀬	
108	232	鉄釉		瀬	
109	232	鉄釉		瀬	
110	232	鉄釉		瀬	
111	232	鉄釉		瀬	
112	232	鉄釉		瀬	
113	232	鉄釉		瀬	
114	232	鉄釉		瀬	
115	232	鉄釉		瀬	

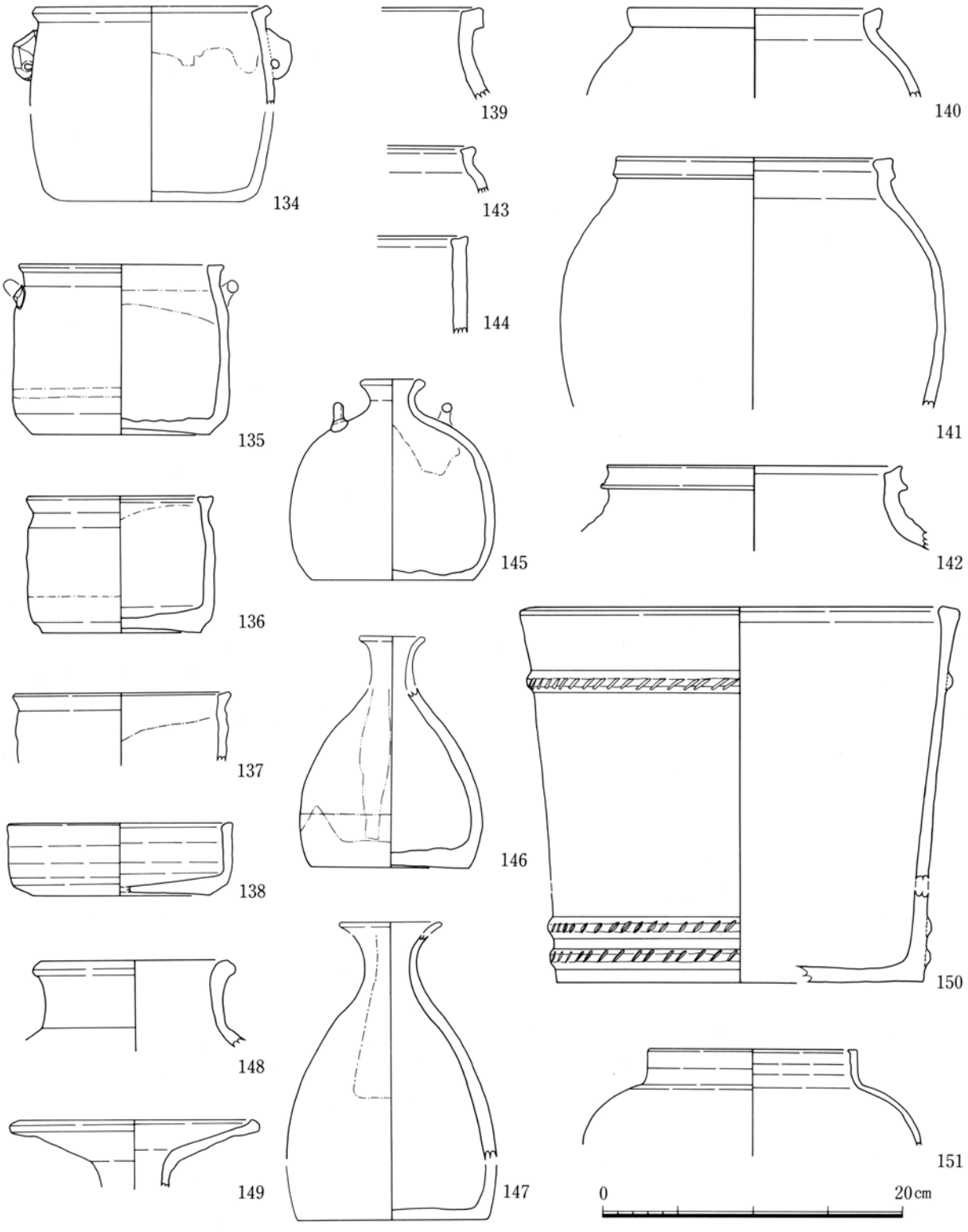
図39　ＳＤ401出土陶磁器類実測図(3)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
116	232	鉄釉		瀬	
117	239	鉄釉		瀬	
118	235	鉄釉		瀬	
119	232	鉄釉		瀬	
120	231	鉄釉		瀬	
121	231	鉄釉		瀬	
122	231	鉄釉		瀬	
123	231	鉄釉		瀬	
124	231	鉄釉		瀬	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
125	231	鉄釉		瀬	
126	231	鉄釉		瀬	
127	235	鉄釉		瀬	
128	231	鉄釉		瀬	
129	721	鉄釉	３足・重ね焼痕	瀬	
130	721	鉄釉	３足	瀬	
131	222	鉄釉		瀬	
132	210	鉄釉		瀬	
133	322	鉄釉		瀬	

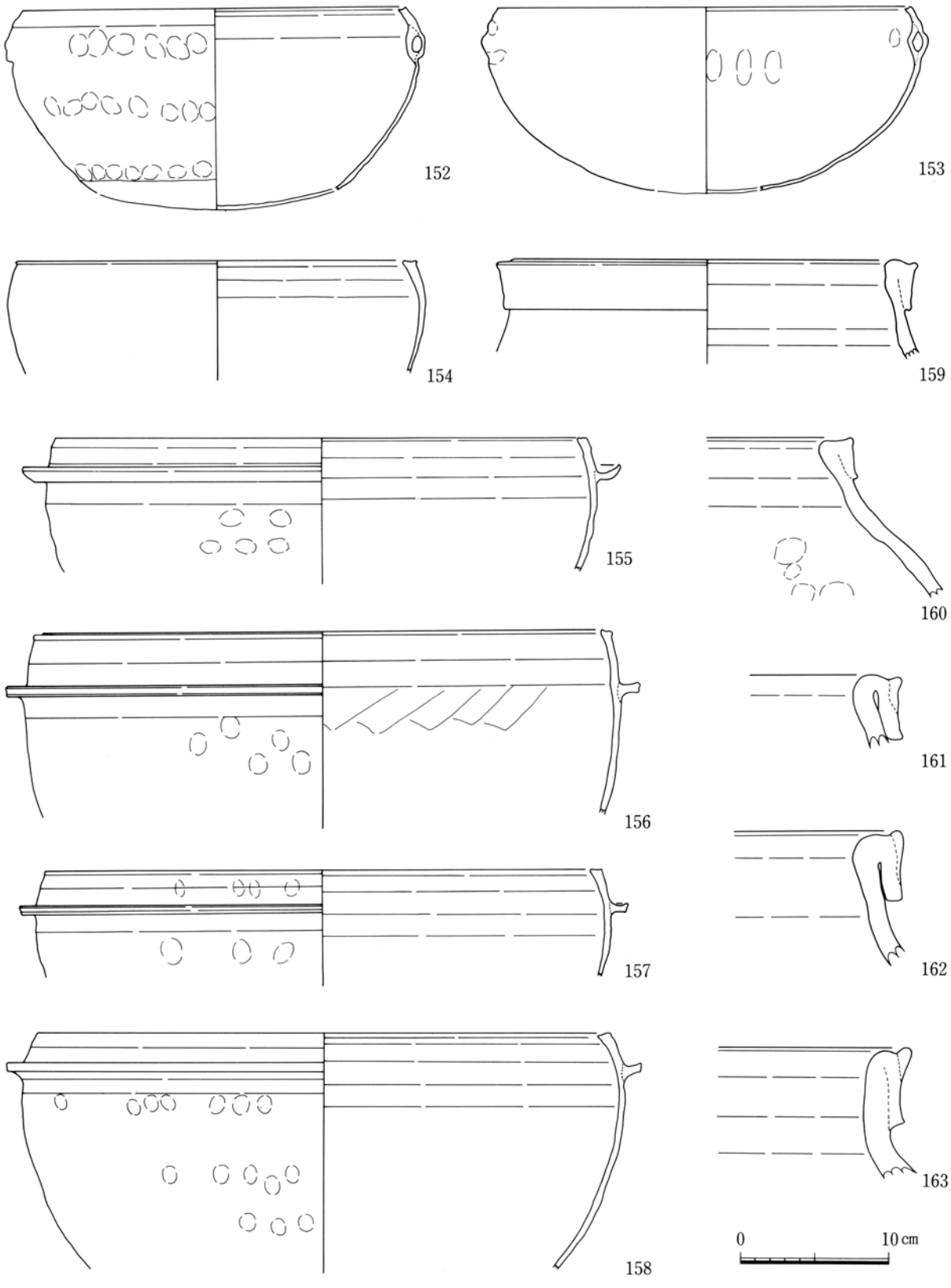
図40　ＳＤ401出土陶磁器類実測図(4)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
134	351	鉄釉		瀬	
135	351	鉄釉・内外面下胴部化粧掛	底部油煙付着	瀬	54
136	351	鉄釉	口唇部重ね焼痕	瀬	54
137	351	口唇部釉はぎ・鉄釉		瀬	
138	351		無釉	瀬	54
139	321	鉄釉		瀬	
140	321	鉄釉		瀬	
141	321	鉄釉		瀬	54
142	321	鉄釉		瀬	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
143	341	鉄釉	両耳痕	瀬	
144	341	鉄釉		瀬	
145	311	鉄釉		瀬	
146	311	鉄釉・化粧掛・灰釉流し		瀬	54
147	311	鉄釉・化粧掛・灰釉流し掛け		瀬	
148	320	鉄釉		瀬	
149	620	鉄釉		瀬	
150	700	鉄釉		瀬	
151	213		内外面煤付着	その他	

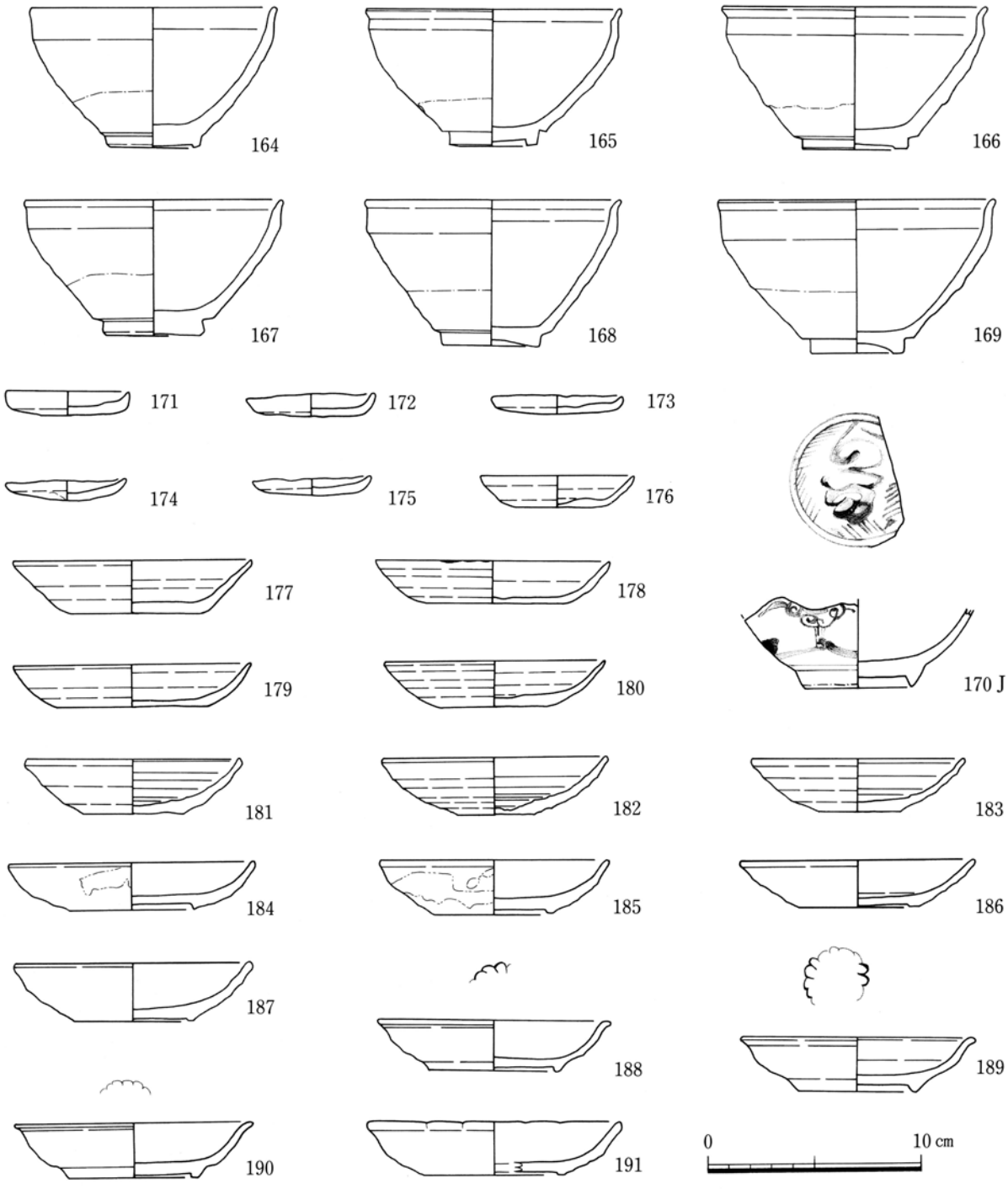
図41　ＳＤ401出土陶磁器類実測図(5)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
152	211		外面煤付着	その他	
153	211		外面・内面底部煤付着	その他	
154	211		外面煤付着	その他	
155	212		外面体部下半煤付着	その他	
156	212		外面体部下半煤付着	その他	
157	212		鍔下側煤付着	その他	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
158	212		体部下半煤付着	その他	
159	331			常	
160	331			常	
161	331			常	
162	331			常	
163	331			常	

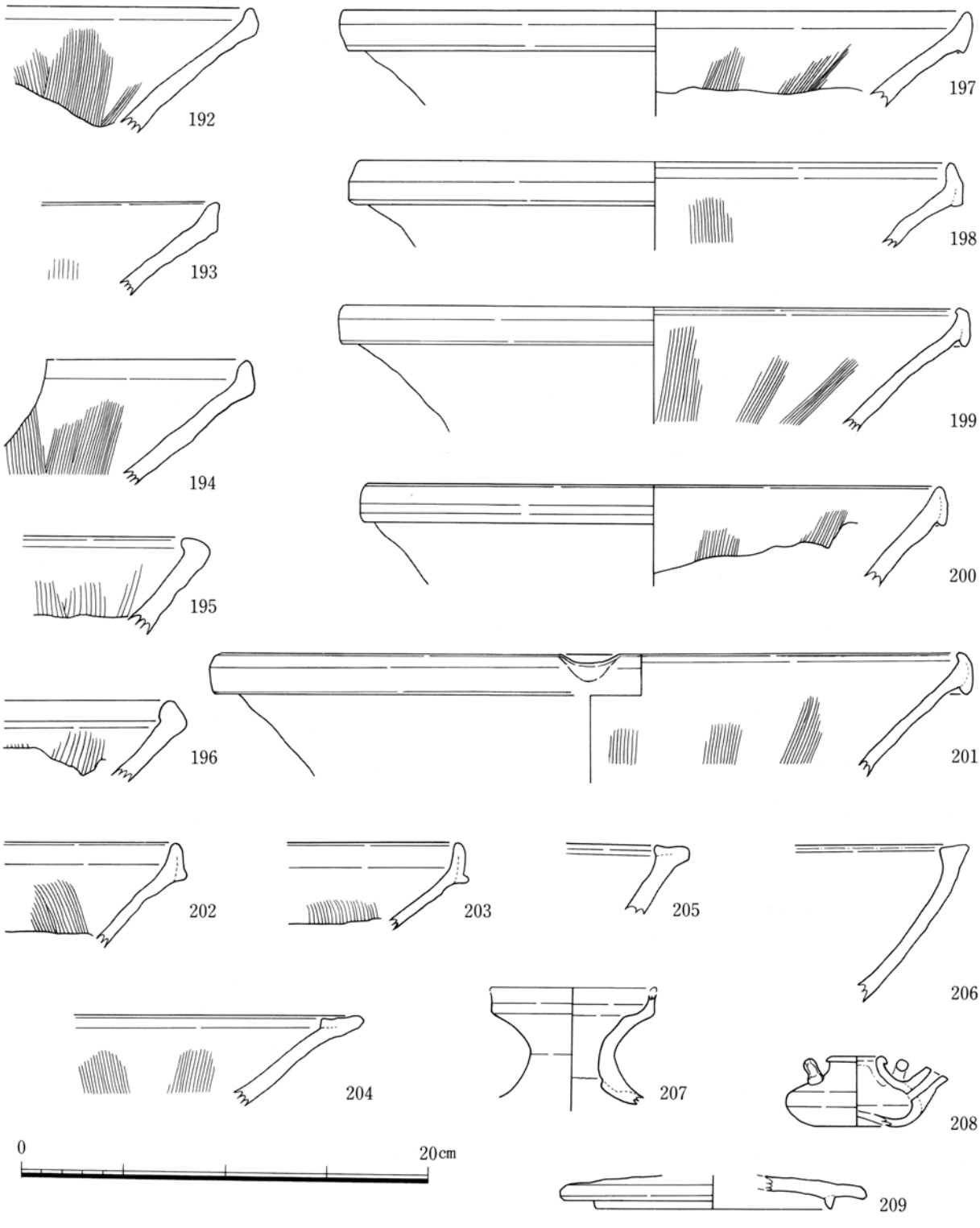
図42　ＳＤ401出土陶磁器類実測図(6)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
164	111	鉄釉		瀬	54
165	111	鉄釉		瀬	
166	111	鉄釉		瀬	54
167	111	鉄釉・化粧掛		瀬	
168	111	鉄釉・化粧掛		瀬	54
169	111	鉄釉		瀬	54
170	115	青花		中	
171	410	手づくね		その他	
172	410	手づくね		その他	
173	410	手づくね		その他	
174	410	手づくね		その他	
175	410	手づくね		その他	
176	411		底部糸切り痕	その他	
177	411		底部糸切り痕	その他	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
178	411		口縁部油煙付着	その他	
179	411			その他	
180	411			その他	
181	138	凸線タイプ		瀬	
182	138	凸線タイプ		瀬	
183	138	凸線タイプ		瀬	
184	131	鉄釉・灰釉掛け流し	見込叉トチン・高台内輪トチン痕	瀬	
185	131	鉄釉・灰釉掛け流し	見込叉トチン・高台内輪トチン痕	瀬	
186	131	鉄釉	見込叉トチン痕・高台内釉ふきとり	瀬	
187	131	鉄釉	見込叉トチン痕	瀬	
188	132	灰釉	見込印花・高台内輪トチン痕	瀬	
189	132	灰釉	見込印花	瀬	
190	132	灰釉	見込印花・高台内輪トチン痕	瀬	
191	131	鉄釉	稜花(か)	瀬	

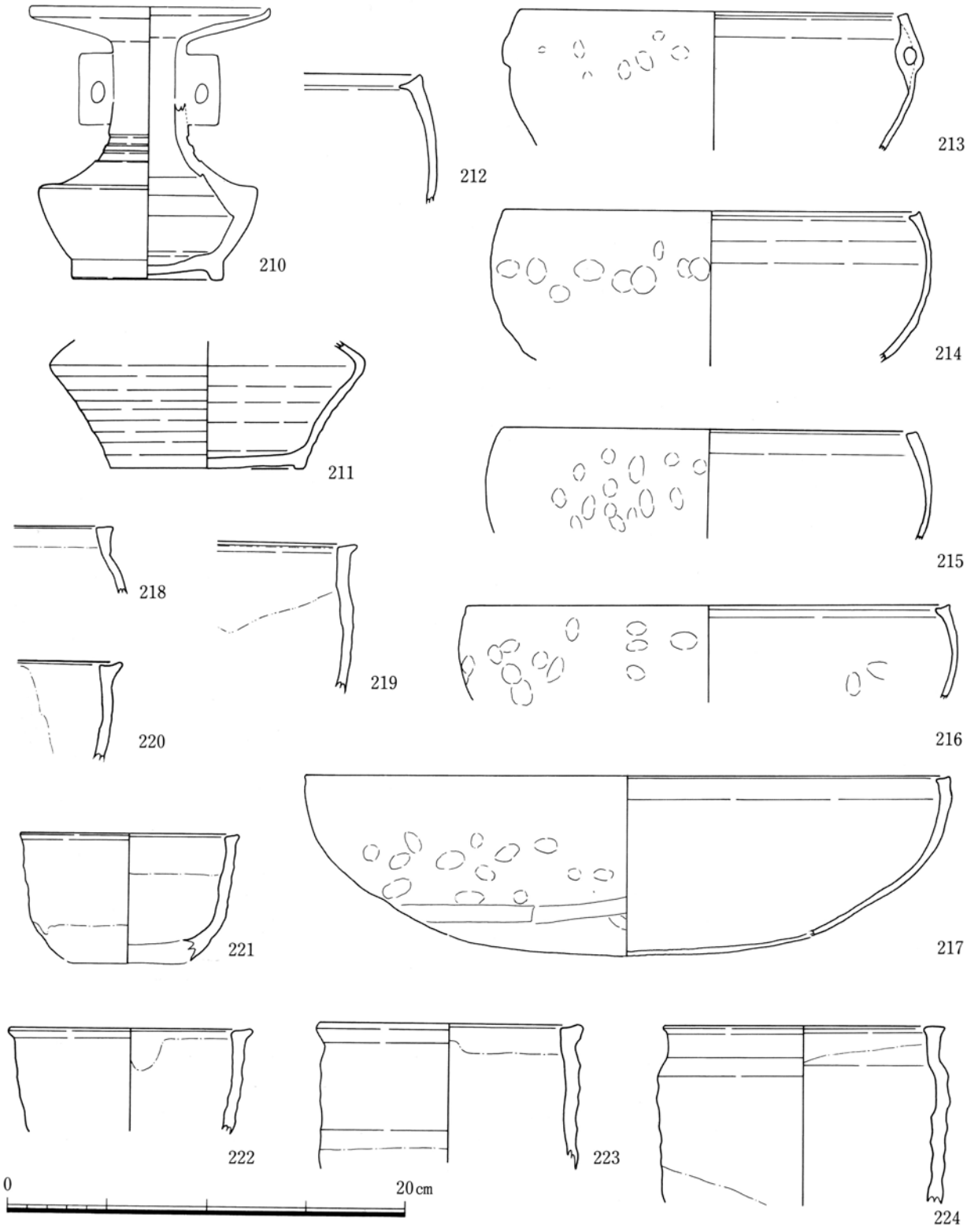
図43　ＳＫ418出土陶磁器類実測図(1)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
192	239	鉄釉		瀬	
193	239	鉄釉		瀬	
194	239	鉄釉		瀬	
195	239	鉄釉		瀬	
196	239	鉄釉		瀬	
197	232	鉄釉		瀬	
198	232	鉄釉		瀬	
199	232	鉄釉		瀬	
200	232	鉄釉		瀬	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
201	232	鉄釉		瀬	
202	232	鉄釉		瀬	
203	232	鉄釉		瀬	
204	231	鉄釉		瀬	
205	231	鉄釉		瀬	
206	222	口唇部釉はぎ・鉄釉		瀬	
207	311	灰釉			
208	323	鉄釉			54
209	700	鉄釉			

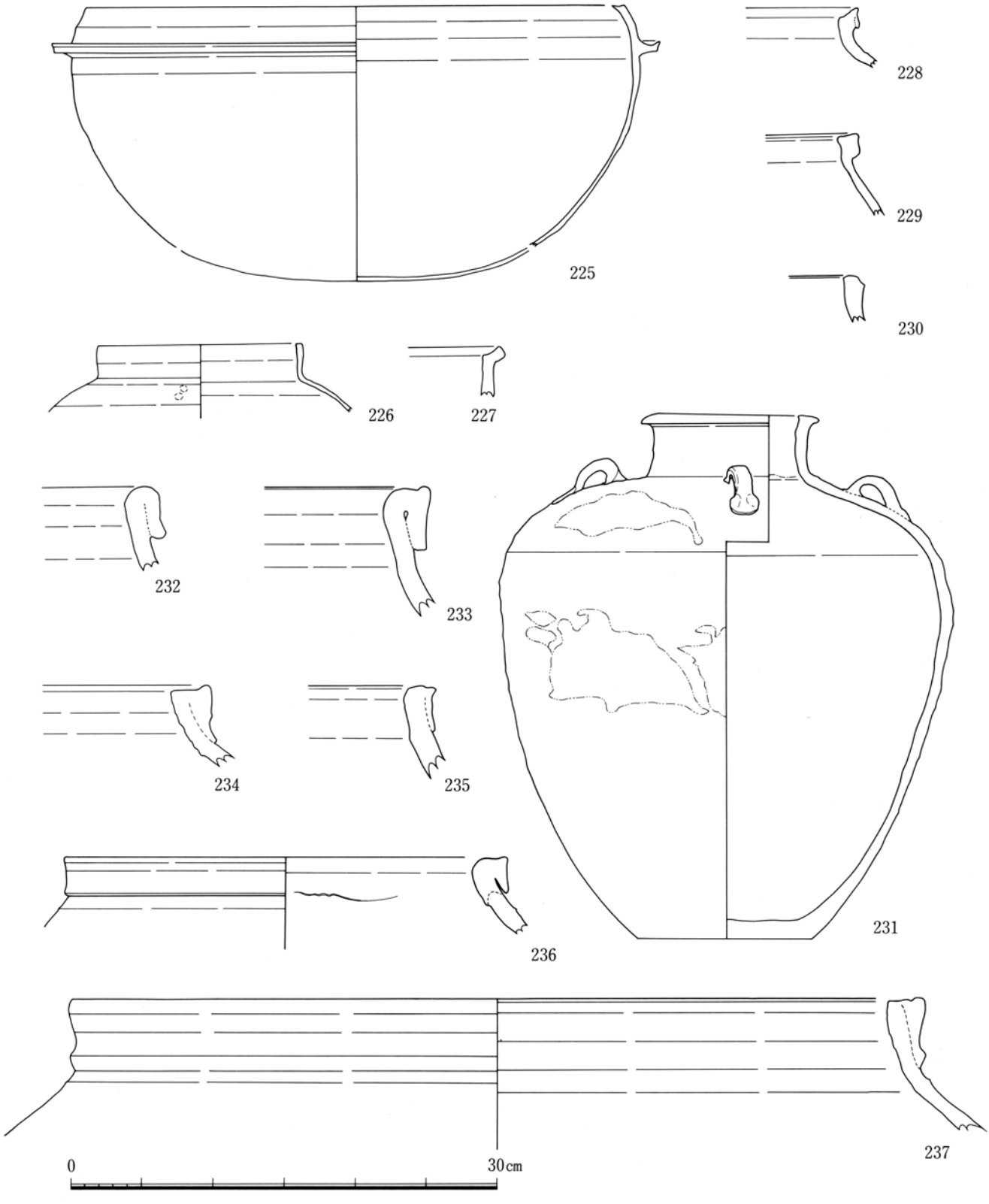
図44　ＳＫ418出土陶磁器類実測図(2)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
210	620	鉄釉・化粧掛		瀬	54
211	310		無釉	瀬	
212	211			その他	
213	211			その他	
214	211			その他	
215	211			その他	
216	211			その他	
217	211			その他	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
218	341	口唇部釉はぎ・鉄釉		瀬	
219	341	口唇部釉はぎ・鉄釉		瀬	
220	341	鉄釉		瀬	
221	341	口唇部釉はぎ・鉄釉		瀬	
222	341	鉄釉		瀬	
223	341	口唇部釉はぎ・鉄釉		瀬	
224	341	口唇部釉はぎ・鉄釉		瀬	

図45　ＳＫ418出土陶磁器類実測図(3)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
225	212			その他	
226	213			その他	
227	341	鉄釉		瀬	
228	321	鉄釉		瀬	
229	321	鉄釉		瀬	
230	320	無釉		常	
231	322	鉄釉		瀬	54

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
232	332			常	
233	331			常	
234	331			常	
235	331			常	
236	331			常	
237	331			常	

図46　ＳＫ418出土陶磁器類実測図(4)

ＳＤ006：本遺構の時期は16世紀中葉に位置づけられる。

この遺構からの出土遺物は、口縁部破片数で553点、総個体数で25.08個体である。用途別に組成を見た場合、供膳具と調理具が共に10.25個体、40.9％を占めている点が本遺構の特徴である。ここで調理具が比率を増加させている原因は、鍋・羽釜が全出土遺物の31.8％を占めている点に求めることができる。これに対し、灯火具は2.17個体、8.6％と比率が減少しており、これにより材質面において、土器製品の占める割合が39.9％と鍋・羽釜の大量の出土にも係わらず、低下する原因となっている。

また、この遺構でも火具・蓋の出土は見られず、神仏具・調度具も極少量の出土に留まっており、先に見た様に、基本的生活に係わる遺物が組成の大半を占め、副次的生活に関する遺物は三の丸の本調査区では消費されていないと思われる。

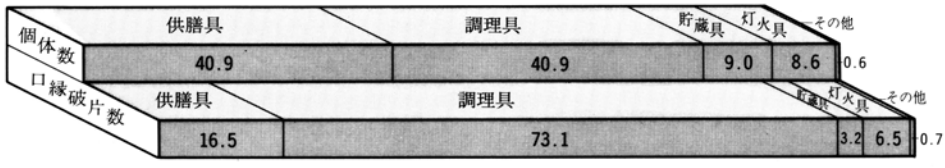
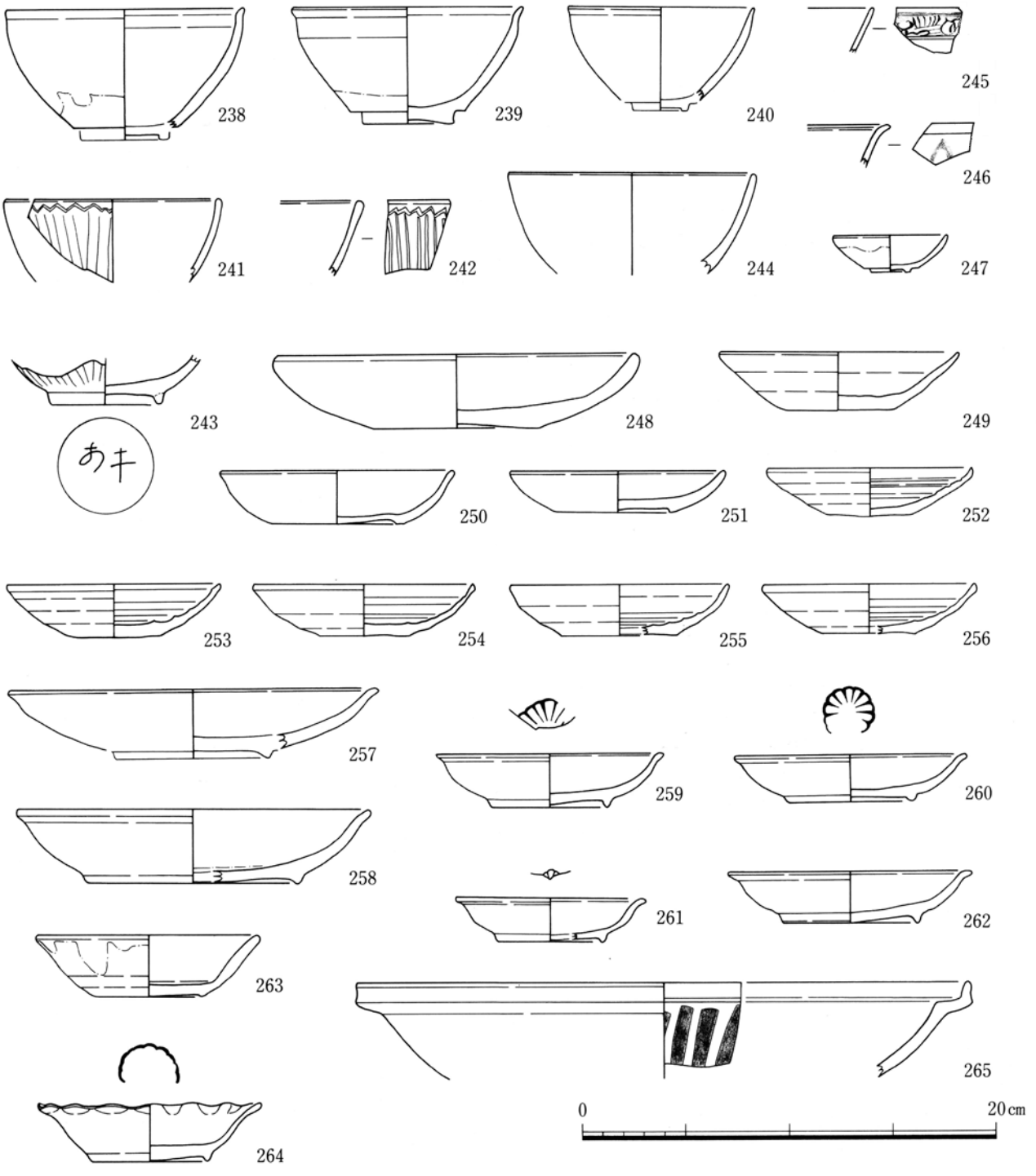


図47　ＳＤ006出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	117	6	0	123	0	83	8	0	91
	椀		37	4		41		26	4		30
	小椀		6			6		2			2
	皿		71	1		72		52	2		54
	鉢		3	1		4		3	2		5
調理具		94	29	0	0	123	360	44	0	0	404
	内耳鍋	45	2			47	212	1			213
	羽釜	36				36	128				128
	茶釜等	13				13	20				20
	鉢		3			3		4			4
	擂鉢		24			24		39			39
貯蔵具		0	27	0	0	27	0	18	0	0	18
	瓶		3			3		1			1
	壷		8			8		3			3
	甕		2			2		6			6
	鉢		14			14		8			8
灯火具		26	0	0	0	26	36	0	0	0	36
	ロクロ皿	18				18	32				32
	手捏皿	8				8	4				4
火具					0	0				1	1
神仏具			1			1		2			2
調度具			1			1		1			1
蓋						0					0
合計		120	175	6	0	301	396	148	8	1	553

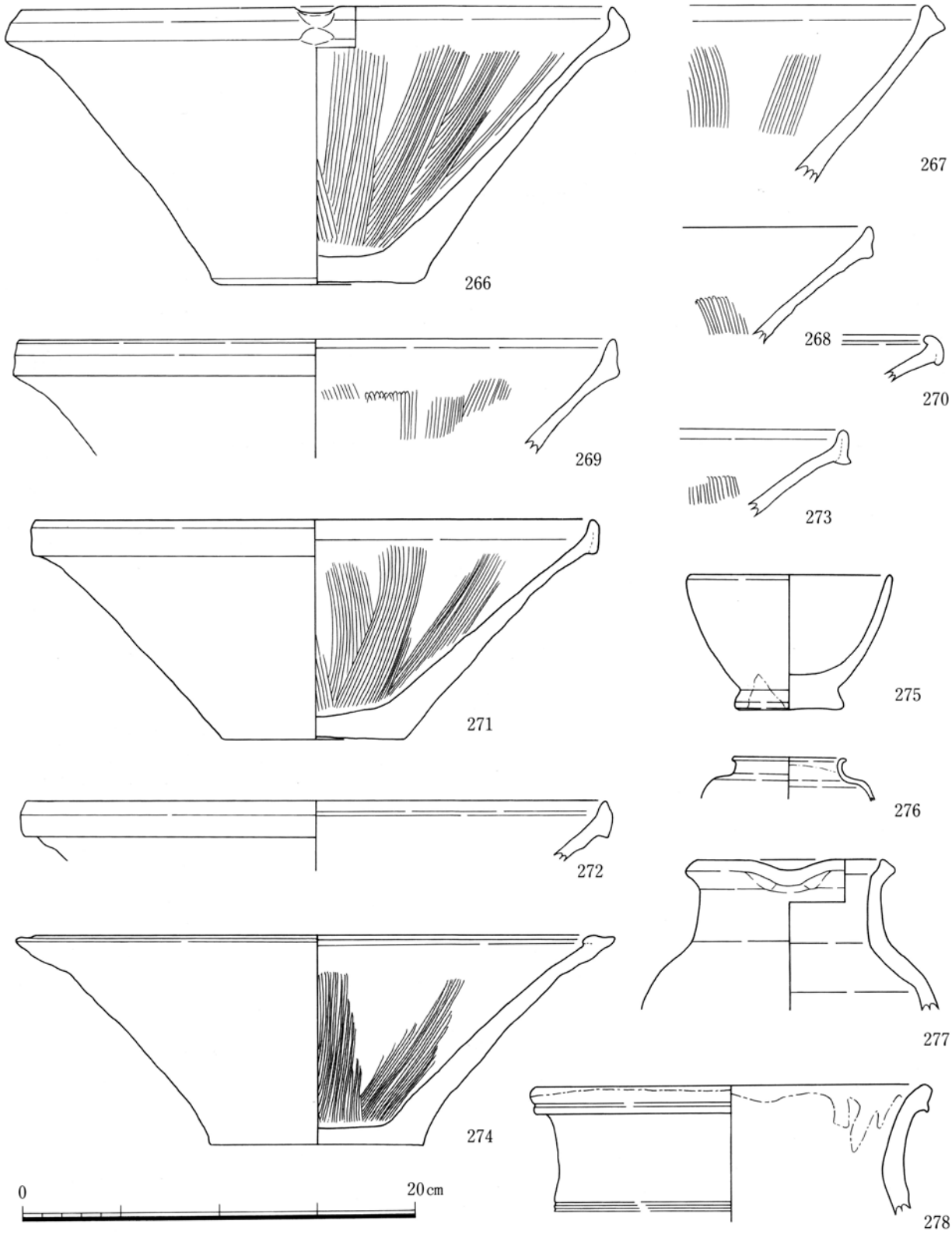
表４　ＳＤ006出土陶磁器類集計表



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
238	111	鉄釉化粧掛		瀬	
239	111	鉄釉		瀬	
240	111	鉄釉		瀬	
241	112	灰釉	体部印花	瀬	
242	112		青磁・蓮弁文	中	
243	112	灰釉	体部印花・焼成後刻書	瀬	
244	112		青磁	中	
245	112	青花		中	
246	116	青花		中	
247	123	鉄釉・化粧掛		瀬	
248	131	鉄釉		瀬	
249	411	底部回転糸切り	口縁部油煙付着	その他	
250	132	鉄釉	見込トチン痕・高台内輪トチン痕	瀬	
251	131	鉄釉	見込トチン痕３ヶ所・高台内輪トチン痕	瀬	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
252	138	凹線タイプ		瀬	
253	138	凸線タイプ		瀬	
254	138	凸線タイプ		瀬	
255	138	凸線タイプ		瀬	
256	138	凸線タイプ		瀬	
257	132	灰釉		瀬	
258	132	見込釉ふきとり・鉄釉	見込重ね焼痕・高台内輪トチン痕	瀬	
259	132	灰釉	見込印花・高台内輪トチン痕	瀬	
260	132	灰釉	見込印花・高台内輪トチン痕	瀬	
261	132	灰釉	見込印花	瀬	
262	132	灰釉		瀬	
263	133	内面・外面口縁部鉄釉	見込トチン痕	瀬	
264	137	灰釉	見込印花・高台内輪トチン痕	瀬	
265	143		青磁	中	

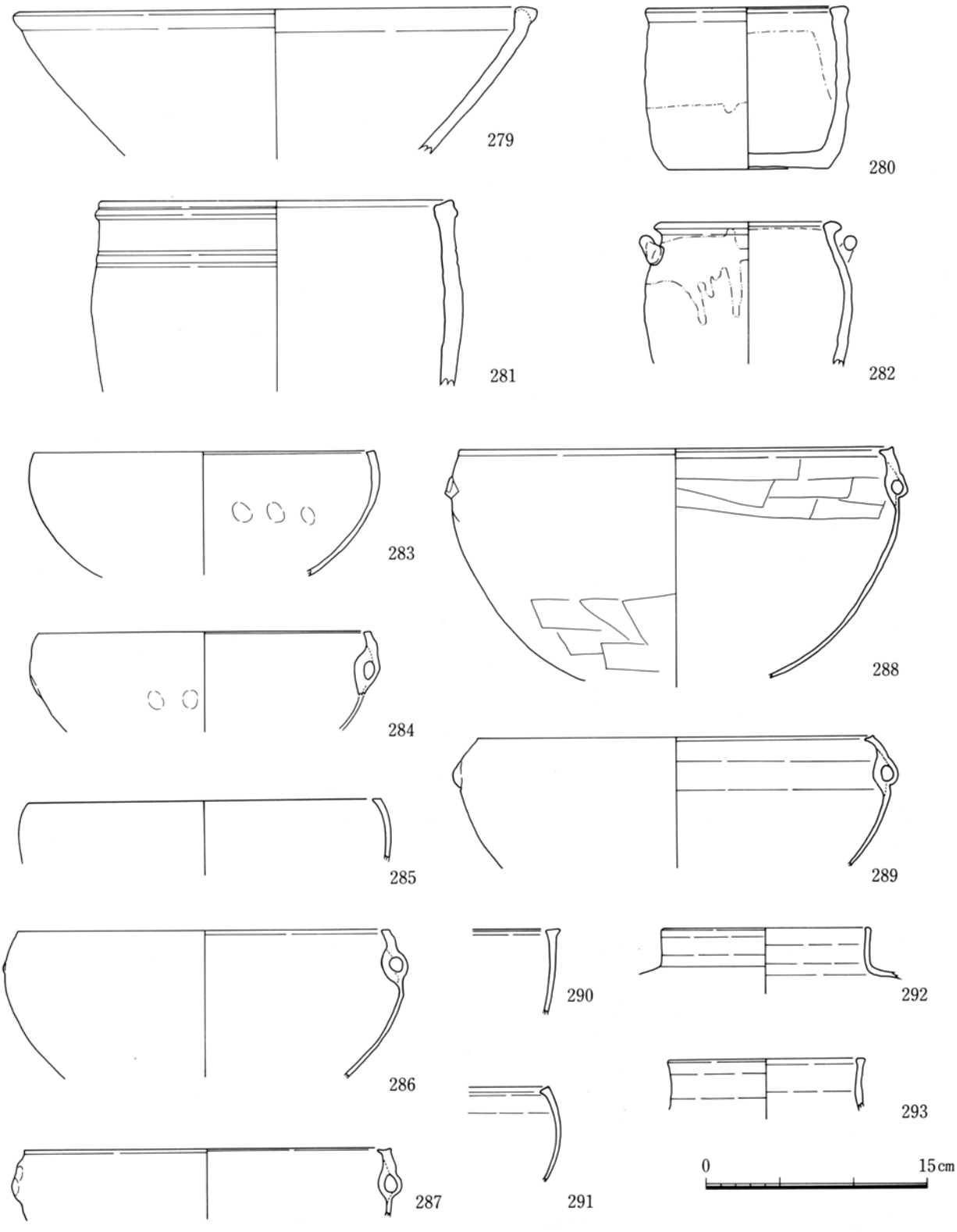
図48　ＳＤ006出土陶磁器類実測図(1)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
266	234	鉄釉		瀬	
267	232	鉄釉		瀬	
268	239	鉄釉		瀬	
269	239	鉄釉		瀬	
270	232	鉄釉		瀬	
271	239	鉄釉		瀬	
272	232	鉄釉		瀬	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
273	232	鉄釉		瀬	
274	231	鉄釉		瀬	
275	610	鉄釉		瀬	
276	323	外面鉄釉＋灰釉掛け流し		瀬	
277	320	全面　鉄釉		瀬	
278	320	口縁部釉ふきとり・灰釉		瀬	

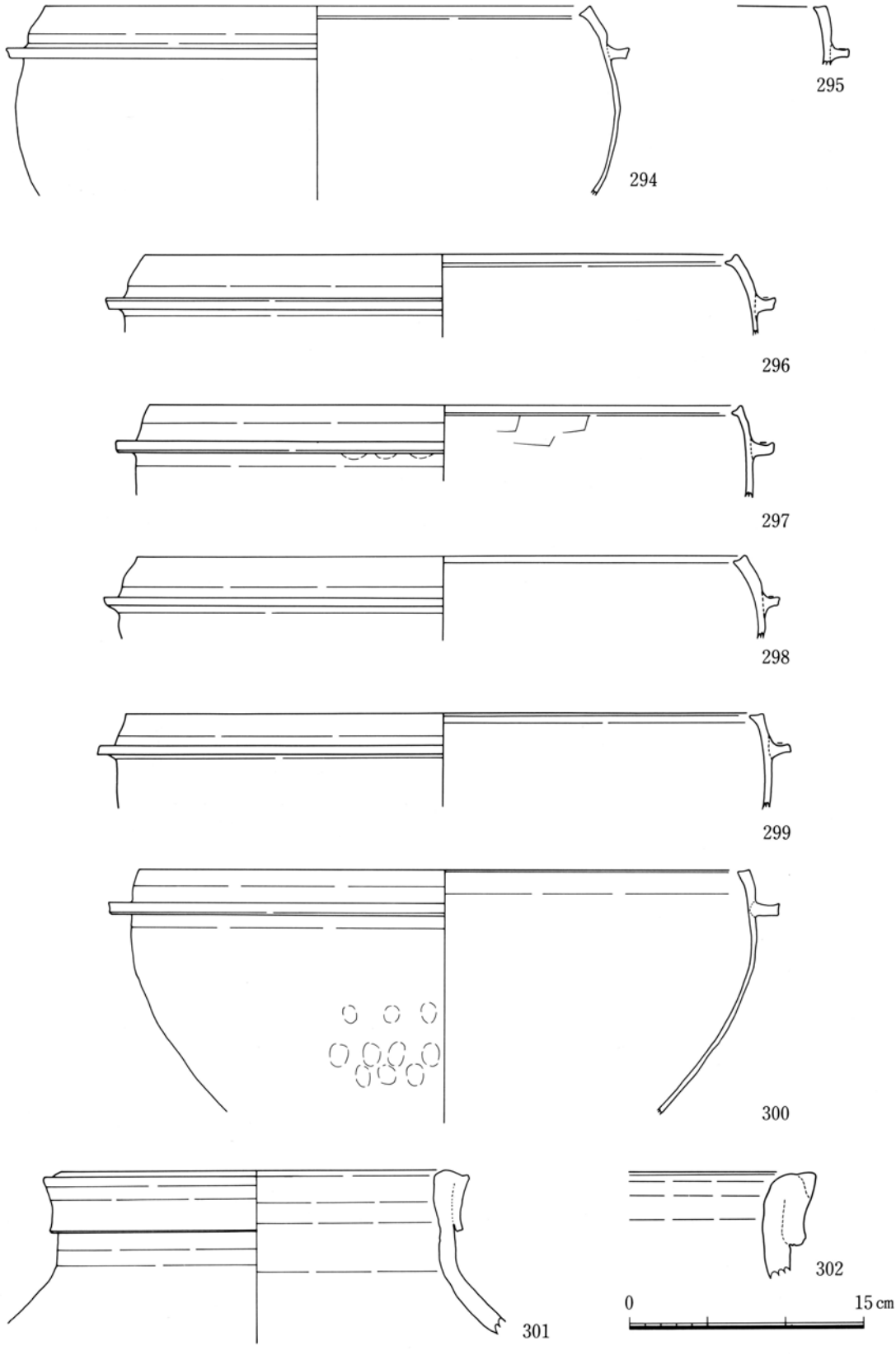
図49　ＳＤ006出土陶磁器類実測図(2)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
279	222			瀬	
280	341	口縁部釉ふきとり、鉄釉		瀬	
281	321	鉄釉		瀬	
282	341	鉄釉	口唇部重ね焼痕	瀬	
283	211			その他	
284	211		外面体部上半煤付着	その他	
285	211			その他	
286	211		外面煤付着	その他	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
287	211			その他	
288	211		外面煤付着	その他	
289	211			その他	
290	211			その他	
291	211			その他	
292	213			その他	
293	213			その他	

図50　ＳＤ006出土陶磁器類実測図(3)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
294	212		外面煤付着	その他	
295	212			その他	
296	212			その他	
297	212			その他	
298	212			その他	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
299	212			その他	
300	212		外面煤付着	その他	
301	331			常	
302	331			常	

図51　ＳＤ006出土陶磁器類実測図(4)

ＳＤ合計：ここでは、図面に掲載しなかった戦国時代に属する溝について、その遺物組成を考えてみたい。該当する遺物は口縁部破片数で317個体、総個体数にして22.33個体である。

用途別では、供膳具5.67個体、25.4%、調理具1.42個体、6.3%、貯蔵具1.25個体、5.6%、灯火具13.83個体、61.9%である。その他の用途の遺物については、蓋が口縁部破片で１点出土したのみである。また、材質面から組成比率を見た場合、土器が62.3%、陶器が35.1%、磁器が2.6%となる。

この組成比率は、戦国遺構出土陶磁器類の用途組成で述べた数値と比較した場合、若干の数値の変動は有るものの、灯火具が最大量であること、これの影響で土器製品が全体の６割を占めていること、磁器製品が最も少量で、その使用は供膳具に限られていることなど、類似した傾向を呈している。このことは器種の面からも、供膳具の椀と皿が1：1.64とやや比率差を縮めながらも皿がより多く消費されている点、貯蔵具は壺のみの出土で、他の器種は見られない点、等からも裏付けられると考える。但し、調理具に関しては、擂鉢が鍋・羽釜に対し同等の比率で出土している点は多少様相を異にする。

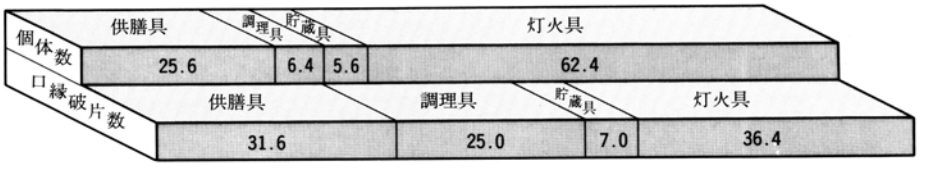
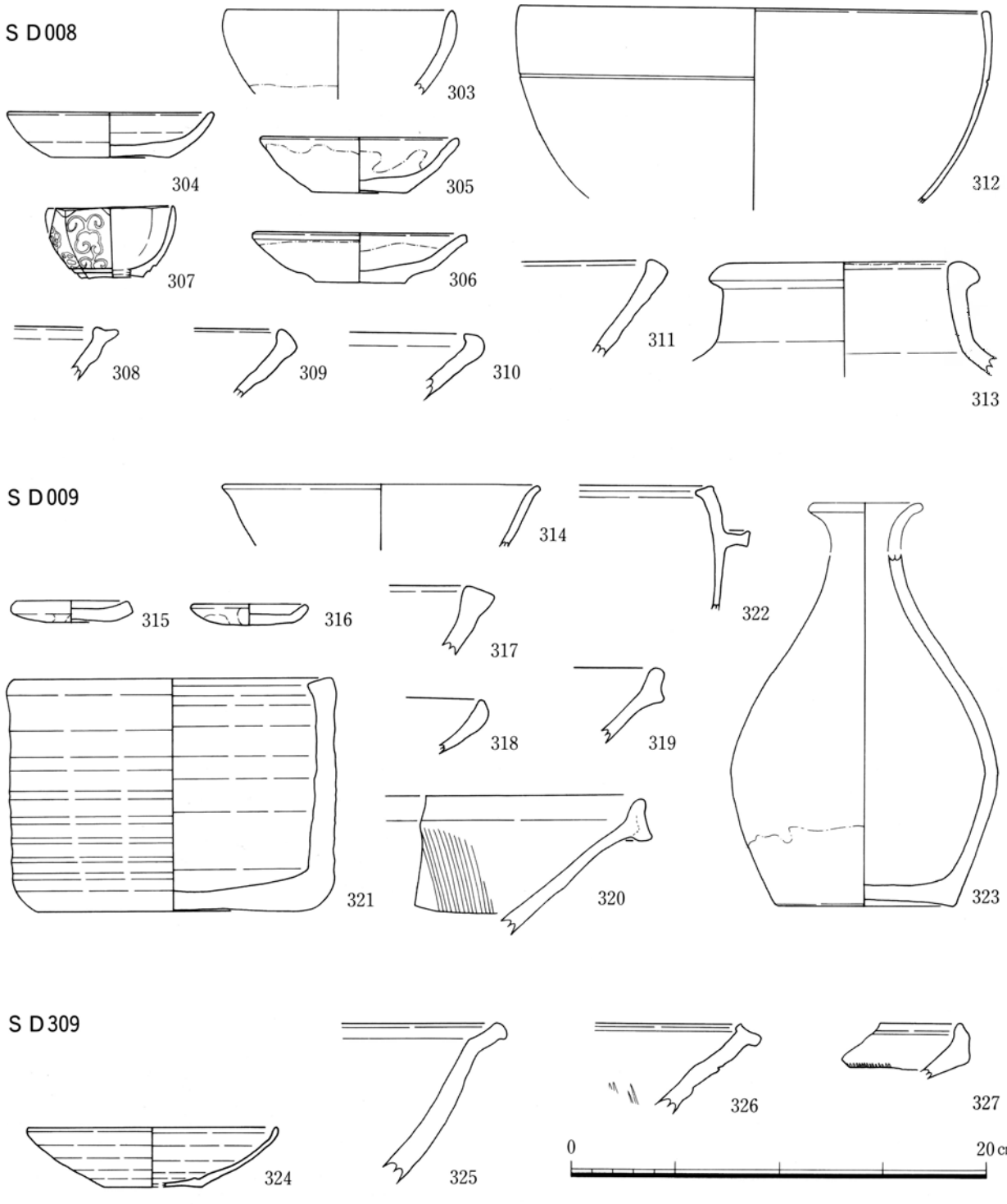


図52　その他戦国溝出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	61	7	0	68	0	91	9	0	100
	椀		24	1		25		34	2		36
	小椀					0					0
	皿		37	4		41		51	5		56
	鉢		0	2		2		6	2		8
調理具		8	9	0	0	17	41	38	0	0	79
	内耳鍋	8				8	39				39
	羽釜	0				0	2				2
	茶釜等					0					0
	鉢		2			2		3			3
	擂鉢		7			7		35			35
貯蔵具		0	15	0	0	15	0	22	0	0	22
	瓶		0			0		1			1
	壺		11			11		13			13
	甕		0			0		3			3
	鉢		4			4		5			5
灯火具		159	7	0	0	166	108	7	0	0	115
	ロクロ皿	158	7			165	106	7			113
	手捏皿	1				1	2				2
火具						0					0
神仏具						0					0
調度具						0					0
蓋			2			2		1			1
合計		167	94	7	0	268	149	159	9	0	317

表５　その他のＳＤ出土陶磁器類集計表



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	P L
303	111	鉄釉		瀬	
304	411			常	
305	411	緑釉　　灰釉		瀬	
306	411	緑釉　　鉄釉		瀬	
307	140		青磁・スタンプ	中	
308	233	鉄釉		瀬	
309	231	鉄釉		瀬	
310	231	鉄釉		瀬	
311	231	鉄釉		瀬	
312	211			その他	
313	322	鉄釉		瀬	
314	116		青磁	中	
315	411	手づくね		その他	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	P L
316	411	手づくね		その他	
317	222	鉄釉		瀬	
318	231	鉄釉		瀬	
319	233	鉄釉		瀬	
320	233	鉄釉		瀬	
321	341			瀬	
322	212			その他	
323	311	鉄釉		瀬	
324	131			瀬	
325	143	灰釉		瀬	
326	230	鉄釉		瀬	
327	231	鉄釉		瀬	

図53　その他戦国溝出土陶磁器類実測図

ＳＢ301：本遺構の時期は16世紀中葉に比定される。

この遺構の出土遺物は、口縁部破片数で57点、総個体数で6.33個体である。但し、この遺構については、先に述べた様に、焼失した収蔵庫と考えられており、遺物組成もこれに影響されていることが予想される。

上記の点を考慮して、用途別の組成を見てみると、供膳具2.5個体、39.5%、調理具2.0個体、貯蔵具1.25個体、19.7%、灯火具0.58個体、9.2%となり、その他の用途の遺物は出土していない。また器種別組成に関しては、供膳具の椀と皿は1：1.31と比率差が縮まっており、調理具は擂鉢のみの出土である。更に貯蔵具は茶壺、李朝の雑釉徳利等が出土しており、遺物に関して出土器種の限定が窺われる。

この事から判断すれば、調査所見から得られた収蔵庫と言う性格は遺物組成の面からもある程度正しいと言うことが理解される。但し、収蔵庫としては出土遺物量が少ない点は注意を要すると思われる。

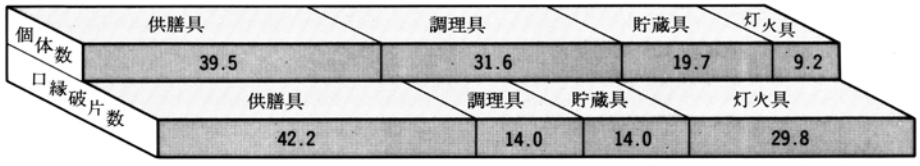
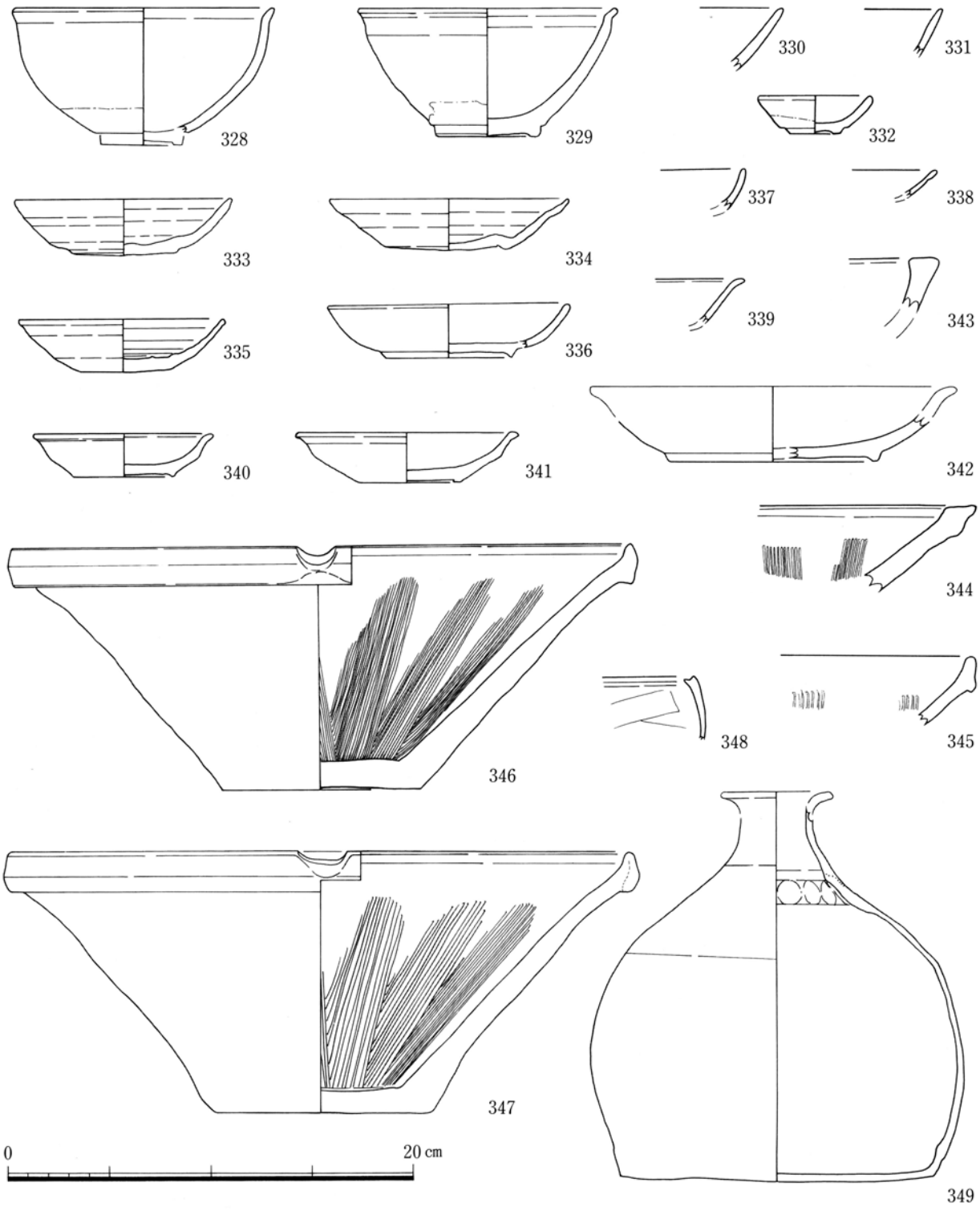


図54　ＳＢ301出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	28	2	0	30	0	21	3	0	24
	椀		12			12		7			7
	小椀		1			1		1			1
	皿		15	2		17		13	3		16
	鉢					0					0
調理具		0	24	0	0	24	1	7	0	0	8
	内耳鍋	0				0	1				1
	羽釜					0					0
	茶釜等					0					0
	鉢		0			0		1			1
	擂鉢		24			24		6			6
貯蔵具		0	15	0	0	15	0	8	0	0	8
	瓶					0					0
	壷		11			11		5			5
	甕		4			4		3			3
	鉢					0					0
灯火具		7	0	0	0	7	17	0	0	0	17
	ロクロ皿	7				7	17				17
	手捏皿					0					0
火具						0					0
神仏具						0					0
調度具						0					0
蓋						0					0
合計		7	67	2	0	76	18	36	3	0	57

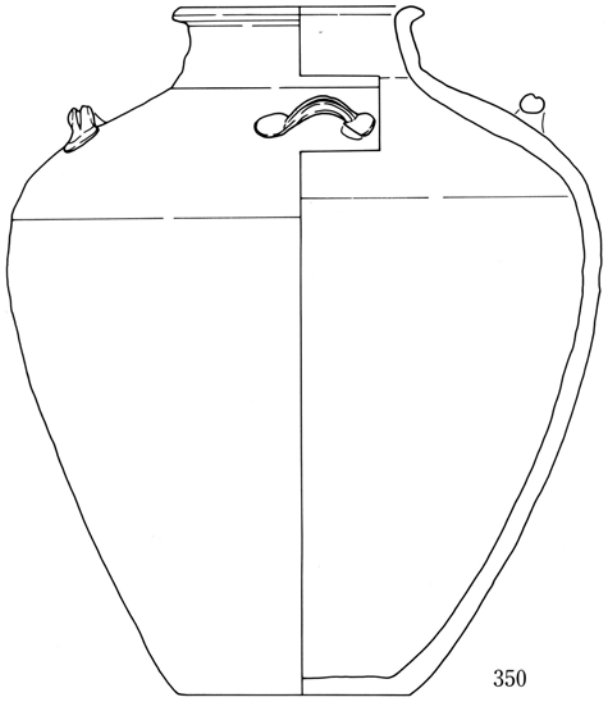
表６　ＳＢ301出土陶磁器類集計表

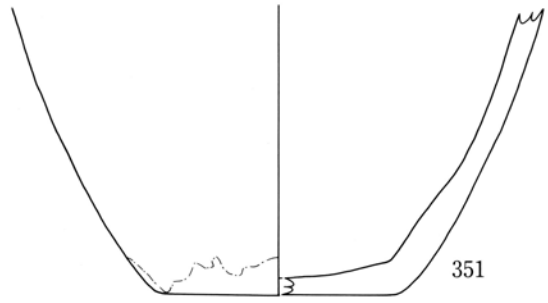


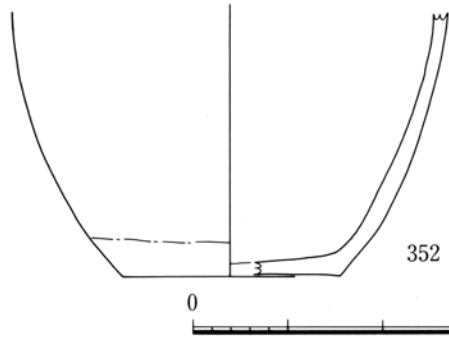
番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
328	111	鉄釉	被熱	瀬	
329	111	鉄釉		瀬	
330	114	鉄釉		瀬	
331	114	鉄釉		瀬	
332	123	鉄釉		瀬	
333	411	底部糸切り痕	被熱	その他	
334	411	底部糸切り痕	被熱	その他	
335	138	凸線タイプ		瀬	
336	131	鉄釉	被熱	瀬	
337	131		青磁	中	
338	131		白磁	中	

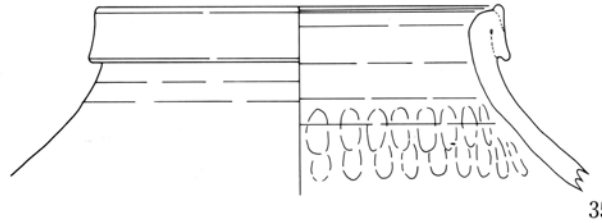
番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
339	132		青磁	中	
340	132	灰釉	高台内輪トチン痕	瀬	
341	132	灰釉	高台内輪トチン痕	瀬	
342	132	見込釉拭き取・鉄釉	高台内輪トチン痕	瀬	
343	222	口唇部無釉・鉄釉		瀬	
344	231	鉄釉	被熱	瀬	
345	232	鉄釉		瀬	
346	232	鉄釉	内外面トチン痕４ケ所	瀬	
347	232	鉄釉	内面重ね焼痕・外面トチン痕４ケ所	瀬	
348	211			その他	
349	311	灰釉	雑釉徳利	朝	54

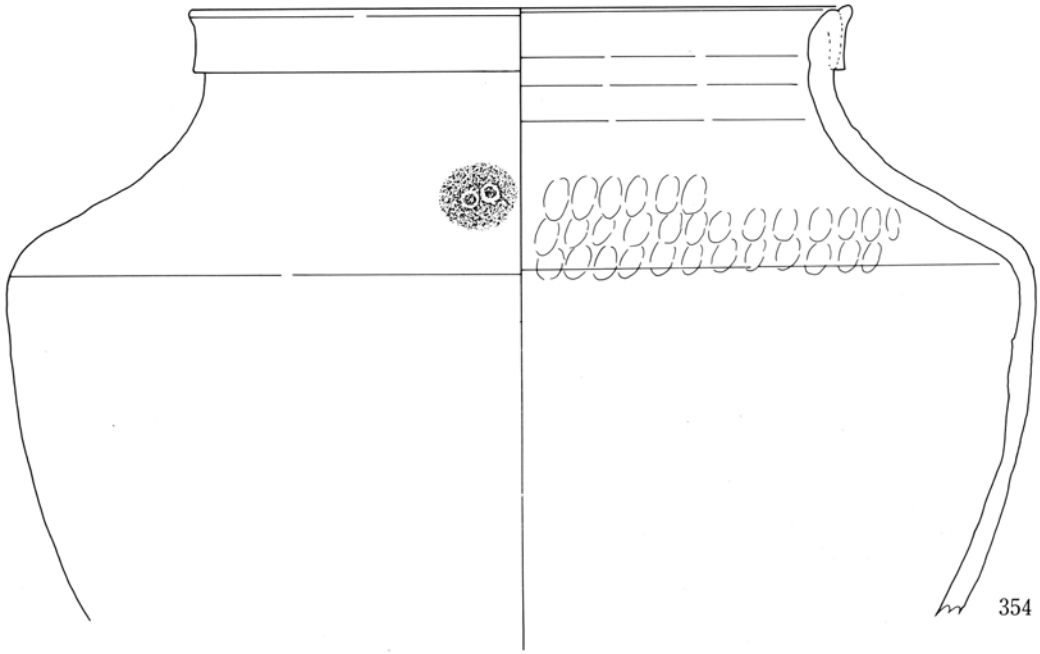
図55　ＳＢ301出土陶磁器類実測図(1)











番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
350	322	鉄釉	外底面・「ウ(バガ)フトコロ」	瀬	54
351	321	鉄釉	被熱	瀬	
352	321	鉄釉	内底面トチン痕	瀬	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
353	331		被熱	常	
354	331		被熱・肩部刻印	常	

図56　ＳＢ301出土陶磁器類実測図(2)

井戸合計：図面掲載分以外の井戸からの出土遺物の組成比率について記述する。

該当する井戸からの出土遺物は口縁部破片数で84点、総個体数で4.08個体である。用途別の組成は供膳具0.83個体、20.4%、調理具0.92個体、22.4%、貯蔵具1.58個体、38.8%、灯火具0.75個体、18.4%となり、その他の用途の遺物は出土していない。ここに示した遺物組成は、その出土遺物の絶対量が少ないため、戦国時代の井戸出土の遺物組成の特徴を正確に導き出せていない恐れがあり、断定はできないが、他の遺物組成に比較して貯蔵具の出土量が多い点を第1に挙げることができる。また、灯火具の比率が低い点も注目される点である。

器種組成の側面からは、供膳具の椀と皿の比率が2：1と従来の戦国時代の遺構と比率的に逆転している。同様に調理具では鍋・羽釜よりも擂鉢が多く出土しており、ＳＢ301の様な特殊遺構を除けば、やはり組成に逆転が見られる。但し、その理由については定かではないが、遺構の性格や立地空間等の側面から考えてみる必要があると思われる。

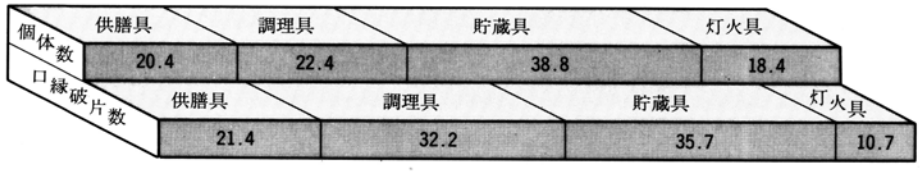
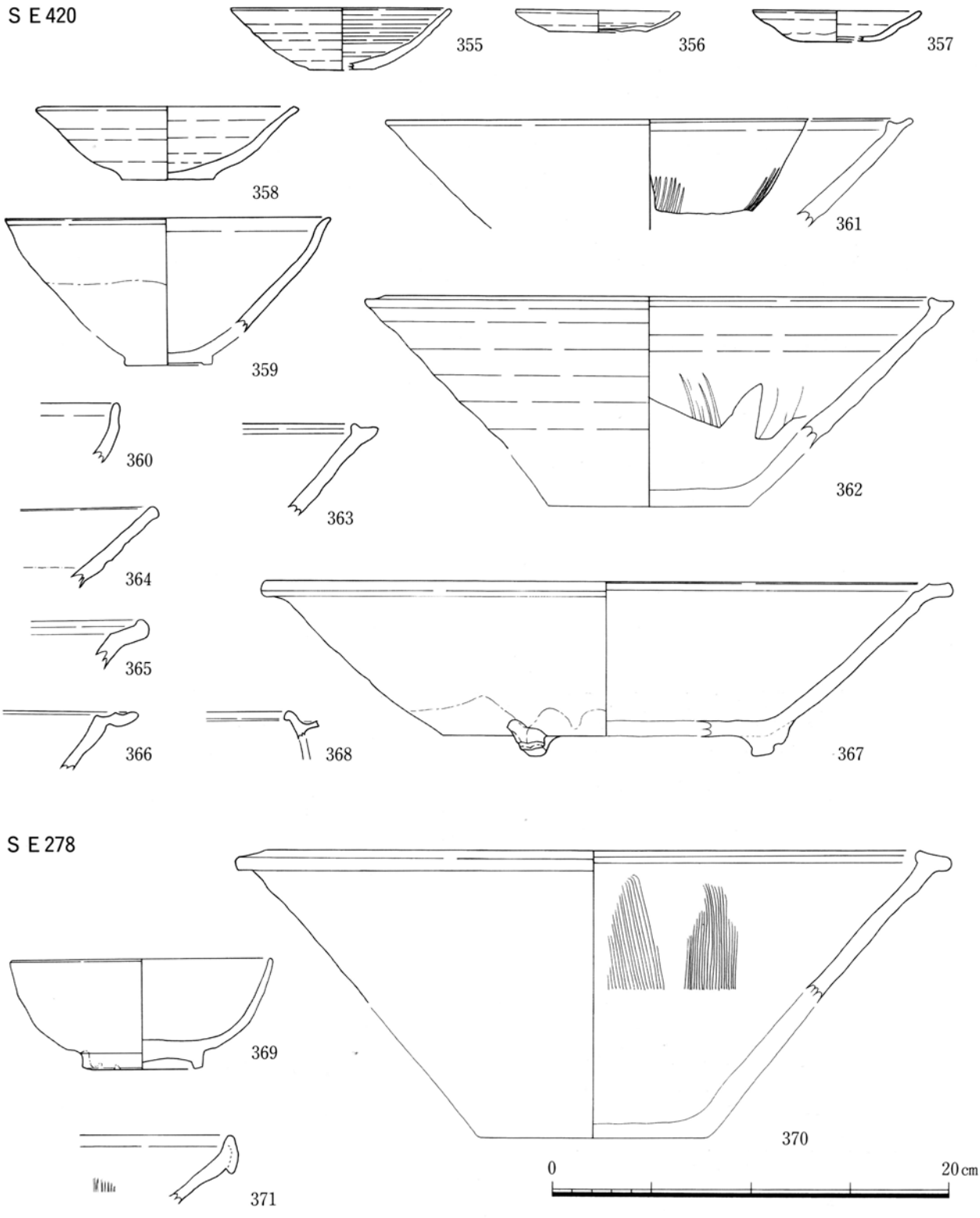


図57　戦国井戸出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率 土器	陶器	磁器	その他	計	接合前口縁破片数 土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	10	0	0	10	0	17	1	0	18
	椀		4	0		4		6	1		7
	小椀					0					0
	皿		2			2		6			6
	鉢		4			4		5			5
調理具		1	10	0	0	11	10	17	0	0	27
	内耳鍋	1	1			2	5	1			6
	羽釜	0				0	5				5
	茶釜等					0					0
	鉢					0					0
	擂鉢		9			9		16			16
貯蔵具		0	19	0	0	19	0	30	0	0	30
	瓶					0					0
	壷		12			12		17			17
	甕		4			4		11			11
	鉢		3			3		2			2
灯火具		9	0	0	0	9	9	0	0	0	9
	ロクロ皿	5				5	7				7
	手捏皿	4				4	2				2
火具						0					0
神仏具						0					0
調度具						0					0
蓋						0					0
合計		10	39	0	0	49	19	64	1	0	84

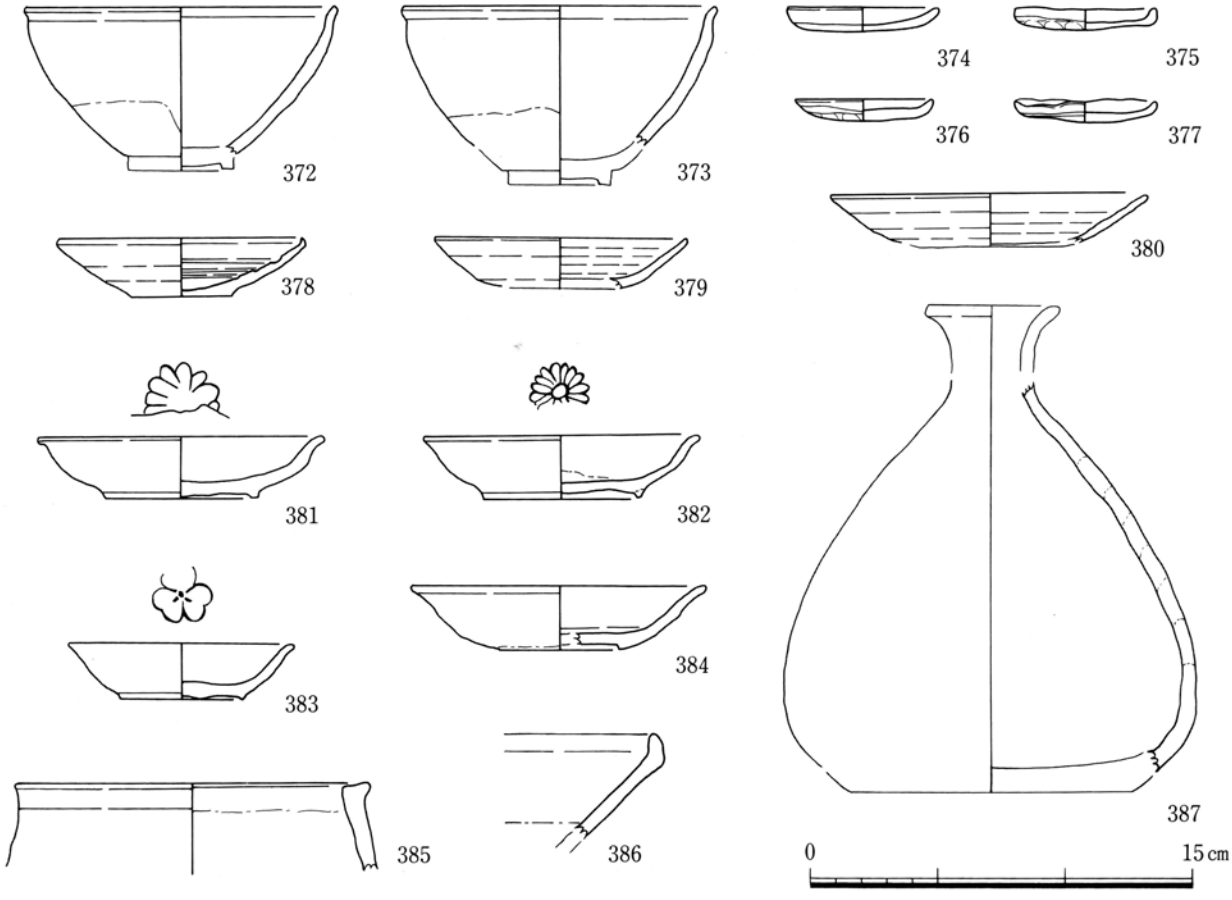
表7　戦国井戸出土陶磁器類集計表



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
355	138	凸線タイプ		瀬	
356	131			瀬	
357	411	手づくね		その他	
358	116			瀬	
359	114	灰釉		瀬	
360	111	鉄釉		瀬	
361	230	鉄釉		瀬	
362	230	鉄釉		瀬	
363	230	鉄釉		瀬	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
364	142	灰釉		瀬	
365	141	灰釉		瀬	
366	141	灰釉		瀬	
367	141	灰釉	見込トチン痕	瀬	
368	212			その他	
369	112		青磁	中	
370	232	鉄釉		瀬	
371	233	鉄釉		瀬	

図58　ＳＥ420・ＳＥ278出土陶磁器類実測図



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
372	111	鉄釉		瀬	
373	111	鉄釉		瀬	
374	410	手づくね		その他	
375	410	手づくね		その他	
376	410	手づくね		その他	
377	410	手づくね		その他	
378	138	凹線タイプ		瀬	
379	411			その他	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
380	411			その他	
381	132	灰釉	見込印花・高台内輪トチン痕	瀬	
382	132	見込釉ふきとり・灰釉	見込印花・高台内輪トチン痕	瀬	
383	132	灰釉	見込印花	瀬	
384	132	鉄釉		瀬	
385	341	口縁部拭き取り・鉄釉		瀬	
386	140	鉄釉		瀬	
387	311	鉄釉		瀬	

図59　ＳＥ421出土陶磁器類実測図

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	27	0	0	27	0	16	0	0	16
	椀		4			4		3			3
	小椀					0					0
	皿		23			23		13			13
	鉢					0					0
調理具		0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
	内耳鍋	0				0	1				1
	羽釜					0					0
	茶釜等					0					0
	鉢					0					0
	擂鉢					0					0
貯蔵具		0	1	0	0	1	0	2	0	0	2
	瓶					0					0
	壷		1			1		1			1
	甕					0					0
	鉢		0			0		1			1
灯火具		394	0	0	0	394	407	0	0	0	407
	ロクロ皿	36				36	312				312
	手捏皿	358				358	95				95
火具						0					0
神仏具						0					0
調度具						0					0
蓋						0					0
合計		394	28	0	0	422	408	18	0	0	426

表8　ＳＥ421出土陶磁器類集計表

土坑合計：図面に掲載した以外の土坑出土の遺物組成について記述する。

該当する遺物は口縁部破片数で623点、総個体数33.92個体である。用途別の比率は供膳具14.0個体、41.3%、調理具3.33個体、9.8%、貯蔵具2.42個体、7.1%、灯火具13.83個体、40.8%である。その他の用途の遺物については、それぞれ口縁部破片数で神仏具１点、蓋１点のみとなっている。材質の比率は、陶器が57.7%と最も多くを占め、次いで土器41.8%、磁器0.5%の順となっている。ここで土器及び磁器が低率であるのは、供膳具、灯火具の比率がそれぞれ戦国時代全体の比率に比して低い点に起因すると思われる。

ここで記述している戦国時代全体の比率とは、あくまで当該期の遺物全てを含んだ数値であり、決して個別遺構により構築される空間毎の特徴を導き出しているものではない。その為、先述の様な溝・井戸での組成の特徴や、ここで見た土坑出土の遺物組成の特徴が、空間としての遺物組成の特徴を示す可能性を持っている。但し、それを確定するためには更に多くの遺跡による遺物組成の構成を検討してみる必要があるように思われる。

（川井啓介）

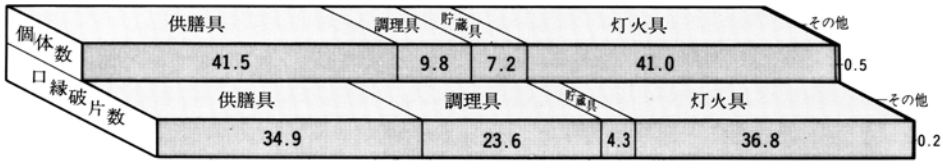
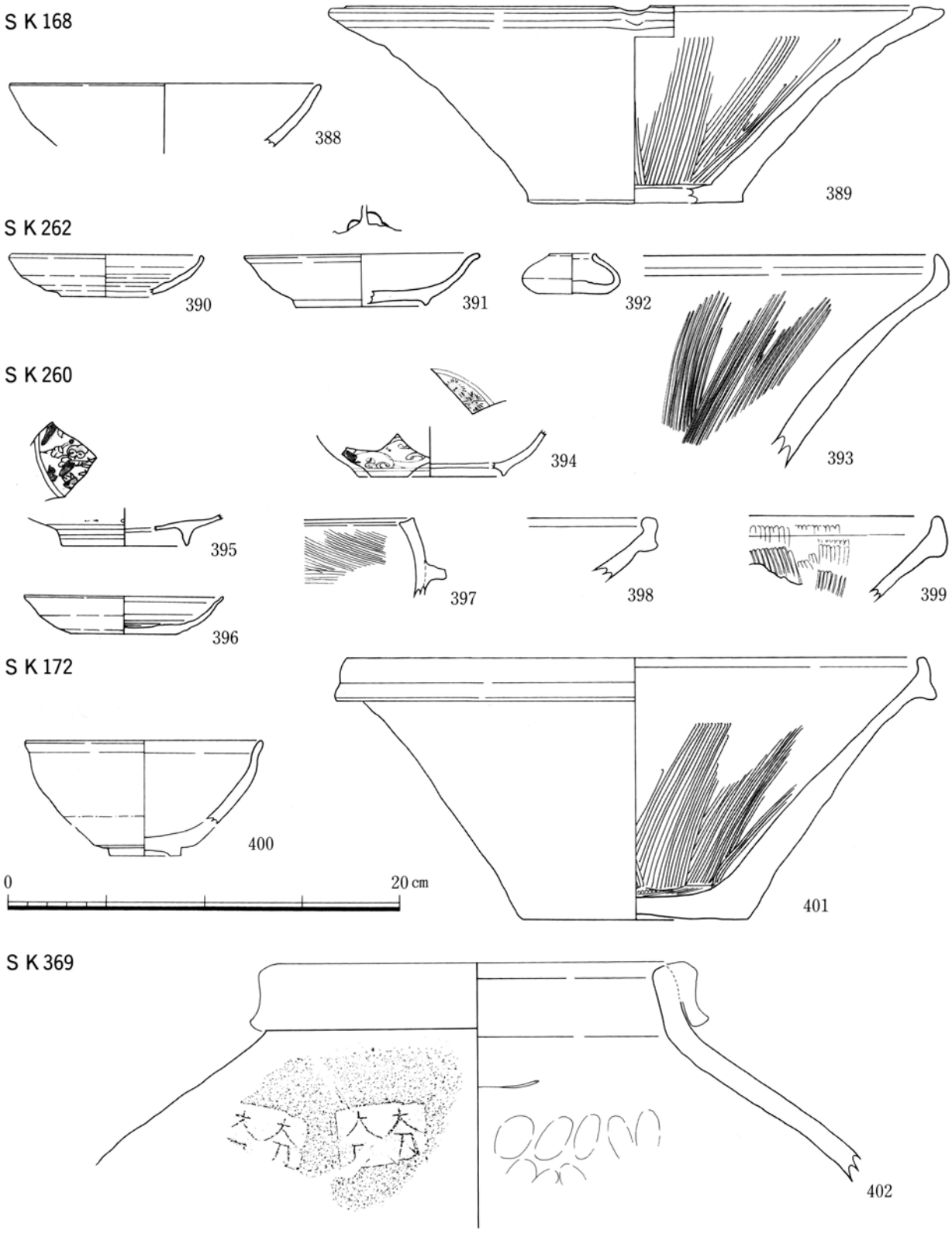


図60　戦国土坑出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率 土器	陶器	磁器	その他	計	接合前口縁破片数 土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	166	2	0	168	1	211	6	0	218
	椀	0	44	0		44	1	62	1		64
	小椀		2			2		2			2
	皿		119	2		121		138	4		142
	鉢		1	0		1		9	1		10
調理具		15	25	0	0	40	75	72	0	0	147
	内耳鍋	10				10	62				62
	羽釜	3				3	9				9
	茶釜等	2	1			3	4	2			6
	鉢		3			3		8			8
	擂鉢		21			21		62			62
貯蔵具		0	29	0	0	29	0	27	0	0	27
	瓶					0					0
	壷		16			16		7			7
	甕		1			1		8			8
	鉢		12			12		12			12
灯火具		155	11	0	0	166	220	9	0	0	229
	ロクロ皿	71	11			82	175	9			184
	手捏皿	84				84	45				45
火具						0					0
神仏具			2			2		1			1
調度具						0					0
蓋			2			2		1			1
合計		170	235	2	0	407	296	321	6	0	623

表９　戦国土坑出土陶磁器類集計表



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	P L
388	131	灰釉		瀬	
389	231	鉄釉		瀬	
390	138	凹線タイプ		瀬	
391	132	灰釉	見込印花・高台内輪トチン痕	瀬	
392	323	鉄釉		瀬	
393	231	鉄釉		瀬	
394	132	青花	唐草文・松文	中	
395	116	青花	圏線・龍文	中	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	P L
396	138	凸線タイプ		瀬	
397	212			その他	
398	233	鉄釉		瀬	
399	231	鉄釉		瀬	
400	111	鉄釉・化粧掛		瀬	
401	233	鉄釉		瀬	
402	332		押印	常	

図61　戦国土坑出土陶磁器類実測図

(2)瓦類、石製品

今回の発掘調査では、少量ながら戦国時代の瓦類、石製品が出土している。

(401)から(409)は瓦類。(401)から(408)までは本瓦の内の平瓦。(409)は同じく本瓦の丸瓦である。

(1)から(12)は石製品。(1)・(2)は硯。(3)・(4)は石臼の一部。(5)は宝篋印塔の相輪。(6)から(12)はいずれも五輪塔の一部。(6)・(7)・(8)・(9)は空輪、(10)は火輪、(11)は水輪、(12)は地輪に相当する。

戦国期の瓦については、その大半がＳＤ001から出土している。分類としては平瓦・丸瓦・熨斗瓦があり、出土量は熨斗瓦が大半を占めている。製作技法は、コビキが用いられる以前の技法が取られており、特に熨斗瓦に関しては、平瓦の中央に厚みの１/３まで切り込みを入れ、焼成後２つに割って使用している。また、分類別の出土量から判断すると、所謂屋根葺き様として瓦が用いられていた可能性は低く、棟の部分に限定して瓦を用いていたと考えられる。

さらに、共伴する陶磁器類からその使用時期は16世紀中葉と考えられる。従来織豊系城郭における瓦の一般的使用は永禄10年（1567）の信長の岐阜城入城以後とされており、この点から考えれば、今回の発掘調査で出土した一群の瓦類は、その初現期のものとすることができる。

次に石塔類については、いずれもＳＤ001の溝底付近から出土しており、この遺構周辺に中世墓が存在していたことが考えられる。近年この様な城郭の溝・堀底から出土する石塔類は、“破城”行為に伴う儀式の一種と考えられており、織田氏の那古野城入城に際し、城内に存在した今川氏の屋敷墓を破壊し、堀へ投棄したものであると考えられる。

（川井啓介）

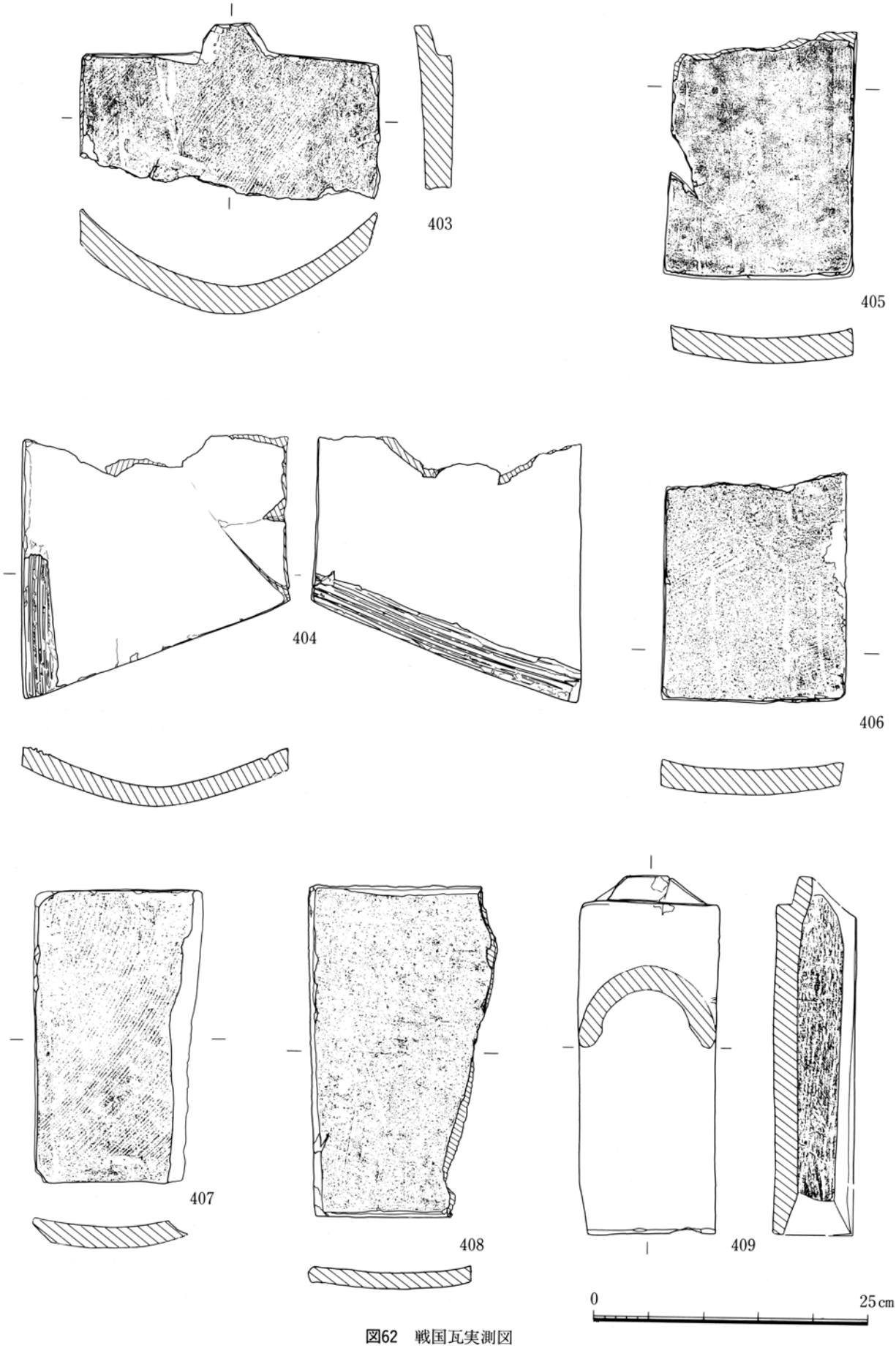
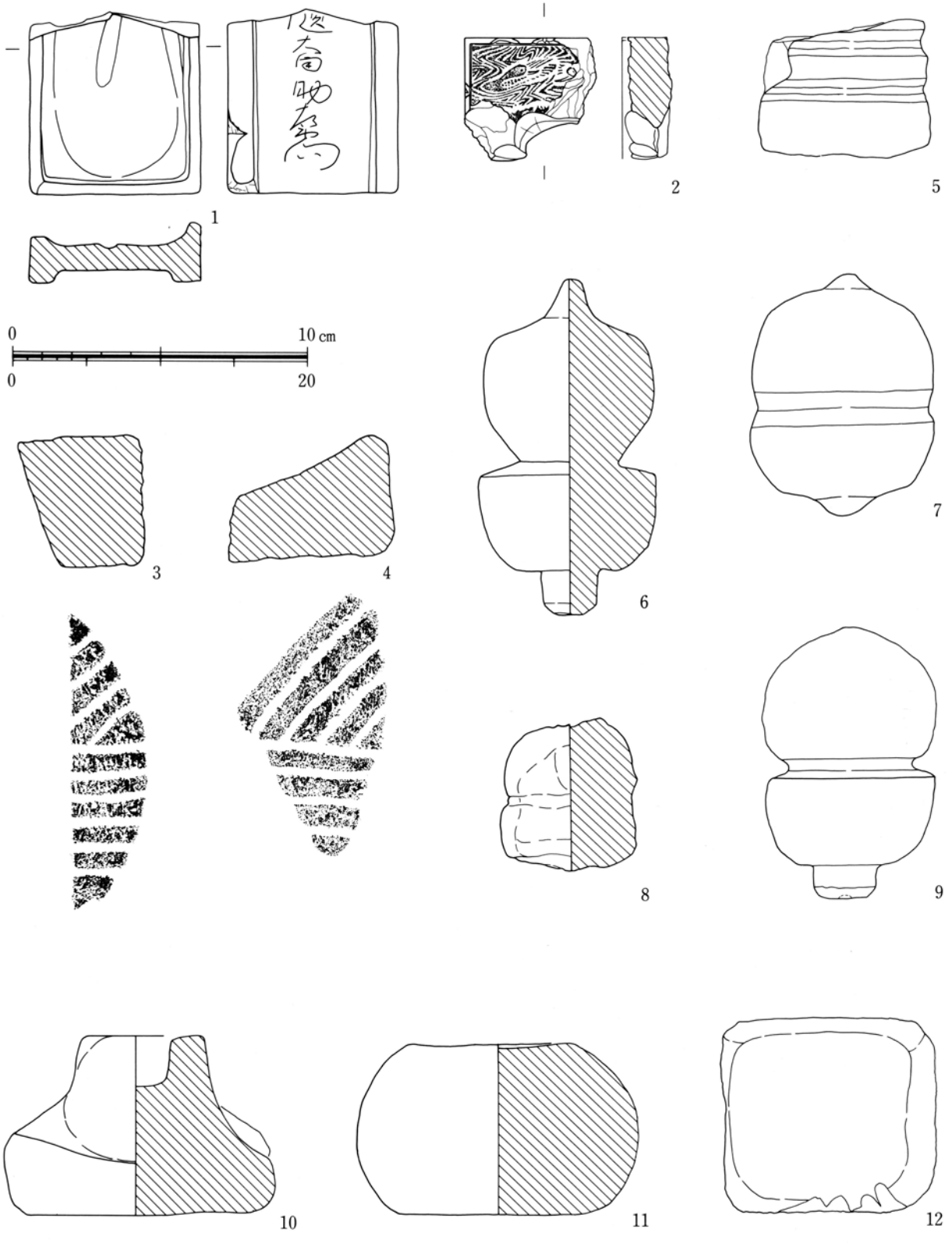


図62　戦国瓦実測図



番　国	出土遺構	備　考	PL
1	SD001	硯	
2	SD006	硯	
3	SD001	石臼	
4	SD006	石臼	
5	SK418	相輪	
6	SD401	空風輪	

番　号	出土遺構	備　考	PL
7	SB401	空風輪	
8	SD401	空風輪	
9	SD006	空風輪	
10	SK412	火輪	
11	SD401	水輪	
12	SK412	地輪	

図63　戦国石製品実測図（硯1/2・他1/4）

III　近世の遺構と遺物

1．近世前期の遺構

概要

江戸時代の屋敷地は、整地された土層の上に計画的に築かれている。年を追って記された絵図や屋敷地拝領の系譜図を基に、検出された遺構群の中からこの計画性と屋敷空間内部の実体を明らかにしていくことが調査の目標でもあったが、実際には遺構の切り合いが激しく明確に把握することは困難であった。ここでは、17世紀から18世紀前半代までの遺構群を江戸時代前期、18世紀中ごろから19世紀中ごろまでの遺構群を江戸時代後期とし、時期的に二区分して取り扱う。

前期初頭には、当該地に三木、杉山、小笠原、平岩の4軒の屋敷地があてがわれている。そして、寛文3年（1663）に成瀬、竹腰両家が二の丸地区から三の丸地区へと転居してきたことに伴い屋敷替えが実施されたという記録があるが、残念ながら検出された遺構の上からは、屋敷替えそのものを示す具体的事実については明瞭に確認されなかった。ただし、前期の屋敷地の遺構の特徴として、次のことは言えそうである。すなわち、三の丸地区への武家屋敷地配分は、当初、30間×34間の空間を基本としていたと考えられ、かつその背割ラインが確認されたにもかかわらず、前期の遺構が屋敷空間全域に展開してはいないことからみて、石高に応じて屋敷地利用が異なっていたのではないか、という点である。図64上段の遺構分布図において、中央を東西に走る背割ラインのすぐ北側が遺構希薄となっているのは、このことを表しているものと理解される。

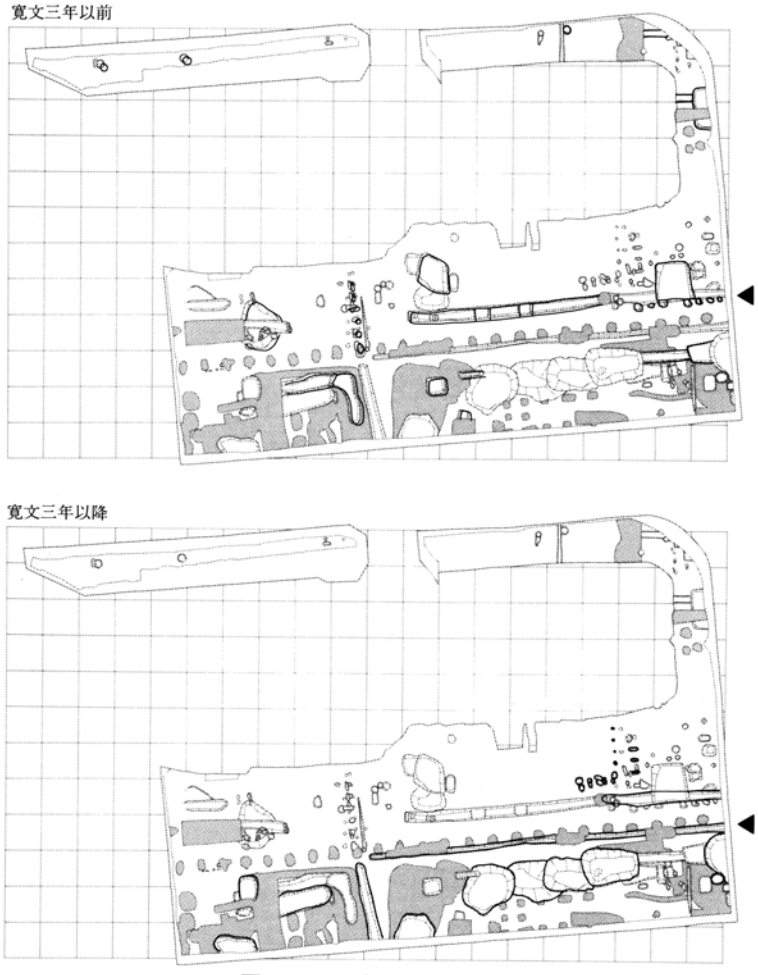


図64　近世遺構群の変遷

以下、遺構の種別毎に記述を行う。

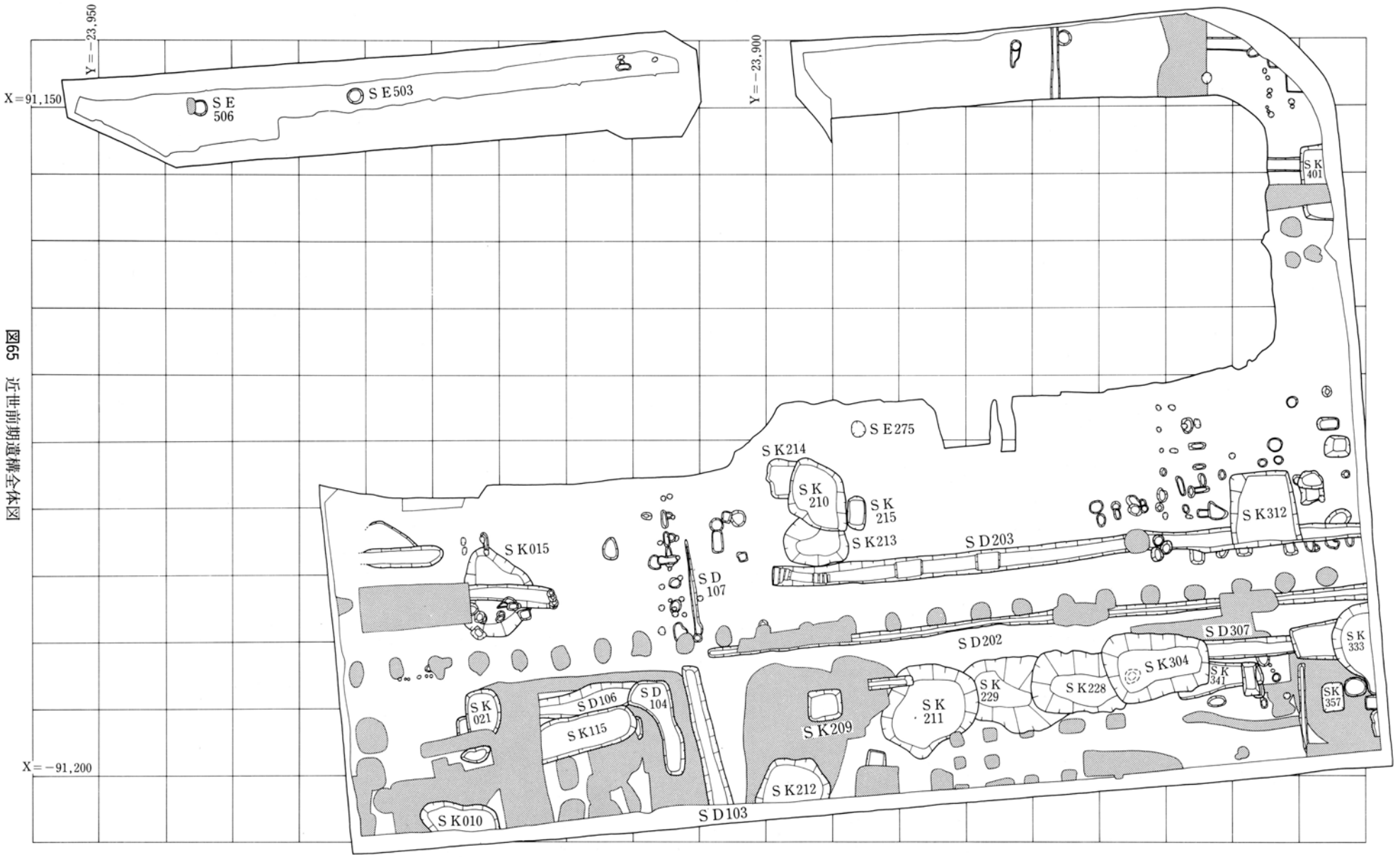


図65　近世前期遺構全体図

柵列（ＳＡ）

ＳＡ002　0区において、小ピット５基が検出された柵列である。ピット間は心心間で0.4mから0.75mまであり、直径も25～30cmと小型である。

ＳＡ101　１区で検出されたＳＡ101からＳＡ103までは、南北方向の屋敷地境の柵列とみられる。径30cmから55cmのピットが４基検出された。

ＳＡ102　ＳＡ101の東側で検出された。方位はＮ－８°－Ｗをとる。後期の土坑に切られているが、ピット４基を確認。

ＳＡ301　ＳＡ301からＳＡ303までは、3区において調査区東寄り中央で検出された。径30～50cm程のピット６基がほぼ南北方向をとって並ぶ。支柱痕とみられるピットが東側から3基発見された。

ＳＡ302　ＳＡ301の東3mの位置に築かれた５基のピットからなる柵列。ピットは東西に楕円形に掘られているものが多く、長径100～130cmと大きめである。ほぼ南北方向をとる。

ＳＡ303　東西方向に走る大型のピット７基からなる柵列。ＳＡ301、ＳＡ302とは直交する位置にある。ピット間は心心間で1.5mから2.0m、深さは約1.2mと深い。中央の広い部分は出入り口か。

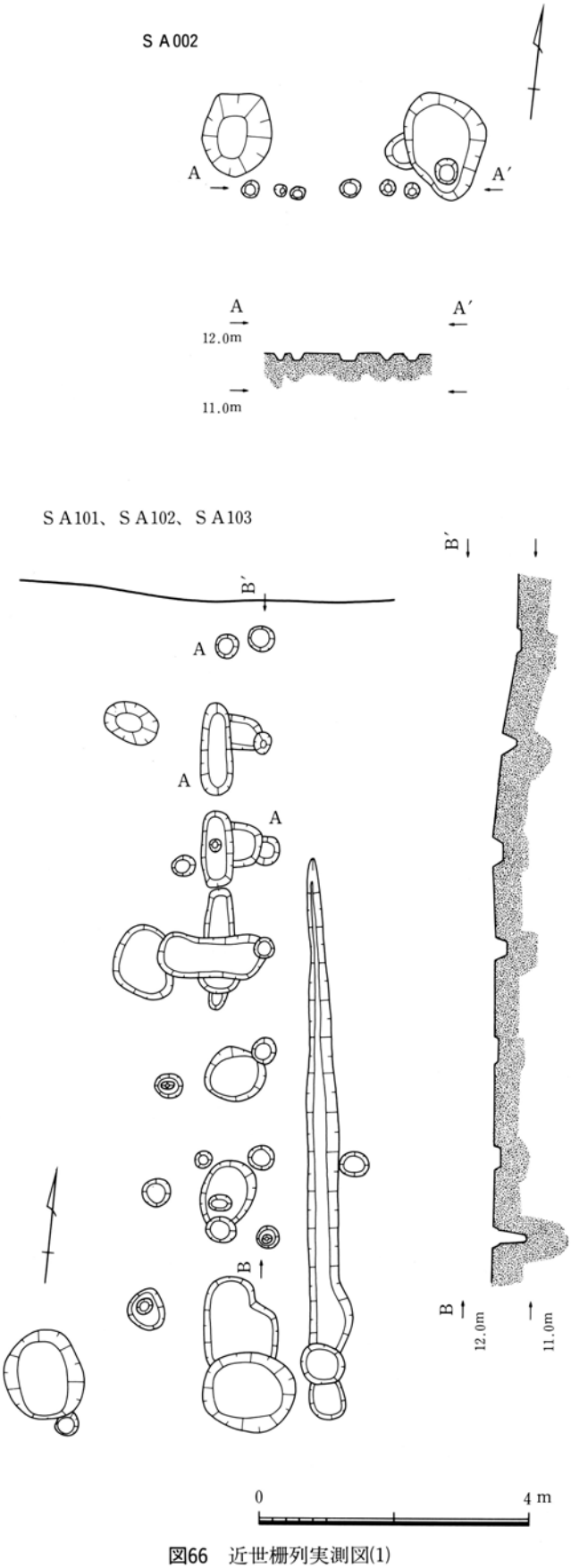


図66　近世柵列実測図(1)

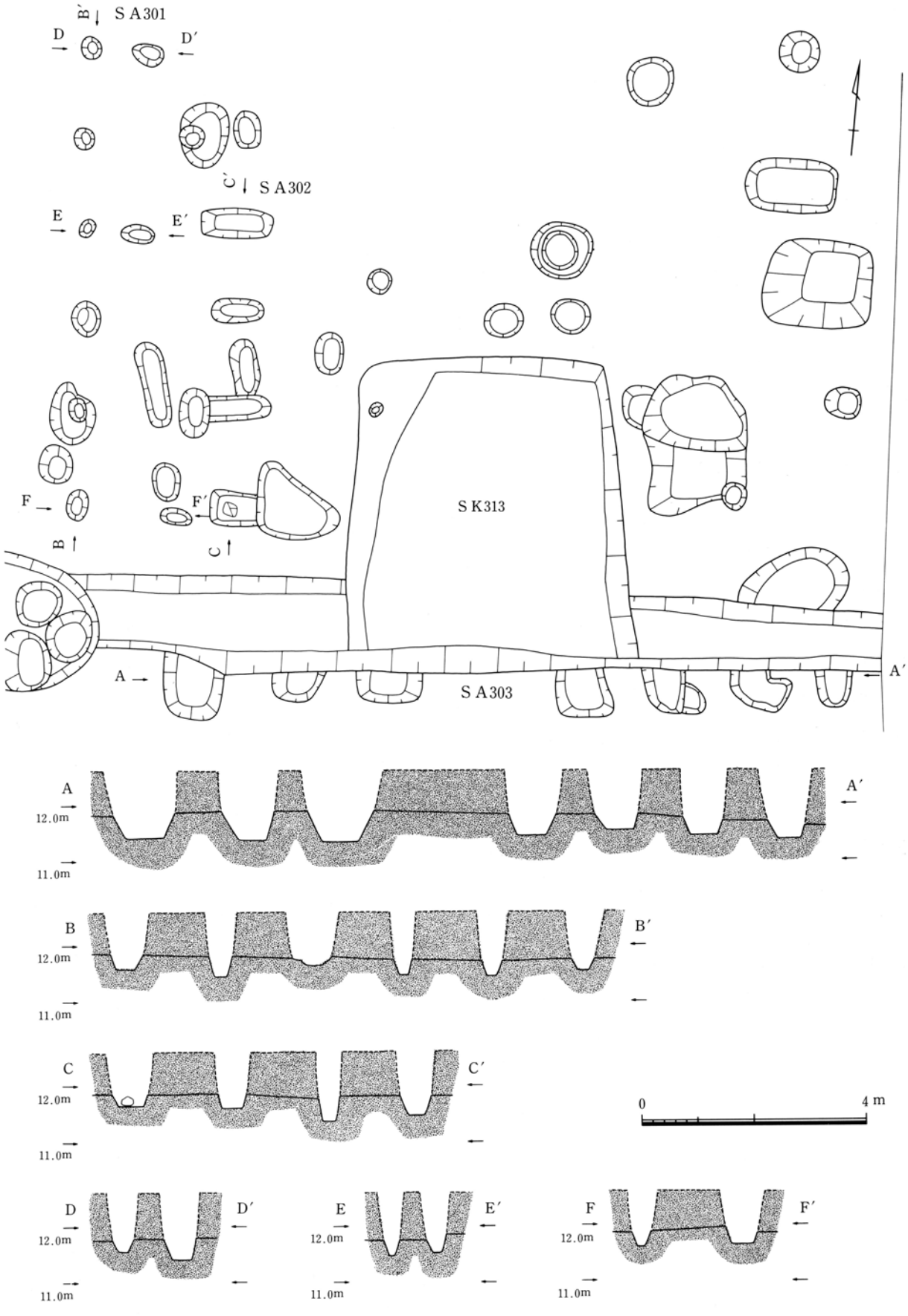


図67　近世柵列実測図(2)

溝（ＳＤ）

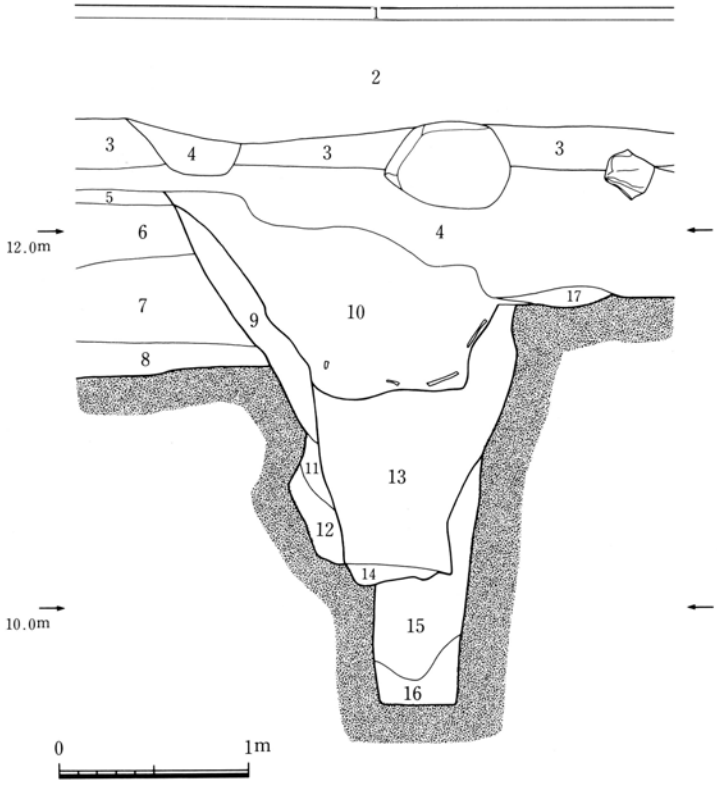
溝は、概ね東西方向ないし南北方向をとって掘られている。幅、深さ共に多様であるが、これらの多くは屋敷地境を示す遺構であると考えられる。

ＳＤ104　１区の調査区南半において検出された幅広の溝である。南北方向をとり、方位はＮ―4.5°―ｗを示す。ＳＤ103と並行している。幅4.0m、検出長6.7m。断面形は箱堀形で、深さは1.5から1.9を測る。

ＳＤ106　ＳＤ104とほぼ直交する形で検出された。方位は、Ｎ―77°―Ｅを示す。西半は後世の土坑ＳＫ102に切られている。検出長は7.8m、幅は約2.0m。検出面での深さは2.1mと非常に深い。

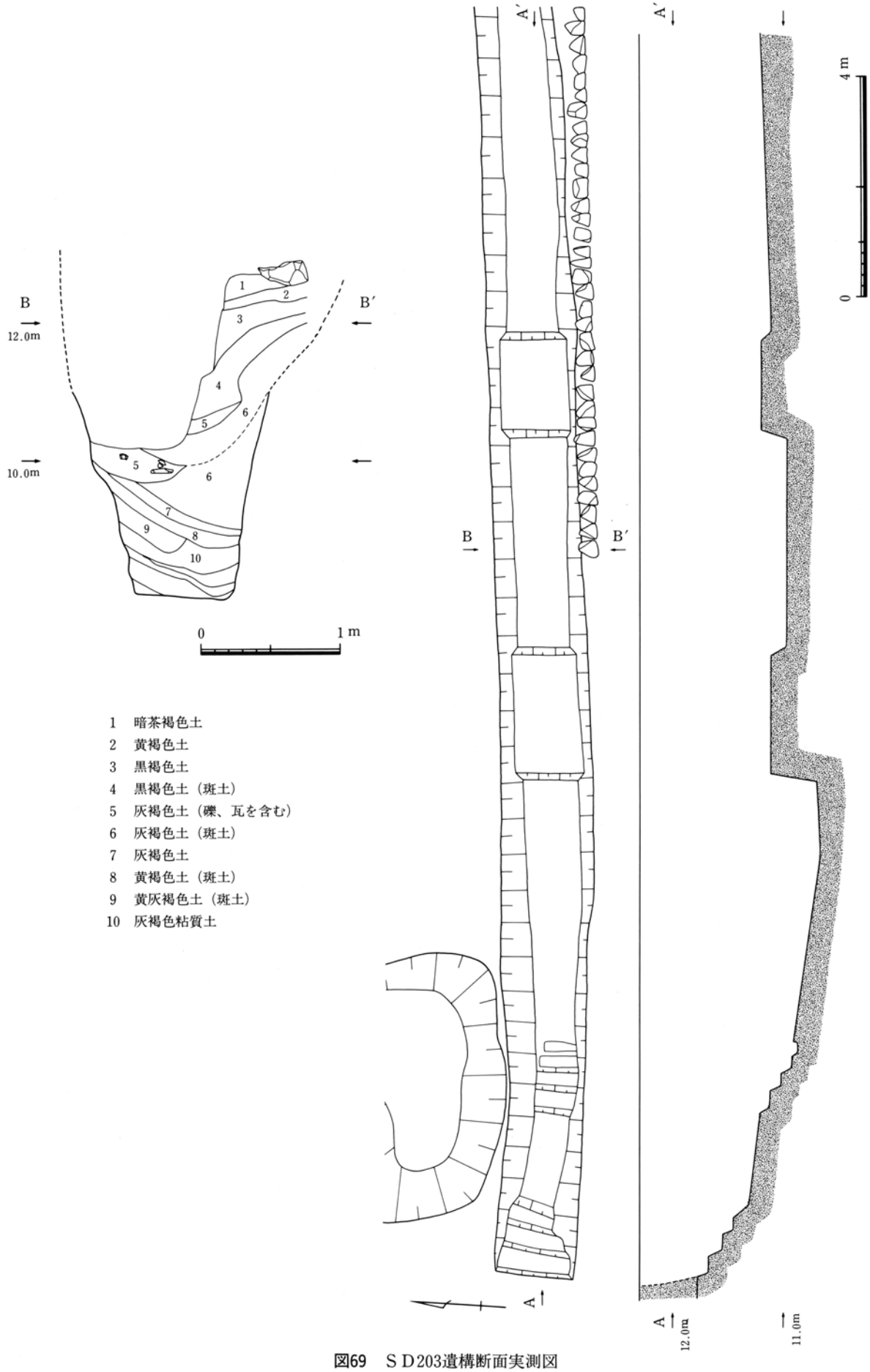
ＳＤ103　ＳＤ104の東側を並行して走る屋敷地区画と考えられる溝。検出長は11.0mであるが、さらに南側へと続く。幅約2.0m、検出面での深さは最も深い部分で2.3mを測る。方位はＮ―９°―Ｗ。埋土は、灰色粘土、暗灰色粘質土などであるが、一旦埋め戻されてから、再び溝が掘り込まれている。

ＳＤ203　２区で検出された発掘調査区中央を東西方向に走る大型溝。屋敷境の内側２間の位置に掘られている。ＳＫ327・334を境として東半分を便宜的にＳＤ301と称し区分したが、実際は同一の遺構である。ＳＫ327までの長さ26.5m、幅1.6m、検出面からの深さ1.6m程度を測る。図の上半に見られる石列ＳＳ201は溝が埋められてから築かれている。



1　アスファルト
2　茶褐色砂質土、礫
3　褐色土、礫
4　黒灰色土（礫を含む）
5　明黄褐色砂質土（瓦・炭化物を含む）
6　褐色土（炭化物を含む）
7　灰褐色粘土、黒色粘土
8　黒褐色粘土
9　黒褐色粘土
10　暗灰褐色粘土（炭化物を含む）
11　暗灰色土（炭化物を含む）
12　灰色粘土
13　暗灰色粘土（炭化物を含む）
14　暗灰色粘質土
15　灰白色粘質シルトブロック、黒褐色粘質土ブロック
16　灰色粘土
17　灰褐色砂

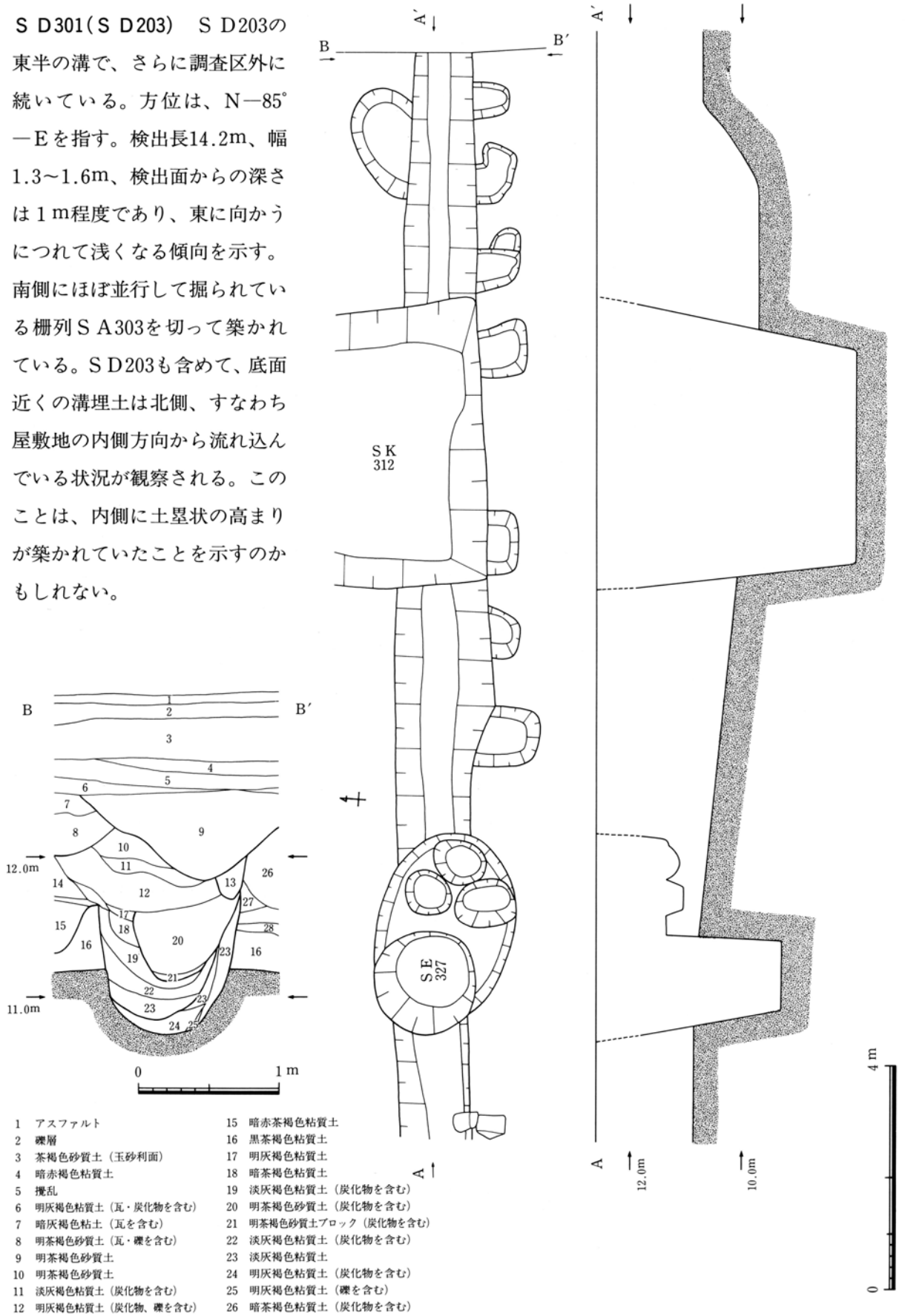
図68　ＳＤ103断面実測図



1　暗茶褐色土
2　黄褐色土
3　黒褐色土
4　黒褐色土（斑土）
5　灰褐色土（礫、瓦を含む）
6　灰褐色土（斑土）
7　灰褐色土
8　黄褐色土（斑土）
9　黄灰褐色土（斑土）
10　灰褐色粘質土

図69　ＳＤ203遺構断面実測図

ＳＤ301（ＳＤ203）　ＳＤ203の東半の溝で、さらに調査区外に続いている。方位は、Ｎ―85°―Ｅを指す。検出長14.2m、幅1.3～1.6m、検出面からの深さは１m程度であり、東に向かうにつれて浅くなる傾向を示す。南側にほぼ並行して掘られている柵列ＳＡ303を切って築かれている。ＳＤ203も含めて、底面近くの溝埋土は北側、すなわち屋敷地の内側方向から流れ込んでいる状況が観察される。このことは、内側に土塁状の高まりが築かれていたことを示すのかもしれない。



1　アスファルト
2　礫層
3　茶褐色砂質土（玉砂利面）
4　暗赤褐色粘質土
5　攪乱
6　明灰褐色粘質土（瓦・炭化物を含む）
7　暗灰褐色粘土（瓦を含む）
8　明茶褐色砂質土（瓦・礫を含む）
9　明茶褐色砂質土
10　明茶褐色砂質土
11　淡灰褐色粘質土（炭化物を含む）
12　明灰褐色粘質土（炭化物、礫を含む）
13　暗茶褐色粘質土（炭化物を含む）
14　淡灰褐色粘質土
15　暗赤茶褐色粘質土
16　黒茶褐色粘質土
17　明灰褐色粘質土
18　暗茶褐色粘質土
19　淡灰褐色粘質土（炭化物を含む）
20　明茶褐色砂質土（炭化物を含む）
21　明茶褐色砂質土ブロック（炭化物を含む）
22　淡灰褐色粘質土（炭化物を含む）
23　淡灰褐色粘質土
24　明灰褐色粘質土（炭化物を含む）
25　明灰褐色粘質土（礫を含む）
26　暗茶褐色粘質土（炭化物を含む）
27　灰白色粘土
28　黒灰褐色粘質土

図70　ＳＤ301遺構断面実測図

ＳＤ302　３区で検出された。ＳＤ202のすぐ南側にＳＤ305と直交して築かれている。Ｎ－６°－Ｗの傾きをもち、南はＳＤ303に続いている。検出全長3.5m、幅は1.0mである。内部に長さ20～50cm程度の礫が敷かれていた。これらは建物基礎の根石と考えられ、ＳＤ303およびＳＤ305と共に建物を構成している。この建物は、土蔵のような性格をもつものであったとみられる。

ＳＤ202　１区から３区にかけて検出された発掘調査区のほぼ中央を東西方向に走っている屋敷地区画の溝である。さらに東側の調査区外へと続いている。方位は、Ｎ－87°－Ｅをとり、前述のＳＤ203、301と並行する。検出全長は51.4m、幅は0.8mであり、深さは1.0～1.5m程度を測る。２ケ所において攪乱を受けている。溝内埋土は、底面において南側からの流れ込み堆積を示しているので、あるいは南側に土塁状の高まりがあったのかも知れない。埋土上に石列ＳＳ101が認められるが、これは江戸時代後期の遺構である。

本遺構は、先に示した通り、屋敷地境の溝であるが、このラインは基本的に江戸時代前期、後期を通じて変化していない。

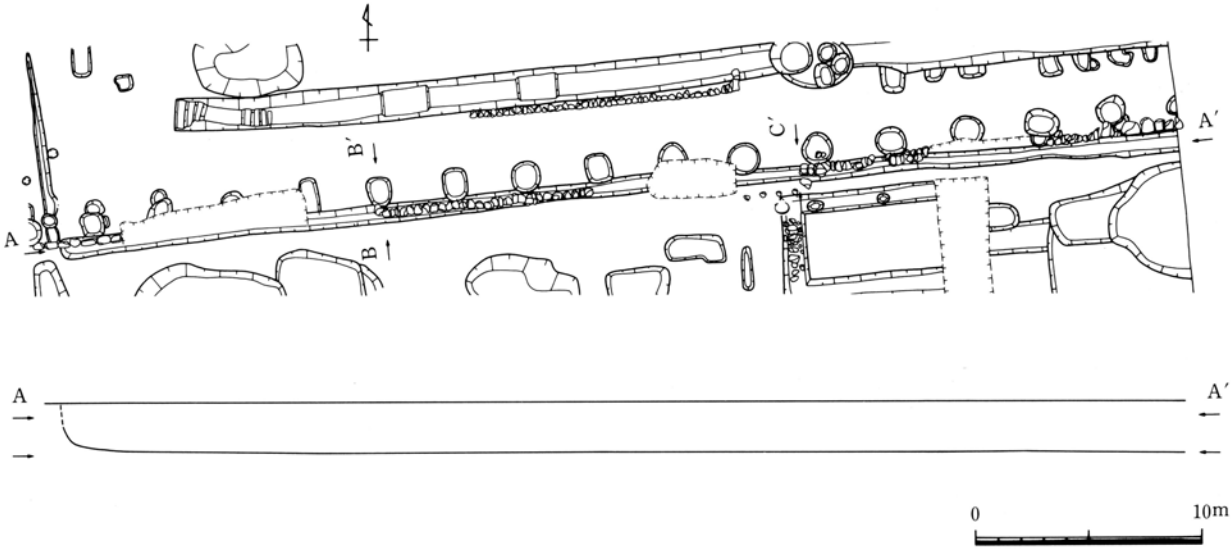


図71　ＳＤ202断面実測図

ＳＤ201（ＳＤ307）　２区から３区に続くＳＤ201とＳＤ307は途中に後世の攪乱土坑ＳＫ216、ＳＫ217、ＳＫ219、ＳＫ301などを挟み、23.5mほど離れて検出されたが、本来的に同一の溝であると判断される。しかも、東端はＳＫ333に、また西端はＳＫ202に切られていて、掘削当初の長さは窺い知れない。ＳＤ201は検出長2.0m、幅0.8mであり、ＳＤ307は検出長7.7m、幅0.8mほどである。また深さは、ＳＤ201で1.6mほど、ＳＤ307で1.0mほどを測る。

本遺構も、屋敷地区画の溝ＳＤ202と3.6m（2間）の間隔をおいて並走しており、南東側屋敷地内への進入道路も含めた何らかの敷地境界に関連する遺構と考えられる。

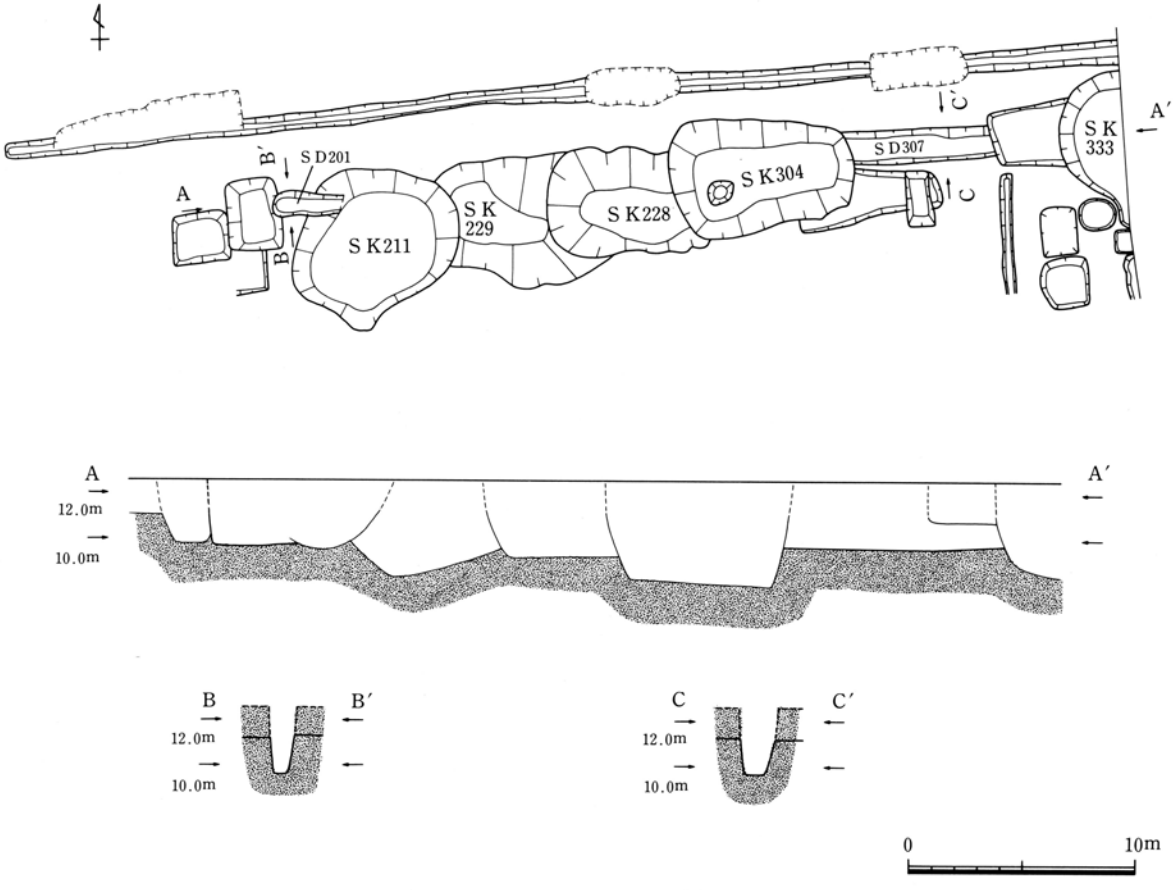


図72　ＳＤ201・ＳＤ307実測図

井戸（ＳＥ）

本遺跡では、戦国時代から幕末までに掘られた井戸が多数検出されている。屋敷地が洪積台地である熱田層の上面に築かれている関係から、井戸は地下水の浸透層まで相当深く掘り下げられなければ、機能を果さない。多数の井戸跡が検出されるのは、枯渇をきたす頻度数が高かったからであると考えられる。

確実に江戸時代前期に属する井戸は、５基発見されている。それらの分布状況を考えてみると、江戸初期に区画された４軒の屋敷地のうちの３軒から発見されたことになる。それぞれ２基が検出された２軒の屋敷地においては、必ずしも近接して築かれてはいないため、作り替えであるのかあるいは本来機能の異なる井戸が並存していたのか、断定できない。

ＳＥ275　２区において、ＳＤ203の北側の屋敷地から検出された。平面形は円形を呈し、上端径は1.9mを測る。完掘できなかった。断面掘形はＩ類を呈し、井戸枠等の施設については不明。埋土中の遺物からみて、18世紀には機能していたとみられる。

ＳＥ359　３区において、ＳＤ202の南側の屋敷地内から検出された。後期の土坑ＳＫ304に大きく掘り込まれており、上端は消失している。検出面での上端径は1.1mほどであり、断面の掘形はＩ類に属す。井戸枠等の施設については不明であるが、埋土からの出土遺物からみて、18世紀には機能していたとみられる。

ＳＥ405　4区において検出された。ＳＥ275と同一の屋敷地に属するものとみられる。検出面での上端径は1.2m以上と推定される。断面の掘形はＩ類に属す。関連施設、時期については不明である。

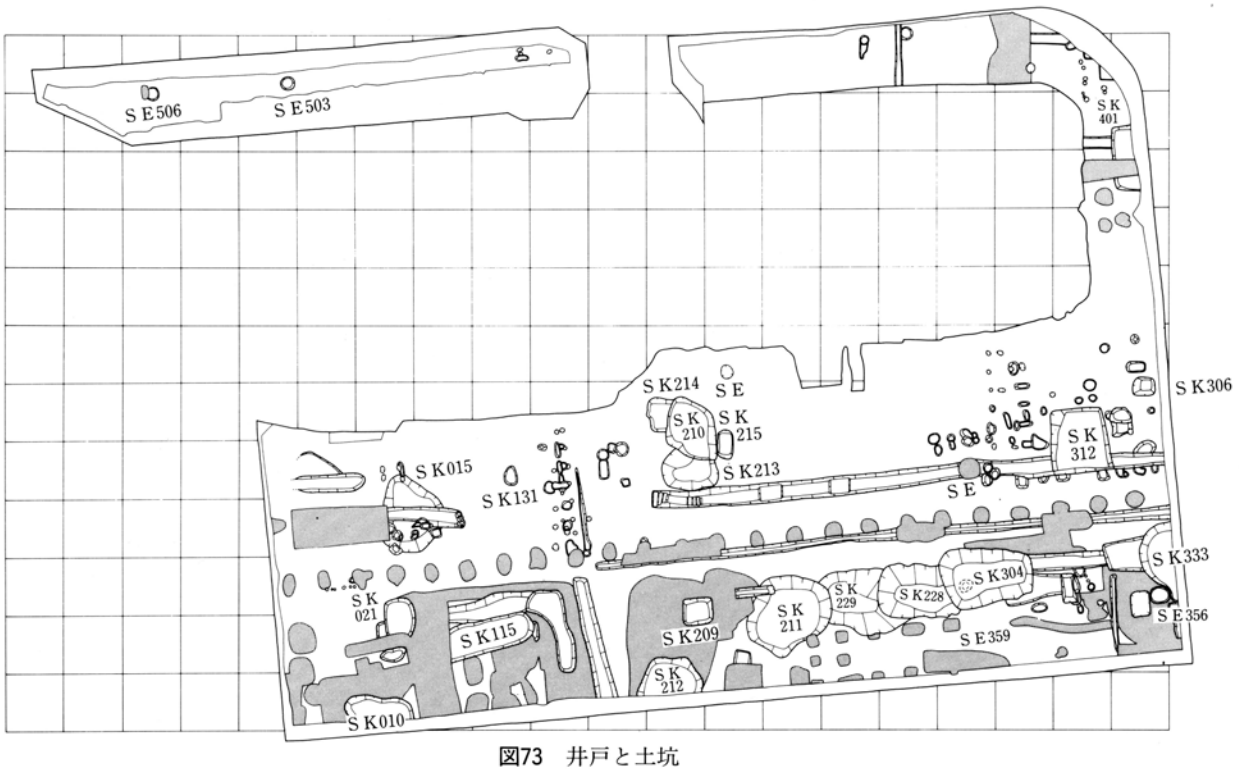


図73　井戸と土坑

ＳＥ503　5区にて検出。検出面での上端径は1.2m以上である。断面の掘形はＩ類で、時期については不明である。

ＳＥ506　5区においてＳＥ503の西11.5mの位置から検出された。両者は同一の屋敷地に属するとみられる。検出面での上端径は1.2m以上である。断面の掘形はＩ類で、時期については不明。

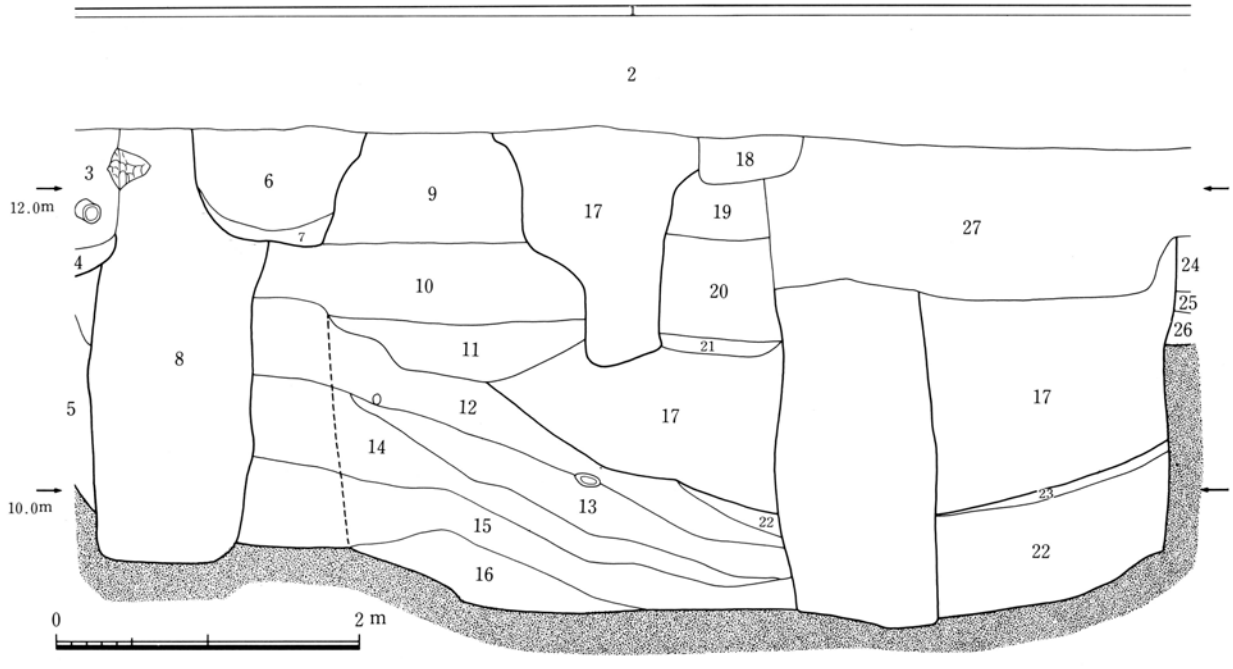
土坑（ＳＫ）

大小様々な土坑が発掘調査区全体にわたって掘られている。一ケ所に集中して、しかも継続的に掘り返されていて、切り合い関係がきわめて複雑な様相を呈している部分もみられる。

これらの土坑群については、江戸時代を通じて、機能の上から大きく、汚水溜、瓦溜、ゴミ穴、性格不明の大形土坑の4種に分類して捉えることができる。汚水溜は、文字通り炊事等で使用した生活排水を一時的に溜めていた穴であり、瓦溜は家の建て替えなどにより廃棄処分された破損瓦を一括して投棄した穴である。また、ゴミ穴は日々の生活の中で生じる茶椀類や家具などの破損品、食べ物の残りカスなどを捨てた穴であり、ゴミ処分を屋敷地内に求めざるを得なかった江戸時代の都市生活の断面を象徴的に示す遺構である。このような土坑の分布を種類別に捉えることにより、建物配置も含めた屋敷地内の土地利用状況も明らかになるものと考える。

江戸時代前期の主要な土坑については、次のように分類される。

汚水溜・・・・ＳＫ010、ＳＫ212、ＳＫ228、ＳＫ333



1　アスファルト
2　茶褐色砂質土、礫
3　褐色土、礫
4　灰褐色土（瓦、炭化物を含む）
5　灰褐色粘質土と黒色粘土と淡黄灰色シルトブロックの互層
6　灰褐色土（炭化物を含む）
7　明褐色土、灰褐色土
8　褐色土（炭化物、礫を含む）
9　黒褐色土、褐色土、赤色土、灰白色シルト
10　暗灰褐色粘質土
11　明褐色砂質土
12　暗灰褐色粘質土（植物遺体、炭化物を含む）
13　暗灰褐色粘質土（植物遺体、炭化物を含む）
14　灰褐色砂質土（植物遺体、炭化物を含む）
15　灰褐色砂質土（炭化物を含む）
16　暗灰褐色粘質土（炭化物を含む）
17　褐色粘質土（炭化物を含む）
18　礫層
19　暗褐色土（礫を含む）
20　暗灰色土、褐色土
21　灰褐色砂質土
22　暗灰色粘土と灰色砂の互層（植物遺体を含む）
23　灰色砂と黒色粘土の互層
24　暗灰褐色粘土（炭化物を含む）
25　灰色粘質土（炭化物を含む）
26　暗灰色粘土（炭化物を含む）
27　攪乱

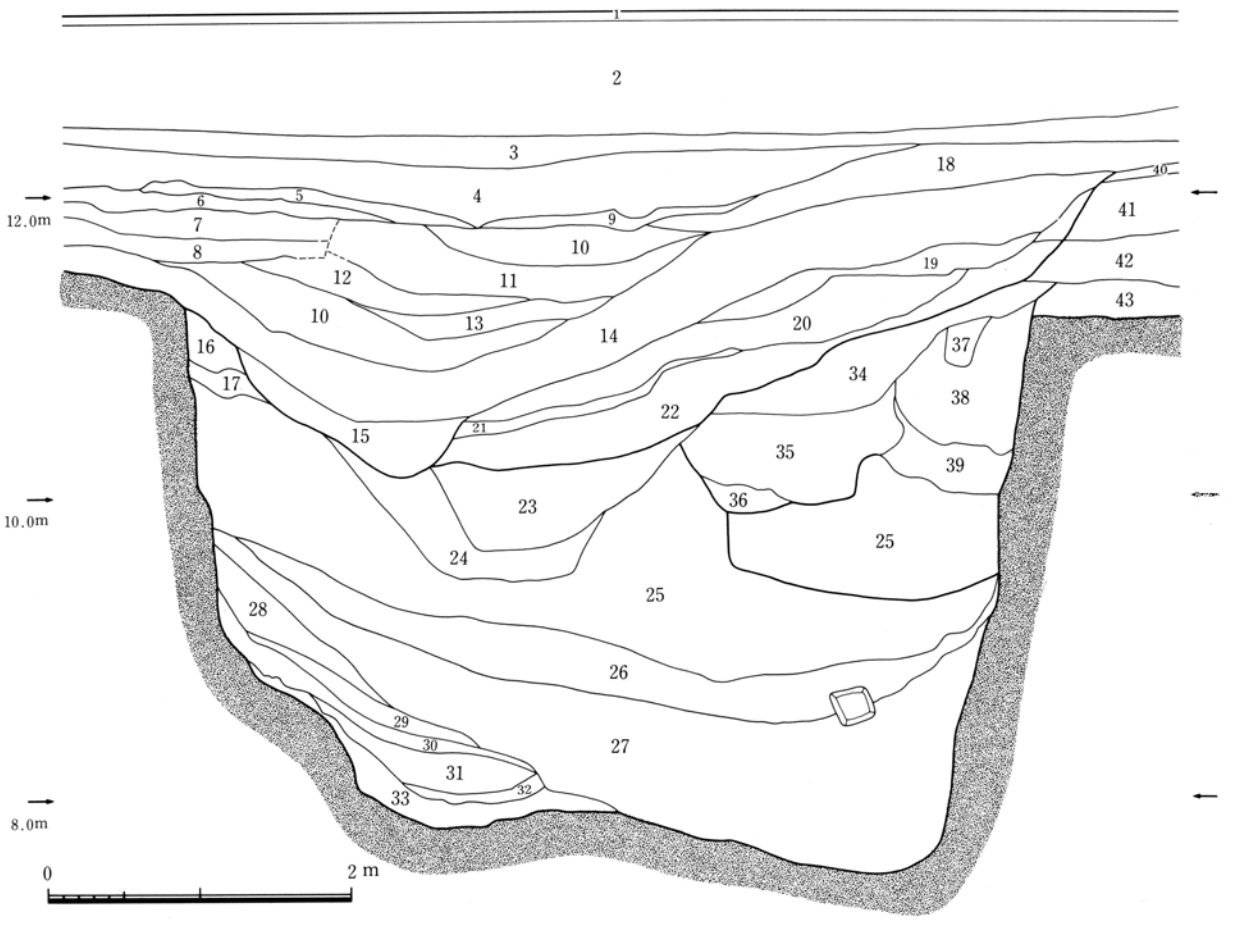
図74　ＳＫ010断面実測図

瓦溜・・・・・ＳＫ015、ＳＫ123、ＳＫ210、ＳＫ211、ＳＫ304

ゴミ穴・・・・ＳＫ213（210）

ＳＫ010　0区から1区にかけて、発掘調査区南壁で検出された汚水溜土坑である。さらに調査区外へと続いている。埋土には炭化物や植物遺体が多く含まれている。平面形は方形ないし長方形を示すと考えられ、明らかになった一辺の長さは6.0mを測る。深さは2.2mほど。肥前産呉須絵丸椀、白磁香炉、鉄製なたなどが出土しており、時期は17世紀末から18世紀前半代とみられる。

ＳＫ212　1区から2区にかけて、発掘調査区南壁で検出された汚水溜土坑である。ＳＫ123、さらにその後に大形のＳＫ101により切られている。埋土は炭化物、植物遺体を含む。平面形は不明。深さ4.0m以上を測る大形土坑である。大量の瀬戸美濃産・肥前産の陶磁器類、漆椀、下駄などの木製品、三葉葵の金箔などが出土しており、時期は17世紀後半から18世紀前半とみられる。



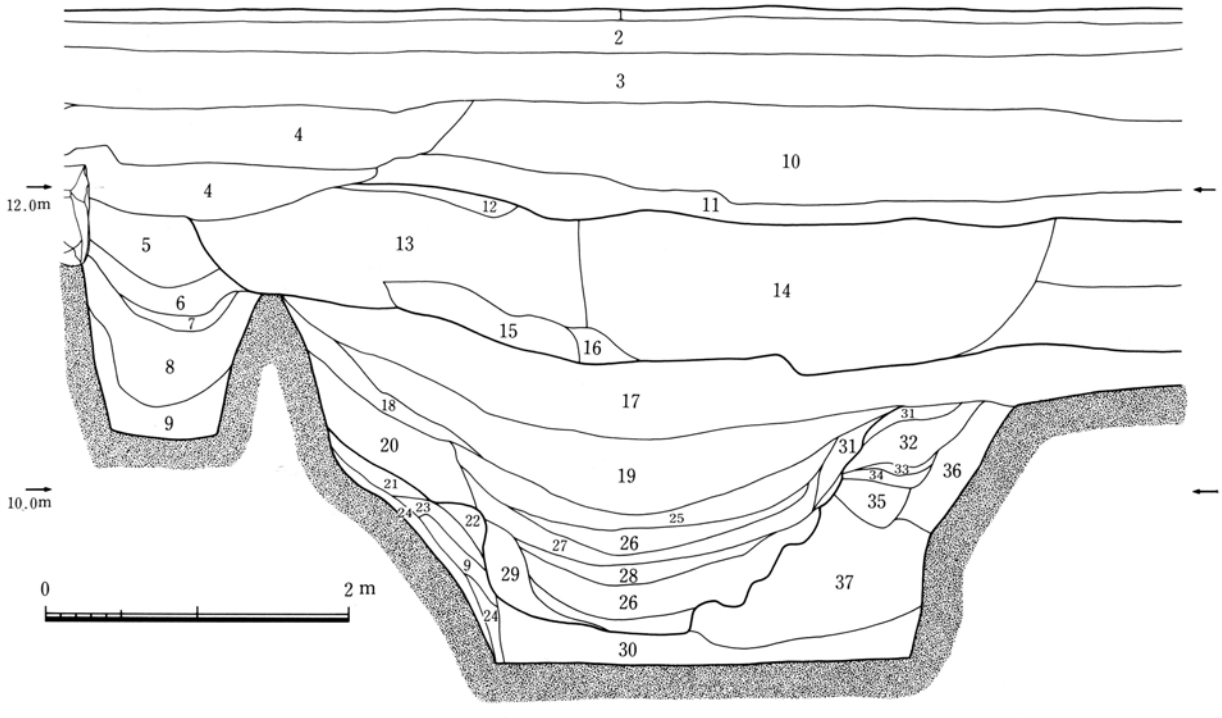
1　アスファルト
2　茶褐色砂質土、礫
3　褐色土、礫
4　褐色土
5　褐色土
6　褐色土
7　褐色土（炭化物を含む）
8　灰褐色粘土（炭化物を含む）
9　黄色土
10　褐色土
11　暗褐色粘土（炭化物を含む）
12　褐色土、黄灰色砂
13　褐色粘土
14　暗灰褐色土（炭化物を含む）
15　灰褐色粘土（炭化物を含む）
16　暗灰色粘土、橙色シルト
17　黄褐色砂（瓦を含む）
18　褐色土（礫、炭化物を含む）
19　灰褐色土、黄灰色土
20　暗褐色土（炭化物を含む）
21　暗褐色土、淡黄灰色シルトブロック
22　暗褐色土（炭化物を含む）
23　灰褐色粘質土と黄褐色砂の互層
24　灰褐色土と灰色粘土の互層
25　灰褐色土、赤色土（炭化物を含む）
26　暗灰色土
27　灰色粘土
28　灰褐色土と灰色粘土の互層
29　暗灰色粘土
30　灰色粘質土
31　灰褐色土、灰白色シルト
32　灰色粘土
33　灰色粘土、灰白色シルト
34　褐色粘土
35　褐色粘土（下層に瓦溜り）
36　灰色粘土（炭化物を含む）
37　灰褐色土
38　黄灰色粘質シルト
39　褐色粘土、暗褐色粘土（炭化物を含む）
40　明黄褐色砂質土（瓦、炭化物を含む）
41　褐色土（炭化物を含む）
42　灰褐色粘土、黒色粘土
43　黒褐色粘土

図75　ＳＫ212・ＳＫ101断面実測図

ＳＫ333　３区において、発掘調査区東壁で検出された汚水溜土坑である。屋敷地区画溝ＳＤ202のすぐ南側に掘られている。平面形は不整楕円形を呈するようで、なお調査区外へと続いている。壁際で測った短径は、約5.2mを数える。底面短径長は4.5m、深さはおよそ2.8mである。埋土は炭化物、木片を含む。肥前産呉須絵皿、瀬戸美濃産灰釉椀、下駄・櫛・杓などの木製品、刀装具、筒形容器、かんざし、人形などが出土しており、時期は17世紀後半には機能していたとみられる。

ＳＫ228　３区において検出された汚水溜土坑。ＳＤ202の南側、ＳＥ359のすぐ西に掘られている。したがってＳＥ359に関する遺構であると捉えられる。大形のＳＫ341の中に、ＳＫ211、ＳＫ229、ＳＫ304と並んで掘り込まれているが、埋土の堆積状況からみると、ＳＫ211とＳＫ228はＳＫ229とＳＫ304を切って築かれている。平面形は不整楕円形で、短径は約3.0m、検出面からの深さは2.1mを測る。

ＳＫ015　０区において検出された瓦溜土坑である。屋敷地境界を示すとみられる柵列ＳＡ101、ＳＡ102、ＳＡ103の西側に掘られている。平面形は不整楕円形を呈し、長径6.9m、短径5.1m、検出面からの深さ1.0mを測る。



1　アスファルト
2　礫層
3　茶褐色砂質土、玉砂利面
4　攪乱
5　明灰茶褐色ブロック
6　明灰茶褐色ブロック
7　灰白色粘土ブロック
8　暗灰褐色粘質土
9　淡灰褐色粘質土
10　淡茶褐色砂質土
11　暗茶褐色粘質土
12　黄褐色砂
13　暗灰茶褐色砂（炭化物を含む）
14　茶褐色砂質土
15　淡茶褐色砂（瓦を含む）
16　暗灰褐色砂
17　淡灰褐色粘質土
18　淡茶褐色シルト（炭化物を含む）
19　暗灰褐色粘質土
（炭化物、礫、瓦を含む）
20　暗茶褐色粘質土
21　茶褐色粘質土（炭化物を含む）
22　暗灰褐色粘土
23　黄白色粘質土
24　灰白色粘質土
24　灰白色シルト
25　暗灰褐色粘質土（礫、木片を含む）
26　暗灰褐色粘質土
27　暗灰褐色粘質土
（炭化物、木片を含む）
28　暗灰褐色粘質土
（炭化物、木片を含む）
29　淡灰褐色粘質土
30　暗灰褐色シルト、暗灰褐色粘質土
（炭化物を含む）
31　明茶褐色シルト（炭化物を含む）
32　暗灰褐色シルト（炭化物を含む）
33　淡黄灰色シルト（炭化物を含む）
34　淡灰褐色粘質土
35　淡灰褐色粘質土
36　暗灰褐色粘質土（斑土）
37　灰白色シルト、淡茶褐色シルト
黒褐色粘質土

図76　ＳＫ333断面実測図

ＳＫ210 (213)　２区において、ＳＤ203のすぐ北側に接して掘られている。ＳＫ210は瓦溜、ＳＫ213はゴミ穴の機能をもつ。２基ともに不定形な形態で、ＳＫ210は6.1m×4.5m、検出面からの深さ1.0m、ＳＫ213は4.6m×4.0m、検出面からの深さ1.3mの大きさである。ＳＫ210はＳＫ213を切って掘られている。ＳＫ210から瀬戸美濃産天目茶椀、肥前産呉須絵丸椀、小柄などが出土しており、時期は17世紀第３四半期とみられる。

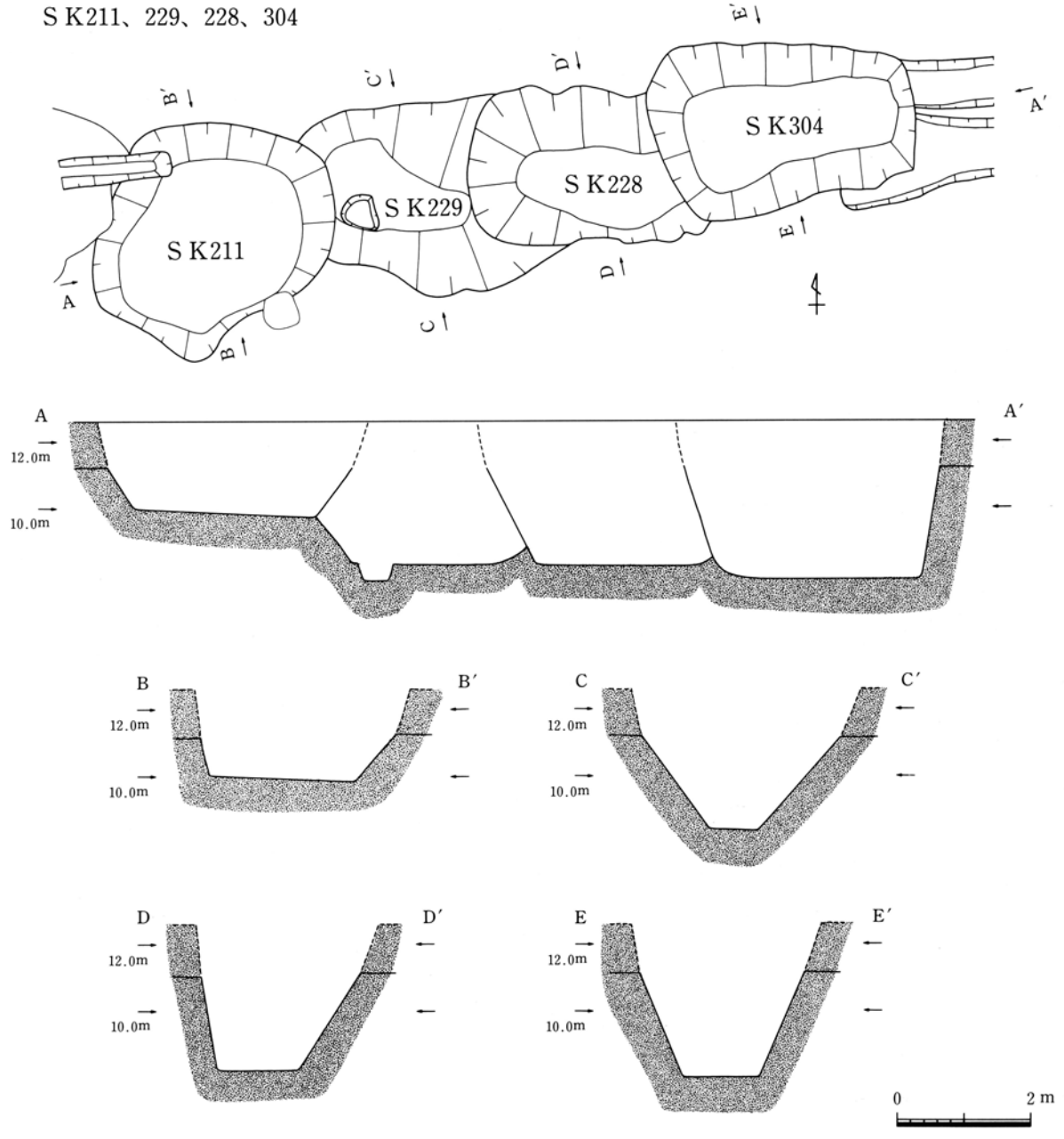


図77　近世前期土坑群実測図

ＳＫ209　２区において、屋敷地の区画溝ＳＤ202の南から検出された。大形土坑ＳＫ101の中に掘り込まれている。平面形は不定形な長方形を呈し、長径3.0m、短径2.3m、深さ5.4mを測り、非常に深い。肥前産青磁蓋・白磁小杯、常滑産甕などが出土しており、時期は17世紀末とみられる。

ＳＫ312　３区において検出された方形土坑。南端はＳＤ301を切っている。長径5.2m、短径4.3～5.3mを測り、検出面からの深さは3.3mほどと非常に深い。廃棄土坑の一種か。

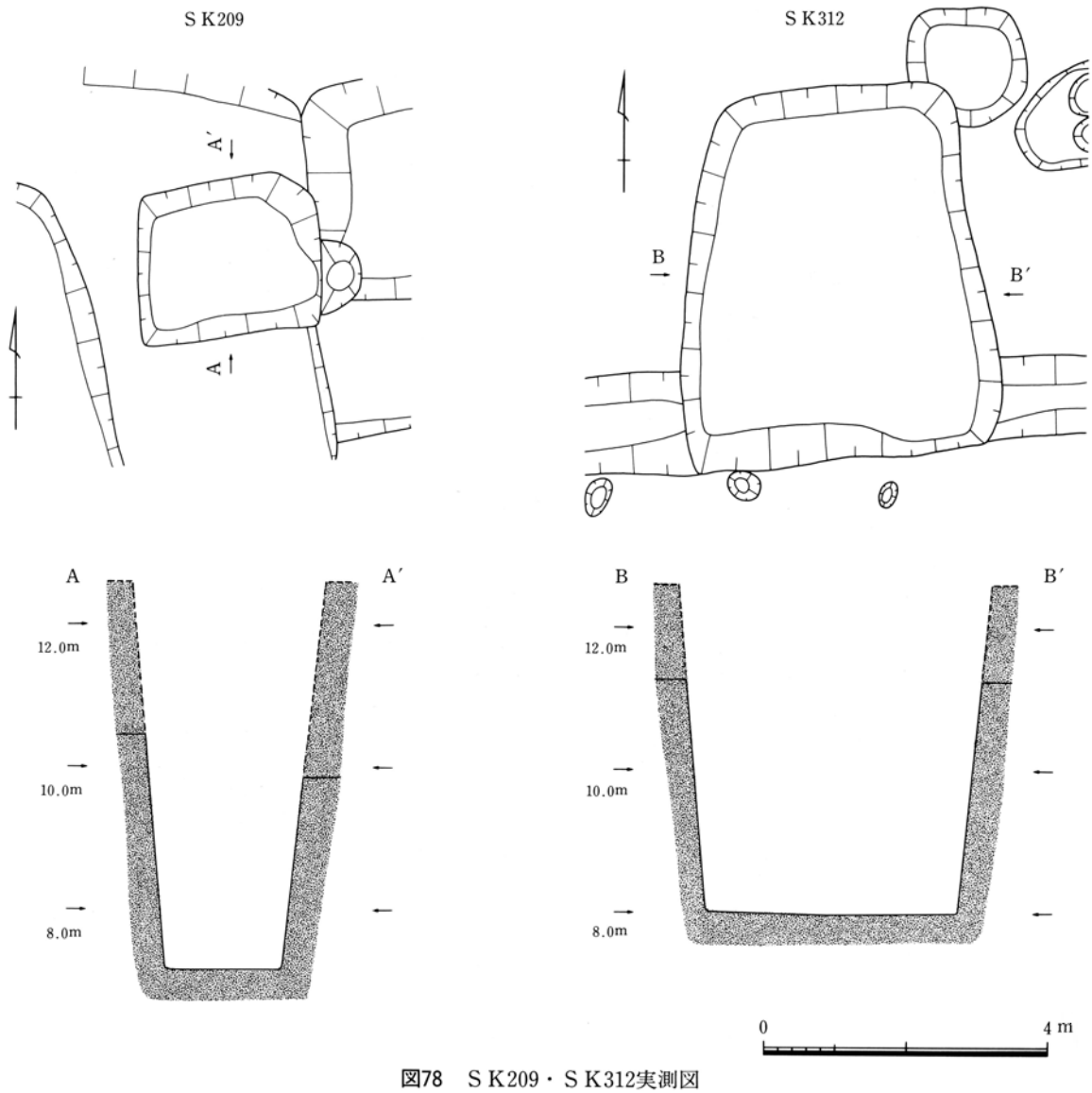
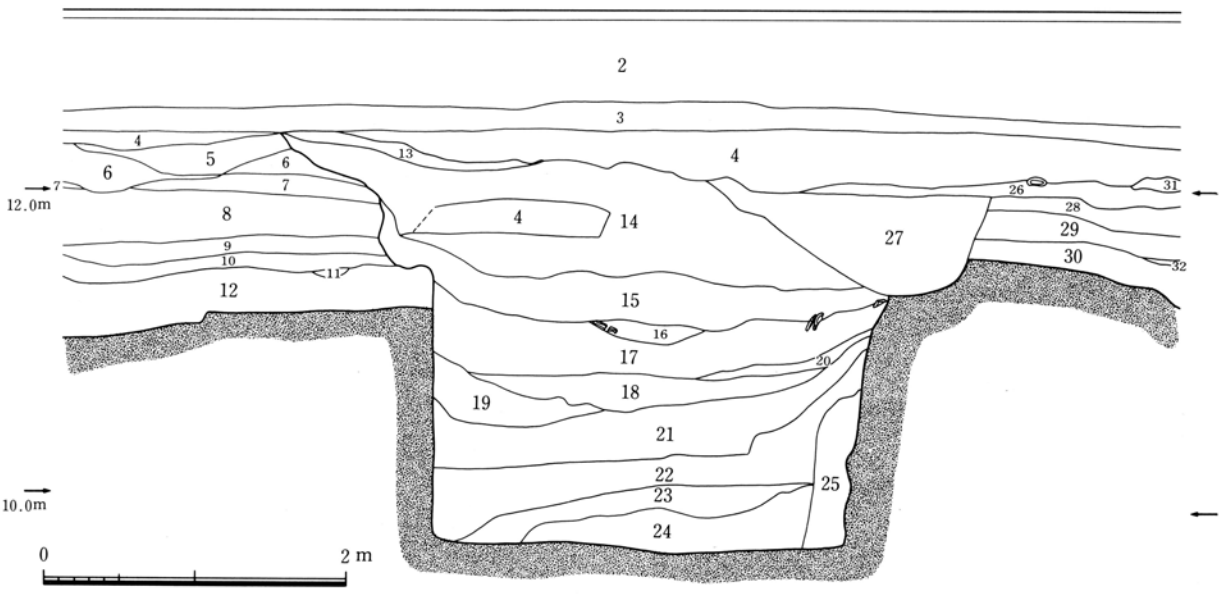


図78　ＳＫ209・ＳＫ312実測図

ＳＫ204　２区において、調査区南端から検出された。ＳＫ101、ＳＫ212の近くに掘られている。調査区外へと続くが、方形土坑とみられる。短辺3.3m、他辺の残存長2.3mを測り、深さは2.7mと非常に深い。

（加藤安信）



1　アスファルト
2　茶褐色砂質土、礫
3　褐色土、礫
4　褐色土
5　暗灰褐色粘質土
6　灰褐色土
7　灰褐色粘土、黒色粘土
8　灰褐色粘質土
9　灰褐色粘質土
10　黒色粘土
11　灰褐色砂質土
12　黒褐色粘土
13　褐色土
14　褐色粘質土（炭化物を含む）
15　褐色粘質土（炭化物を含む）
16　褐色粘質土、黒色粘土
17　褐色粘質土（炭化物を含む）
18　褐色粘質土（炭化物を含む）
19　褐色粘質土、黒色粘土ブロック
　　黄灰色シルトブロック
20　灰褐色土
21　褐色粘質土
22　灰色粘土（瓦を含む）
23　灰色粘土（瓦を含む）
24　暗灰色粘土、灰色粘土
25　黄灰色シルト、黒褐色粘土
26　褐色土
27　灰褐色粘質土（礫を含む）
28　褐色土（礫を含む）
28　褐色土（炭化物を含む）
29　灰褐色粘土（炭化物を含む）
30　暗灰褐色土（炭化物を含む）
31　褐色土
32　褐色土

図79　ＳＫ204断面実測図

2．近世後期の遺構

概要

ここでは18世紀中ごろから19世紀中ごろに属する遺構を江戸時代後期の遺構として取り扱う。江戸時代前期に比べて、主として建物遺構のような武士の生活を具体的に示す遺構群が検出されたこと、及び明治初期の日本帝国陸軍による接収に伴う移転・廃絶時の遺構の一部が明らかとなったことがこの期の特色である。

寛文３年に三万石を拝領していた成瀬、竹腰両氏が二の丸地内から移転してきた屋敷替えに伴って、当該地には３軒の屋敷地が宛がわれた。絵図によれば、幕末時には三万石取りの竹腰、四千石取りの山澄、六百石取りの熊谷の三者が発掘調査区辺りに屋敷地を構えていたことがわかっている。したがって検出された遺構の多くは３軒の屋敷に伴うものと考えられるが、後期になると背割ラインいっぱいまでの屋敷地全域から遺構が検出されるようになる。したがって、前期から後期にかけて、屋敷空間の利用に変化があったと考えられる。

ＳＢ001

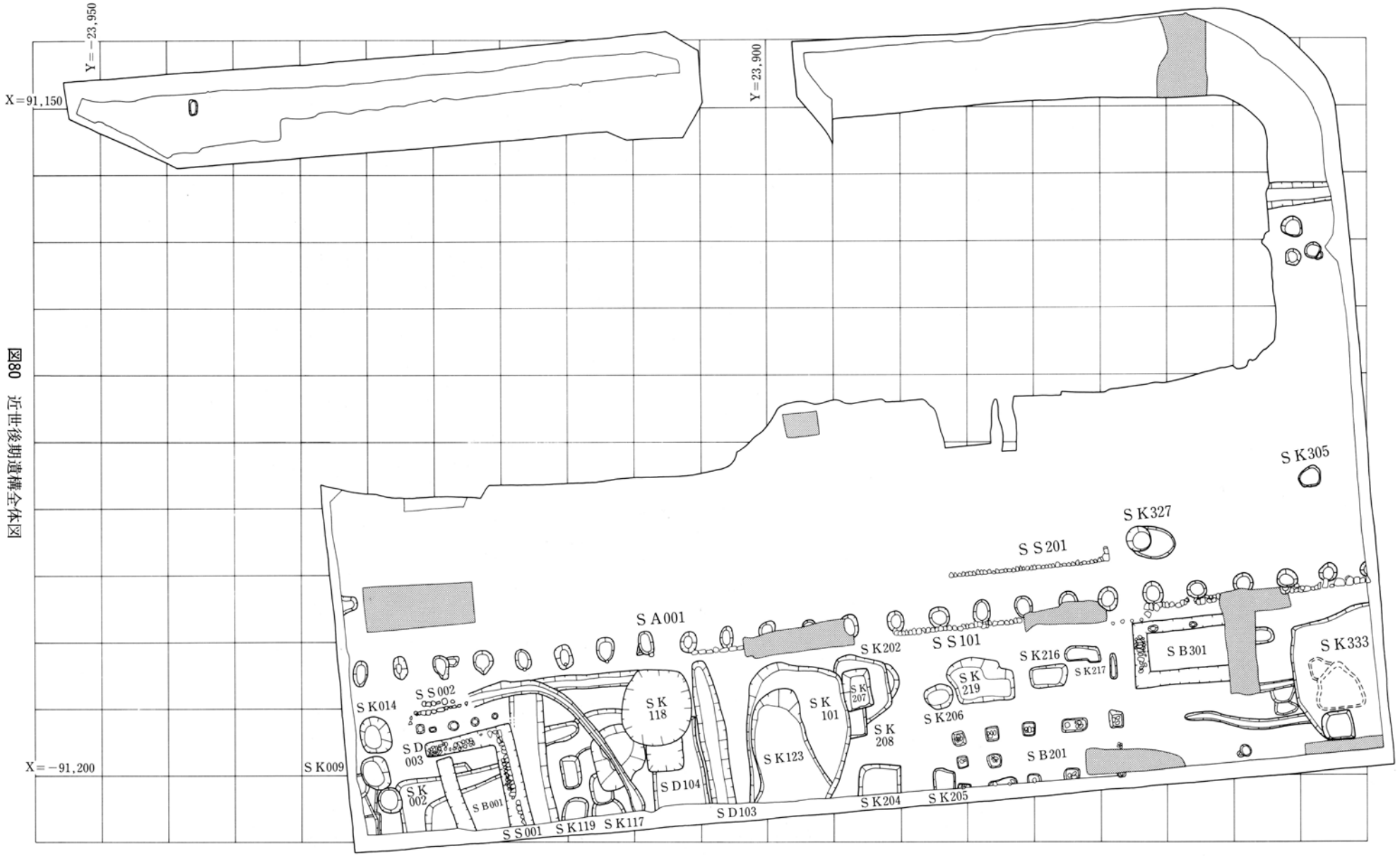


図80　近世後期遺構全体図

屋敷地境

江戸期を通じて、屋敷地境の形態はおおまかに次のような３段階をたどっている。

第一段階は、17世紀初頭の三の丸造成時から17世紀中頃にいたる時期で、その形態は簡単な木柵で区切られていた。

第二段階は、17世紀の後半から18世紀の後半にいたる時期で、境界には板塀や溝が用いられた。

そして、第三段階の18世紀末から幕末にかけては、石垣を積み、塀瓦を葺いた土塀に変っていった。ＳＡ003では溝を埋めたのち石垣を築き、その上に塀を建てている。

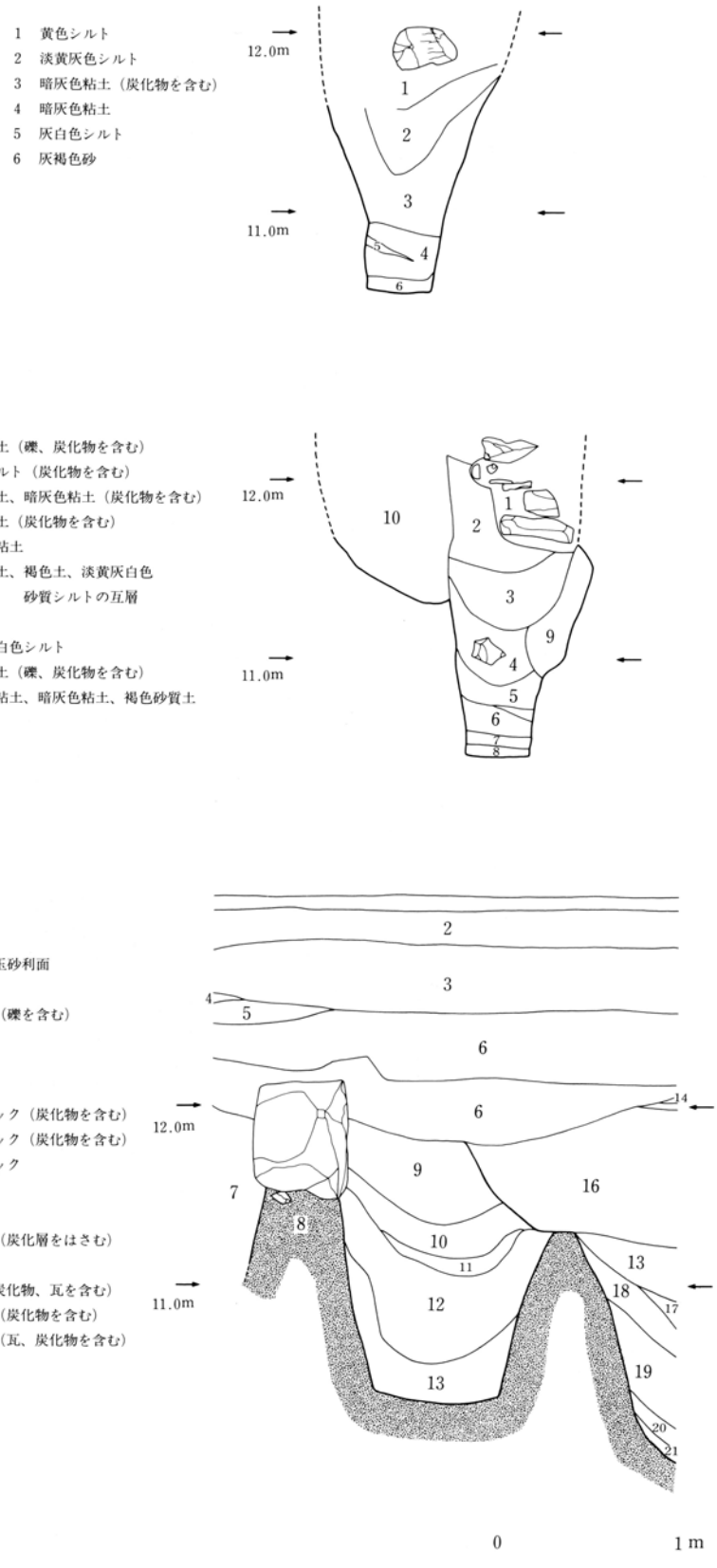
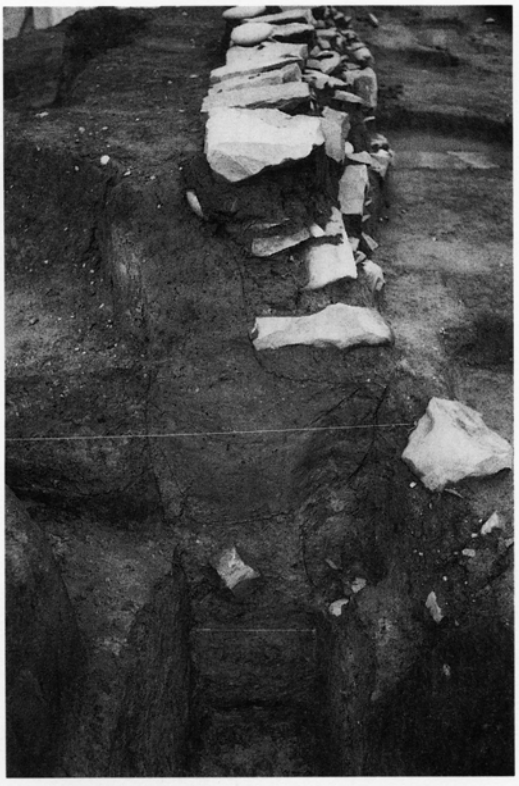


図81　ＳＡ003断面実測図

石列（ＳＳ）

ＳＳ101　　１区から３区にかけて、前期の区画溝ＳＤ202の上面より検出された。素掘り溝の形状の屋敷境が石垣土塀へと変化したことを最もよく示す遺構である。石列はＳＤ202の北肩上にほぼ並行して築かれている。攪乱により部分的に破壊されているが、現存長で35．０ｍを測りさらに東側調査区外へと続いている。一辺20～70㎝程度の直方体に近い石を２段積み上げて築いており、南側に対して面をそろえている。



ＳＳ101は前期の区画溝ＳＤ202を埋めて築かれている。この区画ラインは前期・後期を通じて変っていない。

図82　ＳＳ101実測図(1)

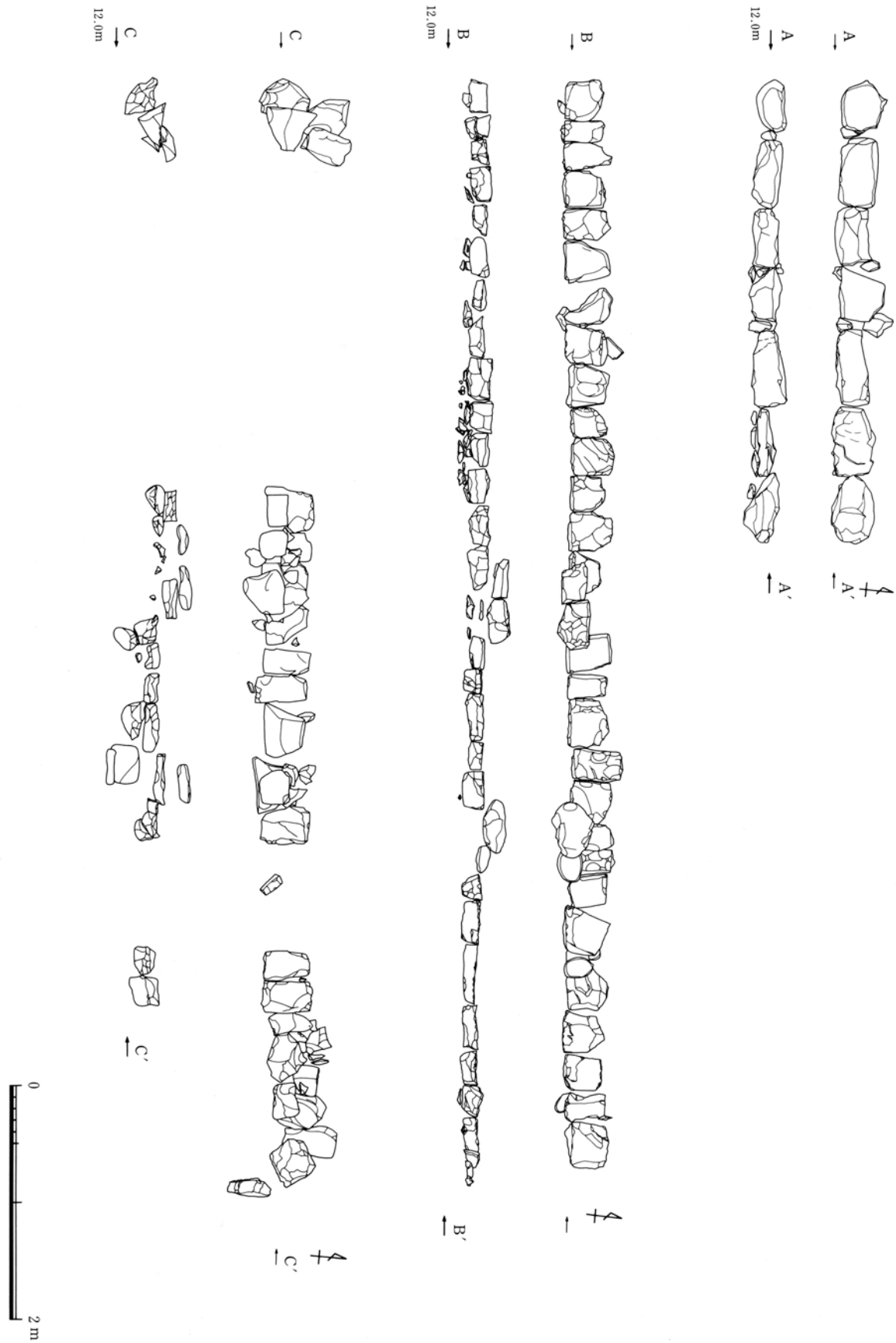


図83　ＳＳ101実測図(2)

ＳＳ201　２区において、ＳＤ203の上面から検出された。石列はＳＤ203の南肩上にほぼ並行して築かれている。したがって、その方位はＮ－83°－Ｅをとる。石積みはＳＳ101とは異なり、１段のみに限られている。検出長は12.0m。東端にはやや大きめの石が置かれ、しかも内側すなわち北側にもう一つ石が置かれているので、ここで終わっているものと判断される。ＳＳ101と同じように南側に対して面をそろえている。このことから考えると、これら二つの石列は北側の屋敷地、つまり竹腰側から築かれたものであり、両者が作る空間は入口状の通路であったとみられる。

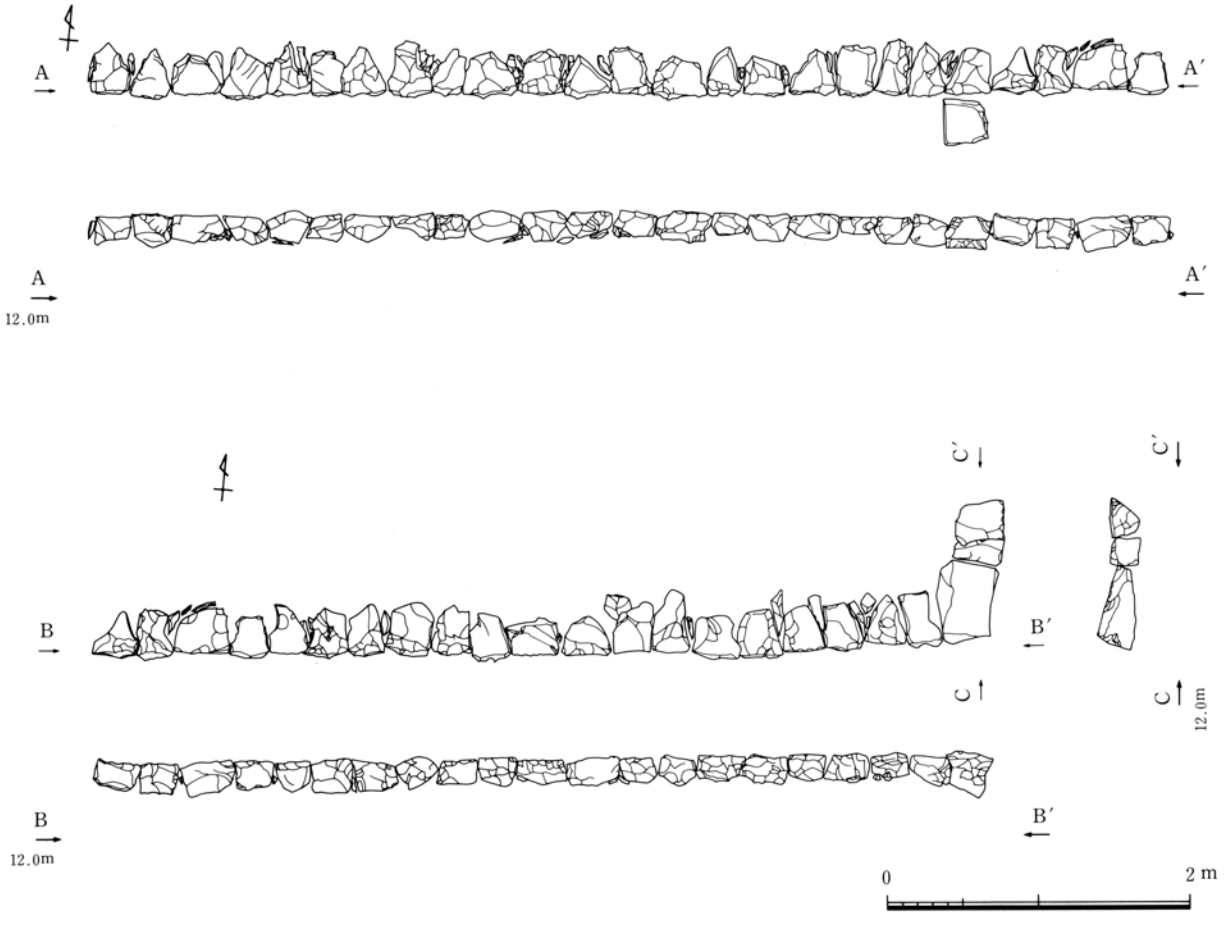


図84　ＳＳ201実測図

ＳＳ002　０区において、ＳＤ005の上面、ＳＢ001のすぐ北側から検出された。幅30cmの溝の両側に石列があり、石積み側溝の一部に当たると考えられる。断面図に示されているように、石列は溝の底部近くから１段検出されたのみであるが、上位は飛ばされたのかも知れない。石積み方法、石材は前記２者と同一である。破壊されており、残存長は4.0mのみ。ＳＢ001に伴うものか。

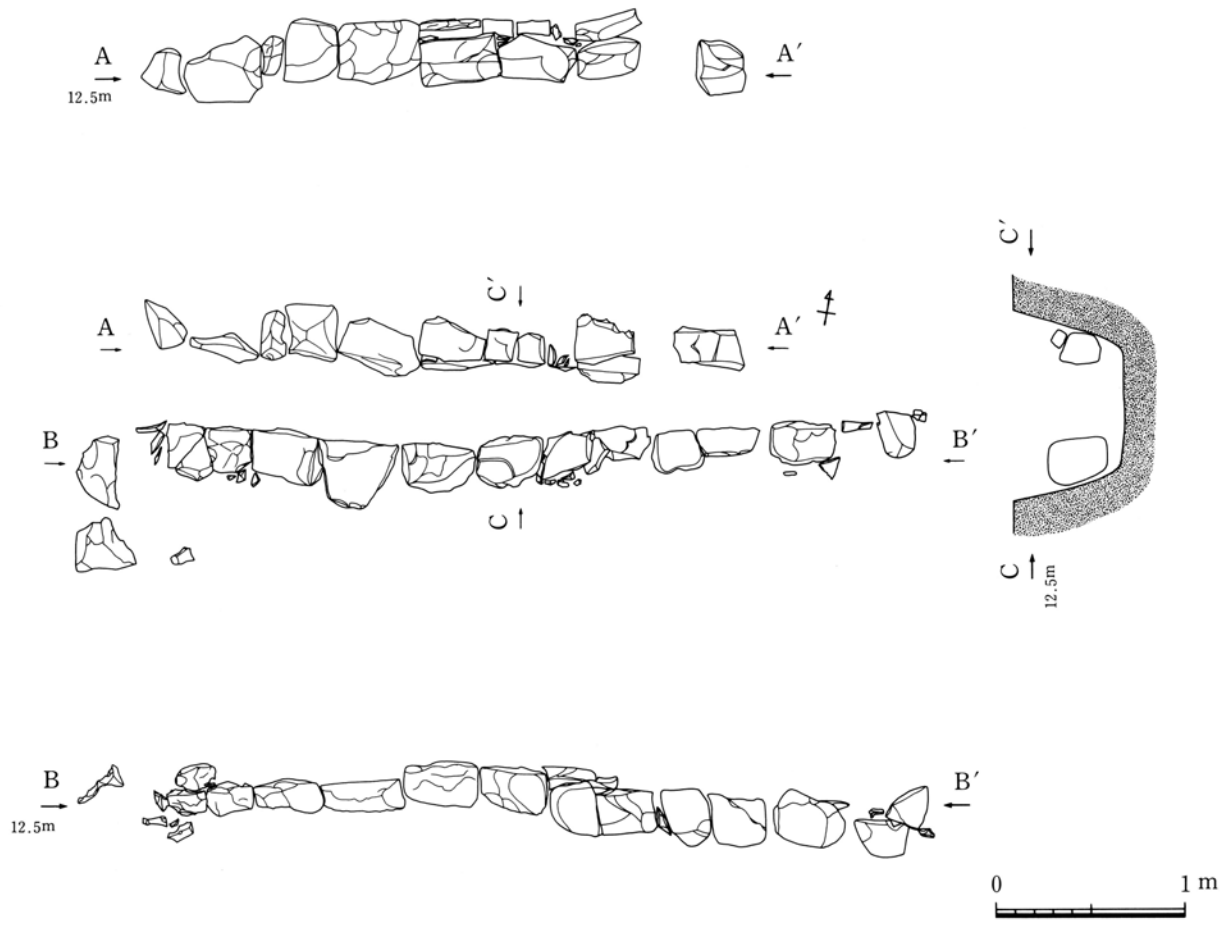


図85　ＳＳ002実測図

建物跡（ＳＢ）

ＳＢ001　　0区南西隅から検出された瓦葺の建物遺構である。南側の調査区外へと続いている。ＳＤ003とＳＳ001は建物内部に位置する遺構とみられる。両者は直角につながる幅1.2～1.4mの一連の溝であり中に石積みがみられるが、石積みの手法が異なっていて同類のものとは見なしえない。ＳＤ003では乱石積みであるのに対し、ＳＳ001では一部に裏込めの小礫が詰められて東側に面が揃えてある。このため、前者を建物の布掘り版築状基礎と捉えることはできても、後者はそのようには見なし得ず、むしろ地業を施した建物基盤の縁の石垣と考えられる。しかし、ＳＳ001の構の深さが2.8mもあり、この溝が石列と同一の遺構であるかわからない。

北側に柱根のピットがみられるが、建物規模、入口は不明。山澄家の土蔵、倉庫のような堅固な建物であったのではないかと考える。

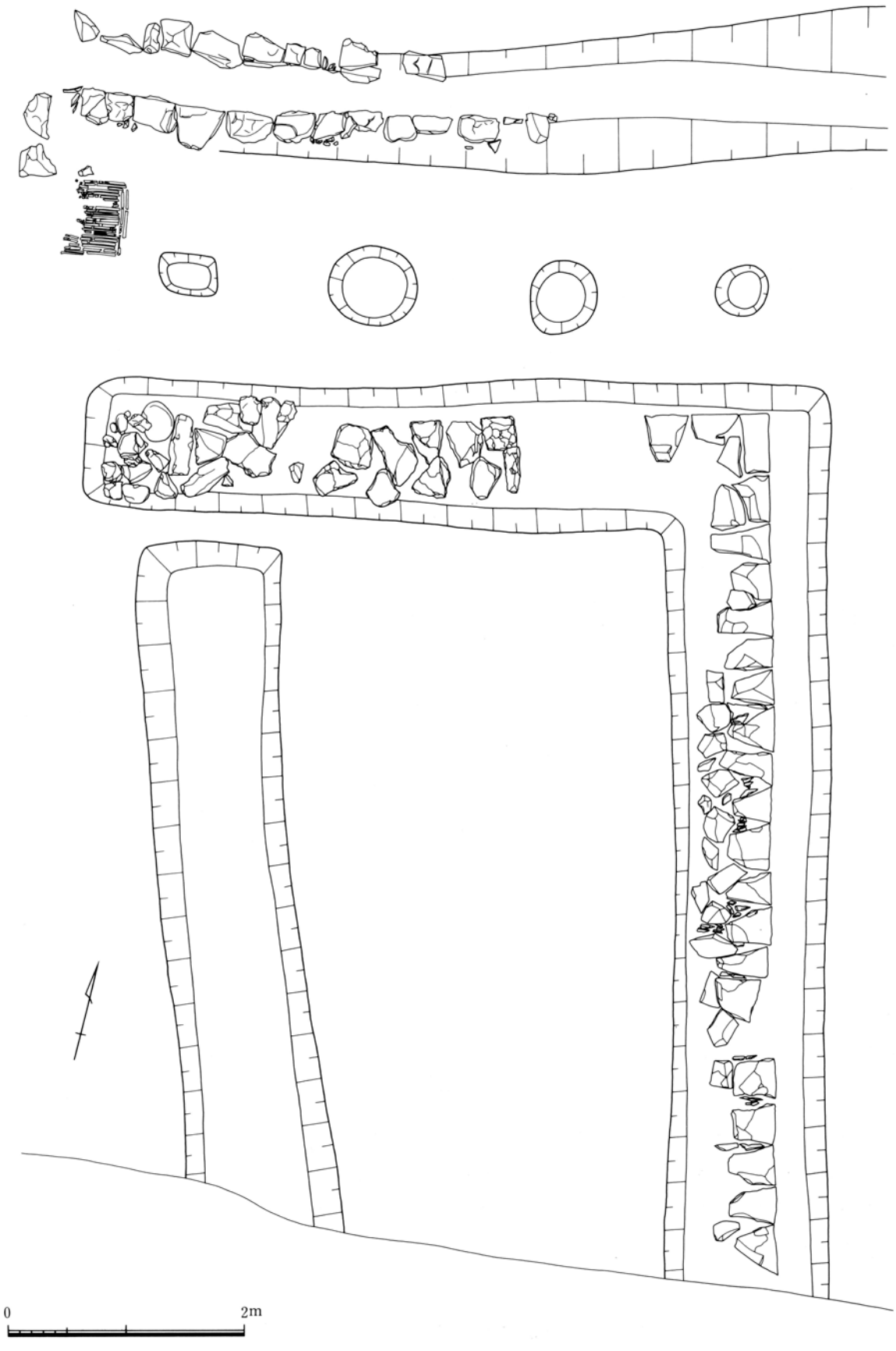


図86　ＳＢ001実測図

ＳＤ003　既述のようにＳＢ001に関連するとみられる遺構である。検出面から1.7m程掘り下げ、石を敷いていて、石は建物基礎の根石と考えられる。底面は平坦ではなく、西側の方が20cmくらい低くなっている。検出長4.6m、幅1.3mである。根石は長径20～50cmの角礫を一段敷いたのみである。

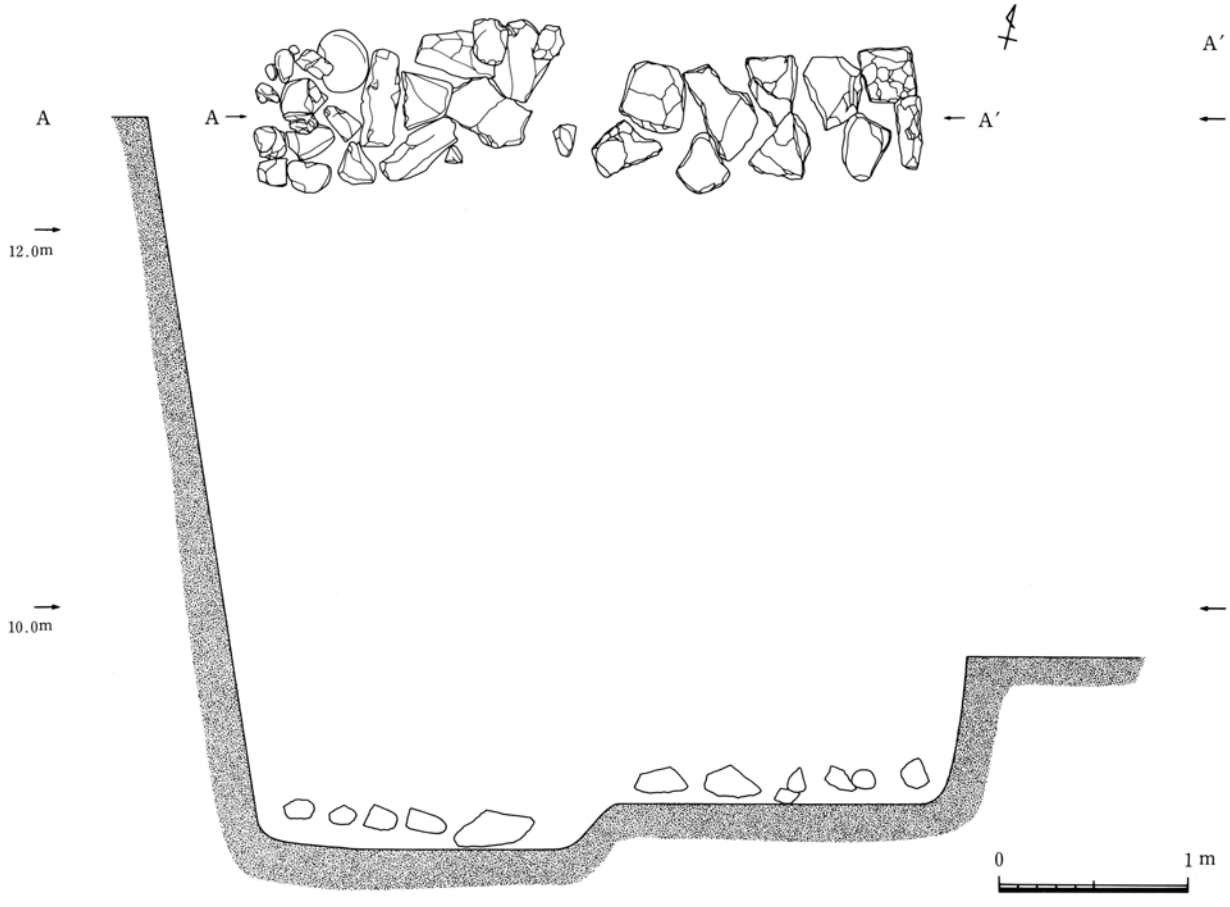


図87　ＳＤ003根石実測図

ＳＳ001　ＳＢ001関連遺構。検出長は7.7mであり、さらに調査区外の南方向に続いている。方向はＮ—16°—Ｗをとる。石列は一段で、東側に面をもち、北端で西に曲がり二列目の石までが残っている。裏込めの石として、やや小振りの角礫が用いられている。ＳＢ001の項で記したように、本遺構は深さ2.8mほどの構を掘り込んだ後、その内部を土で充塡し、その上に石列を築いている。このような工法の意味についてはよくわからない。

図88　ＳＳ001実測図

ＳＢ001柱穴列　ＳＤ003の北側から４基検出された。いずれも平面形は円形を呈している。方位はＮ—84°—Ｅをとる。３間の柱間は、心心間で西から1.6m、1.6m、1.6mと等間隔である。掘形レベルは12.2mであり、それぞれの径および深さは、西から75cm×60cm、60cm×60cm、45cm×60cm、50cm×80cmを測る。いずれにも、ピットの底面に根石として礫が敷いてある。しかし、最も東側のピットにみられるように検出面にも円礫が１点残っており、これを建物礎石であると考えると、根石の上に土を充塡した、一種の蠟燭地業の働きをなしているとみることができる。

１列検出されたのみであるため確実なことは言えないが、地業のあり方からみて建物は南側に展開していたといえる。建物規模は不明。

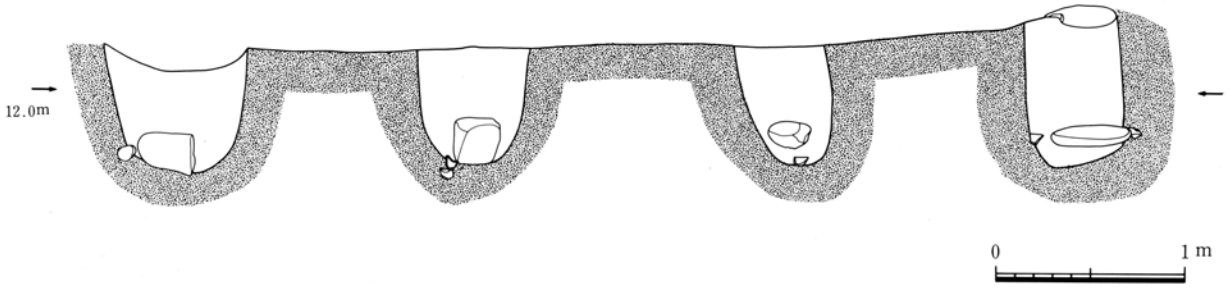


図89　ＳＢ001柱穴列断面実測図

ＳＸ001　０区において、ＳＢ001柱穴列のすぐ西側、ＳＳ002のすぐ南側から検出された不明遺構。検出面より熱田層を10cmほど方形に掘り下げて、平坦な瓦を立てて埋め込んでいる。瓦は、70cm×55cmほどの土坑に埋められている。機能については不明であるが、その位置からみて、雨水を屋根から集水し排水溝へと導くための施設かも知れない。

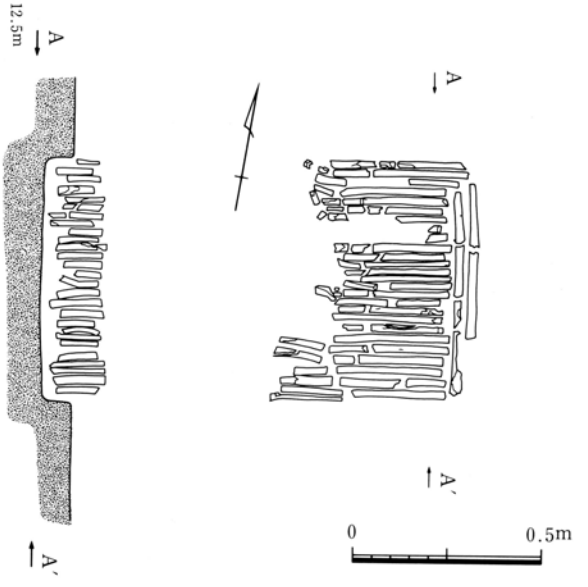


図90　ＳＸ001実測図

ＳＢ302　３区の調査区南端において検出された瓦葺の建物遺構。さらに調査区外へと続いている。梁間３間で西側に１間幅の廊下がつき、桁行２間以上の建物であったとみられる。検出面の高さは12.2mで、不整方形の柱穴が50cmから60cmほど掘り込まれている。柱穴の規模は、１辺90cmから100cm程度。全ての柱穴底面に根石が認められ、根石は角礫３～６点ほどからなる。土層断面図に示したように、各柱穴は地山である熱田層を深く掘り込んで作られてはおらず、整地面の中から地山の最上面である暗褐色ないし黒褐色粘土のレベルで留まっている。柱穴内には、暗灰褐色粘質土、黒色粘土、黄灰色シルトがブロック状に充塡されている。柱抜き取り痕が見られないため、ＳＢ001の場合と同じように、蠟燭地業の一種とみられ、建物礎石は剝取されたものと判断される。

建築時期は不明であるが、熊谷家の母屋の一部に相当する建物とみられる。

土坑（ＳＫ）

規模の上で大中小の各種の土坑が屋敷の裏手とみられる部分に掘られている。それらは、機能の点から前期の土坑同様に汚水溜土坑、瓦溜土坑、ゴミ穴土坑に分類されるが、ここでは主要な土坑について説明を加えておきたい。

ＳＫ117・ＳＫ119　１区において、発掘調査区南端から検出された小規模なゴミ穴土坑である。埋土の切り合い関係からみると、ＳＫ119の方が先に掘られている。両者共に調査区外へと続いていて全形はわからないが、共に不整楕円形を示すようで、ＳＫ119は検出長径2.6m、短径1.8m、深さ約1.8m、ＳＫ117は検出長径2.5m、短径1.4m、深さ2.4mを測る。

ＳＫ101　１区から２区にかけて掘られた大形の瓦溜土坑である。さらに調査区外の南方向に続いている。前期の汚水溜土坑ＳＫ212が埋められてから、その埋土を掘り込んで築かれている（断面実測図は図75参照）。平面形は長方形を呈し、長径は10.2m以上、短径は7.4m、深さは2.3mほどを測る。軒丸瓦、軒桟瓦、鬼瓦など各種の瓦が出土したが、この中に紀年銘のある鬼瓦が１点混じっていた。文字は、「誂主尾州名古屋□□羽根田甚六　享保六辛丑年三」と刻書されている。瓦と共に瀬戸美濃産・肥前産の茶椀類、硯、石臼、人形なども出土しており、19世紀中頃の遺構とみられる。

これらは、熊谷家の改築にともなって廃棄されたものと考えられる。

ＳＫ009・ＳＫ012・ＳＫ014　０区の南西端の一角から検出されたゴミ穴土坑群。山澄家の屋敷地内に属する。平面形は不整楕円形を呈し、ＳＫ009は長径2.5m、短径2.0m、深さ約1.0mの規模をもつ。周辺にもＳＫ012、ＳＫ014などのゴミ穴土坑が幾つか掘られている。ＳＫ012は不整楕円形を呈し、長径2.0m、短径1.7m、検出面からの深さ0.4m、ＳＫ014はほぼ円形で、2.8m×2.3m、検出面からの深さ1.8mを測る。ＳＫ009からは大量の日常雑器類が出土し、瀬戸美濃産の徳利、土瓶、水注、甕、摺鉢などの調理具、貯蔵具が大半を占めている。また、「御用」と墨書された火入れ、肥前磁器の牡丹唐草紋染付蓋物蓋、小形の箱物の蒔絵の断片も出土している。

これらの遺物は18世紀後半から19世紀前半代に属し、投棄は19世紀中ごろとみられる。

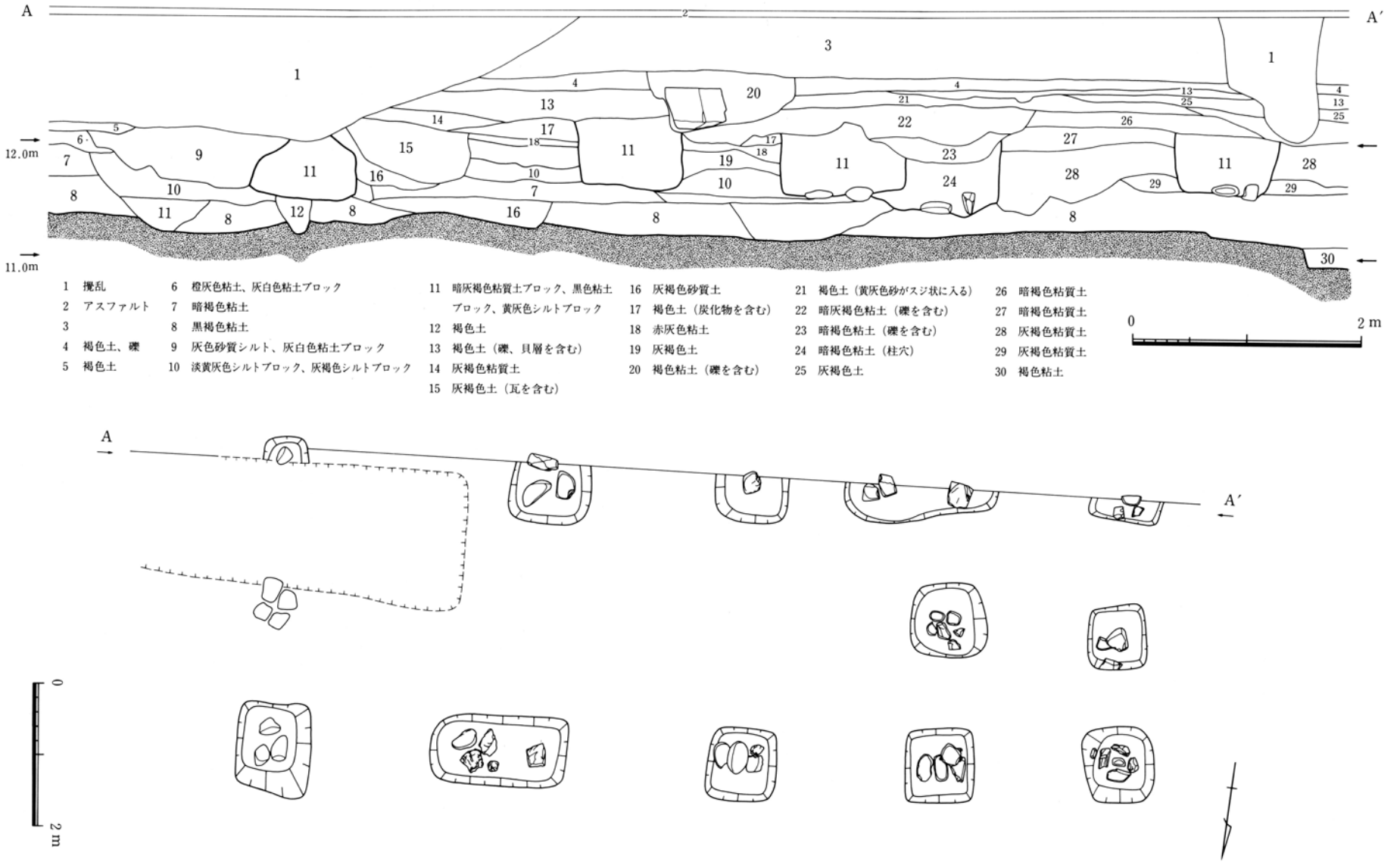
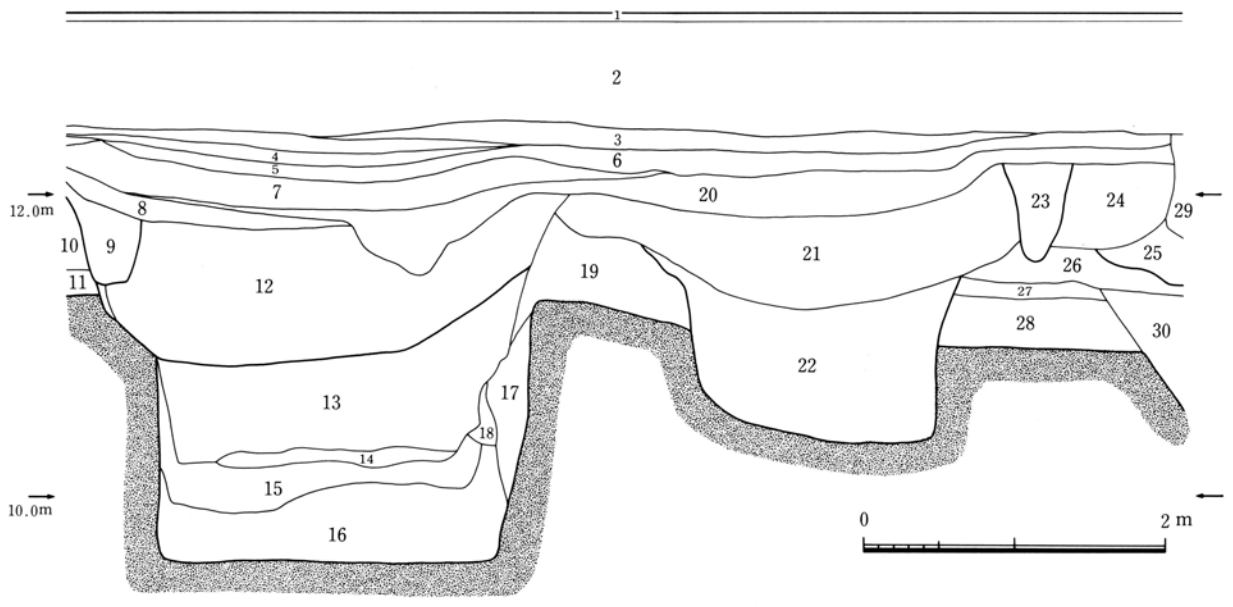
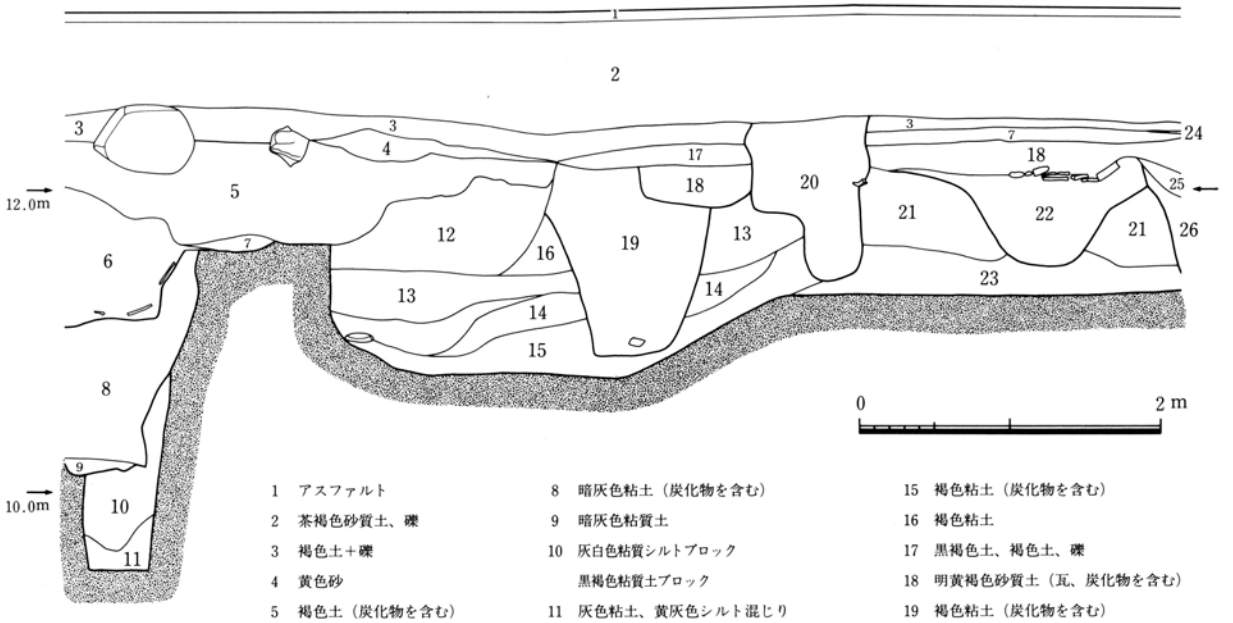


図91　S B002実測図



1 アスファルト
2 茶褐色砂質土、礫
3 鉄分沈堆層
4 褐色土＋礫
5 淡赤褐色粘土＋礫
6 黒褐色土、褐色土、礫
7 明黄褐色砂質土（炭化物を含む）
8 暗褐色粘質シルト（炭化物を含む）
9 暗褐色粘質シルト（炭化物を含む）
10 褐色土（炭化物を含む）
11 黒褐色粘土
12 褐色土（炭化物を含む）
13 暗灰褐色粘質土と黄灰色シルトの互層
14 暗灰色粘土、暗褐色土黄灰色シルト
15 暗灰褐色粘質土（炭化物、植物遺体を含む）
16 灰色砂質土と暗灰色粘土の互層
17 赤褐色粘土
18 黒色シルト
19 淡灰褐色土、褐色砂質土
20 灰褐色粘質土（瓦を含む）
21 灰褐色土（炭化物を含む）
22 褐色土、黒褐色粘質土
23 黄灰褐色シルト（瓦を含む）
24 灰褐色土（炭化物を含む）
25 灰褐色土（瓦、炭化物を含む）
26 黄灰褐色シルト（瓦を含む）
27 暗褐色粘土
28 暗褐色粘土、黒色粘土、黄灰色シルトブロック
29 褐色土、礫
30 灰褐色粘質土、黒色粘土、淡黄灰色シルトブロック

図92　ＳＫ117・ＳＫ119断面実測図



1 アスファルト
2 茶褐色砂質土、礫
3 褐色土＋礫
4 黄色砂
5 褐色土（炭化物を含む）
6 暗灰褐色粘土（炭化物を含む）
7 灰褐色砂
8 暗灰色粘土（炭化物を含む）
9 暗灰色粘質土
10 灰白色粘質シルトブロック
黒褐色粘質土ブロック
11 灰色粘土、黄灰色シルト混じり
12 黄灰色砂と灰色粘土の互層
13 褐色粘土（炭化物を含む）
14 褐色粘土（黄灰色シルトブロックを含む）
15 褐色粘土（炭化物を含む）
16 褐色粘土
17 黒褐色土、褐色土、礫
18 明黄褐色砂質土（瓦、炭化物を含む）
19 褐色粘土（炭化物を含む）
20 淡赤褐色粘土
21 褐色土
22 暗褐色粘土
23 黒褐色粘土
24 淡赤褐色粘土、礫
25 暗褐色粘質シルト（炭化物を含む）
26 暗褐色粘質シルト（暗灰色粘土を含む）

図93　ＳＫ174断面実測図

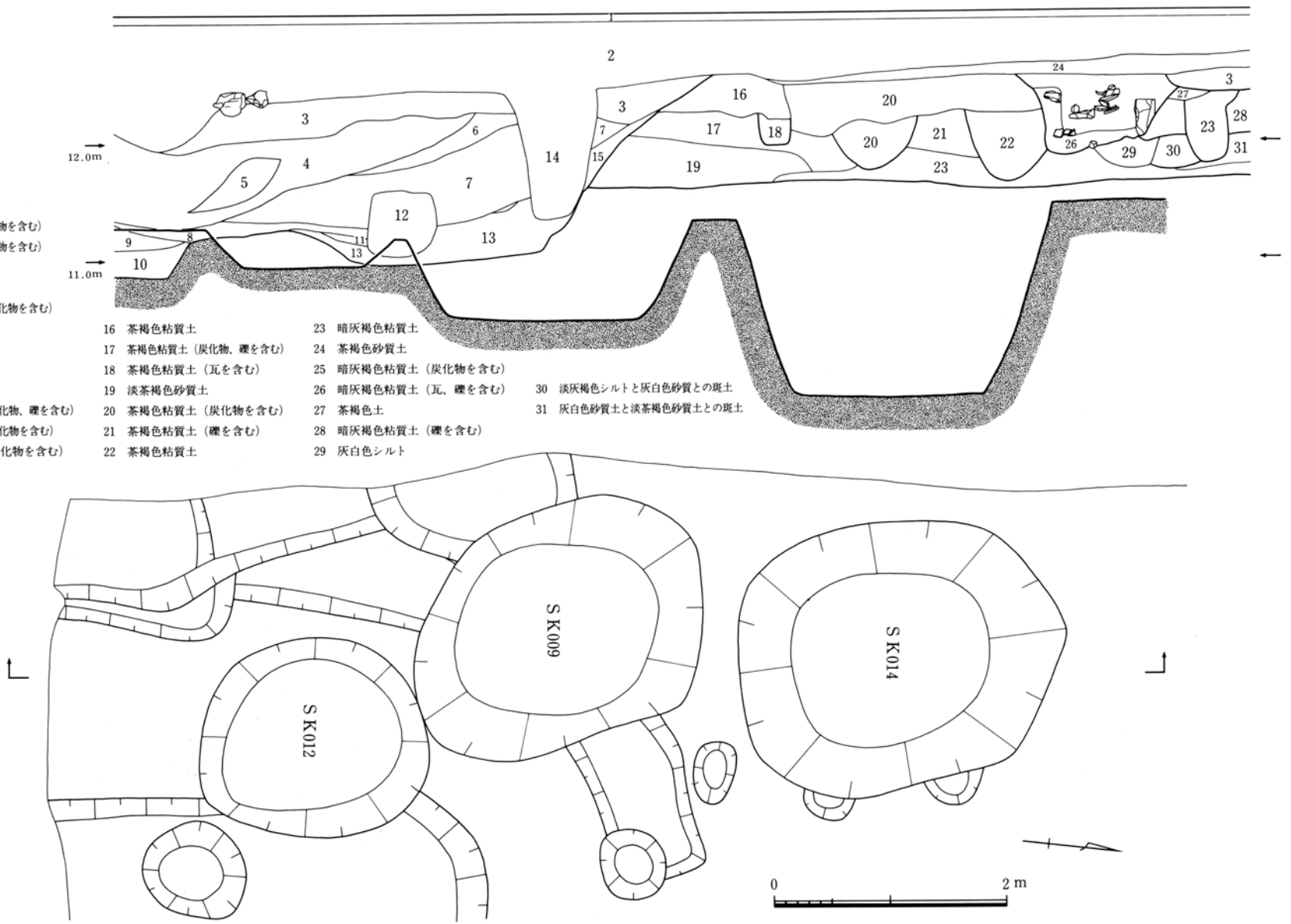
ＳＫ174　１区において、調査区南壁近くで検出された土坑である。さらに調査区外へと続いている。平面形は方形または長方形を呈するとみられ、一辺は2.0m、検出面からの深さは0.4mを測る。山澄家の屋敷地境に掘られている。

ＳＫ118　１区において検出された大形の土坑である。山澄家の北東隅近くに掘られている。攪乱がひどくて全形は窺えない。瀬戸美濃産・肥前産の椀皿類、灯明皿、水差しなどが出土していて、時期は19世紀前半から中ごろとみられる。

ＳＫ204　２区において、調査区南壁近くから検出された土坑である。さらに南側調査区外へと続く。瓦葺建物遺構ＳＢ002と大形の瓦溜土坑ＳＫ101の中間に位置する。平面形は方形を呈し、一辺3.3m、他辺2.2m以上、検出面からの深さ0.9mを測る。

（加藤安信）

ＳＫ101及びその周辺の近世後期土坑群



1 アスファルト
2 砂利層
3 茶褐色粘質土（炭化物を含む）
4 茶褐色粘質土（炭化物を含む）
5 茶褐色粘質土
6 茶褐色粘質土
7 淡灰褐色粘質土（炭化物を含む）
8 暗灰褐色粘質土
9 暗灰褐色粘質土
10 暗灰褐色粘質土
11 灰褐色粘質土
13 暗灰褐色粘質土（炭化物、礫を含む）
14 暗灰褐色粘質土（炭化物を含む）
15 茶褐色粘質土（炭化物を含む）
16 茶褐色粘質土
17 茶褐色粘質土（炭化物、礫を含む）
18 茶褐色粘質土（瓦を含む）
19 淡茶褐色砂質土
20 茶褐色粘質土（炭化物を含む）
21 茶褐色粘質土（礫を含む）
22 茶褐色粘質土
23 暗灰褐色粘質土
24 茶褐色砂質土
25 暗灰褐色粘質土（炭化物を含む）
26 暗灰褐色粘質土（瓦、礫を含む）
27 茶褐色土
28 暗灰褐色粘質土（礫を含む）
29 灰白色シルト
30 淡灰褐色シルトと灰白色砂質との斑土
31 灰白色砂質土と淡茶褐色砂質土との斑土

図94 近世後期土坑群実測図

3．　遺　　物

江戸時代の出土遺物は、陶磁器類（土器製品等を含む）が大半を占め、その他に焼塩壺、瓦･石製品･金属製品・木製品等がある。本節では、戦国時代同様陶磁器類を中心にその概要を見ることとし、その他の遺物についての説明は後述の各節に委ねるものとする。そして陶磁器類の扱いに際しては、各遺構から出土した遺物の一括性を重視し、用途分類に基づく器種組成を明らかにすることをその第一義とした。

(1)陶磁器類の分類と概要

分類

出土した陶磁器類の分類にあたっては口縁部計測法を利用した。まず、遺物の口縁を、用途を第１項目、器種を第２項目、器形を第３項目として分類し、個々の遺物を３桁数字で表示した。遺物観察表の器種がこれに当たる。また口縁部破片での分類のため器種・器形の分類に不統一な面が見られる点、通有の遺物名称と分類上の名称とのずれが多少存在する点を初めに断っておく。

用途については、１―供膳具、２―調理具、３―貯蔵具、４―灯火具、５―火具、６―化粧具、７―神仏具、８―喫煙具、９―調度具、０―その他に分類することとした。

それぞれの用途に基づく分類は以下の通りである。

１．供膳具

１椀　　口径が8.5cm以上のもの

1	天目椀	いわゆる天目形の椀。これに段付天目を含む。
2	丸椀	体部が丸みをもって立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。尾呂茶椀、御室茶椀を含む。
3	腰折椀	体部下方は丸みを帯び、上方は直立し、その境に稜線がはいる。
4	平椀	高台部からほぼ直線的に大きく開く体部を有する椀。
5	筒椀	腰が張って体部が円筒状を呈する椀。
6	端反椀	体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部が外反して開くタイプの椀。
7	広東椀	体部は内湾気味に立ち上がる。高台が逆三角形状を呈する。ここには小杉椀を含んでいる。
8	腰錆椀	体部下方は丸味を帯び、上方はほぼ直立し櫛描き沈線が施される。鉄釉と灰釉の掛け分けがなされる。
0	その他	

２小椀　　口径が8.5cm以下のもので、１―天目椀、２―丸椀、３―平椀、４―筒椀、
小杯　　５―端反椀については椀の分類をそのまま踏襲している。
猪口

6	猪口	高台から体部にかけて直線的に開き、高台は断面三角形状を呈する、見込

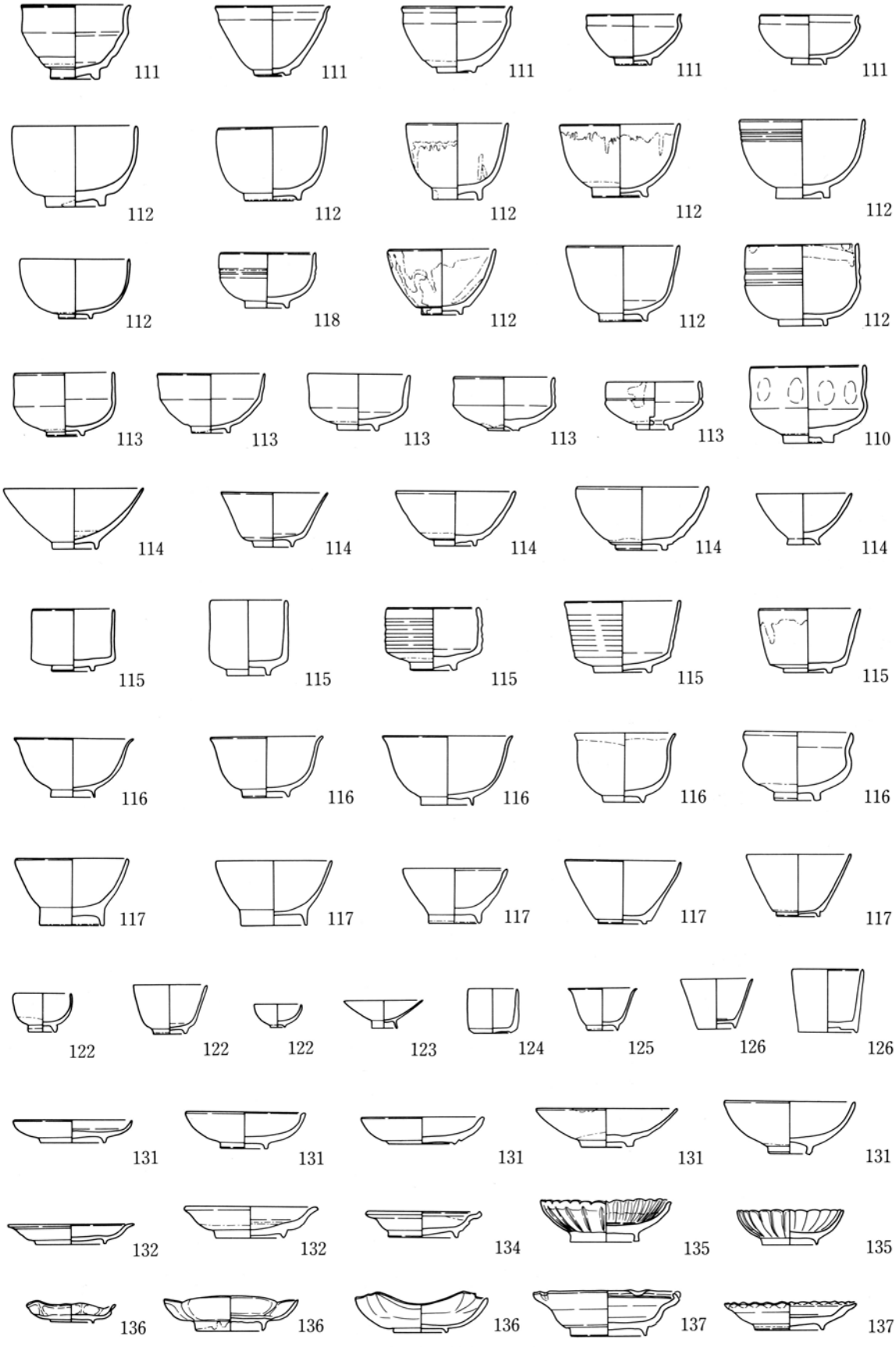


図95　近世陶磁器類分類図(1)

みの深い小型のもの。

7　筒丸

0　その他

3皿　1—丸皿、2—端反皿、3—稜皿、4—折縁皿、5—菊皿、7—ひだ・稜花皿は、器形的には戦国時代の皿の分類をそのまま踏襲している。

6　型打皿　成形用の型を用いて作られるもの。

0　その他

4鉢　1—丸鉢、2—端反鉢、3—折縁鉢、4—平鉢、5—型打鉢、6—稜花鉢は皿と同様の分類である。丸針と丸皿との区別は口径15cm以上のものを便宜的に鉢とした。また通有の大平鉢・黄瀬戸鉢は2—端反鉢に、笠原鉢は3—折縁鉢に分類した。

7　織部　銅緑釉、鉄釉系、灰釉系等の釉薬を用いて従来みられなかった器形をなすもの。向付、鉢等がある。

0　その他

2．調理具

1鍋、釜　1　内耳鍋　半球形の体部を有し、内面の口縁部直下に対となる横耳が付く。

2　羽釜　半球形の体部に鍔が付く。量的には少ない。

3　焙烙　底が丸く、器高に対し口径が大きい。内面に耳が付くものと付かないものとがある。

4　行平　体部は湾曲しながら立ち上がり、口縁は受口状を呈する。注口と把手、蓋が付く。

5　鍋　湾曲した体部に一対の吊り手がつく。

0　その他

2　鉢　1　片口鉢　円筒状の体部に片口がつく。食物の攪拌・混合、汁物の移替に用いる。

2　こね鉢　体部は丸みをもって立ち上がり、口唇部は内面に肥厚化して平坦面を持つ。食物等を手でこねる際に用いる。

0　その他

3　擂鉢　1　Ⅰ類　戦国時代の分類のII類に相当する。

2　II類　戦国時代の分類のIII類に当たる。

3　III類　体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部を肥厚化させ、口縁内面に突起もしくは段をもつ。17世紀に比定される。

4　IV類　体部は直線的で、上端部はやや外反し、口縁端部が立ち上がりながら膨らみを持つ。17世紀後葉に比定される。

5　V類　体部は直線的に開き、上端は外折し、口縁端部が折り返されて縁帯を形成する。18世紀前半に比定される。

6　VI類　折り返された口縁が体部と密着し、幅広の縁帯が形成される。18世紀後半に比定される。

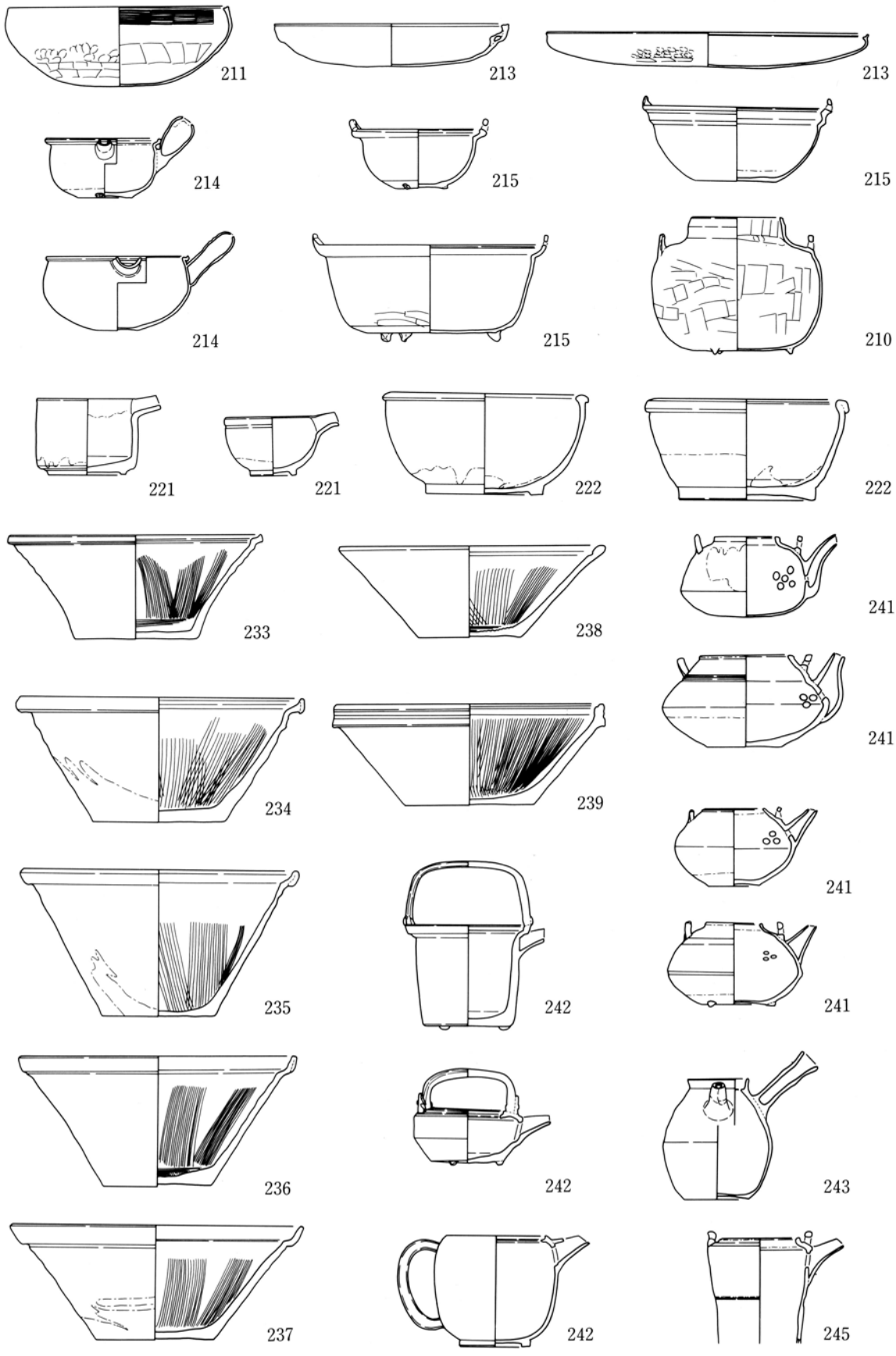


図96　近世陶磁器類分類図(2)

7　Ⅶ類　　Ⅵ類に類似するが、口縁は折り返さない。18世紀後葉に比定される。

8　Ⅷ類　　体部は直線的に開き、口縁端部がやや膨らみを持つ。19世紀代に比定される。

9　　いわゆる備前擂鉢、堺擂鉢と呼ばれているもの。

0　その他

4瓶　1　土瓶　　丸い体部の一方に注ぎ口がつき、体部上半に一対の耳を付け、その間に把手用の蔓が付けられるようにされているもの。

2　銚子　　体部上方または側面にアーチ上の把手が付き、注ぎ口はU字状を呈す。

3　急須　　丸い体部に把手と注ぎ口が90度の角度をもって取り付けられている。

4　燗徳利A　平底で胴部中央まで直立し、頸部にかけて緩やかにすぼまる。頸部以上はやや外反する。

5　燗徳利B　円筒形の体部にU字状の注ぎ口と一対の吊り手またはアーチ状の把手が付く。ちろりと言われる。

0　その他

3．貯蔵具

1瓶　徳利（1～6）徳利については、1－徳利A（高台を有するもの）、2－徳利B（平底のもの）、3－徳利C（体部に凹みを有し、横断面が三角形を呈する）4－徳利D（体部に凹みを有し、横断面が四角形を呈する）、5－徳利E（いわゆる高田徳利）、6－油徳利に分類した。

汁次（7～9）体部にアーチ状の把手を有し、筒状の注ぎ口が付く。体部が丸みを持つものを7－汁次A、円筒形のものを8－汁次B、その他が9－汁次C。

0　その他　　しびん等

2壺　壺に関しては、蓋の有無により1－蓋付壺、2－無蓋壺に分類し、いわゆる茶壺形のものは3－茶壺とした。さらに茶入れと称される小型品は4－茶入とし1器種とした。さらに材質により5－土師壺を設定した。

0　その他

3甕A　1～6　　いづれも常滑産の甕で、口縁の形態により分類を行った。1はN字形の最末期、2はY字形の初期段階、3はいわゆるY字形口縁、4はT字形口縁、5は「字形の口縁断面を呈する。6としてその他の甕を扱った。

4甕B　1　半胴A　　高台を有し、体部はやや内湾気味に立ちあがる。口縁が肥厚する。

2　　半胴Aに対し、口縁が肥厚せず、外反する。

3　銭甕　　平底で、体部は丸みをもって立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。

4　　胴丸形の甕で、体部上方に沈線が巡る。口縁は外へ折り返されている。

5鉢　1　蓋物A　　蓋付きの鉢で、口縁端部が無釉で蓋受けの無いもの。

2　蓋物B　　蓋付きの鉢で口縁部に蓋受けがあるもの。

0　その他

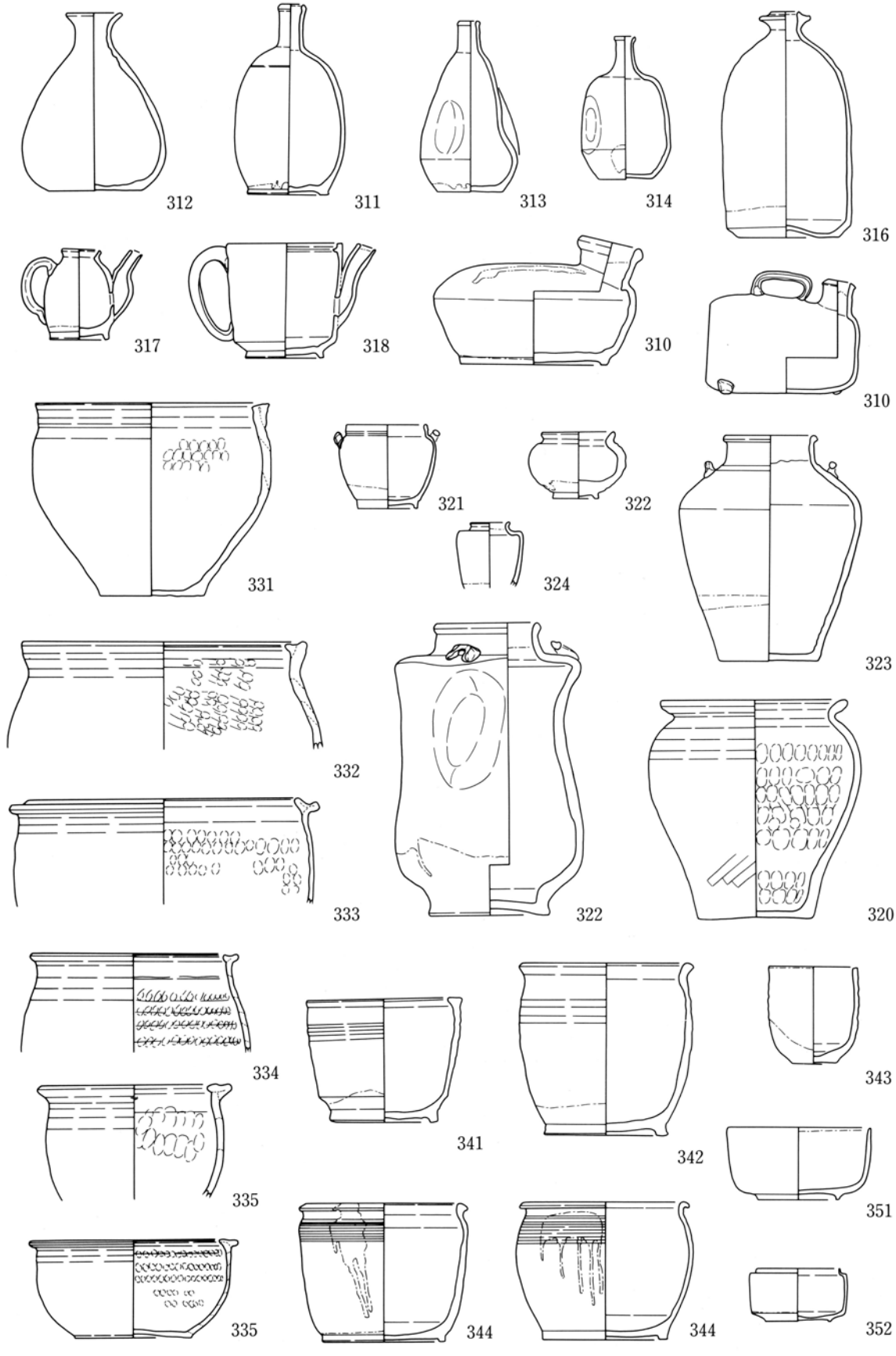


図97　近世陶磁器類分類図(3)

4．灯火具

1皿　1　灯明皿　口縁部に油煙等が付着している皿は、いずれもここに分類した。また、呪具などの特殊な目的に使用されている場合を除き、土器皿は灯明皿として使用されたと判断し、ここへ含めた。本来的には灯明具は皿2枚で一組であるため、灯さんとして使用されていた可能性もあることを注記しておく。

2　灯さん　体部内面に1、2ケ所U字形に切り込みの入った桟が設けられる。受皿。

3　行灯皿　盤形の皿で口縁の立ち上がりは少ない。

0　その他

2ひょうそく　1　受皿と灯芯立てとが接合された形式の灯明皿。

2　脚付き　中央に灯芯を支える立ち上がりを持つ坏部に台がつく。台部に未貫通の穿孔がみられるものもある。

3　中央に灯芯を支える立ち上がりを持つ坏部のみで、脚はない。タンコロ。

4　窓あきの蓋のつくもの等。

5　軟陶系。器形はタンコロに丸味をもたせた形状。

0　その他

3瓦燈　1　瓦燈　傘部と皿部に分かれ、皿部に灯明皿やひょうそくを置いて傘を被せると傘の格子と穴から明かりが漏れる仕組みになっている。

0　その他

4燭台　皿状または盤状の蠟燭を乗せる台で、中央に蠟燭を固定する為の軸用の穿孔がされる。

0その他

5．火具

1鉢　火鉢等を全てここに分類し、1－火鉢、2－瓶掛、3－風炉、4－こん炉A（内部構造が一重）、5－こん炉B（内部構造が二重）、6－火いぶし、7－火容（小型、窓付き）、8－火桶、0－その他とする。

2壺　1　火消し壺　蓋付きの火鉢

0　その他

3くど　可動式のかまど。1－くどA（口唇部円筒状）、2－くどB（口唇部がL字に外部へ屈曲）に区分。

0その他　1－五徳（三脚の環状台）

6．化粧具

1紅皿　小型で浅い皿状のものが多い。中に紅を入れて伏せておく。

2壺　1　おはぐろ壺　口縁の一箇所が鳶口状を呈する。

2　髪油壺

3　転用品

0　その他

3びんだらい　0　平面が細長い楕円形を呈する盥状の容器。

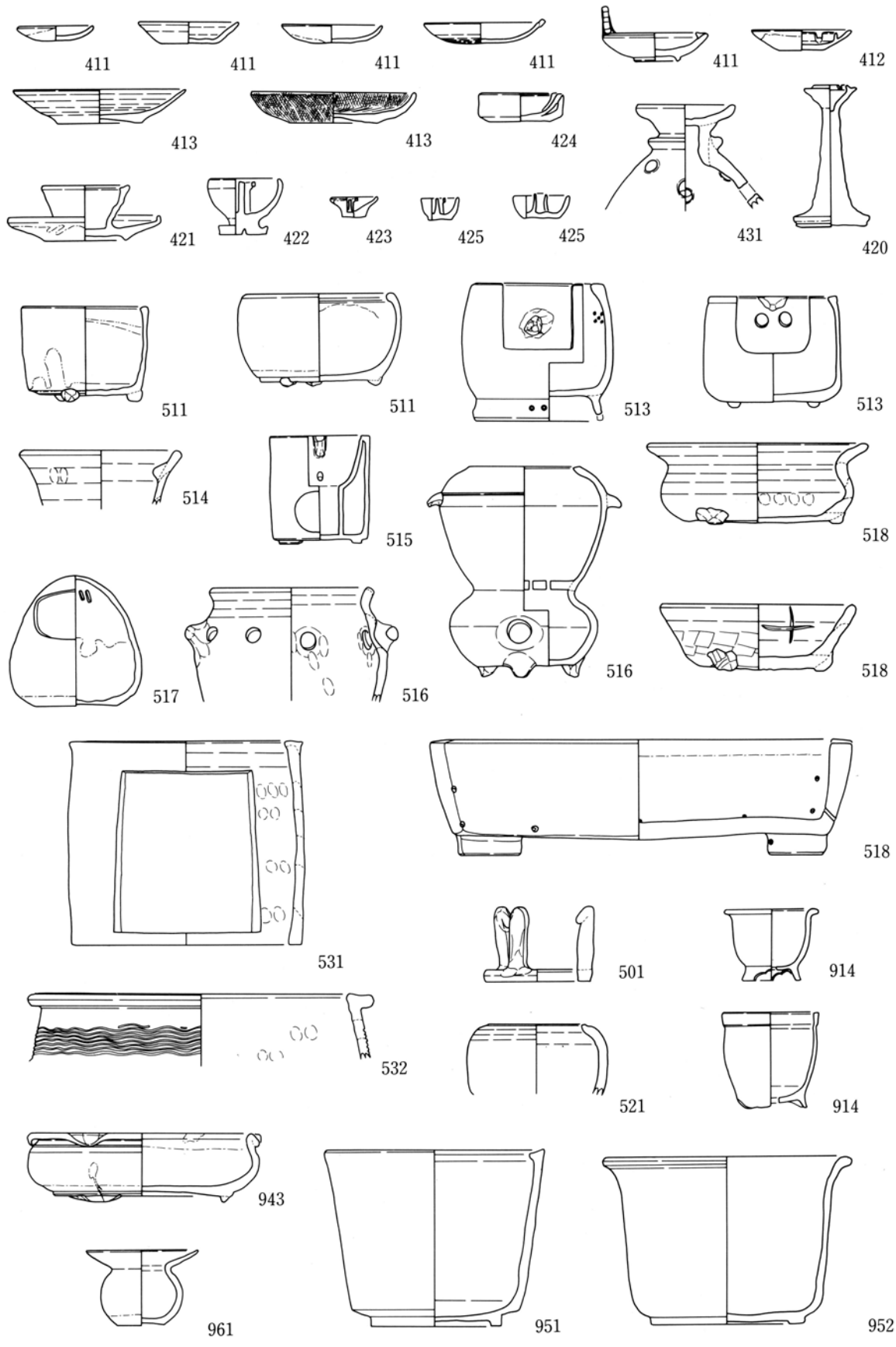


図98　近世陶磁器類分類図(4)

0 その他

7．神仏具

1 瓶　　1－神酒徳利A（鶴首、磁器に多い）、2－神酒徳利B（口唇部外反または玉縁状、陶器に多い）、0－その他

2 香炉　　体部の形態により、1－筒型、2－袴腰型、0－その他、に分類する。

3 仏飯具　　下方が丸く、上方がほぼ直立した坏部と末広がりの脚部からなる。

4 香合　　蓋物Bの小型製品

5 線香筒　　細い円筒形の体部を有する、竹の形状を模したもの。

0 その他

8．喫煙具

1 火容　　基本的には口縁部における煙管等による敲打痕の有無により、香炉との区別を行った。その結果、小型の火鉢状を呈する火容を1－筒型、2－香炉型、0－その他、に区分した。

2 灰落とし

0 その他

9．調度具

1 植木鉢　1－植木鉢、2－半胴（半胴甕の転用品）、3－転用（他の器種からの転用品）、4－蘭鉢、0－その他。

2 餌鉢　1－餌鉢(半筒形の小型椀、体部に固定用の環状の摘み)、2－餌すり鉢(擂鉢の小型製品)、0　その他

3 花生　1－筒型（体部から口縁にかけて直線的)、2－壺型（口縁が開く)、0－その他

4 水指　1－水指（深鉢、壺形で有蓋)、2－建水（深鉢、壺形で無蓋)、3－水盤（浅鉢状、器高低く、口縁折り返し)、0－その他

5 水甕　1－（口縁端部が張り出す)、2－（口縁が外反する)、0－その他

6 壺　1－唾壺（器高低く、頸部から口縁が開く)、0－その他

0 その他　1－柄杓、2－筒型、3－（手桶)、4－土管

0．その他

1 蓋　1－（落とし蓋、つまみ無し)、2－（落とし蓋、円形つまみ有り)、3－（円形つまみ有り、かえり無し)、4－（円形つまみ有り、かえり有り)、5－（環状つまみ有り、かえり無し)、6－（上面偏平、肩部直角に折れる、つまみ無し)、7－（つまみ無し、かえり有り)、8－（湾曲した傘部、円形つまみ有り）9－（有孔)、0－その他、

材質・産地の略記号について

材質については、各実測図の通番右側に、D：土器、T：陶器、J：磁器、N：軟質陶器、G：瓦質のアルファベットで表記した。また、産地は一覧表に、瀬：瀬戸・美濃、常：常滑、京：京都（信楽を含む)、肥：肥前（北九州を含む)、中：中国、朝：朝鮮、丹：丹波、備：備前、堺：堺、不：不明の漢字1文字の表記を行った。

概要

今回の発掘調査の過程で出土した近世遺物は検出段階の遺物を含めると、口縁部破片数で37179点あり、総個体数は3686.50個体にのぼる。ここでは以下の個別遺構の個体数組成の前提となる近世全体を通じての概要をまとめておきたい。

先に見た戦国時代の個体数組成と比較した場合、近世の遺物における組成の最大の相違点は、やはりその用途・器種の多さにあると言える。供膳具・調理具・貯蔵具を基本的生活様式を構成する遺物群と考えた場合、副次的生活様式に関連する遺物群と思われる化粧具・喫煙具の登場や、供膳具・調理具・貯蔵具等の同一用途内での器種の多様化であろう。この事は近世陶磁器産業が多種多量の生産を可能にし、それらを流布させる為の流通網の発展に裏付けられているのであろう。更に言及するならば、化粧具・喫煙具と同様に副次的生活様式の一部を構成する神仏具・調度具が近世遺物全体でそれぞれ３％・６％と高い比率を占める点も注目される。この点とかかわって、戦国時代には14.4%、11.0%に留まっていた陶磁器の比率が66.5%・18.9%に増加し、土器製品は代わって19.8%に減少している。但し、減少した土器製品の84.0%を灯火具の土器皿が占める点は前代と同様である。

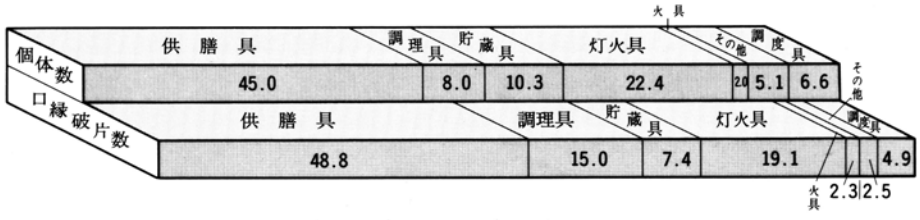


図99　近世陶磁器類の用途組成

集計表D

用途	器種	接合後口縁残存率 土器	陶器	磁器	その他	計	接合前口縁破片数 土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		8	11322	6269	6	17605	8	12243	5459	13	17723
	椀	0	6290	2668	1	8959	0	7153	2565	3	9721
	小椀	1	780	2236	1	3018	1	864	1658	3	2526
	皿	7	3583	1129	0	4719	7	3311	1043	1	4362
	鉢	0	669	236	4	909	0	915	193	6	1114
調理具		678	2398	24	40	3140	2260	3140	8	50	5458
	鍋，釜	678	735	0	35	1448	2260	797	0	50	3107
	鉢	0	386	7	0	393	0	488	3	0	491
	擂鉢	0	491	0	0	491	0	1255	0	0	1255
	瓶	0	781	17	5	803	0	595	5	0	600
	その他	0	5	0	0	5	0	5	0	0	5
貯蔵具		32	3681	304	12	4029	25	2451	195	5	2676
	瓶	0	1166	19	0	1185	0	260	6	1	267
	壷	29	680	35	3	747	24	367	27	2	420
	甕A	0	397	0	0	397	0	518	0	0	518
	甕B	3	753	4	9	769	1	741	3	2	747
	鉢	0	684	246	0	930	0	564	159	0	723
	その他	0	1	0	0	1	0	1	0	0	1
灯火具		5308	3379	24	59	8770	5693	1206	3	21	6923
火具		197	589	0	12	798	179	635	0	12	826
化粧具		5	214	299	0	518	1	96	83	0	180
神仏具		16	747	475	0	1238	16	302	142	0	460
喫煙具		0	391	55	0	446	0	234	15	0	249
調度具		10	2448	105	5	2568	16	1717	48	3	1784
蓋		63	4239	800	24	5126	22	2525	349	4	2900
合計		6317	29408	8355	158	44238	8220	24549	6302	108	39179

表10　近世出土陶磁器類集計表

また、各種の遺物に対応するであろう蓋を一括して扱ったが、その出土量が口縁部破片数で6923点、総個体数427.17個に及ぶ点も特筆すべきことがらとしてあげることができる。

以上近世遺物の概要を述べてきたが、ここで示した数値は今回の発掘調査で出土した全遺物における比率・割合であり、必ずしも近世の遺物組成の推移を示してはいない。そこで以下の個別遺構の記述に際しては、ここで挙げた比率・割合を近世遺物群のあり方の平均値と考え、それに対してどう変化しているかを中心に記述を進めていきたい。

但し、蓋については、その使用が複数の用途にかかわる場合が多く、明確な用途の特定が困難であるため、用途組成図及び本文中比率は総出土遺物から蓋を除外した数値を表わしている。

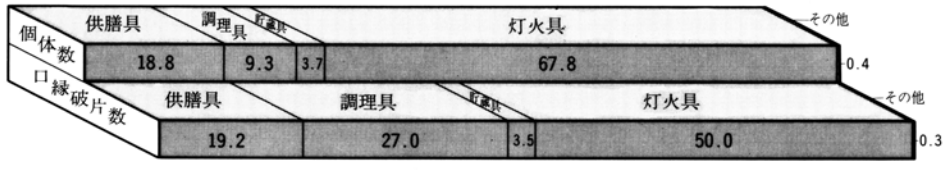
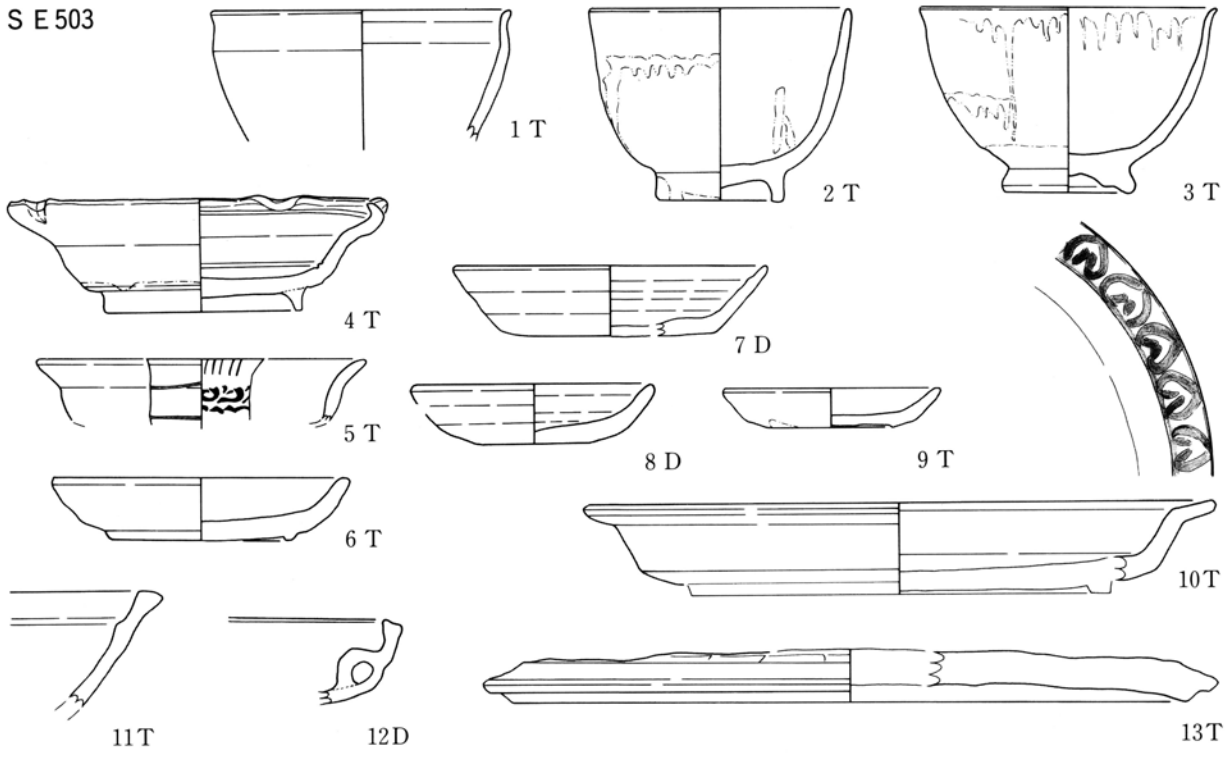


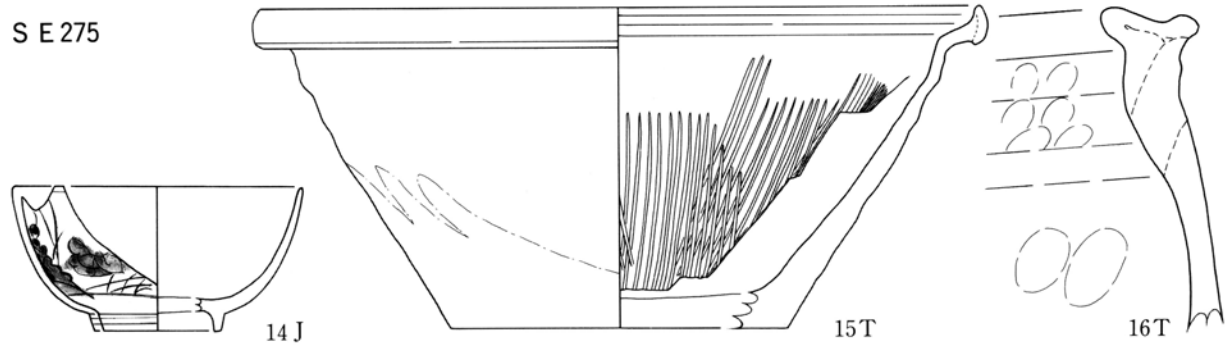
図100　近世遺構出土陶磁器類の用途組成(1)

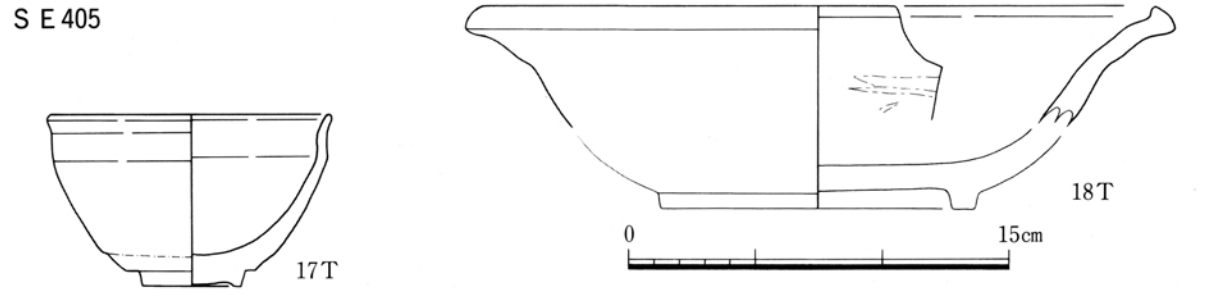
用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		7	8648	4394	2	13051	7	8514	3463	6	11990
	椀	0	4921	1878	1	6800	0	4970	1562	3	6535
	小椀	0	575	1617	1	2193	0	672	1187	3	1862
	皿	7	2610	714	0	3331	7	2216	582	0	2805
	鉢	0	542	185	0	727	0	656	132	0	788
調理具		470	1799	11	39	2319	1630	2132	3	47	3812
	鍋，釜	470	549	0	34	1053	1630	554	0	47	2231
	鉢	0	269	0	0	269	0	357	0	0	357
	擂鉢	0	361	0	0	361	0	773	0	0	773
	瓶	0	616	11	5	632	0	444	3	0	447
	その他	0	4	0	0	4	0	4	0	0	4
貯蔵具		27	2660	207	12	2906	20	1646	129	5	1800
	瓶	0	832	19	0	851	0	180	6	1	187
	壷	24	499	24	3	550	19	233	12	2	266
	甕A	0	317	0	0	317	0	384	0	0	384
	甕B	3	474	4	9	490	1	440	3	2	446
	鉢	0	538	160	0	698	0	409	108	0	517
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
灯火具		3446	2608	12	54	6120	3685	852	2	20	4559
火具		176	407	0	11	594	142	440	0	11	593
化粧具		0	194	227	0	421	0	82	60	0	142
神仏具		0	569	376	0	945	7	221	110	0	338
喫煙具		0	279	55	0	334	0	148	15	0	163
調度具		10	1617	86	4	1717	7	1083	31	2	1123
蓋		47	3137	569	1	3754	12	2128	249	2	2391
合計		4183	21918	5937	123	32161	5510	17246	4062	93	26911

表11　近世遺構出土陶磁器類集計表(1)

(2)各遺構土の陶磁器類







番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1	111	鉄釉		瀬	
2	112	鉄釉+灰釉流し掛け		瀬	
3	112	鉄釉+灰釉流し掛け		瀬	
4	136	灰釉	五輪花・高台内トチン痕3ヶ所	瀬	20+31
5	132	鉄絵+灰釉	内面唐草文	瀬	
6	411	長石釉	内面トチン痕3ヶ所	瀬	28
7	411			その他	34
8	411	底部糸切り痕		その他	
9	411	長石釉		瀬	20

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
10	143	灰釉	除刻文	瀬	
11	233	鉄釉		瀬	29
12	213			その他	43
13	014			常	
14	112	染付	草花文・高台砂目痕あり	肥	
15	234	体部下半釉ふきとり・鉄釉		瀬	
16	332	外面赤色・内面橙		常	40
17	111	鉄釉	窯変あり	瀬	
18	143	灰釉・鉄釉		瀬	

図101　近世井戸出土陶磁器類実測図

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	17	0	0	17	0	15	0	0	15
	椀	0	7	0	0	7	0	7	0	0	7
	小椀	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	皿	0	10	0	0	10	0	7	0	0	7
	鉢					0					0
調理具		0	0	0	0	0	2	1	0	0	3
	鍋，釜	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
	鉢					0					0
	擂鉢	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	瓶					0					0
	その他					0					0
貯蔵具		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	瓶					0					0
	壷					0					0
	甕A					0					0
	甕B					0					0
	鉢					0					0
	その他					0					0
灯火具		8	14	0	0	22	25	3	0	0	28
蓋		0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
合計		8	31	0	0	39	27	20	0	0	47

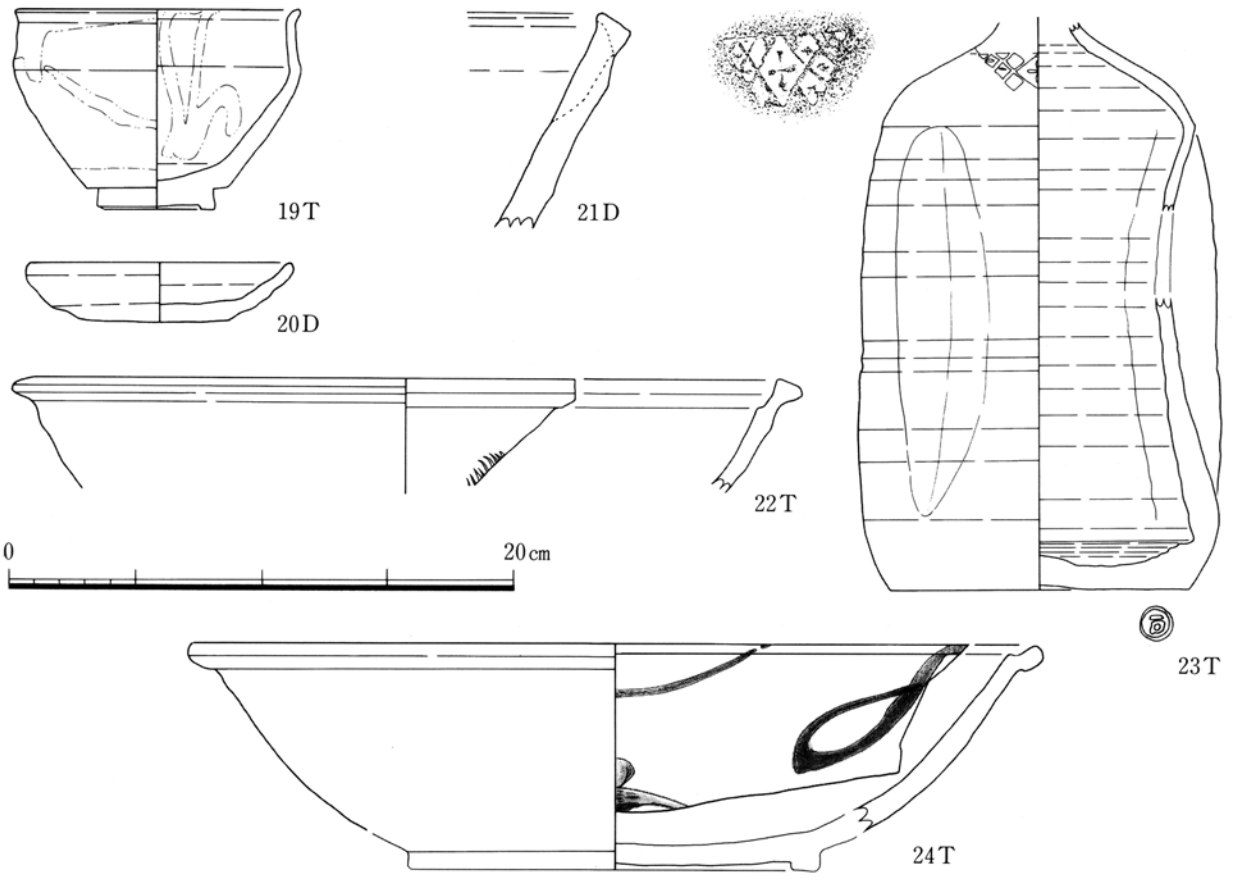
用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	2	1	0	3	0	10	3	0	13
	椀	0	1	1	0	2	0	4	2	0	6
	小椀					0					0
	皿	0	1	0	0	1	0	6	1	0	7
	鉢					0					0
調理具		0	1	0	0	1	1	2	0	0	3
	鍋，釜	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
	鉢					0					0
	擂鉢	0	1	0	0	1	0	2	0	0	2
	瓶					0					0
	その他					0					0
貯蔵具		0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	瓶					0					0
	壷					0					0
	甕A	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	甕B					0					0
	鉢					0					0
	その他					0					0
灯火具		1	0	0	0	1	3	0	0	0	3
合計		1	3	1	0	5	4	13	3	0	20

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	24	1	0	25	0	10	2	0	12
	椀	0	10	0	0	10	0	3	0	0	3
	小椀					0					0
	皿	0	13	0	0	13	0	4	1	0	5
	鉢	0	1	1	0	2	0	3	1	0	4
調理具		2	1	0	0	3	4	5	0	0	9
	鍋，釜	2	0	0	0	2	4	0	0	0	4
	鉢					0					0
	擂鉢	0	1	0	0	1	0	5	0	0	5
	瓶					0					0
	その他					0					0
貯蔵具		0	1	0	0	1	0	1	0	0	1
	瓶					0					0
	壷					0					0
	甕A					0					0
	甕B					0					0
	鉢	0	1	0	0	1	0	1	0	0	1
	その他					0					0
灯火具		7	0	0	0	7	9	0	0	0	9
調度具		0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
合計		9	26	1	0	36	13	17	2	0	32

表12　近世井戸出土陶磁器類集計表

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	6	0	0	6	0	5	0	0	5
	椀	0	5	0	0	5	0	2	0	0	2
	小椀					0					0
	皿	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2
	鉢	0	1	0	0	1	0	1	0	0	1
調理具		0	1	0	0	1	0	2	0	0	2
	鍋，釜					0					0
	鉢					0					0
	擂鉢	0	1	0	0	1	0	2	0	0	2
	瓶					0					0
	その他					0					0
貯蔵具		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	瓶	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	壷					0					0
	甕A					0					0
	甕B					0					0
	鉢					0					0
	その他					0					0
灯火具		33	0	0	0	33	14	0	0	0	14
火具		0	0	0	0	0	0	2	0	0	2
合計		33	7	0	0	40	14	9	0	0	23

表13　ＳＤ402出土陶磁器類集計表



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	ＰＬ
19	111	鉄釉＋灰釉		瀬	22
20	411	底部糸切り	内面煤付着	その他	
21	518		口縁内面側煤付着	常	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	ＰＬ
22	233	鉄釉		瀬	
23	314			その他	
24	143	鉄釉・緑釉・長石釉		瀬	

図102　ＳＤ402出土陶磁器類実測図

ＳＤ104：本遺構の時期は大きく２時期に区分され、埋土上層は18世紀前葉に、下層は17世紀の第３四半期に比定される。

本遺構出土の遺物は口縁部破片数で703点、総個体数68.25個体である。この内供膳具が54.8%、個体数34.67個体出土しており、平均値を上回っている。これに対し、灯火具が32.3%、個体数20.42個体と、割合としては依然多くを占めてはいるが、この時期以前の遺構の比率と比較した場合、やや低下の傾向を読み取ることができる。このことは土器製品の占有率が25.8%に低下している要因となっている。この反面、磁器の占有率が11.4%と上昇傾向にあり、この点に関しては近世的遺物組成の一面を表していると思われる。併せて副次的生活様式に関する遺物群が２%の出土に留まっているということも、上記の側面を補強すると考えられる。

器種別比率を考えた場合、供膳具の椀と皿の比率が１：1.02とその差を縮め、調理具における鍋の割合が擂鉢と比較すると１：0.81と従来になく低くなっている点が注目される。また貯蔵具では甕Ａに分類された常滑産の甕が１個出土しており、総個体数から考えれば多いと思われる。

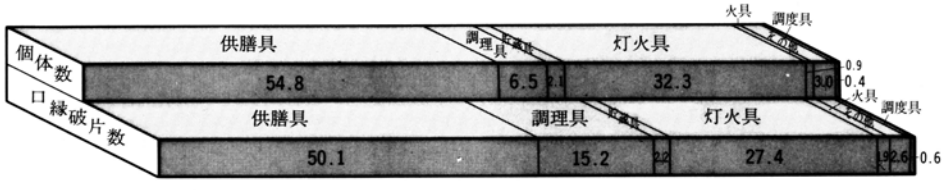
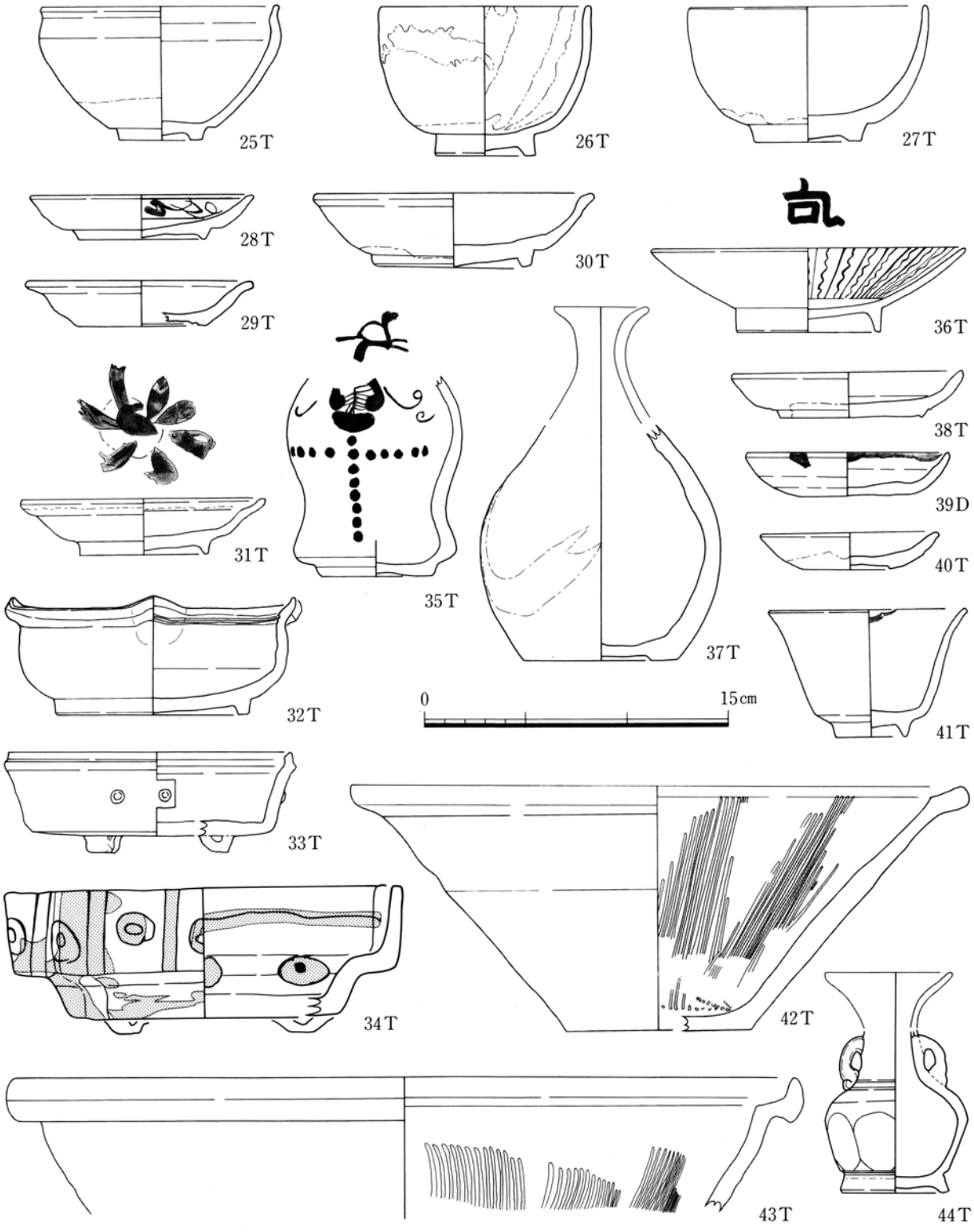


図103　ＳＤ104出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	331	85	0	416	0	265	78	0	343
	椀	0	138	25	0	163	0	118	41	0	159
	小椀	0	3	28	0	31	0	2	10	0	12
	皿	0	173	18	0	191	0	116	17	0	133
	鉢	0	17	14	0	31	0	29	10	0	39
調理具		24	25	0	0	49	49	55	0	0	104
	鍋，釜	24	2	0	0	26	49	7	0	0	56
	鉢	0	0	0	0	0	0	5	0	0	5
	擂鉢	0	21	0	0	21	0	41	0	0	41
	瓶	0	2	0	0	2	0	2	0	0	2
	その他					0					0
貯蔵具		0	16	0	0	16	0	15	0	0	15
	瓶	0	2	0	0	2	0	2	0	0	2
	壷					0					0
	甕Ａ	0	12	0	0	12	0	9	0	0	9
	甕Ｂ	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3
	鉢	0	2	0	0	2	0	1	0	0	1
	その他					0					0
灯火具		183	62	0	0	245	170	18	0	0	188
火具		4	3	0	0	7	6	6	0	1	13
化粧具		0	8	0	0	8	0	4	0	0	4
神仏具		0	8	2	0	10	0	8	2	0	10
喫煙具		0	5	0	0	5	0	4	0	0	4
調度具		0	3	0	0	3	0	4	0	0	4
蓋		0	54	6	0	60	0	17	1	0	18
合計		211	515	93	0	819	225	396	81	1	703

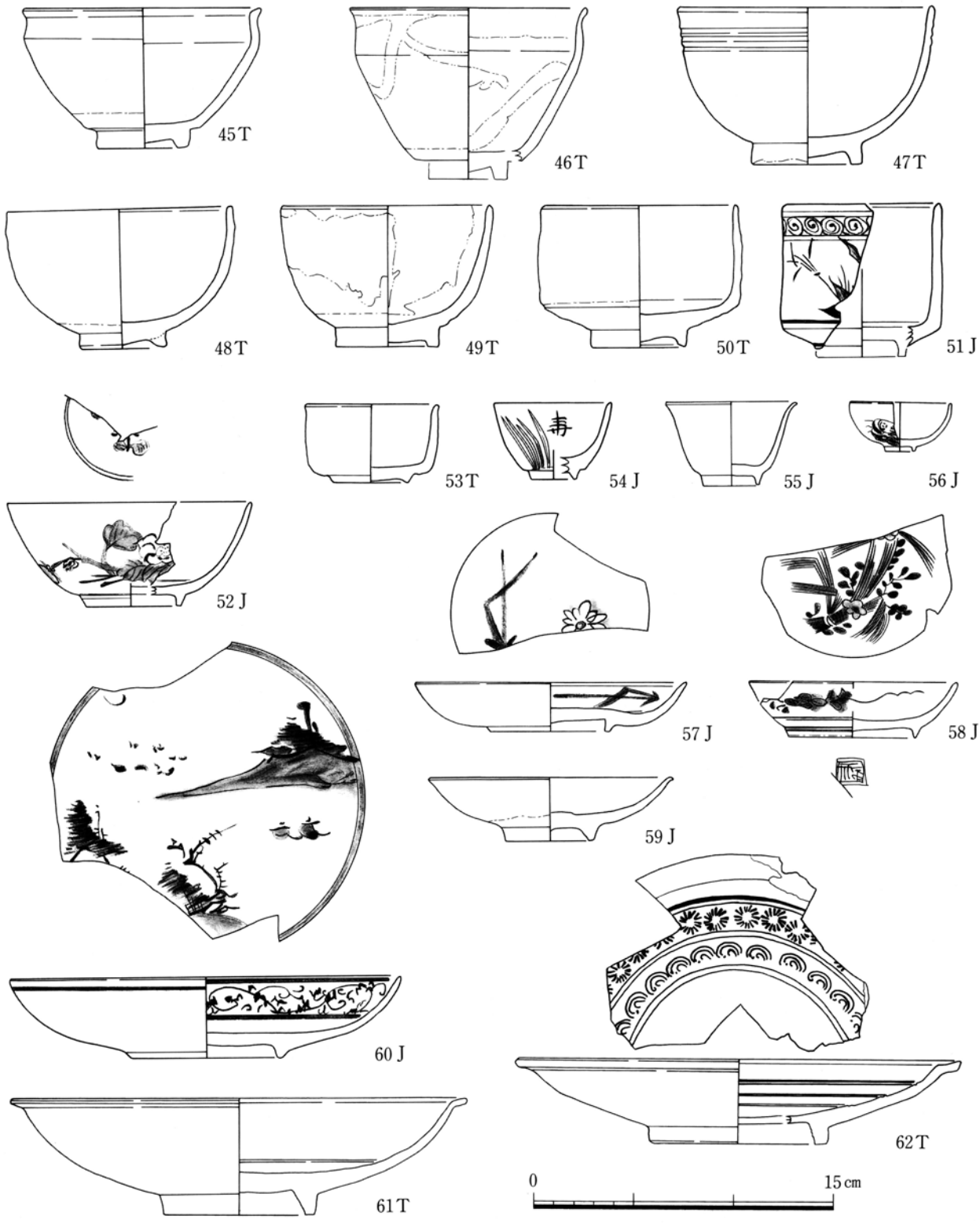
表14　ＳＤ104出土陶磁器類集計表



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
25	111	鉄釉		瀬	
26	112	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	22
27	112	灰釉		瀬	
28	131	鉄絵＋長石釉	高台内無釉	瀬	25
29	132	長石釉	見込印花	瀬	
30	132	内面輪ハゲ・長石釉		瀬	40/30
31	134	鉄釉＋灰釉	花文・底部煤付着	瀬	30
32	146	鉄釉		瀬	31
33	147	長石釉	内面鉄絵	瀬	
34	147	織部	白土ねりこみ(アミ部)	瀬	31/28

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
35	147	織部	つる草文(か)・馬文	瀬	29
36	131	呉須絵		肥	31
37	315	鉄釉	灰釉筆書き	瀬	
38	131	長石釉	高台内釉ふきとり	瀬	
39	411	底部糸切り	口縁・底部油煙付着	不	
40	411	灰釉	油煙付着	瀬	
41	420	灰釉		瀬	23
42	233	鉄釉		瀬	
43	234	鉄釉		瀬	
44	932	鉄釉		瀬	42

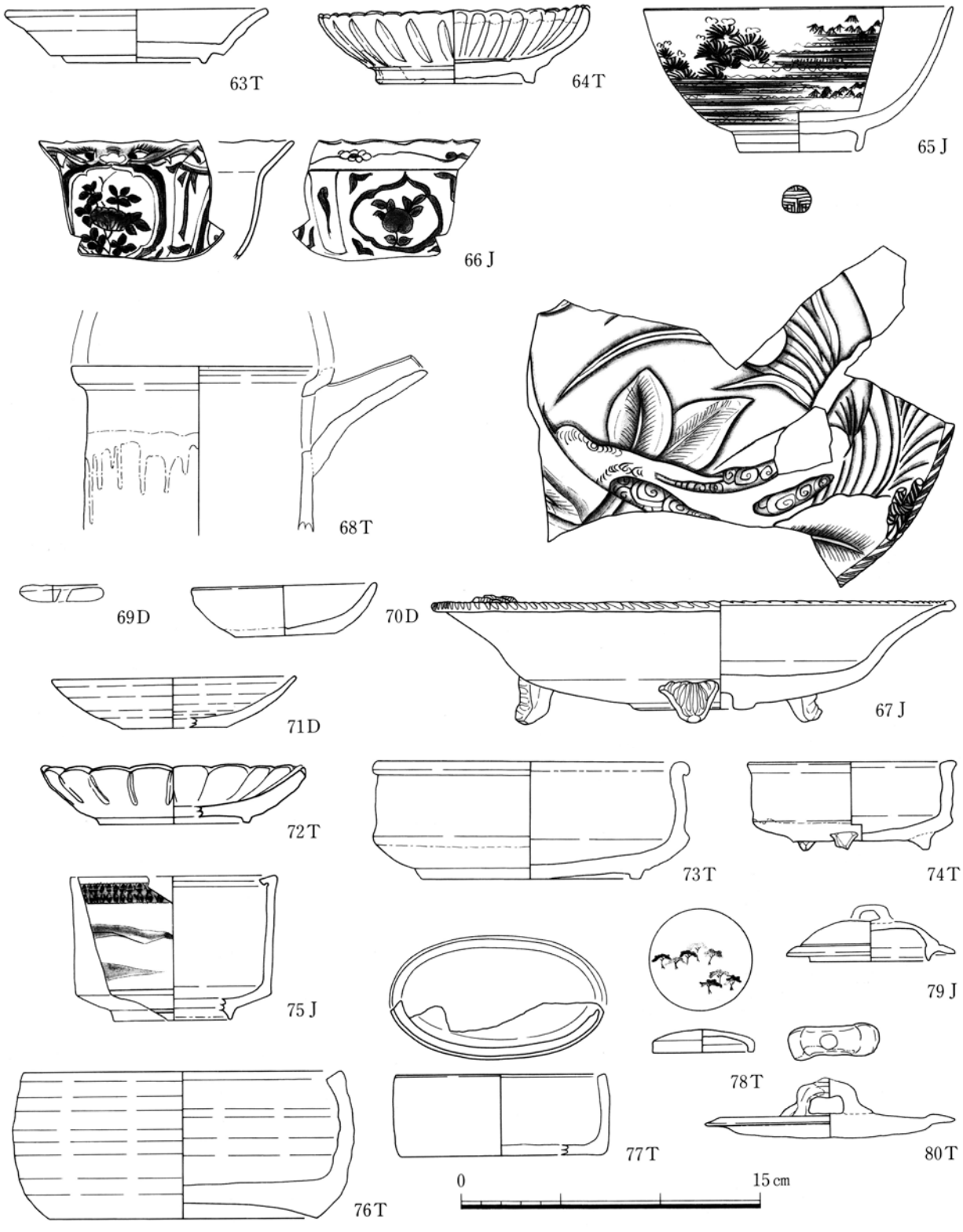
図104　ＳＤ104下層出土陶磁器類実測図



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
45	111	鉄釉		瀬	22
46	111	鉄釉＋灰釉		瀬	
47	112	灰釉		京	
48	112	長石釉		瀬	22
49	112	鉄釉＋灰釉		瀬	22
50	115	鉄釉		瀬	23
51	115	染付	1620～1630年代 うづ文＋竹文	肥	
52	112	赤絵	1650～1660年代 牡丹文＋1重圏線・花文	肥	18
53	125	灰釉		瀬	24

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
54	125	染付	1630～1640年代 寿	肥	
55	125		17C後半 白磁	肥	
56	122	赤絵	18C末～19C前半 海老文	肥	27＋28
57	131	染付	1730～1740年代 折松葉・花文・高台畳付砂目痕	肥	25
58	131	染付	1660～1670年代 花唐草＋角福・草花文	肥	28＋35＋26
59	132	見込輪ハゲ	17C後半 青磁	肥	27＋
60	131	染付	1630～1640年代　牡丹唐草文＋楼閣山水文/高台畳付砂目痕	肥	26
61	132	灰釉＋銅緑釉	17C 見込胎土目痕	肥	
62	132	灰釉	17C 白泥	肥	29

図105　ＳＤ104上層出土陶磁器類実測図(1)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
63	132	灰釉	1650年代	瀬	
64	135	灰釉＋銅緑釉		瀬	
65	141	染付	1660～1670年代 松・竹・波文＋寿に1重圏線	肥	28
66	145	青花	1590～1630年代 花唐草＋窓に草花文・窓に草花文	中	31
67	143		1630～40年代 青磁・結び紐	肥	29
68	242	鉄釉＋灰釉		瀬	33
69	40-	手捏ね	焼成後穿孔	不	38
70	411	灰釉		瀬	
71	411	底部糸切り		不	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
72	411	長石釉	油煙付着	瀬	
73	722	鉄釉		瀬	43 27
74	721	鉄釉		瀬	
75	721	染付	17C後半 山水文	肥	
76	813		匣の転用か	瀬	39
77	630	灰釉		瀬	34
78	016	灰釉＋呉須絵＋鉄絵	松文	京	35 34＋39
79	014		17C後半 白磁	肥	23
80	013	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	43 26

図106　ＳＤ104上層出土陶磁器類実測図(2)

ＳＤ106：本遺構の時期は17世紀の第３四半期から18世紀前葉に位置づけられる。

本遺構出土の遺物は口縁部破片数で550点、総個体数55.83個体である。この内供膳具が20.67個体で全遺物中の38.8％を占める。この割合は近世の用途別割合の平均値に近い数値である。これに反し、近世の平均値では20％にとどまっている灯火具がこの遺構では50.4％、個体数26.83個体にのぼっており、うち84.8％が土器皿によって占められている。更にこの点が影響し、土器皿は出土遺物全体の42.1％を数え、磁器は僅か3.0％に過ぎない。

また、この遺構からは化粧具・喫煙具・調度具が口縁部破片８点、個体数0.67個体と極めて少量の出土に留まっていることも注目される。

器種別の出土比率を見た場合、供膳具では椀：皿＝１：1.46と皿が依然として椀を上回っていることが看取される。また鉢の出土量が椀、皿に比して多い点も注目される。調理具においては、鍋・釜に比して本遺構では、擂鉢が多く出土している。

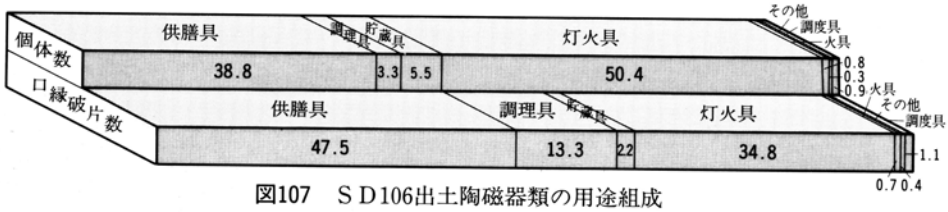
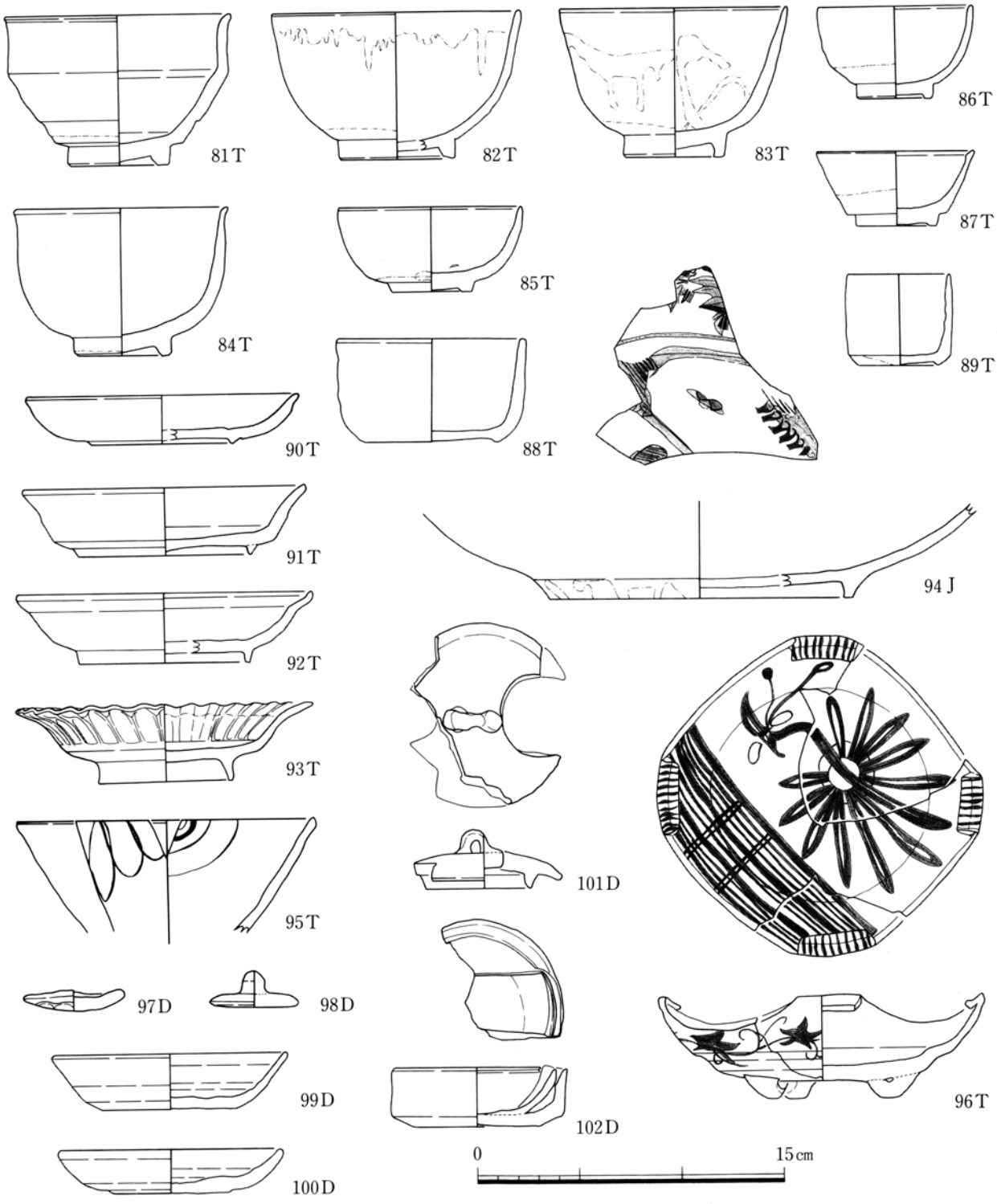


図107　ＳＤ106出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	231	17	0	248	0	229	28	0	257
	椀	0	88	14	0	102	0	83	19	0	102
	小椀	0	18	0	0	18	0	9	0	0	9
	皿	0	80	2	0	82	0	81	8	0	89
	鉢	0	45	1	0	46	0	56	1	0	57
調理具		6	15	0	0	21	23	49	0	0	72
	鍋，釜	6	0	0	0	6	23	0	0	0	23
	鉢					0					0
	擂鉢	0	15	0	0	15	0	49	0	0	49
	瓶					0					0
	その他					0					0
貯蔵具		3	32	0	0	35	1	11	0	0	12
	瓶	0	12	0	0	12	0	1	0	0	1
	壷	0	13	0	0	13	0	5	0	0	5
	甕Ａ	0	6	0	0	6	0	3	0	0	3
	甕Ｂ	3	1	0	0	4	1	2	0	0	3
	鉢					0					0
	その他					0					0
灯火具		273	49	0	0	322	154	34	0	0	188
火具		0	5	0	0	5	0	4	0	0	4
化粧具						0					0
神仏具						0					0
喫煙具		0	2	0	0	2	0	2	0	0	2
調度具		0	6	0	0	6	0	6	0	0	6
蓋		0	28	3	0	31	0	7	2	0	9
合計		282	368	20	0	670	178	342	30	0	550

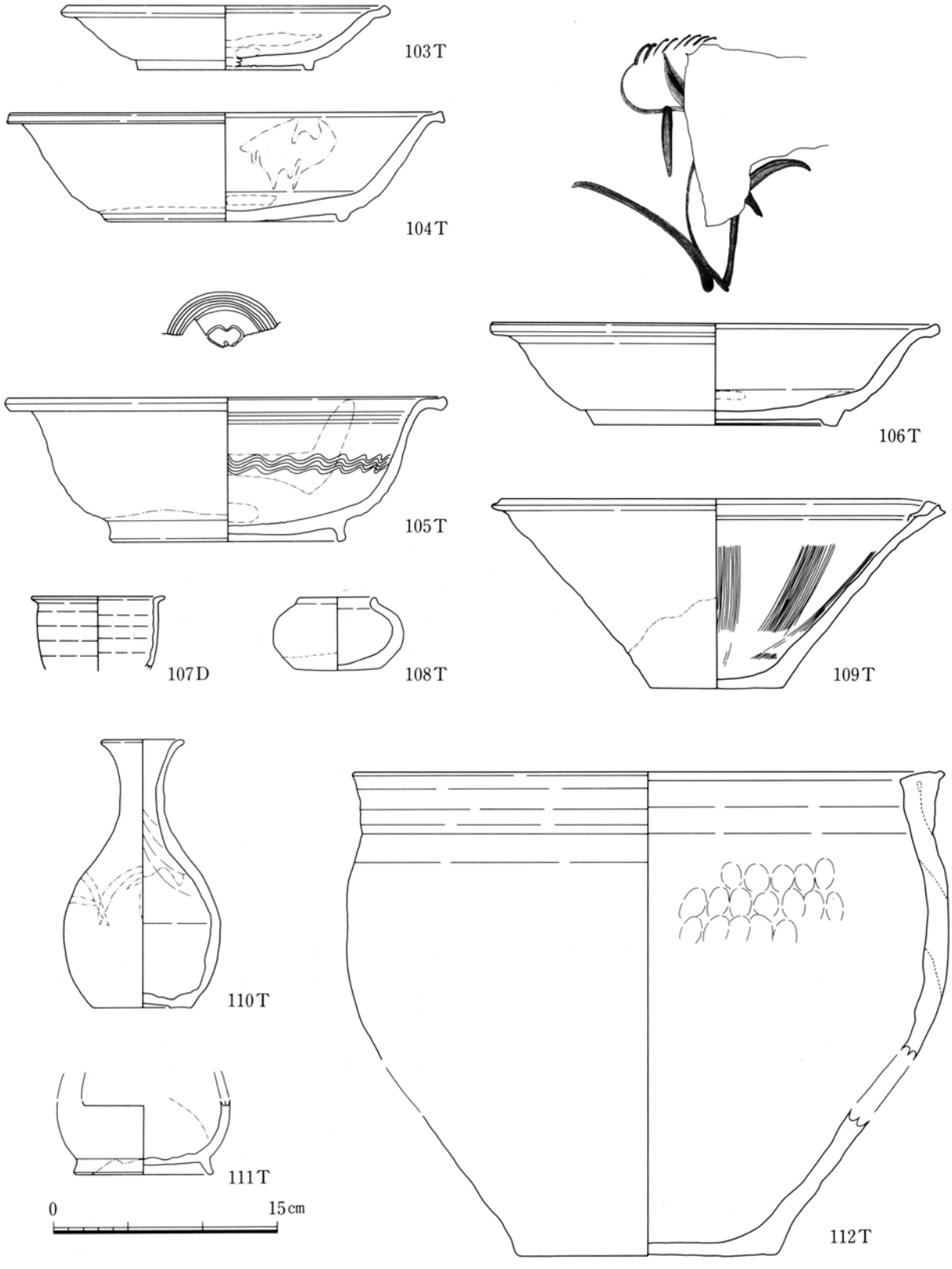
表15　ＳＤ106出土陶磁器類集計表



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
81	111	長石釉		瀬	22
82	112	鉄釉+灰釉流し掛け	体部下半・高台鉄化粧	瀬	27
83	112	鉄釉+灰釉流し掛け		瀬	22
84	116	灰釉		瀬	35 23
85	122	長石釉		瀬	29
86	122	灰釉		瀬	24
87	123	鉄釉		瀬	25
88	141	長石釉		瀬	
89	124	長石釉		瀬	
90	131	見込輪ハゲ・灰釉		瀬	
91	132	長石釉		瀬	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
92	134	長石釉		瀬	
93	136	長石釉		瀬	
94	131	赤絵	16C末～1670年代 山水文・高台畳付砂粒付着	中	28
95	147	織部	菊花文・同心円文	瀬	
96	147	織部	鉄絵（花唐草）	瀬	31
97	410	手捏ね		不	
98	013	灰釉		瀬	
99	411	底部糸切り		不	
100	411	底部糸切り		不	
101	019	長石釉	かえし部煤付着	瀬	
102	424	長石釉	油煙付着	瀬	

図108　ＳＤ106出土陶磁器類実測図(1)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
103	143	灰釉＋銅緑釉		瀬	
104	143	灰釉＋銅緑釉		瀬	29
105	143	灰釉＋銅緑釉	波状文・見込印花	瀬	
106	143	灰釉	鉄絵（草花文）	瀬	29
107	340			不	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
108	322	灰釉	底部煤付着・古瀬戸	瀬	36
109	233	鉄釉		瀬	
110	315	鉄釉＋灰釉筆描き		瀬	
111	517	鉄釉		瀬	39
112	331			常	

図109　ＳＤ106出土陶磁器類実測図(2)

ＳＫ210：本遺構の時期は17世紀の第３四半期であると考えられる。

本遺構出土の遺物は口縁部破片数で466点、総個体数58.50個体である。この遺構は供膳具が全体の64.4％、32.58個体を占め、次いで灯火具が20.4％、10.3個体を占める。併せて化粧具・神仏具が出土しておらず、喫煙具もわずか0.3％であることは戦国時代の遺物組成に近いと考えることができる。このことは椀：皿＝１：2.19であることからも理解しうる。

反面、土器製品が12.1％に減少し、代わって磁器が16.5％に増加している点から近世的遺物組成を読みとることが出来る。

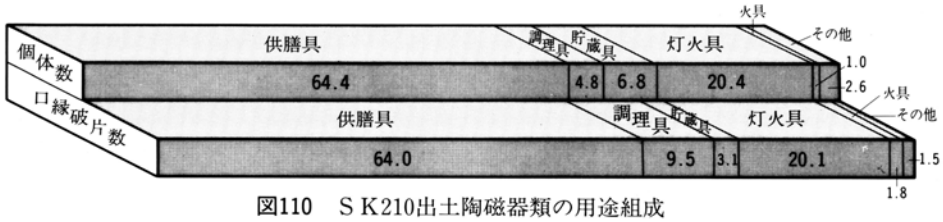
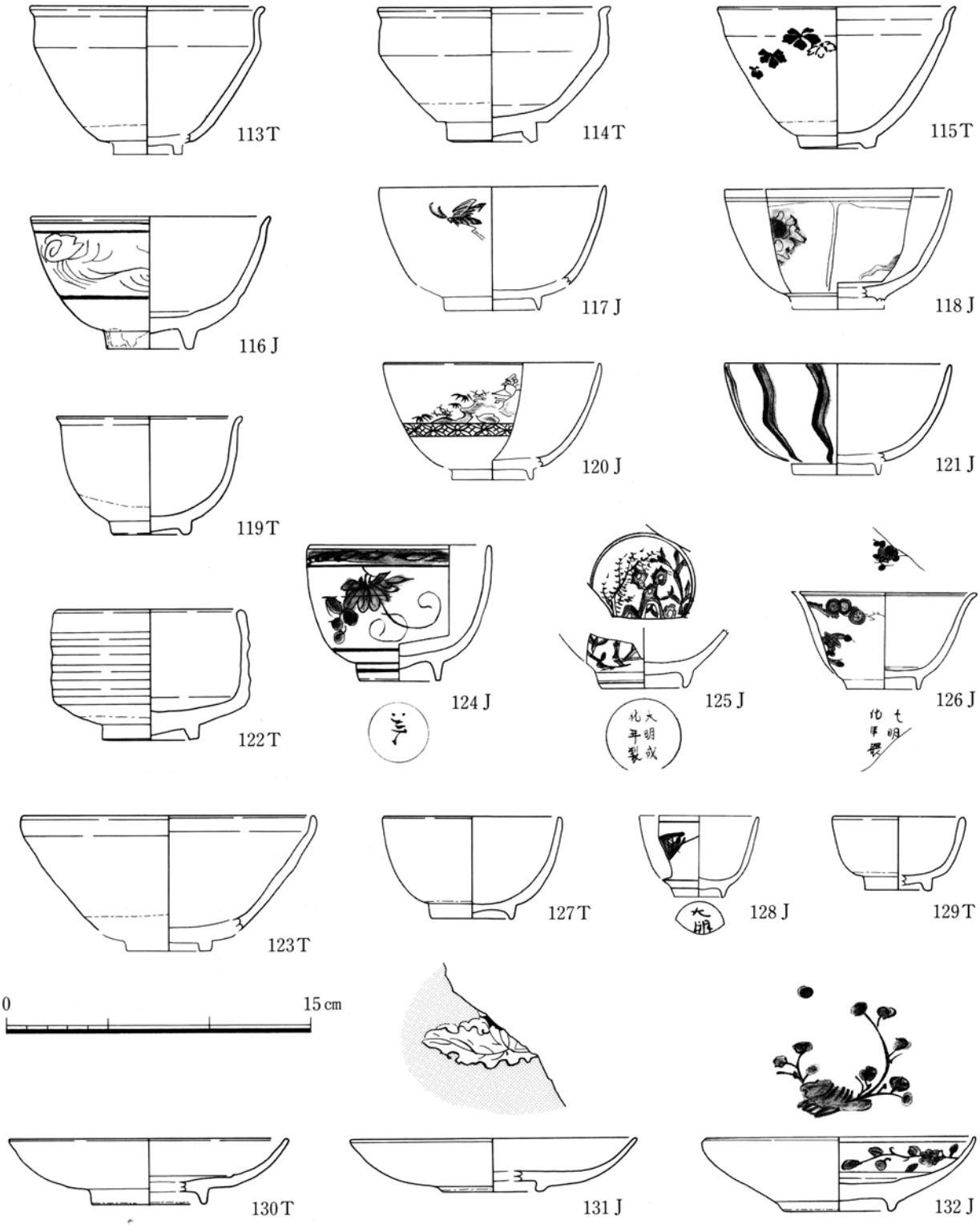


図110　ＳＫ210出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	285	106	0	391	0	201	89	0	290
	椀	0	46	51	0	97	0	45	41	0	86
	小椀	0	7	10	0	17	0	2	10	0	12
	皿	0	216	43	0	259	0	125	34	0	159
	鉢	0	16	2	0	18	0	29	4	0	33
調理具		15	14	0	0	29	15	28	0	0	43
	鍋，釜	15	0	0	0	15	15	0	0	0	15
	鉢	0	1	0	0	1	0	3	0	0	3
	擂鉢	0	11	0	0	11	0	24	0	0	24
	瓶	0	2	0	0	2	0	1	0	0	1
	その他					0					0
貯蔵具		0	41	0	0	41	0	14	0	0	14
	瓶	0	2	0	0	2	0	1	0	0	1
	壷	0	36	0	0	36	0	9	0	0	9
	甕Ａ	0	3	0	0	3	0	4	0	0	4
	甕Ｂ					0					0
	鉢					0					0
	その他					0					0
灯火具		70	54	0	0	124	65	26	0	0	91
火具		0	4	0	2	6	0	6	0	2	8
化粧具						0					0
神仏具		0	3	10	0	13	0	5	1	0	6
喫煙具		0	3	0	0	3	0	1	0	0	1
調度具						0					0
蓋		0	95	0	0	95	0	12	1	0	13
合計		85	499	116	2	702	80	293	91	2	466

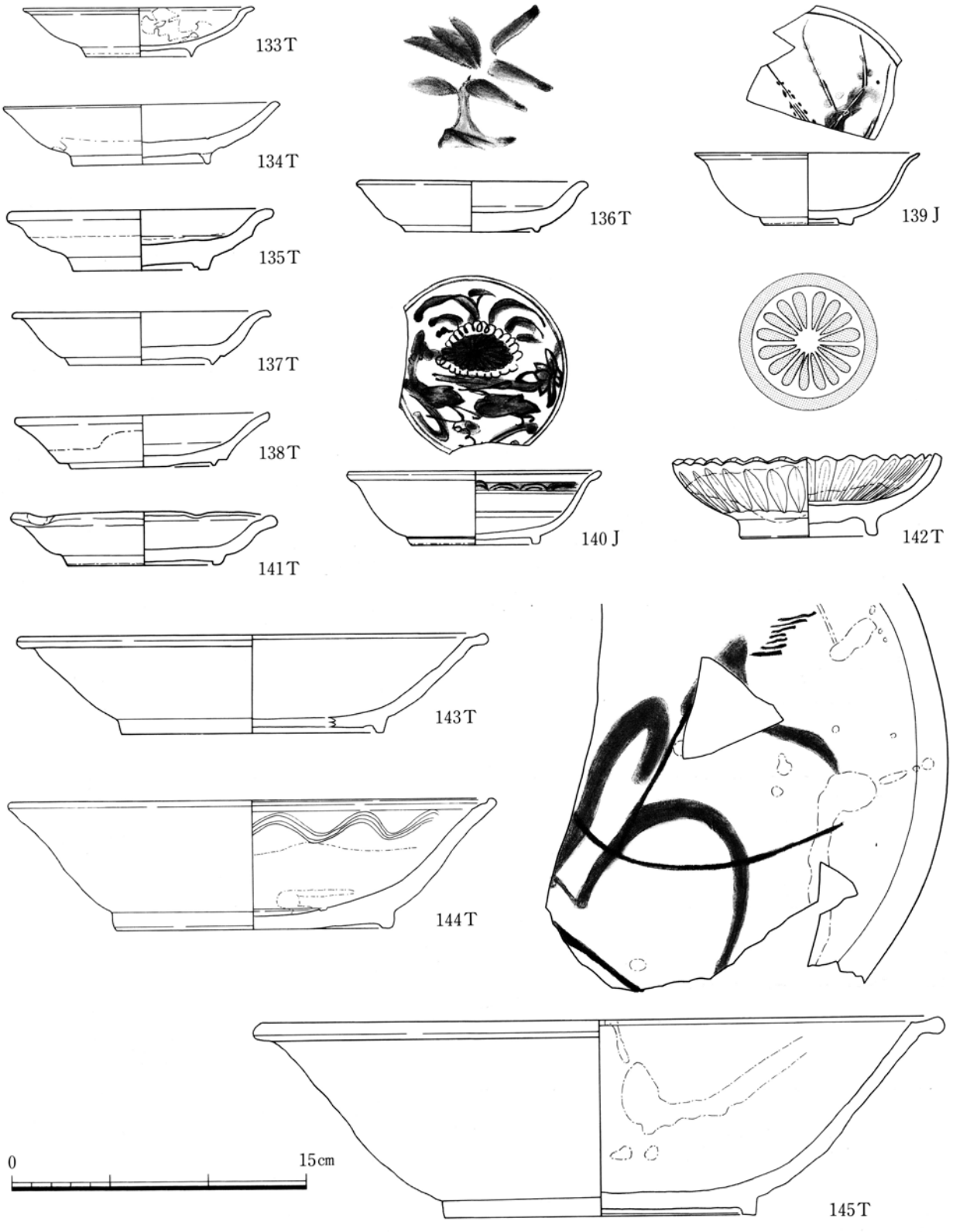
表16　ＳＫ210出土陶磁器類集計表



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
113	111	鉄釉		瀬	
114	111	鉄釉	高台内墨書痕	瀬	22
115	111	長石釉＋鉄絵	つた文	瀬	22
116	112		1630～1640年代 青磁・雲文	肥	22
117	112	赤絵	1650～1670年代 蜂文	肥	
118	112	赤絵	1650～1660年代 花文＋圏線・圏線	肥	
119	116	鉄釉		肥	
120	112	赤絵	1650～1670年代 楼閣文＋七宝つなぎ	肥	
121	112	染付	1650～1660年代 ねじり花文	肥	18
122	115	鉄釉	千段巻風	瀬	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
123	114	鉄釉		瀬	
124	112	染付	1650～1660年代 ぶどう文	肥	18
125	112	染付	1640年代 竹文＋「大明成化年製」・岩と竹文	肥	
126	125	染付	1650～1670年代 松と竹文＋「大明成化年製」・梅文	肥	
127	112	灰釉		瀬	
128	122	染付	1650年代前後 （「大明」）	肥	
129	122	灰釉		瀬	
130	131	長石釉		瀬	30
131	131	染付・吹き付け	1640～ 口銹・草花文	肥	26
132	131	染付	1630～1640年代 枝折れ草＋岩に草花文	肥	27

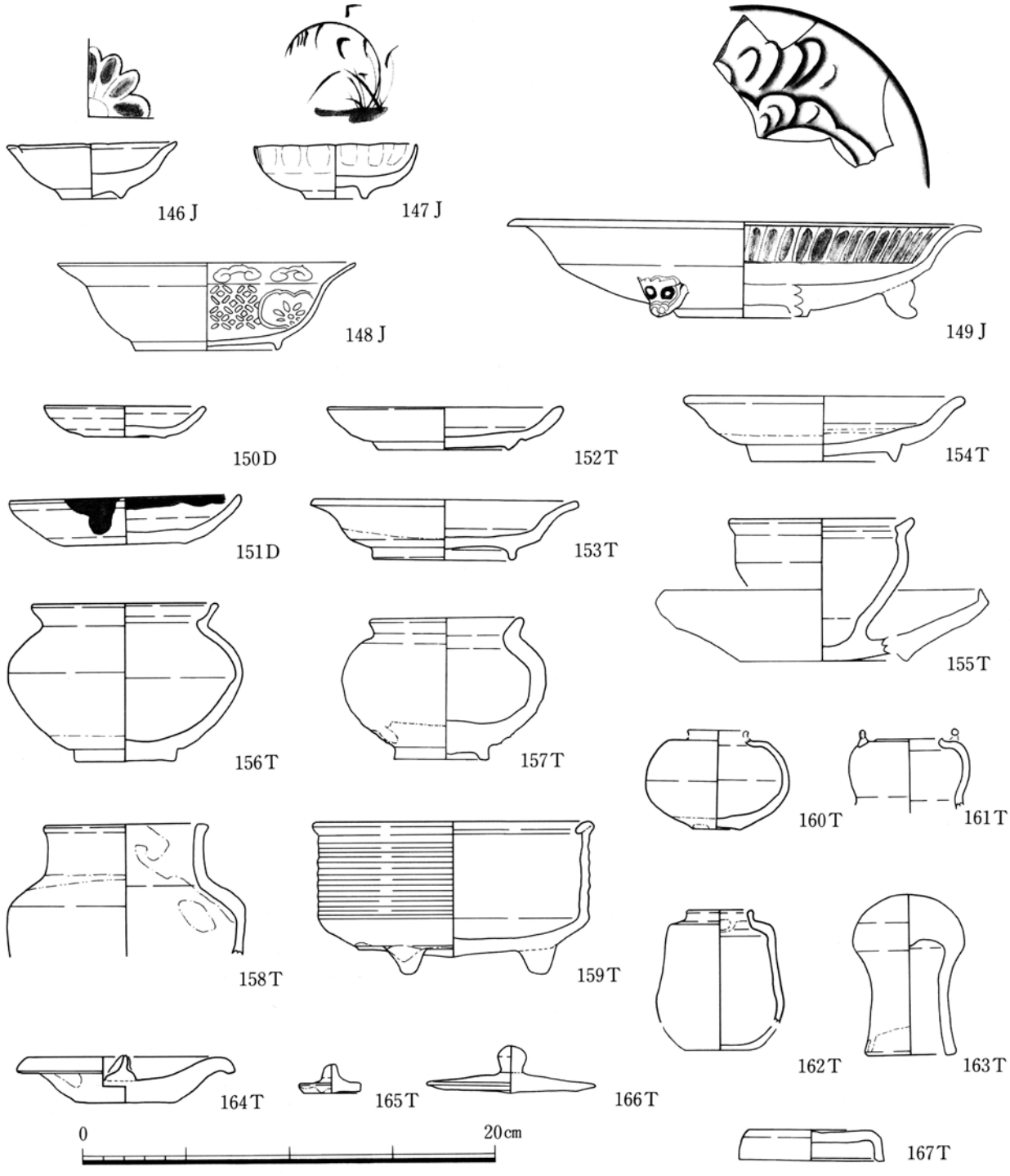
図111　ＳＫ210出土陶磁器類実測図(1)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
133	132	鉄釉＋灰釉流し掛け		京	30
134	131	灰釉		瀬	
135	132	内面輪ハゲ・灰釉		瀬	
136	132	灰釉＋鉄絵		瀬	26
137	132	灰釉		瀬	30
138	132	灰釉		瀬	
139	132	染付	1610～1640年代 梅花文（墨はじき）	肥	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
140	132	染付	1590～1630年代 蓮花文	肥	26
141	137	長石釉		瀬	40
142	135	灰釉＋銅緑釉	菊花文	瀬	30
143	143	灰釉		瀬	
144	143	灰釉＋銅緑釉	高台内煤付着	瀬	
145	143	灰釉＋鉄釉＋銅緑釉		瀬	29

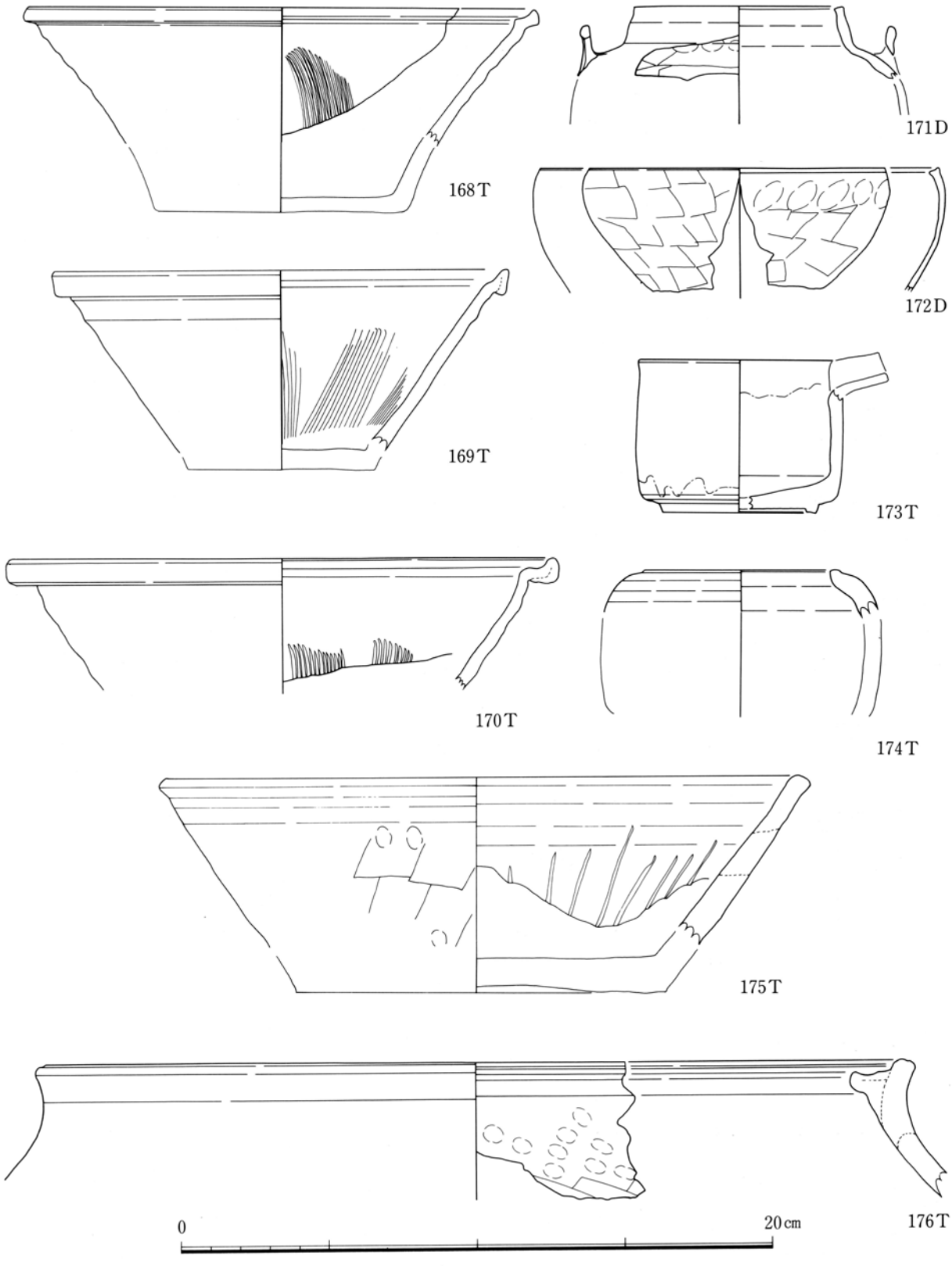
図112　ＳＫ210出土陶磁器類実測図(2)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
146	137		1630～1640年代 青磁・菊花文・高台砂粒痕	肥	
147	136	染付	1630～1640年代 きび文・高台畳付粒痕	肥	30
148	132		1590～1630年代　型押し 白磁・雲文	中	
149	142		1630～1640年代 青磁・高台畳砂粒痕	肥	
150	411	底部糸切り		不	38
151	411	底部糸切り	油煙付着	不	
152	411	長石釉		瀬	38
153	411	灰釉		瀬	30
154	411	輪ハゲ・長石釉		瀬	25
155	421	鉄釉	口縁無釉	瀬	
156	321	鉄釉		瀬	36

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
157	322	鉄釉		瀬	36
158	321	口縁灰釉・体部鉄釉		瀬	
159	721	灰釉		瀬	
160	324	鉄釉		瀬	
161	320	鉄釉		瀬	
162	324	鉄釉		瀬	
163	000	鉄釉		瀬	42
164	011	鉄釉		瀬	43
165	013	鉄釉		瀬	43
166	013	鉄釉		瀬	43
167	016	鉄釉		瀬	

図113　ＳＫ210出土陶磁器類実測図(3)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
168	233	鉄釉		瀬	
169	234	鉄釉		瀬	
170	234	鉄釉		瀬	
171	210			不	
172	211			不	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
173	221	鉄釉		瀬	
174	521			常	
175	518			常	
176	332			常	

図114　ＳＫ210出土陶磁器類実測図(4)

ＳＫ209：本遺構の時期は17世紀末に比定される。

この遺構は出土遺物の総量が少なく、統計的な処理によって正確な比率が導き出されるとは言いがたい側面を有していることを考慮に入れる必要があると思われる。この事を前提として以下遺物比率を見てみると、供膳具・灯火具が35.2%、2.08個体を占め、他の遺構同様この2用途が中心と成っていることが理解される。これに対し調理具が11.3%、貯蔵具が14.1%と17世紀第３四半期の遺構と比較するとその割合を増加させている。さらに貯蔵具のうち甕Ａに分類した常滑産の甕が90%を占めている点は注目に値する。

器種別の比率を見てみると、供膳具の椀と皿は１：1.27と同数に近づき、調理具では擂鉢：鍋が１：２となり近世の平均値に近づきつつある。この事は遺物の組成が戦国時代の様相と異なりはじめていることを示している。但し、化粧具・喫煙具・調度具の出土がないが、これは貯蔵具が多くを占める本遺構の立地に左右されている可能性が高い。

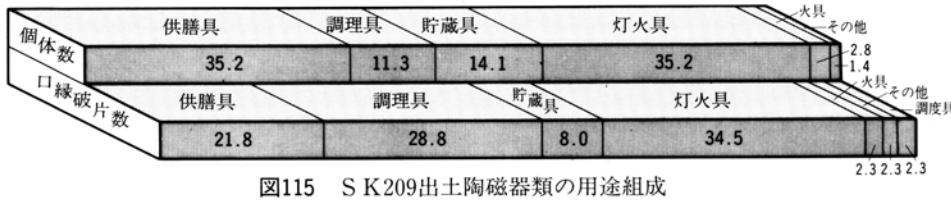
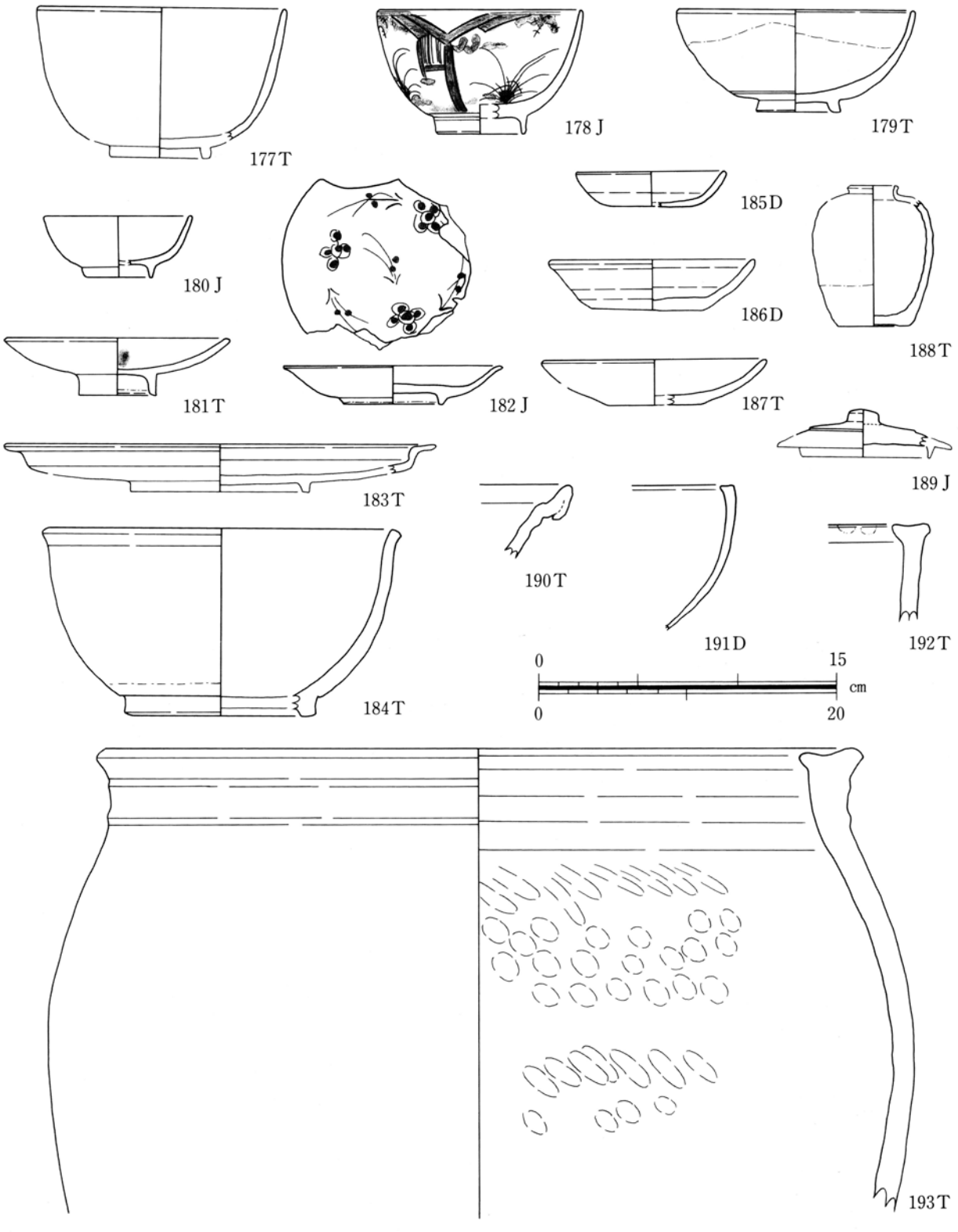


図115　ＳＫ209出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	15	10	0	25	0	12	7	0	19
	椀	0	5	4	0	9	0	3	3	0	6
	小椀	0	0	2	0	2	0	0	1	0	1
	皿	0	10	4	0	14	0	8	3	0	11
	鉢	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
調理具		2	6	0	0	8	15	10	0	0	25
	鍋，釜	2	0	0	0	2	15	0	0	0	15
	鉢	0	2	0	0	2	0	3	0	0	3
	擂鉢	0	1	0	0	1	0	6	0	0	6
	瓶	0	3	0	0	3	0	1	0	0	1
	その他					0					0
貯蔵具		1	9	0	0	10	1	6	0	0	7
	瓶					0					0
	壷	1	0	0	0	1	1	0	0	0	1
	甕Ａ	0	9	0	0	9	0	6	0	0	6
	甕Ｂ					0					0
	鉢					0					0
	その他					0					0
灯火具		19	6	0	0	25	24	6	0	0	30
火具		0	2	0	0	2	0	2	0	0	2
化粧具						0					0
神仏具		0	1	0	0	1	0	2	0	0	2
喫煙具						0					0
調度具		0	0	0	0	0	0	2	0	0	2
蓋		0	1	0	0	1	0	1	0	0	1
合計		22	40	10	0	72	40	41	7	0	88

表17　ＳＫ209出土陶磁器類集計表



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
177	112	灰釉		瀬	
178	112	染付	1690～1730年代 扇散に庭	肥	18
179	112	鉄釉		瀬	22
180	122		17C末～18C初 白磁	肥	
181	131	灰釉＋呉須タンパン		瀬	
182	132	染付	17C後半～18C前半 松葉に梅文	肥	26
183	132	灰釉	17C前半	肥	
184	221	鉄釉		瀬	
185	411			不	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
186	411	底部糸切り		不	38
187	411	鉄釉	口縁油煙付着	瀬	
188	324	鉄釉＋化粧掛		瀬	
189	014		17C後半 青磁	肥	
190	234	鉄釉		瀬	
191	211			不	
192	950	灰釉＋鉄釉流し掛け		瀬	
193	332			常	

図116　ＳＫ209出土陶磁器類実測図

ＳＫ021：本遺構の時期は18世紀前葉に比定される。

この遺構からの出土遺物は、口縁部破片数で216点、総個体数で20.5個体が出土している。用途別の割合は供膳具が11.25個体、55.1%、調理具が0.92個体、4.5%、貯蔵具が0.17個体、0.8%であり、貯蔵具が極端に少ないことがみて取れる。これは器種において、貯蔵具が壺の口縁部破片２点のみの出土に留まっていることが最大の要因であると思われる。これに対し灯火具が6.17個体、30.2%と同時期の遺構に比してやや多めである。また化粧具、神仏具の出土が見られない。さらに蓋が１点のみの出土に留まっていることは特筆すべき点である。各器種に対応する遺物であるが故に、常に一定の比率で出土していたが、それが出土を見ないということは、対応する器種の使用が少ないと言えるのではなかろうか。

また器種の組成については、椀：皿=1.26：１と椀の比率が低下している。また調理具は比率から判断すると、鍋の使用が少ない事が要因と思われる。

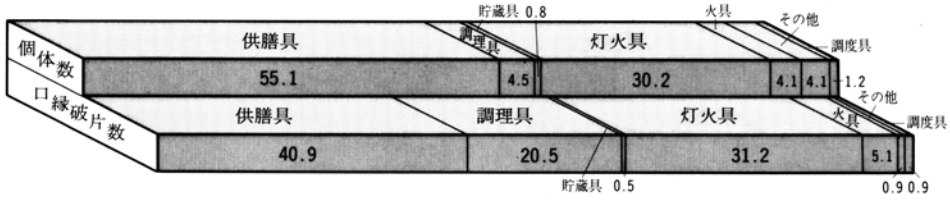
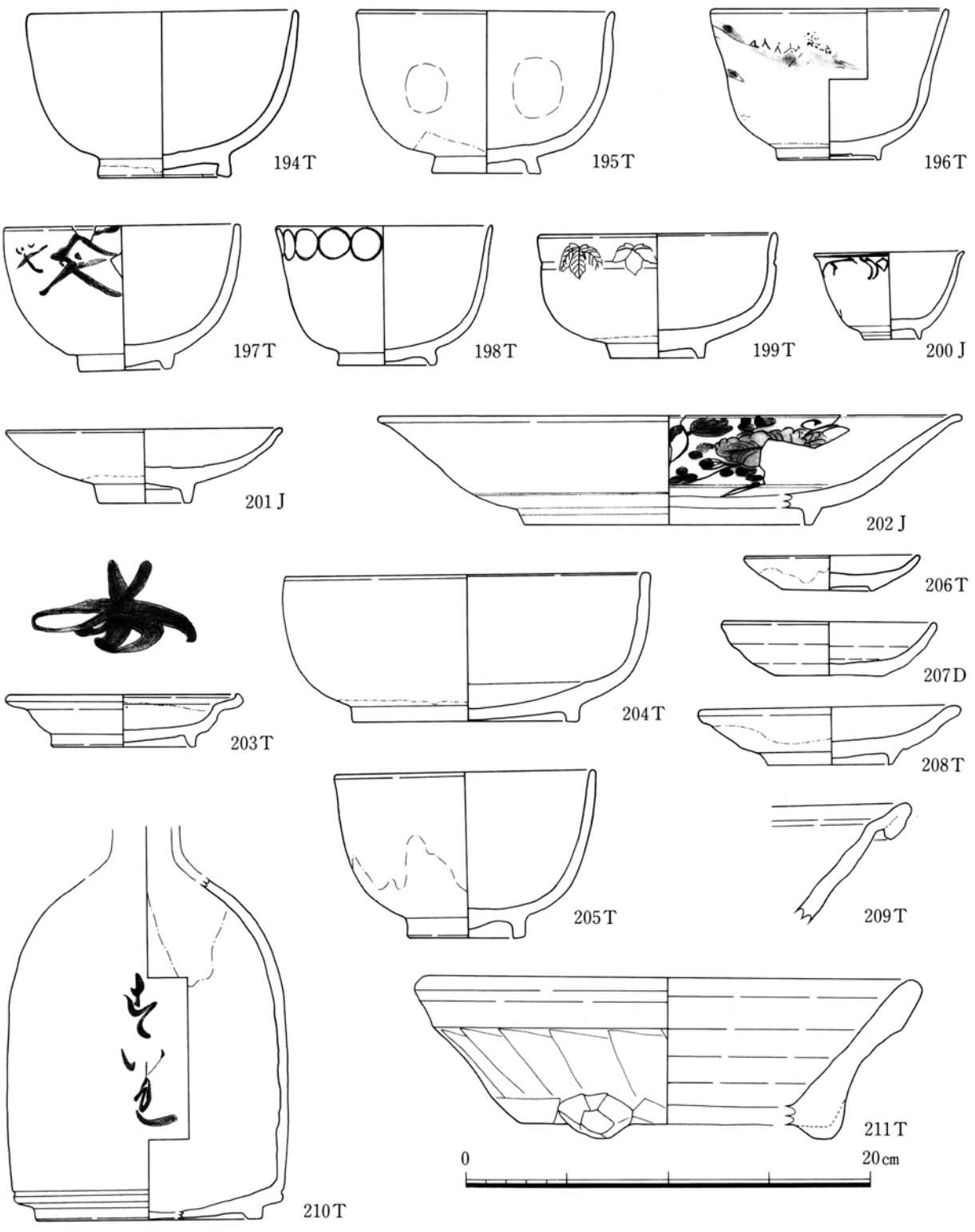


図117　ＳＫ021出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	115	20	0	135	0	67	21	0	88
	椀	0	57	4	0	61	0	39	6	0	45
	小椀	0	0	7	0	7	0	0	5	0	5
	皿	0	46	8	0	54	0	22	9	0	31
	鉢	0	12	1	0	13	0	6	1	0	7
調理具		3	8	0	0	11	29	15	0	0	44
	鍋，釜	3	0	0	0	3	29	0	0	0	29
	鉢	0	3	0	0	3	0	4	0	0	4
	擂鉢	0	5	0	0	5	0	11	0	0	11
	瓶					0					0
	その他					0					0
貯蔵具		0	2	0	0	2	0	1	0	0	1
	瓶	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	壷	0	2	0	0	2	0	1	0	0	1
	甕Ａ					0					0
	甕Ｂ					0					0
	鉢					0					0
	その他					0					0
灯火具		31	43	0	0	74	58	9	0	0	67
火具		2	8	0	0	10	2	9	0	0	11
化粧具						0					0
神仏具		0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
喫煙具		0	10	0	0	10	0	1	0	0	1
調度具		0	3	0	0	3	0	2	0	0	2
蓋		0	1	0	0	1	0	1	0	0	1
合計		36	190	20	0	246	89	106	21	0	216

表18　ＳＫ021出土陶磁器類集計表



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
194	112	灰釉		瀬	
195	113	灰釉＋鉄釉筆塗り	ヘコミ５ケ所(か)	瀬	
196	112	灰釉＋呉須絵	17C後半 山水文・蛇ノ目凹高台風	肥	
197	112	灰釉＋鉄絵		瀬	18
198	112	長石釉＋鉄絵	丸文	瀬	18
199	112	長石釉＋鉄絵	つた文	瀬	22
200	125	染付	1650～1660年代 草花文	肥	26
201	131	輪ハゲ	17C後半 青磁・見込高台砂目痕	肥	
202	132	染付	1650～1660年代 牡丹唐草文	肥	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
203	134	灰釉＋鉄絵	笹文	瀬	28
204	141	灰釉		瀬	
205	813	灰釉＋鉄釉流し掛け	火入れ転用	瀬	18
206	411	灰釉		瀬	
207	411	底部糸切り	口縁部油煙付着	不	
208	411	灰釉	内外面油煙	瀬	
209	234	鉄釉		瀬	
210	311	長石釉＋鉄釉	1630年代～17C後半 「森ノ越」文	瀬	34
211	518		内面煤付着	常	

図118　ＳＫ021出土陶磁器類実測図

ＳＫ401：本遺構の時期は17世紀の第３四半期であると考えられる。

本遺構出土の遺物は口縁部破片数で572点、総個体数44.33個体である。一見して理解し得る点は、供膳具と灯火具が22.7%、69.7%と最も多いことである。このうち灯火具については、98.9%が土器皿であり、この事が全体の比率にも影響を及ぼし、この遺構では72.9%が土器に拠って占められている。また、化粧具・喫煙具・調度具が未出土である点も注目される。

以上の面から本遺構の遺物組成は戦国時代のそれに類以しており、前代の様相を色濃く残す遺構であると考えることができる。但し、戦国時代においては従来から椀：皿＝１：２と言われているが、この遺構では椀：皿＝１：1.56とややその比率差が接近してきており、新しい時代の様相と考えられる側面も有しており、注目に値する。

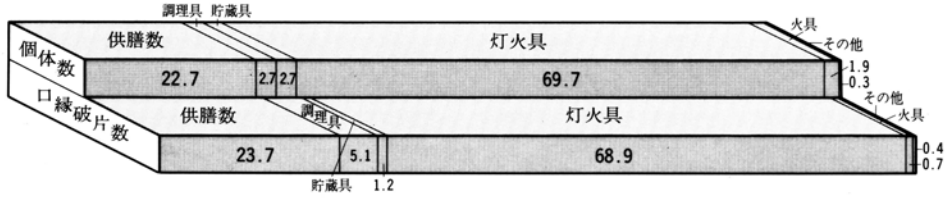
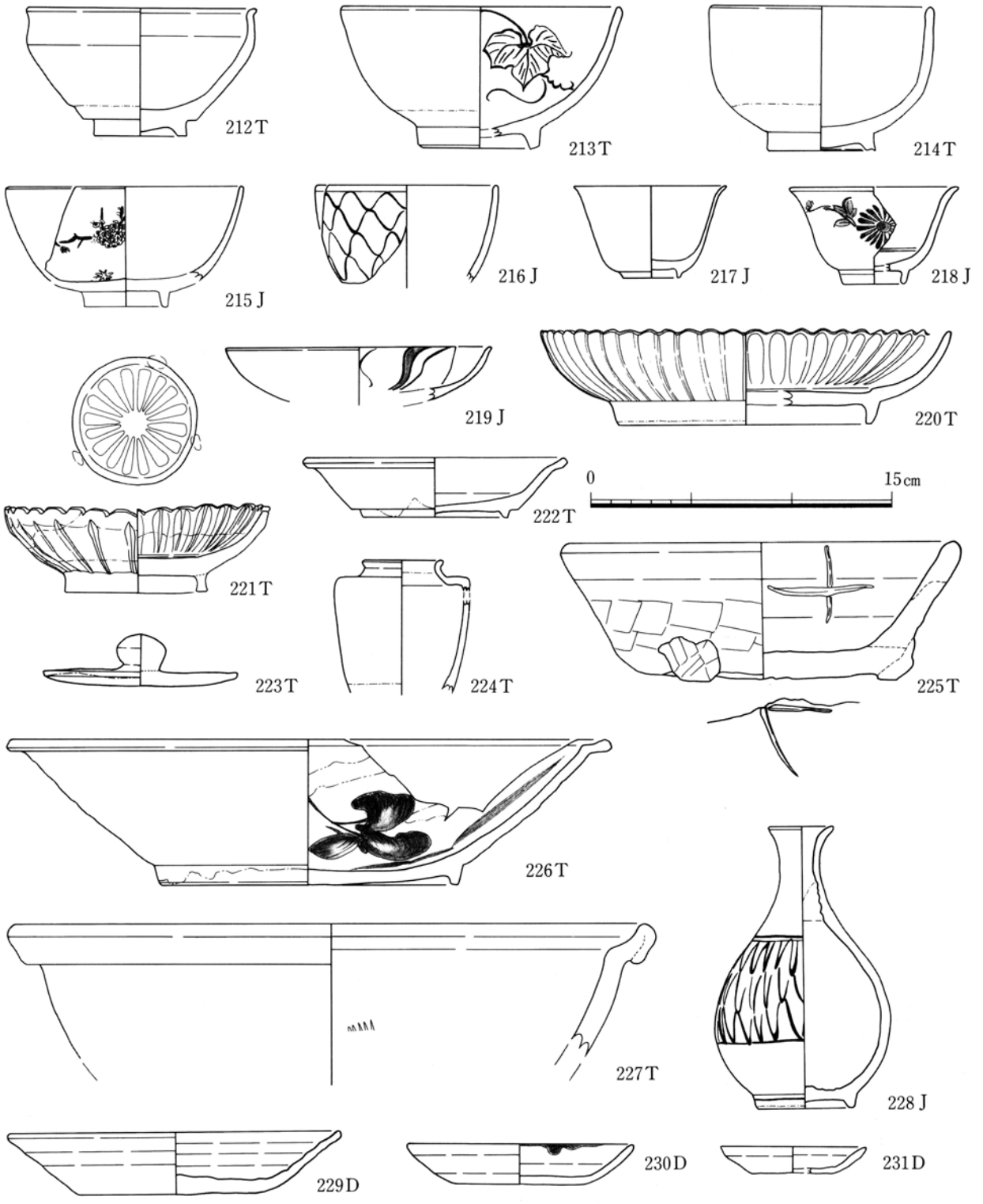


図119　ＳＫ401出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	88	30	0	118	0	92	43	0	135
	椀	0	22	7	0	29	0	28	23	0	51
	小椀	0	0	12	0	12	0	0	9	0	9
	皿	0	58	6	0	64	0	49	7	0	56
	鉢	0	8	5	0	13	0	15	4	0	19
調理具		6	8	0	0	14	13	16	0	0	29
	鍋，釜	6	0	0	0	6	13	0	0	0	13
	鉢					0					0
	擂鉢	0	8	0	0	8	0	15	0	0	15
	瓶	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	その他					0					0
貯蔵具		0	2	12	0	14	0	3	4	0	7
	瓶	0	0	12	0	12	0	0	4	0	4
	壷	0	1	0	0	1	0	1	0	0	1
	甕Ａ	0	1	0	0	1	0	2	0	0	2
	甕Ｂ					0					0
	鉢					0					0
	その他					0					0
灯火具		354	8	0	0	362	388	5	0	0	393
火具		0	10	0	0	10	0	4	0	0	4
化粧具						0					0
神仏具		0	1	0	0	1	0	2	0	0	2
喫煙具						0					0
調度具						0					0
蓋		0	13	0	0	13	0	2	0	0	2
合計		360	130	42	0	532	401	124	47	0	572

表19　ＳＫ401出土陶磁器類集計表



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
212	111	鉄釉		瀬	22
213	112	灰釉＋鉄絵	蔦文	瀬	
214	112	長石釉		瀬	
215	112	赤絵	1670～1690年代 梅と菊文	肥	
216	112	染付	1650～1670年代 網目文	肥	
217	125		1650～1670年代 白磁・高台畳付砂目痕	肥	
218	125	染付	1640～1650年代 草花文	肥	
219	131	染付	1630～1640年代 ねじり花文	肥	
220	135	灰釉		瀬	
221	135	灰釉＋銅緑釉	菊花文	瀬	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
222	132	灰釉		瀬	
223	013	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	44
224	324	鉄釉		瀬	
225	518		ヘラ刻み	常	
226	143	灰釉＋鉄釉・銅緑釉	キビ文	瀬	29
227	234	鉄釉		瀬	
228	315	染付	1650～1670年代 網目文・高台畳付砂粒付着	肥	
229	411			不	
230	411		口縁油煙付着	不	
231	411			不	

図120　ＳＫ401出土陶磁器類実測図

ＳＫ304：本遺構の時期は18世紀前葉に比定される。

本遺構の出土遺物は口縁部破片数で1077点、総個体数で142.5個体である。このうち供膳具が68.5個体、50.7％と全体の約半数を占め、調理具8.0個体、5.9％、貯蔵具5.38個体、4.3％を併せると約６割に達する。ついでやはり灯火具が35.33個体、26.1％と多くを占めている。さらに、化粧具・喫煙具・調度具を併せれば、10.83個体、7.6％を有し、これらの比率はほぼ近世の平均値に等しいものである（平均値は供膳具・調理具・貯蔵具で56.0％、灯火具が19.8％、化粧具・喫煙具・調度具で8.0％）。また磁器が28.58個体、20.1％と増加しており、これらの点から用途にみる組成は近世の標準的な比率をみせている。

器種毎の比率で見た場合、供膳具では椀と皿が2.36：１となり、やはり近世的様相を窺うことができる。また調理具で考えた場合、擂鉢：鍋・釜が１：2.86とこれも平均値（１：2.95）に近い数値を見せており、先に見たことを補強し得ると思われる。

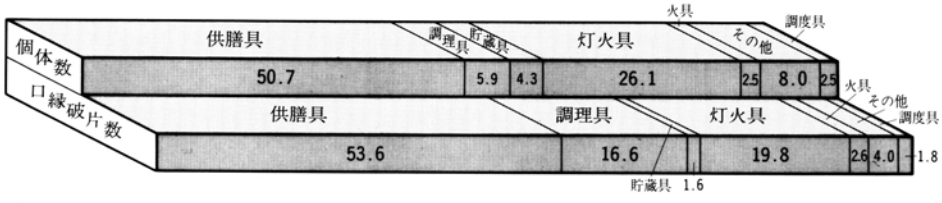
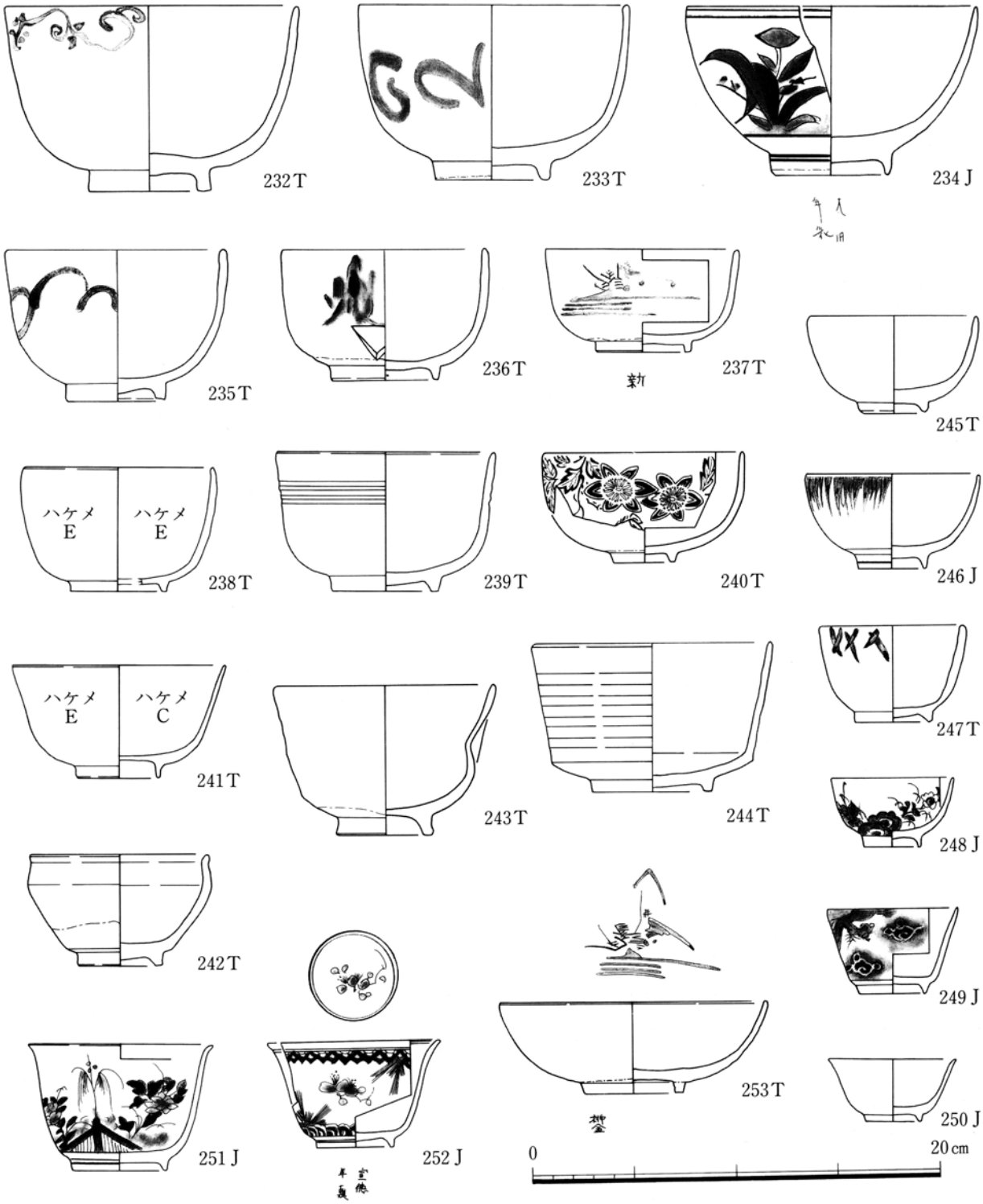


図121　ＳＫ304出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率 土器	陶器	磁器	その他	計	接合前口縁破片数 土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	557	265	0	822	0	405	163	0	568
	椀	0	336	137	0	473	0	269	81	0	350
	小椀	0	16	54	0	70	0	5	38	0	43
	皿	0	167	63	0	230	0	82	32	0	114
	鉢	0	38	11	0	49	0	49	12	0	61
調理具		63	33	0	0	96	136	40	0	0	176
	鍋，釜	63	0	0	0	63	136	1	0	0	137
	鉢	0	11	0	0	11	0	10	0	0	10
	擂鉢	0	22	0	0	22	0	29	0	0	29
	瓶					0					0
	その他					0					0
貯蔵具		0	52	18	0	70	0	13	3	0	16
	瓶	0	41	0	0	41	0	4	0	0	4
	壷	0	3	12	0	15	0	2	1	0	3
	甕Ａ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	甕Ｂ	0	2	0	0	2	0	2	0	0	2
	鉢	0	6	6	0	12	0	4	2	0	6
	その他					0					0
灯火具		292	132	0	0	424	176	34	0	0	210
火具		12	28	0	0	40	9	19	0	0	28
化粧具		0	48	0	0	48	0	7	0	0	7
神仏具		0	22	18	0	40	0	9	11	0	20
喫煙具		0	21	21	0	42	0	11	4	0	15
調度具		0	40	0	0	40	0	19	0	0	19
蓋		0	67	21	0	88	0	12	6	0	18
合計		367	1000	343	0	1710	321	569	187	0	1077

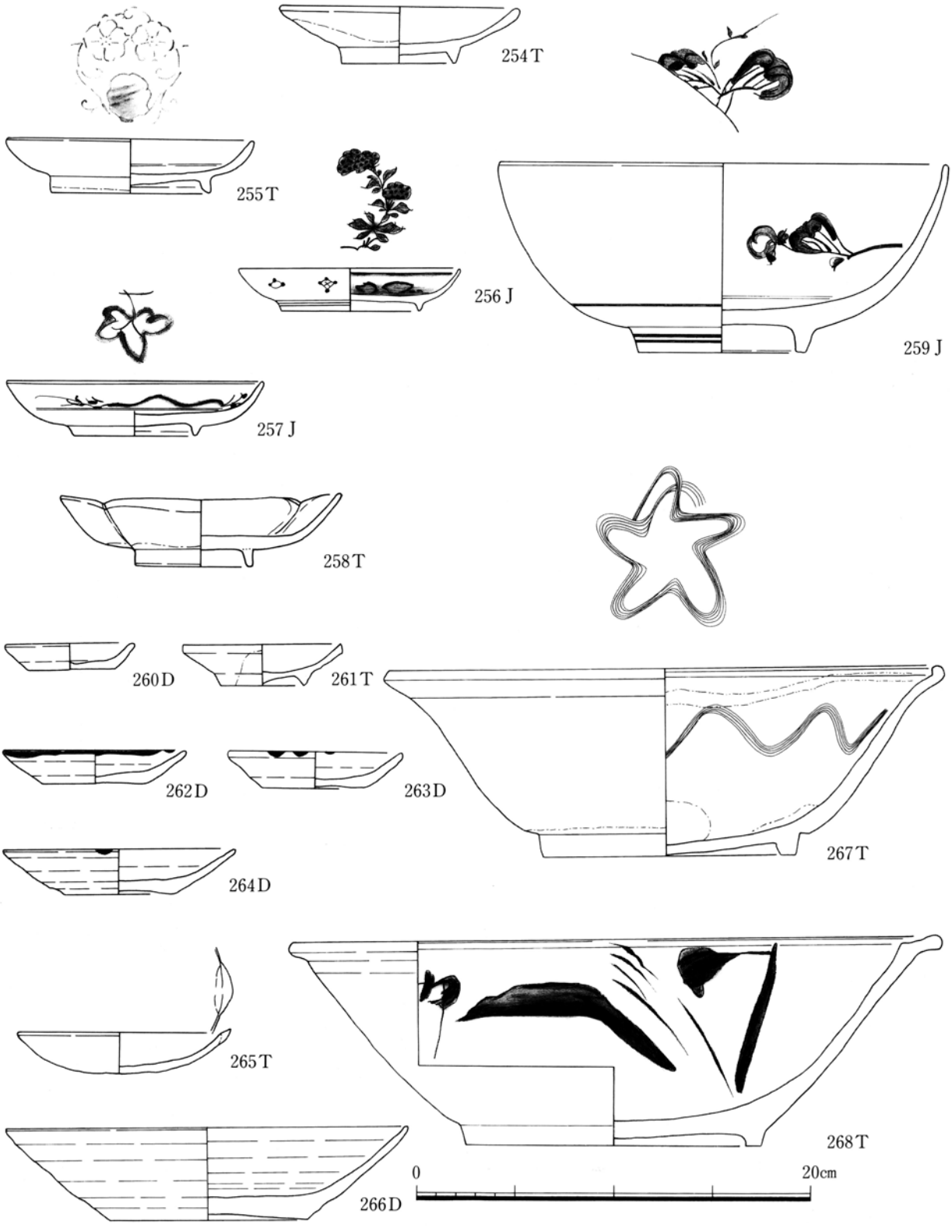
表20　ＳＫ304出土陶磁器類集計表



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
232	112	灰釉＋呉須絵	唐草文	瀬	18
233	112	灰釉＋呉須絵	唐草文	瀬	
234	112	染付	17C末～18C前半 草花文・太明年製，漆継ぎ	肥	18
235	112	灰釉＋呉須絵	唐草文	瀬	22
236	112	灰釉＋呉須絵	山水文	瀬	18
237	112	灰釉＋呉須絵	17C末 楼閣山水文・「新」(刻印)	肥	18
238	112	透明釉	1690～18C前半 刷毛目	肥	22
239	118	鉄釉＋灰釉		瀬	
240	112	灰釉＋鉄釉＋呉須＋赤絵	18C前半	京	18
241	116	透明釉	1690～18C前半 刷毛目	肥	
242	111	鉄釉		瀬	22

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
243	110	透明釉	17C後半～18C初 見込み墨書痕・高台部墨痕	肥	21
244	115	灰釉		瀬	23
245	122	長石釉		不	24
246	112	染付	18C後半 雨降文	肥	18
247	122	灰釉＋呉須絵	幾何文	瀬	18
248	122	染付	17C末～18C前半 岩に草花文	肥	26
249	126	染付	17C末～18C前半 松に雲文・墨はじき	肥	25
250	125		17C後半 白磁・角福	肥	
251	116	染付	17C末～18C前 竹垣に草花文	肥	26
252	125	染付	1670～1690代 幾何文＋梅花文＋宣徳年製・枝折梅花文	肥	25
253	131	灰釉＋呉須絵	17C末 「村中」金J・山水文	肥	

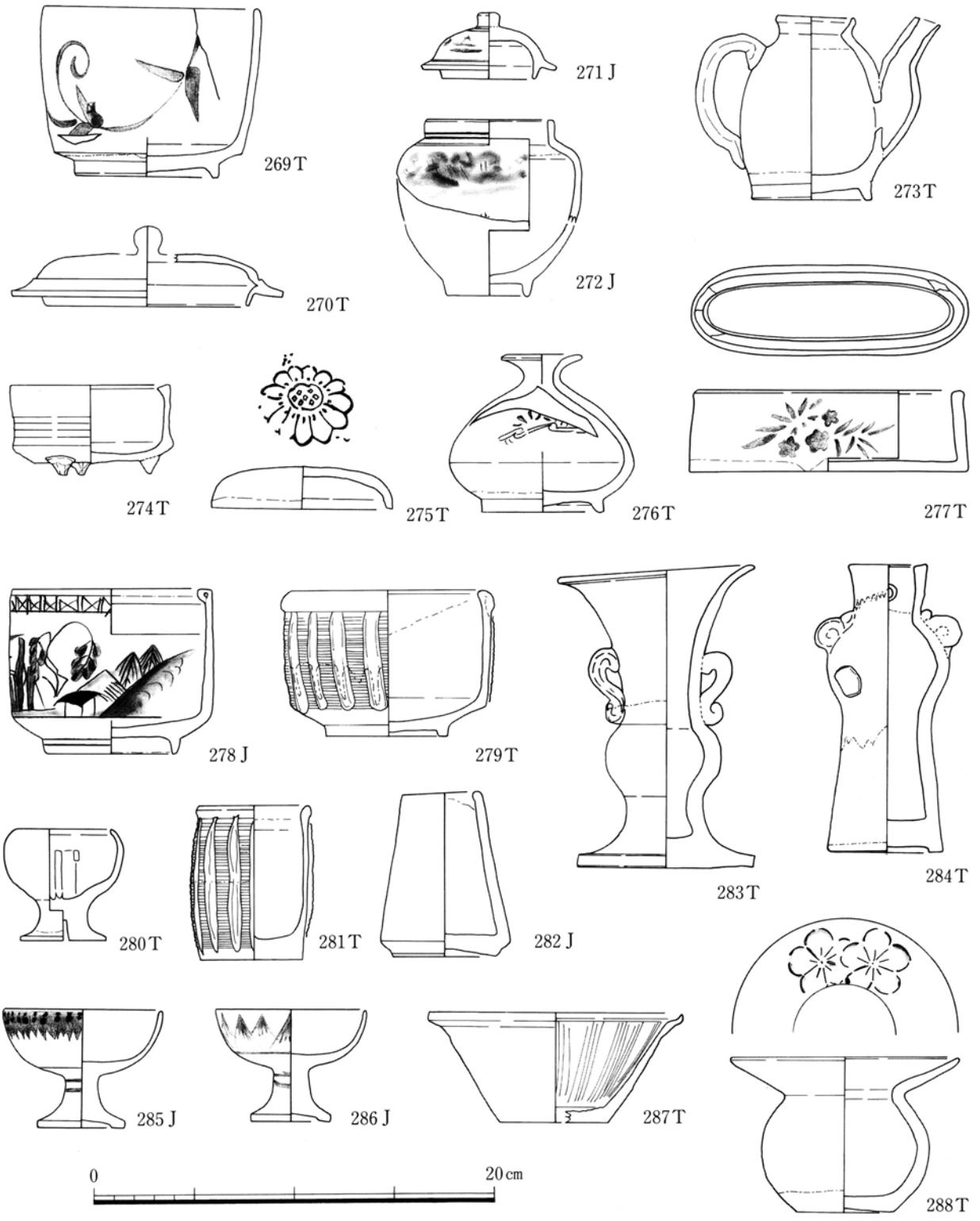
図122　ＳＫ304出土陶磁器類実測図(1)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
254	131	灰釉		瀬	
255	131	灰釉＋鉄釉	花唐草文(スリ絵)	瀬	26
256	131	染付	1670～1690年代 七宝・具と木文＋アジサイ文	肥	26
257	131	染付	17C後半 つる草文＋つた文	肥	26
258	136	灰釉		瀬	
259	141	染付	18C前半～中 草花文＋花文	肥	31
260	411	底部糸切り		不	
261	411	灰釉		肥	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
262	411	底部糸切り	油煙付着	不	
263	411	底部糸切り	油煙付着	不	
264	411	底部糸切り	油煙付着	不	
265	411	鉄釉		瀬	38
266	411		内外面油煙付着	不	
267	143	灰釉＋銅緑釉タンバン		瀬	29
268	143	灰釉＋鉄絵	きびに蔦文	瀬	29

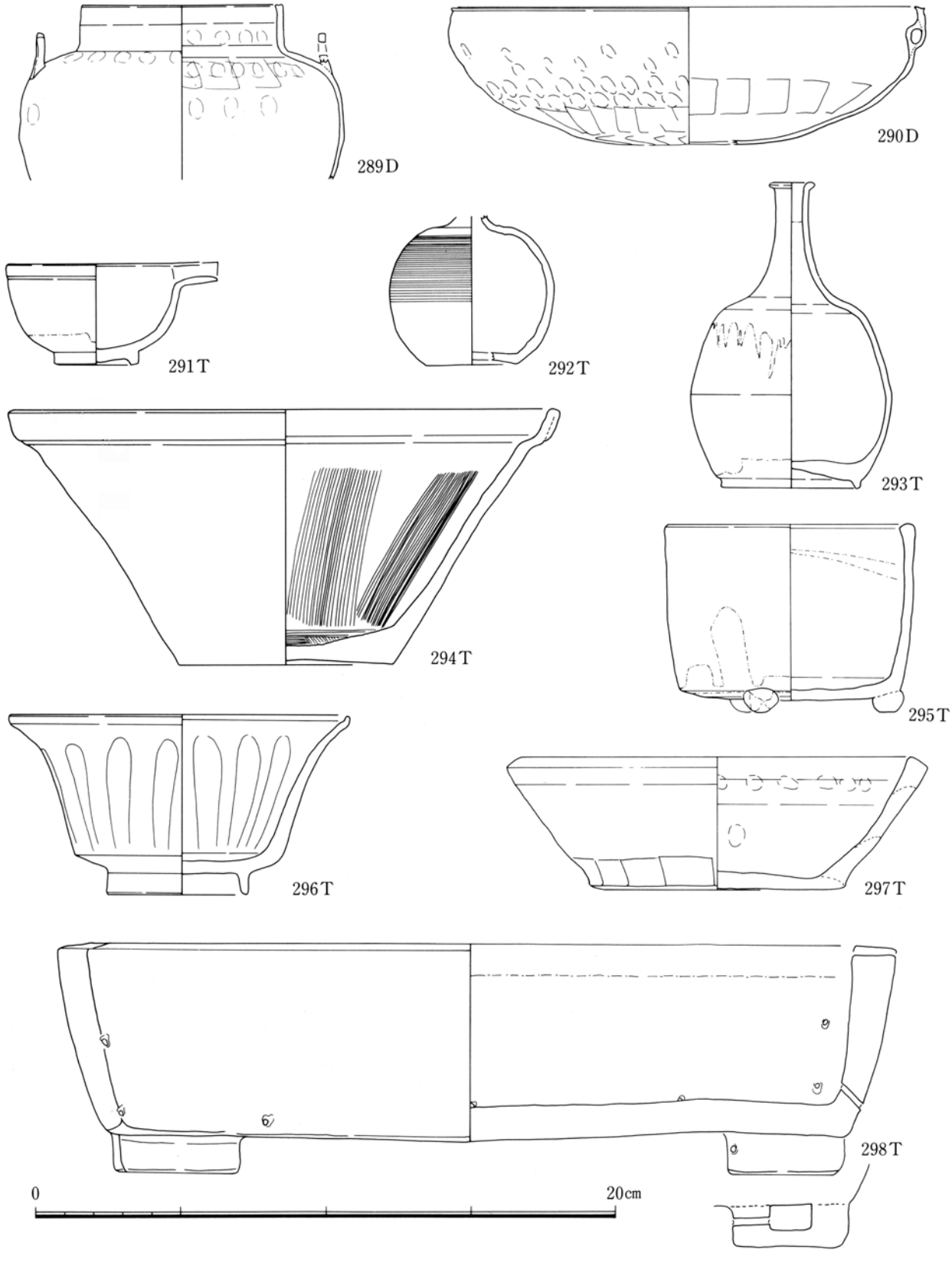
図123　ＳＫ304出土陶磁器類実測図(2)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
269	351	灰釉＋呉須絵	草文	瀬	35
270	014	灰釉	漆継ぎ痕	瀬	
271	014	染付	17C末～18C前半 山水文	肥	44
272	321	染付	17C末～18C前半 山水文	肥	34
273	317	鉄釉		瀬	35
274	721	灰釉		瀬	41
275	016	灰釉＋鉄絵	菊花文	瀬	44
276	622	灰釉＋鉄絵	菊流水文	瀬	39
277	630	灰釉＋鉄絵	（草花文？）	瀬	35
278	721	染付	17C末～18C前半 幾何文＋楼閣山水文	肥	41 40

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
279	811	鉄釉＋灰釉		瀬	41
280	422	鉄釉		瀬	
281	821	鉄釉＋灰釉		瀬	
282	82-		17C後半～18C初 青磁・口縁部蛤刃状	肥	42
283	932	鉄釉＋灰釉		瀬	40
284	932	鉄釉＋灰釉		瀬	40
285	73-	染付	18C前半 雨降文	肥	35
286	73-	染付	17C後～18C初 幾何文	肥	41
287	922	鉄釉		瀬	33
288	961	灰釉＋鉄釉	桜文	瀬	42

図124　ＳＫ304出土陶磁器類実測図(3)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
289	210			不	
290	211		外面煤付着	不	32
291	221	灰釉		瀬	
292	312		火ダスキ	備	33
293	311	鉄釉＋灰釉		瀬	33

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
294	235	鉄釉		瀬	
295	721	鉄釉＋灰釉		瀬	39
296	143	灰釉		瀬	43
297	518		無釉	常	39
298	511	鉄釉	長方形	瀬	39

図125　ＳＫ304出土陶磁器類実測図(4)

ＳＫ211：本遺構の時期は18世紀前葉に比定される。

この遺構からの出土遺物は口縁部破片数307点、総個体数30.08個体である。この内供膳具が13.08個体、49.7％と最も多くを占め、調理具が2.08個体、8.0％、貯蔵具が1.58個体、6.0％である。この３者で全遺物の半数以上を占めている。次いでこの遺構では割合的には灯火具が7.17個体、27.2％に達するが、江戸時代当初に比すればその割合は低下している。このことが土器製品の割合を17.7％と大幅に減少させたことの要因になっている。その反面、陶器が75.9％と圧倒的多数を占めるようになっている。

器種別に見た場合、供膳具では椀と皿の比率が2.04：１と逆転し、椀の使用量が明確に増加していることが理解できる。この点を鉢を含めて考えてみると、椀と鉢の比率は8.91：１と近世の平均値13.18：１より比率差が小さく、皿：鉢は4.36：１と平均値の5.19：１に近い比率を示す。このことからして、供膳具に占める椀・皿・鉢の使用量のうち、この時点で椀は未だ増加の途中にあり、皿・鉢は比率的には近世の平均的使用量に近づいているとすることが可能であると言える。

また調理具では鍋・釜が88％と他の器種を圧倒している。

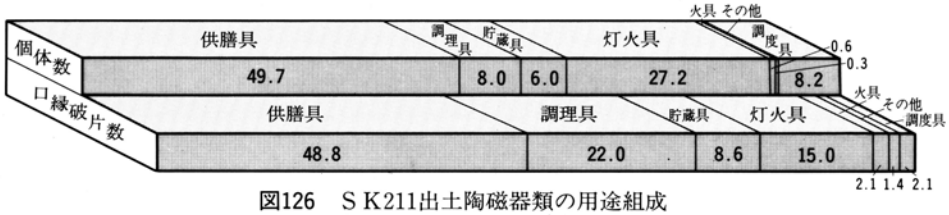
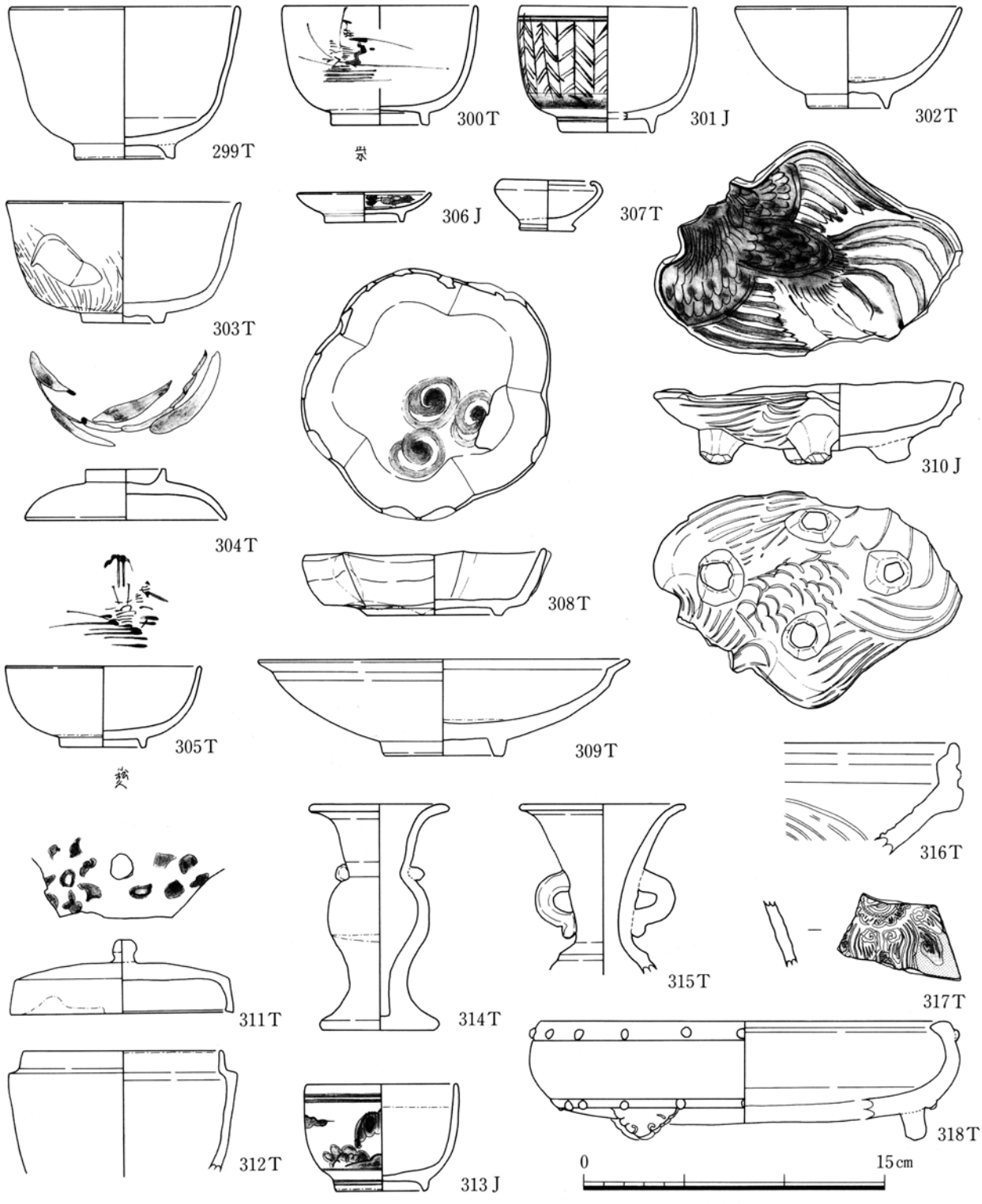


図126　ＳＫ211出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	140	17	0	157	0	136	6	0	142
	椀	0	52	6	0	58	0	54	4	0	58
	小椀	0	40	0	0	40	0	25	0	0	25
	皿	0	37	11	0	48	0	41	2	0	43
	鉢	0	11	0	0	11	0	16	0	0	16
調理具		22	3	0	0	25	50	14	0	0	64
	鍋，釜	22	0	0	0	22	50	0	0	0	50
	鉢	0	1	0	0	1	0	4	0	0	4
	擂鉢	0	2	0	0	2	0	10	0	0	10
	瓶					0					0
	その他					0					0
貯蔵具		0	13	6	0	19	0	23	2	0	25
	瓶	0	3	0	0	3	0	2	0	0	2
	壷	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2
	甕Ａ	0	2	0	0	2	0	9	0	0	9
	甕Ｂ	0	4	0	0	4	0	6	0	0	6
	鉢	0	4	6	0	10	0	4	2	0	6
	その他					0					0
灯火具		40	46	0	0	86	18	26	0	0	44
火具		2	0	0	0	2	5	1	0	0	6
化粧具		0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
神仏具						0					0
喫煙具		0	1	0	0	1	0	3	0	0	3
調度具		0	26	0	0	26	0	6	0	0	6
蓋		0	45	0	0	45	1	15	0	0	16
合計		64	274	23	0	361	74	225	8	0	307

表21　ＳＫ211出土陶磁器類集計表



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
299	112	鉄釉		京	
300	112	灰釉＋呉須絵	17C末 山水文・「柴」(刻印)	肥	18
301	112	染付	1670～18C初頃 矢羽根文	肥	18
302	114	透明釉	17C末～18C前半 刷毛目	肥	22
303	110	灰釉		瀬	24
304	015	灰釉＋鉄釉＋呉須絵		瀬	
305	131	灰釉＋呉須絵	17C末 山水文・「小松久」(刻印)	肥	27
306	131	染付	1670～1700年代	肥	
307	900	灰釉		京	38
308	136	灰釉＋呉須絵		瀬	31

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
309	132	輪ハゲ・灰釉＋鉄釉	17C後半～18C初 刷毛目	肥	30
310	136	染付	1620年代～1630年代 蕨原	肥	28
311	018	灰釉＋鉄釉	花文	瀬	
312	352	灰釉		瀬	
313	351	呉須絵	17C末～18C前半 山水文	肥	34
314	932	灰釉＋鉄釉		瀬	
315	932	灰釉		瀬	42
316	239			備	
317	310	三彩	16C前後 獅子	その他	35
318	943	灰釉		瀬	43

図127　ＳＫ211出土陶磁器類実測図

ＳＫ206：本遺構の時期は18世紀中葉から後葉に比定される。

ここから出土した遺物は口縁部破片数で1314点、総個体数で140.56個体である。用途別では、供膳具67.42個体、53.4%、調理具9.25個体、7.3%、貯蔵具11.75個体、9.3%で、この３者で全体の64.1%を占める。このうち供膳具は平均値に比してそれを上回っているが、他の２用途はほぼ平均値である。この遺構でも灯火具の減少が見られ、18個体、14.3%となっている。さらに従来、灯火具においては土器製品がその多くを占めていたが、ここでは25.5%で、陶器が74.5%と大半を占めるという逆転現象が起きている。当然のことながら、これが出土遺物全体に占める土器製品比率の低下（7.3%）に繋がっている。また化粧具・喫煙具・調度具で13.49個体、9.6%と平均値よりも多くの遺物が出土していることが知られる。このことは３用途のうち、調度具が多く出土している点に起因していると考えられ、この傾向は近世全体に当てはまる可能性を秘めている。

器種別では、やはり椀と皿が3.75：１でありその使用量に大きな差が見られ、また鍋が調理具の66.7%を占めていることが特徴的である。

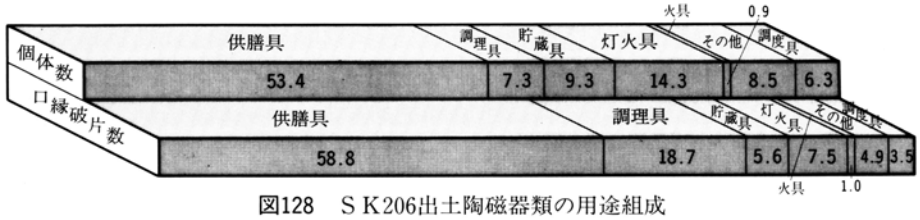
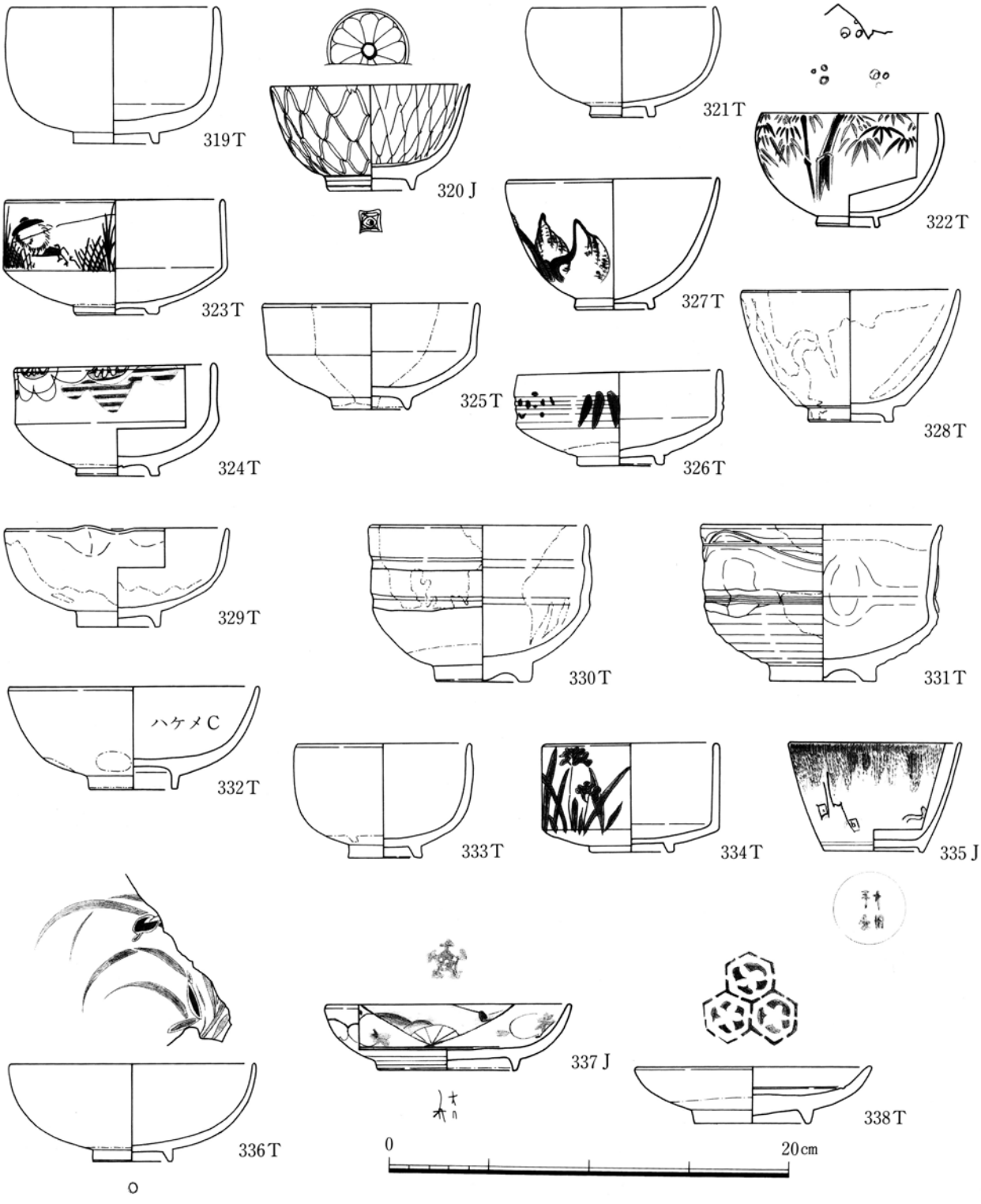


図128　ＳＫ206出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率 土器	陶器	磁器	その他	計	接合前口縁破片数 土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	627	182	0	809	0	601	138	0	739
	椀	0	456	24	0	480	0	432	24	0	456
	小椀	0	11	120	0	131	0	7	86	0	93
	皿	0	150	13	0	163	0	141	16	0	157
	鉢	0	10	25	0	35	0	21	12	0	33
調理具		57	54	0	0	111	141	94	0	0	235
	鍋，釜	57	17	0	0	74	141	18	0	0	159
	鉢	0	11	0	0	11	0	13	0	0	13
	擂鉢	0	20	0	0	20	0	55	0	0	55
	瓶	0	6	0	0	6	0	8	0	0	8
	その他					0					0
貯蔵具		3	114	24	0	141	3	50	17	0	70
	瓶	0	28	0	0	28	0	8	0	0	8
	壷	3	27	0	0	30	3	12	7	0	22
	甕Ａ	0	2	0	0	2	0	3	0	0	3
	甕Ｂ	0	16	0	0	16	0	8	0	0	8
	鉢	0	41	24	0	65	0	19	10	0	29
	その他					0					0
灯火具		55	161	0	0	216	44	50	0	0	94
火具		2	11	0	0	13	2	10	0	0	12
化粧具		0	8	17	0	25	0	8	4	0	12
神仏具		0	50	17	0	67	0	26	5	0	31
喫煙具		0	37	0	0	37	0	19	0	0	19
調度具		0	91	2	3	96	0	42	1	1	44
蓋		6	118	15	0	139	1	46	11	0	58
合計		123	1271	257	3	1654	191	946	176	1	1314

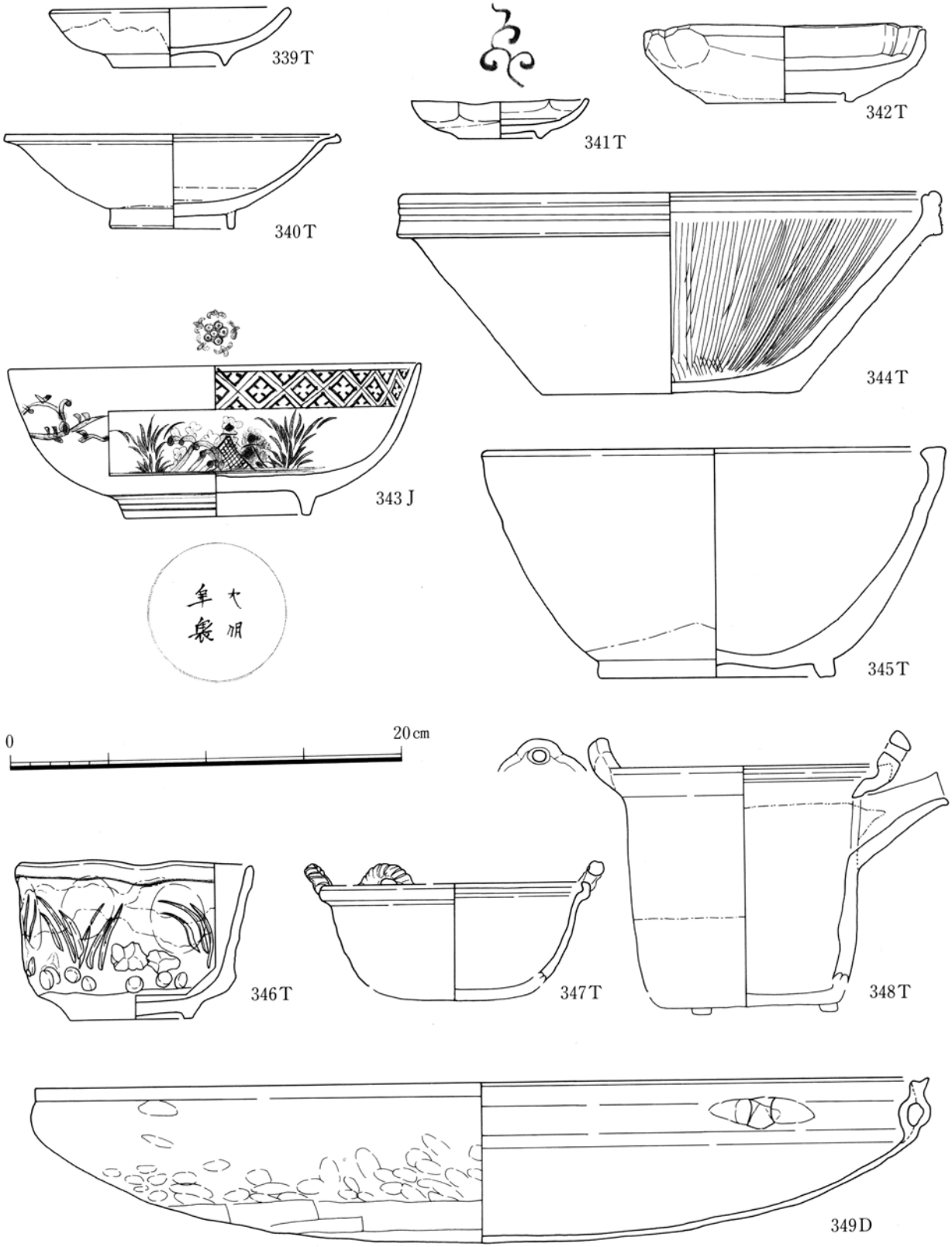
表22　ＳＫ206出土陶磁器類集計表



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
319	112	灰釉		瀬	22
320	112	染付	18C前半～中半 二重網目文＋満福・網目文＋菊花文	肥	18
321	112	灰釉		京	22
322	112	灰釉＋上絵付	竹文・丸文	京	18
323	113	灰釉	葦・サギ文か	京	20
324	113	灰釉＋鉄釉＋その他		京	20
325	113	鉄釉＋灰釉		瀬	23
326	113	灰釉＋鉄絵＋呉須絵	笹文	瀬	20
327	112	灰釉＋鉄釉＋呉須絵	柳文	京	20
328	117	鉄釉＋灰釉流し掛け		京	21

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
329	110	鉄釉＋灰釉流し掛け		京	18
330	118	灰釉＋鉄釉		瀬	18
331	110	鉄釉＋灰釉流し掛け		京	21
332	112	透明釉＋長石釉	刷毛目	肥	18
333	112	鉄釉		瀬	24
334	115	灰釉＋鉄絵	菖蒲文	瀬	20
335	126	染付	1690～18C前半 口銹・雨降文＋角蛇光雲＋「大明年製」	肥	26
336	131	灰釉＋上絵付	菖蒲文＋高台内墨書「○」	京	
337	131	染付	唐草文＋「大明年製」扇と花唐草文＋五弁花	肥	27
338	411	灰釉＋鉄絵	梅亀甲文、油煙付着	瀬	27

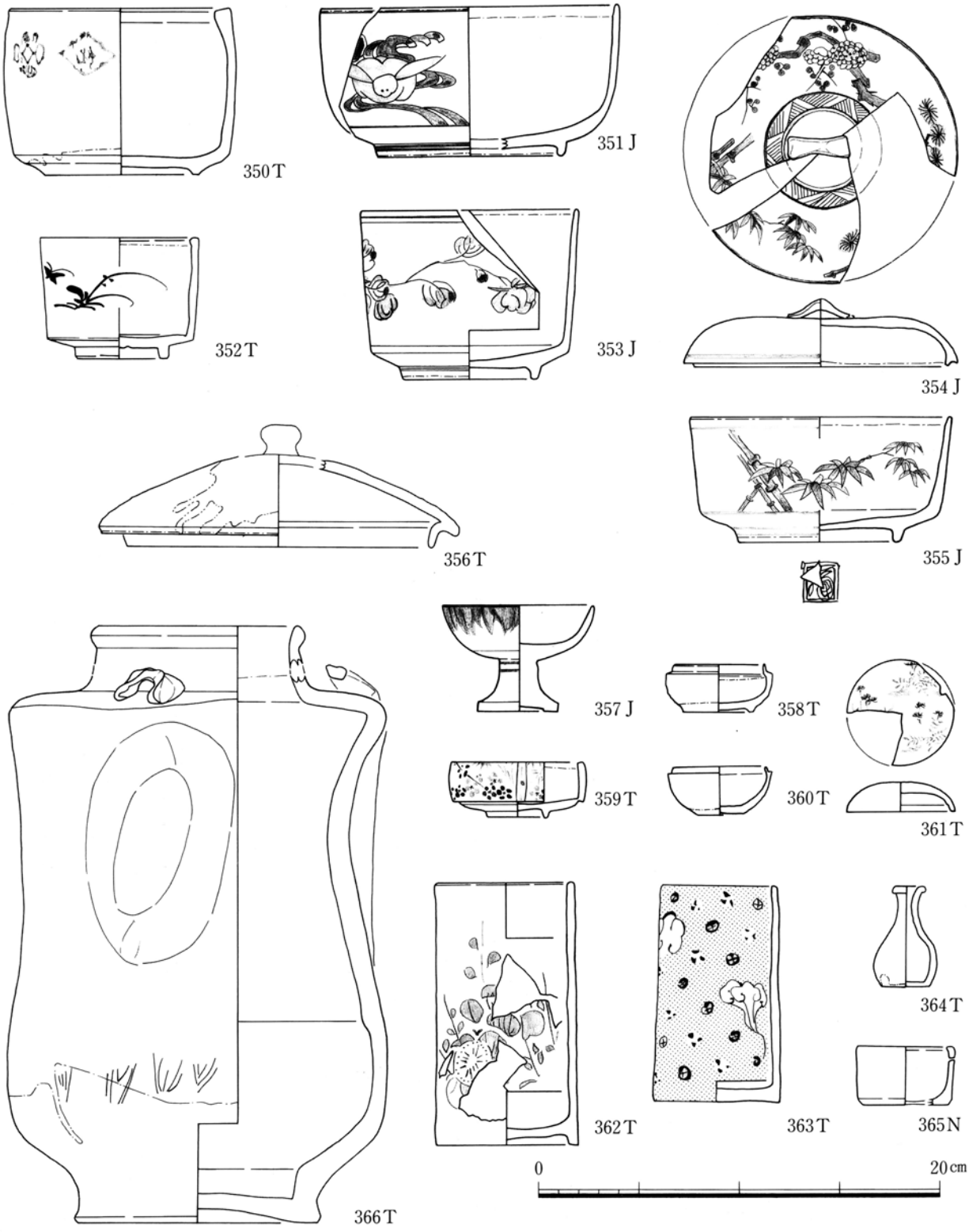
図129　ＳＫ206出土陶磁器類実測図(1)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
339	411	灰釉	外面体部下半油煙付着	瀬	
340	411	輪ハゲ・灰釉	無釉部分油煙付着	瀬	
341	136	灰釉＋呉須絵	唐草文	瀬	28
342	136	灰釉	内面口縁部布目痕	瀬	
343	141	染付	18C前～中葉　唐草文＋「大明年製」・割小菊＋五弁花	肥	31＋28
344	239			堺	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
345	222	鉄釉		瀬	32
346	110	灰釉＋鉄釉流し掛け	草文	瀬	21
347	215	鉄釉		不	32
348	318	鉄釉		瀬	33
349	213			不	

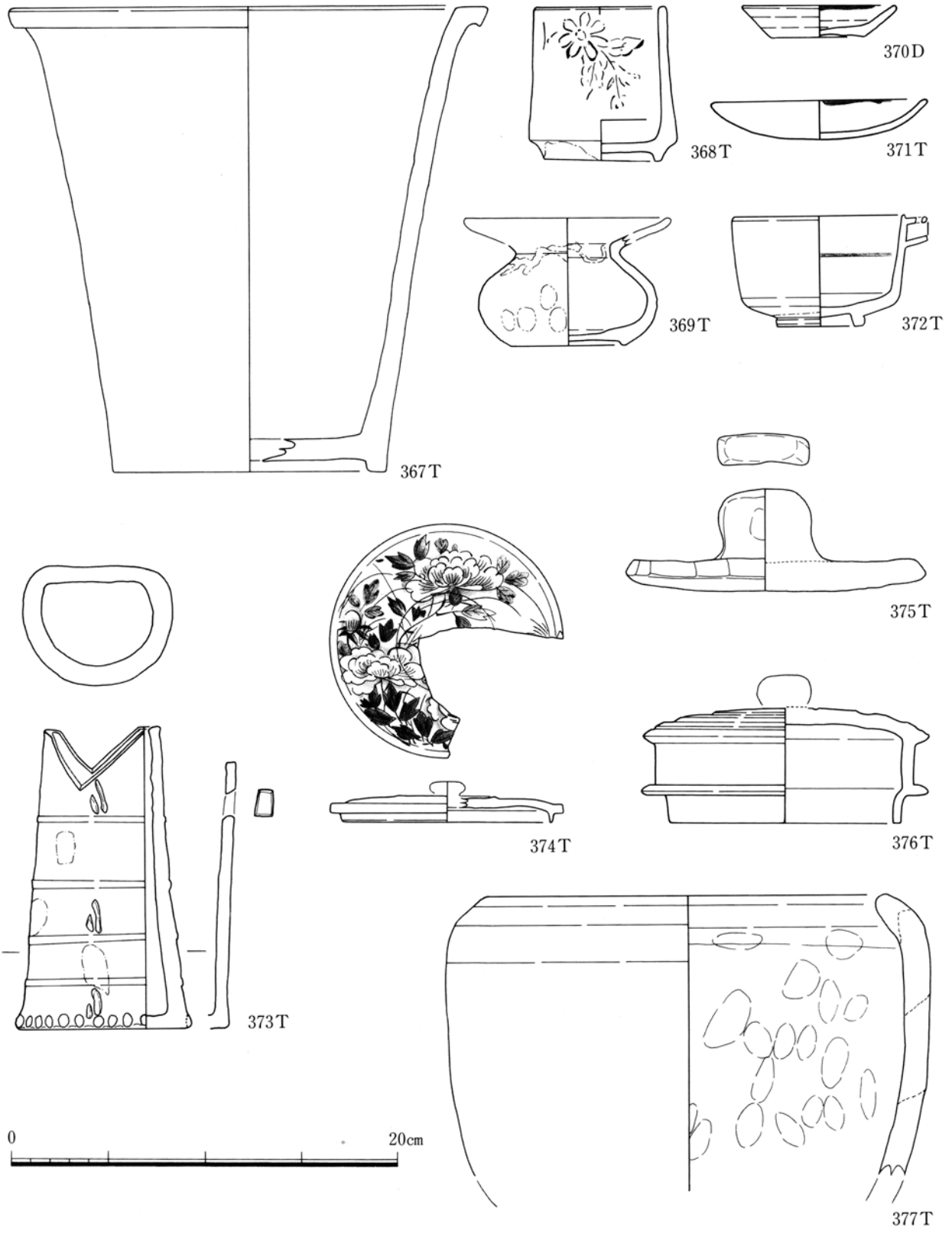
図130　ＳＫ206出土陶磁器類実測図(2)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
350	351	灰釉＋鉄絵		瀬	34
351	351	染付	18C前半～中葉 兎と流水文	肥	34
352	351	灰釉＋鉄絵	蝶に草花文、底部煤付着(被熱)	瀬	
353	351	染付	1690～18C前半 唐と牡丹文	肥	35
354	014	染付	松竹梅文	肥	
355	351	染付	1690～18C前半 松竹梅文＋渦福	肥	34
356	014	鉄釉＋灰釉流し掛け		京	
357	730	染付	18C前 雨降文	肥	41
358	740	灰釉		瀬	37

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
359	351	灰釉＋上絵付	竹と梅文＋竹と梅文	京	35
360	740	灰釉	底部墨書痕	京	
361	016	灰釉＋上絵付	菊文	京	35
362	902	灰釉＋鉄絵	梅花文	瀬	40
363	902	灰釉＋上絵付	花散し文	京	40
364	712	灰釉		瀬	41
365	921	黄釉		不	
366	322	灰釉		丹	34

図131　ＳＫ206出土陶磁器類実測図(3)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
367	950	灰釉		瀬	
368	82-	灰釉＋鉄絵	桜花文・被熱	瀬	35
369	961	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	40
370	411	底部糸切り	油煙付着	不	
371	411	底部糸切り・鉄釉	油煙付着	不	
372	901	灰釉＋鉄釉		瀬	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
373	931	灰釉＋呉須散らし		瀬	42
374	014	灰釉＋呉須絵	牡丹文	京	35
375	013		底に煤付着	常	
376	014			不	
377	521			常	

図132　ＳＫ206出土陶磁器類実測図(4)

ＳＫ219：本遺構の時期は18世紀中葉から後葉に位置づけられる。

本遺構からの出土遺物は口縁部破片数814点、総個体数68.35個体である。用途別では供膳具が35.0個体、57.4％と最も多く、次いで灯火具が平均値より少ないものの。7.67個体、12.7％を占める。調理具は5.42個体、9.0％、貯蔵具は4.92個体、8.1％とほぼ平均値を示している。この比率を遺物の材質で見てみれば、灯火具の少なさが影響し、土器製品が4.0個体、5.9％と少なく、磁器が12.42個体、18.3％とその比率を高めている。

器種別に見てみると、椀と皿の比率は2.67：１とさらにその差が開いている。調理具では鍋・釜が5.49個体、90.8％を占め、その他の器種の出土が少量であるため、比率は大きく開いている。貯蔵具は甕の出土を見ず、その他の瓶、壺、鉢が均等に出土している。

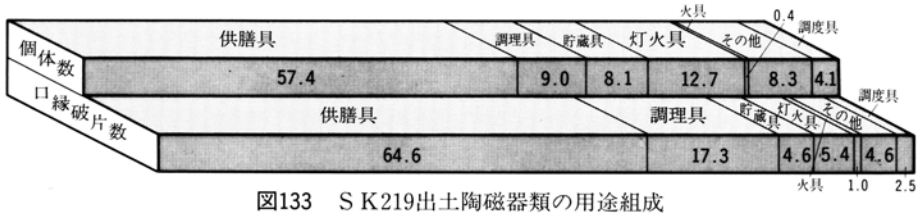
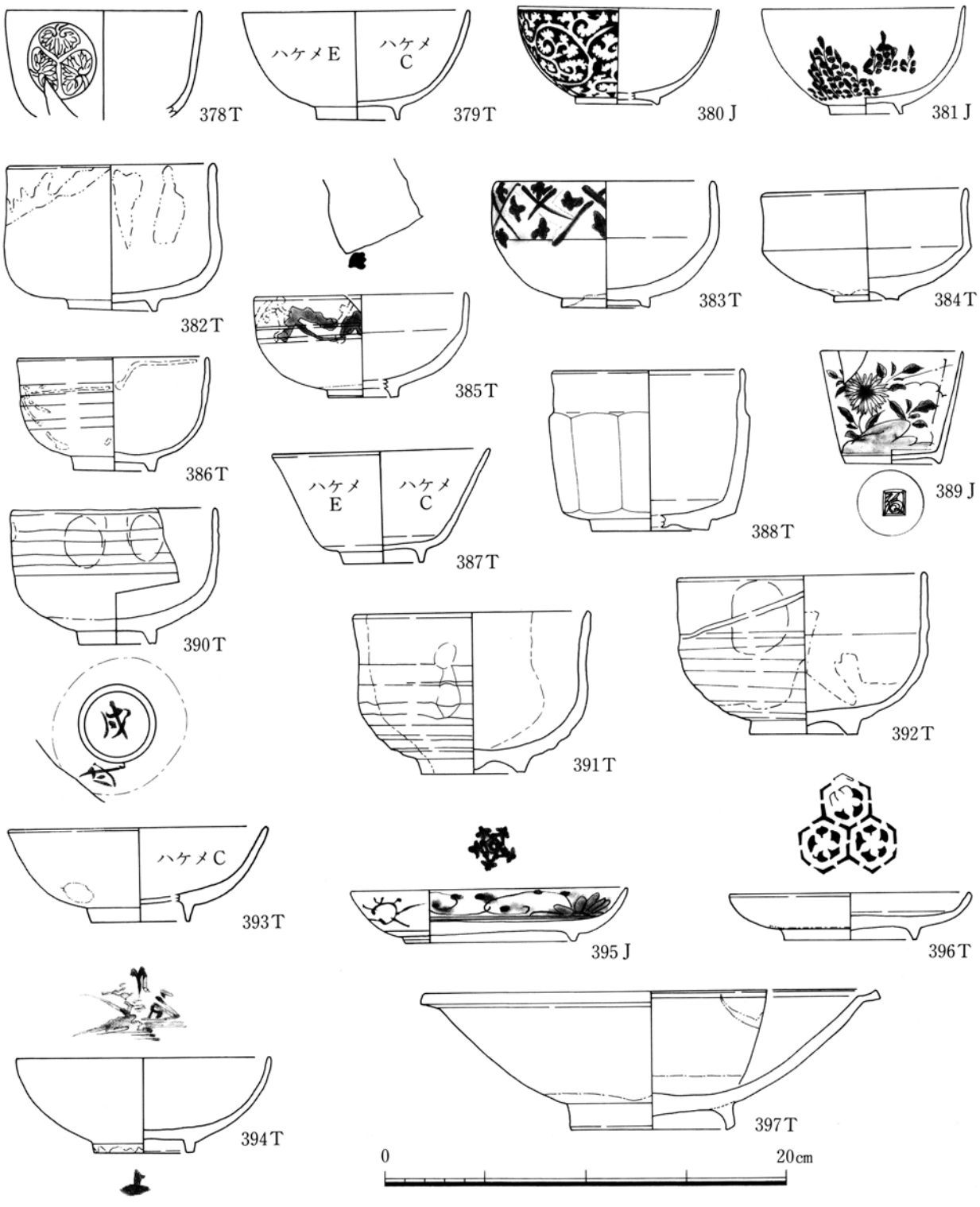


図133　ＳＫ219出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率 土器	陶器	磁器	その他	計	接合前口縁破片数 土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	310	106	0	416	0	248	62	0	310
	椀	0	188	37	0	225	0	161	33	0	194
	小椀	0	0	55	0	55	0	0	23	0	23
	皿	0	91	14	0	105	0	56	6	0	62
	鉢	0	31	0	0	31	0	31	0	0	31
調理具		26	39	0	0	65	62	21	0	0	83
	鍋，釜	26	33	0	0	59	62	13	0	0	75
	鉢	0	1	0	0	1	0	1	0	0	1
	擂鉢	0	4	0	0	4	0	6	0	0	6
	瓶	0	1	0	0	1	0	1	0	0	1
	その他					0					0
貯蔵具		0	55	4	0	59	0	20	2	0	22
	瓶	0	21	0	0	21	0	2	0	0	2
	壷	0	20	0	0	20	0	5	0	0	5
	甕Ａ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	甕Ｂ					0					0
	鉢	0	14	4	0	18	0	12	2	0	14
	その他					0					0
灯火具		21	71	0	0	92	13	13	0	0	26
火具		1	2	0	0	3	1	4	0	0	5
化粧具		0	6	12	0	18	0	1	1	0	2
神仏具		0	22	1	0	23	0	10	1	0	11
喫煙具		0	8	11	0	19	0	7	2	0	9
調度具		0	30	0	0	30	0	12	0	0	12
蓋		0	74	15	0	89	0	16	3	0	19
合計		48	617	149	0	814	76	352	71	0	499

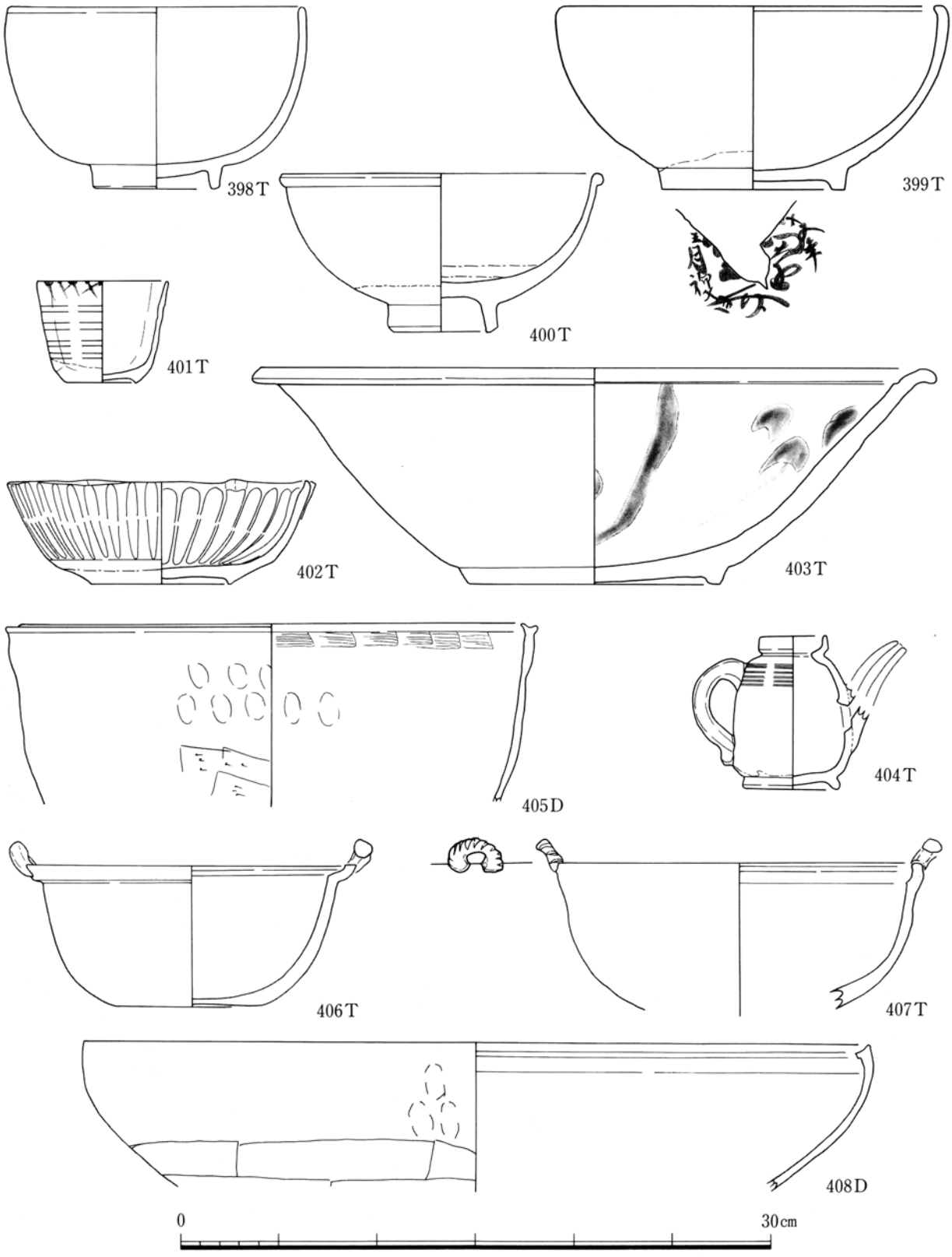
表23　ＳＫ219出土陶磁器類集計表



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
378	112	灰釉＋呉須絵	三ツ葉葵	瀬	18
379	112	透明釉	1690～18C前半 刷毛目	肥	
380	112	染付	18C前半 蛸唐草文	肥	18
381	112	染付	18C前半 草文＋「大明年製」	肥	18
382	112	灰釉＋鉄釉流し掛け		瀬	21
383	113	灰釉＋鉄絵	割菱文	瀬	20
384	113	灰釉	練込み	京	20
385	113	灰釉＋鉄釉＋銅緑釉＋呉須	18C前半	京	
386	112	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	21
387	116	透明釉	18C前半 刷毛目	肥	20

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
388	140	灰釉	練込み	京	21
389	126	染付	18C前半 菊花文＋渦福に一重圏線	肥	
390	110	灰釉＋鉄釉	「戊」(墨書痕一周)	瀬	
391	110	鉄釉＋灰釉		瀬	
392	110	鉄釉＋灰釉		瀬	24
393	114	透明釉	18C前半 刷毛目	肥	
394	131	灰釉＋鉄絵	18C前～中葉 「上」(墨書)＋楼閣山水文	京	30
395	131	染付	18C前～中葉　唐草文・菊唐草文＋五弁花(コンニャク)	肥	26
396	131	灰釉＋鉄絵	梅に亀甲文	瀬	
397	143	輪ハゲ・灰釉＋鉄釉流し掛け		瀬	31

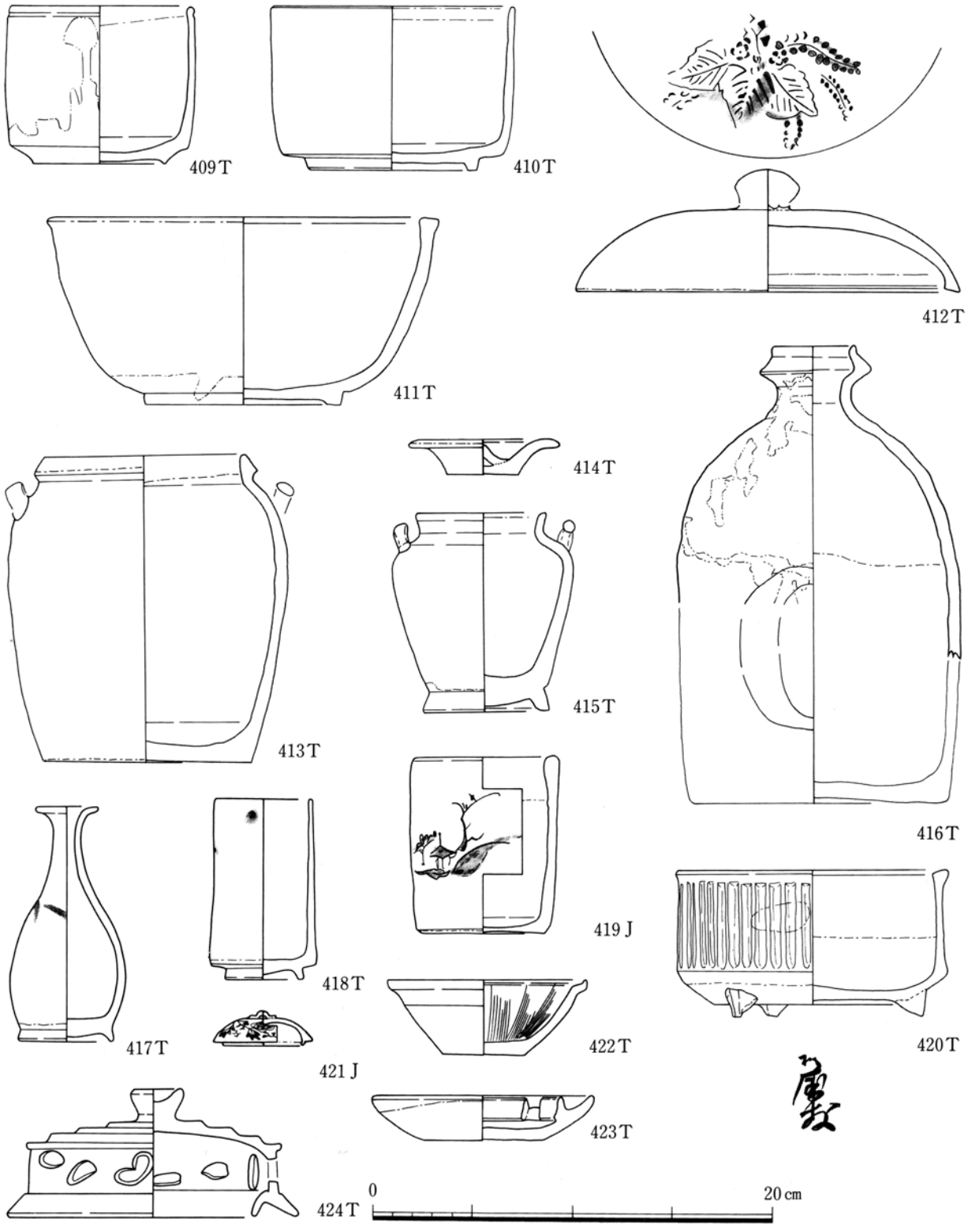
図134　ＳＫ219出土陶磁器類実測図(1)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
398	141	灰釉		瀬	
399	141	灰釉	18C前半～中葉（染付）	瀬	31
400	141	輪ハゲ・灰釉	18C前半～中葉	肥	
401	146	灰釉＋鉄絵	斜格子文	瀬	
402	145	灰釉	高台内墨書痕	瀬	
403	143	灰釉＋鉄絵	きび文	瀬	31

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
404	317	鉄釉		瀬	36
405	211			不	
406	215	鉄釉		瀬	32
407	215	鉄釉		瀬	
408	213			不	

図135　ＳＫ219出土陶磁器類実測図(2)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
409	351	鉄釉＋灰釉		京	
410	351	灰釉		瀬	
411	351	灰釉		瀬	32
412	016	灰釉＋鉄絵	桐文	瀬	44
413	321	灰釉		瀬	39
414	011	鉄釉		瀬	43
415	321	鉄釉		瀬	36
416	316	鉄釉		瀬	36

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
417	712	灰釉＋呉須絵		瀬	41
418	902	灰釉＋鉄釉		瀬	42
419	821	青磁釉＋染付	17C末～18C前半 楼閣山水文	肥	40
420	812	灰釉＋呉須	「御屋敷」	瀬	41
421	014	呉須絵	18C前半 社円唐草文	肥	
422	922	鉄釉		瀬	33
423	412	鉄釉		瀬	38
424	019		内面煤付着	不	

図136　ＳＫ219出土陶磁器類実測図(3)

ＳＫ123：本遺構の時期は18世紀中葉から19世紀初頭に位置づけられる。

本遺構からの出土遺物は、口縁部破片数で782点、総個体数で102.58個体である。ここでもやはり供膳具が44.12個体、45.7％を占め最も多く、次いで灯火具が36.75個体、38.1％を占める。これに対し、調理具4.0個体、4.2％、貯蔵具3.67個体、3.8％とその割合が低下しており、その他の同時期の遺構とは様相をやや異にしている。先にも述べたように、灯火具の比率の増減は土器製品、即ち土器皿に拠るところが大きく、本遺構の灯火具のうち74.4％がそれに拠って占められており、全体でも29.5％とその割合を増加させることにつながっている。そして、この様な組成を持つ遺構は土器皿の使用頻度の高い空間に隣接して構築されていたと言える。但し、戦国時代との相違は、全体に占める割合がそれでもなお少数であること、そして磁器製品の割合が18.3％に増加していることにある。

器種別では、椀と皿の比率が3.88：１とほぼ４倍に近づいている。これは鉢との比率比較から、皿の若干の減少と椀の増加の両面からの結果である。また擂鉢と鍋の比率は１：3.18とほぼ平均値となっている。

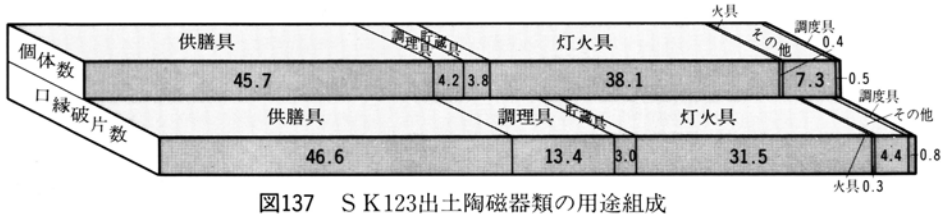
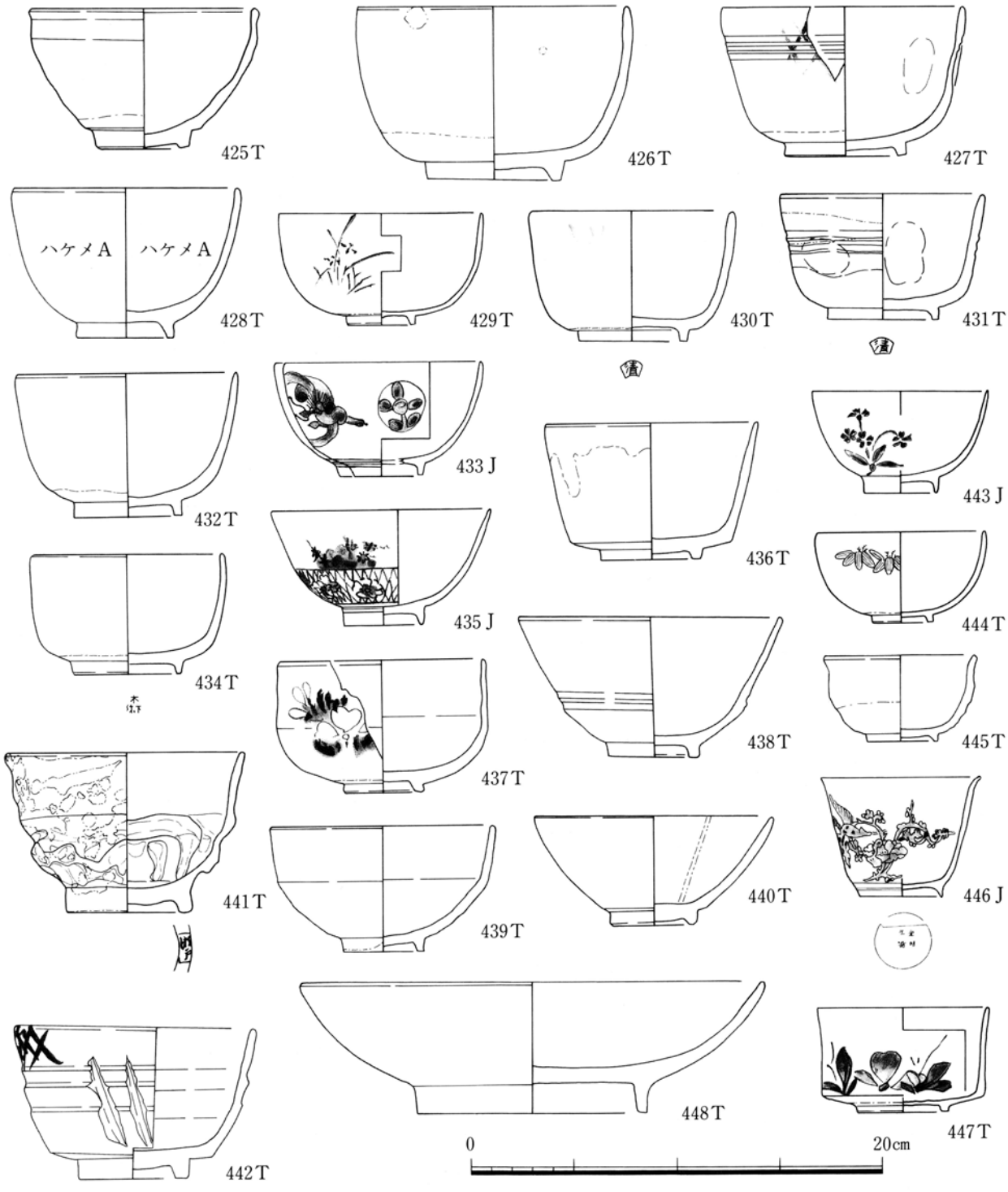


図137　ＳＫ123出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	363	167	0	530	0	235	119	0	354
	椀	0	232	63	0	295	0	152	65	0	217
	小椀	0	25	72	0	97	0	15	34	0	49
	皿	0	73	28	0	101	0	45	15	0	60
	鉢	0	33	4	0	37	0	23	5	0	28
調理具		35	13	0	0	48	79	23	0	0	102
	鍋，釜	35	0	0	0	35	79	0	0	0	79
	鉢	0	2	0	0	2	0	8	0	0	8
	擂鉢	0	11	0	0	11	0	15	0	0	15
	瓶					0					0
	その他					0					0
貯蔵具		0	35	9	0	44	0	20	3	0	23
	瓶	0	26	0	0	26	0	4	0	0	4
	壷	0	5	9	0	14	0	3	2	0	5
	甕Ａ	0	3	0	0	3	0	12	0	0	12
	甕Ｂ	0	1	0	0	1	0	1	0	0	1
	鉢	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
	その他					0					0
灯火具		328	113	0	0	441	202	37	0	0	239
火具		0	5	0	0	5	0	2	0	0	2
化粧具		0	0	8	0	8	0	0	4	0	4
神仏具		0	54	2	0	56	0	20	2	0	22
喫煙具		0	12	9	0	21	0	2	5	0	7
調度具		0	6	0	0	6	0	6	0	0	6
蓋		0	42	30	0	72	0	13	10	0	23
合計		363	643	225	0	1231	281	358	143	0	782

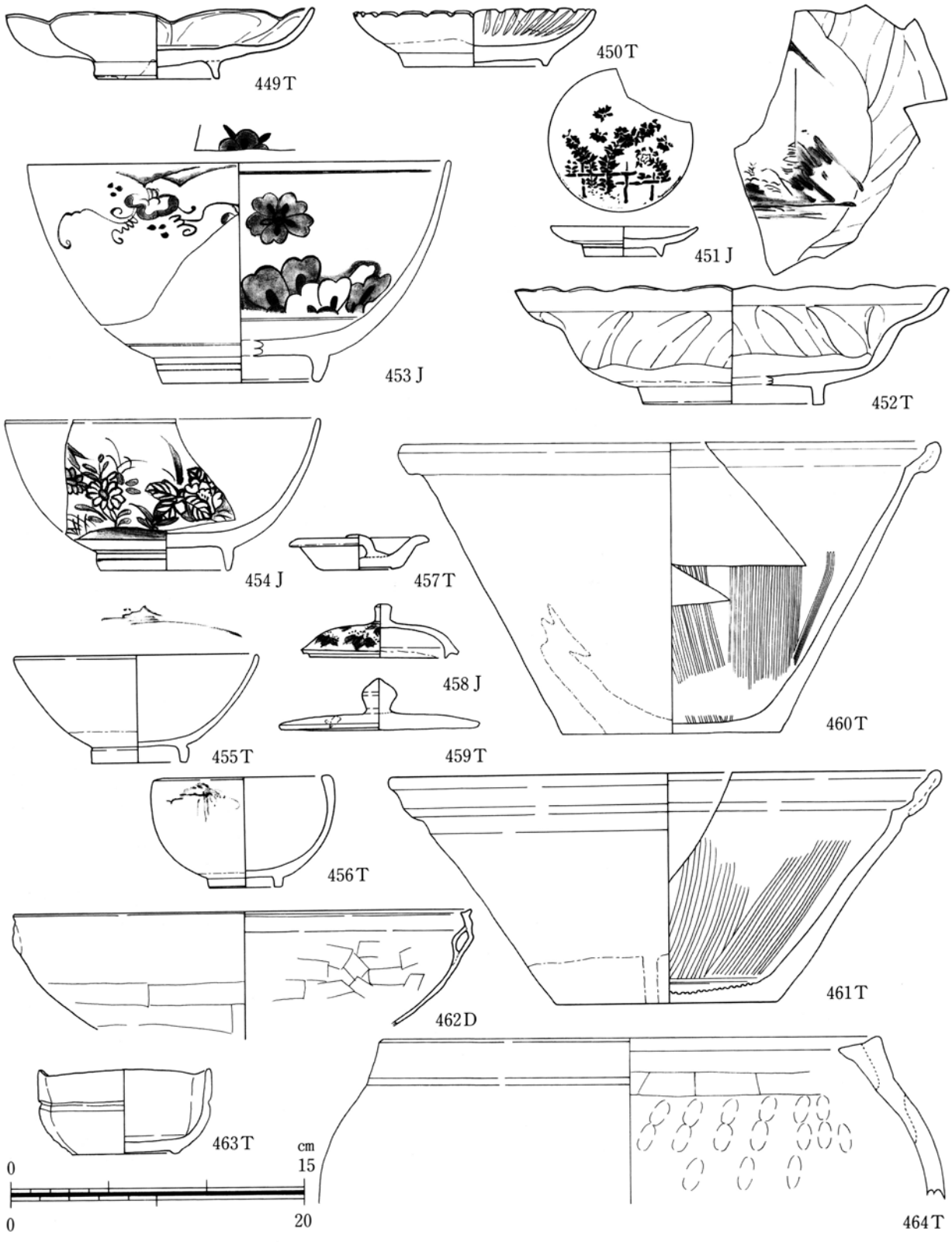
表24　ＳＫ123出土陶磁器類集計表



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
425	111	鉄釉		瀬	22
426	112	灰釉＋鉄釉		瀬	18
427	112	灰釉＋呉須絵		瀬	
428	112	灰釉	17C後半～18C初 刷毛目	肥	18
429	112	灰釉＋呉須絵＋鉄絵	菖蒲文	京	18
430	112	灰釉＋呉須絵	「清」（刻印）	瀬	18
431	118	鉄釉＋灰釉	「清」（刻印）	瀬	21
432	112	灰釉		瀬	22
433	112	透明釉＋染付	18C前半～中 環状の梅と龍文	肥	22
434	112	灰釉＋呉須絵	1690～18C前半 山水文アリ・「木下弥」（刻印）	京	
435	112	染付	網目に桜文（桜一部型紙）	肥	18
436	118	鉄釉＋灰釉		瀬	19

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
437	113	灰釉＋鉄絵＋白泥	桜花文	京	20
438	114	灰釉		瀬	21
439	113	灰釉		瀬	
440	114	鉄釉＋灰釉		瀬	20
441	110	灰釉＋鉄釉	「瀬戸」（刻印）	瀬	21
442	710	灰釉＋鉄絵	斜格子文	瀬	21
443	112		17C末～18C初 草花文	肥	26
444	122	灰釉＋鉄絵＋呉須絵	笹文	京	
445	125	鉄釉		瀬	25
446	125	染付	1670～90代 獅子と牡丹唐草文・「宮明年製」	肥	26
447	124	灰釉＋鉄釉＋白泥	桜文(カ)	京	20
448	131	高台内釉ハギ・灰釉		肥	

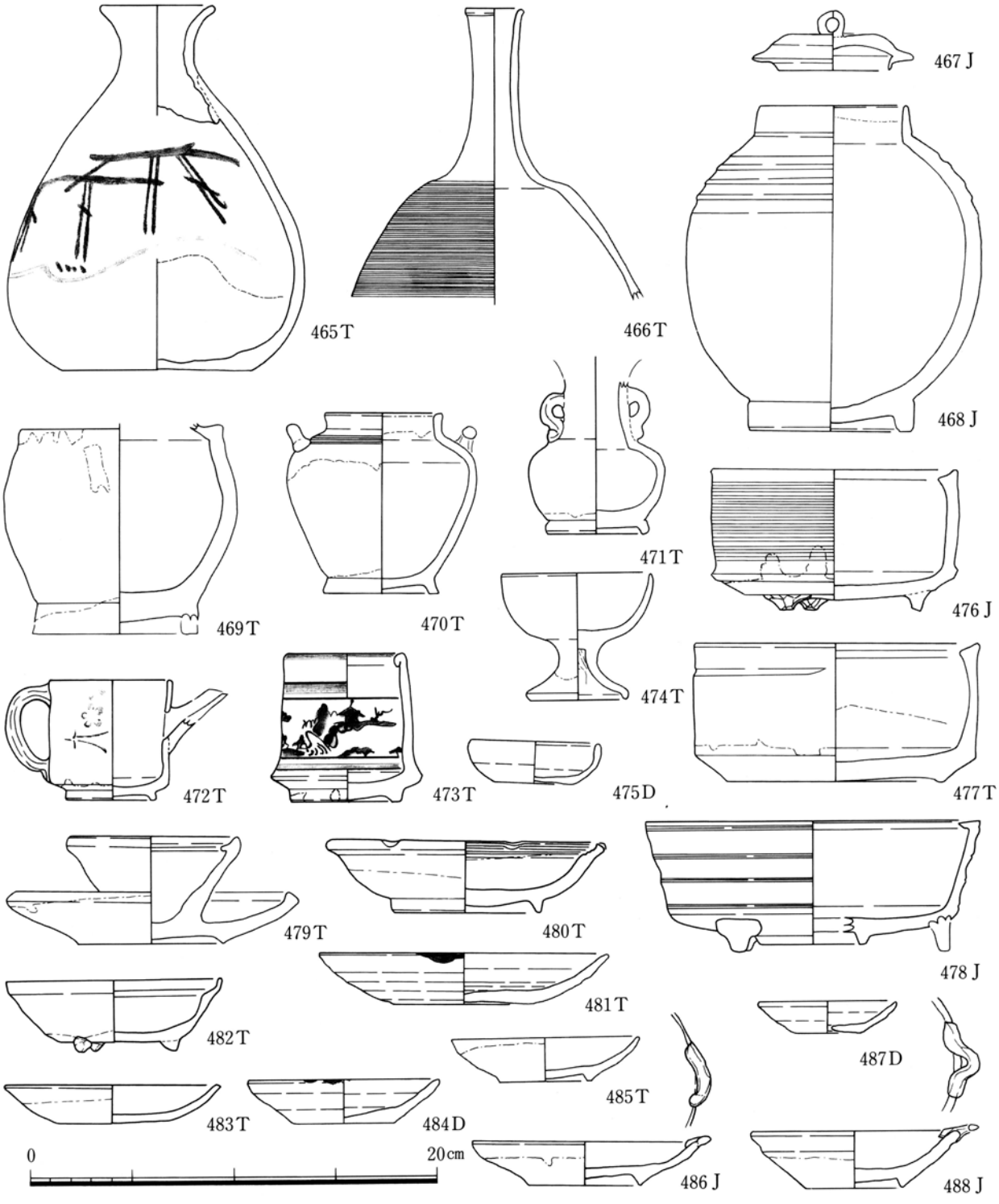
図138　ＳＫ123出土陶磁器類実測図(1)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
449	136	灰釉		瀬	28
450	135	灰釉＋緑釉流し掛け		瀬	28
451	131	染付	1690～18C前半 竹藪枯樹文（型紙）	肥	27
452	145	灰釉＋呉須絵	17C末 楼閣山水文	京	
453	041	染付	1690～18C前半 花唐草文・桜花文・漆つぎ痕	肥	28
454	141	染付	1690～18C初 菊花文	肥	28
455	141	灰釉＋鉄釉＋呉須絵	17C後半～18前半 山水文	京	20
456	141	灰釉＋鉄絵	笹文	瀬	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
457	011	鉄釉		瀬	43
458	014	染付	桐文	肥	44
459	013	鉄釉＋銅緑釉流し掛け		瀬	43
460	235	鉄釉		瀬	
461	236	鉄釉		瀬	
462	213			不	
463	146	灰釉	四角形	瀬	31
464	332		内面赤褐色・外面黒褐色	常	

図139　ＳＫ123出土陶磁器類実測図(2)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
465	315	灰釉＋鉄絵	享保～宝暦まで 水楠文(か)	瀬	34
466	312		18C　前半どまり	常	
467	014		青磁	肥	34
468	321		1630～1640年代 青磁・高台砂目痕	肥	34
469	321	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	34
470	822	鉄釉＋灰釉流し掛け	口縁部敲打痕	瀬	34
471	932	灰釉		瀬	42
472	318	灰釉＋鉄絵		瀬	29
473	82-	呉須絵	17C末～18C初 楼閣山水文	肥	35
474	73-	灰釉		京	
475	411		底部墨書痕	不	
476	721	鉄釉		瀬	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
477	721	鉄釉		瀬	37
478	721		1630～1640年代 青磁・脚砂目痕	肥	
479	421	鉄釉		瀬	38
480	411	灰釉＋銅緑釉流し掛け		瀬	28
481	411	底部糸切り	油煙付着	不	38
482	410	鉄釉	転用品	瀬	
483	411	灰釉	油煙付着	瀬	
484	411	底部糸切り	油煙付着	不	38
485	411	灰釉	油煙付着	瀬	38
486	411	鉄釉		瀬	
487	400		焼成後穿孔・カキ立に転用	不	38
488	411	灰釉		瀬	38

図140　ＳＫ123出土陶磁器類実測図(3)

ＳＫ212：本遺構の時期は18世紀後葉から19世紀初頭に比定される。

出土遺物は口縁部破片数で881点、総個体数で53.83個体である。この遺構では灯火具が25.42個体、51.9％と最も多く、次いで供膳具が10.42個体、21.3％の出土をみている。さらに調理具が2.5個体、5.1％とやや少なめであるのに対し、貯蔵具は5.75個体、11.7％と多めに出土している。これは本来低比率に留まっていた常滑産の甕Ａが1.75個体、貯蔵具の30.4％に達していることにその原因を求めることができる。その反面、供繕具が低率である点については、皿が0.75個体、鉢に至っては出土０という状況が大きく影響している。従って当然のことながら、椀と皿の比率は12.89：１という数値になる。貯蔵具の増加は瓶の出土量の増加に拠るもので、さきにみた近世後半へ向けての増加傾向をここでも見て取ることができる。

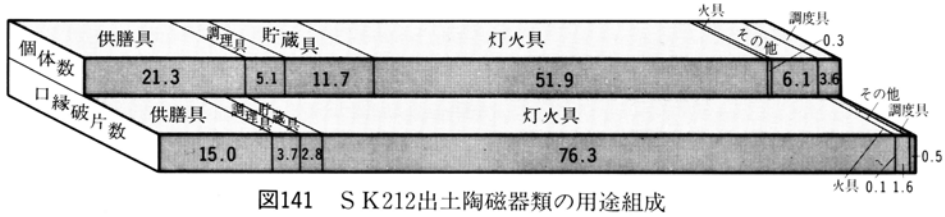
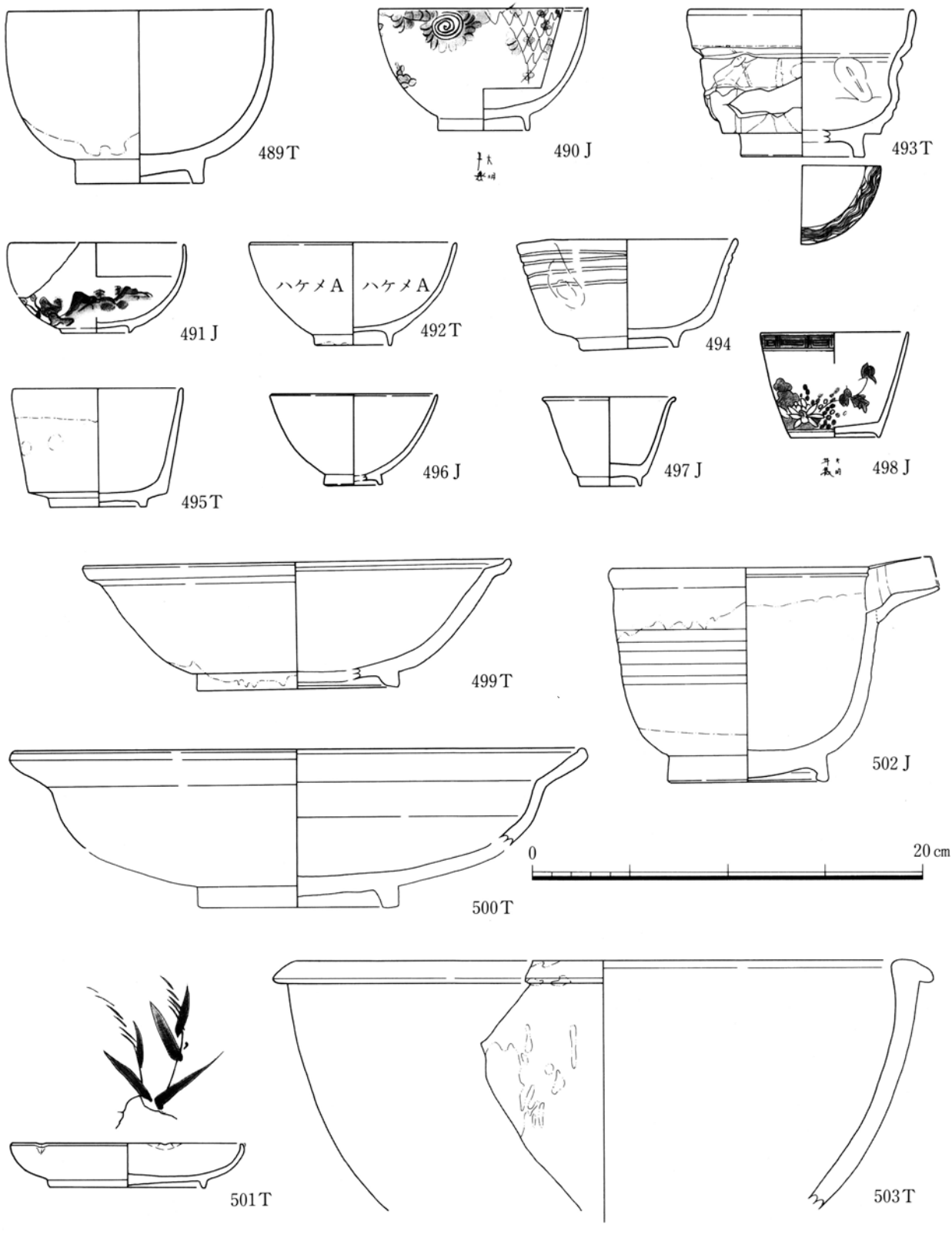


図141　ＳＫ212出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	55	70	0	125	0	76	54	0	130
	椀	0	45	26	0	71	0	56	17	0	73
	小椀	0	3	42	0	45	0	1	34	0	35
	皿	0	7	2	0	9	0	18	3	0	21
	鉢	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
調理具		12	18	0	0	30	16	16	0	0	32
	鍋，釜	12	2	0	0	14	16	5	0	0	21
	鉢	0	5	0	0	5	0	3	0	0	3
	擂鉢	0	6	0	0	6	0	6	0	0	6
	瓶	0	5	0	0	5	0	2	0	0	2
	その他					0					0
貯蔵具		0	69	0	0	69	0	25	0	0	25
	瓶	0	36	0	0	36	0	5	0	0	5
	壷	0	12	0	0	12	0	1	0	0	1
	甕Ａ	0	21	0	0	21	0	19	0	0	19
	甕Ｂ					0					0
	鉢					0					0
	その他					0					0
灯火具		290	15	0	0	305	658	4	0	0	662
火具		0	2	0	0	2	0	1	0	0	1
化粧具		0	4	12	0	16	0	1	1	0	2
神仏具		0	4	10	0	14	0	5	6	0	11
喫煙具		0	6	0	0	6	0	1	0	0	1
調度具		0	12	8	1	21	0	2	1	1	4
蓋		0	56	2	0	58	0	12	1	0	13
合計		302	241	102	1	646	674	143	63	1	881

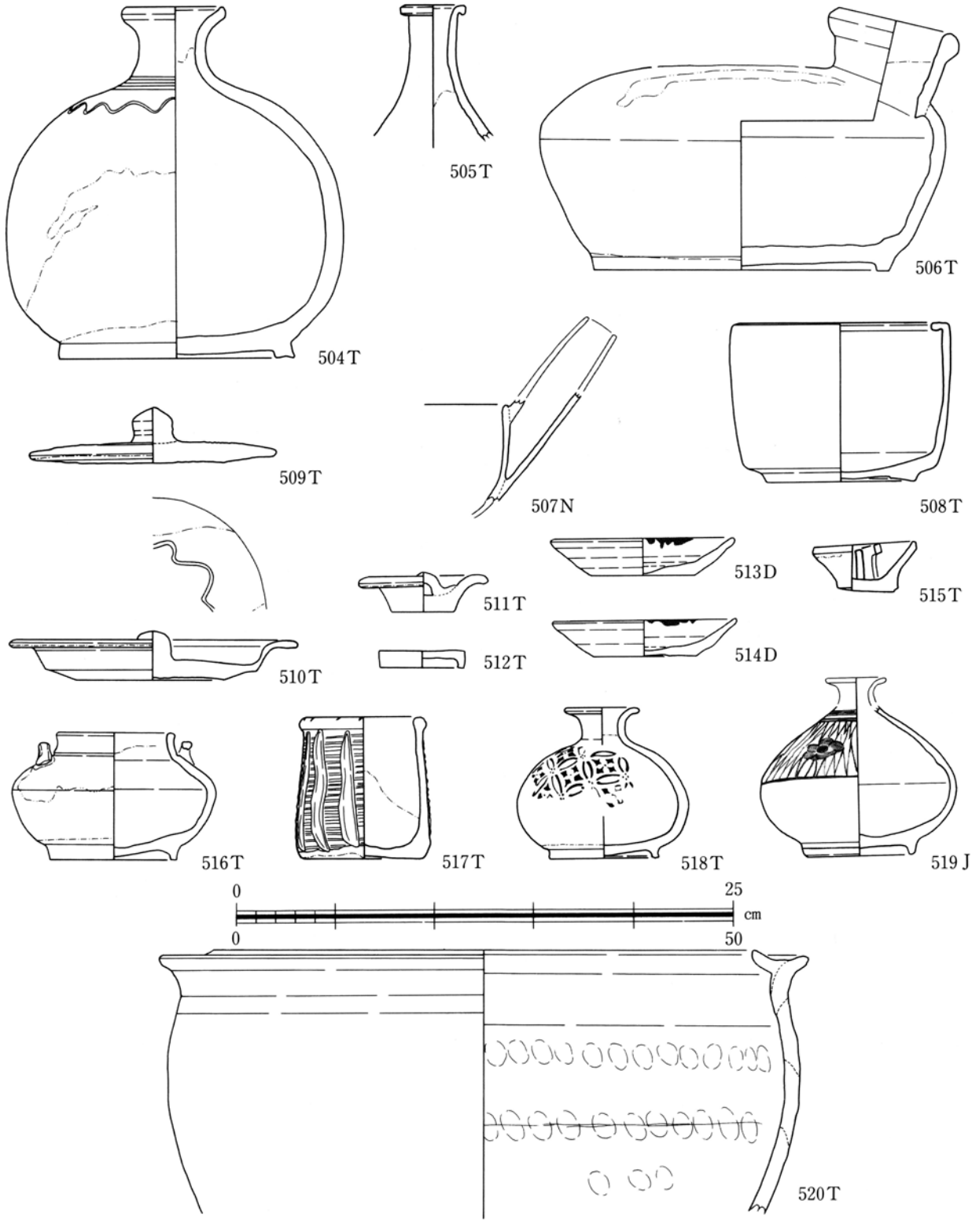
表25　ＳＫ212出土陶磁器類集計表



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
489	112	灰釉		瀬	18
490	112	染付	1680～18C 初 一重網目「大明年製」	肥	19
491	112	染付	18C 前半中葉 山水文	肥	18
492	114	灰釉	刷毛目	肥	
493	110	鉄釉＋灰釉		瀬	24
494	110	灰釉		瀬	24
495	115	鉄釉＋灰釉		瀬	23
496	124		18C 前半 内面白磁・外面青磁	肥	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
497	125		17C 後半～18C 前半 白磁	肥	
498	126	染付	17C 末～18C 前半　かご目＋ 牡丹文＋大明年製、漆継ぎ	肥	26
499	143	鉄釉		瀬	
500	143	灰釉		肥	
501	411	灰釉＋鉄絵	きび文・油煙付着	瀬	28
502	221	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	
503	222	灰釉＋銅緑釉流し掛け		瀬	

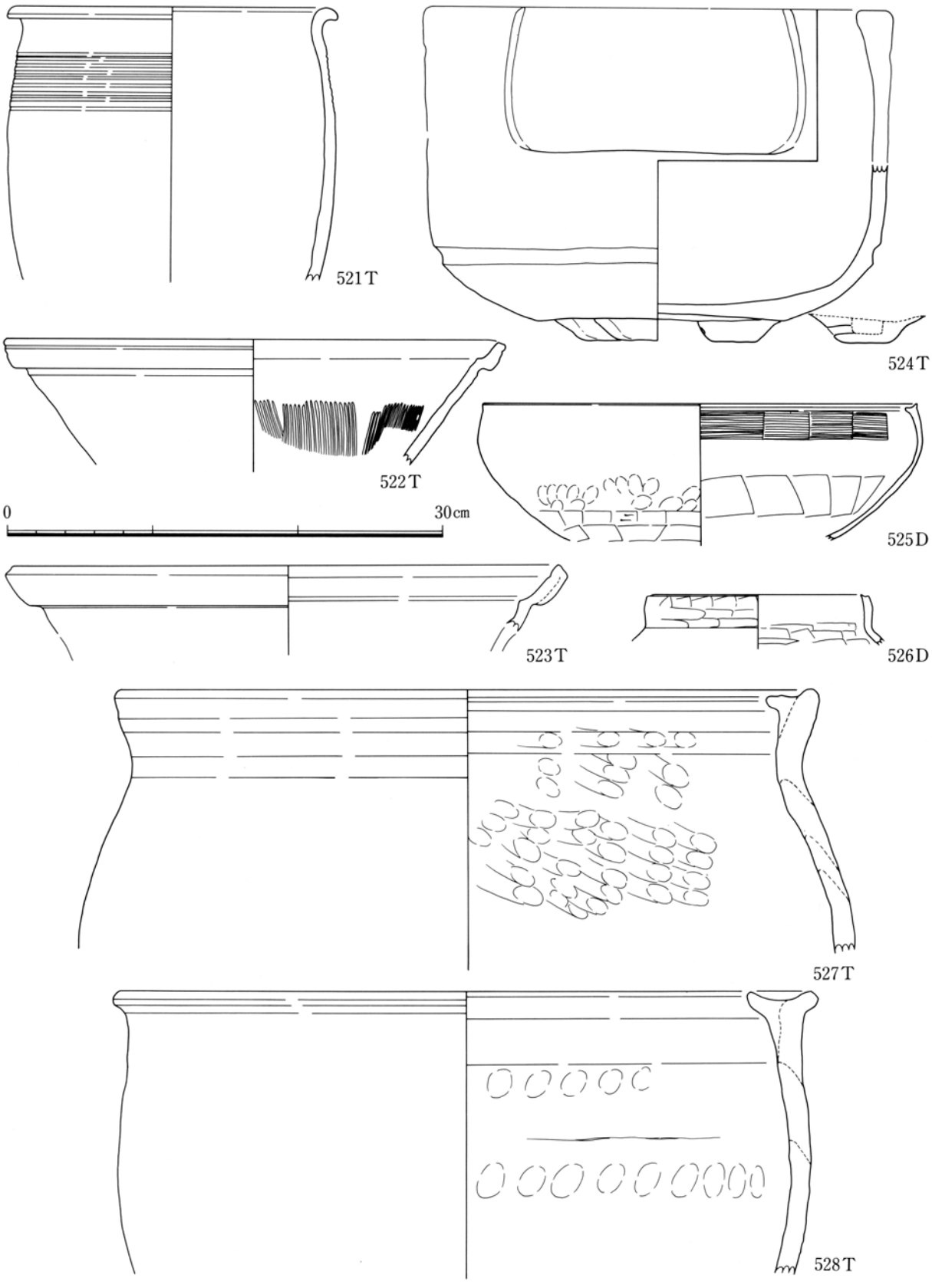
図142　ＳＫ212出土陶磁器類実測図(1)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
504	315	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	34
505	311	灰釉		瀬	
506	310	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	36
507	214	灰釉	被熱	不	
508	721	高台部鉄釉	17C末～18C前半 青磁	肥	41
509	013	鉄釉＋灰釉散らし		瀬	
510	011	鉄釉＋灰釉	内面煤付着	瀬	43
511	011	鉄釉		瀬	
512	016	灰釉	内面黒書痕	瀬	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
513	411	底部糸切り	油煙付着	不	
514	411	底部糸切り	油煙付着	不	
515	423	灰釉		瀬	38
516	322	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	34
517	820	鉄釉＋灰釉		瀬	35
518	622	灰釉＋鉄絵	七宝文、底部墨書痕	瀬	39
519	622	赤絵	17C後半 網目に梅花文	肥	40
520	333		明黄褐色	常	

図143　ＳＫ212出土陶磁器類実測図(2)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
521	344	鉄釉		瀬	
522	234	鉄釉		瀬	
523	236	鉄釉		瀬	
524	513	鉄釉		瀬	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
525	213			不	
526	210			不	
527	332			常	
528	333		にぶい黄橙	常	

図144　ＳＫ212出土陶磁器類実測図(3)

ＳＫ010：本遺構の時期は19世紀前葉に比定される。

この遺構からの出土遺物は口縁部破片数で381点、総個体数で39.08個体に及ぶ。この遺構の用途の組成の特徴は、供膳具が30.50個体、83.2％と約８割を占めている点である。これは供膳具のうちで椀・皿・鉢を比較してみると、椀：皿=1.15：１、椀：鉢=3.91：１、皿：鉢=１：0.29となり、江戸時代の平均値を考慮に入れれば、椀の出土量が少なく、皿が倍近く出土していることが読み取れる。

他の用途の遺物については調理具・貯蔵具に関してはいずれも出土量が少ないため、用途間での比率については他の遺構と数字を大きく異にするが、内部の器種別比率については、調理具は鍋・釜が少ない点、貯蔵具は瓶が中心である点以外は平均的構成をしていると言える。

材質面では、陶器が32.0個体、81.9％と圧倒的多数を占め、次いで磁器が5.92個体、15.1％、土器が0.92個体、2.3％となり、土器製品が極端に少量であることが判る。これは灯火具の比率の低さに起因していると考えられる。

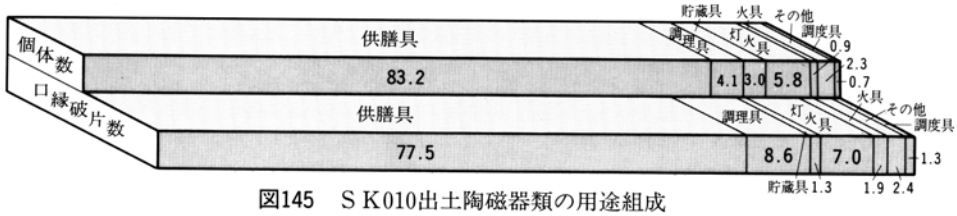
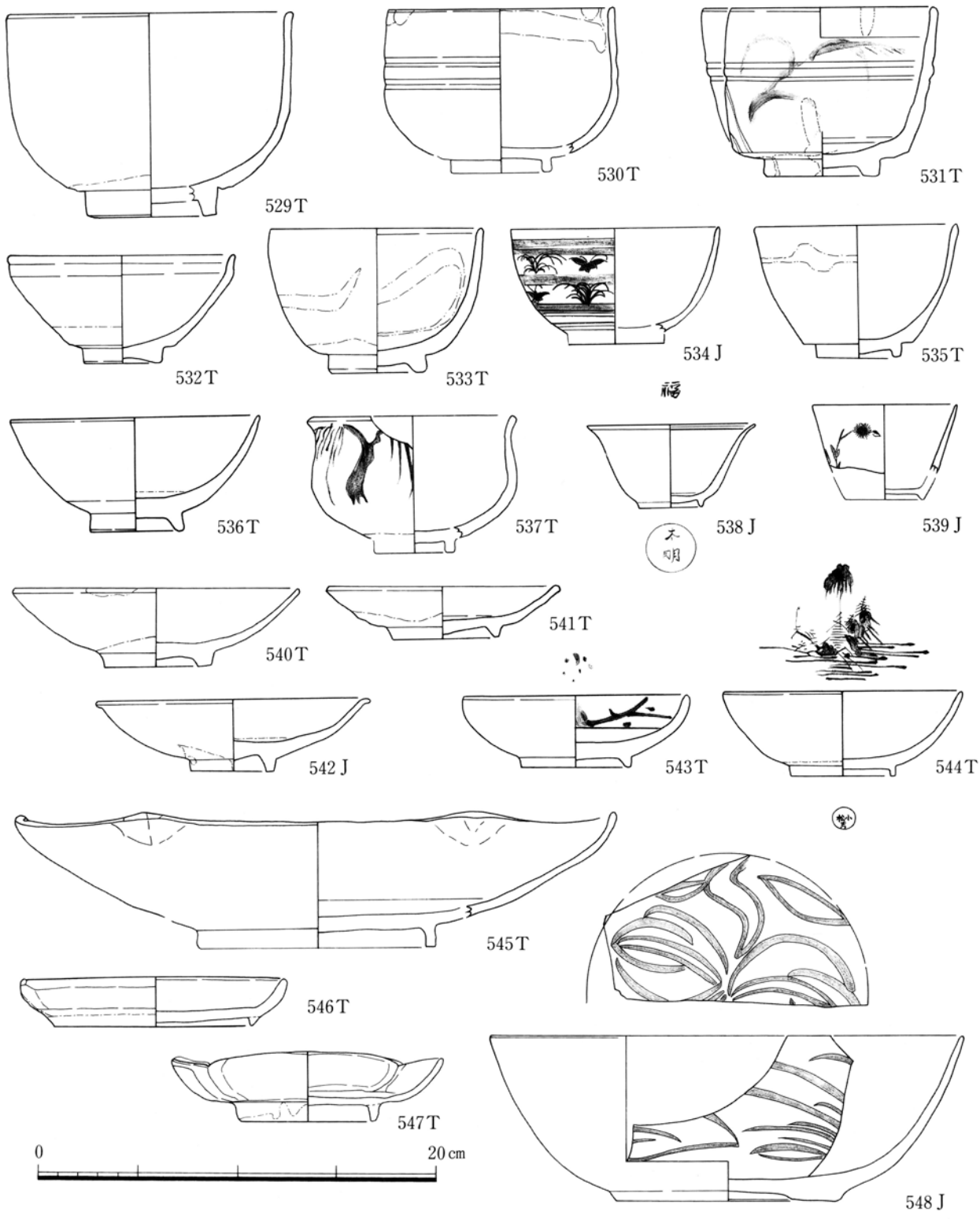


図145　ＳＫ010出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	305	61	0	366	0	242	48	0	290
	椀	0	119	20	0	139	0	105	23	0	128
	小椀	0	6	27	0	33	0	3	12	0	15
	皿	0	136	14	0	150	0	82	12	0	94
	鉢	0	44	0	0	44	0	52	1	0	53
調理具		0	18	0	0	18	2	30	0	0	32
	鍋，釜	0	3	0	0	3	2	3	0	0	5
	鉢	0	2	0	0	2	0	4	0	0	4
	擂鉢	0	5	0	0	5	0	17	0	0	17
	瓶	0	8	0	0	8	0	6	0	0	6
	その他					0					0
貯蔵具		0	7	6	0	13	0	3	2	0	5
	瓶	0	6	0	0	6	0	2	0	0	2
	壷					0					0
	甕Ａ					0					0
	甕Ｂ	0	1	0	0	1	0	1	0	0	1
	鉢	0	0	6	0	6	0	0	2	0	2
	その他					0					0
灯火具		11	12	0	3	26	18	6	0	2	26
火具		0	4	0	0	4	1	6	0	0	7
化粧具		0	0	2	0	2	0	1	1	0	2
神仏具		0	1	2	0	3	0	2	1	0	3
喫煙具		0	5	0	0	5	0	4	0	0	4
調度具		0	3	0	0	3	0	5	0	0	5
蓋		0	29	0	0	29	0	7	0	0	7
合計		11	384	71	3	469	21	306	52	2	381

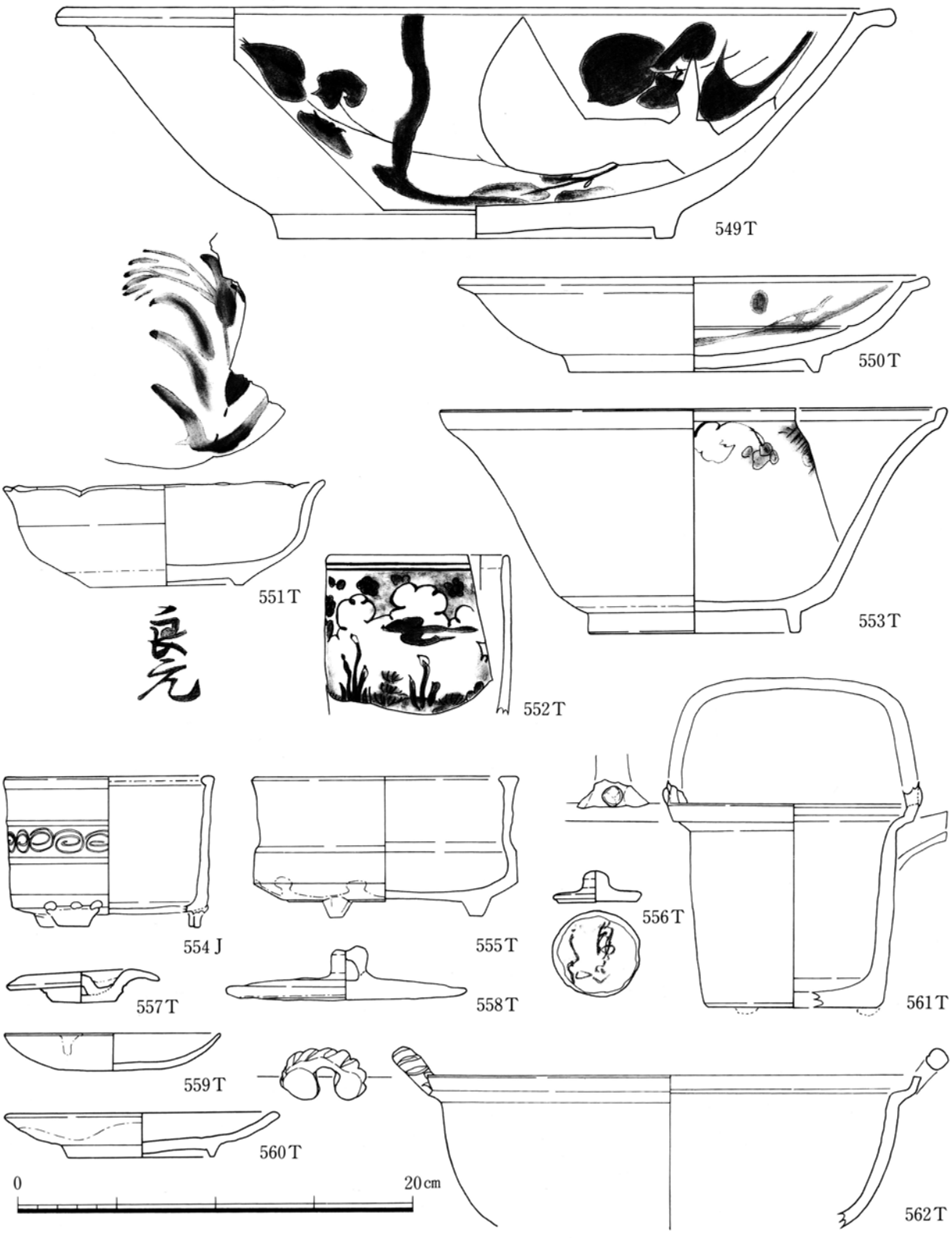
表26　ＳＫ010出土陶磁器類集計表



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
529	112	灰釉		瀬	
530	118	灰釉＋鉄釉流し掛け		瀬	
531	110	長石釉＋鉄釉＋呉須絵	きび文	瀬	21
532	111	鉄釉＋化粧掛け		瀬	
533	112	鉄釉		瀬	
534	112	染付	17C末～18C前半 蝶と草文	肥	
535	117	鉄釉＋灰釉		京	24
536	114	見込輪ハゲ・灰釉	18C前半	肥	
537	116	灰釉＋鉄釉		瀬	
538	125	染付	1650～1660年代 一重圏線＋「太明」＋二重圏線＋「福」	肥	25

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
539	126	赤絵	17C末～18C前半 口銹・草花文	肥	26
540	131	輪ハゲ・ 灰釉＋銅緑釉	17C後半	瀬	
551	131	灰釉		瀬	
542	132	輪ハゲ	青磁・高台砂目痕	肥	
543	131	灰釉＋呉須絵	梅文＋八曜	瀬	27
544	131	灰釉＋呉須絵	17C後半 「小松八」（刻印）・山水文	肥	27
545	137	灰釉	17C	瀬	
546	136	長石釉		瀬	31
547	136	灰釉		瀬	31
548	141	蛇ノ目高台、鉄釉	1650～1660年代 青磁・草文か	肥	

図146　ＳＫ010出土陶磁器類実測図(1)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
549	143	長石釉+鉄絵+鉛釉	ツタ文	瀬	29
550	143	長石釉＋鉄釉	筆散らし	瀬	31
551	146	灰釉＋鉄釉	底部墨書・黍文	瀬	32
552	351	染付	17C末～18C前半 草花文	肥	35
553	143	透明釉＋呉須絵	ぶどう文	肥	32
554	721		1630～1650年代 白磁・毛彫り	肥	
555	812	鉄釉	口縁・内外底部煤付着、口縁敲打痕	瀬	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
566	013	灰釉	墨書痕	瀬	
557	011	鉄釉+灰釉流し掛け	底部墨痕あり	瀬	43
558	013	鉄釉		瀬	
559	411	鉄釉	口縁部油煙付着	瀬	
560	411	灰釉	外面油煙付着	瀬	
561	242	鉄釉+灰釉流し掛け		瀬	33
562	215	鉄釉		瀬	

図147　ＳＫ010出土陶磁器類実測図(2)

ＳＫ002：本遺構の時期は18世紀中葉から19世紀初頭に比定されるが、18世紀後葉の遺物は少量である。

この遺構からの出土遺物は、口縁部破片数で1330点、総個体数で140.17個体である。用途別の占有率は、供膳具50.17個体、40.1%、調理具11.25個体、9.0%、貯蔵具6.92個体、5.5%、灯火具43.58個体、34.9%、神仏具5.83個体、3.7%、化粧具・喫煙具・調度具5.89個体、4.2%である。この様に見た場合、神仏具以下は多少の増減はするものの、あまり大幅な数値の変動は窺えない。これに対し、他の４用途の遺物は遺構により出土量の変化が大きく、この数値の変化が個別遺構における組成の変化に直結していると言える。中でも供膳具と灯火具はその変動幅が大きく、見方を変えれば、何らかの相関関係を持っているのかも知れない。それは今回の遺物の分類に起因するものか(例えば、土器皿の扱い)、近世の生活様式に起因しているのかは定かではない。分類方法を含めた今後の検討課題である。

器種別に見た場合、椀と皿は2.62：１、擂鉢と鍋は１：2.60とほぼ近世の平均的比率を示している。また複数の用途に跨がる鉢・瓶については、明確な比較対象が特定しにくいが、瓶については時代が下がるにつれて皿との比率差は縮まる傾向にある。

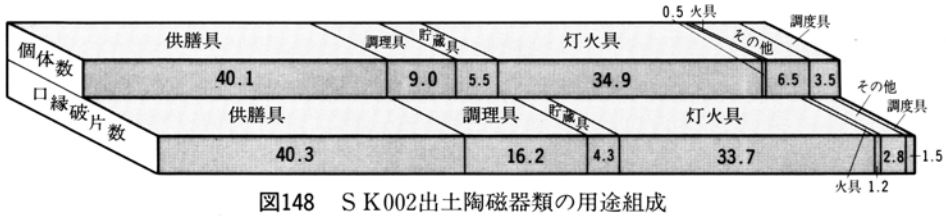
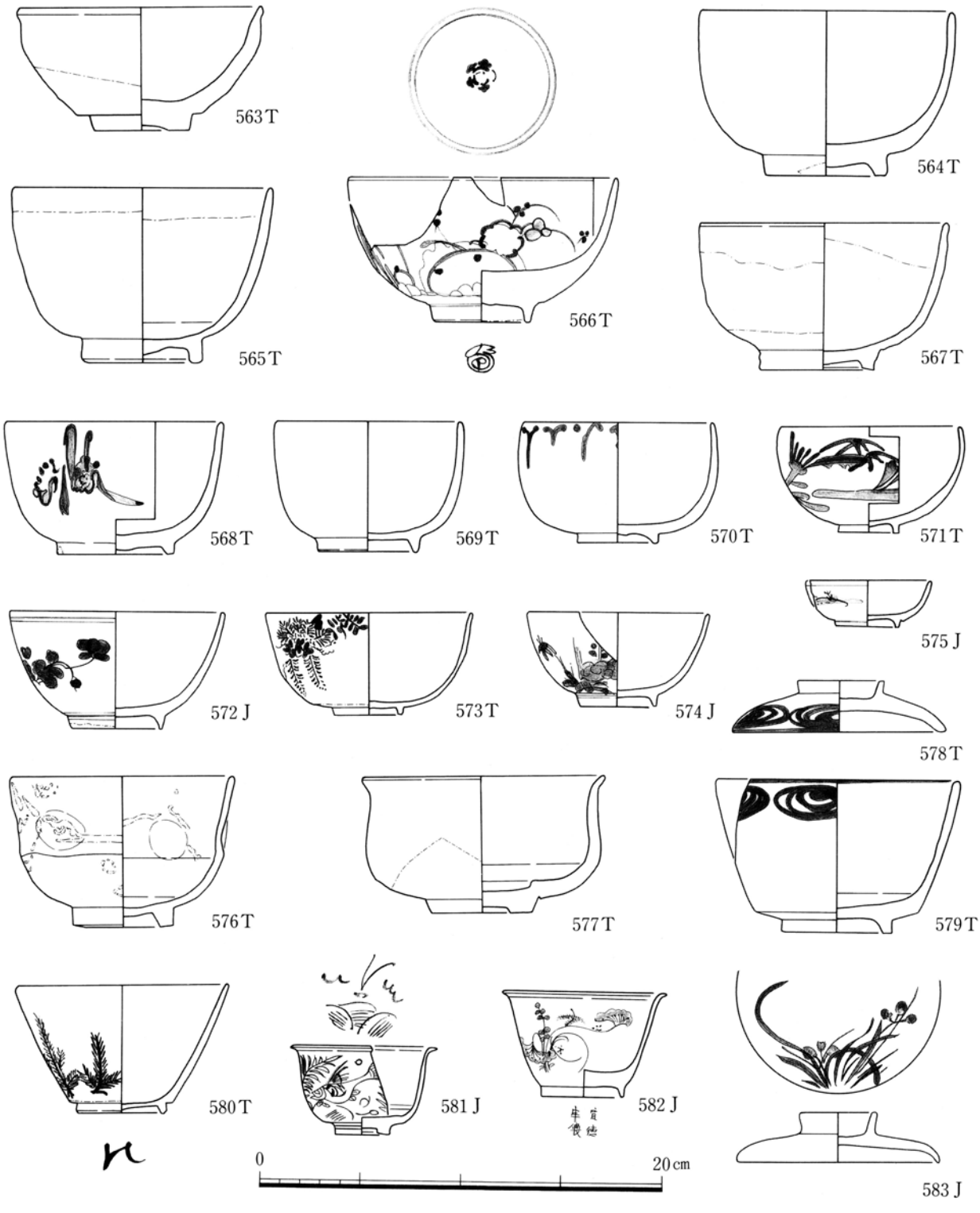


図148　ＳＫ002出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	352	250	0	602	0	330	189	0	519
	椀	0	231	103	0	334	0	220	97	0	317
	小椀	0	1	63	0	64	0	4	31	0	35
	皿	0	97	55	0	152	0	86	44	0	130
	鉢	0	23	29	0	52	0	20	17	0	37
調理具		54	81	0	0	135	125	84	0	0	209
	鍋，釜	54	11	0	0	65	125	7	0	0	132
	鉢	0	6	0	0	6	0	12	0	0	12
	擂鉢	0	25	0	0	25	0	48	0	0	48
	瓶	0	39	0	0	39	0	17	0	0	17
	その他					0					0
貯蔵具		0	78	5	0	83	0	49	7	0	56
	瓶	0	30	0	0	30	0	9	0	0	9
	壷	0	19	1	0	20	0	8	1	0	9
	甕Ａ	0	10	0	0	10	0	13	0	0	13
	甕Ｂ	0	7	0	0	7	0	4	0	0	4
	鉢	0	12	4	0	16	0	15	6	0	21
	その他					0					0
灯火具		437	86	0	0	523	392	43	0	0	435
火具		1	7	0	0	8	3	12	0	0	15
化粧具		0	16	2	0	18	0	6	1	0	7
神仏具		15	39	16	0	70	7	10	5	0	22
喫煙具		0	9	0	0	9	0	7	0	0	7
調度具		0	51	1	0	52	0	18	1	0	19
蓋		0	167	15	0	182	0	37	4	0	41
合計		507	886	289	0	1682	527	596	207	0	1330

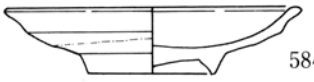
表27　ＳＫ002出土陶磁器類集計表

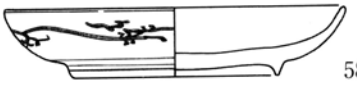


番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
563	111	鉄釉		瀬	
564	112	灰釉		瀬	19
565	112	鉄釉＋灰釉		瀬	19
566	112	染付	梅樹文＋渦福・五弁花（コンニャク印判）	肥	
567	112	鉄釉＋灰釉		瀬	
568	112	灰釉＋呉須絵	山水文	京	19
569	112	灰釉	17C後半～18C 初高台内砂粒付着	京	
570	112	黄釉＋銅緑釉	練込み	京	19
571	112	灰釉＋鉄釉＋上絵付	笹と菊文・底部墨痕あり	瀬	19
572	112	呉須絵	1670～1690年代 花牡丹文	肥	22
573	112	上絵付	18C 松と藤文	京	19

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
574	112	染付	1690～18C前半 松竹梅文	肥	19
575	122	染付	17C後半 草花文（？）	肥	
576	113	鉄釉＋灰釉散らし		瀬	20
577	116	灰釉	高台周辺被熱	瀬	
578	015	長石釉＋鉄絵	馬の目文	瀬	25
579	110	長石釉＋鉄絵	馬の目文	瀬	24
580	117	灰釉＋鉄絵	小杉文	瀬	24
581	125	染付	17C前半 魚文・荒磯文	肥	25
582	125	染付	1670～1690年代 草花文＋「宣徳年製」	瀬	26
583	015	長石釉＋鉄絵＋染付	草花文	京	28

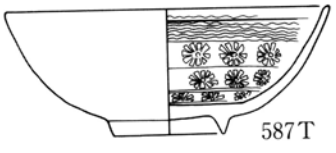
図149　ＳＫ002出土陶磁器類実測図(1)

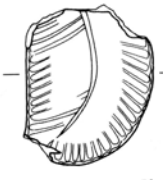

584T


585J

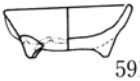
586T

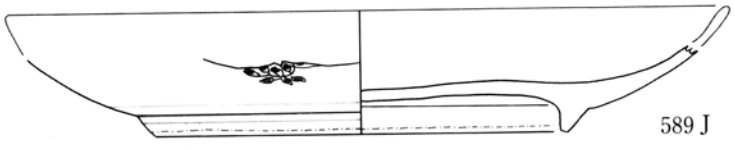
588J

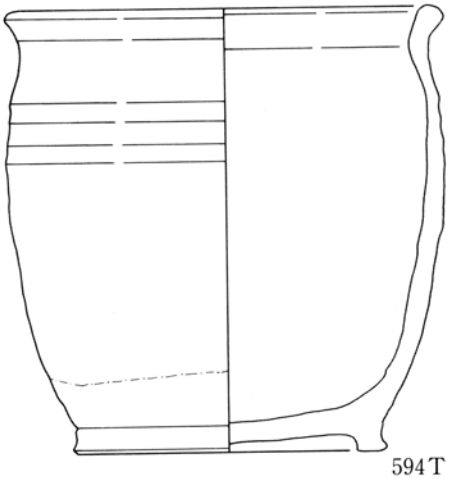

587T



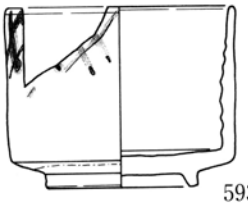
590J


591T


589J


594T

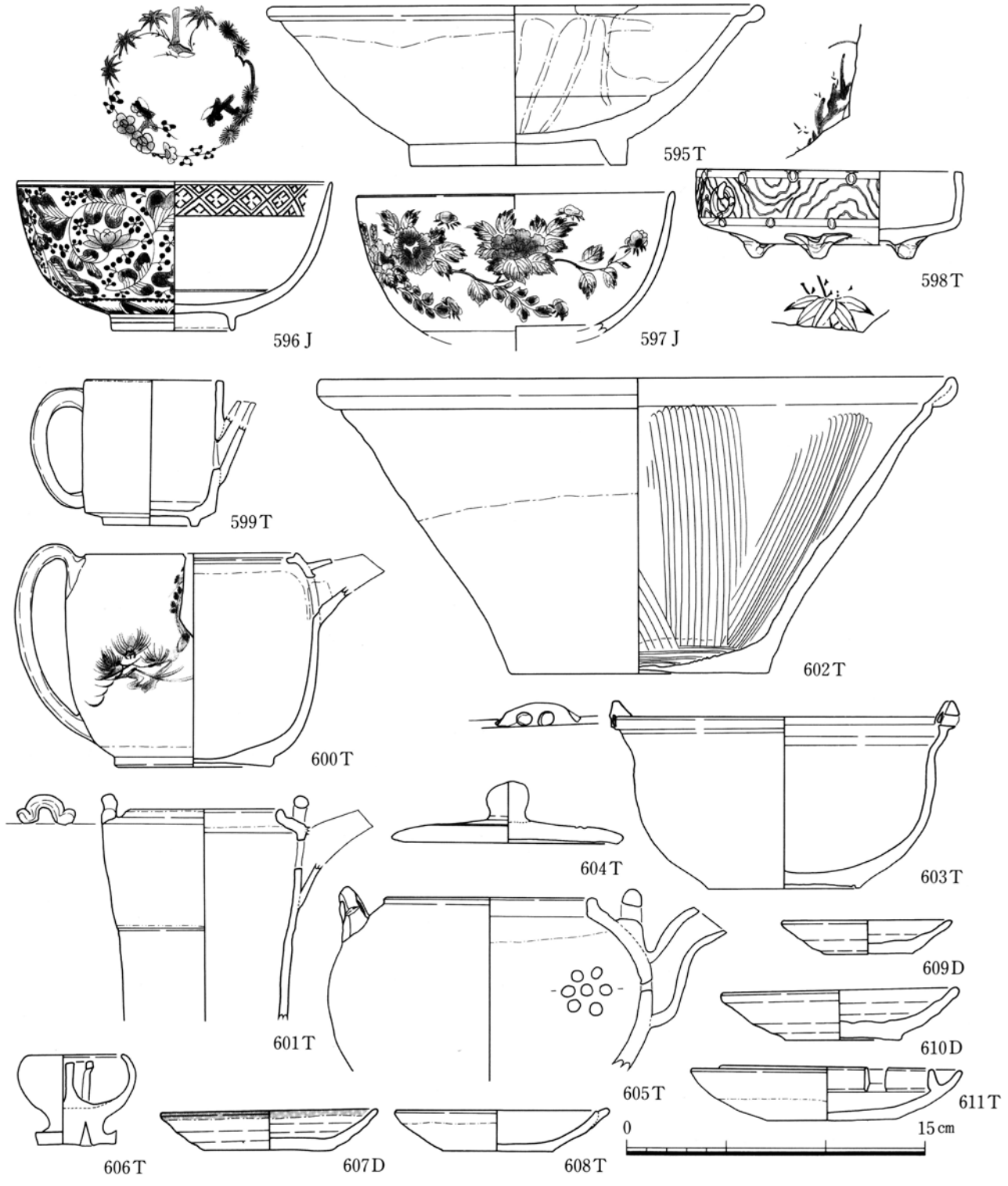
592T


593T

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
584	132	灰釉		瀬	30
585	131	染付	18C前半 唐草文・扇文	肥	27
586	913	灰釉＋鉄絵	花文・植木鉢に転用	瀬	43
587	131	灰釉	17C中～末 渦状文＋菊花文、三島手	肥	32
588	131	染付	山水文・砂胎土目痕	肥	27
589	131	染付	唐草文	肥	25

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
590	136	染付	1690～18C前半 松葉文・木葉文、墨はじき	肥	
591	136	灰釉		瀬	
592	811	灰釉＋鉄絵＋呉須絵	草文	京	
593	351	灰釉＋鉄絵		瀬	
594	344	鉄釉		瀬	

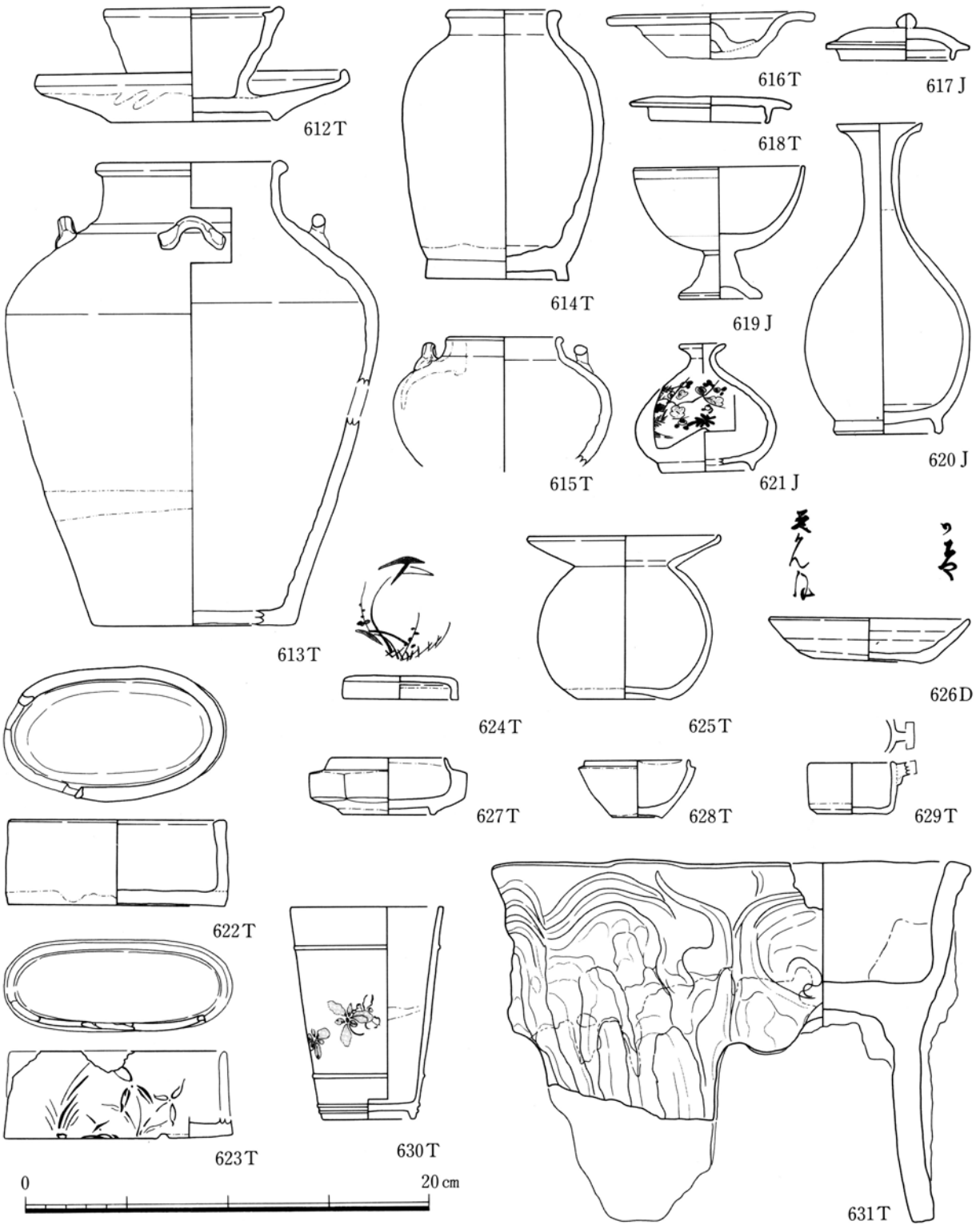
図150　ＳＫ002出土陶磁器類実測図(2)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
595	143	銅緑釉＋褐釉	内面刷毛目	肥	29
596	141	染付	1730～1780年代 牡丹唐草文・割小菱＋環状松竹梅文	肥	29
597	141	染付	1690～18C前半 牡丹文	肥	28
598	140	灰釉＋鉄絵	外面底部笹文・見込梅文	瀬	32
599	318	灰釉		瀬	36
600	242	灰釉＋鉄絵	松文	京	29
601	245	灰釉＋鉄釉		瀬	
602	235	鉄釉		瀬	
603	215	鉄釉	18C中	瀬	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
604	013	鉄釉		瀬	43
605	241	鉄釉		瀬	33
606	422	鉄釉	底部砂粒付着	瀬	38
607	411	底部糸切り	油煙付着	不	
608	411	灰釉	外面油煙付着	瀬	
609	411	底部糸切り		不	
610	411	底部糸切り		不	
611	412	鉄釉		瀬	

図151　ＳＫ002出土陶磁器類実測図(3)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
612	412	鉄釉		瀬	
613	322	長石釉＋鉄釉	信玄茶壺		
614	322	鉄釉		瀬	36
615	322	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	36
616	011	鉄釉		瀬	43
617	014		17C後半 肥前磁	肥	44
618	017	灰釉		瀬	
619	730	呉須	17C後半	肥	
620	712		17C中葉 肥前磁	肥	41
621	622	染付	18C前半 松竹梅文	肥	39

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
622	630	灰釉		瀬	35
623	630	灰釉＋鉄絵	草花文	瀬	35
624	016	灰釉＋鉄絵＋呉須絵	草花文	瀬	35
625	961	長石釉	17C後半～18C前半	瀬	
626	700	底部糸切り		不	41
627	740	灰釉		瀬	38
628	740	灰釉		瀬	
629	921	灰釉		瀬	42
630	903	灰釉＋鉄絵＋呉須絵	花文	京	42
631	943	鉄釉＋灰釉＋呉須絵		瀬	

図152　ＳＫ002出土陶磁器類実測図(4)

ＳＫ207：本遺構の時期は18世紀末を中心として19世紀初頭にかけてである。

この遺構からの出土遺物は口縁部破片数で305点、総個体数で33.5個体である。この遺構は供膳具が10.08個体、33.3％と突出する（椀：皿=4.71：１）以外は、調理具5.83個体、19.3％、貯蔵具4.67個体、15.4％、灯火具4.0個体、13.2％と平均的な数値を示している。その他の用途の遺物については、化粧具・喫煙具・調度具が4.82個体、14.4％とやや多めである他は平均値となっている。この内、調理具と貯蔵具については、調理具は従来多くを占めていた鍋・釜の出土量は擂鉢との比率から変化しておらず、瓶が2.83個体、48.6％と出土量を伸ばしているため、貯蔵具は鉢が2.25個体と同じく出土量を増やしているために、全体に占める比率が大きくなっている。また化粧具・喫煙具・調度具が14.4％を占める要因は、調度具が2.83個体、8.5％出土しているためである。

材質では、陶器が20.08個体、60.0％を占め、次いで磁器が9.08個体、27.1％と多く、土器は3.0個体、8.9％と江戸時代初期と比較すると激減している。

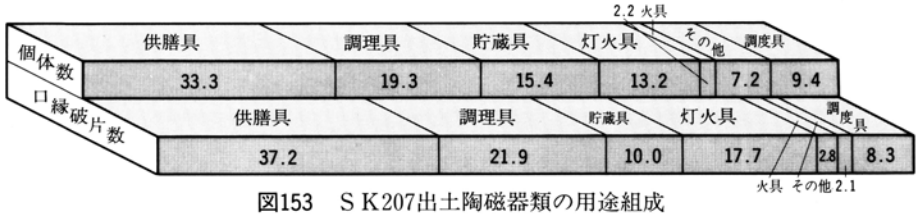
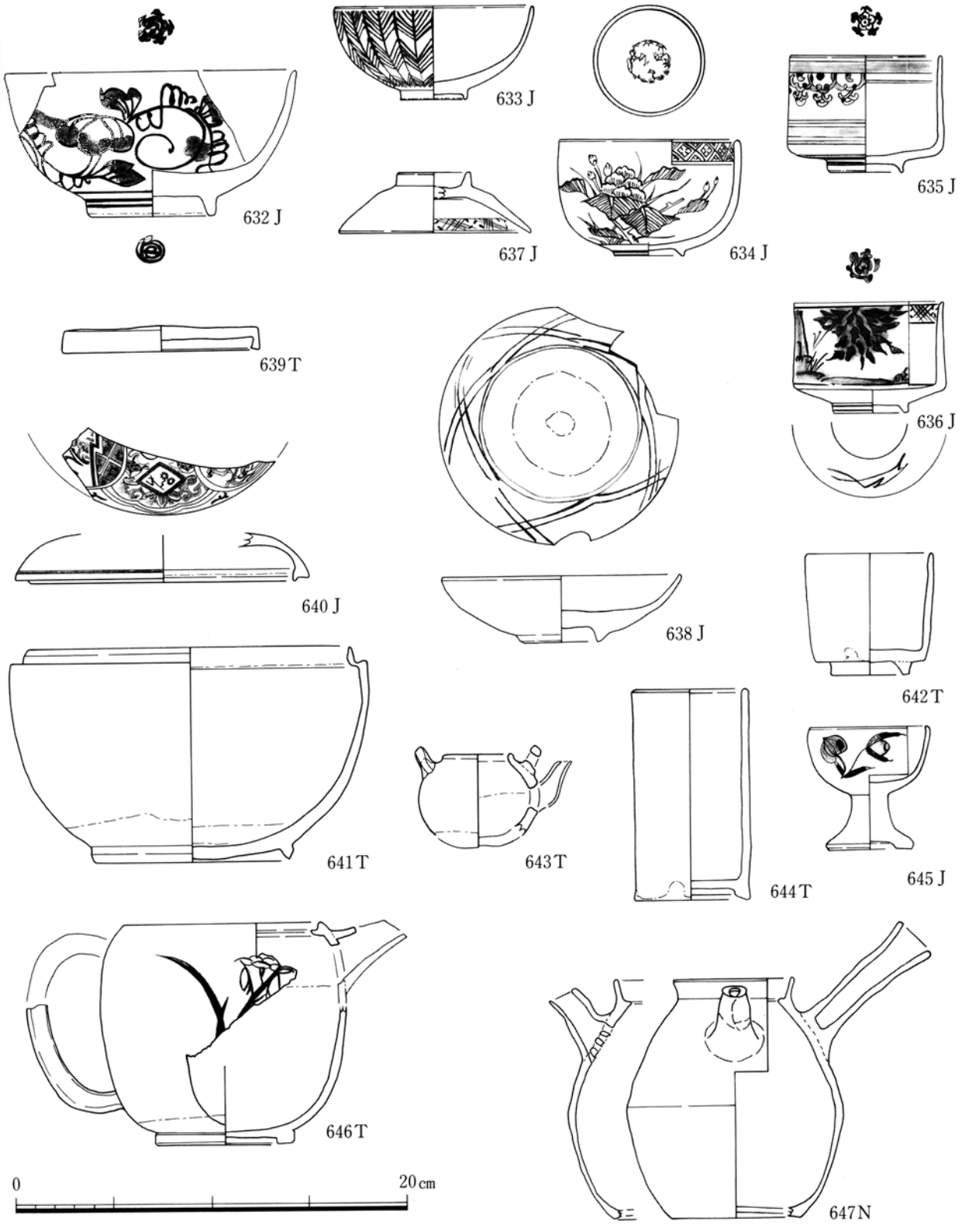


図153　ＳＫ207出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	49	72	0	121	0	72	35	0	107
	椀	0	28	54	0	82	0	49	26	0	75
	小椀	0	9	8	0	17	0	4	4	0	8
	皿	0	12	9	0	21	0	17	4	0	21
	鉢	0	0	1	0	1	0	2	1	0	3
調理具		4	50	0	16	70	7	34	0	22	63
	鍋，釜	4	9	0	11	24	7	6	0	18	31
	鉢	0	3	0	0	3	0	3	0	0	3
	擂鉢	0	9	0	0	9	0	8	0	0	8
	瓶	0	29	0	5	34	0	17	0	4	21
	その他					0					0
貯蔵具		0	56	0	0	56	0	29	0	0	29
	瓶	0	15	0	0	15	0	2	0	0	2
	壷					0					0
	甕Ａ	0	1	0	0	1	0	2	0	0	2
	甕Ｂ	0	13	0	0	13	0	15	0	0	15
	鉢	0	27	0	0	27	0	10	0	0	10
	その他					0					0
灯火具		30	18	0	0	48	43	8	0	0	51
火具		2	6	0	0	8	4	4	0	0	8
化粧具		0	6	0	0	6	0	1	0	0	1
神仏具		0	0	18	0	18	0	0	4	0	4
喫煙具		0	2	0	0	2	0	1	0	0	1
調度具		0	34	0	0	34	0	24	0	0	24
蓋		0	20	19	0	39	0	8	9	0	17
合計		36	241	109	16	402	54	181	48	22	305

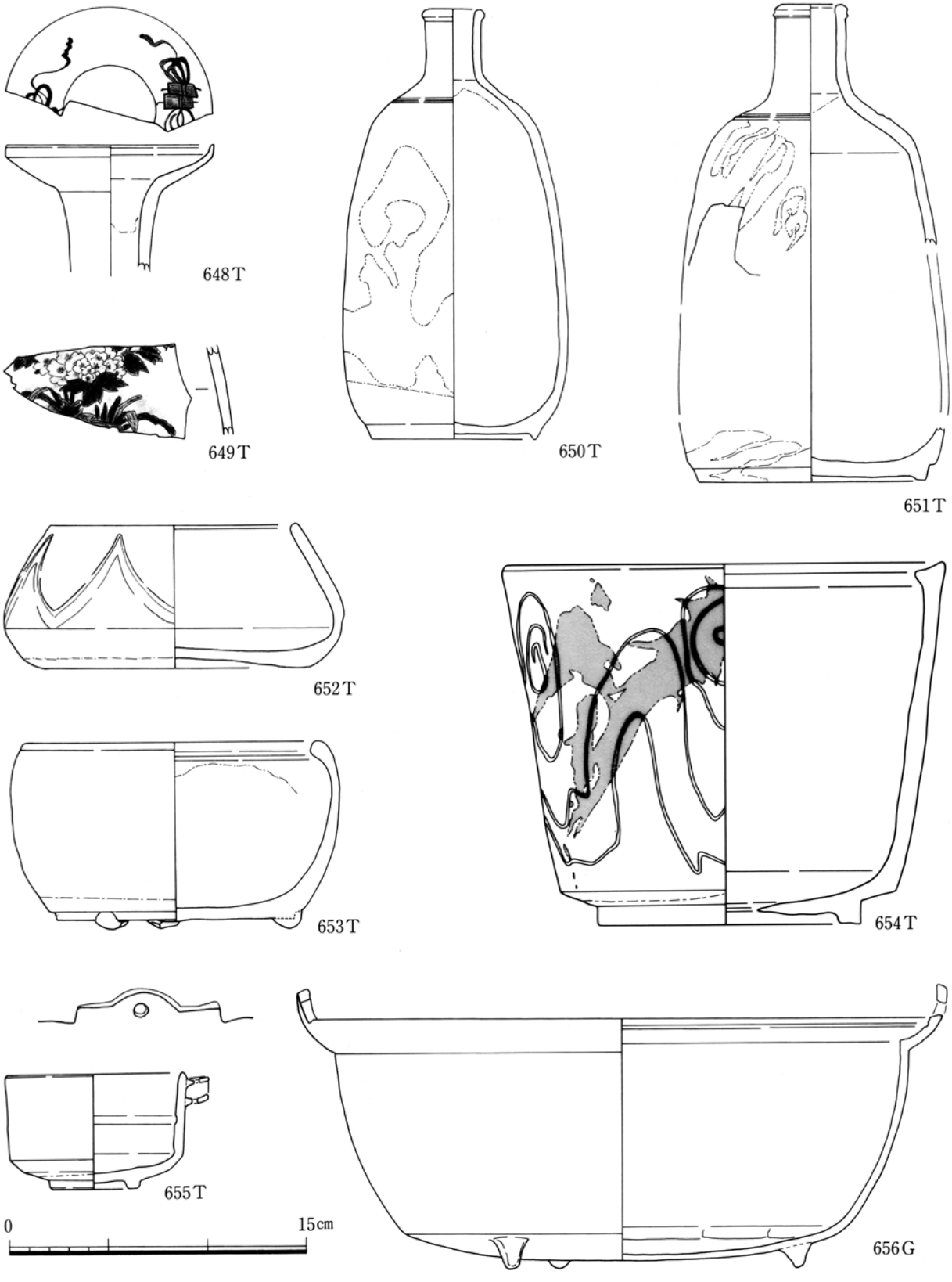
表28　ＳＫ207出土陶磁器類集計表



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	P L
632	112	染付	18C 中～末　牡丹唐草文＋満福・五弁花（コンニャク印）	肥	19
633	112	染付	18C 後半 矢羽根文	肥	
634	112	染付	1780～1810年代 芙蓉文・割小菱＋松竹梅文	肥	35 19
635	124	染付	18C 後半第４四半紀 輪宝つなぎ文・五弁花	肥	20
636	124	染付	18C 末第４四半紀 竹文＋折松葉文・割小菱＋五弁花	肥	20
637	015	染付	18C 後半　外面青磁・角福・花菱帯＋五弁花（コンニャク）	肥	
638	131	輪ハゲ・染付	18C 後半 格子文	肥	27
639	016	灰釉		瀬	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	P L
640	014	赤絵	18C 中葉～末 祥瑞文	肥	35
641	352	灰釉		瀬	
642	124	灰釉		瀬	31
643	241	鉄釉		瀬	
644	902	灰釉		瀬	
645	73-	染付	18C 後半～19C 初 草花文	肥	35
646	242	灰釉＋鉄絵	草花文	瀬	33
647	243	灰釉		不	

図154　ＳＫ207出土陶磁器類実測図(1)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
648	932	呉須絵	18C中～末 七宝文	肥	
649	932	呉須絵	17C末～18C初 牡丹文	肥	
650	311	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	34
651	311	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	
652	943	鉄釉		瀬	39

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
653	511	鉄釉		瀬	19
654	913	灰釉＋鉄釉流し掛け	底部穿孔	瀬	40
655	901	鉄釉		瀬	43
656	215			不	

図155　ＳＫ207出土陶磁器類実測図(2)

ＳＫ202：本遺構の時期は19世紀前葉に比定される。

当遺構の出土遺物は口縁部破片数で622点、総個体数63.58個体である。用途別の比率は、主要３用途が、それぞれ供膳具21.0個体、37.5％、調理具2.08個体、3.7％、貯蔵具4.67個体、8.3％を占め、平均値より調理具及び貯蔵具の比率がやや下回っている。それに対し、一旦比率が減少していた灯火具が21.58個体、38.6％と再度増加しており、本遺構の特徴となっている。この灯火具のうち46.3％が土器製品であり、先に述べた様に、灯火具の比率の増加は土器製品の増減に拠るところが大きい。但し、遺物全体に占める割合は19％と低く、この時期になってくると、基本的に土器製品は減少するものと思われる。反面、磁器製品が17.6％と増加して来ることも付け加えておきたい。

この遺構の器種比率は、椀と皿の比率が8.60：１と大きく差を広げている点が注目される。また、擂鉢が鍋・釜に比して多く使用されていると言える。

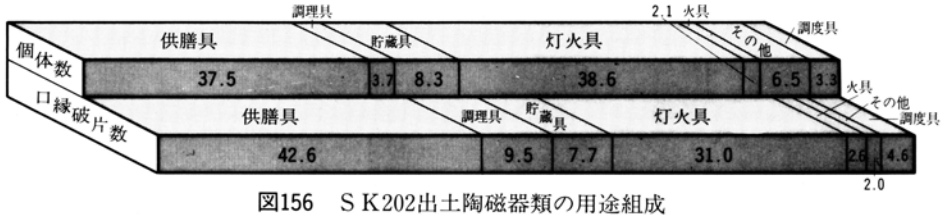
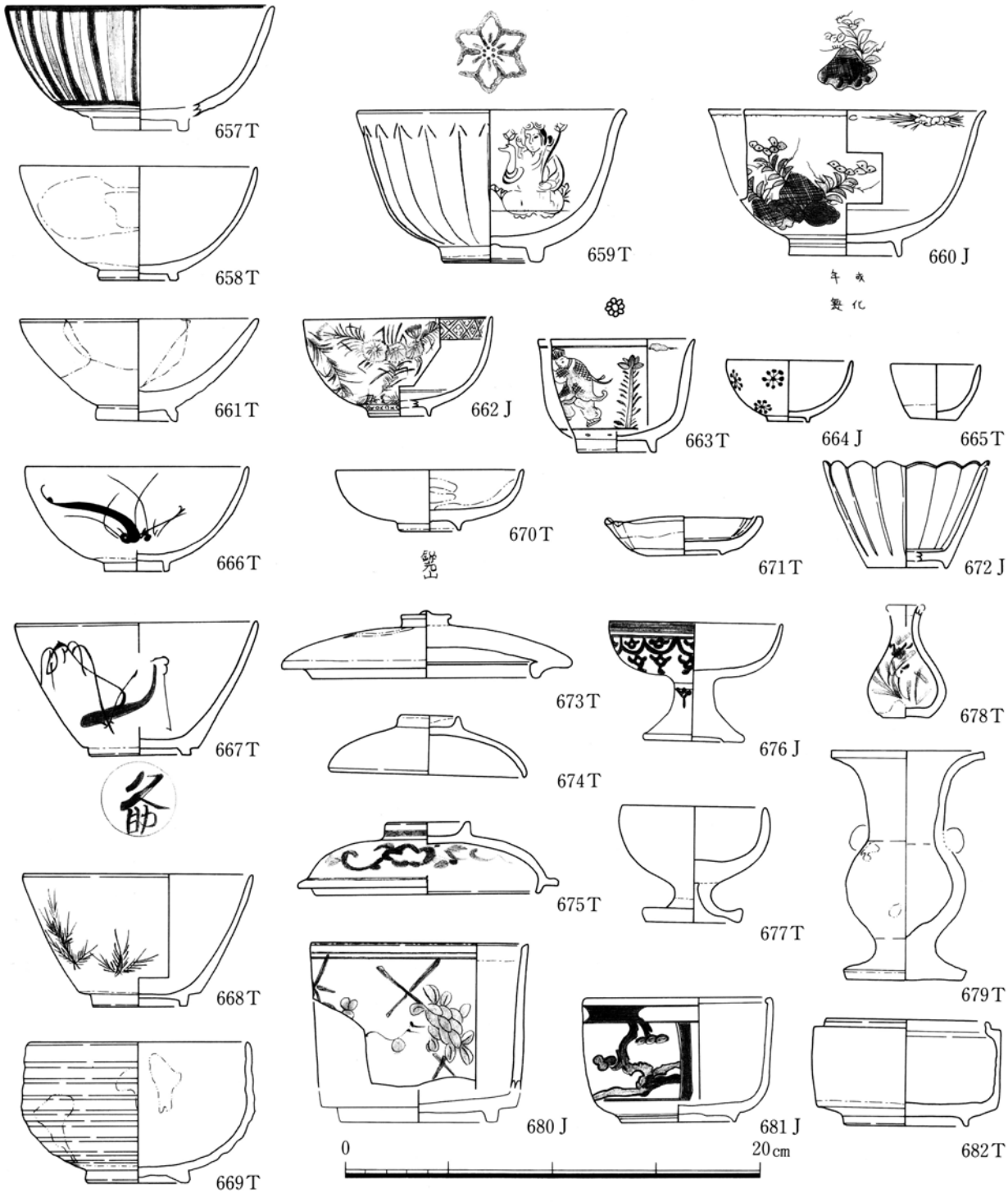


図156　ＳＫ202出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率 土器	陶器	磁器	その他	計	接合前口縁破片数 土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	178	74	0	252	0	167	44	0	211
	椀	0	134	32	0	166	0	136	27	0	163
	小椀	0	19	30	0	49	0	6	10	0	16
	皿	0	23	2	0	25	0	19	3	0	22
	鉢	0	2	10	0	12	0	6	4	0	10
調理具		4	21	0	0	25	16	31	0	0	47
	鍋，釜	4	7	0	0	11	16	4	0	0	20
	鉢	0	1	0	0	1	0	2	0	0	2
	擂鉢	0	6	0	0	6	0	18	0	0	18
	瓶	0	7	0	0	7	0	7	0	0	7
	その他					0					0
貯蔵具		1	43	12	0	56	2	31	5	0	38
	瓶	0	22	0	0	22	0	4	0	0	4
	壷	1	0	0	0	1	2	1	0	0	3
	甕Ａ	0	11	0	0	11	0	14	0	0	14
	甕Ｂ					0					0
	鉢	0	10	12	0	22	0	12	5	0	17
	その他					0					0
灯火具		120	139	0	0	259	125	28	0	0	153
火具		9	5	0	0	14	7	6	0	0	13
化粧具						0					0
神仏具		0	20	12	0	32	0	5	2	0	7
喫煙具		0	0	12	0	12	0	0	3	0	3
調度具		0	22	0	0	22	0	23	0	0	23
蓋		12	55	24	0	91	1	22	4	0	27
合計		146	483	134	0	763	151	313	58	0	522

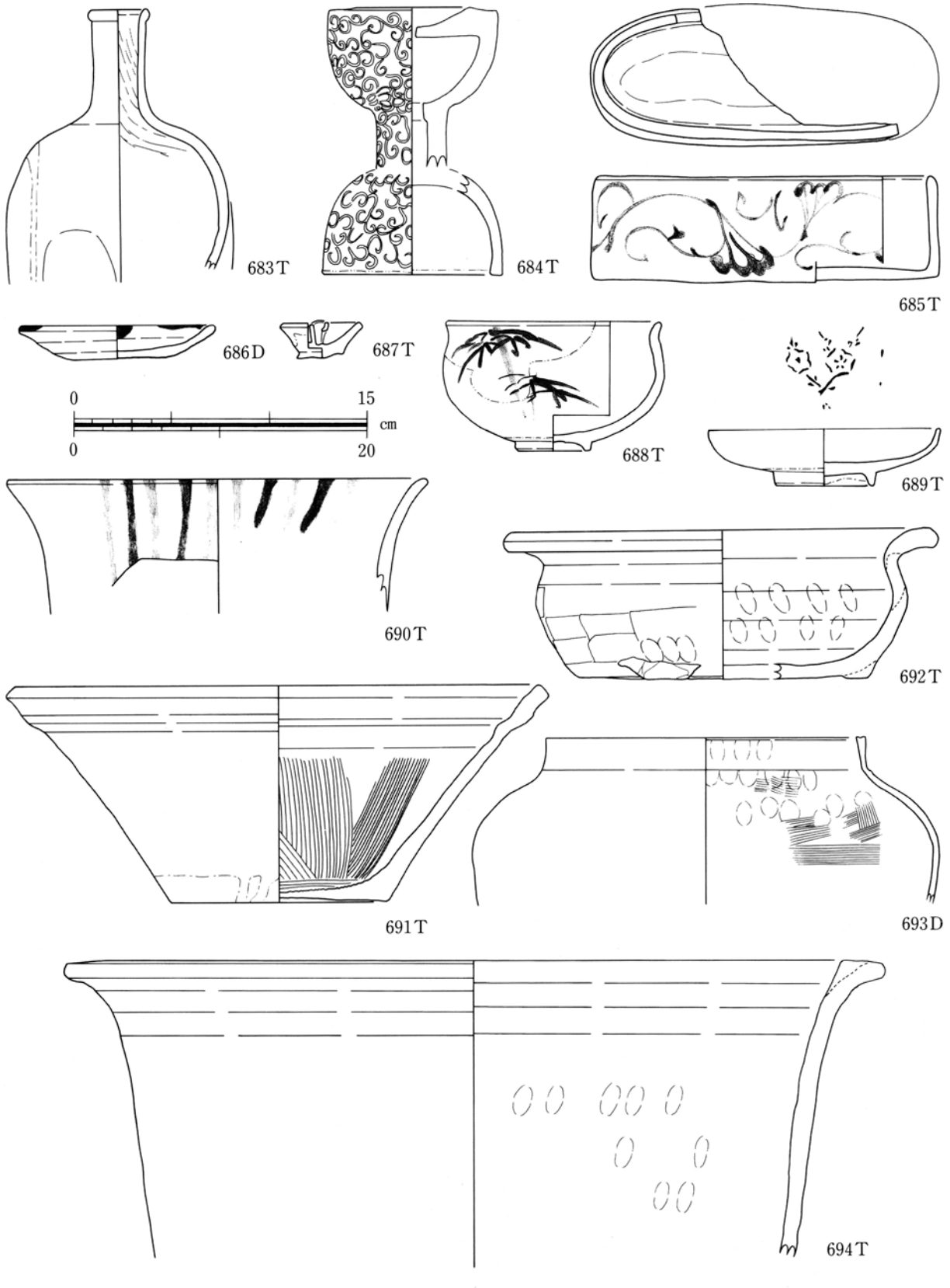
表29　ＳＫ202出土陶磁器類集計表



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
657	111	灰釉＋鉄釉＋呉須絵	麦わら手	瀬	
658	114	灰釉		京	19
659	112	灰釉＋鉄釉＋呉須絵	ヘラ描き蓮弁・人形スタンプ＋桔梗文	瀬	
660	112	染付	1780～1810年代　岩と草花文＋「成化年製」・岩に草花文	肥	22
661	114	鉄釉＋灰釉		瀬	23
662	112	染付	18C中～1780年代　獅子唐草文＋割小菊	肥	
663	125	上絵付	唐人と草花文・雲文＋花文	中	24
664	122	染付	18C前半～中葉　梅文	肥	
665	120	灰釉	底部墨書痕	瀬	
666	114	灰釉＋鉄絵	草文、底部墨書痕	京	
667	117	灰釉＋鉄絵	柳文	瀬	21
668	117	灰釉＋鉄絵	小杉文	京	24
669	110	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
670	131	灰釉＋銅緑釉	内外面白泥	京	
671	136	灰釉	四角	瀬	
672	145		18C前半　白磁	肥	
673	014	灰釉＋鉄釉		瀬	
674	015	鉄釉		瀬	
675	014	呉須絵	18C前半　唐草文	肥	44
676	730	染付	18C第4四半紀　輪宝つなぎ文	肥	35
677	730	灰釉		瀬	41
678	712	上絵付	草花文	瀬	
679	932	灰釉＋長石釉		瀬	42
680	351	染付	17C末～18C前半　（草花文）	肥	
681	811	染付	18C中葉～末　松文、見込墨書痕　赤絵の下地	肥	37
682	352	灰釉		瀬	

図157　ＳＫ202出土陶磁器類実測図(1)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
683	314	鉄釉		瀬	
684	440	鉄釉＋灰釉	施文かきおとし・唐草文	瀬	
685	630	長石釉＋呉須絵	唐草文	瀬	41
686	411		油煙付着	不	
687	423	灰釉		瀬	
688	420	灰釉＋鉄絵＋朱泥	竹文	瀬	23

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
689	411	灰釉＋呉須絵	口縁部油煙付着	瀬	
690	951	灰釉＋鉄絵＋呉須絵	麦ワラ文	瀬	
691	237	鉄釉		瀬	
692	518			常	
693	210		内面黒褐色に変色、外面煤付着	不	
694	335		内面橙色、外面にぶい橙色	常	

図158　ＳＫ202出土陶磁器類実測図(2)

ＳＫ009：本遺構の時期は19世紀前葉に位置づけられる。

出土遺物は口縁部破片数で403個体、総個体数で55.25個体である。この遺構は調理具と貯蔵具の比率が高く、供膳具18.50個体、35.4％（椀：皿=5.24：１）、調理具12.25個体、23.4％、貯蔵具12.83個体、24.6％を占める。これに対し、灯火具が5.36個体、10.2％と少数で、その中の土器製品の比率は、1.0個体、18.8％、全遺物中では僅か3.5％にまで減少している。

他の遺構に比して、調理具、貯蔵具が多くを占めている訳であるが、その要因として挙げることができるのは、調理具については、他の器種との比率の面で瓶と鉢の出土量が他の遺構に比べて多いと言う点である。鍋・釜が多く出土する遺構は江戸時代前期に類例は存在するが、瓶・鉢が多いという遺構は認められない。貯蔵具についても同様で、瓶がその内の59.1％を占める点であろう。ここで、調理具･貯蔵具双方の瓶を合わせてみると14.67個体、26.5％という高い数値を示す。これは何度も言うように、この遺構の特徴であると共に、この遺物は江戸時代を通じて比較的多くの量が出土しており、その用途について分類上の問題を含めて考えてみる必要があるかもしれない。

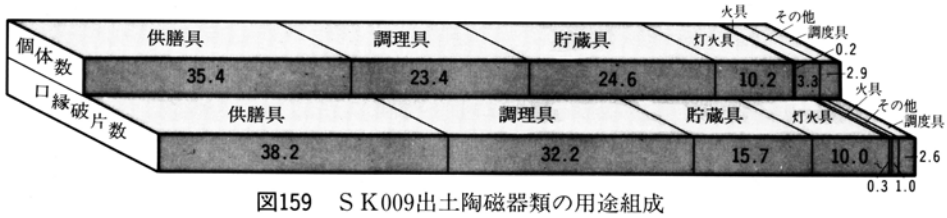
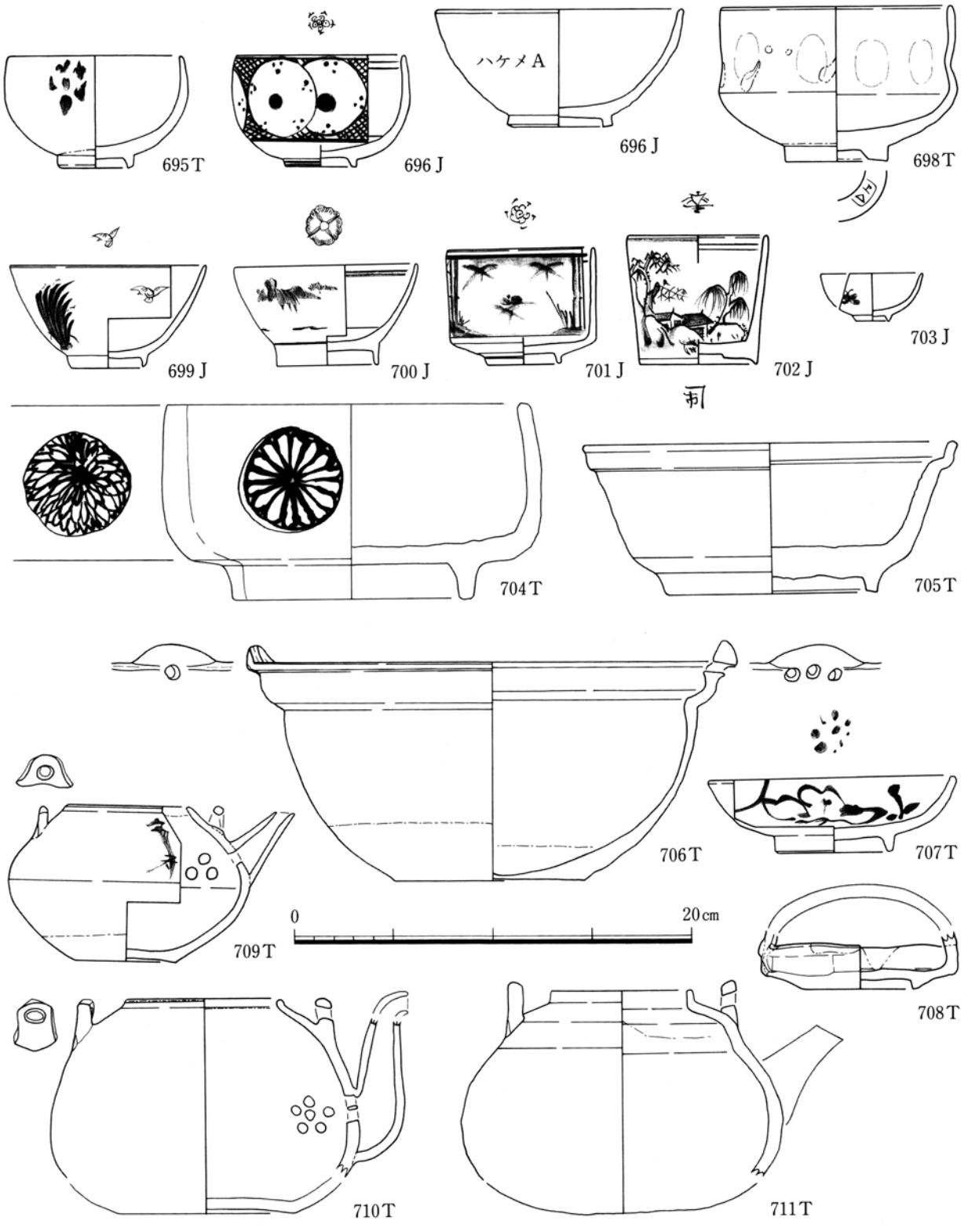


図159　ＳＫ009出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	138	84	0	222	0	96	50	0	146
	椀	0	82	61	0	143	0	62	33	0	95
	小椀	0	7	23	0	30	0	10	12	0	22
	皿	0	33	0	0	33	0	18	4	0	22
	鉢	0	16	0	0	16	0	6	1	0	7
調理具		1	141	0	5	147	3	116	0	4	123
	鍋，釜	1	24	0	5	30	3	21	0	4	28
	鉢	0	27	0	0	27	0	16	0	0	16
	擂鉢	0	5	0	0	5	0	14	0	0	14
	瓶	0	85	0	0	85	0	65	0	0	65
	その他					0					0
貯蔵具		10	135	0	9	154	9	49	0	2	60
	瓶	0	91	0	0	91	0	21	0	0	21
	壷	10	0	0	0	10	9	0	0	0	9
	甕 A	0	7	0	0	7	0	9	0	0	9
	甕 B	0	15	0	9	24	0	7	0	2	9
	鉢	0	22	0	0	22	0	12	0	0	12
	その他					0					0
灯火具		12	41	0	11	64	18	14	0	6	38
火具		0	1	0	0	1	0	1	0	0	1
化粧具						0					0
神仏具		0	0	20	0	20	0	0	3	0	3
喫煙具		0	1	0	0	1	0	1	0	0	1
調度具		0	18	0	0	18	0	10	0	0	10
蓋		0	35	21	0	56	0	13	8	0	21
合計		23	510	125	25	683	30	300	61	12	403

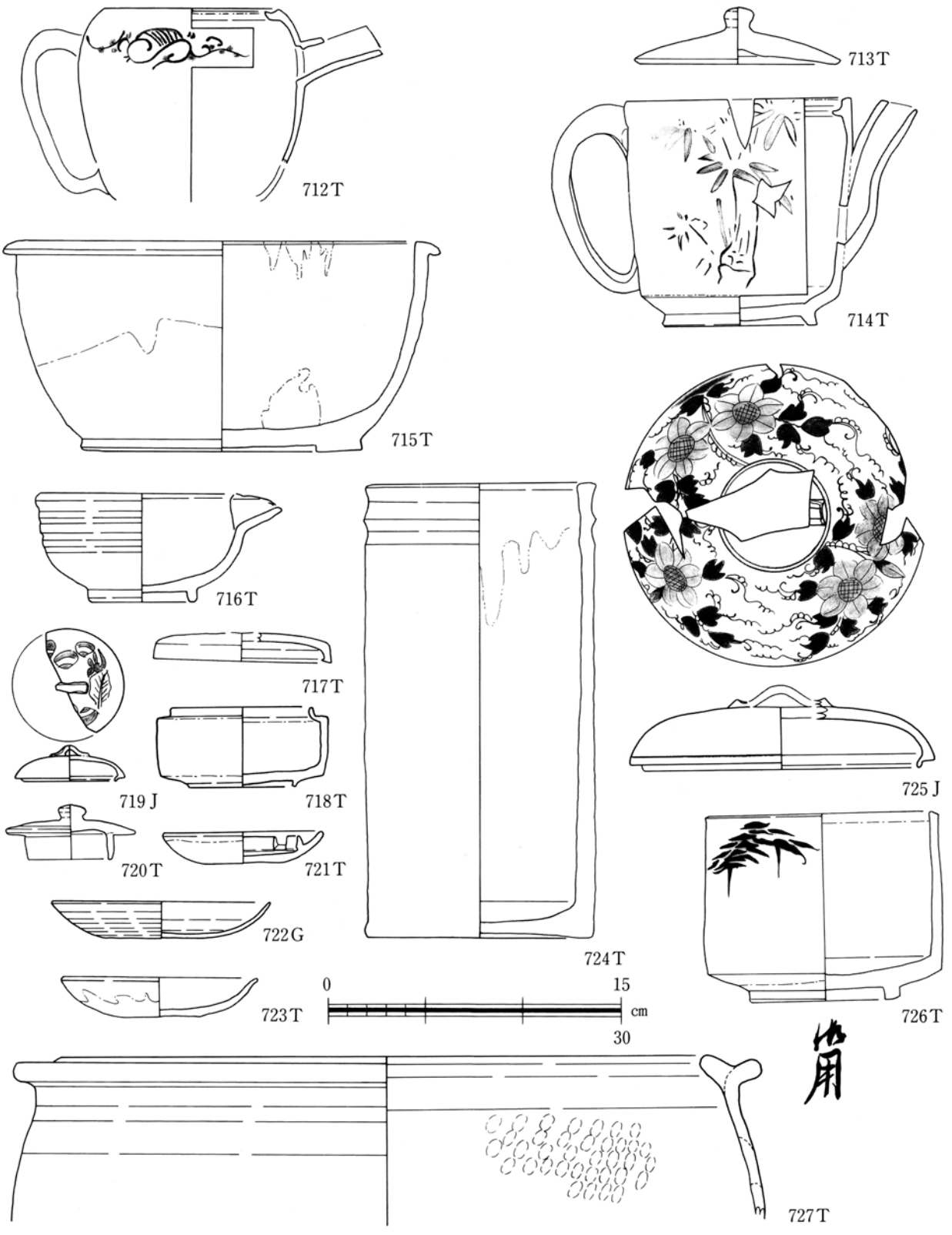
表30　ＳＫ009出土陶磁器類集計表



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
695	112	灰釉＋呉須絵	梅文	瀬	19
696	112	染付	1780～1810年代 五弁花	肥	24
697	114	灰釉	内面白泥散らし	瀬	19
698	113	鉄釉＋長石釉	凹み10ヶ所	瀬	21
699	114	染付	大明頃1780～1800まで 稲束と雀文・雀文	肥	21
700	117	染付	1780～1840年代 山水文・花文？	肥	21
701	124	染付	1780～1810年代 竹文・五弁花	肥	20
702	126	染付	17C前半 楼閣山水文＋「雨」・舟文	瀬	26
703	122	染付	18C中葉～末 蝶に草花文	肥	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
704	146	鉄釉＋呉須＋長石釉	方角鉢・菊花文	瀬	40
705	220			常	32
706	215	鉄釉		瀬	32
707	131	灰釉＋呉須絵	18C後半 花文＋九曜	瀬	27
708	140	長石釉＋呉須釉		瀬	28
709	241	灰釉＋鉄絵		瀬	29
710	241	灰釉		瀬	
711	241	灰釉(内面のみ)	信楽写し	瀬	

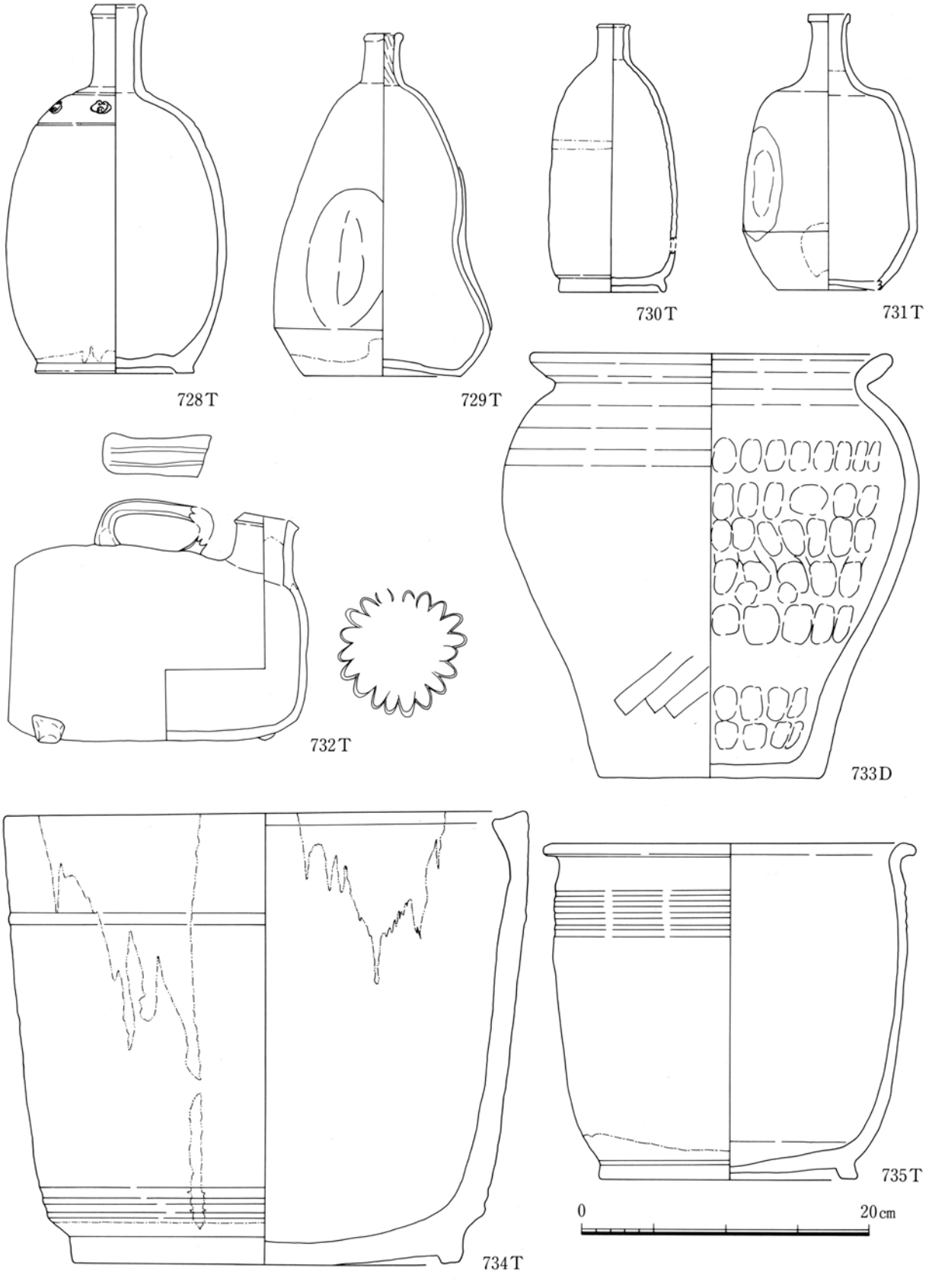
図160　ＳＫ009出土陶磁器類実測図(1)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
712	242	灰釉+鉄絵+呉須絵	唐草文	京	29
713	013	灰釉		瀬	
714	318	灰釉+鉄絵	竹文	瀬	35
715	222	灰釉+銅緑釉	外面体部墨痕	瀬	32
716	221	長石釉		瀬	
717	016	灰釉		瀬	
718	342	灰釉		瀬	
719	014	赤絵	18C後半～19C初 宝文	肥	35

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
720	014	灰釉		瀬	
721	412	鉄釉		瀬	
722	411		瓦質土器	不	
723	411	鉄釉		瀬	
724	931	灰釉+銅緑釉流し掛け		瀬	40
725	014	染付	18C後半 牡丹唐草文	肥	
726	341	灰釉+鉄絵	松文	瀬	37
727	333		内面淡赤橙、外面にぶい橙	常	

図161　ＳＫ009出土陶磁器類実測図(2)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
728	311	灰釉＋呉須	スタンプ	瀬	34
729	313	灰釉		瀬	34
730	311	鉄釉＋灰釉		瀬	33
731	314	鉄釉		瀬	34

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
732	310	鉄釉	陰刻	瀬	34
733	325			不	36
734	337	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	36
735	344	鉄釉		瀬	37

図162　ＳＫ009出土陶磁器類実測図(3)

ＳＫ014：本遺構の時期は19世紀前葉に比定される。

この遺構からは口縁部破片数にして607点、総個体数87.08個体である。この遺構も供膳具が25.0個体、36.1％と最も多くを占めてはいるが、平均値を考慮すれば、やはりその割合は決して高いとは言えない。これに対し，他の用途の遺物については、調理具9.5個体、13.7％、貯蔵具11.08個体、16.0％、灯火具9.75個体、14.1％と、いずれも10％強の出土率と成っている。さらに化粧具・喫煙具・調度具が5.83個体、6.7％、神仏具5.22個体、6.0％、蓋17.83個体、20.5％との割合で存在し、蓋がやや多いものの他はいずれも平均値である。このあり方は先に見たＳＫ346と同じ状況であり、推定の域は出ないものの、調理具の使用頻度の高い空間の周辺に存在していた可能性が考えられる。

また、器種別に考えた場合は、若干様相が異なっており、椀が供膳具中に占める割合が低下しており、皿との比率が1.30：1となっている。また調理具中に占める鍋・釜の比率も低下してきており、この遺構の特徴であると考えられる。

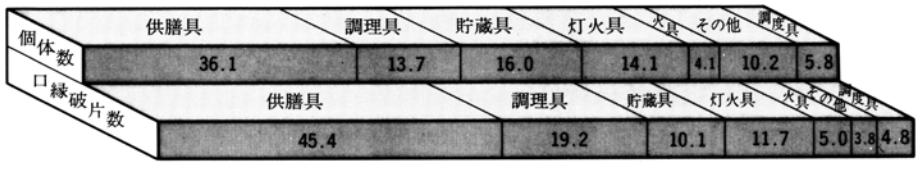
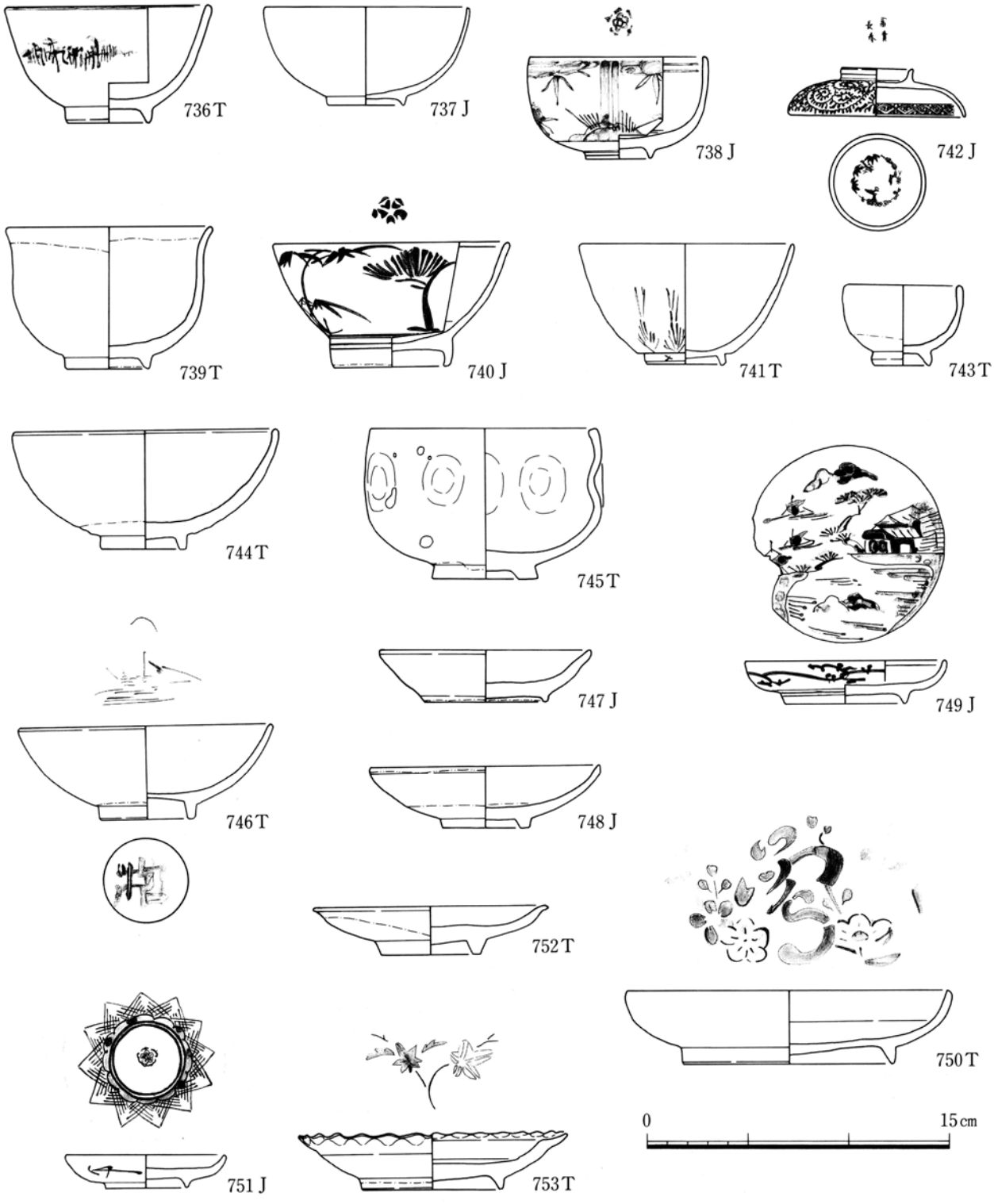


図163　ＳＫ014出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	194	106	0	300	0	194	59	0	253
	椀	0	93	35	0	128	0	114	23	0	137
	小椀	0	14	20	0	34	0	8	16	0	24
	皿	0	74	51	0	125	0	61	19	0	80
	鉢	0	13	0	0	13	0	11	1	0	12
調理具		4	110	0	0	114	19	88	0	0	107
	鍋，釜	4	51	0	0	55	19	40	0	0	59
	鉢	0	4	0	0	4	0	8	0	0	8
	擂鉢	0	43	0	0	43	0	34	0	0	34
	瓶	0	12	0	0	12	0	6	0	0	6
	その他					0					0
貯蔵具		0	133	0	0	133	0	53	3	0	56
	瓶	0	48	0	0	48	0	8	0	0	8
	壷	0	11	0	0	11	0	4	0	0	4
	甕Ａ	0	22	0	0	22	0	13	0	0	13
	甕Ｂ	0	10	0	0	10	0	10	0	0	10
	鉢	0	42	0	0	42	0	18	3	0	21
	その他					0					0
灯火具		44	73	0	0	117	44	21	0	0	65
火具		3	31	0	0	34	2	26	0	0	28
化粧具		0	8	0	0	8	0	3	0	0	3
神仏具		0	37	26	0	63	0	7	8	0	15
喫煙具		0	13	1	0	14	0	2	1	0	3
調度具		0	36	12	0	48	0	26	1	0	27
蓋		0	201	13	0	214	0	40	10	0	50
合計		51	836	158	0	1045	65	460	82	0	607

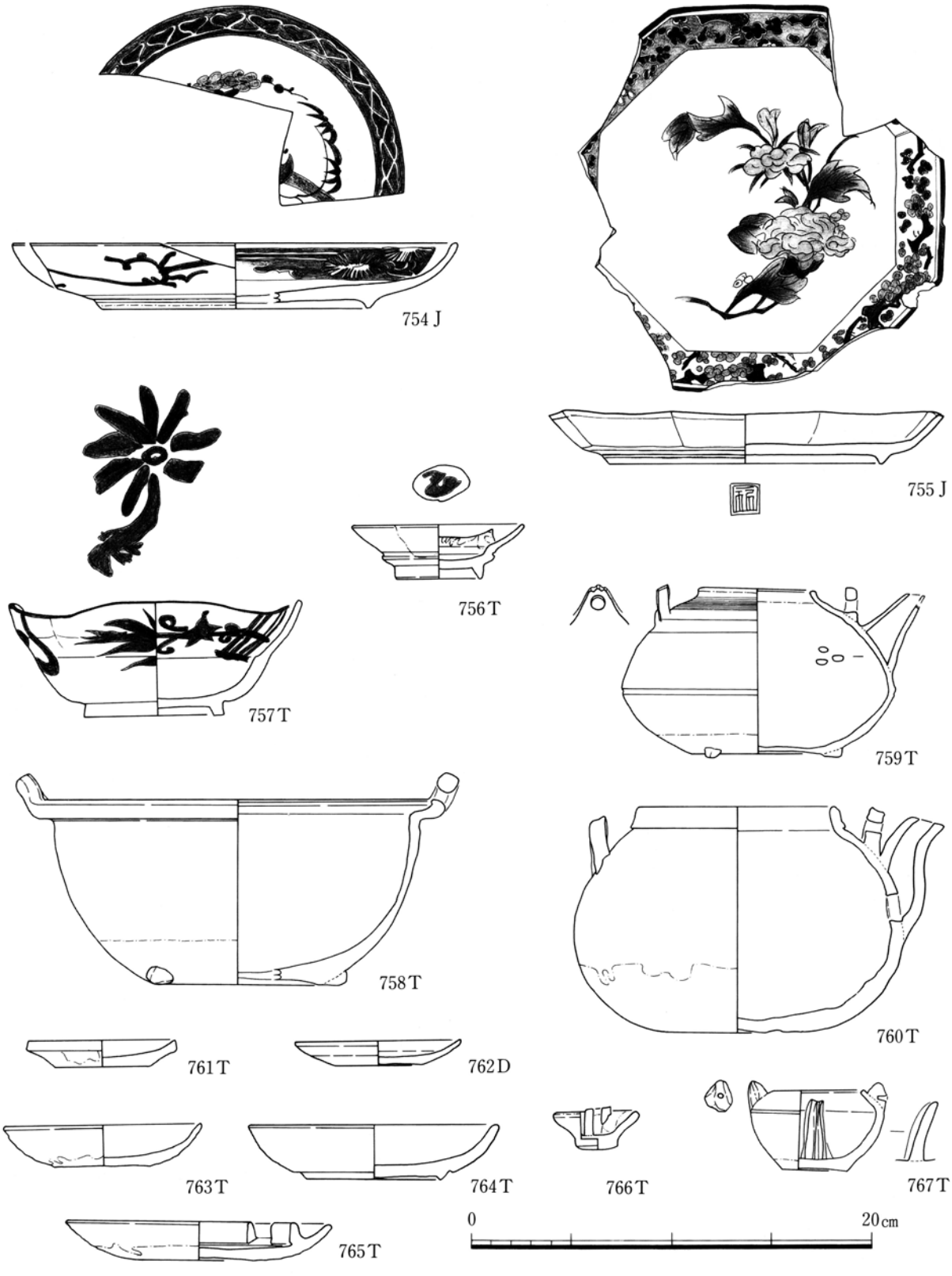
表31　ＳＫ014出土陶磁器類集計表



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
736	112	灰釉＋呉須絵＋鉄釉	口銹、松林文	瀬	19
737	112		18C前半～中 白磁	肥	
738	112	染付	1780～1810年代　竹文・二重圏線＋五弁花（コンニャク印）	肥	
739	116	灰釉＋呉須	白泥化粧、高台周辺煤付着	瀬	20
740	117	灰釉＋染付	1810年代以降 松竹文＋蜜形五弁花	瀬	21
741	117	灰釉＋呉須絵	小杉文	京	21
742	015	染付	18C後半～19C初　蛸唐草文＋「高貴長春」・割子菱＋松竹梅文	肥	
743	122	灰釉	外面体部下半墨付着	瀬	
744	114	灰釉		瀬	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
745	113	鉄釉＋長石釉		瀬	24
746	131	灰釉＋呉須絵	17C末～18C初 楼閣山水文	京	27
747	131	灰釉＋鉄釉	18C後半～19C前半 口銹	肥	
748	131	輪ハゲ・灰釉＋鉄釉	18C前半	瀬	
749	131	染付	18C後半 唐草文・楼閣山水文	肥	27
750	131	灰釉＋鉄絵＋呉須絵		瀬	27
751	131	染付	18C後半～19C初 松葉文・幾何文＋五弁花	肥	25
752	132	灰釉		瀬	
753	137	灰釉＋鉄絵	紅葉文	瀬	27

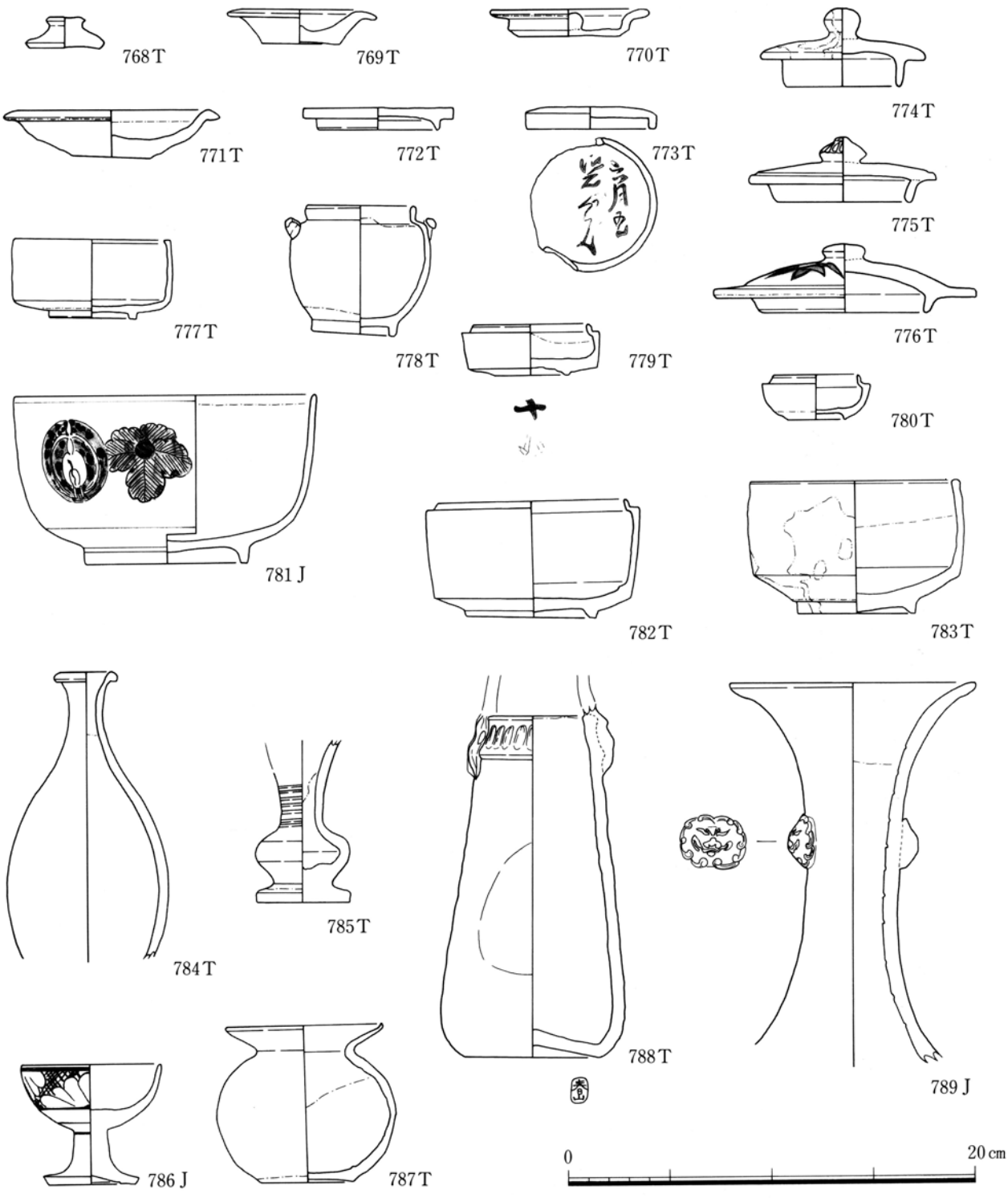
図164　ＳＫ014出土陶磁器類実測図(1)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
754	131	染付	18C 後半～19C 初　唐草文・菊水文＋環状松竹梅文・墨はじき	肥	25
755	136	染付＋鉄釉	1660～1670年代　口銹、ハリあと、角福＋梅と牡丹文	肥	28
756	137	灰釉＋鉄釉＋銅緑釉		瀬	
757	146	長石釉＋鉄絵	口銹、唐草文・柵に朝顔＋花文	瀬	29
758	215	鉄釉		瀬	32
759	241	鉄釉	脚部煤付着	瀬	33
760	241	灰釉	外面煤付着	肥	29

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
761	411	灰釉		瀬	
762	411	底部糸切り	口縁部油煙付着	不	
763	411	鉄釉	口縁・体部油煙付着	瀬	
764	411	長石釉	口縁一部油煙付着	瀬	
765	412	鉄釉		瀬	38
766	423	灰釉		瀬	38
767	420	鉄釉		瀬	38

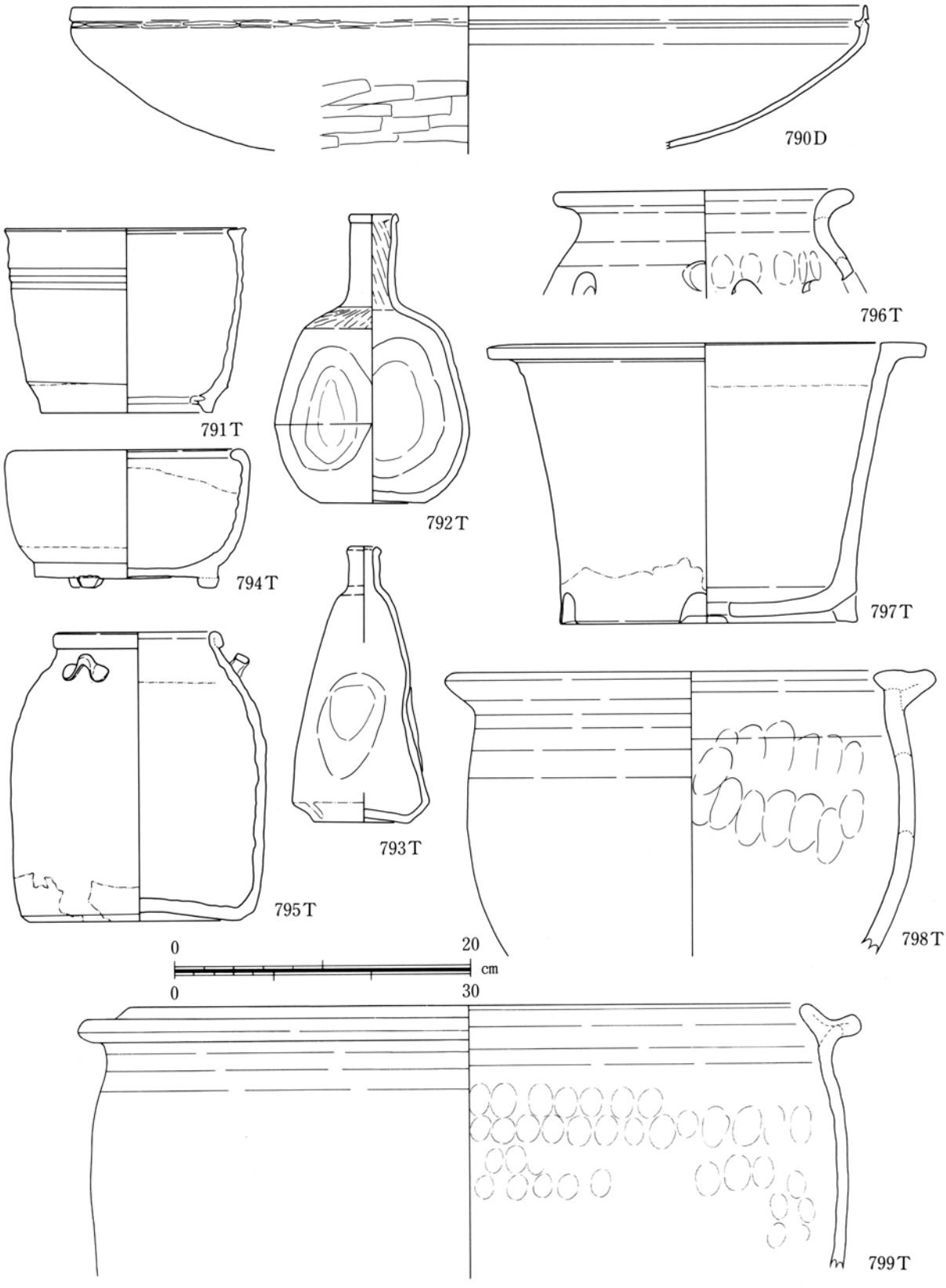
図165　ＳＫ014出土陶磁器類実測図(2)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
768	013		全面自然釉	瀬	
769	011		自然釉	瀬	
770	012	灰釉		瀬	
771	011	鉄釉		瀬	
772	016	灰釉		京	
773	016	灰釉	内面墨書あり	瀬	
774	014	灰釉＋銅緑釉＋呉須		瀬	
775	014	鉄釉		瀬	44
776	014	灰釉＋呉須絵	笹文	瀬	
777	351	灰釉		京	37
778	321	灰釉		瀬	36

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
779	740	灰釉	底部墨書痕	瀬	
780	740	灰釉		瀬	37
781	351	染付	18C後半 つたに丸のし文	肥	35
782	352	灰釉		瀬	
783	811	鉄釉＋灰釉流し掛け	全面煤付着	瀬	41
784	712	灰釉		瀬	41
785	932	灰釉＋鉄釉		瀬	40
786	730	染付	18C前半～ 菊花散らし	肥	
787	961	灰釉		瀬	42
788	931	灰釉	「春山」（刻印）信楽写し	瀬	40
789	932		17C末～18C前半 青磁・焼き継ぎ碗	肥	40

図166　ＳＫ014出土陶磁器類実測図(3)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
790	213			不	
791	641	鉄釉		瀬	36
792	314	鉄釉		瀬	33
793	313	灰釉		瀬	34
794	511	鉄釉	口縁部敲打痕	瀬	39

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
795	621	鉄釉	内面酸化鉄分付着	瀬	39
796	516		穿孔部煤付着	不	
797	911	灰釉		瀬	
798	335		内面にぶい橙、外面橙	常	
799	333		内面灰褐、外面褐灰	常	

図167　ＳＫ014出土陶磁器類実測図(4)

ＳＫ346：本遺構の時期は18世紀後葉から19世紀前葉に比定される。

本遺構からは口縁部破片数で761点、総個体数で89.25個体が出土している。内訳は供膳具46.75個体、58.9%、調理具3.25個体、4.1%、貯蔵具5.42個体、6.8%、灯火具14.33個体、18.0%、化粧具・喫煙具・調度具5.53個体、3.66%、神仏具4.11個体、4.6%、蓋9.83個体、11.0%である。これを江戸時代の平均値と比較してみると、いずれもそれに近い数値であることが判る。さらに材質面においても、陶器が63.75個体、71.4%、磁器が18.5個体、20.7%、土器が6.92個体、7.7%と陶器がやや多く、土器がやや少なめではあるがほぼ近世の平均的あり方を示している。

器種の組成では椀と皿の比率は3.29：１とやはり４倍近いひらきがあり、江戸時代後半になるほどその差が大きくなる傾向は確からしい。平均値では2.54：１と単純に戦国時代とその比率を逆転させたかの様であったが、これはあくまで平均の数値であり、本来的には江戸時代初頭は戦国時代同様に椀対皿は１：２であり、時代が下がるに従い、17世紀後葉に同率に、18世紀前葉には逆転することが、これまで述べてきた遺構の遺物組成から推定することができる。

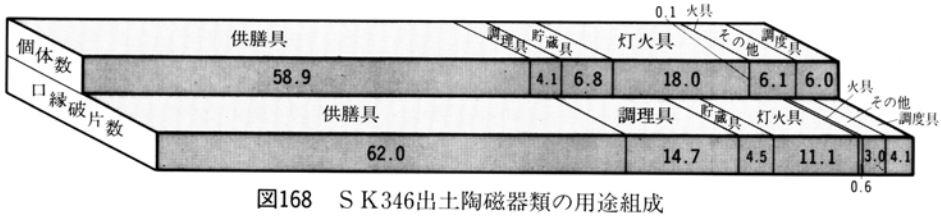
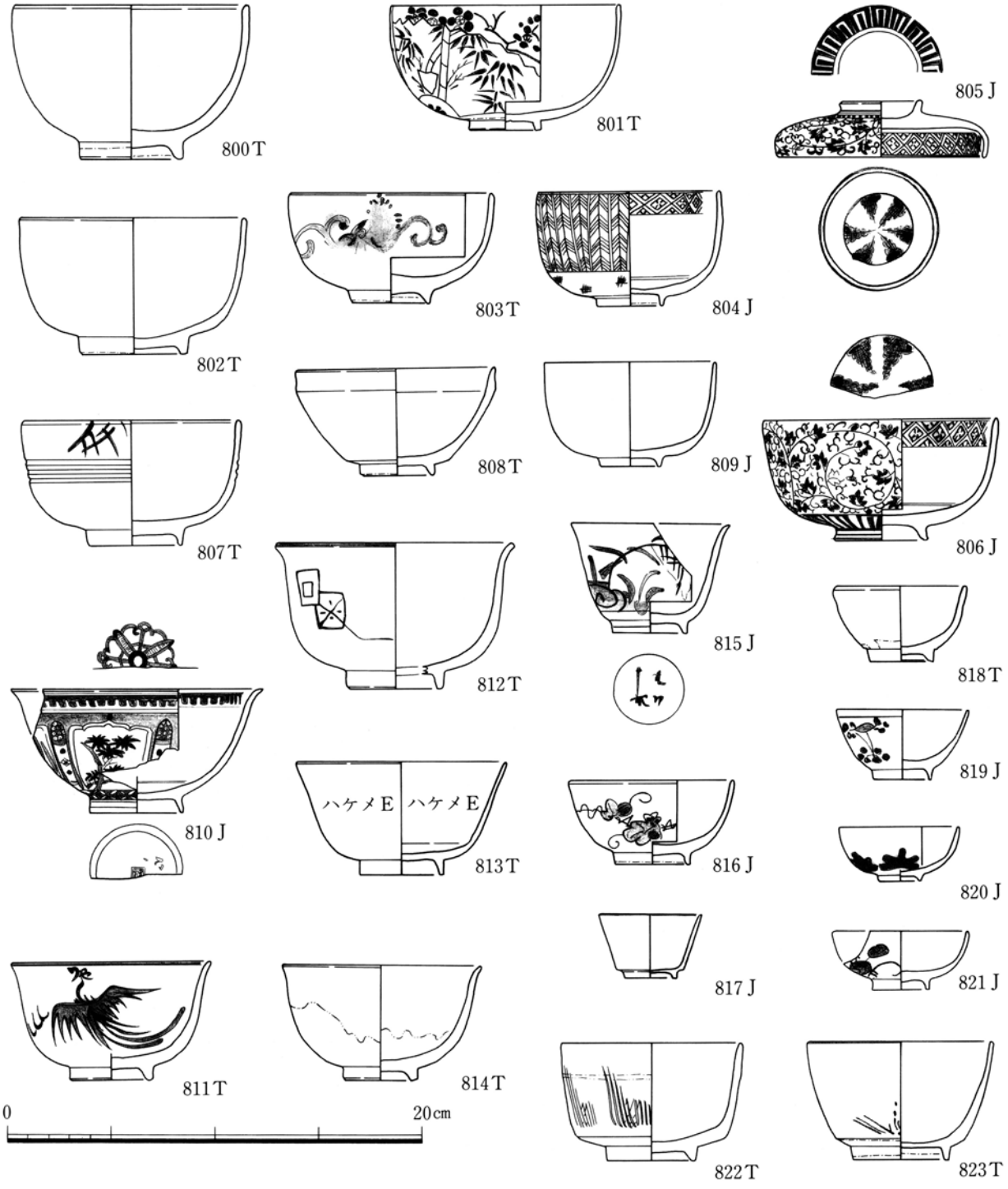


図168　ＳＫ346出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	386	175	0	561	0	339	113	0	452
	椀	0	282	75	0	357	0	237	57	0	294
	小椀	0	7	60	0	67	0	7	36	0	43
	皿	0	89	40	0	129	0	86	20	0	106
	鉢	0	8	0	0	8	0	9	0	0	9
調理具		18	21	0	0	39	73	34	0	0	107
	鍋　釜	18	3	0	0	21	73	5	0	0	78
	鉢	0	8	0	0	8	0	8	0	0	8
	擂鉢	0	10	0	0	10	0	19	0	0	19
	瓶	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2
	その他					0					0
貯蔵具		0	62	3	0	65	0	31	2	0	33
	瓶					0					0
	壷	0	23	0	0	23	0	10	0	0	10
	甕Ａ	0	12	0	0	12	0	8	0	0	8
	甕Ｂ	0	21	0	0	21	0	6	0	0	6
	鉢	0	6	3	0	9	0	7	2	0	9
	その他					0					0
灯火具		63	108	0	1	172	46	34	0	1	81
火具		0	1	0	0	1	1	3	0	0	4
化粧具		0	6	0	0	6	0	7	0	0	7
神仏具		0	25	24	0	49	0	5	3	0	8
喫煙具		0	3	0	0	3	0	7	0	0	7
調度具		0	57	0	0	57	0	30	0	0	30
蓋		2	96	20	0	118	1	23	8	0	32
合計		83	765	222	1	1071	121	513	126	1	761

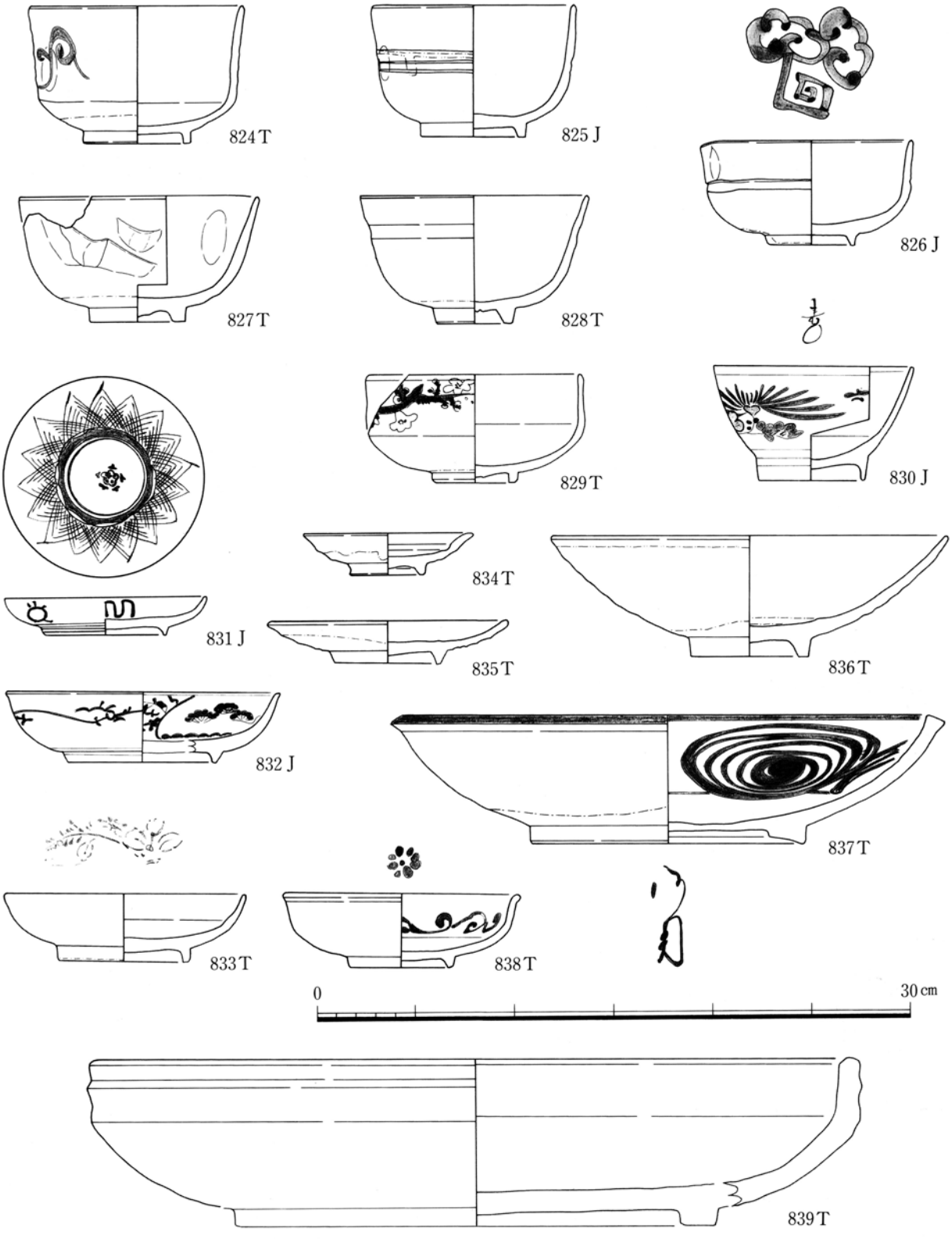
表32　ＳＫ346出土陶磁器類集計表



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
800	112	灰釉		瀬	
801	112	灰釉＋上絵付	竹と梅文	京	19
802	112	灰釉		瀬	22
803	112	灰釉＋呉須絵＋鉄絵	花唐草文	瀬	19
804	112	染付	18C後半 矢羽根文・割小菱＋五弁花	肥	19
805	015	染付	18C後半 唐草に串文・割小麦＋ねじり花文	肥	28
806	112	染付	唐草に串文・割小菱＋ねじり花文	肥	19
807	112	灰釉＋呉須絵	幾何文	瀬	19
808	111	灰釉		瀬	
809	122	鉄釉	18C後半 白磁・口銹	肥	
810	116	染付	18C末～19前半 窓に竹と松文・花弁文、焼き継ぎ痕	肥	
811	116	灰釉＋鉄絵	鳳凰文	瀬	20

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
812	116	長石絵＋鉄絵	鳳文	瀬	20
813	116	灰釉	1690～18C前半 刷毛目	肥	20
814	116	灰釉＋呉須流し掛け		瀬	20
815	125	染付	18C前半 きび文＋「大明年製」	肥	26
816	122	染付	18C前半～中 唐文	肥	24
817	126		18C代 白磁・口銹	肥	
818	122	灰釉		瀬	24
819	122	染付	17C後半 （草花文）	肥	24
820	122	染付	18C代 木葉文？	肥	26
821	122	赤絵	18C後半 草花文	肥	
822	118	鉄釉＋灰釉		瀬	20
823	117	灰釉＋鉄絵	18C前半 草花文	京	23

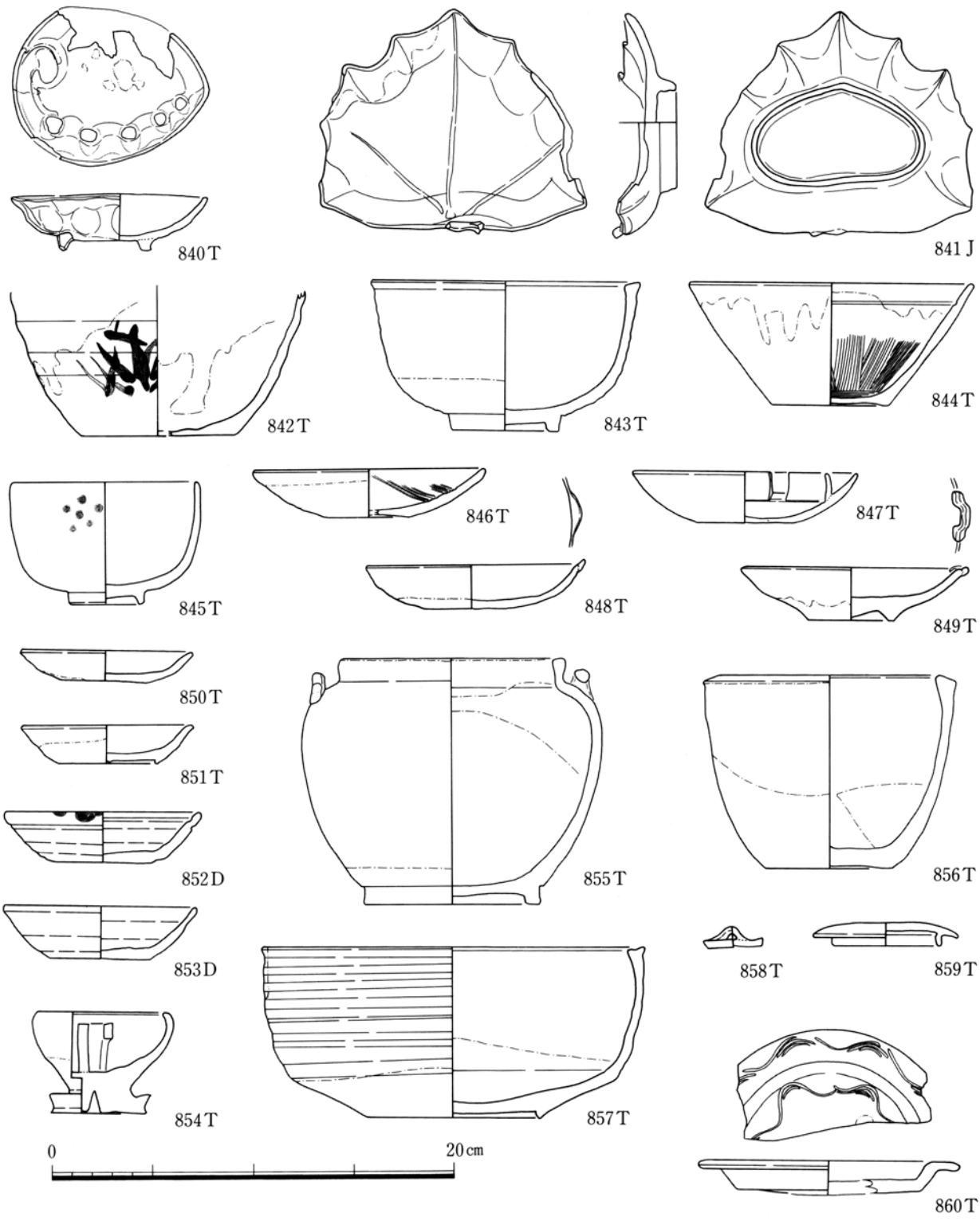
図169　ＳＫ346出土陶磁器類実測図(1)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
824	110	灰釉＋鉄絵	唐草文	瀬	21
825	110	鉄釉＋灰釉		瀬	
826	110	灰釉＋鉄絵	雲に電光文	瀬	31
827	110	灰釉		瀬	19
828	110	灰釉		瀬	
829	113	灰釉＋鉄絵＋長石釉	梅文	京	23
830	117	染付	19C前半 菊にぶどう文・「寿」	肥	21
831	131	染付	18C第4四半紀～19C初 （祥瑞文）・草文＋五弁花	肥	27＋25 （表と裏）

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
832	131	染付	18C前半 唐草文・松文	肥	
833	411	灰釉＋呉須絵	草花文（？）型紙摺り	瀬	
834	132	灰釉		瀬	
835	131	灰釉		瀬	
836	133	灰釉＋銅緑釉	見込釉はぎ	肥	25
837	131	灰釉＋鉄絵	馬の目文	瀬	32＋27
838	132	灰釉＋呉須絵	唐草文＋梅文	瀬	
839	131	灰釉		瀬	

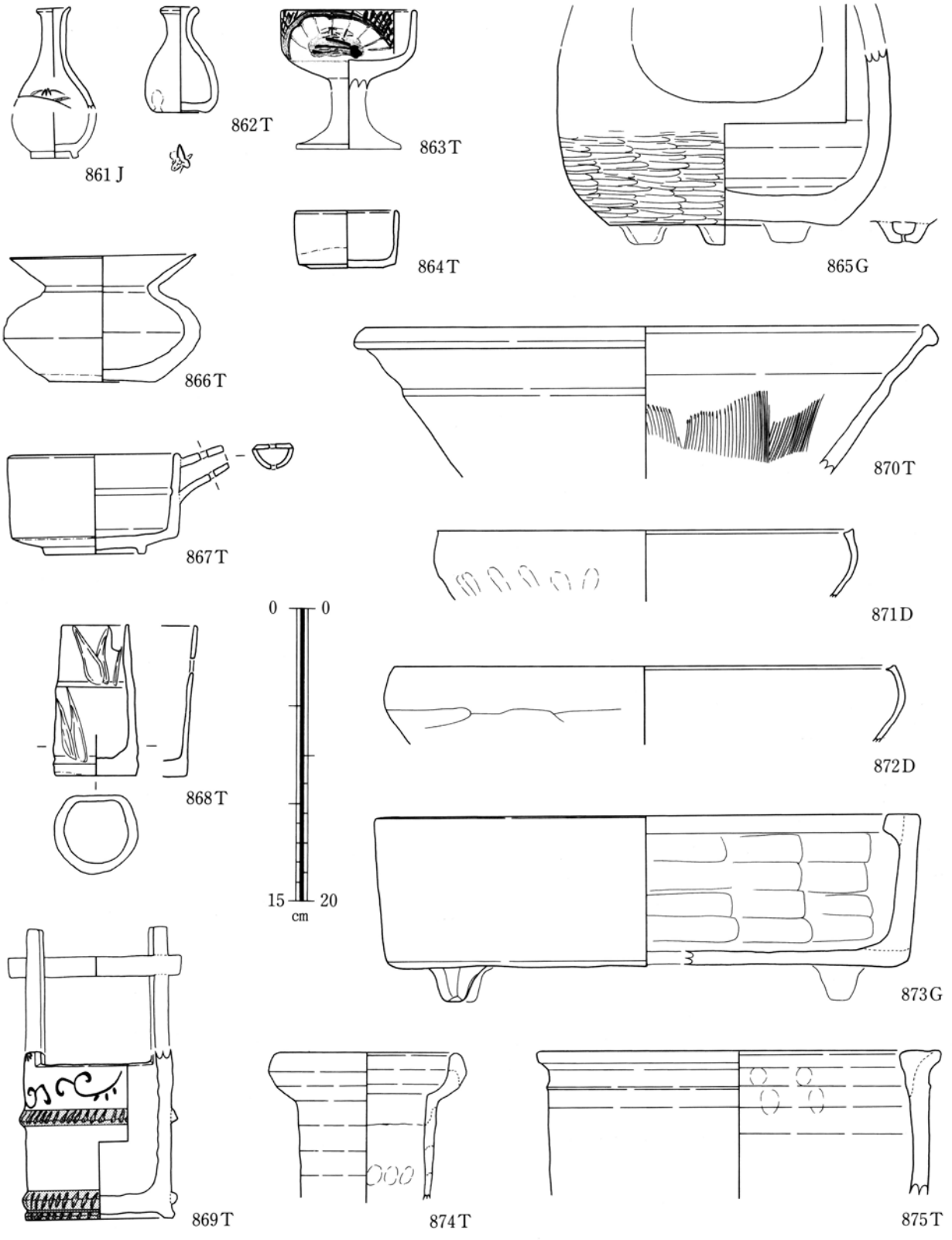
図170　ＳＫ346出土陶磁器類実測図(2)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
840	136	灰釉＋鉄釉＋銅緑釉		瀬	31
841	136	青磁釉＋鼎須	1650～60代青磁掛け分け・型打ち	肥	28
842	147	灰釉＋銅緑釉＋鉄絵	草文	瀬	29
843	221	灰釉		瀬	27
844	237	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	
845	400	灰釉＋鉄絵	梅花文、油煙付着	瀬	
846	411	灰釉	口縁部油煙付着、底部墨痕	瀬	
847	412	鉄釉	切込２ヶ所	瀬	
848	411	鉄釉	内面油煙付着	瀬	
849	411	灰釉	高台周辺油煙付着	肥	
850	411	鉄釉		瀬	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
851	411	灰釉		瀬	
852	411	底部糸切り	油煙付着	不	
853	411	底部糸切り	内面油煙付着	不	
854	422	鉄釉		瀬	38
855	321	灰釉		瀬	36
856	343	鉄釉		瀬	37
857	943	灰釉＋鉄釉流し掛		瀬	
858	013	鉄釉		瀬	44
859	017	灰釉		瀬	
860	011	鉄釉		瀬	

図171　ＳＫ346出土陶磁器類実測図(3)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	P L
861	712	染付	18C後半～19C初 筒文	肥	
862	712	灰釉	沢潟文（カ）	瀬	
863	730	灰釉＋呉須絵	菊文	瀬	
864	921	灰釉		瀬	
865	513		脚に空気孔あり	不	
866	961	灰釉		不	42
867	901	灰釉		瀬	43
868	931	灰釉＋呉須絵	竹文	瀬	42

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	P L
869	903	灰釉＋呉須絵	唐草文	瀬	40
870	237	鉄釉		瀬	
871	213			不	
872	213			不	
873	511			不	
874	904		明褐色	常	
875	335			常	

図172　ＳＫ346出土陶磁器類実測図(4)

ＳＫ118：本遺構の時期は19世紀前葉から中葉に位置づけられる。

本遺構からの出土遺物は口縁部破片数で1420点、総個体数で107.42個体である。この遺構の用途別の構成比率は平均値に類似し、供膳具49.92個体、52.2%、調理具7.83個体、8.2%、貯蔵具4.42個体、4.6%、灯火具19.50個体、20.4%、化粧具・喫煙具・調度具が9.88個体、9.2%、神仏具2.83個体、2.6%、蓋11.75個体、10.9%となっている。

このうち、化粧具が2.92個体、2.7%を占める点については、他の遺構と比較しても最高値であり、本遺構の特徴のひとつであると言える。また、灯火具に占める土器製品の割合が79.1%と増加してはいるものの、遺物全体では土器製品は16.4%と決して多くを占めず、この時期では既に土器製品の使用量自体が減少していると思われる。

器種別では、椀と皿の比率が1.09：１と同数に縮まっている点、調理具の擂鉢が多く出土している点、貯蔵具では瓶が一定量使用されている点等を指摘できるであろう。

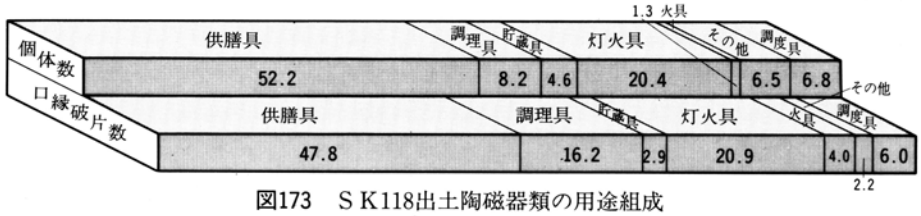
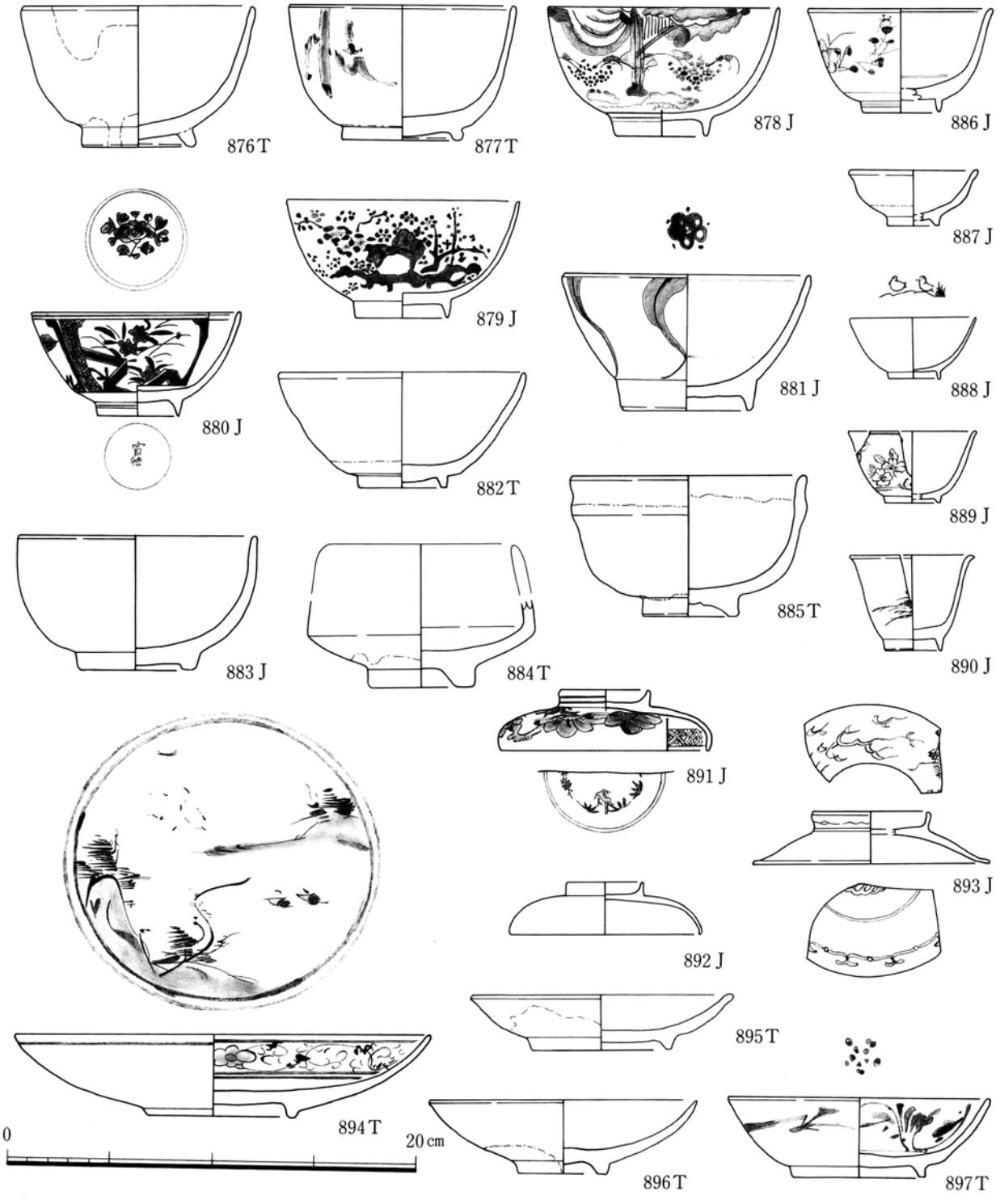


図173　ＳＫ118出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		7	363	229	0	599	7	429	223	1	660
	椀	0	120	122	0	242	0	201	145	1	347
	小椀	0	7	38	0	45	0	6	20	0	26
	皿	7	192	64	0	263	7	176	55	0	238
	鉢	0	44	5	0	49	0	46	3	0	49
調理具		19	75	0	0	94	110	113	0	0	223
	鍋，釜	19	20	0	0	39	110	34	0	0	144
	鉢	0	6	0	0	6	0	6	0	0	6
	擂鉢	0	22	0	0	22	0	51	0	0	51
	瓶	0	27	0	0	27	0	22	0	0	22
	その他					0					0
貯蔵具		0	53	0	0	53	0	39	1	0	40
	瓶	0	19	0	0	19	0	2	0	0	2
	壷	0	9	0	0	9	0	6	0	0	6
	甕Ａ	0	2	0	0	2	0	9	0	0	9
	甕Ｂ	0	11	0	0	11	0	10	0	0	10
	鉢	0	12	0	0	12	0	12	1	0	13
	その他					0					0
灯火具		185	43	5	1	234	258	28	1	1	288
火具		1	14	0	0	15	3	52	0	0	55
化粧具		0	18	17	0	35	0	4	3	0	7
神仏具		0	24	10	0	34	0	15	3	0	18
喫煙具		0	6	0	0	6	0	6	0	0	6
調度具		0	78	0	0	78	0	83	0	0	83
蓋		0	111	29	1	141	0	31	14	1	46
合計		212	785	290	2	1289	378	800	245	3	1426

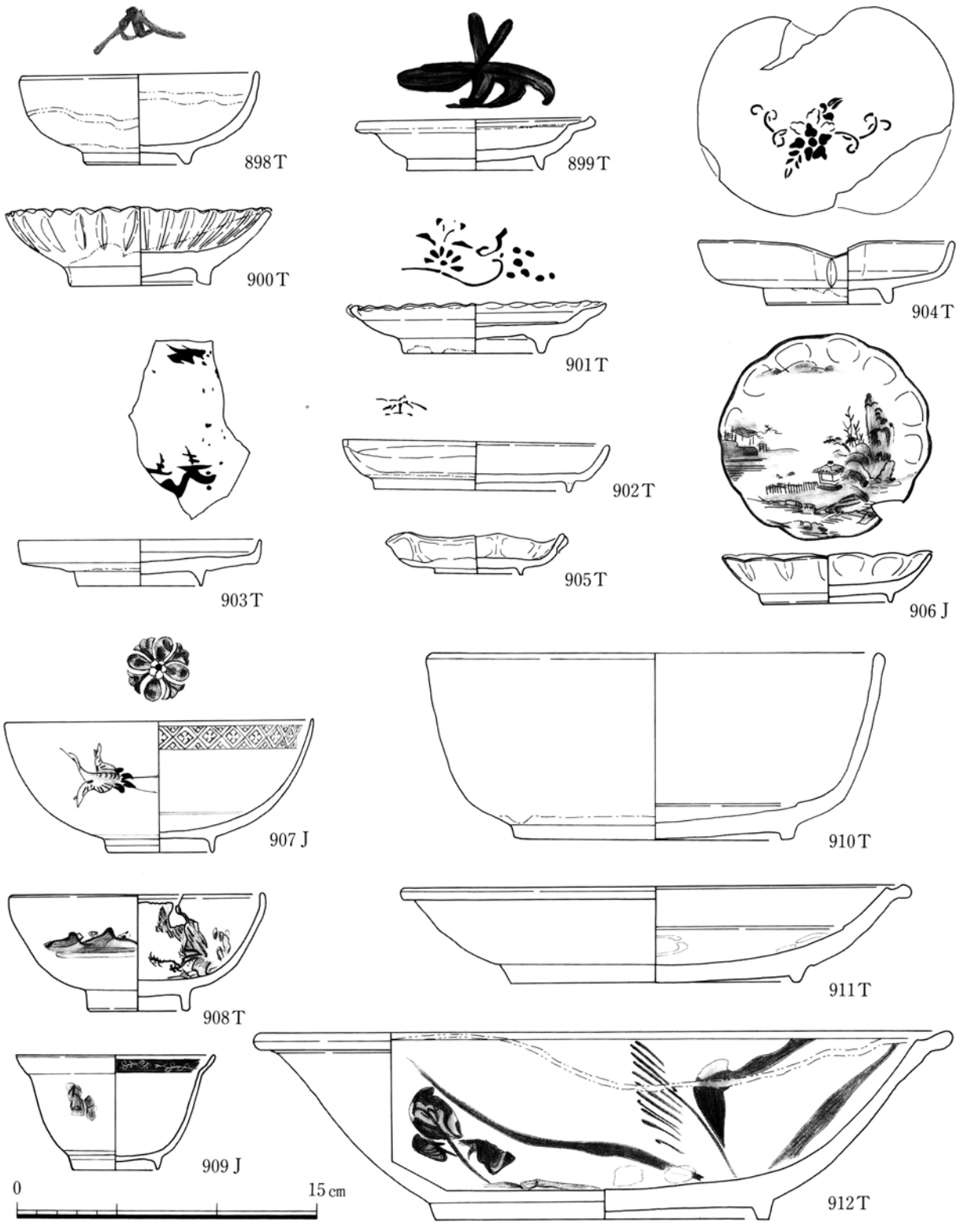
表33　ＳＫ118出土陶磁器類集計表



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
876	112	鉄釉＋灰釉		瀬	22
877	112	灰釉＋呉須絵	山水文	瀬	19
878	112	染付	1690～18C前半 （伊万里）に草花文	肥	19
879	112	赤絵	1660～1690年代 梅樹文	肥	
880	112	染付、呉須絵	1670～1690年代 窓に草花文・菊花文＋五弁花	肥	22+19
881	117	染付	ねじり花文，梅花文	瀬	21
882	114	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	
883	900	灰釉		瀬	
884	900	鉄釉		瀬	
885	900	鉄釉＋長石釉		瀬	21
886	116	染付	19C中～末 草花文	瀬	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
887	122	灰釉		瀬	
888	122	染付	明治以降？ 鳥文	瀬	
889	125	赤絵	18C後半～19C初 外・内共牡丹文	肥	
890	125	染付	17C後半 草文	肥	
891	015	染付	18C後半 松文・割小菱＋環状松竹梅文	肥	
892	015		18C 口縁	肥	
893	015	染付	1780～1810年代 雲龍文・雲文(?)	肥	
894	131	呉須絵	1630～1640年代 高台砂目積，山水文・牡丹唐草文	肥	26
895	135	灰釉		瀬	30
896	131	輪ハゲ，灰釉＋銅緑釉		肥	27
897	131	灰釉＋呉須絵	草花文・菊花文＋五弁花	瀬	27

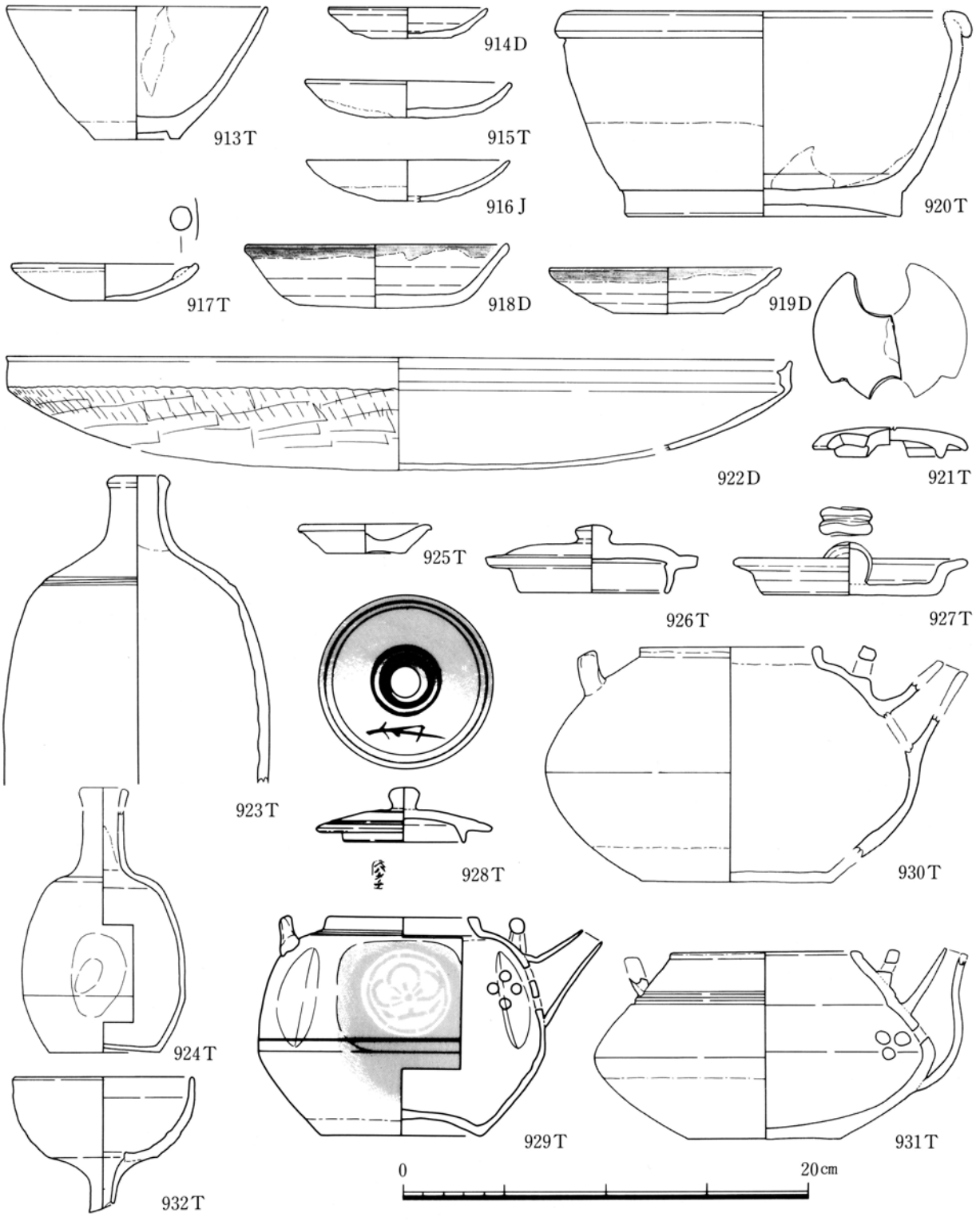
図174　ＳＫ118出土陶磁器類実測図(1)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
898	131	灰釉＋鉄釉	笹文	瀬	
899	134	灰釉＋鉄絵	笹文	瀬	30
900	135	灰釉＋銅緑釉		瀬	28
901	137	灰釉＋鉄絵	菊水文	瀬	30+28
902	136	長石釉＋鉄絵	笹文、角型	瀬	28
903	133	長石釉＋鉄絵	山水文	瀬	
904	136	長石釉＋鉄絵	藤文(カ)	瀬	
905	137	灰釉＋鉄釉	五稜花	瀬	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
906	136	染付＋鉄釉	18C後半～19C初 楼閣山水文、口銹	肥	28
907	141	染付	18C末～19C前半 蝙文・割小菱＋唐花文	肥	19
908	141	灰釉＋呉須絵	17C後半 山水文・楼閣山水文	瀬	32
909	140	染付	楼閣山水文・梅花文	肥	
910	141	灰釉		瀬	
911	143	灰釉		瀬	
912	143	灰釉＋鉄絵＋銅緑釉	キビ文	瀬	29

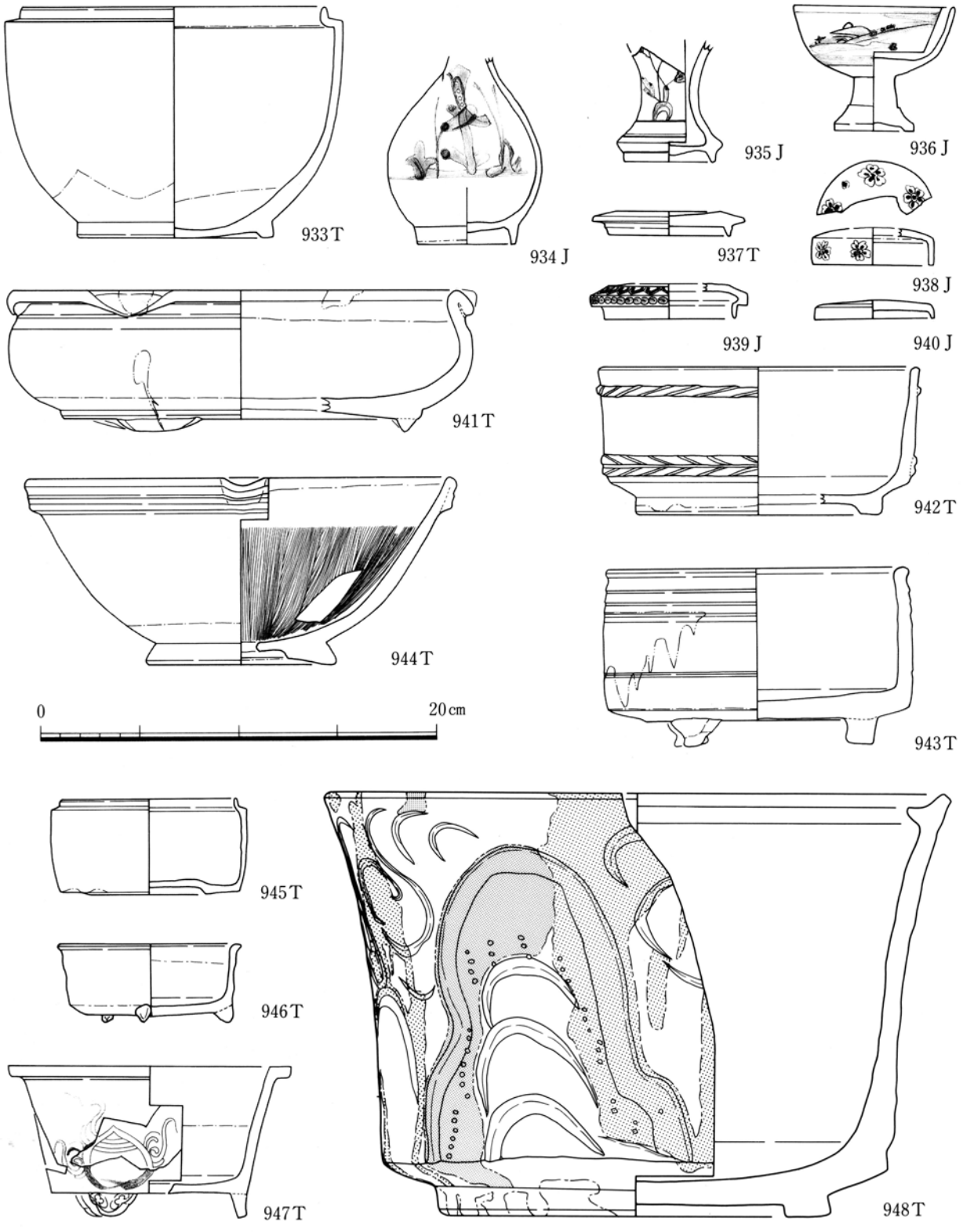
図175　ＳＫ118出土陶磁器類実測図(2)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
913	141	鉄釉＋灰釉窯変流し掛け		瀬	29
914	411	底部糸切り		不	
915	411	鉄釉	口縁部油煙付着	瀬	
916	411		19C 青白磁、口縁油煙付着	瀬	
917	411	灰釉	口縁部油煙付着	瀬	
918	411	底部糸切り	油煙付着	不	38
919	411	底部糸切り	油煙付着	不	
920	222	灰釉		瀬	29
921	019	長石釉		瀬	
922	213			不	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
923	311	鉄釉		瀬	33
924	314	鉄釉		瀬	34
925	011	鉄釉		瀬	
926	014	鉄釉		瀬	
927	012	鉄釉		瀬	
928	014	灰釉＋鉄絵	墨吹き、折松葉文・刻印	瀬	
929	241	灰釉＋鉄絵	墨吹き、梅花文	瀬	
930	241	鉄釉		瀬	
931	623	鉄釉	内面酸化鉄分付着	瀬	
932	900	鉄釉		瀬	

図176　ＳＫ118出土陶磁器類実測図(3)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
933	352	灰釉	底部墨書痕あり	瀬	37
934	712	染付	18C後半～19C初 草花文、高台胎土目痕	肥	
935	932	染付	高台釉ハギ、草花文	肥	
936	730	染付	山水文	肥	41
937	017	灰釉		瀬	
938	016	染付	18C代 桜文	肥	
939	017	染付	19C 満文＋剣先文	瀬	
940	016	灰釉		瀬	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
941	943	灰釉＋鉄釉流し掛け		瀬	
942	943	灰釉		瀬	
943	812	灰釉＋銅緑釉流し掛け	口縁敲打痕あり	瀬	41
944	913	鉄釉	底部穿孔、転用品	瀬	
945	352	灰釉		瀬	
946	721	灰釉		瀬	
947	911	灰釉＋鉄絵	宝珠文	瀬	
948	951	灰釉＋鉄釉＋銅緑釉		瀬	40

図177　ＳＫ118出土陶磁器類実測図(4)

ＳＫ101：本遺構の時期は19世紀中葉に比定される。

出土遺物は口縁部破片数で9582点、総個体数810.42個体にのぼる。用途別の割合は、供膳具317.42個体、46.2％、調理具61.50個体、9.0％、貯蔵具89.25個体、13.0％、灯火具106.17個体、15.4％、火具22.92個体、3.3％、化粧具・喫煙具・調度具66.45個体、8.2％、神仏具22.69個体、2.8％、蓋123.66個体、15.3％である。これらの数値は今回の発掘調査で出土した江戸時代の遺物の組成比率とほぼ等しい状況を示している。反面、遺構が江戸時代末期であるということが影響してか、材質面からの組成比率は、陶器が593.75個体、73.3％、磁器が162.83個体、20.1％、土器が46.5個体、5.7％となっており、陶器・磁器製品が増加し、土器製品の消費量が減少していることが窺える。

器種の側面からは、椀と皿の比率が4.22：１とその差を広げており、この傾向は先にも述べたが、江戸時代初期は戦国時代と同様に椀と皿の比率は１：２前後であるのに対し、中期以降はその比率が逆転し、その比率差は拡大する傾向にある。

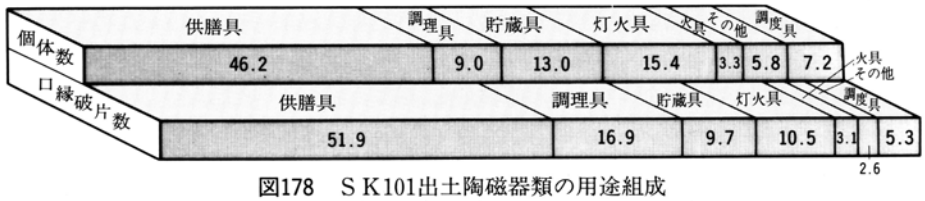
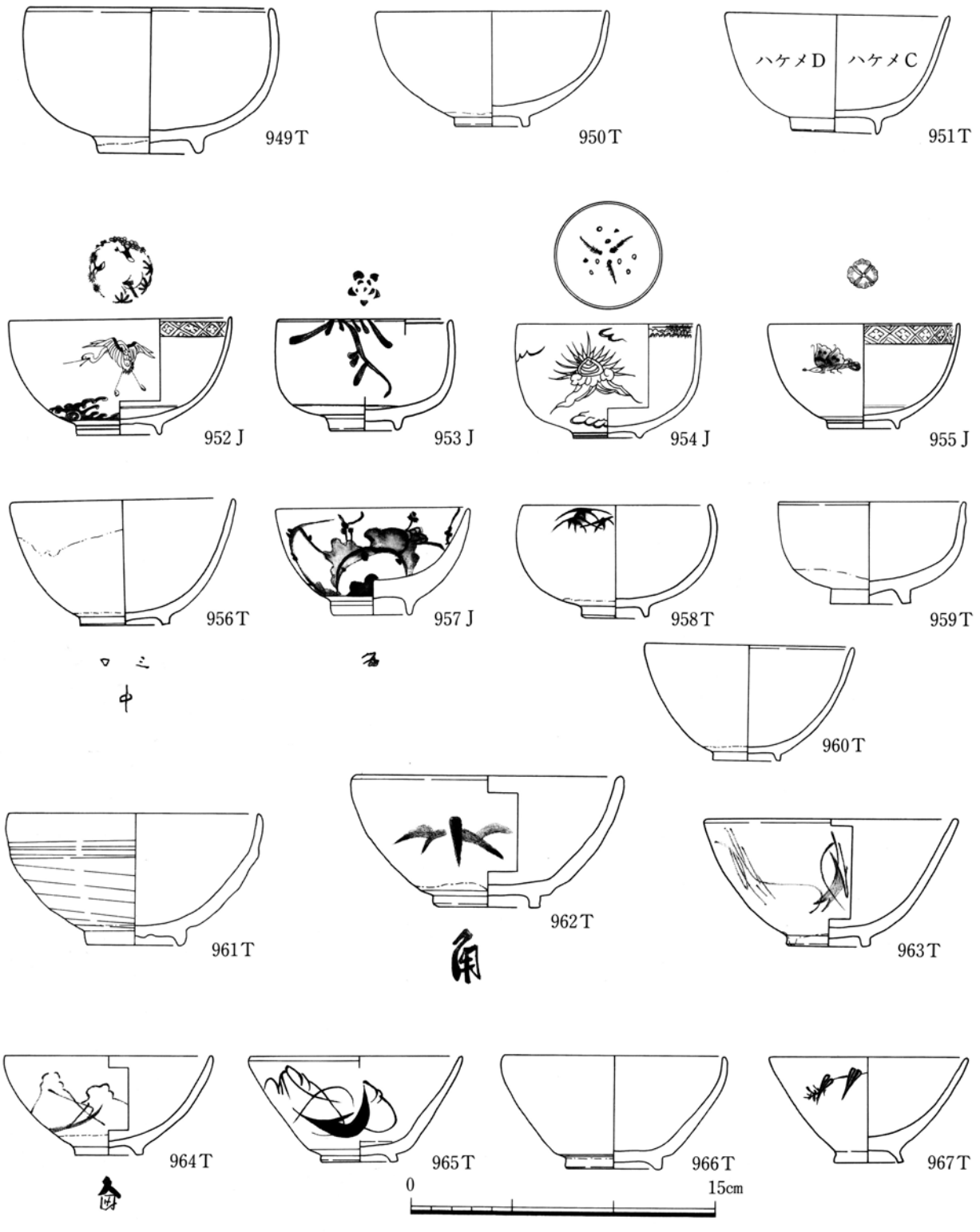


図178　ＳＫ101出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率 土器	陶器	磁器	その他	計	接合前口縁破片数 土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	2369	1438	2	3809	0	2856	1214	4	4074
	椀	0	1415	579	1	1995	0	1586	403	1	1990
	小椀	0	308	636	1	945	0	491	607	3	1101
	皿	0	545	152	0	697	0	624	155	0	779
	鉢	0	101	71	0	172	0	155	49	0	204
調理具		60	658	3	17	738	435	868	1	24	1328
	鍋，釜	60	193	0	17	270	435	257	0	24	716
	鉢	0	105	0	0	105	0	158	0	0	158
	擂鉢	0	87	0	0	87	0	244	0	0	244
	瓶	0	272	3	0	275	0	207	1	0	208
	その他	0	1	0	0	1	0	2	0	0	2
貯蔵具		7	993	71	0	1071	2	710	51	2	765
	瓶	0	299	7	0	306	0	79	2	1	82
	壷	7	171	0	0	178	2	90	0	1	93
	甕Ａ	0	120	0	0	120	0	169	0	0	169
	甕Ｂ	0	150	1	0	151	0	167	1	0	168
	鉢	0	253	63	0	316	0	205	48	0	253
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
灯火具		370	867	0	38	1275	571	244	0	10	825
火具		92	177	0	6	275	65	177	0	5	247
化粧具		0	37	92	0	129	0	30	27	0	57
神仏具		0	168	107	0	275	0	61	36	0	97
喫煙具		0	75	0	0	75	0	49	0	0	49
調度具		8	539	47	0	594	6	388	21	0	415
蓋		21	1267	196	0	1484	6	1630	88	1	1725
合計		558	7150	1954	63	9725	1085	7013	1438	46	9582

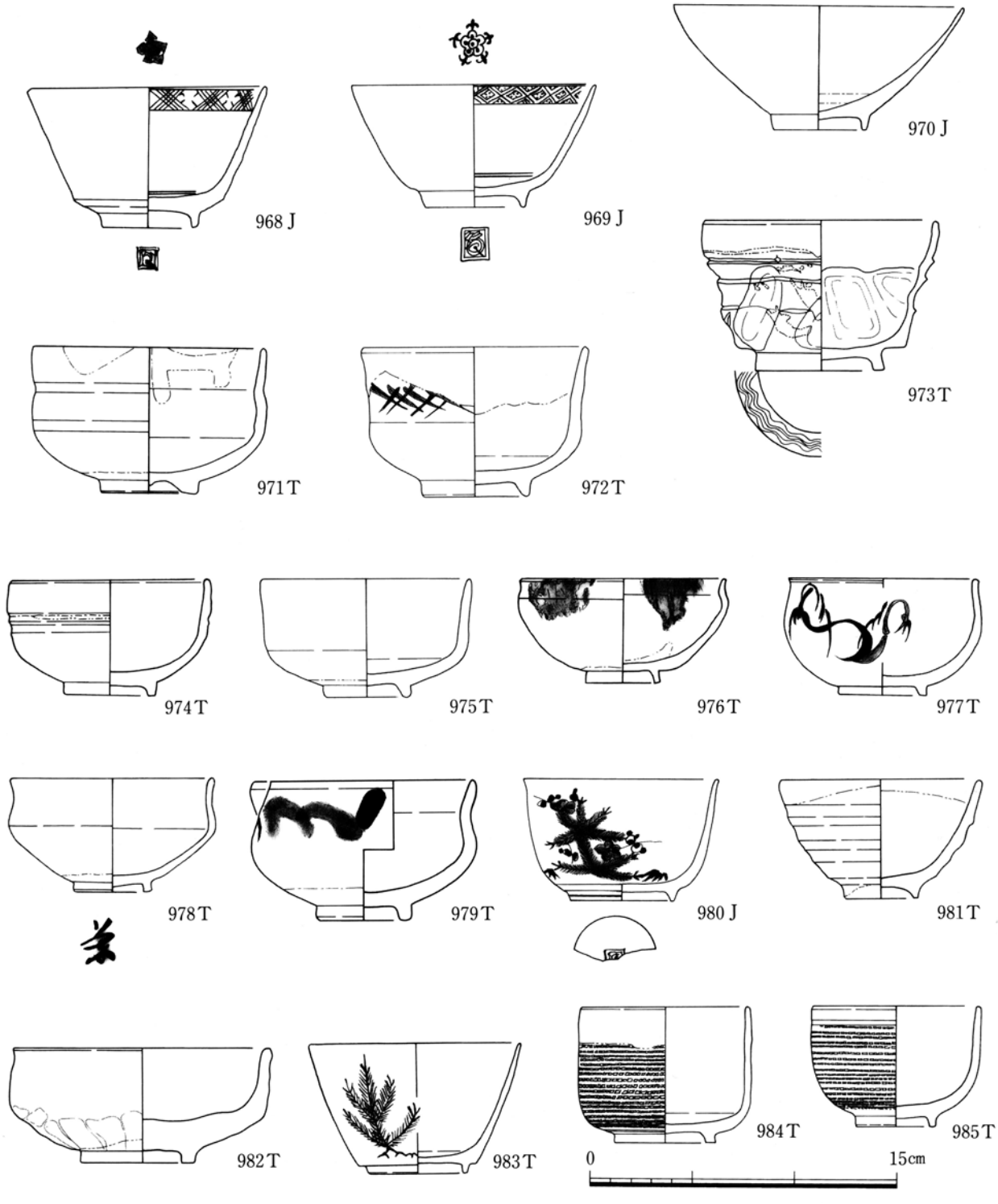
表34　ＳＫ101出土陶磁器類集計表



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
949	112	灰釉		瀬	22
950	112	透明釉		不	
951	112	灰釉	刷毛目	肥	22
952	112	染付	18C末～19C初 鵬に波濤文・環状松竹梅＋割小菱	肥	22
953	112	灰釉＋染付	草花文・五弁花	瀬	23
954	112	染付	1780～1810年代 雲竜宝珠文・重連弧文	肥	19
955	112	染付	1780～1810年代 菊と竹と蝶文・割小菱＋花(の)	肥	19
956	112	灰釉＋呉須	底部墨書	瀬	
957	112	染付	18C後半 梅樹文＋渦福	肥	19
958	112	灰釉＋鉄釉	笹文	瀬	23

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
959	112	鉄釉		瀬	23
960	112	鉄釉		瀬	
961	112	灰釉＋銅緑釉散らし		瀬	23
962	114	灰釉＋呉須絵	笹文、底部墨書	瀬	20
963	114	灰釉＋鉄絵	柳文、底部墨書痕	瀬	20
964	114	灰釉＋鉄絵	柳文、底部墨書	瀬	
965	114	灰釉＋鉄釉	柳文	瀬	20·23
966	110	灰釉		瀬	
967	110	灰釉＋鉄絵＋呉須絵	底部「錦光山」刻印、草文	京	

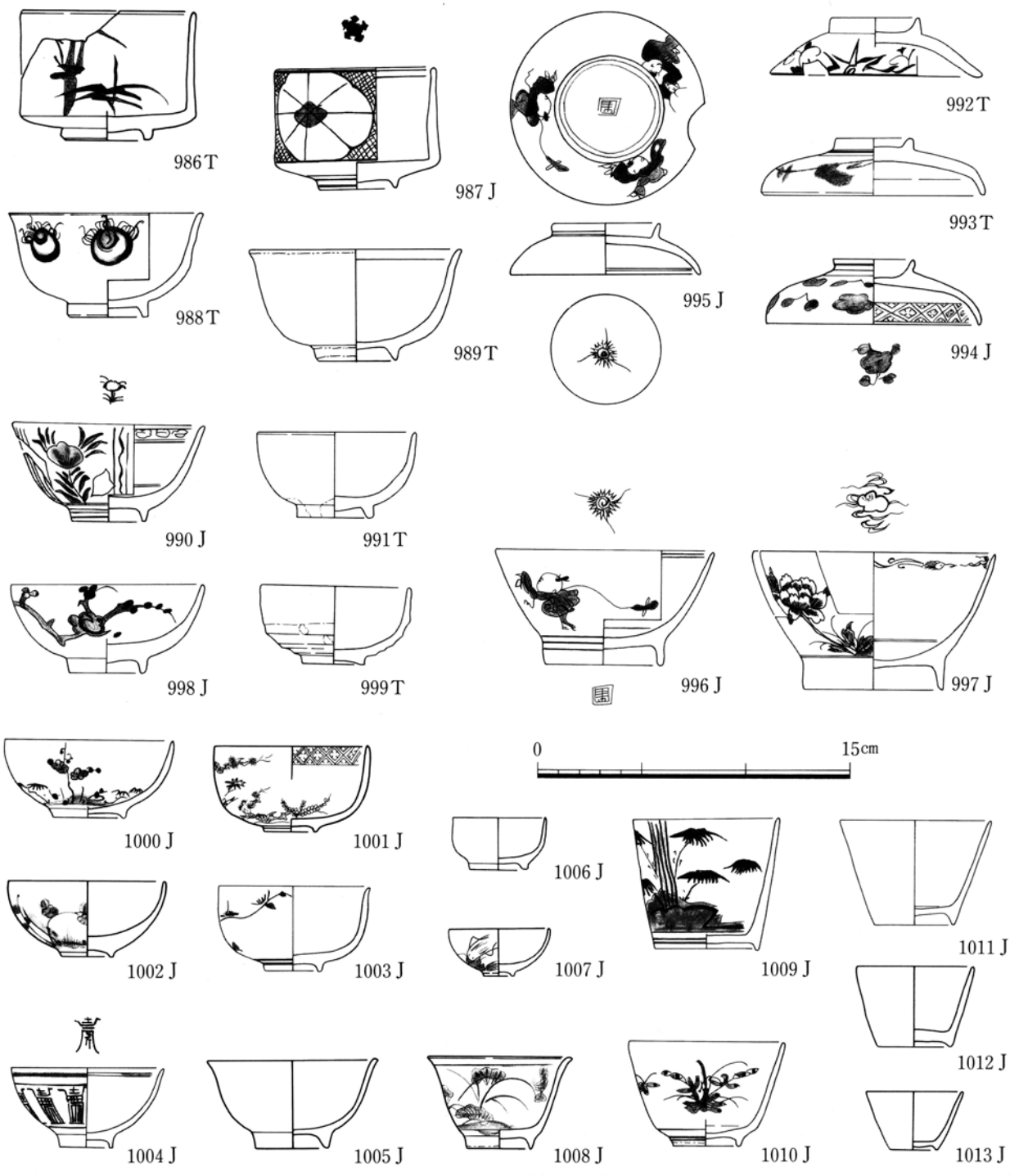
図179　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(1)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
968	114	青磁＋染付	18C中～後半　青磁＋二角渦福・割小菱＋五弁花（コンニャク印）	肥	
969	114	青磁＋染付	18C後半　青磁＋二角渦福・割小菱＋五弁花（コンニャク印）	肥	23
970	114	輪ハゲ	18C代 白磁・高台砂目痕	肥	
971	118	灰釉＋鉄釉		瀬	24
972	110	透明釉＋銅緑釉	斜格子文（鉄絵）	肥	24
973	110	灰釉＋鉄釉		瀬	21
974	118	長石釉＋鉄釉		瀬	19
975	113	灰釉		瀬	23
976	111	灰釉＋鉄釉流し掛け		瀬	22

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
977	116	灰釉＋呉須絵	柳文	瀬	21
978	113	灰釉	底部墨書「草」	瀬	23
979	116	灰釉＋鉄釉＋呉須		瀬	23
980	112	染付	18C前～1780年代 松竹梅文十二角渦福	肥	26
981	112	長石釉＋呉須		瀬	
982	110	長石釉＋鉄釉		瀬	24
983	117	灰釉＋呉須絵	小杉文	京	24
984	115	鉄釉＋灰釉		瀬	19
985	115	銅緑釉＋灰釉		瀬	19

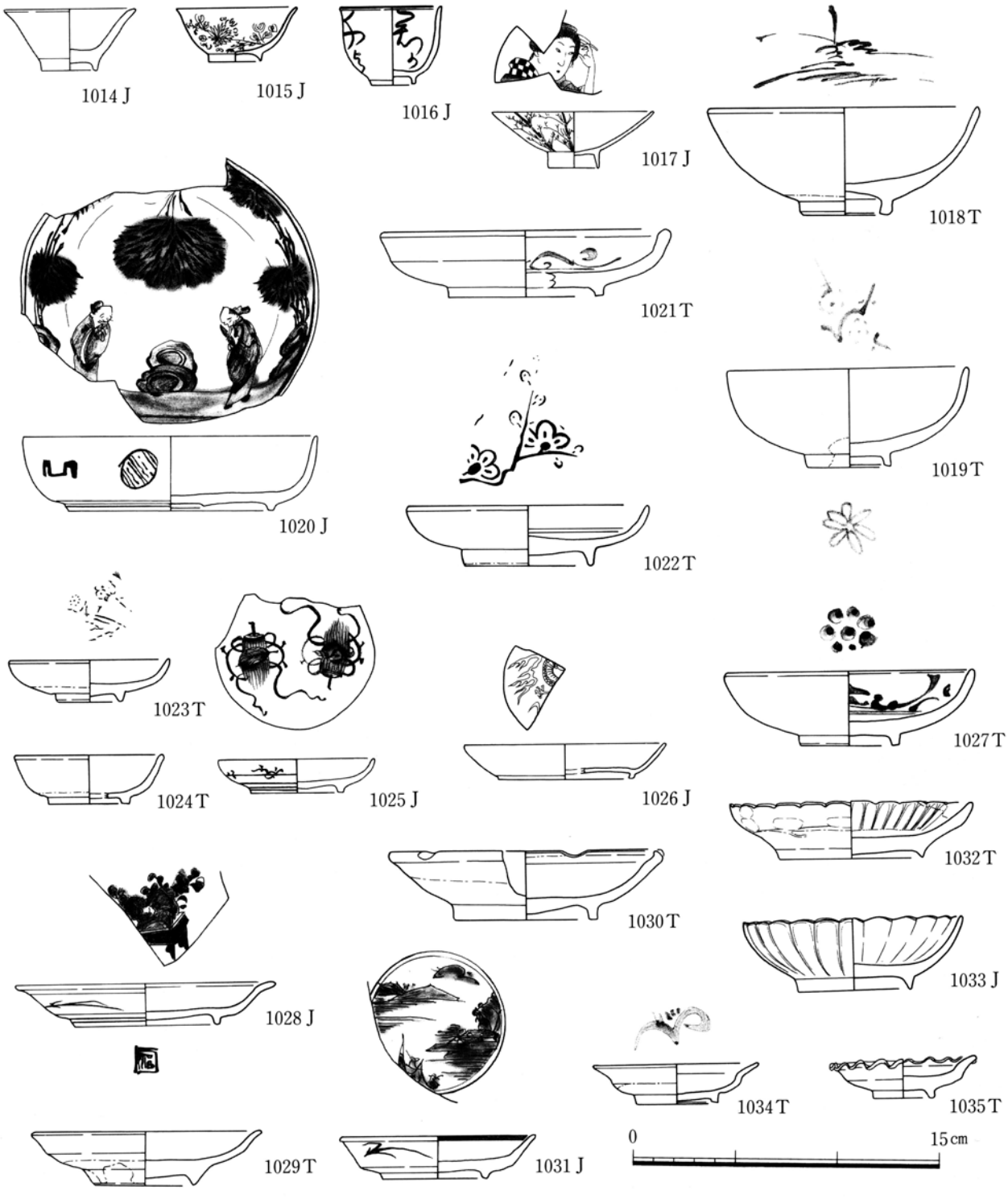
図180　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(2)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
986	115	灰釉＋鉄絵	竹文	瀬	20
987	115	染付	18C第4四半紀　菊花散らし・五弁花(コンニャク印)	肥	20
988	116	灰釉＋呉須絵＋鉄絵	宝玉文	瀬	
989	116	呉須	口銹、見込花文(か)	瀬	23
990	116	染付	19中～末 花弁文・渦巻(か)＋花弁文	瀬	23
991	122	灰釉		瀬	24
992	015	長石釉＋鉄絵	口銹、つる草文	瀬	25
993	015	長石釉＋鉄絵	黍文	瀬	
994	015	染付	18C後半～19C初 梅文散らし・割小菱＋梅花文	肥	25
995	015	染付	遊び唐子・火炎文	肥	28
996	117	染付	1780～1810年代　唐子(タコ遊び)＋二角身(か)・火炎文	肥	21
997	117	染付	1780～1810年代 柳・牡丹文・飛雲文	肥	
998	122	染付	18C後半 梅樹文	肥	23＋21
999	122	灰釉		瀬	24

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1000	122	染付	18C中～末 松竹梅文	肥	20
1001	122	染付	18C末～19C初　松竹梅文・割小菱＋環状松竹梅文	肥	
1002	122	染付	18C中～末 草花文	肥	
1003	122	染付	18C前半～中葉　唐草文(か)・五弁花(コンニャク印)	肥	
1004	122	染付	1780～1810年代 寿文・寿文	肥	20
1005	125		18C後半～19C 白磁・高台胎土目痕	瀬	
1006	122		17C末～18C前半 白磁	肥	
1007	122	赤絵	18C後半～19C初 海老文	肥	
1008	125	染付	17C末～18C前半 草花文	肥	25
1009	126	染付	18C中～末 竹文	肥	26
1010	127	染付	18C前半 蝶と草花文	肥	24
1011	126		18C前半～中 白磁	肥	
1012	126		18C 白磁	肥	
1013	126		18C 白磁	肥	

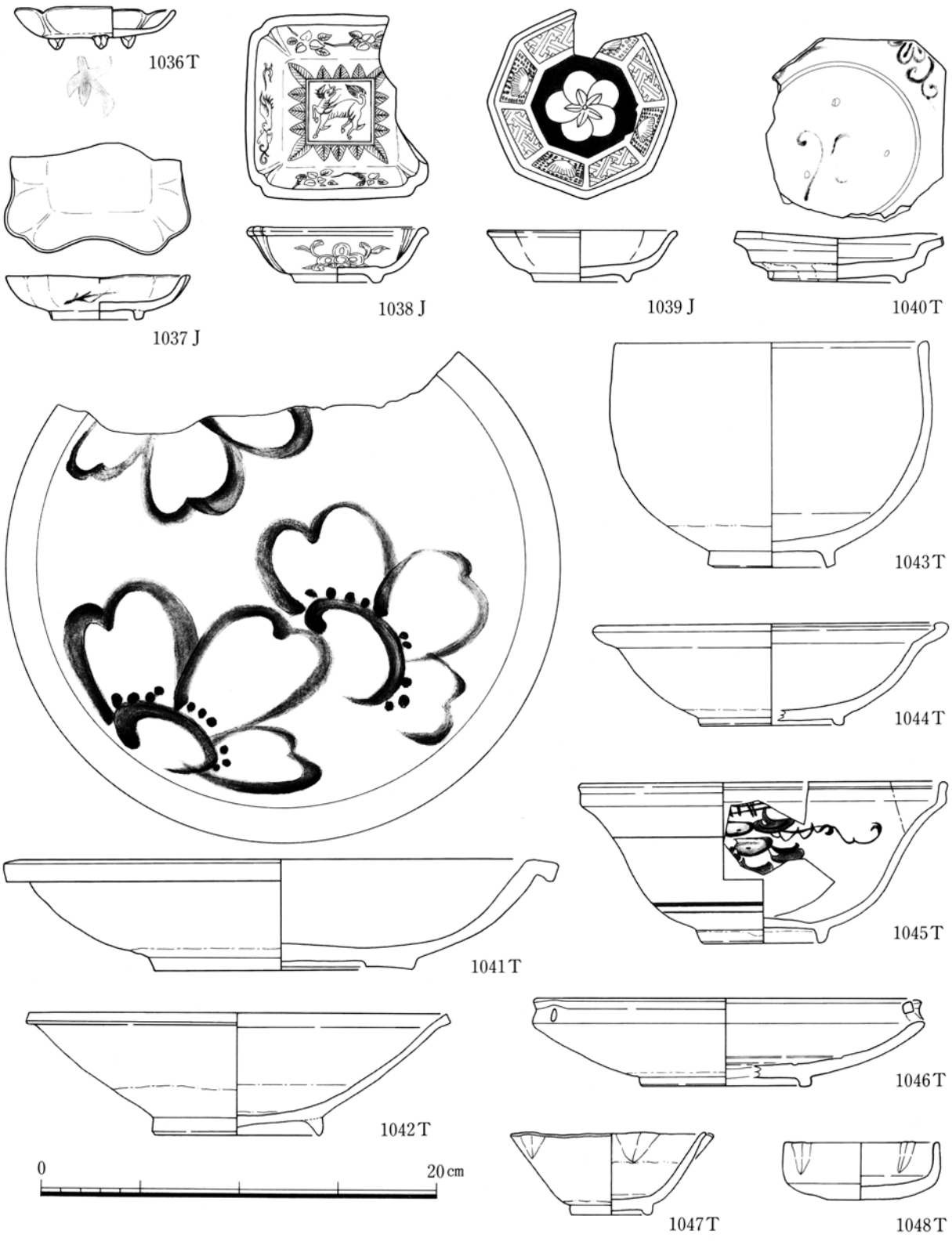
図181　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(3)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
1014	125		18C代 白磁	肥	
1015	125	赤絵	天保～19C中～幕末 蝶と菊花文	瀬	
1016	125	赤絵	18C 口絵、和歌（?）	肥	26
1017	123	染付	19中～末 竹文・美人画	瀬	
1018	131	灰釉＋鉄絵	山水文	肥	
1019	131	灰釉＋呉須絵＋鉄絵	底部墨書・梅文	瀬	30
1020	131	染付	凹形高台、蛇ノ目、18C末 幾何文・人物と岩に竹文	肥	25
1021	132	灰釉＋呉須絵	唐草文	瀬	
1022	131	灰釉＋呉須絵	梅樹文	瀬	25
1023	131	灰釉＋呉須絵	梅文	瀬	
1024	131	灰釉		瀬	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
1025	131	染付	18C前半　唐草文・宝（隠れ蓑に木槌・ホラ貝）文	肥	30
1026	131		竜文（スタンプ）	不	
1027	131	灰釉＋呉須絵	草花文＋梅文	瀬	30
1028	134	染付	1660～1680年代　ハリささえ 松葉文＋角福・花盆裁	肥	30
1029	132	灰釉		瀬	
1030	137	灰釉＋銅緑釉	流し掛け	瀬	30
1031	133	染付	18C後半～19C初 松葉文・山水楼閣文	肥	30
1032	135	灰釉＋銅緑釉流し掛け		瀬	
1033	135		18C前半 白磁	肥	
1034	134	灰釉＋呉須絵	草花文	瀬	
1035	137	灰釉		瀬	

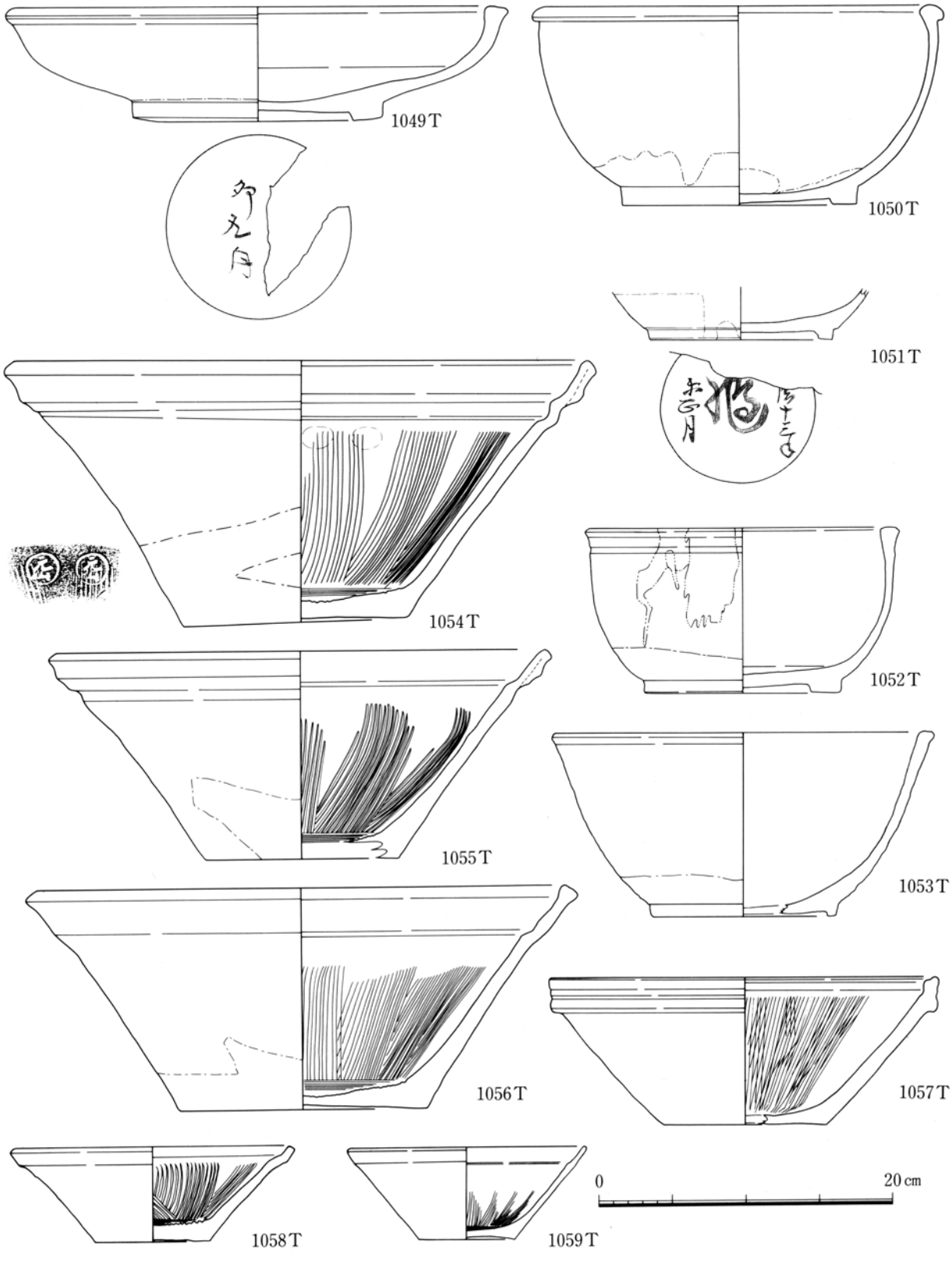
図182　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(4)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
1036	136	灰釉	底部墨書「大」(カ)	瀬	31
1037	136	染付	1690～18C前半 松葉文	肥	
1038	136		白磁、厚角杯＋ 四弁花・鳳凰＋キリン文	瀬	
1039	136	呉須	花弁と菱卍＋ねじ梅文	瀬	
1040	134	灰釉＋鉄絵	草花文	瀬	30
1041	134	長石釉＋鉄絵＋呉須絵	桜花文	瀬	30
1042	132	輪ハゲ、灰釉		瀬	32

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
1043	131	灰釉		瀬	32
1044	133	鉄釉		瀬	32
1045	133	長石釉＋鉄絵	朝顔文(カ)	瀬	
1046	130	灰釉	見込沈線	京	
1047	136	灰釉＋呉須掛け流し	見込使用痕、五角形	瀬	
1048	136	灰釉		瀬	

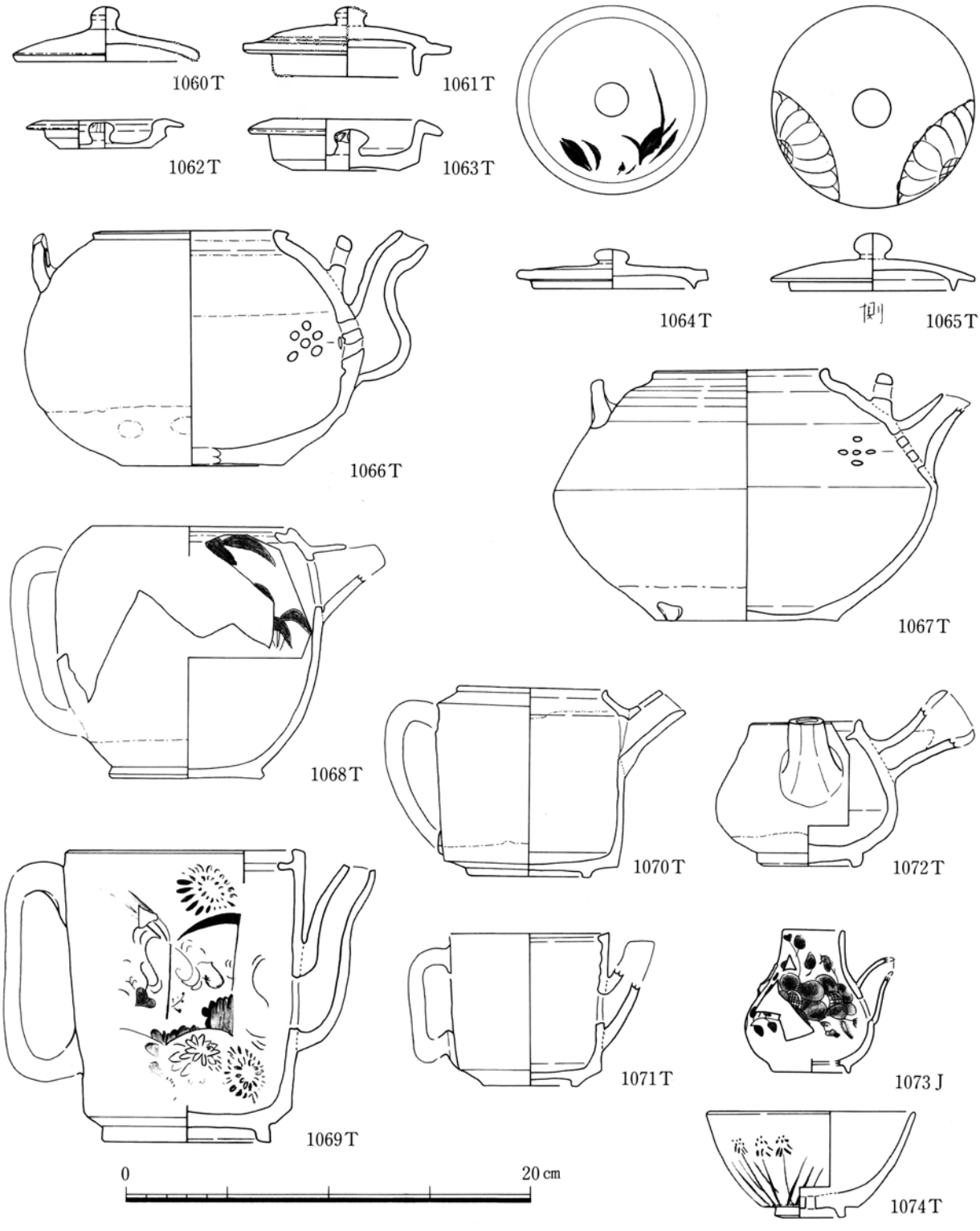
図183　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(5)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
1049	131	灰釉	墨書「卯九月」	瀬	
1050	222	灰釉		瀬	32
1051	222	灰釉	墨書「(宝)暦十三年鳩未正月」	瀬	
1052	222	灰釉＋鉄釉＋銅緑釉	流し掛け	瀬	32
1053	222	鉄釉		瀬	
1054	236	鉄釉	「元山」(刻印)	瀬	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
1055	236	鉄釉		瀬	
1056	237	鉄釉		瀬	
1057	239			堺	
1058	237	鉄釉		瀬	
1059	237	鉄釉		瀬	

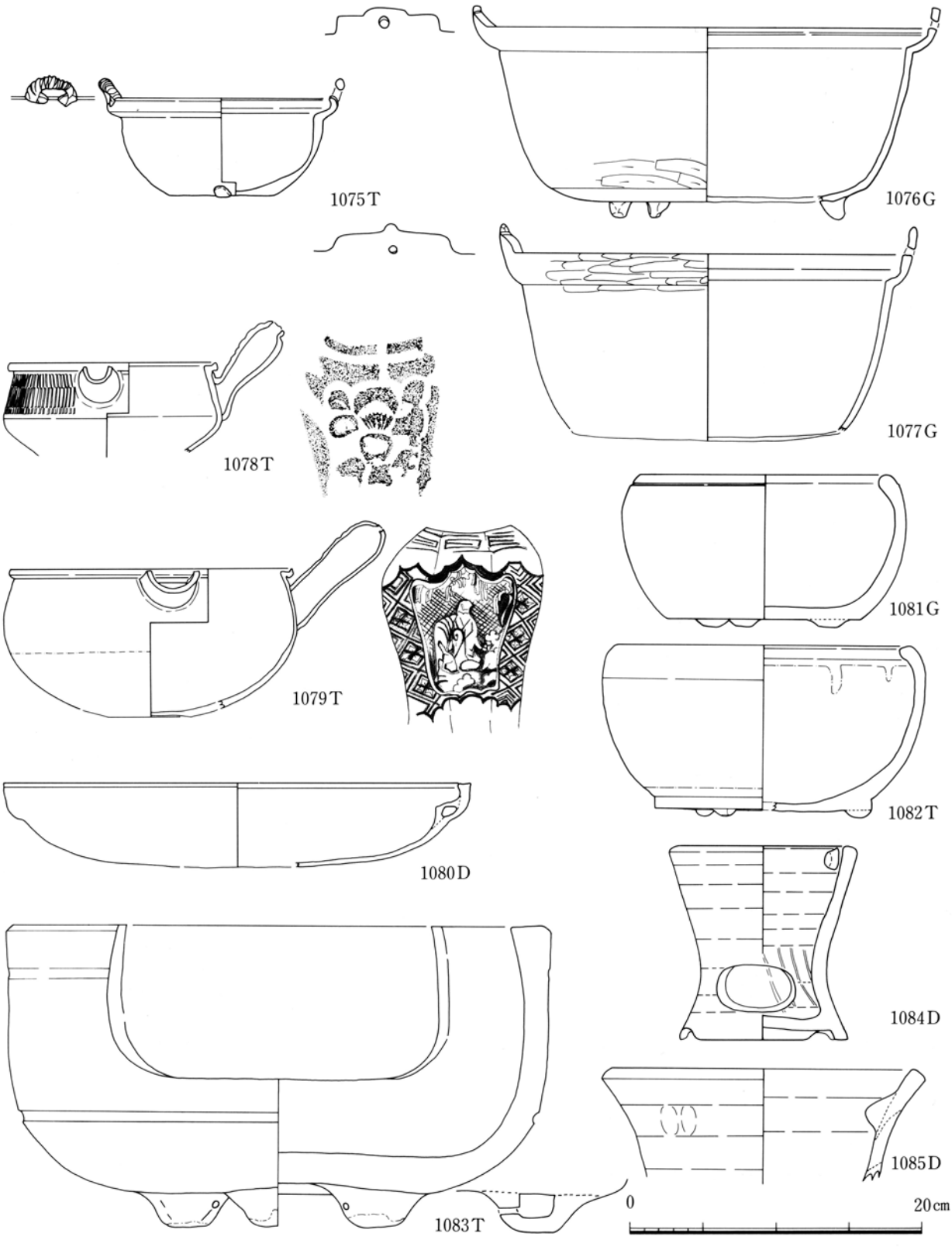
図184　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(6)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
1060	013	灰釉		瀬	
1061	014	鉄釉		瀬	
1062	012	鉄釉		瀬	
1063	012	灰釉		京	43
1064	014	灰釉＋鉄絵	草花文	肥	44
1065	014	灰釉＋鉄絵	菊花文・墨書「側」	京	44
1066	241	鉄釉		瀬	33
1067	241	鉄釉	底部煤付着	瀬	33

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
1068	242	灰釉＋鉄絵＋呉須絵	草花文	京	33
1069	318	灰釉＋鉄絵	本に菊花文(か)	瀬	36
1070	242	鉄釉		瀬	33
1071	318	灰釉		瀬	
1072	243	鉄釉＋鉄釉	流し掛け	瀬	33
1073	319	染付	19C 格文	肥	
1074	200	長石釉＋鉄絵	菖蒲文、マンジュウ蒸し器	瀬	33

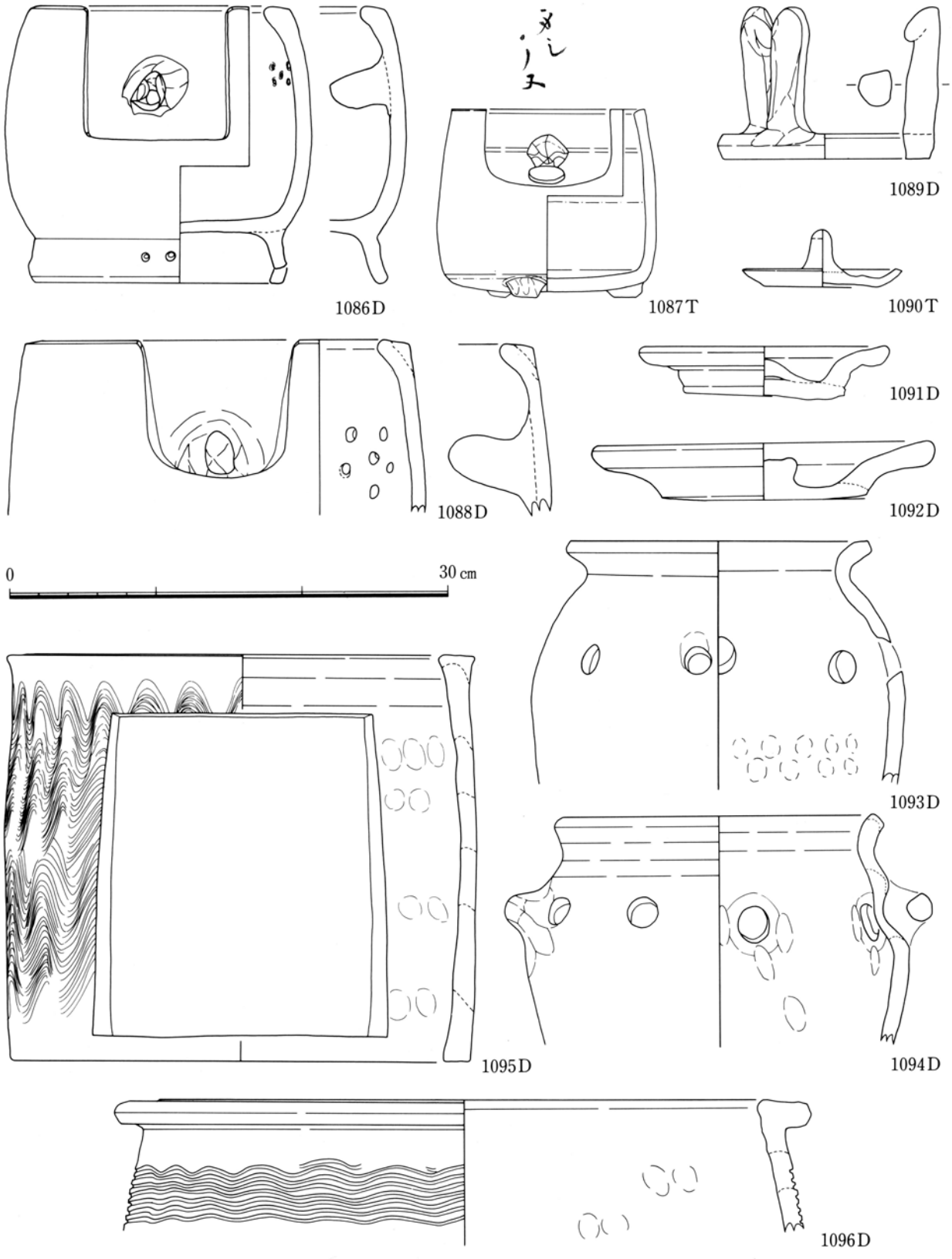
図185　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(7)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
1075	215	鉄釉		瀬	
1076	215			不	
1077	215			不	
1078	214	鉄釉	体部下半煤付着	不	32
1079	214	灰釉	唐人(型押)、体部下半煤付着	京	32
1080	213			不	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
1081	511		瓦質	不	39
1082	511	鉄釉	口縁敲打痕	瀬	39
1083	513	鉄釉		瀬	
1084	515			不	39
1085	515			常	

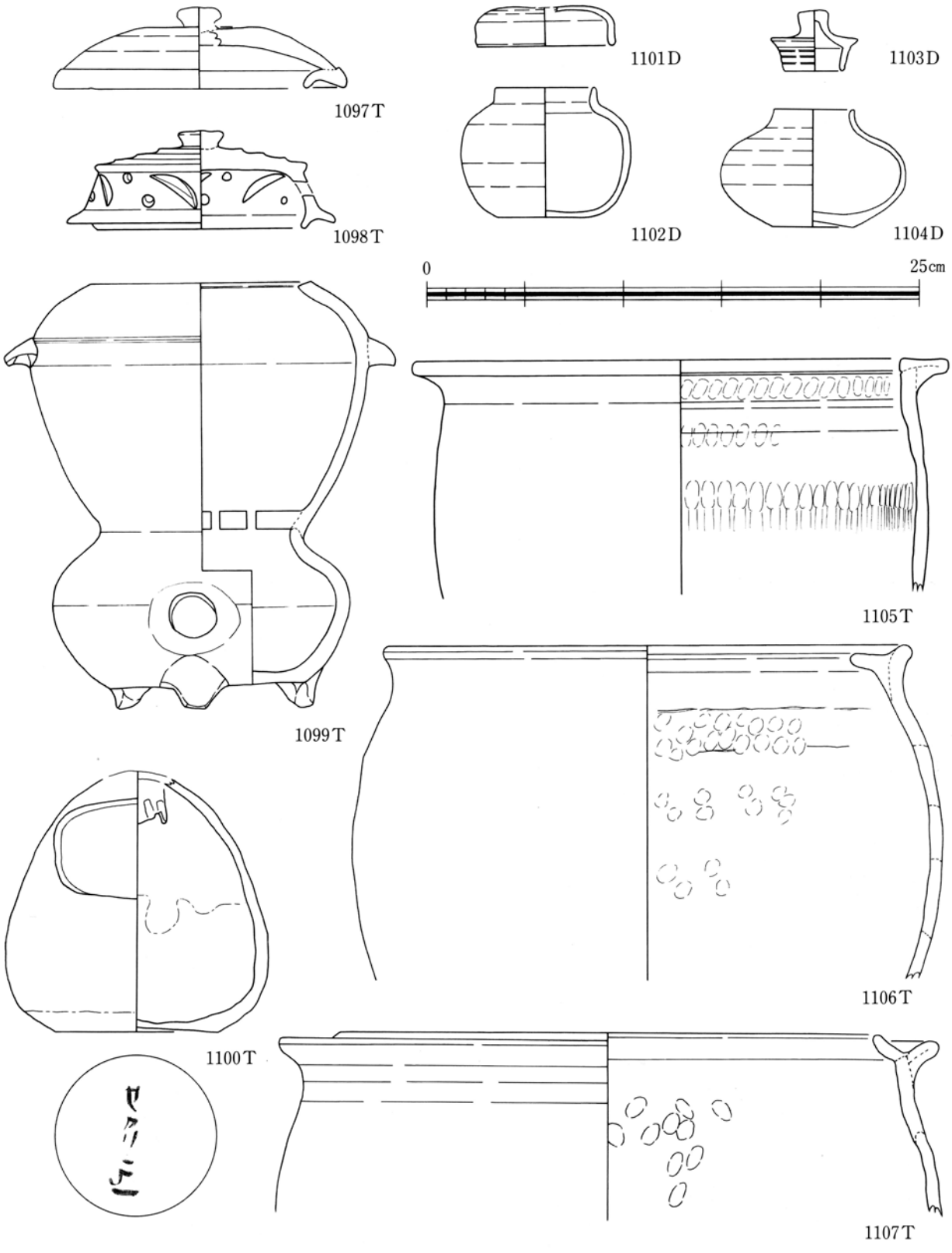
図186　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(8)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
1086	513		内面煤付着	不	
1087	513	鉄釉	内底面墨書	瀬	39
1088	513			不	
1089	501			瀬	
1090	011		焼締	常	43
1091	011			常	43

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
1092	011		底部煤付着	瀬	43
1093	516		内面煤付着、孔７ヶ所	常	
1094	516		内面煤付着、孔６ヶ所(か)	不	
1095	531		外面口縁一部煤付着	不	
1096	532		内面部分的に煤付着	不	

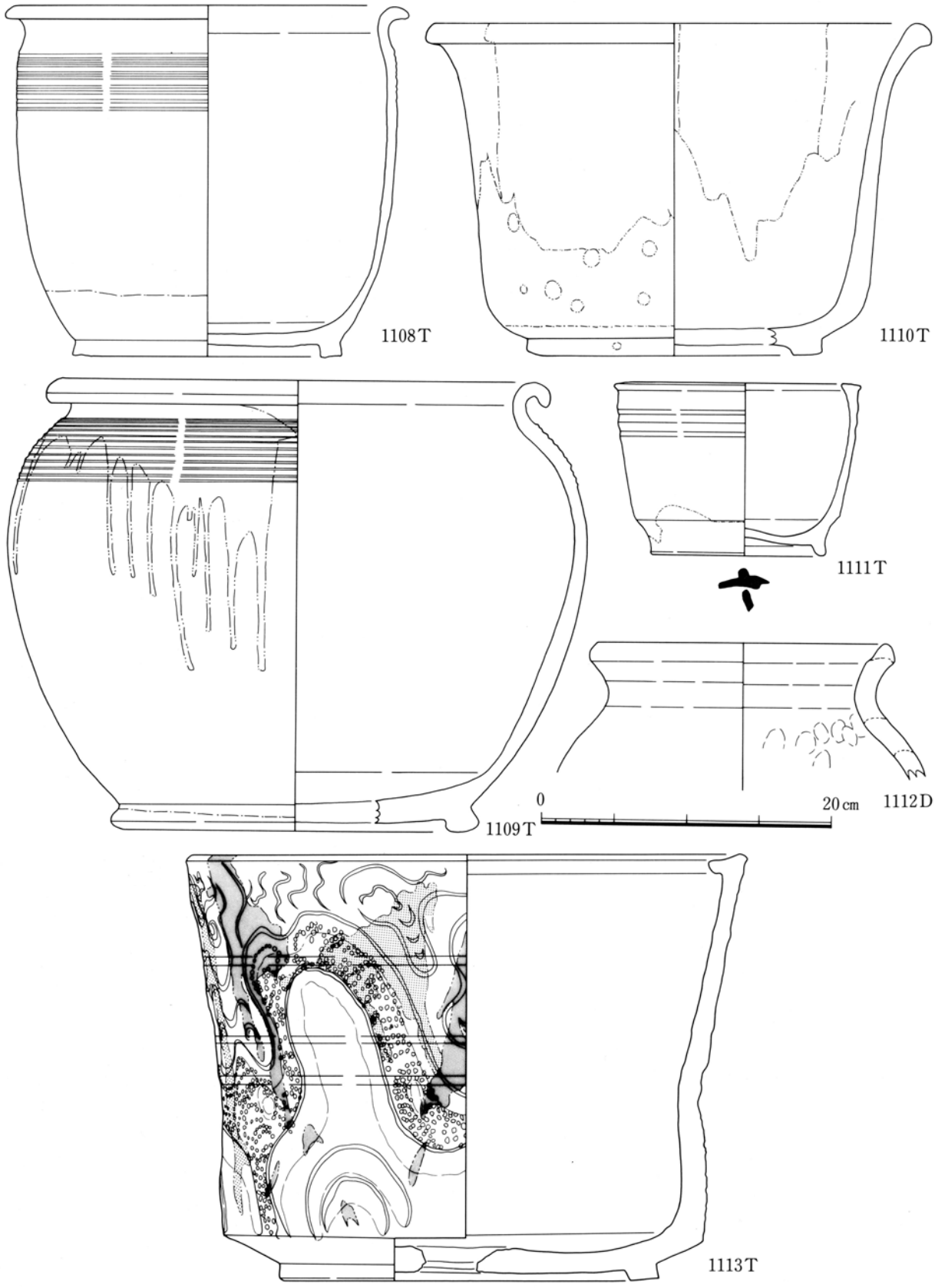
図187　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(9)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
1097	014		内面煤付着	瀬	
1098	019		返し部周辺煤付着、スカシ7ケ所	瀬	39
1099	516		内面煤付着	瀬	39
1100	510	灰釉	墨書	瀬	
1101	016		内面被熱	不	
1102	521		内面から外口縁被熱	不	39

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
1103	014			不	44
1104	521		内面煤付着	不	39
1105	335		外面暗赤褐色、内面明赤褐色	常	
1106	332		外面赤褐色、内面明赤褐色	常	
1107	333		外・内面浅黄橙色	常	

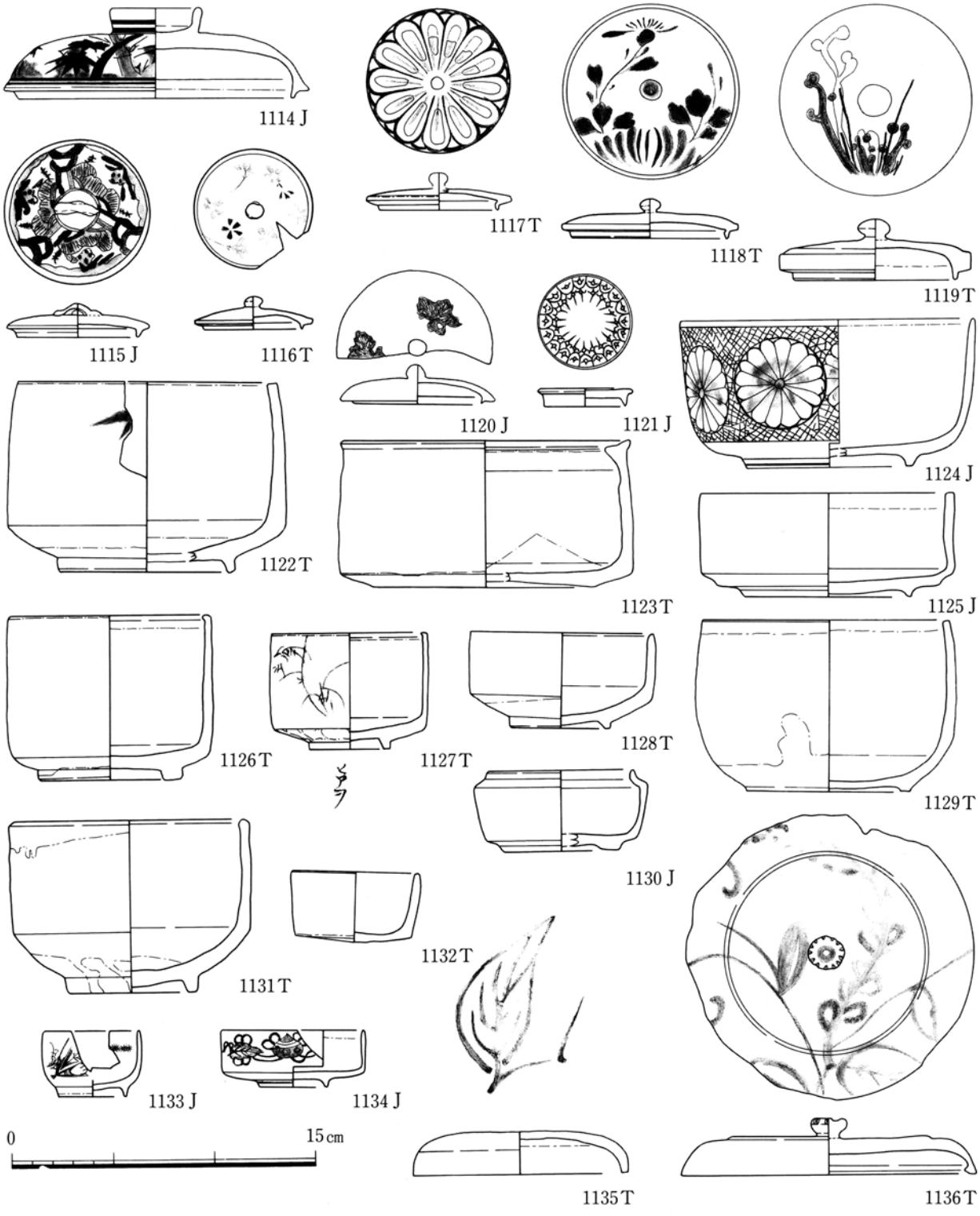
図188　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(10)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
1108	344	鉄釉		瀬	37
1109	344	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	
1110	952	灰釉＋銅緑釉＋長石釉＋鉄釉		瀬	43

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
1111	337	鉄釉	墨書「＋」	瀬	
1112	325			常	
1113	913	灰釉＋鉄釉＋銅緑釉	底部穿孔	瀬	43

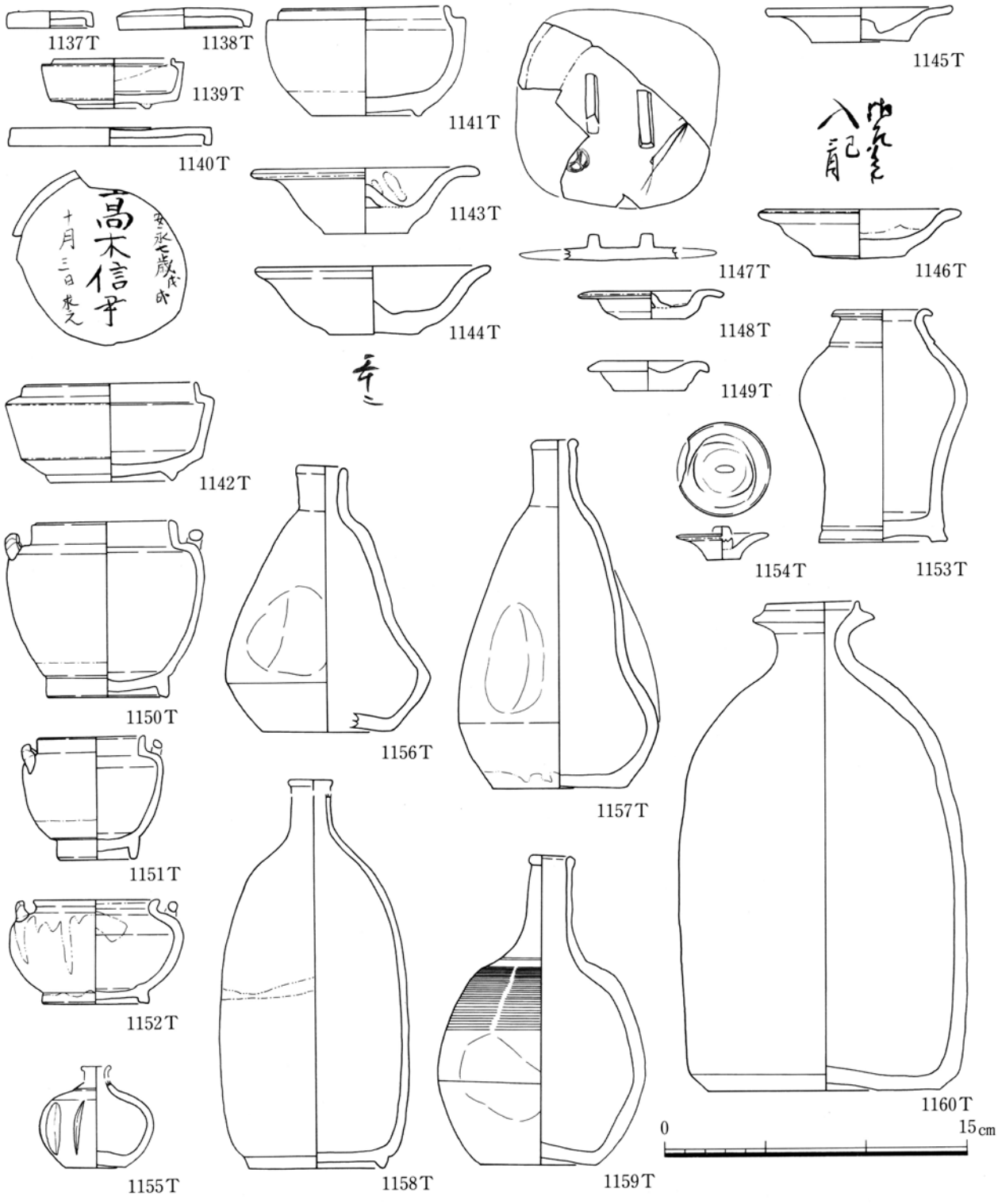
図189　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(11)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
1114	014	染付	1690～18C前半 竹文	肥	
1115	014	染付	18C後半　岩に草木、返し部墨付着	肥	44
1116	014	上絵付	桜文	肥	44
1117	014	灰釉＋鉄絵＋呉須絵	菊花文	京	44
1118	014	上絵付	菊花文	京	44
1119	014	灰釉＋鉄絵	早蕨文	京	44
1120	014	染付	1690～18C前半　五・三桐文(コンニャク印)	肥	44
1121	017	染付	19C中 輪宝つなぎ文	肥	35
1122	351	灰釉＋呉須絵	竹文(か)	瀬	
1123	351	鉄釉		瀬	41
1124	351	染付	18C前半～中 菊花散らし	肥	37
1125	351	呉須	18C中葉～末 呉須ダミ	肥	37

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
1126	351	灰釉		瀬	37
1127	351	灰釉＋鉄絵	竹文、底部墨書	瀬	37
1128	351	灰釉		瀬	
1129	351	灰釉		瀬	37
1130	350		17C末～18C前半、白磁	肥	
1131	441	鉄釉＋長石釉		瀬	37
1132	351	灰釉		瀬	
1133	351	赤絵	17C末～18C前半 脇に菊花文(6)	肥	
1134	351	染付	18C後半 宝(宝珠・木葉)文	肥	
1135	016	染付	木の葉文	瀬	
1136	018	染付	草花文	瀬	44

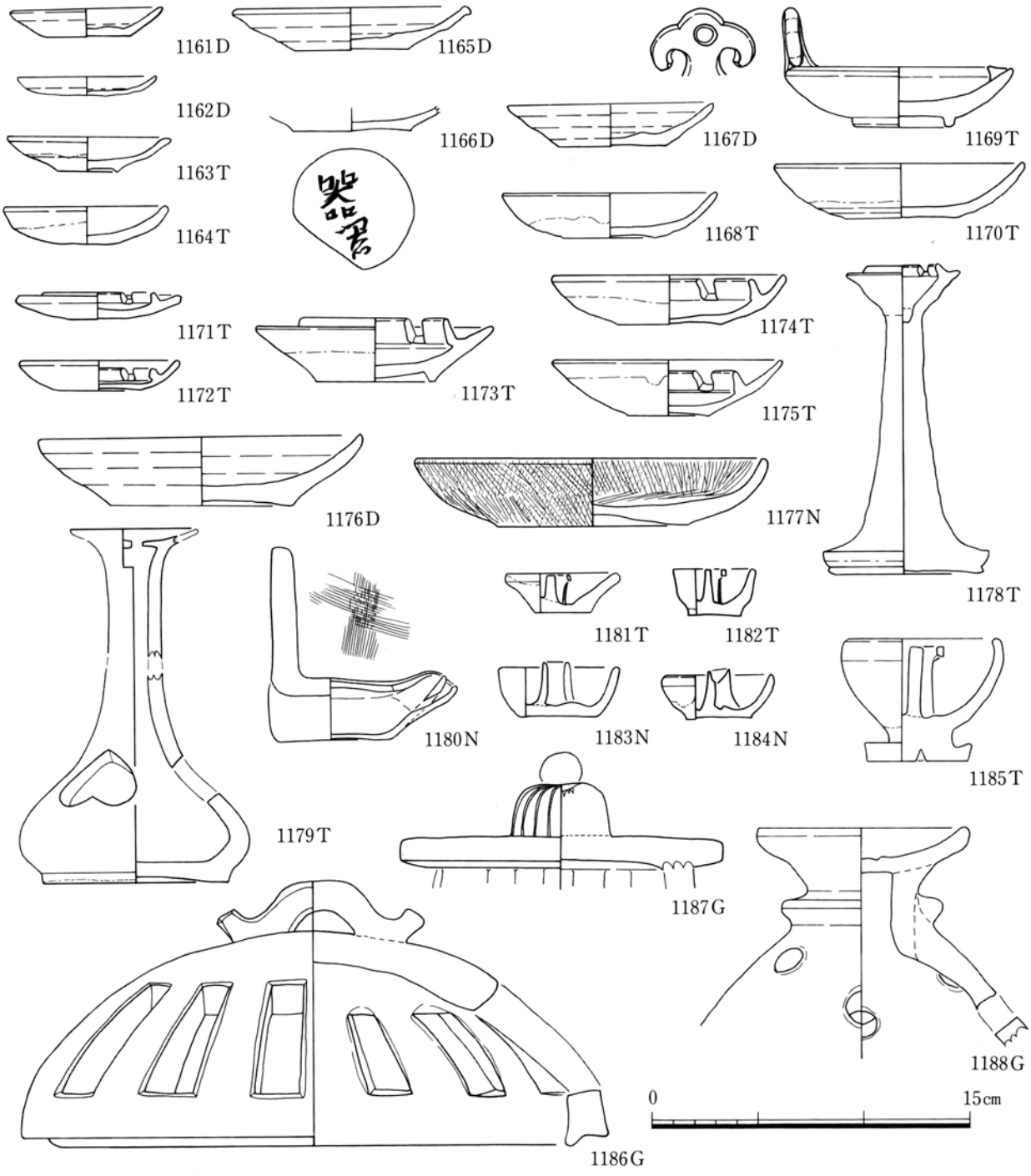
図190　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(12)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
1137	016	灰釉	内面墨書	瀬	
1138	016	灰釉		瀬	
1139	740	灰釉		瀬	37
1140	016	灰釉		瀬	
1141	352	灰釉		瀬	37
1142	352	灰釉		瀬	38
1143	011	灰釉＋鉄釉		瀬	
1144	011		墨書「三十二」	瀬	
1145	011			瀬	43
1146	011	灰釉	墨書「御□□□八㐂月」	瀬	
1147	013	灰釉＋銅緑釉＋長石釉	松葉文	瀬	
1148	012	灰釉		瀬	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
1149	011	鉄釉		瀬	
1150	321	灰釉		瀬	
1151	321	灰釉		瀬	36
1152	321	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	36
1153	322	鉄釉		瀬	36
1154	011	灰釉	象眼	肥	
1155	320	鉄釉		不	36
1156	313	灰釉		瀬	33
1157	313			瀬	33
1158	311	鉄釉＋灰釉		瀬	33
1159	314	鉄釉		瀬	36
1160	316	鉄釉		瀬	36

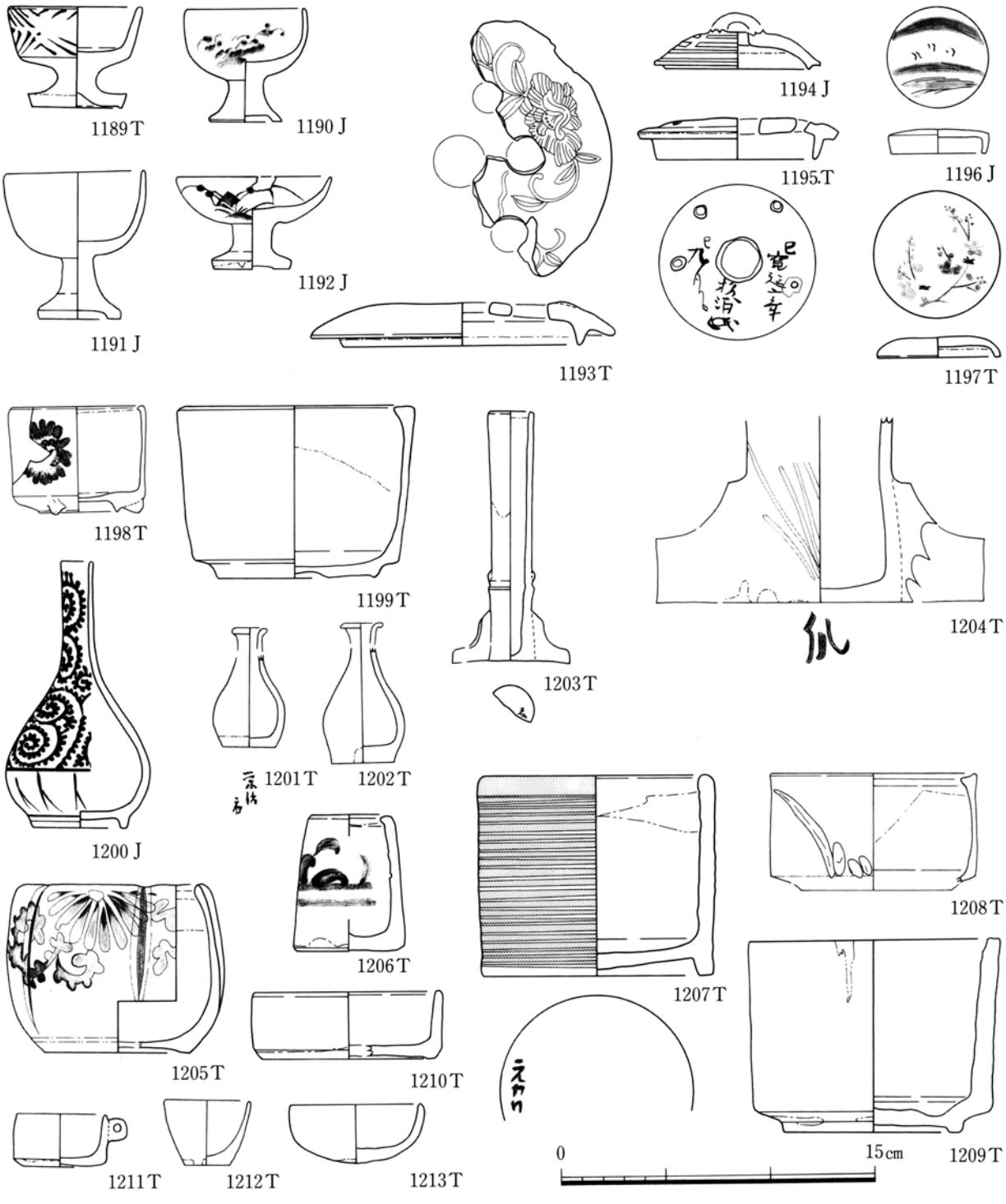
図191　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(13)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
1161	411		内底面被熱	不	38
1162	411		口縁１ヶ所油煙付着	不	38
1163	411	灰釉		瀬	
1164	411	長石釉		瀬	38
1165	411	底部糸切り	口縁２ヶ所油煙付着	不	38
1166	131	底部糸切り	墨書「器器」呪具カ	不	41
1167	411	底部糸切り	内面油煙付着	不	
1168	411	鉄釉		瀬	38
1169	410	長石釉		瀬	38
1170	411	長石釉		瀬	
1171	412	灰釉		瀬	
1172	412	鉄釉		瀬	
1173	412	長石釉		瀬	38
1174	412	鉄釉		瀬	38

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
1175	412	長石釉		瀬	
1176	411	底部糸切り	内面油煤付着	不	38
1177	413	黄釉	胎土赤褐色、底部一方向ヘラケズリ	京	
1178	410	鉄釉	底部墨痕あり	瀬	38
1179	441	銅緑釉		瀬	39
1180	420	黄釉	胎土白色　口縁油煙付着、見込ハケ目	京	
1181	423	灰釉		瀬	
1182	423	灰釉		瀬	38
1183	425	黄釉	胎土褐色	不	38
1184	425	黄釉	胎土赤褐色	京	
1185	422	鉄釉		瀬	38
1186	019		瓦質、煤付着、マド14ヶ所	不	
1187	310			不	39
1188	431		瓦質	不	39

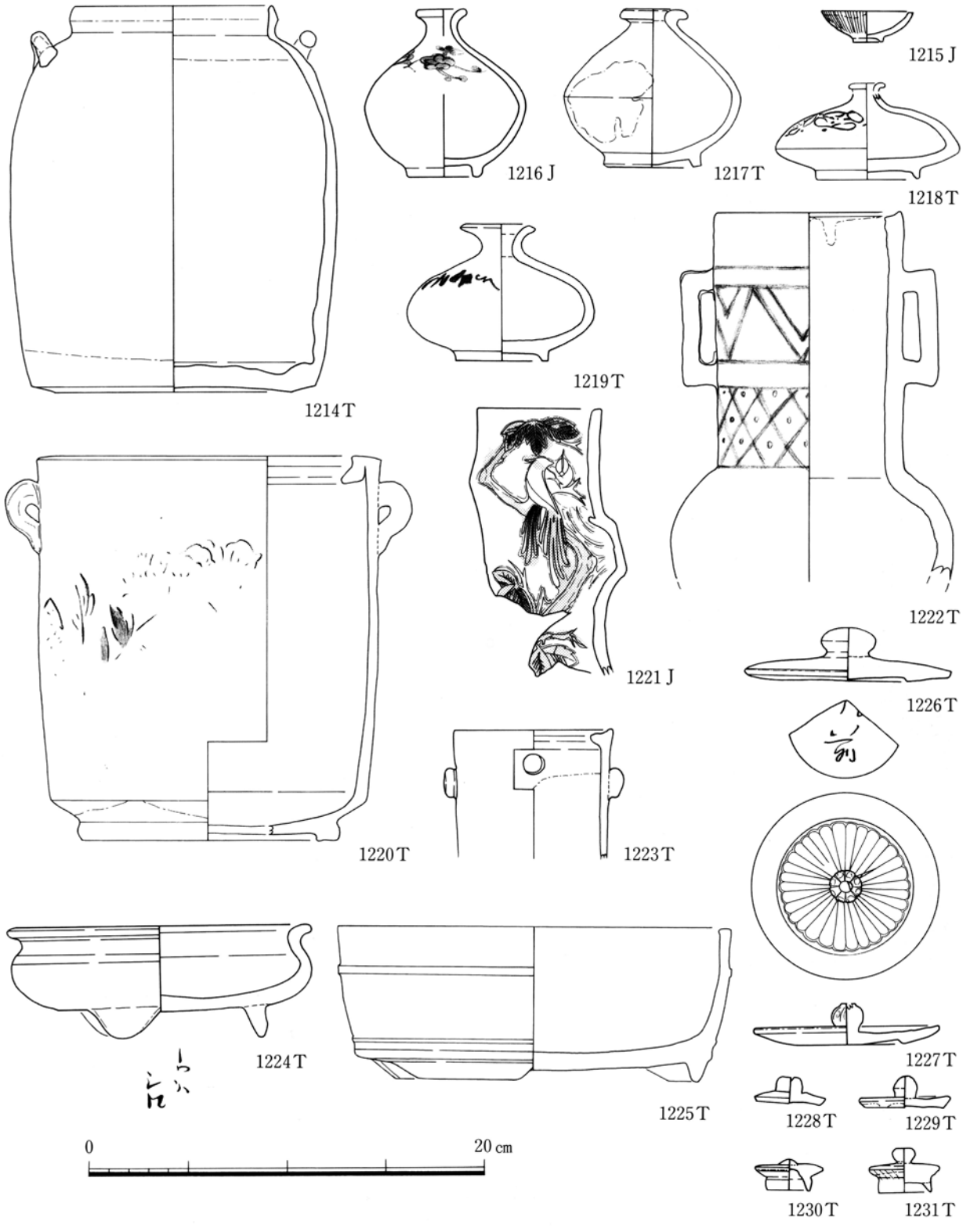
図192　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(14)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1189	730	灰釉＋呉須絵	幾何文	瀬	41
1190	730	染付	18C代 草花文	肥	
1191	730		18C代 白磁	瀬	
1192	730	染付	18C代 草花文	瀬	
1193	019	灰釉	牡丹唐草文	瀬	44
1194	014	灰釉＋鉄絵	17C中～17C後半 雲木文	肥	
1195	019	長石釉	墨書「□寛永二年松浦□九月□日」	瀬	44
1196	016	染付	19C 山水文	肥	
1197	016	上絵付	梅樹文	瀬	
1198	721	灰釉	菊花文	京	41
1199	721		17C末～18C前半 青磁、高台部鉄釉	肥	41
1200	711	染付	18C後半～19C初 蛸唐草文	肥	
1201	712	灰釉	底部墨書「栄治郎」	瀬	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1202	712	灰釉		瀬	
1203	750	灰釉＋銅緑釉	外面白泥化粧、墨書	京	
1204	750	灰釉	墨書「爪」	瀬	
1205	810	灰釉＋(上絵付)	菊花唐草文、五角形	京	41
1206	820	灰釉＋呉須絵	草花文	瀬	42
1207	811	長石釉＋サビ釉	口縁敲打痕、墨書痕、カキオトシ	瀬	41
1208	812	鉄釉	口縁敲打痕	瀬	
1209	810	鉄釉	口縁敲打調整、再利用	瀬	41
1210	921	灰釉	外底部墨書	瀬	42
1211	921	灰釉		瀬	42
1212	126	灰釉		瀬	
1213	921	灰釉		瀬	

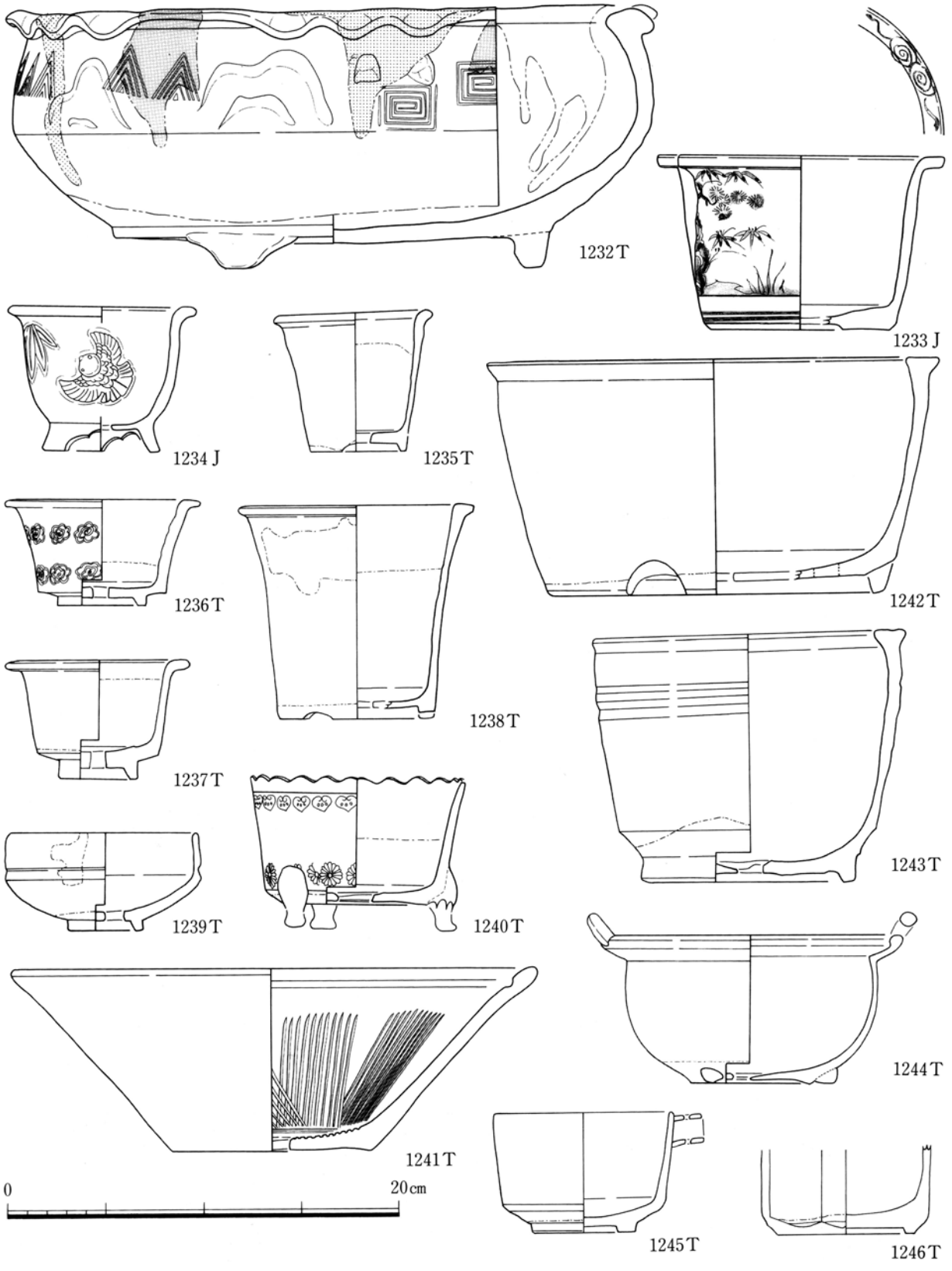
図193　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(15)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1214	621	鉄釉	内面酸化鉄分付着	瀬	
1215	610		18C後半～19C後半 白磁	肥	
1216	622	染付	18C中～末 梅文	肥	
1217	622	灰釉＋銅緑釉		瀬	39
1218	622	灰釉＋呉須絵	七宝文	瀬	
1219	622	灰釉＋鉄絵		瀬	39
1220	941	灰釉＋鉄絵	牡丹文	瀬	43
1221	931	染付	18C前半～中 木に鳥文	肥	
1222	932	長石釉＋呉須絵	幾何文	瀬	42

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1223	931	鉄釉		瀬	
1224	722	灰釉＋銅緑釉流し掛け	底部墨書	瀬	
1225	943	灰釉		瀬	
1226	013	灰釉	墨書「口前」	瀬	
1227	013	鉄釉	菊花文(スタンプ・花弁線毛彫り)	瀬	43
1228	013	鉄釉		瀬	
1229	013	灰釉		瀬	
1230	014	灰釉	内面墨痕	瀬	
1231	014	鉄釉		瀬	

図194　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(16)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1232	943	灰釉+鉄釉+銅緑釉	五重凹線+雷と山文	瀬	
1233	913	染付	18C中～末 唐草文+松竹梅文	肥	40
1234	914	ルリ釉	19C中葉以降 竹に雀文	瀬	40
1235	911	鉄釉		瀬	42
1236	914	銅緑釉	印花文	瀬	40
1237	911	長石釉		瀬	
1238	911	灰釉+呉須流し掛け		瀬	42
1239	913	灰釉+鉄釉	底部穿孔	瀬	23

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1240	913	長石釉	印花文、焼成後穿孔	瀬	42
1241	913	鉄釉	焼成後穿孔	瀬	
1242	911	鉄釉		瀬	
1243	912	鉄釉	焼成後穿孔	瀬	36
1244	913	鉄釉	底部穿孔	瀬	
1245	901	鉄釉		瀬	43
1246	902	灰釉	練り込み	瀬	42

図195　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(17)

ＳＫ333：本遺構の時期は19世紀中葉に位置づけられる。

本遺構の出土遺物は口縁部破片数で4019点、総個体数で456.08個体である。用途による占有率は供膳具が164.67個体、41.5％と最も多く、ついで蓋が59.0個体、12.9％、貯蔵具が58.42個体、14.7％の順となっている。蓋については江戸時代を通じて比較的多くの出土量を維持し続けている。この遺構では供膳具に次いで高い割合を示しているが、これはこの遺構におけるその他の用途の遺物の比率が低いためであり、蓋の出土量が江戸時代の平均値と比較しても決して多い訳ではない。また貯蔵具に関しては、平均値より多く出土しており、これは甕Ｂの多さに起因している。

材質面では磁器製品が100.33個体、22.0％を占め、やはりその比率が高い状態を維持している。これはこの時期すでに瀬戸・美濃窯での磁器生産が開始されており、その影響がこうした材質面での比率の変化を起こさせている一因であると考えられる。

器種別では、椀と皿は3.85：１と４倍近い比率差が認められる。また、調理具の鍋・釜が多く出土しているのに対し、擂鉢が少量である点はこの遺構の特徴である。

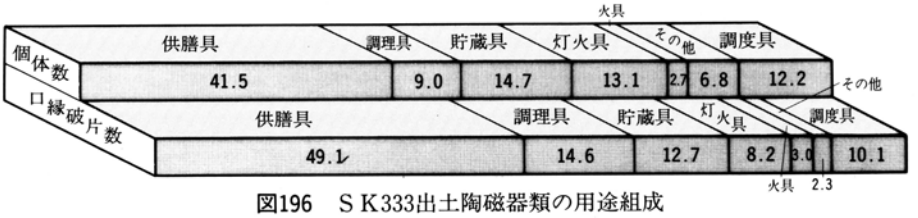
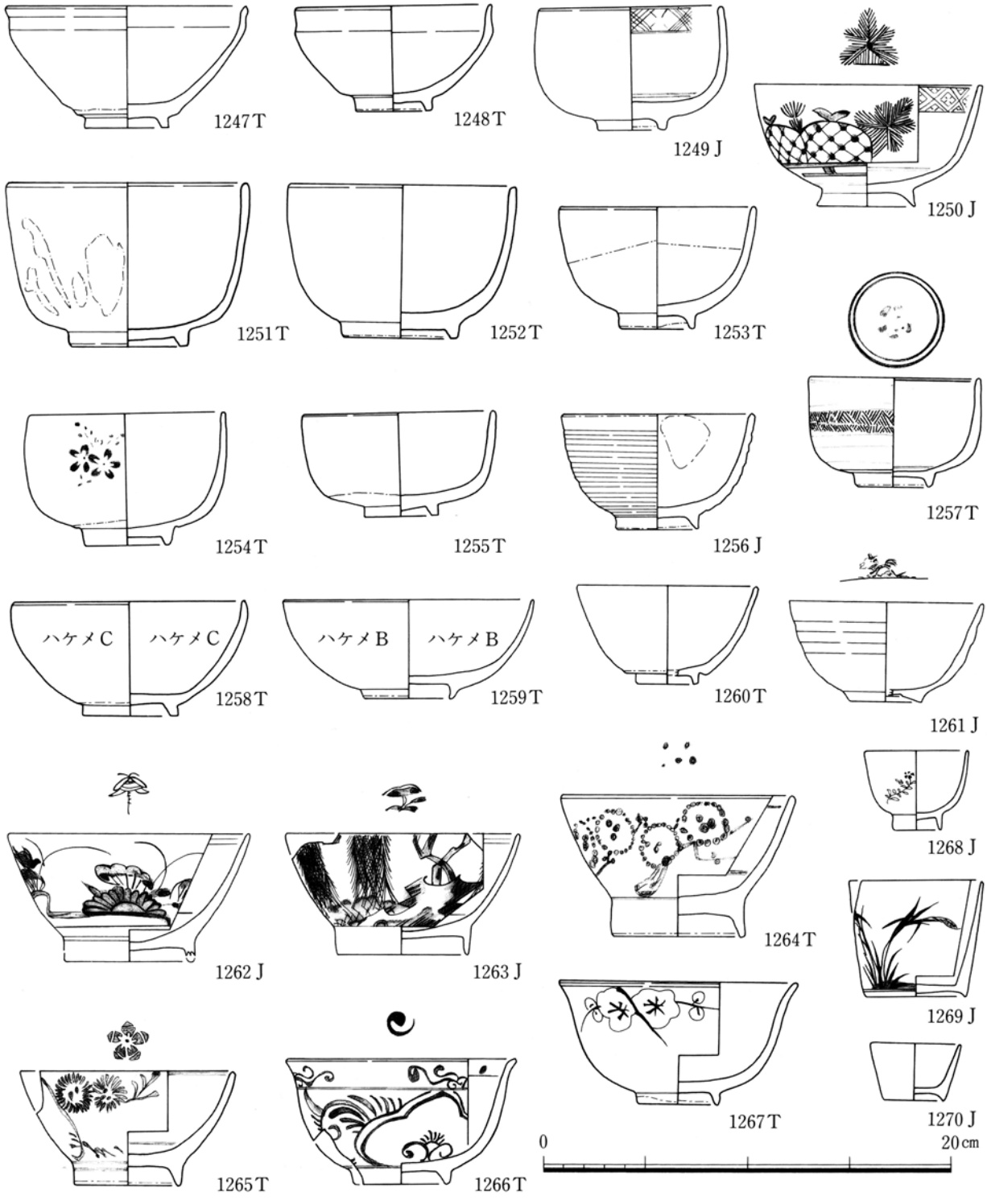


図196　ＳＫ333出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率 土器	陶器	磁器	その他	計	接合前口縁破片数 土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	1148	828	0	1976	0	1182	675	1	1858
	椀	0	729	398	0	1127	0	804	369	1	1174
	小椀	0	74	310	0	384	0	66	189	0	255
	皿	0	277	115	0	392	0	244	112	0	356
	鉢	0	68	5	0	73	0	68	5	0	73
調理具		33	385	8	1	427	205	343	2	1	551
	鍋，釜	33	174	0	1	208	205	133	0	1	339
	鉢	0	69	0	0	69	0	85	0	0	85
	擂鉢	0	21	0	0	21	0	44	0	0	44
	瓶	0	118	8	0	126	0	79	2	0	81
	その他	0	3	0	0	3	0	2	0	0	2
貯蔵具		2	653	43	3	701	2	449	27	1	479
	瓶	0	131	0	0	131	0	24	0	0	24
	壷	2	147	2	3	154	2	73	1	1	77
	甕Ａ	0	73	0	0	73	0	77	0	0	77
	甕Ｂ	0	222	3	0	225	0	198	2	0	200
	鉢	0	80	38	0	118	0	77	24	0	101
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
灯火具		169	447	7	0	623	149	161	1	0	311
火具		45	81	0	3	129	31	83	0	1	115
化粧具		0	29	65	0	94	0	8	18	0	26
神仏具		0	120	97	0	217	0	28	17	0	45
喫煙具		0	18	0	0	18	0	20	0	0	20
調度具		2	562	16	0	580	1	374	6	0	381
蓋		6	562	140	0	708	2	162	69	0	233
合計		257	4005	1204	7	5473	390	2810	815	4	4019

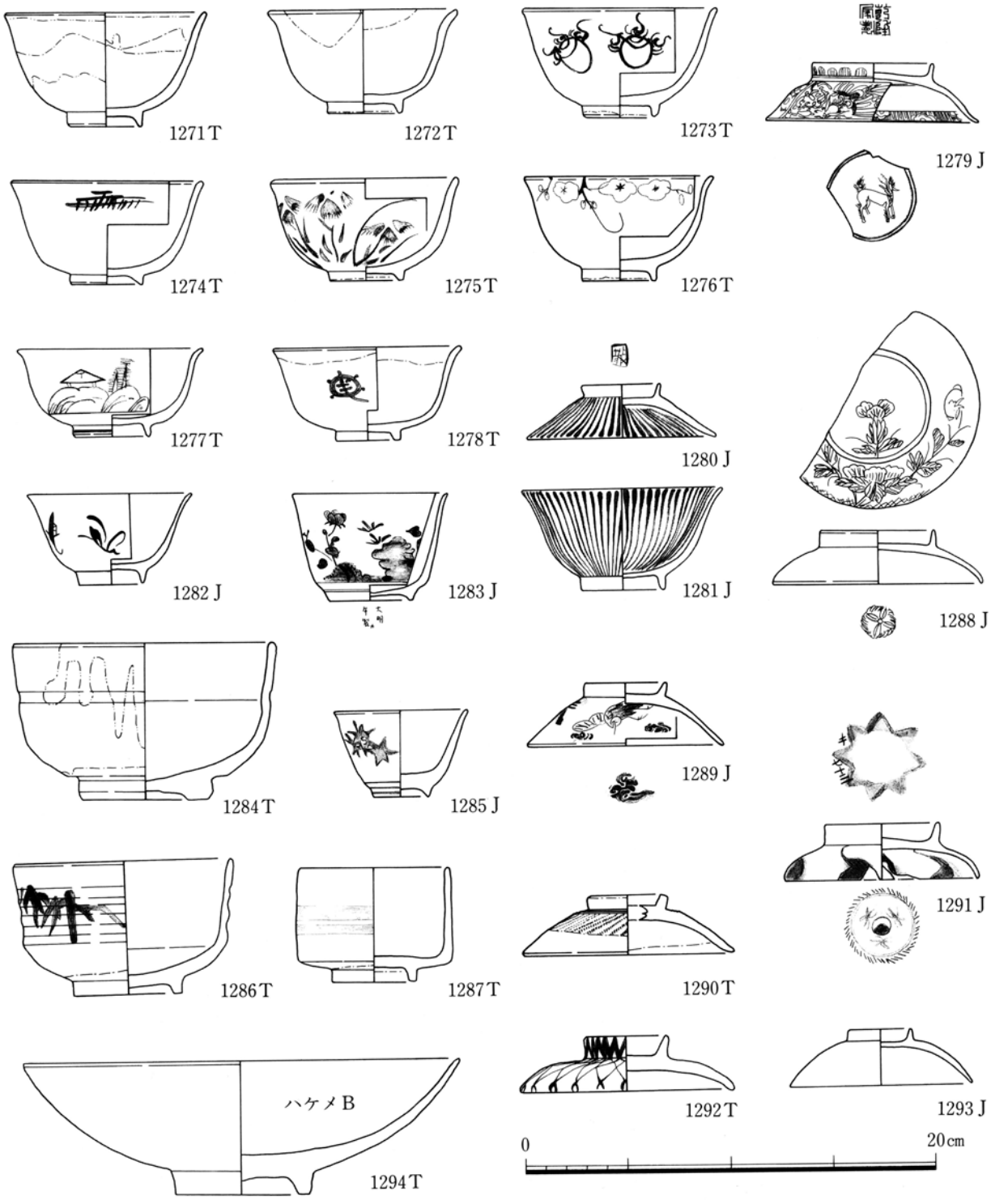
表35　ＳＫ333出土陶磁器類集計表



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
1247	111	鉄釉・化粧掛		瀬	
1248	111	灰釉		瀬	22
1249	112	青磁＋染付	18C後半 割小菱＋五弁花（コンニャク印）	肥	
1250	112	呉須絵	18C後半 鳥襷に松文・割小菱に松文	肥	20
1251	112	灰釉＋鉄釉流し掛け		瀬	23
1252	112	灰釉		瀬	23
1253	112	灰釉＋呉須		瀬	
1254	112	灰釉＋呉須絵	桜文	瀬	23
1255	112	鉄釉		瀬	23
1256	112	灰釉＋呉須		瀬	20
1257	112	灰釉＋鉄釉＋銅緑釉	幾何文・五弁花	瀬	23
1258	112	灰釉	刷毛目	瀬	23

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
1259	112	灰釉	刷毛目	肥	
1260	117	灰釉		瀬	
1261	112	染付	19C中葉～末 動物文	瀬	
1262	117	染付	1780～1810年代 菊丸文・昆虫文	肥	
1263	117	染付	1780～1810年代 柳文・花卉文	肥	21
1264	117	灰釉＋呉須絵＋鉄絵	梅花文・梅花文	瀬	24
1265	117	灰釉＋呉須絵＋鉄絵	菊松葉文・五弁花	瀬	24
1266	116	灰釉＋鉄絵	唐草文＋如意頭と唐草文・渦巻文	瀬	21
1267	116	灰釉＋鉄釉	梅花文、内面白泥化粧	瀬	
1268	122	赤絵	19C 蝶と草花文	瀬	24
1269	126	染付	18C前半～中半 草花文	肥	26
1270	126		19C 白磁	瀬	

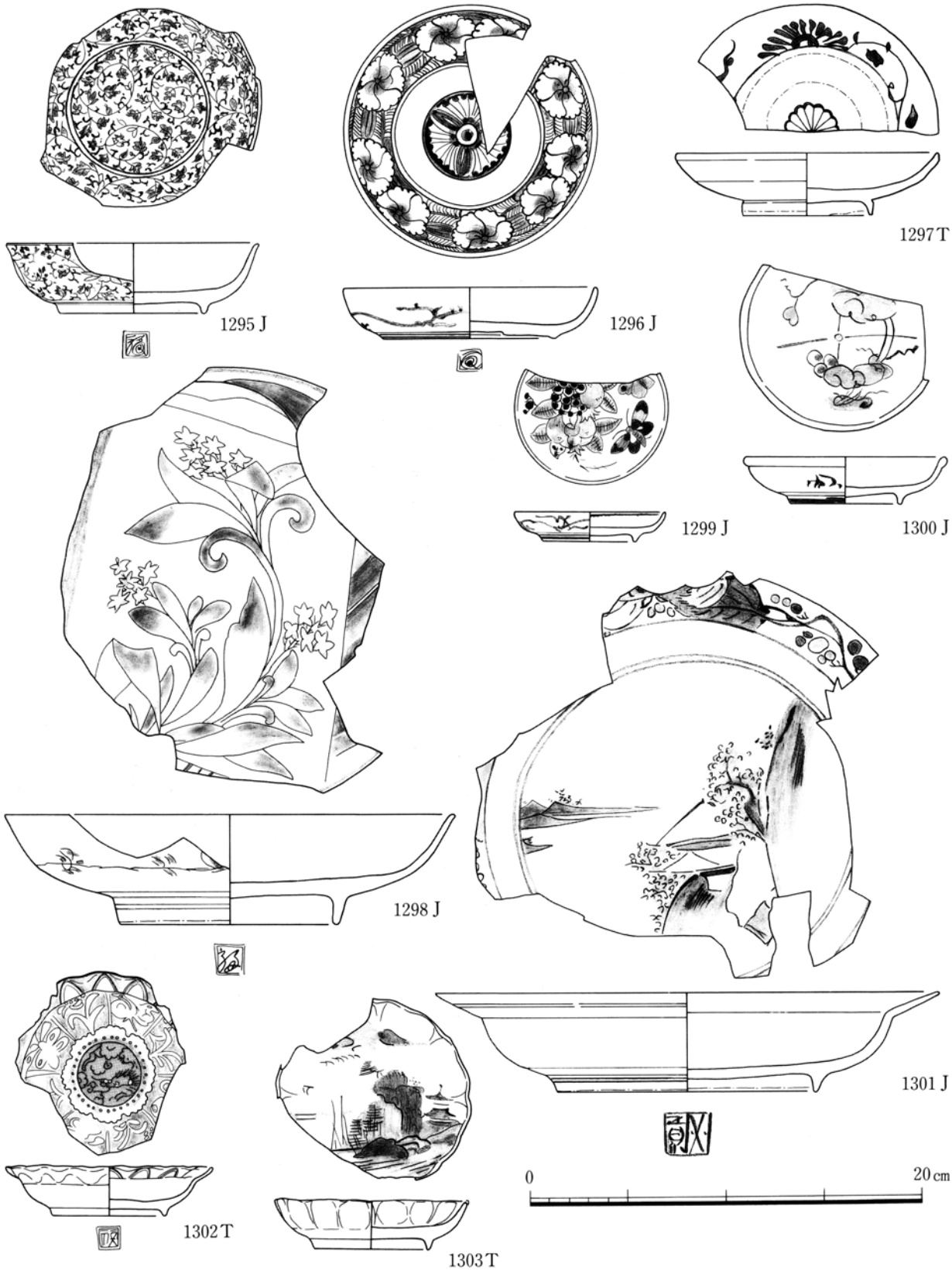
図197　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(1)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
1271	116	灰釉＋鉄釉＋呉須		瀬	21
1272	116	灰釉＋呉須		瀬	
1273	116	灰釉＋鉄絵	宝珠文、内面白泥化粧	瀬	23
1274	116	灰釉＋鉄絵	柳文	瀬	23
1275	116	灰釉＋呉須絵	草花文	瀬	21
1276	116	灰釉＋鉄絵	梅花文・内面白泥化粧	京	24
1277	116	長石釉＋鉄釉	内面白泥化粧、楼閣山水文	不	21
1278	116	鉄釉＋銅緑釉	亀文	肥	24
1279	132	赤絵	18C末～幕末 鳳凰文＋「乾隆年製」・花文＋麒麟文	中	25
1280	015	染付	19C中～幕末 麦わら文＋一角印・麦わら手	瀬	25
1281	116	染付	19C中～幕末 麦わら文＋角銘・麦わら文	肥	21
1282	125	染付	明治 草花文	不	26

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
1283	125	染付	17C末～18C前半 岩と蝶と草花文＋「大明年製」	肥	26
1284	110	灰釉＋呉須絵	流し掛け	瀬	24
1285	125	染付	18C前半 楓文（コンニャク印）	肥	26
1286	110	灰釉＋呉須絵	笹文	瀬	24
1287	124	灰釉＋鉄釉		瀬	
1288	015	染付	焼継仮　1780～1840年代 牡丹文・花文	肥	25
1289	015	染付	1820～1860年代 蝙に飛雲文・飛雲文	肥	25
1290	015	鉄釉		瀬	
1291	015	染付	焼継仮　1780～1810年代 ねじり文＋花文・花＋ねじり文＋蝶文	肥	25
1292	015	灰釉＋鉄絵	網目文	瀬	25
1293	123		18C前半～中半 白磁	肥	
1294	131	輪ハゲ(銹釉)、灰釉	刷毛目	肥	

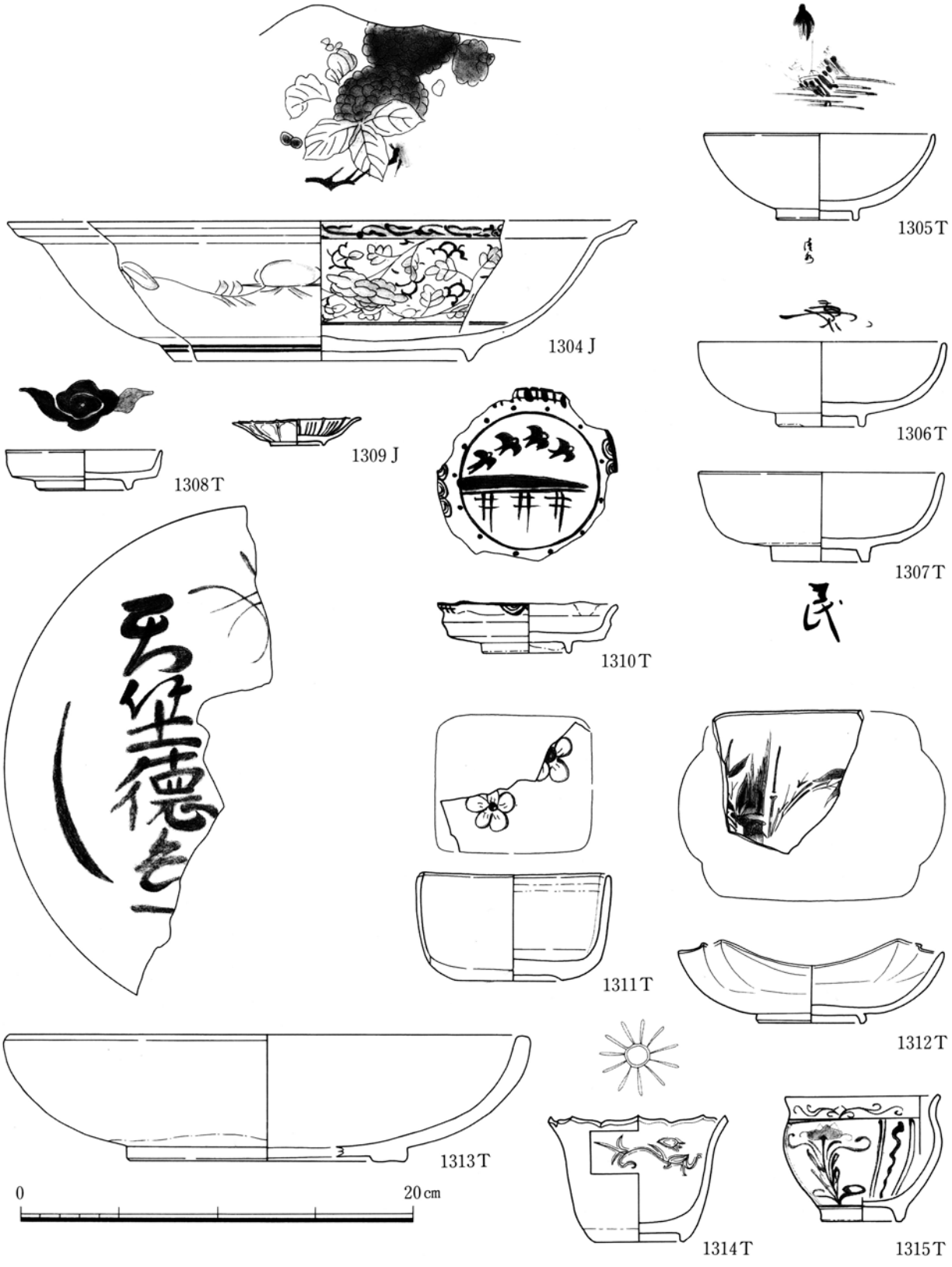
図198　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(2)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
1295	137	染付	濃緑釉、ハリさざえ　18C前・中 牡丹唐草文＋二角渦福・牡丹唐草文	肥	30
1296	131	蛇ノ目凹形高台 染付	18C第4四半期～19C初唐草文＋一角渦福・ねじ花散らし＋三方いちょう	肥	
1297	131	輪ハゲ・灰釉＋呉須絵	菊唐草文＋菊花文	肥	30
1298	131	染付	1670～1680年代 花唐草文＋二角渦福・草花文	肥	30
1299	131	染付	18C後半～19C初 唐草文・ザクロに蝶文	肥	30

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
1300	131	染付	18C末～19C前 口縁玉縁、岩文・つる草文	肥	30
1301	134	染付	ハリさざえ　1655～1600年代のみ つる草＋山水楼閣文	肥	30
1302	136	呉須絵	端ヘラ削り、畳付ヒき　18C後半 蓮弁＋草花＋雲龍文	肥	31
1303	136	呉須絵	18C第4四半期～19C初 山水楼閣文	肥	31

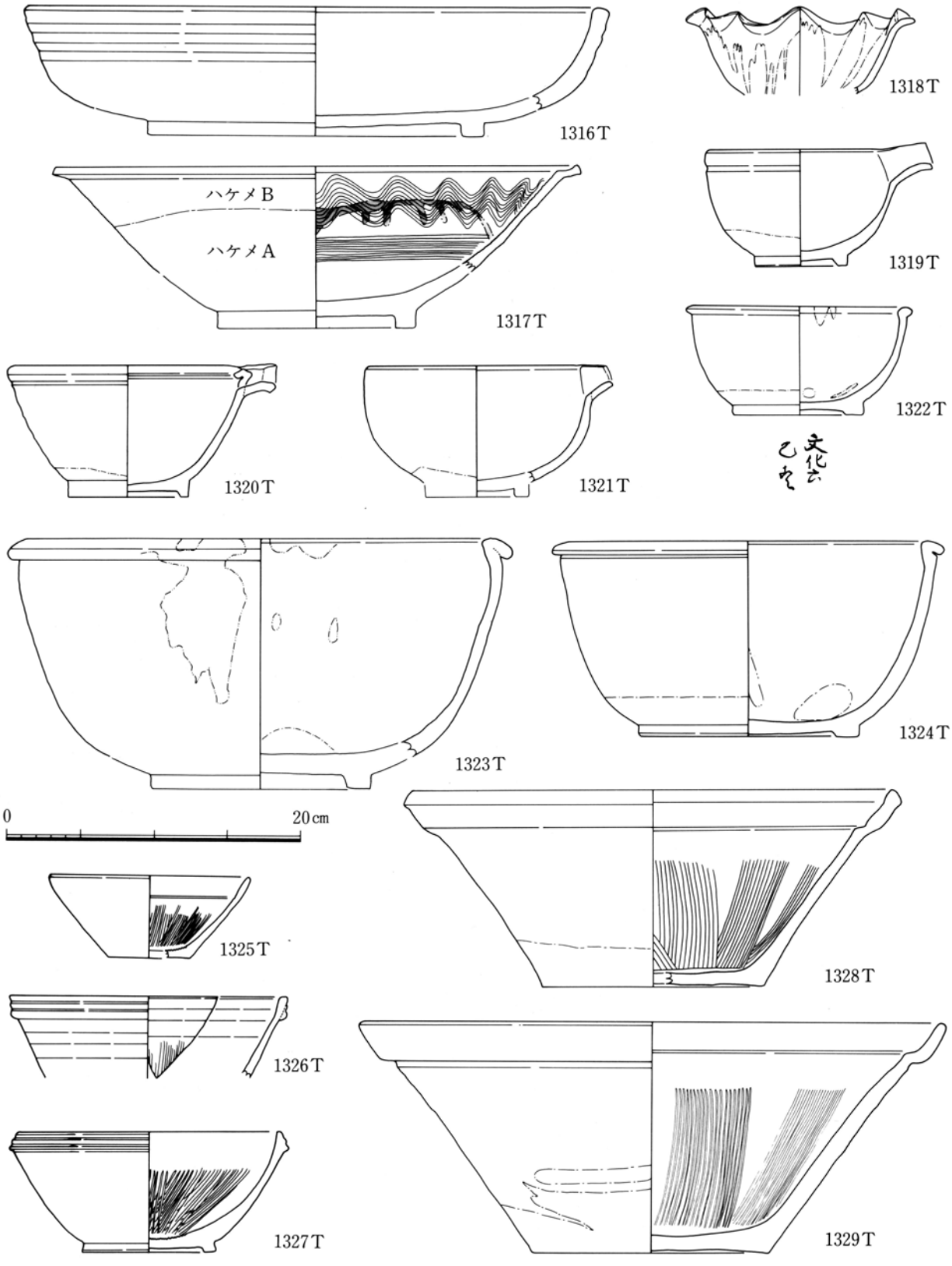
図199　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(3)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
1304	134	染付	1670～1690年代　花唐草文・花唐草＋牡丹唐草＋紫陽花文	肥	30
1305	131	灰釉＋呉須絵	焼継似「清水」（刻印）・楼閣山水文	肥	
1306	131	灰釉＋呉須絵	（山水文）？	京	30
1307	131	灰釉	墨書	瀬	31
1308	131	鉄釉＋呉須絵	雲文	京	30
1309	137		17C後半～18C前半　白磁・高台砂粒付着	肥	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
1310	137	灰釉＋鉄絵	千鳥と橋文	瀬	31
1311	147	長石釉＋銅緑釉＋鉄絵	梅花文	瀬	
1312	136	灰釉＋鉄絵＋呉須絵	竹文	京	31
1313	131	灰釉＋鉄絵＋呉須絵	「天座徳無」	瀬	30
1314	145	銅緑釉	唐草文＋菊花文	瀬	29
1315	140	長石釉＋鉄釉	唐草＋草花文	瀬	29

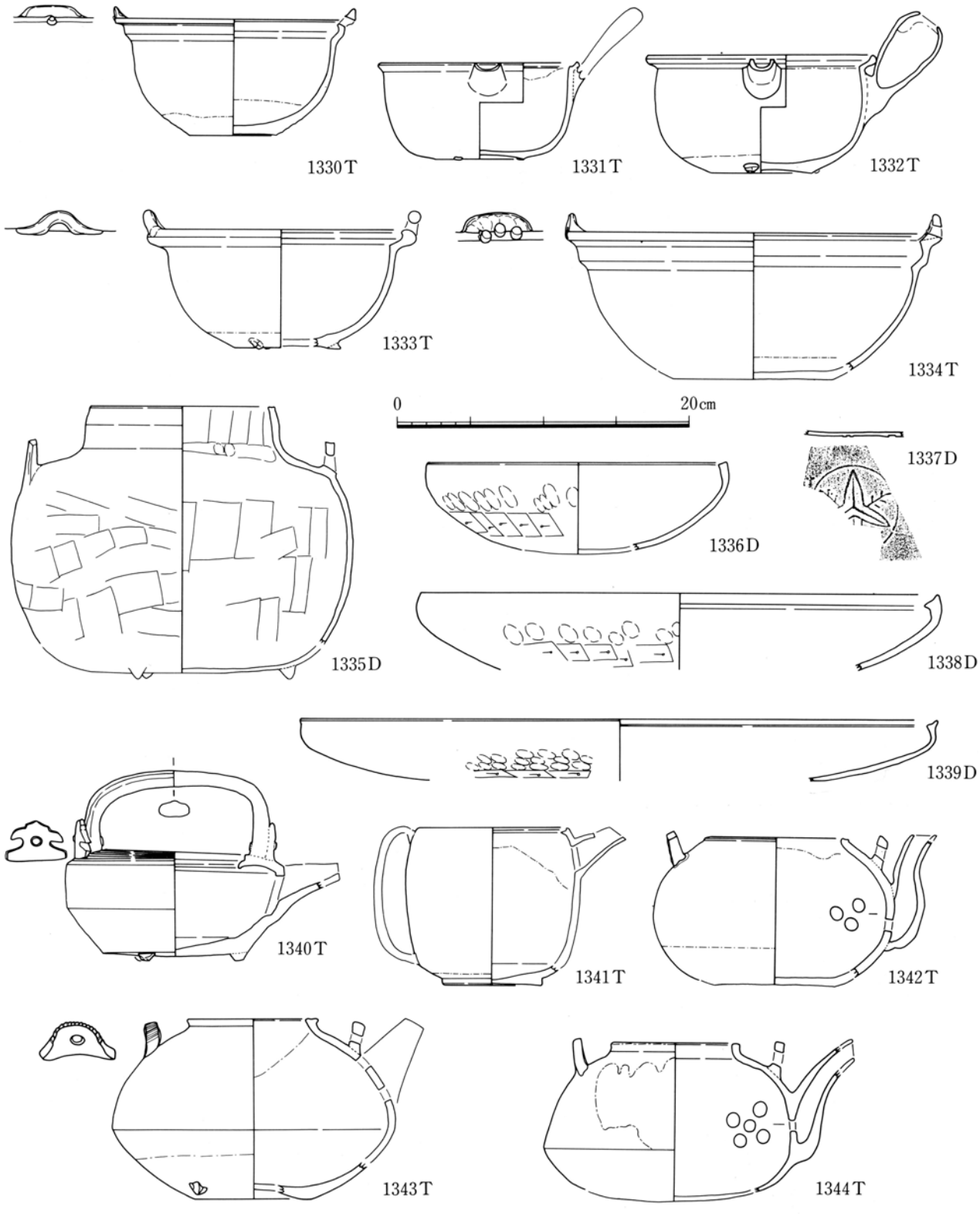
図200　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(4)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
1316	131	灰釉		瀬	
1317	143	灰釉＋鉄釉	17C後半～18C前半 刷毛目	肥	
1318	146	銅緑釉＋灰釉流し掛け		瀬	
1319	221	灰釉		瀬	32
1320	221	灰釉		瀬	32
1321	221	灰釉		瀬	32
1322	221	灰釉＋銅緑釉流し掛	墨書「文化六己求之」	瀬	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
1323	222	灰釉＋鉄釉流し掛け		瀬	
1324	222	灰釉＋銅緑釉流し掛け		瀬	32
1325	237	鉄釉		瀬	
1326	239	無釉		不	
1327	239	鉄釉		瀬	
1328	237	鉄釉		瀬	
1329	510	鉄釉	使用後転用	瀬	

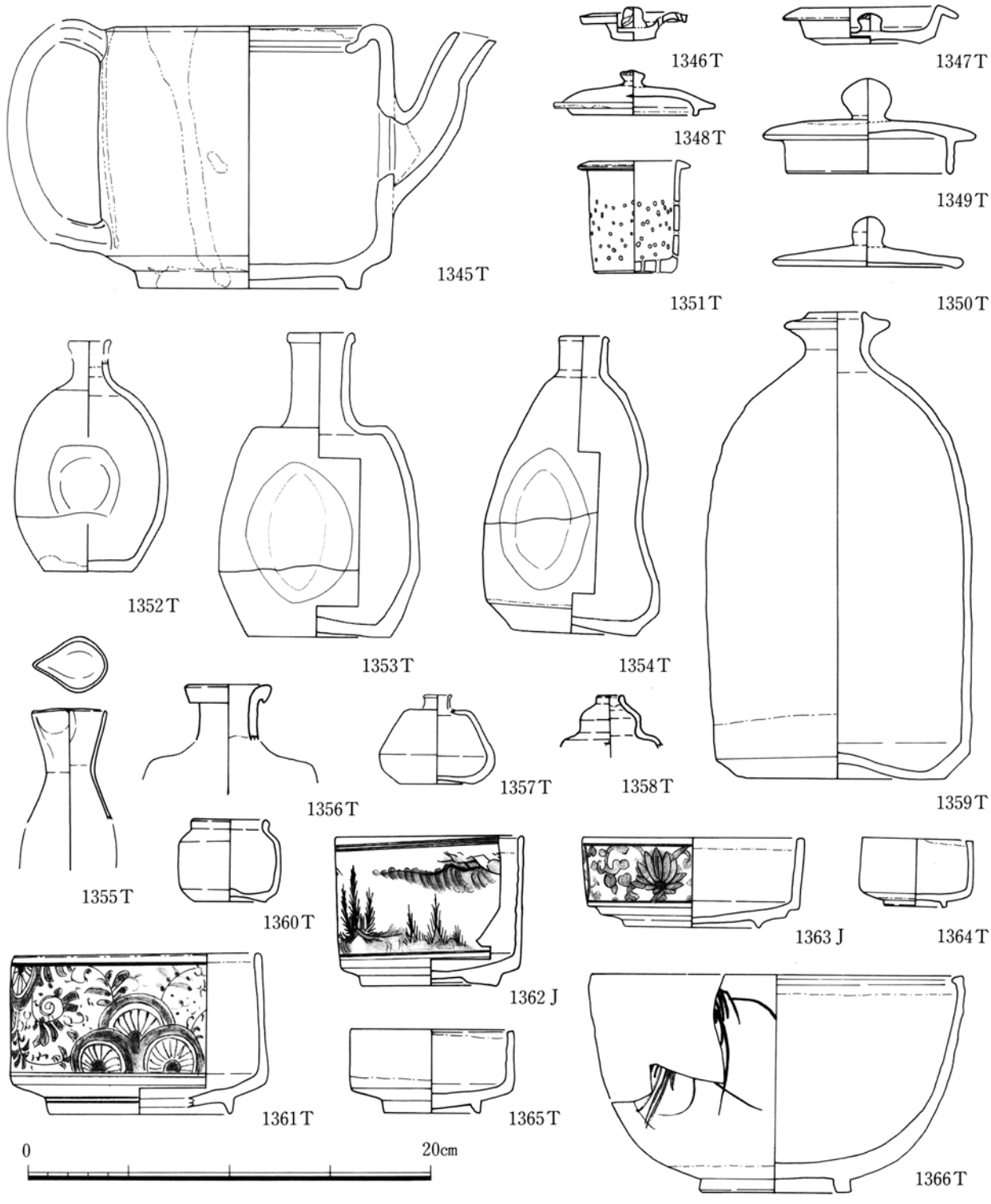
図201　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(5)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
1330	215	鉄釉		瀬	
1331	214	鉄釉		不	32
1332	214	灰釉		京	32
1333	215	鉄釉	外底面煤付着	瀬	32
1334	215	鉄釉		瀬	
1335	210		内面煤付着	不	
1336	212			不	
1337	213			不	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
1338	213			不	
1339	213			不	
1340	242	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	33
1341	242	鉄釉		瀬	
1342	241	鉄釉	外底部煤付着	瀬	33
1343	241	鉄釉		肥	33
1344	241	銅緑釉＋灰釉		瀬	33

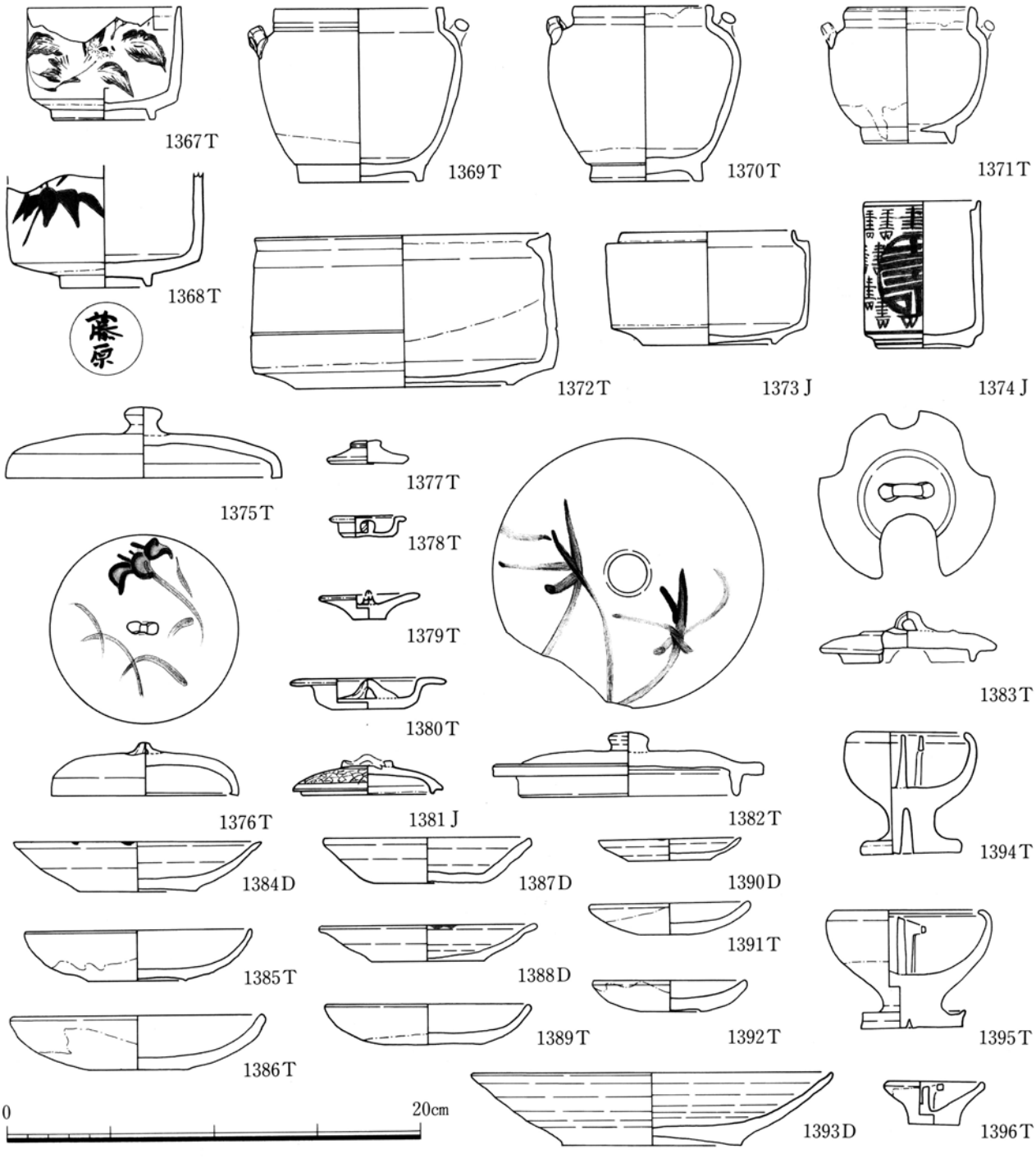
図202　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(6)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
1345	318	鉄釉		瀬	36
1346	019	鉄釉		不	43
1347	012	鉄釉		瀬	43
1348	018	灰釉＋鉄釉		肥	
1349	014	灰釉＋銅緑釉流し掛け		瀬	
1350	013	灰釉		瀬	
1351	240	灰釉	急須用茶コシ	京	33
1352	314	鉄釉		瀬	
1353	314	鉄釉		瀬	33
1354	313	灰釉		瀬	33
1355	244	長石釉		京	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
1356	315	灰釉		瀬	
1357	320			不	36
1358	310	鉄釉		京	
1359	316	鉄釉		瀬	36
1360	324			不	36
1361	351	呉須絵	18C後半～19C前半 唐草文と片輪車	肥	37
1362	351	染付	17C末～18C前半 雲に若松文	肥	37
1363	351	染付	18C前半 牡丹唐草文	肥	35
1364	351	灰釉		瀬	
1365	351	灰釉		瀬	37
1366	351	灰釉＋鉄絵	柳文	瀬	

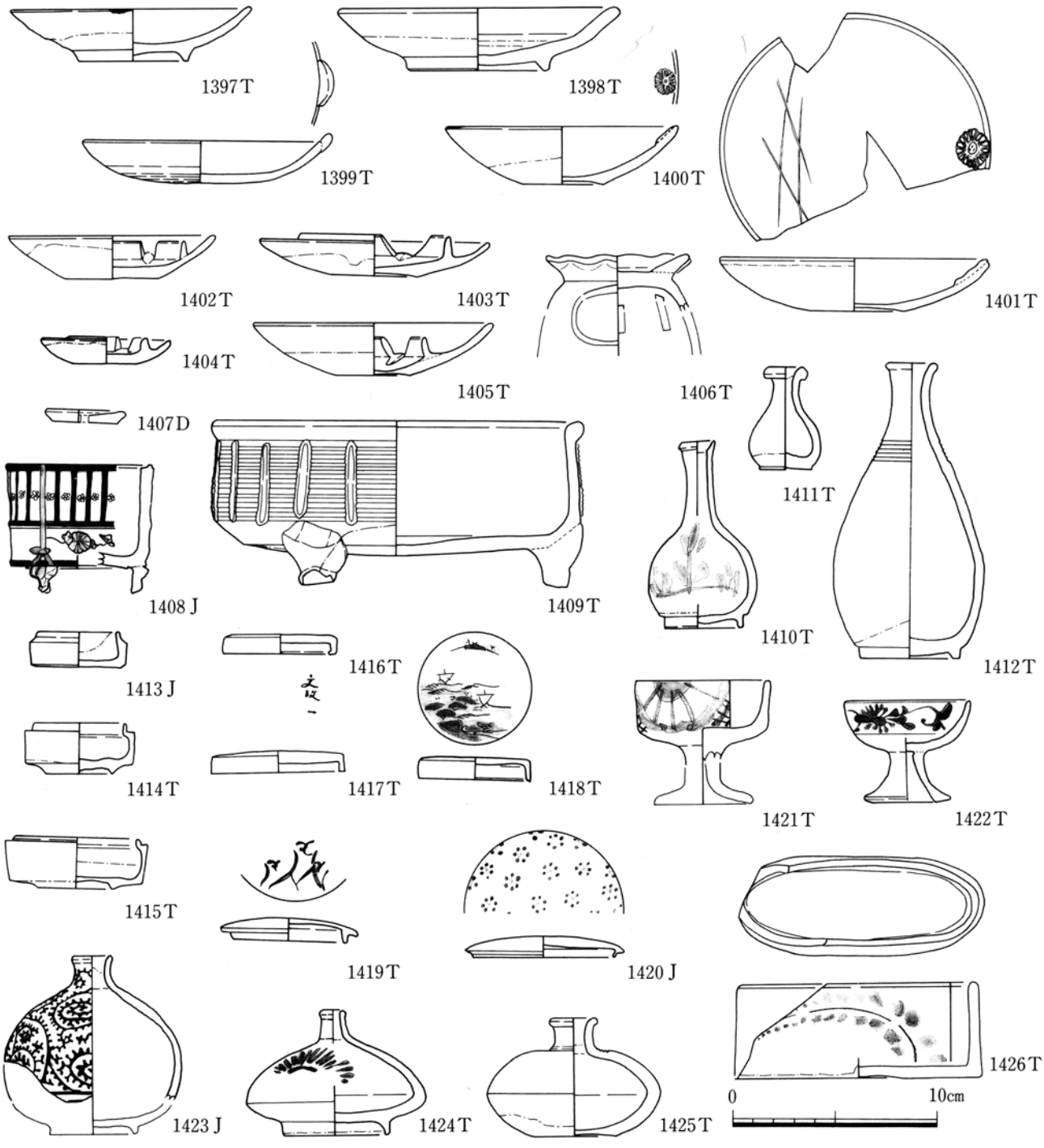
図203　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(7)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1367	351	灰釉+上絵付	折枝文	京	35
1368	115	灰釉+呉須絵	竹文+墨書「藤原」	瀬	37
1369	321	灰釉		瀬	36
1370	321	灰釉		瀬	
1371	913	灰釉		瀬	
1372	721	鉄釉		瀬	37
1373	352	灰釉		瀬	
1374	351	染付	寿文	肥	37
1375	018	灰釉		瀬	
1376	018	灰釉+呉須絵	あやめ文	瀬	44
1377	013	灰釉		瀬	44
1378	012	鉄釉		瀬	
1379	011	長石釉		不	43
1380	012	灰釉		瀬	
1381	014	染付	18C中～19C初 水製	肥	44

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1382	014	灰釉+呉須絵	笹文	瀬	44
1383	019	灰釉		瀬	38
1384	411	底部糸切り	口縁油煙付着	不	
1385	411	鉄釉	口縁油煙付着	瀬	
1386	411	鉄釉		瀬	
1387	411	底部糸切り		不	
1388	411	底部糸切り	口縁油煙付着	不	
1389	411	灰釉		瀬	
1390	411	底部糸切り	胎土黄白色	不	
1391	411	鉄釉		瀬	
1392	411	灰釉		瀬	
1393	411	底部糸切り	内面油煙付着	不	
1394	422	鉄釉		瀬	
1395	422	鉄釉		瀬	
1396	423	灰釉		瀬	38

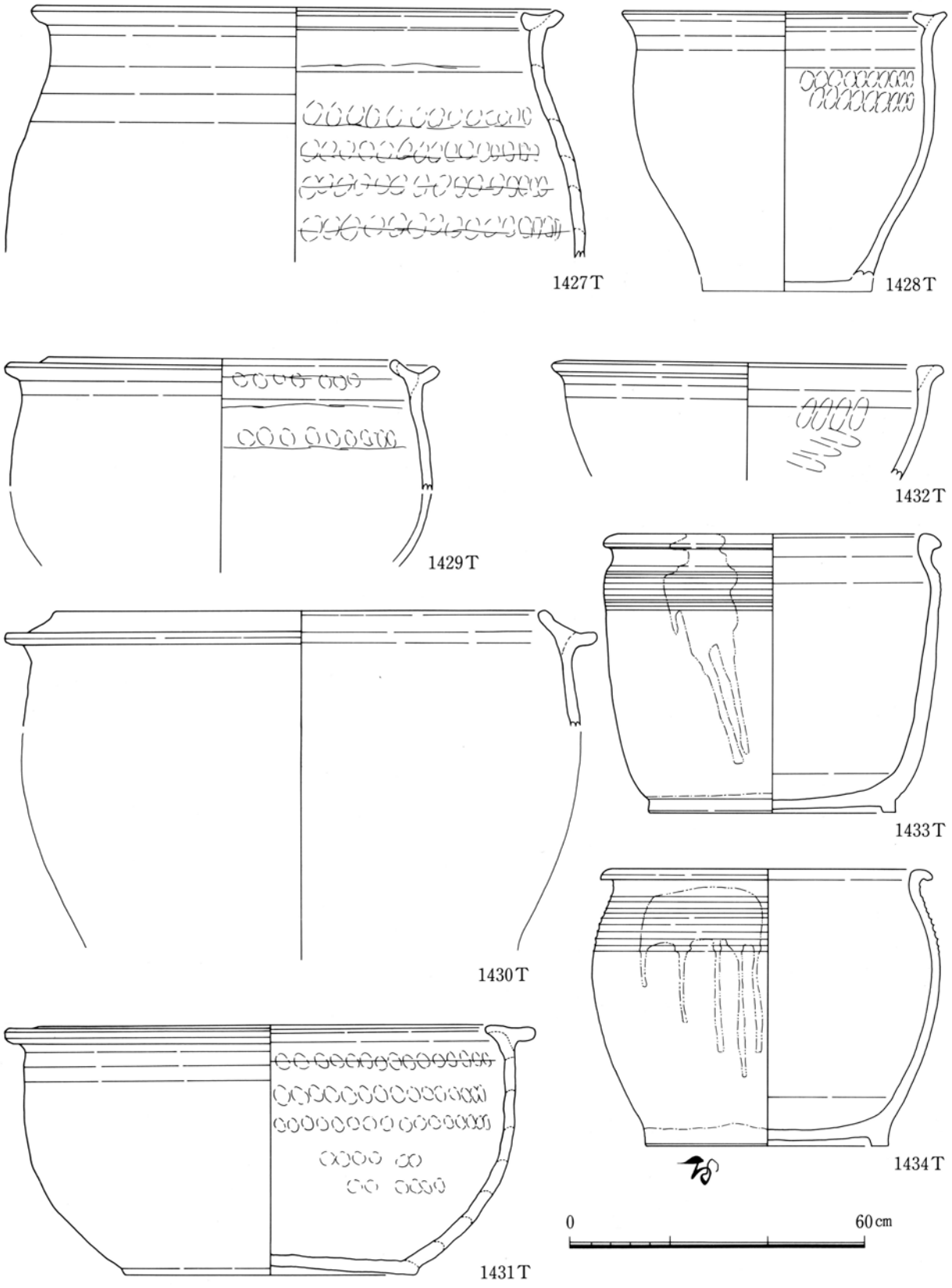
図204　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(8)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1397	411	灰釉	口縁油煙付着	瀬	
1398	411	輪ハゲ・長石釉	口縁油煙付着	瀬	
1399	411		色調赤褐色、内面泥土塗布口縁油煙付着	不	
1400	411	長石釉		瀬	
1401	411	灰釉		京	
1402	412	鉄釉		瀬	
1403	412		19C 白磁	瀬	
1404	412	灰釉		瀬	
1405	412	長石釉		瀬	
1406	431	鉄釉		瀬	
1407	411	底部糸切り	焼成前穿孔	不	
1408	443	赤絵	17C末～18C初	肥	
1409	933	灰釉		瀬	43
1410	712	灰釉＋鉄絵	松文	瀬	41
1411	712	灰釉		瀬	41

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1412	712	灰釉		瀬	41
1413	740		白磁、外底部墨書痕	肥	
1414	352	灰釉		瀬	
1415	352	灰釉		瀬	38
1416	016	灰釉	内面墨書	瀬	
1417	016	灰釉		瀬	
1418	016	染付	19C初～幕末 山水帆掛舟文	肥	
1419	019	灰釉＋鉄絵	鳥文	瀬	44
1420	017	染付	18C後半～19C前半 梅花文	肥	44
1421	730	灰釉＋呉須絵	菊格子文	瀬	
1422	730	呉須絵	19中～幕末 草唐草文	肥	
1423	622	染付	蛸唐草文	肥	
1424	622	灰釉＋呉須絵	松葉文	瀬	41
1425	622	鉄釉		瀬	
1426	630	灰釉＋鉄絵	藤文	瀬	35

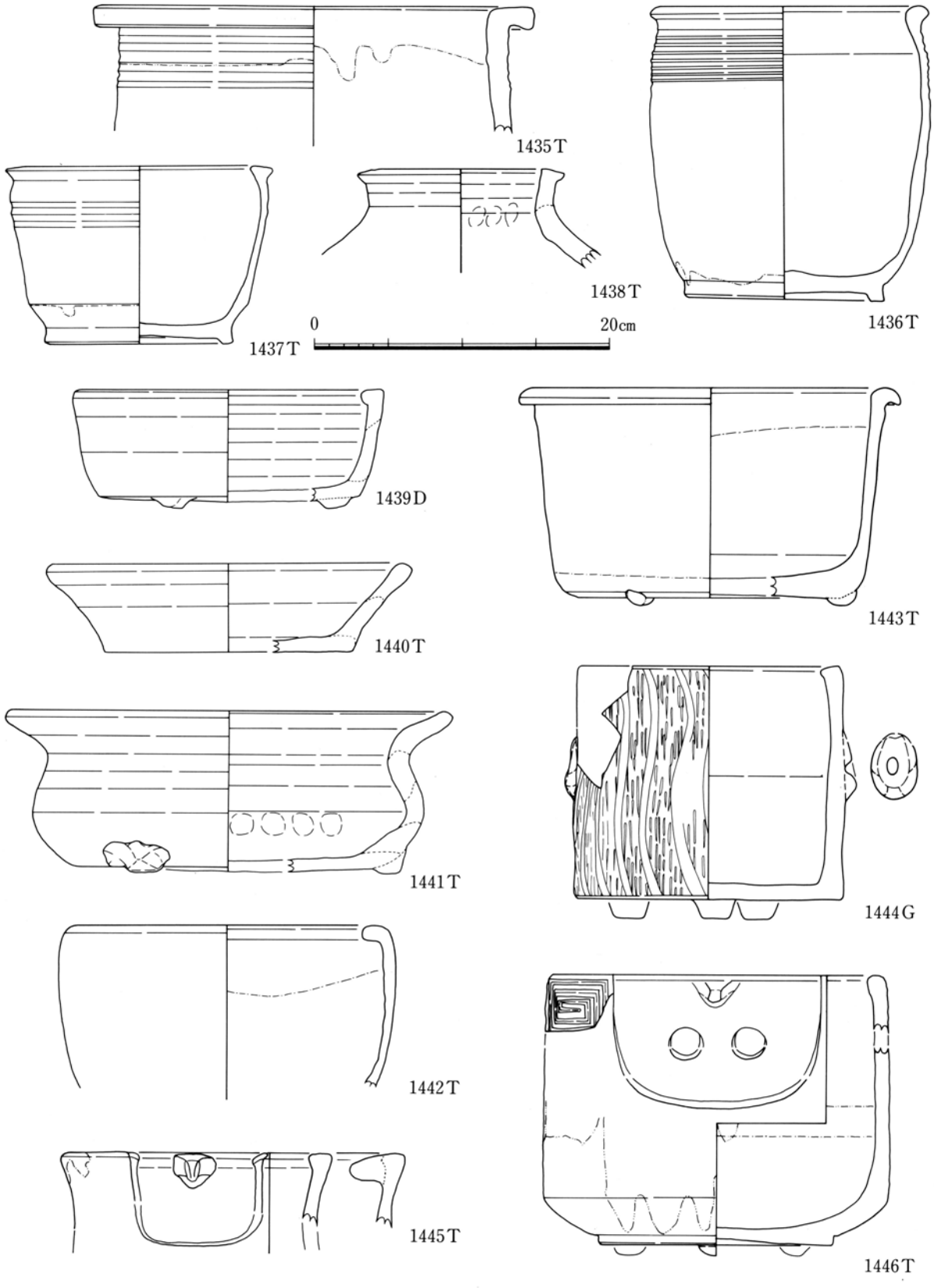
図205　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(9)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
1427	332		暗紫色	常	
1428	334		外・内面にぶい橙	常	
1429	333		外・内面にぶい黄橙	常	
1430	333		外・内面にぶい橙	常	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
1431	334		外面淡黄褐色、内面赤褐色	常	
1432	335		外面・内面褐灰色	常	
1433	344	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	37
1434	344	鉄釉＋灰釉流し掛け	底部墨書	瀬	

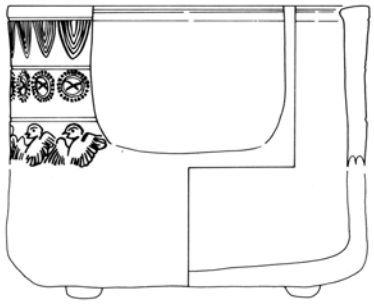
図206　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(10)



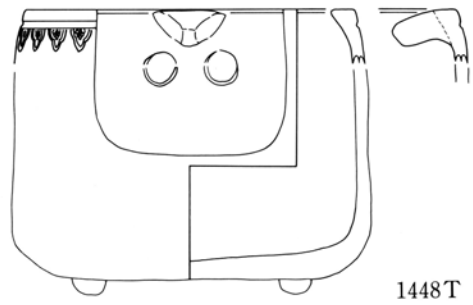
番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
1435	340	鉄釉		瀬	
1436	344	鉄釉		瀬	
1437	341	鉄釉		瀬	37
1438	322		外・内面暗紫色	常	
1439	518		口縁周辺煤付着	不	
1440	335		外底部砂目痕	常	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
1441	518		外底部砂目痕	常	
1442	511		口縁敲打痕	瀬	
1443	511	鉄釉	口縁敲打痕	瀬	42
1444	511			不	39
1445	513	長石釉＋灰釉流し掛け		瀬	
1446	513	灰釉＋長石釉＋銅緑釉		瀬	

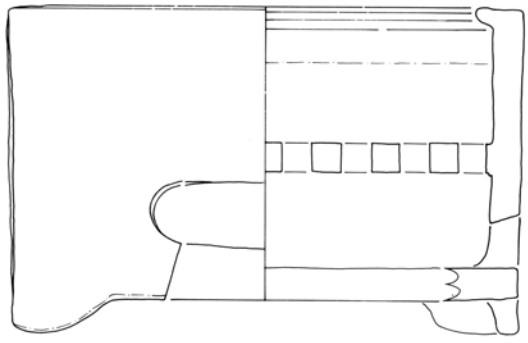
図207　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(11)



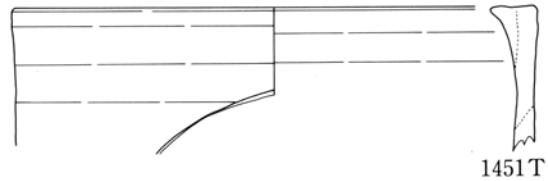
1447T



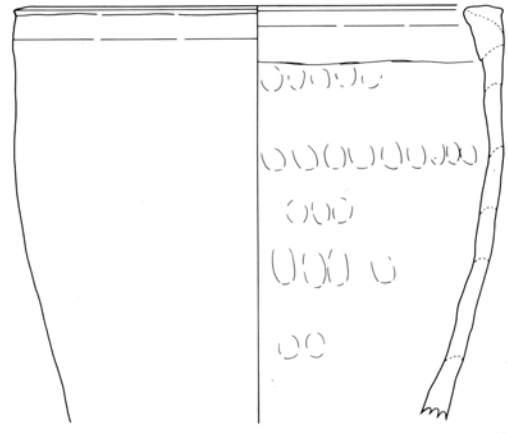
1448T



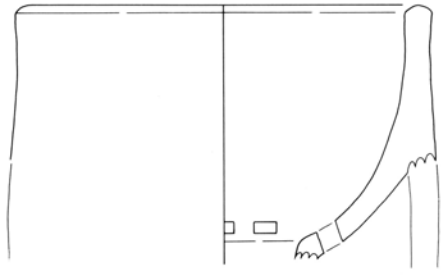
1449T



1451T

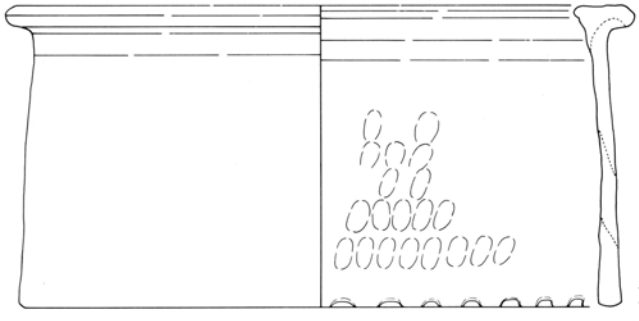


1452T

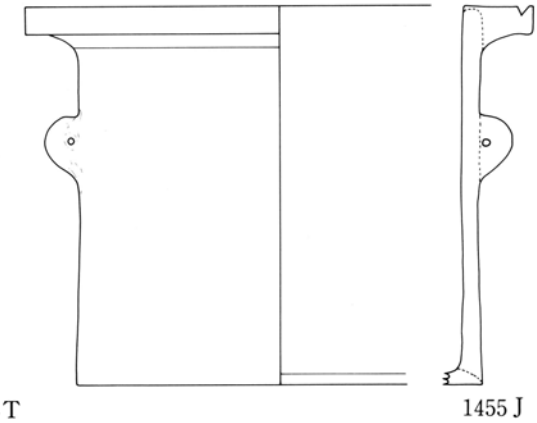


1450T

1453T



1454T

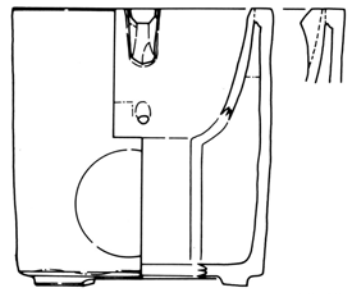


1455J

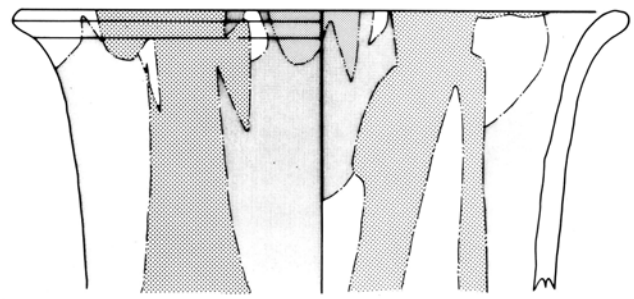
番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
1447	513		銅緑釉	スタンプ文	瀬	
1448	513		銅緑釉	輪宝つなぎ文（スタンプ）	瀬	
1449	515	長石釉＋銅緑釉流し掛け		長方形	瀬	
1450	514				不	
1451	515			外面橙、内面淡赤橙	常	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	PL
1452	515		外・内面黄赤褐色、内面煤付着	常	
1453	530		外面黄橙、内面浅黄橙、煤付着	常	
1454	530		外面橙、内面淡橙	常	
1455	900			常	

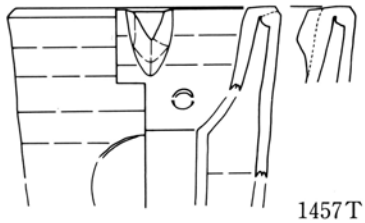
図208　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(12)



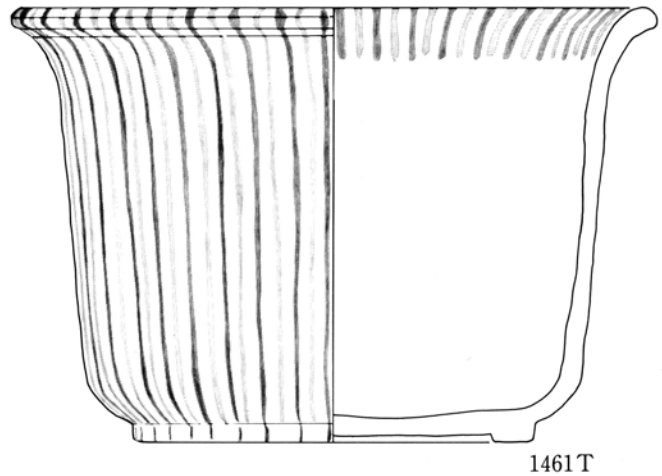
1456T



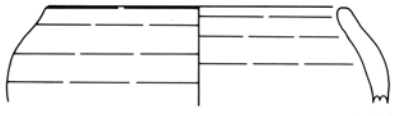
1460T



1457T

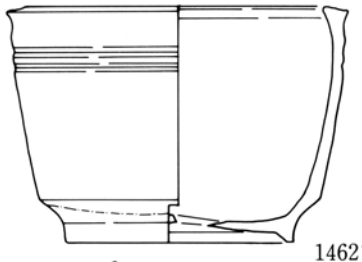


1461T



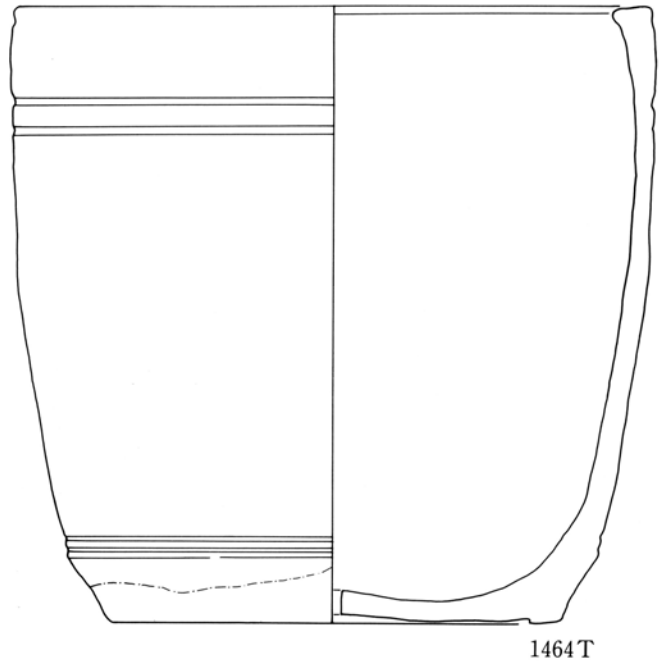
1458T

1459T

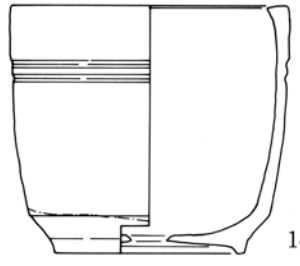


1462T

十子



1464T



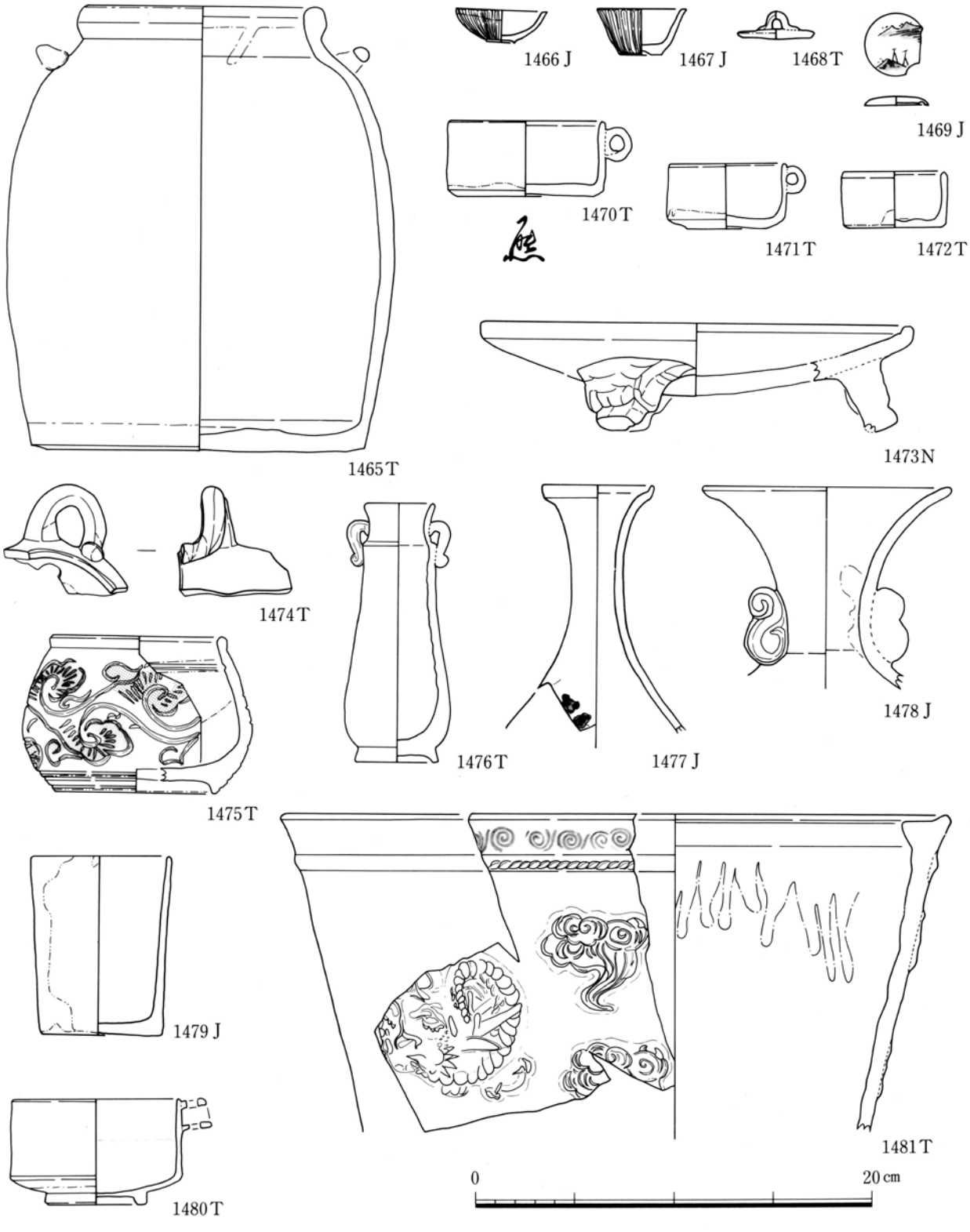
1463T

0 20cm

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1456	514	鉄釉		不	
1457	514		胎土黄白色	不	
1458	521		口縁敲打痕	常	
1459	011		底部砂目痕	常	
1460	952	灰釉＋長石釉＋銅緑釉＋呉須		瀬	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1461	952	灰釉＋鉄釉＋呉須	麦わら文＋麦文・麦わら文	瀬	43
1462	913	鉄釉	墨書「＋子」	瀬	
1463	913	鉄釉		瀬	37
1464	913	鉄釉	底部穿孔	瀬	37

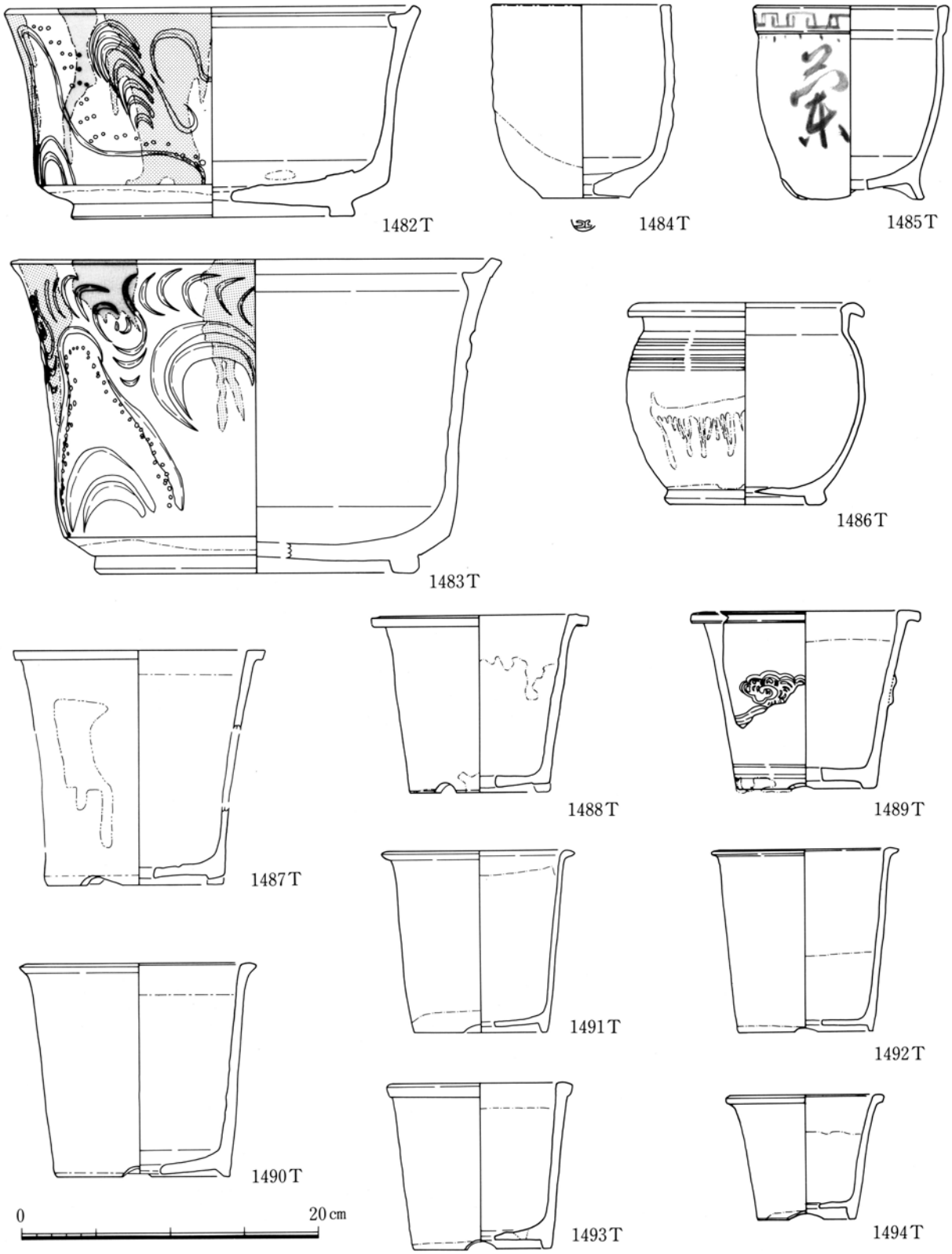
図209　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(13)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
1465	621	鉄釉		瀬	
1466	610		18Ｃ代 白磁	肥	
1467	610		17Ｃ後～18Ｃ前 白磁	肥	
1468	013	鉄釉		瀬	44
1469	016	染付	19Ｃ初～幕末 山水帆掛舟文	肥	
1470	921	灰釉	墨書「熊」	瀬	42
1471	921	灰釉		瀬	
1472	921	灰釉		瀬	
1473	900	銅緑釉		不	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
1474	510	鉄釉		瀬	
1475	321	呉須＋鉄釉＋黄釉＋灰釉	唐草文	中	36
1476	932	鉄釉		瀬	42
1477	932	染付	17Ｃ後半 木(の)文	肥	
1478	932		17Ｃ後半～18Ｃ前半 青磁	肥	
1479	902	鉄釉＋灰釉		瀬	42
1480	901	灰釉＋鉄釉		瀬	43
1481	951	銅緑釉		瀬	

図210　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(14)



番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
1482	913	灰釉＋鉄釉＋銅緑釉	底部穿孔、墨書痕	瀬	43
1483	951	灰釉＋鉄釉＋銅緑釉		瀬	43
1484	913	鉄釉		瀬	37
1485	911	鉄釉	漢文＋「愛□幽蘭」	瀬	42
1486	913	鉄釉＋鉄釉流し掛け		瀬	
1487	911	灰釉＋銅緑釉流し掛け		瀬	
1488	911	鉄釉		瀬	

番　号	器　種	成形・調整等	備　　考	産地	ＰＬ
1489	914	銅緑釉	貼付文	瀬	
1490	911	鉄釉		瀬	42
1491	911	鉄釉		瀬	35
1492	911	鉄釉		測	
1493	911	鉄釉	焼成後穿孔３ヶ所	瀬	42
1494	911	鉄釉		瀬	

図211　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(15)

その他の遺構出土遺物

ここでは、図面に掲載していない遺構出土の遺物群についての組成について述べる。先ず、用途別の比率について、供膳具172.0個体、49.2%、調理具22.33個体、8.1%、貯蔵具25.83個体、7.4%、灯火具87.83個体、25.1%、火具4.75個体、1.4%、化粧具、1.83個体、0.4%、神仏具5.5個体、喫煙具5.0個体、1.3%、調度具18.58個体、4.8%、蓋36.75個体、9.5%である。また材質による比率は、土器18.9%、陶器17.1%となる。

また発掘調査時に、包含層中より出土した遺物群を「検出」と称して、その遺物組成について

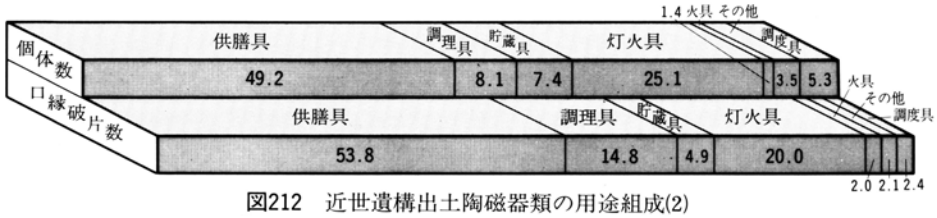


図212　近世遺構出土陶磁器類の用途組成(2)

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	1386	678	0	2064	0	1735	690	1	2426
	椀	0	727	322	0	1049	0	916	375	0	1291
	小椀	0	112	196	0	308	0	78	120	0	198
	皿	0	450	129	0	579	0	540	151	0	691
	鉢	0	97	31	0	128	0	201	44	1	246
調理具		71	262	7	0	340	254	408	3	1	666
	鍋，釜	71	83	0	0	154	254	93	0	1	348
	鉢	0	53	7	0	60	0	38	3	0	41
	擂鉢	0	60	0	0	60	0	213	0	0	213
	瓶	0	66	0	0	66	0	64	0	0	64
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
貯蔵具		4	297	9	0	310	2	208	10	0	220
	瓶	0	100	0	0	100	0	20	0	0	20
	壷	4	62	0	0	66	2	45	0	0	47
	甕A	0	34	0	0	34	0	61	0	0	61
	甕B	0	41	0	0	41	0	39	0	0	39
	鉢	0	60	9	0	69	0	43	10	0	53
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
灯火具		787	267	0	0	1054	735	168	0	0	903
火具		6	51	0	0	57	13	77	0	0	90
化粧具		5	10	7	0	22	1	6	3	0	10
神仏具		2	41	23	0	66	1	32	13	0	46
喫煙具		0	60	0	0	60	0	37	0	0	37
調度具		0	221	1	1	223	0	106	2	1	109
蓋		0	372	69	0	441	0	109	30	0	139
合計		875	2967	794	1	4637	1006	2886	751	3	4646

表36　近世遺構出土陶磁器類集計表(2)

も、また材質や器種の比率の基準となる椀：皿やその他の傾向についても同様の結果を示している。

これらの数値を、近世遺物全体の組成比率と比較した場合、多少の増減は見られるものの、全体としてはほぼ等しい数値を呈している。また図面掲載分の遺物組成と比較しても、やはり同様の結果が示されている(表37参照)。このことは近世遺物全体を平均した場合、ここに示された組成が、三の丸に関しての基本的遺物組成のあり方であると言える。但し、これはあくまで平均値であり、既に見た様に、各遺構・時代によりそれぞれの組成が窺われる点は注意を要する。

(川井啓介)

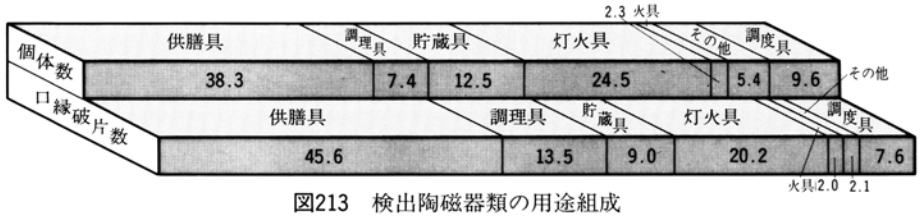


図213　検出陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		1	1288	1197	4	2490	1	1994	1306	6	3307
	椀	0	642	468	0	1110	0	1267	628	0	1895
	小椀	1	93	423	0	517	1	114	351	0	466
	皿	0	523	286	0	809	0	555	310	1	866
	鉢	0	30	20	4	54	0	58	17	5	80
調理具		137	337	6	1	481	376	600	2	2	980
	鍋，釜	137	103	0	1	241	376	150	0	2	528
	鉢	0	64	0	0	64	0	93	0	0	93
	擂鉢	0	70	0	0	70	0	269	0	0	269
	瓶	0	99	6	0	105	0	87	2	0	89
	その他	0	1	0	0	1	0	1	0	0	1
貯蔵具		1	724	88	0	813	3	597	56	0	656
	瓶	0	234	0	0	234	0	60	0	0	60
	壷	1	119	11	0	131	3	89	15	0	107
	甕A	0	46	0	0	46	0	73	0	0	73
	甕B	0	238	0	0	238	0	262	0	0	262
	鉢	0	86	77	0	163	0	112	41	0	153
	その他	0	1	0	0	1	0	1	0	0	1
灯火具		1075	504	12	5	1596	1273	186	1	1	1461
火具		15	131	0	1	147	24	118	0	1	143
化粧具		0	10	65	0	75	0	8	20	0	28
神仏具		14	137	76	0	227	8	49	19	0	76
喫煙具		0	52	0	0	52	0	49	0	0	49
調度具		0	610	18	0	628	9	528	15	0	552
蓋		16	730	162	23	931	10	288	70	2	370
合計		1259	4523	1624	34	7440	1704	4417	1489	12	7622

表37　検出陶磁器類集計表

(3) 焼　塩　壺

本遺跡出土の焼塩壺は、身188個体（底部計測）、蓋168個体（個体識別）であった。身･蓋ともに成形技法が異なるタイプが出土しており、時期的にもそれぞれ時間幅がみられた。身・蓋の分類については渡辺誠氏により詳細に行われているものに依拠し、これに従うこととする。

（1）身

身は成形技法の差などにより、6類に分かれる。

身A類

柱状の芯で粘土紐を輪積み成形しているもの。

身B類

板状粘土を芯に巻き付け、底部に粘土塊を充塡し、口縁部は段状に削り出され蓋受けを持つもの。

身C類

身B類の蓋受けが退化し、痕跡的になったもの。

身E類

器形全体を同時に型によってつくり、小型で器壁が極端に厚く、蓋受けを持たないもの。

身I類

形態は身B類と同様であるが、ロクロ成形のもの。

身L類

ロクロ成形による偏平な壺で、体部が極端に厚手のもの。

1～34は身A類である。円盤状粘土による底部から、粘土紐を輪積みに成形している。成形時の影響によるものか、ほとんどのものが六角柱形を呈しており、内・外面ともに僅かに稜線が認められる。口縁部は内・外両側に成形時の指頭圧痕が認められる。体部内・外面には粘土紐による継目の痕跡が認められ、接合痕は内傾である。胎土は密で直径1～3㎜の粗粒砂及び極粗粒砂を含む。この身A類には時期及び生産地を決定する上で重要な判断材料となる刻印が押されているものが多い。1～20は無印タイプのものである。21～33は「天下一堺ミなと・藤左衛門」、34には「天下一御壺塩師・堺見なと伊織」という刻印がそれぞれ2行に分割して記されている。これらの刻印は泉州湊村の焼塩メーカーである湊屋が、屋号の他に承応三（1654）年に女院御所より「天下一」の美号を拝してこれを加えたもの、及び延宝七（1679）年に鷹司殿より呼名「伊織」を拝名してさらに付け加えたものである。「天下一」という美号は、天和二（1682）年には幕府の禁令によって使用できなくなるため、この二種類の刻印の使用年代はそれぞれ1654～1679年・1679～1682年にあたる。

47は身B類である。内面には板状粘土による継目及び、芯を覆った粗い平織りの布目の痕跡が認められる。外側体部には「御壺塩師・堺湊伊織」と2行に分割して記された刻印が押されている。これは先述した湊屋の刻印で、幕府の禁令にともない「天下一」を削除したものである。したがって使用年代は天和二（1682）年以降となるが、その下限は不明である。

48・50～78は身C類である。口縁部はB類のようにはっきり削り出されておらず、痕跡的な程度蓋受

け部がつくられている。48は一重枠に「泉州麻生」または「泉川麻玉」と記された刻印を持つものである。枠が一重であるため、後者の可能性が考えられる。その他の刻印は50～60のような「泉湊伊織」という1行のものと、61～64のような「泉州磨生（両脇に、サカイ・御塩所）」という3行に分割して記された刻印とがみられる。使用年代は湊屋の子孫の記録によれば、「泉湊～」は湊村が堺町奉行所付から外れた元文三（1738）年以降のもので、「～磨生～」は正徳三（1713）年が上限で、いずれも下限は不明である。

35～47は身E類である。内側には成形時に僅かに回転させながら引き抜いた痕跡がみられる。容量は極端に少ない。いずれも無印であり、形態も特異であるため不明な点が多い。

79～81は身I類である。内・外面共にロクロ目が明確に認められ、蓋受け部のつくりも薄く鋭角的である。底部には回転糸切り痕が残る。

82～94は身L類である。体部が極端に厚く偏平で、底部の薄いもの（94）もある。胎土は緻密で雲母を多く含んでいる。

（2）蓋

蓋は形態上3類に大別できる。

蓋A類

上面がやや曲面的で、側面が緩やかに外側へ開くもの。

蓋B類

上面が平坦で、側面への変換点がはっきりしていて、垂下か、やや内側に傾くもの。

蓋D類

断面が逆凸字形を呈するもの。

95～117は蓋A類である。内外面ともに丁寧にナデ調整されているものが多い。側面が特に顕著であるのは、整形に伴うものかと思われる。上面とその裏側は指頭圧によって凹凸な面になっているものが多い。この形態は身A類に伴うものと思われる。

118～166は身B類である。内側には成形時にあてた布目痕が残るものが多い。外側全体に丁寧なナデ調整が施されているものが多く。この形態は身B・C類に伴うものと思われる。154～166の外側上面には方重に「泉州岸」と記された刻印が押されている。この印文は確認できた限りでは類例が出土していないので詳細は不明であるが、「泉湊～」、「泉州麻生」等の印例を考えると「～岸」は地名である可能性が考えられる。旧和泉国津田村は「泉州麻生」・「花焼塩・イツミ・ツタ」等の印文で知られる地だが、岸和田藩領であったことを考えると興味深い。

167～177は蓋D類である。他のものと異なり落し蓋で、胎土は灰白色で雲母を多く含み堅く緻密である。166～174には方重に「奈んばん里う・七度やき志本・ふか草四郎左衛門」と3行に分割して記された刻印が、175～177には方重に「奈んばん七度・本やき志本」と2行に分割して記された刻印が押されている。身L類に伴うものと思われる。

（松田　訓）

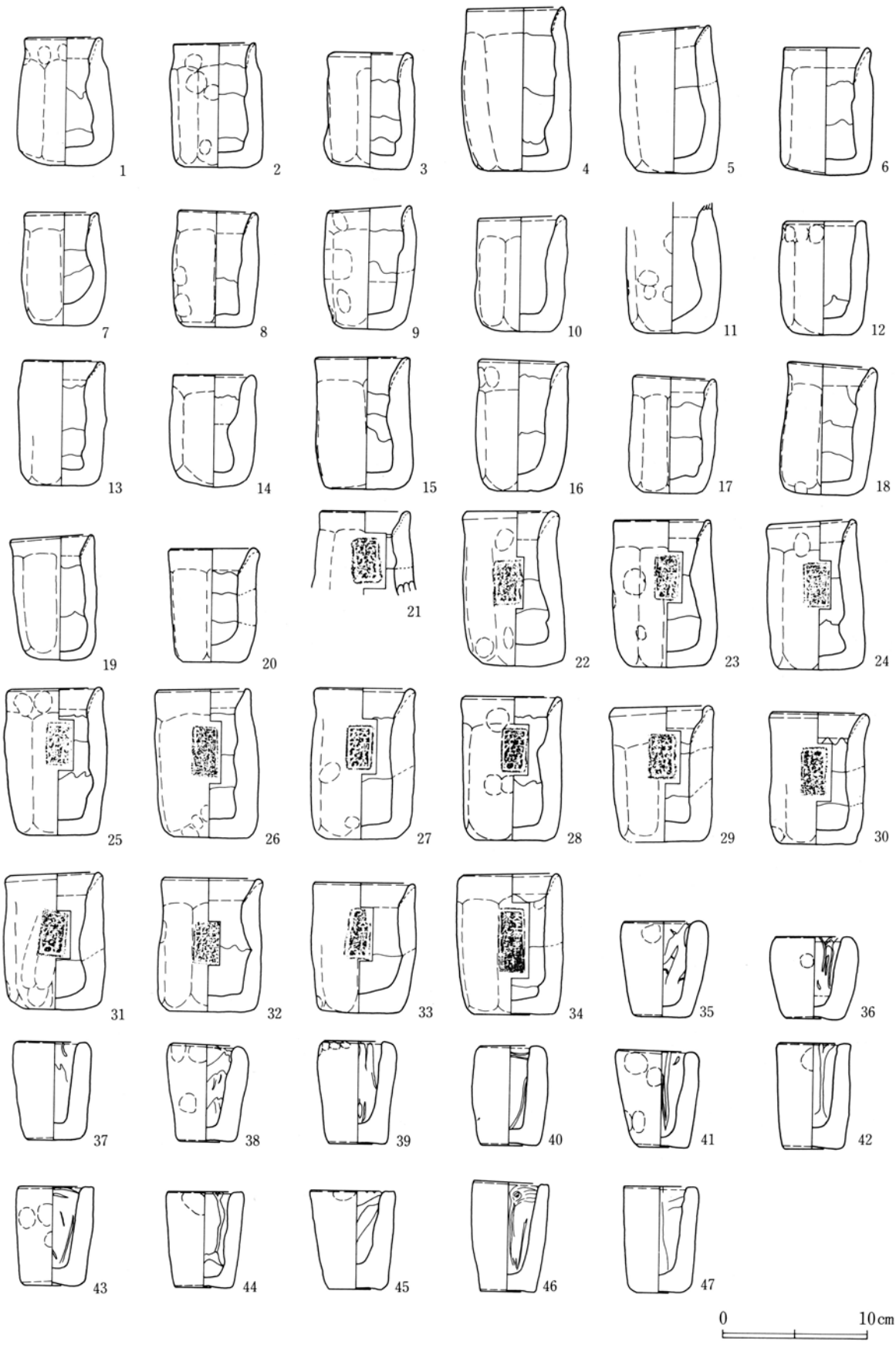


図214　焼塩壺実測図(1)

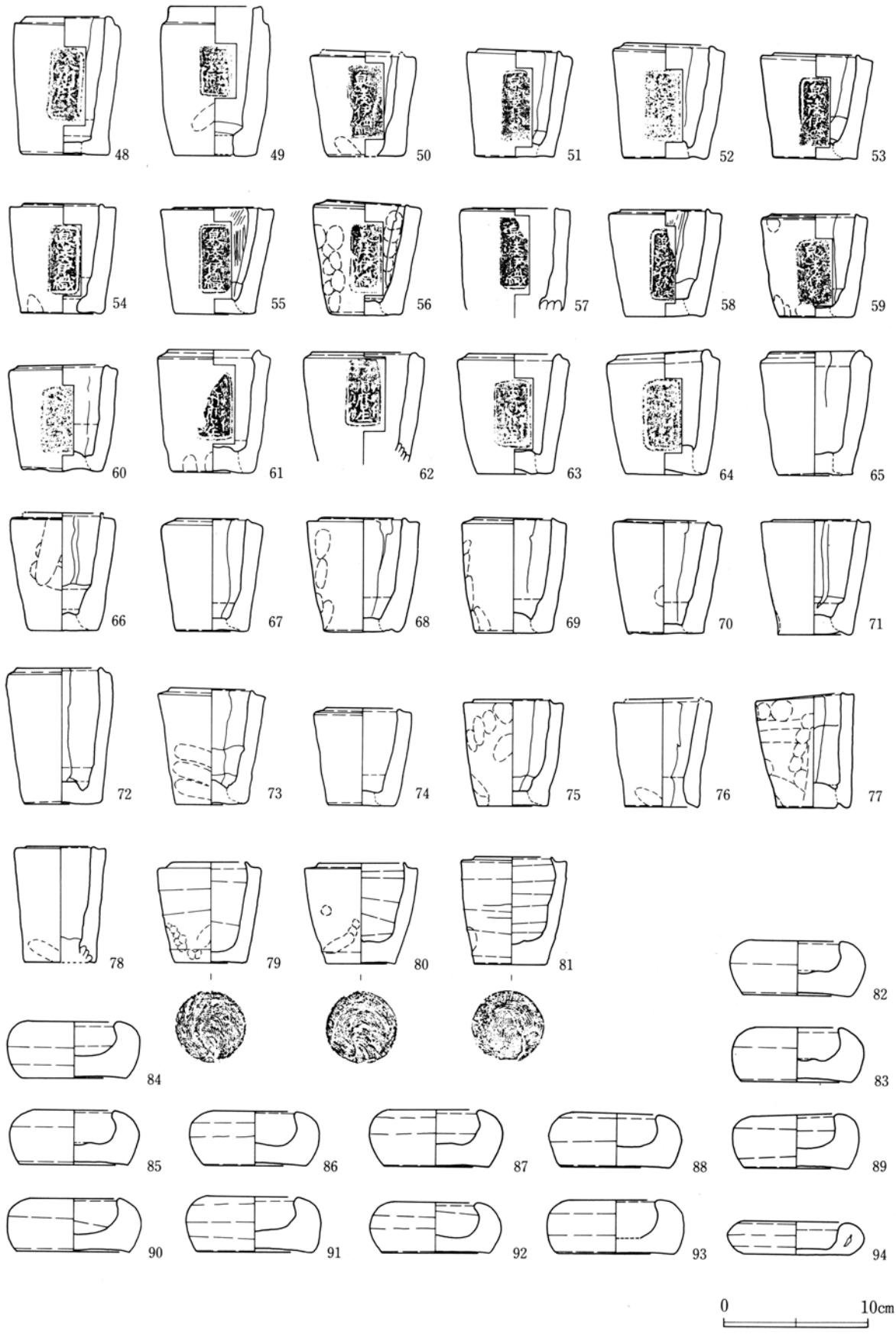


図215　焼塩壺実測図(2)

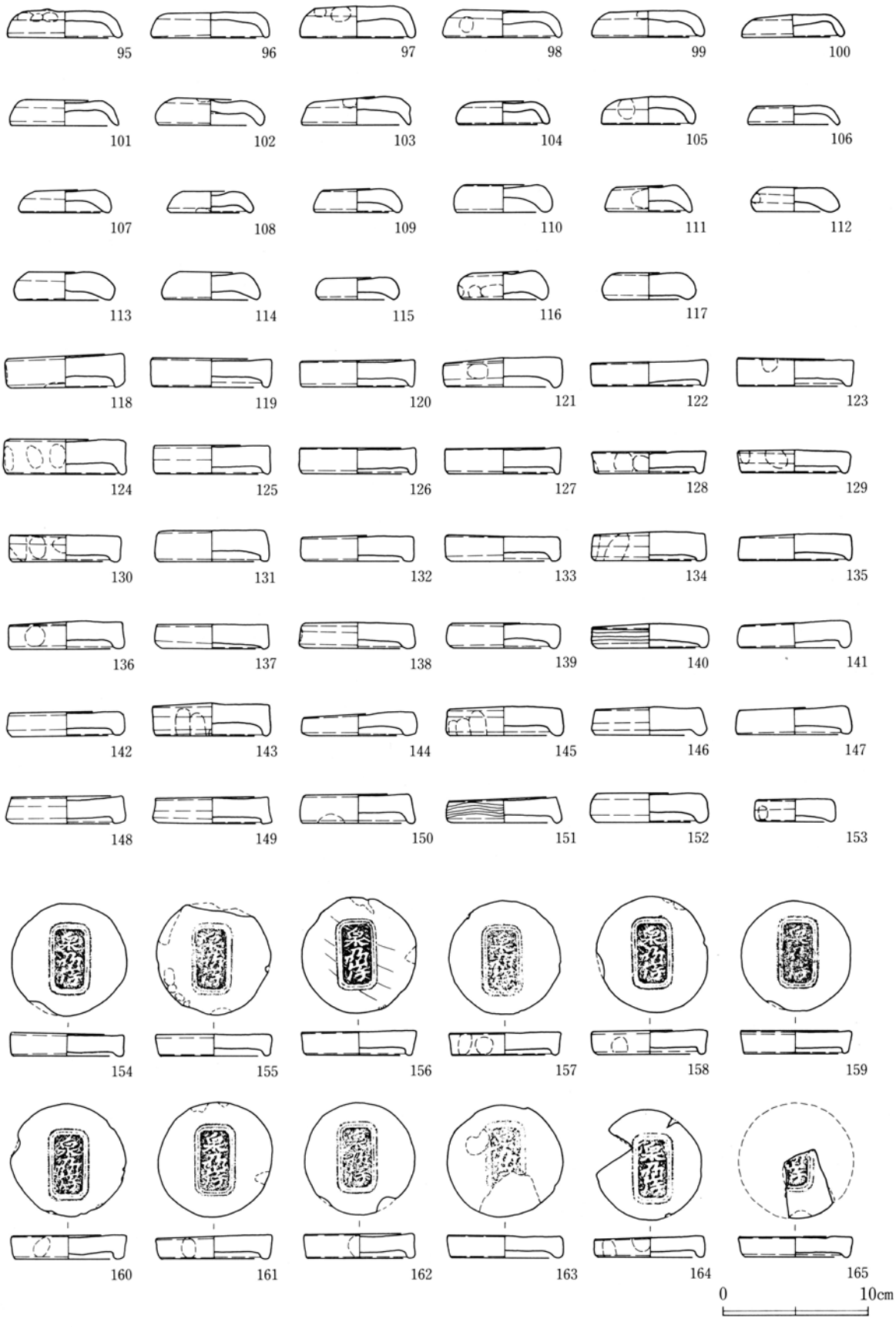
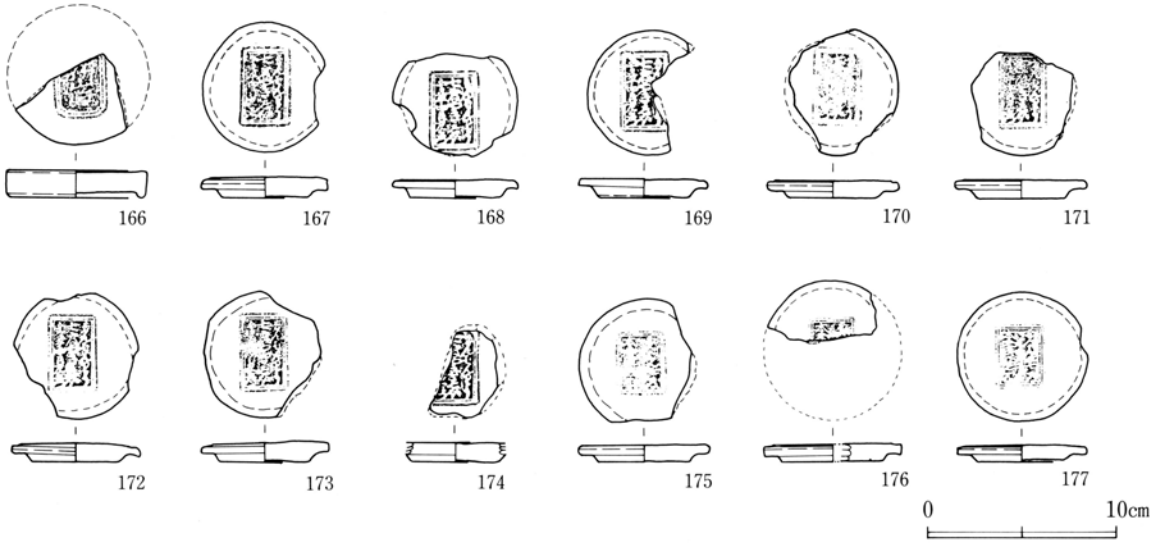


図216　焼塩壺実測図(3)



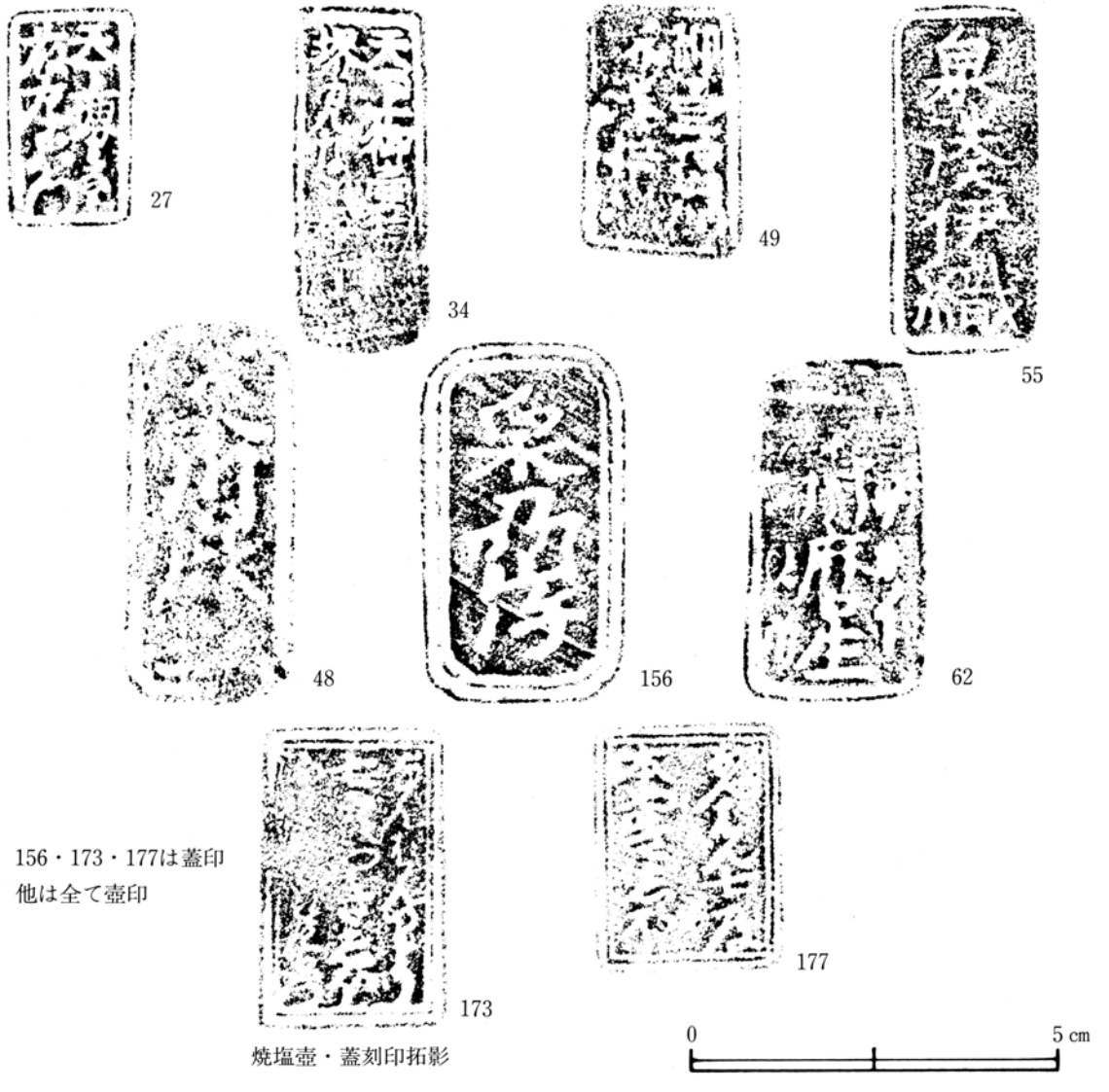


図217　焼塩壺実測図(4)・刻印拓影

焼塩壺（身）

図版番号	遺　構	種類	法　量（cm・cc）					有印
			器高	口径	肩径	底径	容積	
1	ＳＫ034	A	8.9	4.9		(3.7)	90	
2	ＳＫ341		8.5	5.4		5.0	80	
3	ＳＫ341		(7.9)	(5.2)		4.7	(65)	
4	ＳＫ401		11.3	(6.4)		6.0	(155)	
5	ＳＫ002		10.0	6.0		3.9	135	
6	ＳＫ215		8.7	5.7		5.7	95	
7	ＳＫ123		7.8	4.7		3.9	50	
8	ＳＫ118		8.0	5.1		4.6	55	
9	ＳＫ101		8.3	5.4		3.5	(90)	
10	ＳＫ304		7.9	5.6		4.5	60	
11	ＳＤ106		—	—		4.9	(75)	
12	ＳＫ206		7.9	5.2		4.2	70	
13	ＳＫ021		8.7	(5.3)		3.6	(60)	
14	ＳＤ104		7.8	5.4		4.6	60	
15	ＳＫ401		9.1	(6.1)		5.0	(80)	
16	ＳＫ210		9.1	5.7		4.3	65	
17	ＳＫ012		8.1	5.2		3.5	75	
18	ＳＤ106		9.0	5.5		4.6	90	
19	ＳＫ118		8.5	5.5		3.8	75	
20	ＳＫ002		7.9	5.5		3.9	70	
21	ＳＫ002		—	(5.7)		—	—	○
22	ＳＫ118		10.7	6.0		5.0	100	○
23	ＳＫ117		10.2	6.4		5.4	(125)	○
24	ＳＫ117		10.2	5.7		5.4	(115)	○
25	ＳＫ118		10.1	6.0		5.1	130	○
26	ＳＫ021		10.2	6.2		5.2	110	○
27	ＳＫ103		10.4	(6.2)		4.2	(130)	○
28	ＳＤ003		(9.9)	(6.4)		5.3	(115)	○
29	ＳＫ103		9.4	6.3		4.9	(100)	○
30	ＳＫ010		9.1	6.4		4.7	130	○
31	ＳＫ103		9.4	5.9		5.2	110	○
32	ＳＫ118		9.2	6.5		5.8	130	○
33	ＳＫ103		9.0	(6.2)		5.0	(125)	○
34	ＳＫ010		9.7	6.2		5.2	(145)	○
35	ＳＫ206下層	E	6.6	5.0		3.9	30	
36	ＳＫ333		5.7	4.7		3.7	30	
37	ＳＫ206		6.8	4.2		3.9	30	
38	ＳＫ206		6.7	4.4		4.0	30	
39	ＳＫ101		7.2	4.2		3.9	30	
40	ＳＫ101		6.9	(3.5)		3.6	(30)	
41	ＳＫ206		6.7	4.3		3.3	30	
42	ＳＫ206下層		7.4	4.2		3.7	30	
43	ＳＫ333		6.9	4.6		3.9	30	
44	ＳＫ101		6.6	(5.0)		(3.7)	30	
45	ＳＫ101		6.8	(5.8)		3.7	(30)	
46	ＳＫ219		7.6	4.6		3.8	35	
47	ＳＫ101	B	7.4	3.8		3.7	35	

図版番号	遺　構	種類	法　量（cm・cc）					有印
			器高	口径	肩径	底径	容積	
48	ＳＫ101	C	9.6	5.4	7.3	5.8	(145)	○
49	ＳＫ104		10.3	(6.0)		—	—	○
50	ＳＫ101		(7.3)	(5.5)	7.2	(5.2)	(90)	○
51	ＳＫ002		7.4	5.6	7.3	5.6	100	○
52	ＳＫ315		8.0	6.0	7.8	5.9	115	○
53	ＳＫ002		7.3	5.8	7.7	5.9	105	○
54	ＳＫ105		7.6	(5.5)	(7.3)	5.8	(105)	○
55	ＳＫ002		7.5	5.9	(7.8)	5.6	(100)	○
56	ＳＫ202		(7.9)	(5.6)	7.3	5.0	85	○
57	ＳＫ002		—	(5.8)	(7.6)	—	—	○
58	ＳＫ002		7.4	(5.9)	(7.7)	5.5	(110)	○
59	ＳＫ101		7.2	(5.8)	(7.2)	4.9	(80)	○
60	ＳＫ216		(7.4)	(6.1)	7.4	5.5	105	○
61	ＳＫ103		8.6	(6.3)	(7.8)	(5.4)	(115)	○
62	ＳＫ115		—	(7.2)	8.4	—	—	○
63	ＳＫ115		8.9	(6.3)	(7.2)	5.2	(105)	○
64	ＳＫ104		8.5	6.2	7.8	5.6	120	○？
65	ＳＫ104		8.6	6.2	7.8	5.1	110	
66	ＳＫ101		(8.2)	(5.4)	6.9	4.5	(80)	
67	ＳＫ101		7.8	(4.9)	(6.9)	(4.9))	100	
68	ＳＫ207		7.9	5.7	7.8	5.3	100	
69	ＳＫ202		(8.0)	(5.4)	7.2	5.2	100	
70	ＳＫ207		7.9	5.6	7.3	5.3	90	
71	ＳＫ101		8.0	(5.9)	(7.5)	5.0	(100)	
72	ＳＫ101		9.4	(5.8)	(7.0)	4.5	135	
73	ＳＫ014		8.1	(5.6)	7.5	4.3	100	
74	ＳＫ101		6.8	(5.0)	6.6	4.6	(60)	
75	ＳＫ101		7.4	5.3		4.9	80	
76	ＳＫ101		(7.5)	(5.1)		—	(95)	
77	ＳＫ103		7.8	5.2	6.8	4.9	95	
78	ＳＫ009		(8.1)	(4.6)	(6.2)	(4.8)	—	
79	ＳＫ101	I	7.0	5.2	7.2	4.9	95	
80	ＳＫ101		7.0	(6.0)	(7.8)	4.8	(100)	
81	ＳＫ315		7.5	5.4	7.4	5.1	110	
82	ＳＫ002	L	3.8	6.1		7.5	50	
83	ＳＫ002		3.8	5.9		7.7	55	
84	ＳＫ101		3.9	5.9		7.2	45	
85	ＳＫ002		3.8	5.7		7.6	50	
86	ＳＫ118		3.8	5.9		7.1	50	
87	ＳＫ118		4.0	6.0		7.2	50	
88	ＳＫ010		3.8	5.9		7.7	50	
89	ＳＫ118		3.7	5.7		7.3	40	
90	ＳＫ002		3.7	6.2		7.8	50	
91	ＳＫ118		3.9	6.3		7.9	45	
92	ＳＫ002		3.6	5.7		7.4	55	
93	ＳＤ002		(3.7)	(6.3)		(7.9)	—	
94	ＳＫ219		(2.3)	(7.3)		(7.4)	(4.0)	

表38　焼塩壺観察表(1)

焼塩壺（蓋）

図版番号	遺　構	種類	法　量（cm・cc）				有印
			器高	口径	肩径	底径	
95	SK117	A	1.8	7.6	5.2		
96	SD104		1.7	7.8	6.1		
97	SK117		2.2	7.4	5.5		
98	SK121		1.9	7.8	5.8		
99	SK121		1.8	7.3	5.1		
100	SK503		1.5	6.8	5.2		
101	SK002下層		1.7	7.4	5.4		
102	SK021		1.8	7.1	5.0		
103	SK115		1.9	7.4	5.8		
104	SK405		1.6	(6.0)	(4.6)		
105	SK118		1.9	6.2	4.3		
106	SK021		1.3	6.2	4.5		
107	SK304		1.6	5.9	3.5		
108	SK343		1.5	(5.6)	(4.0)		
109	SK219		1.6	5.7	3.5		
110	SK219		1.7	6.1	3.6		
111	SK219		1.8	5.8	3.4		
112	SK333		1.7	5.1	4.4		
113	SK002下層		1.9	6.2	—		
114	SK101		1.9	6.2	1.7		
115	SK206下層		1.6	5.1	3.8		
116	SK101		1.9	5.5	—		
117	SK101		1.9	5.5	4.1		
118	SK219	B	2.2	7.2	6.3		
119	SK101		2.0	7.8	6.4		
120	SK002		1.8	7.6	6.6		
121	SK219		2.0	7.3	6.3		
122	SK115		1.7	7.4	6.6		
123	SK103		1.9	7.5	6.7		
124	SK010		2.4	(8.0)	6.8		
125	SK104		(2.0)	(7.6)	(6.7)		
126	SK115		1.8	7.4	(6.5)		
127	SK115		1.8	7.5	6.6		
128	SK101		(1.5)	(7.0)	6.4		
129	SK101		1.7	7.0	6.0		
130	SK101		1.9	7.0	6.2		
131	SK206		(2.0)	(7.7)	(6.7)		
132	SK101		1.7	7.2	6.1		
133	SK101		1.7	7.0	5.9		
134	SK105		2.0	7.3	6.4		
135	SK206下層		1.8	7.6	6.5		
136	SK207		1.9	7.3	6.1		
137	SK002	B	1.7	7.2	6.3		
138	SK101		1.8	7.2	6.1		
139	SK202		1.8	6.9	5.9		
140	SK101		1.7	7.3	6.3		
141	SK014		1.8	7.2	6.2		
142	SK101		1.7	7.3	6.3		
143	SK206		2.3	7.4	6.8		
144	SK101		1.4	6.6	5.8		
145	SK101		2.0	7.3	6.0		
146	SK101		1.9	4.3	6.1		
147	SK002		1.9	7.6	6.5		
148	SK002		1.9	7.3	6.3		
149	SK002		1.8	7.3	6.6		
150	SK104		2.0	7.4	6.2		
151	SK101		1.8	7.3	6.3		
152	SK207		2.0	7.3	6.0		
153	SK333		1.6	5.0	4.4		
154	SK101		1.5	7.1	6.3		○
155	SK101		1.5	7.3	6.4		○
156	SK101		1.7	7.1	6.4		○
157	SK101		1.6	7.2	6.4		○
158	SK101		1.7	7.3	6.6		○
159	SK101		1.6	7.1	6.4		○
160	SK101		1.6	7.2	6.4		○
161	SK101		1.6	7.0	6.3		○
162	SK101		1.7	7.1	6.2		○
163	SK101		1.5	7.3	6.4		○
164	SK315		1.4	7.1	6.3		○
165	SK101		(1.5)	(7.1)	(6.6)		○
166	SK101		(1.4)	(7.1)	(6.4)		○
167	SK010	D	1.1	6.7	5.2	4.6	○
168	SK010		1.0	6.5	5.6	4.8	○
169	SK115		1.0	6.9	5.6	4.7	○
170	SK002		0.9	(6.9)	5.3	4.8	○
171	SK002		1.0	(6.9)	5.4	4.4	○
172	SK002		1.0	6.8	5.5	4.1	○
173	SK002東上層		0.9	6.7	5.5	4.7	○
174	SK002		1.0	—	(5.4)	4.6	○
175	SK002東下層		0.9	(6.8)	(5.7)	(4.8)	○
176	SK002		0.9	(7.3)	(5.8)	(5.9)	○
177	SK002		0.9	6.9	5.3	4.7	○

参考文献
渡辺　誠　「焼塩」『講座日本技術の社会史2　塩業・漁業』1985

表39　焼塩壺観察表(2)

(4) 瓦　　類

瓦類については、下記のような分類で整理を行った。

本瓦
- 軒平瓦：中心葉の形と子葉の組み合わせで分類（１～25)。
- 軒丸瓦：巴と珠文数で分類。小ぶりの一群は掛瓦に多くみられた（26～37)。

桟瓦
- 軒桟瓦：（38～49、滴水瓦を除く）
- 滴水瓦:（40～43)
- 家紋瓦：桟瓦ではあるが、模様に家紋が入っているもの（54～61)。

これ以外の瓦類に関しては、以下個別遺物の記述中で名称を述べることとしたい。

(47) は、水返し付きの桟瓦である。これには金箔が塗布されていた痕跡が窺えた。(50)～(53) は菊丸瓦の丸瓦部分で巴文･菊文（陽刻、陰刻の２種類）のタイプが見られる。(54)～(61) は家紋タイプの桟瓦で、(54)は五三桐が陽刻されており、清洲城下町で出土する戦国時代に見られる瓦である。(55)、(56) はいずれも竹腰家の家紋が刻されており、前者は寛文三年以前の梅鉢文、後者は四ツ目文と言われるものである。

	I						II	III			IV								V						VI	VII	VIII	IX	X	屋敷地
											①						②		①				②								
	1	2	3	4	5	6	1	1	2	3	1	2	3	4	5	6	1	2	1	2	3	4	1	1	1	1	1	1	1	
SK015	*	*						*																						A
SD203			*	*			*			*	*	*				*											*		*	B
SK210			*	*	*			*	*	*	*	*	*				*		*						*	*				B
SK401										*																				B
SD106		*																							*					C
SD104																						*			*					C
SK304						*		*	*		*		*	*							*				*	*	*			D
SK123								*	*		*		*	*	*				*	*	*		*		*	*	*			D
SK209												*																		D
SK212																	*													D
SK206								*			*								*											D
SK211								*			*		*	*				*	*	*										D
SK219											*																			D
SK101								*	*		*		*	*	*				*	*	*	*	*		*	*	*			D
SK333	*								*		*																	*		D

表40　近世軒平瓦出土遺構対応表

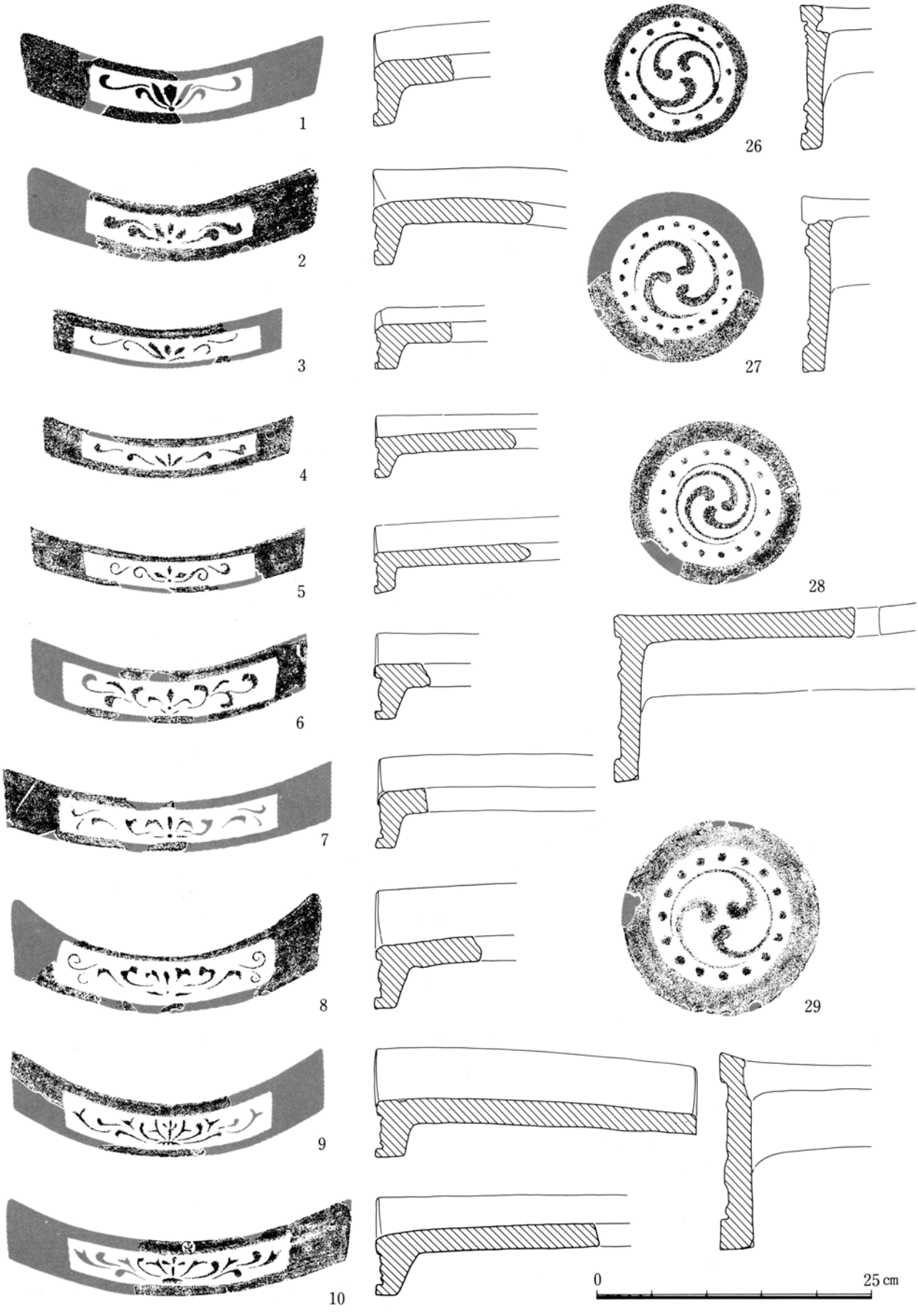


図218　近世瓦実測図(1)

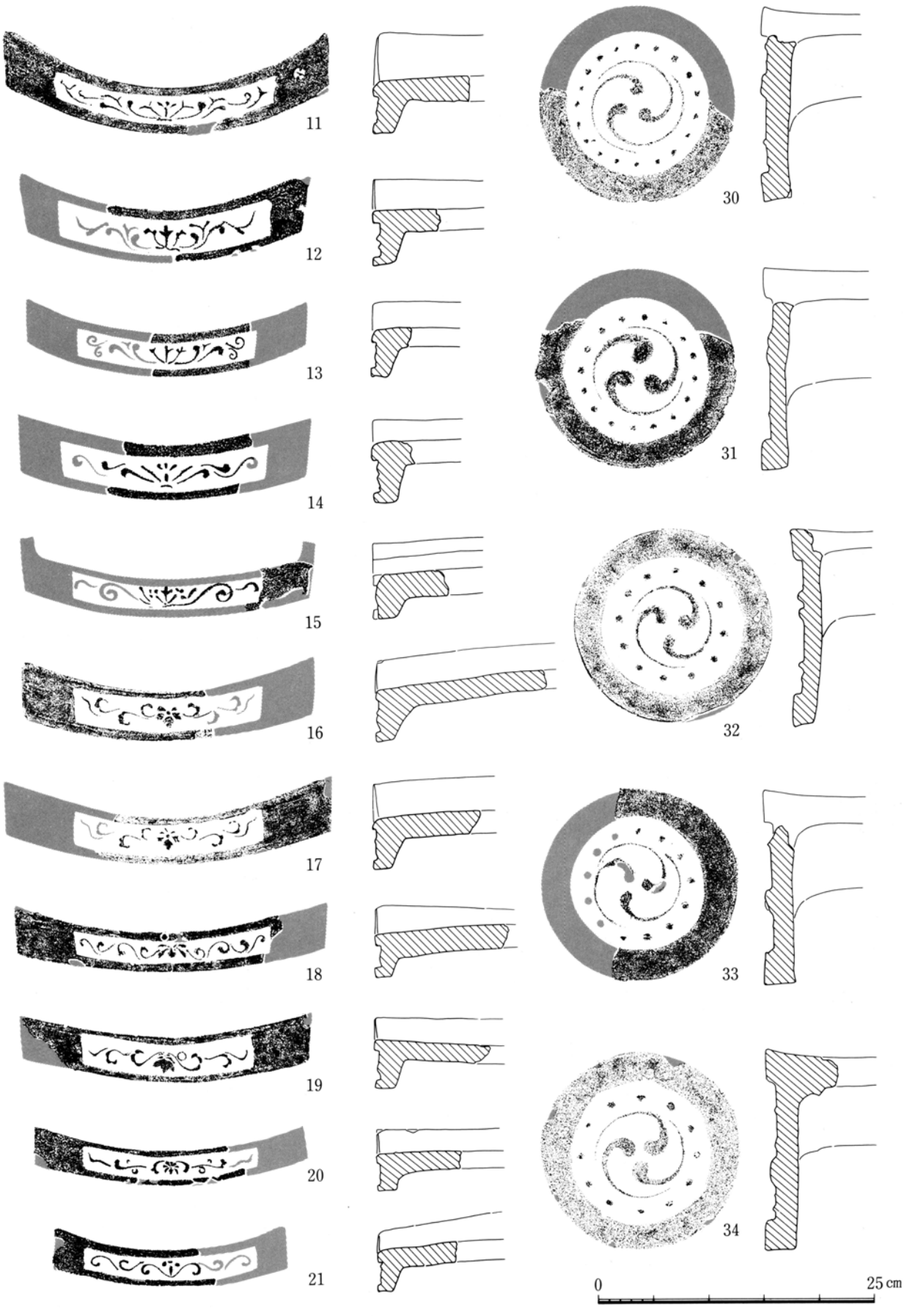


図219　近世瓦実測図(2)

(57)～(67)は鬼瓦の一群である。(57)は山澄氏の家紋である六ツ日足文が陽刻されている。(58)はさきにみた竹腰氏の寛文三年以前の梅鉢文が見られる。(59)から(61)は裏葵と言われる家紋が刻されている。この裏葵と呼ばれる家紋については、『金城温古録』(1)に「うら御紋」あるいは「もと葉うら御紋」と記されてはいるが、明確な由緒は定かではない。(62)は巴紋の、(63)は水の文字が刻まれた鬼瓦の一部である。(64)は同じく鬼瓦の一部であるが文様が花状であることを除けば、それ以外の全体の意匠は不明である。また(65)・(66)についても『金城温古録』(1)に「御深井丸吹貫御門棟の鬼板」、「御本丸御風呂屋の御紋形」として記載されている桃のつぼみ、若しくは葵つぼみ形の鬼瓦の一部である可能性を持つ。(67)は「誂主尾州名古屋(後欠)□□羽根田甚六　享保六辛丑年三(カ)」と線刻されており、家臣の屋敷の作事葺師の棟梁が係わっている点が注目される。また(68)は「濃州　御瓦師　金兵衛」の刻印がみられ、美濃の瓦師が尾張藩の家臣の屋敷の造成に関係していたことが理解できる。(69)、(70)は掛瓦で菊水文が描かれている。(71)と(72)は同一個体と思われ、本瓦の軒平瓦を写した織部の瓦である。その釉調等から屋根に葺く事を目的としたのではなく、風炉敷と呼ばれ、茶会等の席上、風炉の下に敷いたと考えられている。(73)も織部の丸瓦を写したもので、用途は不明である。上記の3点の遺物については、不明な点が多く、その成形技法が瓦職人が用いる瓦作製時に用いる技法ではなく、例えば(73)はロクロをもちいた輪積み成形で、円筒状に作製したものを半截している。これはあきらかに陶磁器等の製作技法が用いられており、その面からもこの3点の瓦が本来の使用目的とは異なる用途のために作製されていることが推測される。(74)、(75)は塼と称される。これらも織部の釉調がほどこされており、焼成窯は、瀬戸市穴田町に所在する穴田第1号窯から同一の製品(敷瓦)が出土しており(2)、尾張藩祖徳川義直の廟所である定光寺の焼香殿に使用されているものと同タイプのものである。

(川井啓介)

註

(1)　『金城温古録』2(『名古屋叢書続編』　名古屋市教育委員会　1965)

(2)　『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要　Ⅷ』(瀬戸市歴史民俗資料館　1988)

番　号	出土遺構	備　考	PL
1	SK015		47
2	表採		47
3	SD203		47
4	SK312		47
5	SK304		47
6	SD203		47
7	SK206		—
8	SK101		47
9	SK304		47
10	SK304		47
11	SK211		47
12	SK209		47
13	SD203		47
14	SK210		—
15	SK211		47
16	SK101		47
17	SK123		47
18	SK101		47
19	SK304		47

番　号	出土遺構	備　考	PL
20	SK101		47
21	SK101		47
22	SK101		47
23	SK304		—
24	SK333		47
25	SD203		47
26	SK210		48
27	SK210		48
28	SK210		48
29	SD203		48
30	SK304		48
31	SK304		48
32	SK211		48
33	SK123		48
34	SK123		48
35	SK101		48
36	SK118		48
37	SK333		48
38	SK327		47

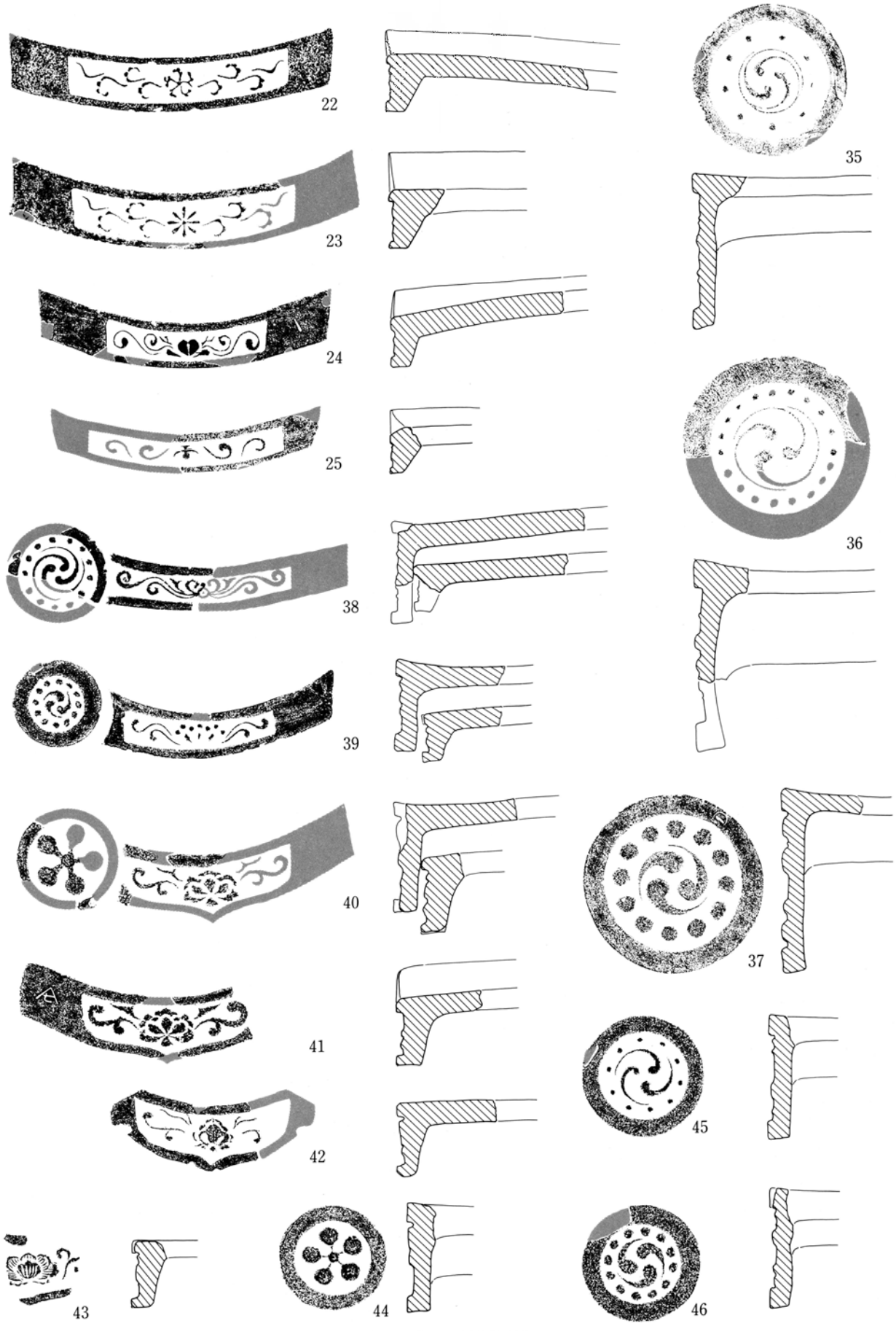


図220　近世瓦実測図(3)

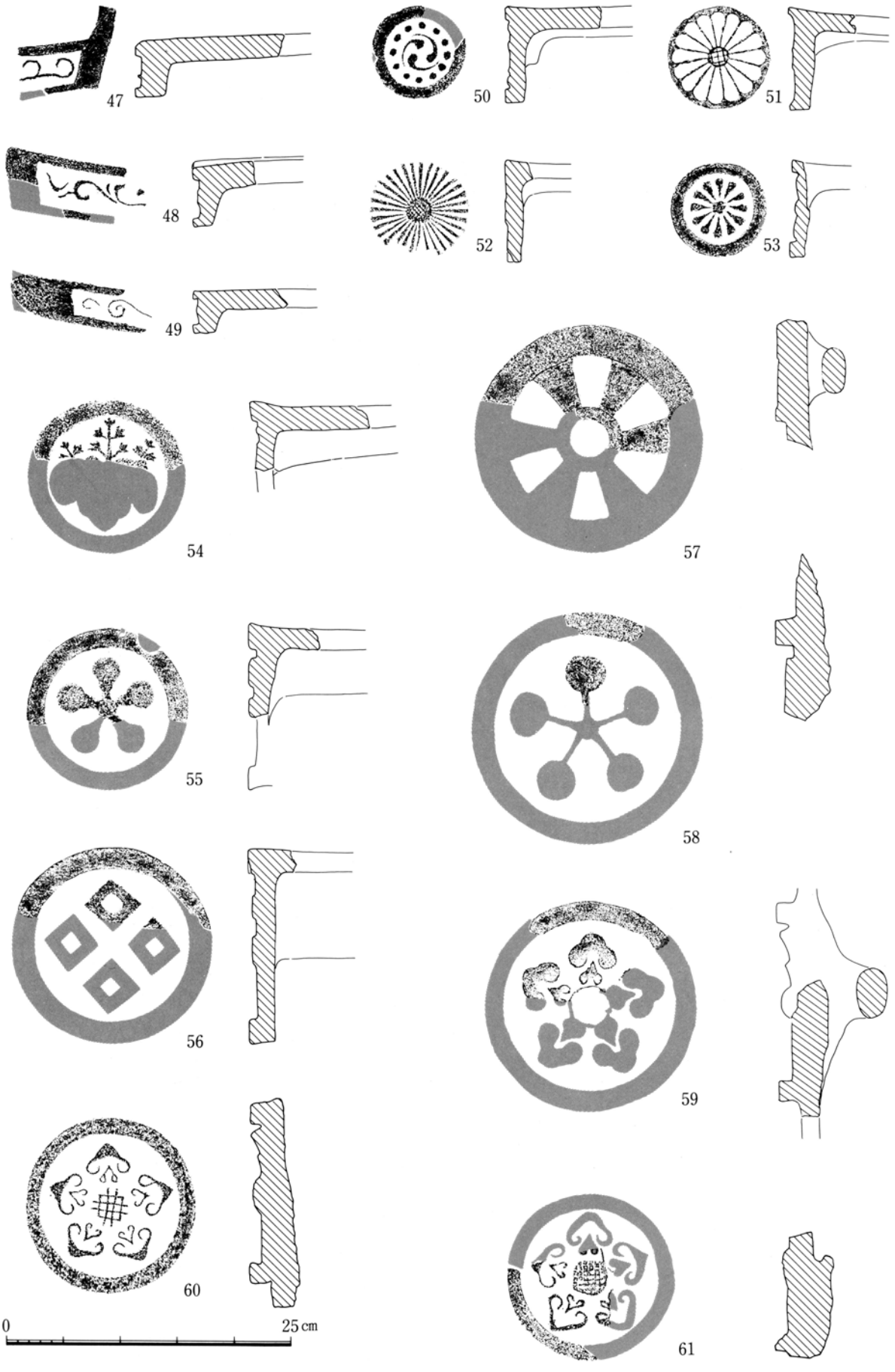
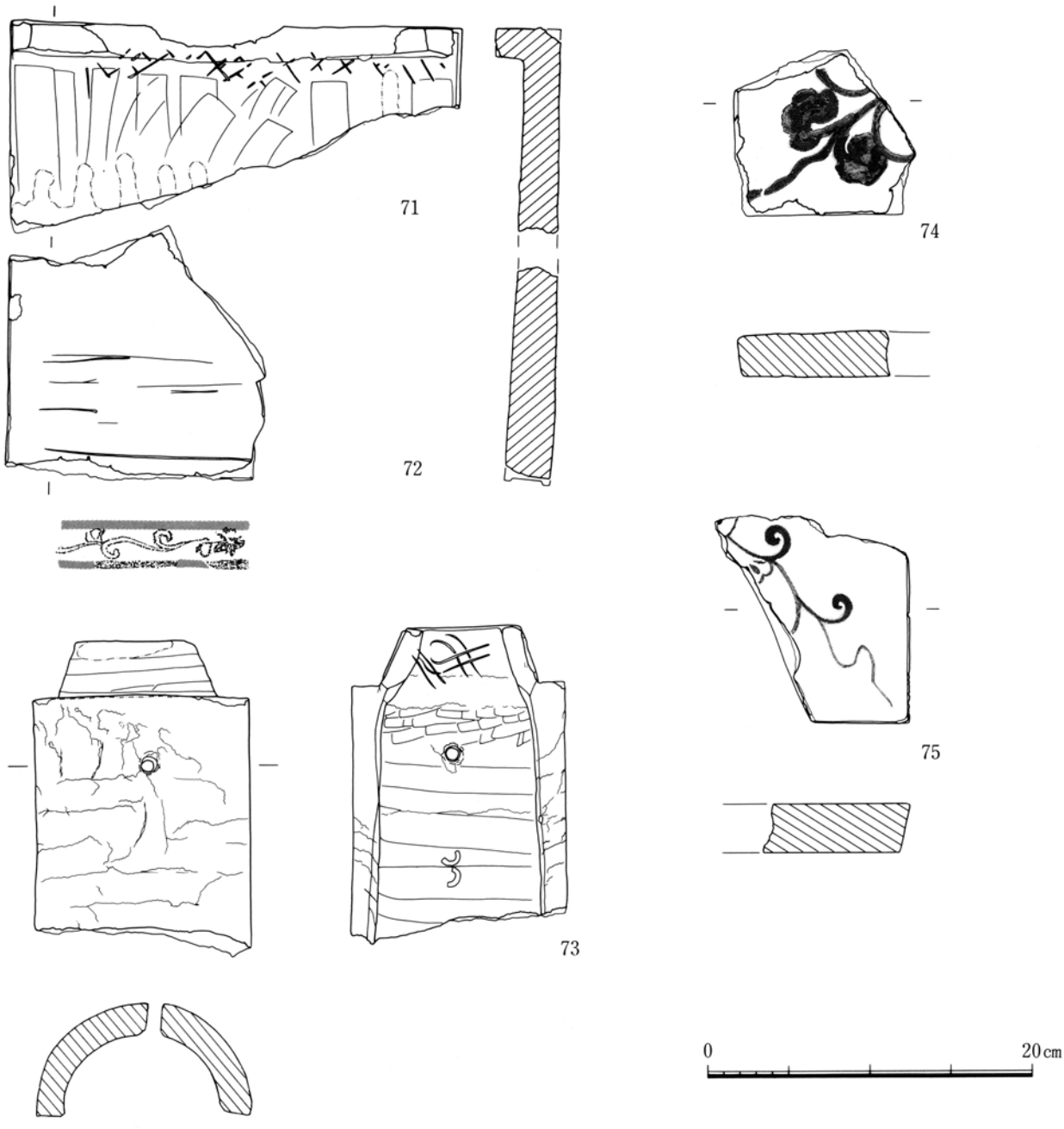


図221　近世瓦実測図(4)

図222　近世瓦実測図(5)



番　号	出土遺構	備　考	PL
39	検Ⅰ		47
40	表土ハギ		47
41	ＳＳ301		48
42	検Ⅰ		48
43	表土ハギ		48
44	ＳＫ127		49
45	ＳＫ002		49
46	ＳＫ101		—
47	ＳＤ145		48
48	ＳＤ104　下層		48
49	ＳＫ101		48
50	ＳＫ127		—
51	ＳＫ002　下層		49
52	ＳＫ304		49
53	ＳＫ101		49
54	0区撹Ⅰ		49
55	検Ⅰ		49
56	南壁一括		49
57			49

番　号	出土遺構	備　考	PL
58	ＳＤ203		—
59	ＳＫ211	—	
60	ＳＫ009		49
61	ＳＫ101		49
62	ＳＤ104　下層		—
63	ＳＫ333		—
64	ＳＫ206		—
65	ＳＤ203		—
66	ＳＫ101		—
67	ＳＤ001		49
68	検Ⅰ		—
69	検Ⅰ		49
70	ＳＫ127		—
71	ＳＫ101		—
72	ＳＫ101		—
73	ＳＫ101		—
74	ＳＤ104　上層		—
75	ＳＫ210		—

図223　近世瓦実測図(6)

（5）　人　　形　　類

今回の発堀調査で出土した人形類は、個体識別法で、包含層中の出土遺物も含めると総数1214点にのぼる。但し、遺物の出土状況には、若干の偏りが見られ、それが逆に遺構を特徴付ける材料となっている。その点については後述することとし、まずは分類の基準を示す。

1．人形　　1．人物　　1—小僧、2—神様、3—その他

2．動物　　1—鳥（1-とり、2-にわとり）、2—馬（1-馬、2-騎馬人物）

3—猫、4—その他

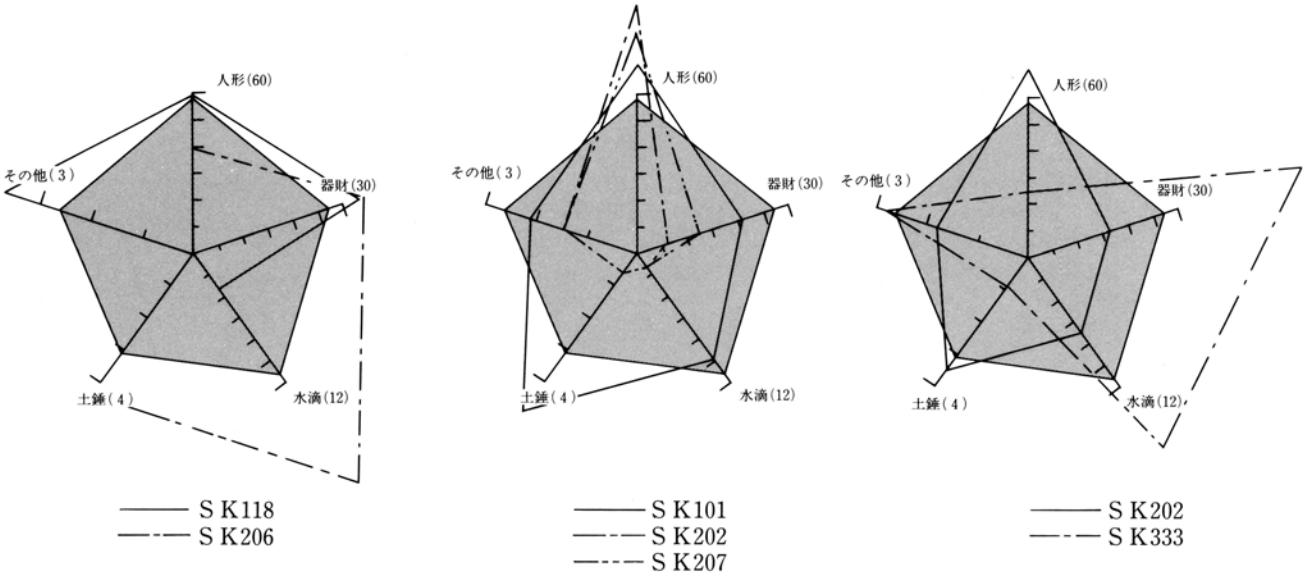


図224　土坑出土人形類の組成パターン

遺構	人形			器財			水滴			土錘	その他	不明	合計
	人物	動物	その他	建造物	調理具	その他	方形	形象	その他				
SD103	1			2					1			1	5
SD104		2		1						1		1	5
SK002					5	1			1		1	1	9
SK009	1	3			1			1					6
SK014	2	6		1				1	1	1		1	13
SK101	108	131	1	9	50	24	10	19	10	19	8	88	477
SK104				1	1	1		1					4
SK118	2	14		2	6	1					1	16	43
SK123				2	2			4	1				9
SK202	52	79		1	8			2		1	2	14	159
SK206	6	12		7	8	1	1	7	2	2		15	61
SK207	23	37	1		5	4		1		1	1	8	81
SK208	2	6											8
SK216		5		1	1			1				1	9
SK301	3	1										1	5
SK333	13	12	1	17	31	10	6	10	3	1	3	15	122
SK346	2				2			1		1	1		7
他の遺構		6			8	3	2	8	3	4	5	5	43
検出	18	22		24	24	16	4	9	6	1	5	18	147
小計	233	336	3	68	152	61	24	65	28	32	27	185	1214
合計		572			281			117		32	27	185	1214

表41　近世人形類集計表

2．器財　　1．建造物　　1―家、2―灯籠、3―橋、4―船、5―その他
　　2．調理具　　1―なべ（行平）、2―かま（茶がま、羽釜）、3―（くど、かまどへっつい、こんろ）、4―土瓶（鉄瓶）、5―銚子、6―蓋（なべ・かま等と明確に対になるものは、なべ・かまとする）
　　7―その他
　　3．その他　　1―紅皿、2―文具、3―その他
3．水滴　　1．方形　　1―模様入り、2―無文
　　2．形象　　1―人物、2―動物、3―植物、4―器財、5―その他
4．土錘　　1―大、2―中、3―小
5．その他　　1―合子、2―型抜き、3―鈴、4―貨幣、5―その他
0．不明

以上の分類に従って、個体識別法により分類した人形類の一覧が表41である。これをみると、遺構からの出土については、ＳＫ101、ＳＫ202、ＳＫ207、ＳＫ333の４遺構に集中していることが判る。中でもＳＫ101は477個体と全体の39.3％が出土している。但し、ＳＫ101、ＳＫ202、ＳＫ207の３遺構はＳＫ207→ＳＫ202→ＳＫ101の順で掘削されており、それぞれが切り合い関係を持ち、本来の遺物の帰属とは異なる遺構で出土している可能性がある。このことを遺物の構成から考えてみると、ＳＫ207は陶磁器類の出土は見られず、基本的に無遺物の遺構であると考えられる。ここではこのＳＫ207から人形類のみが出土しているとは考えにくく、またＳＫ202と比較した場合、人形類の構成比も相似形をしている。このことからＳＫ207として扱った遺物群については、本来はＳＫ202の遺物であったと考えられる。同様のことがＳＫ101とＳＫ202に関しても言えると思われる。但し、水滴、土錘については、ＳＫ202では出土しておらず、ＳＫ101本来の遺物群としてとらえることができる。

また、その他の遺構から出土している人形群については、組成パターンに表現される様に、水滴・土錘はＳＫ206が、器財・水滴はＳＫ333が、ＳＫ202と比べても抽きんでた数値を示している。さらにＳＫ118に関しては、人形・器財が大半を占め、水滴・土錘の出土はほとんど見られない。この結果から、人形類の投棄は限定された遺構にのみで行われており、無作為になされているのではない事が理解される。そしてその遺構や立地空間の性格付けを人形類の組成から考えることもあながち無理のないことといえるのではなかろうか。

（川井啓介）

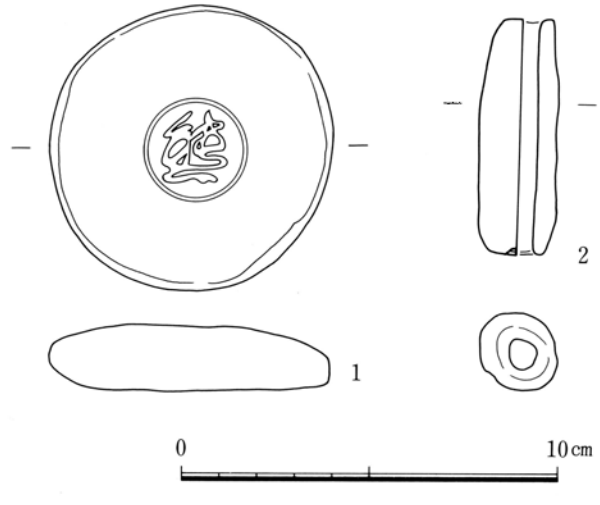


図225　近世土製品実測図

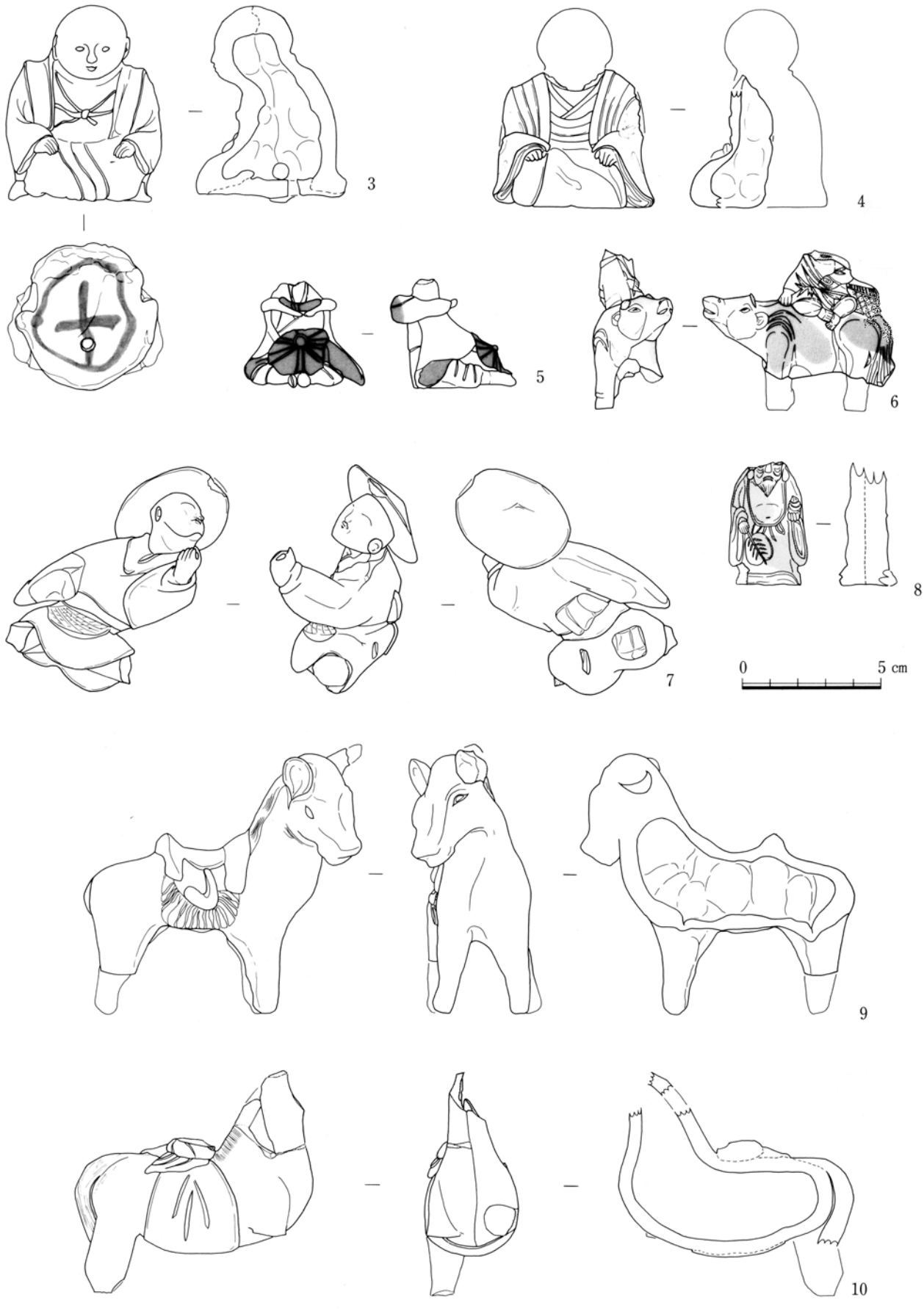


図226　近世人形類実測図(1)

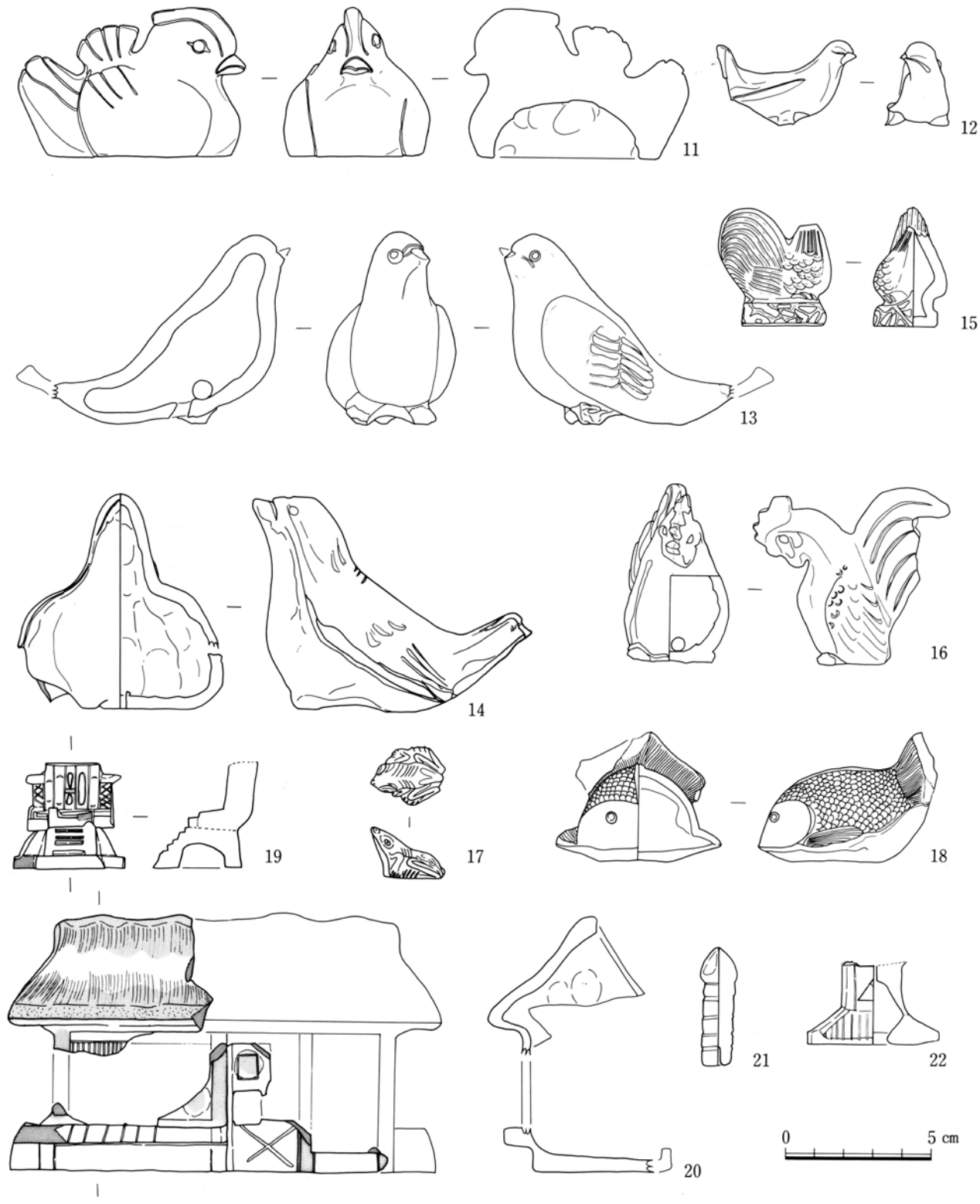


図227　近世人形類実測図(2)

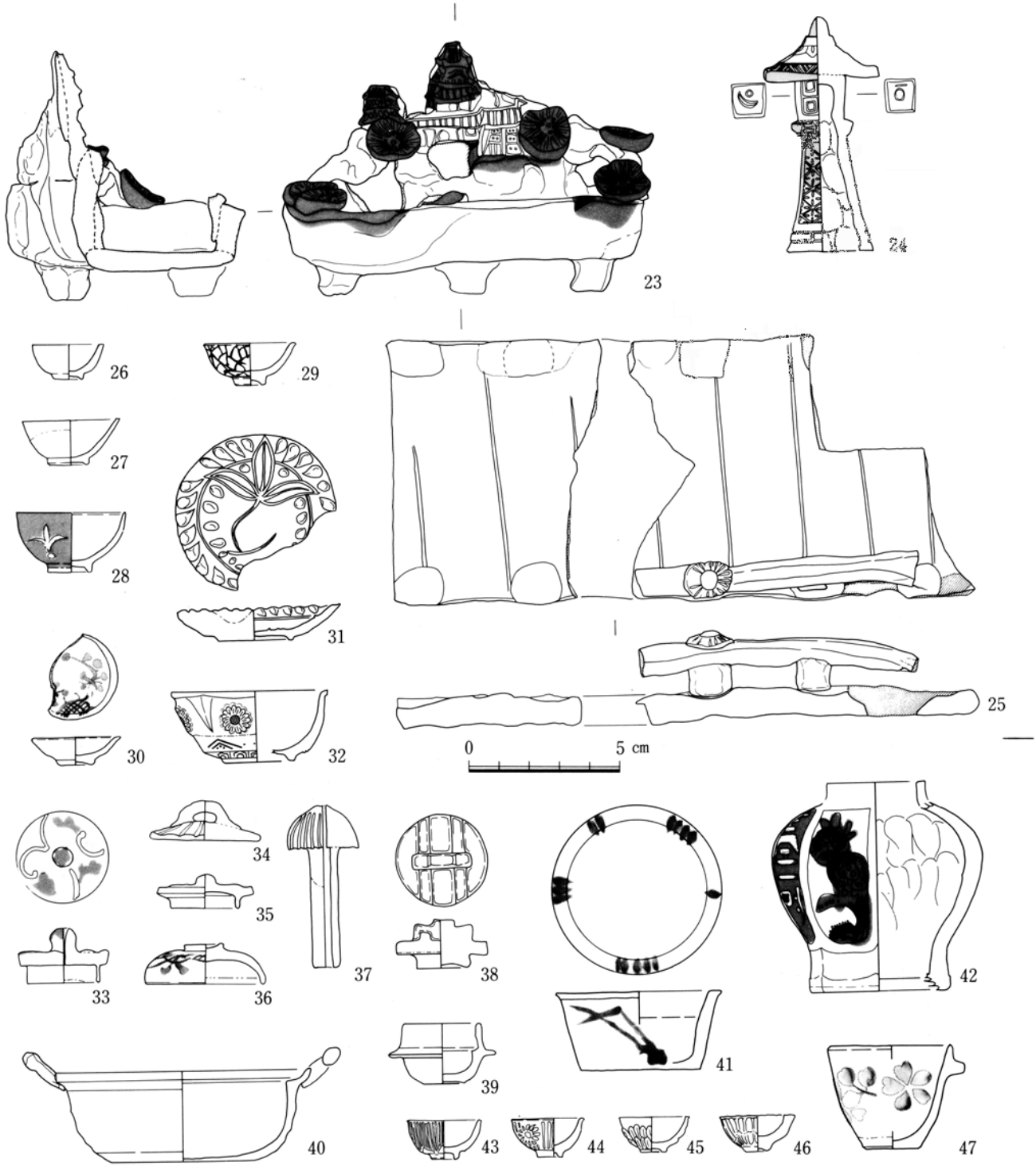


図228　近世人形類実測図(3)

図229　近世人形類実測図(4)

(6) 木　製　品

今回の発掘調査で出土した木製品は、大きく漆器類、箸、曲物、結桶、下駄、建築部材、その他に分類できる。中でも漆器のなかに蒔絵が多く含まれていること、建築部材が限られた遺構から出土していることが特徴である。

漆器については、17世紀後半から18世紀代の遺構から多く出土し、該当の遺物を出土したＳＫ210、ＳＤ104、ＳＤ106等から判断すると一般的傾向として汚水溜まりからの出土といえる。またＳＫ014からは供膳具の椀の蓋と身が出土しているが、いずれも蒔絵の製品であり、単なる汚水溜まりとはやや性格を異にするかもしれない。

箸については、全出土量のうち70％に相当するものがＳＫ212から出土している。この遺構はＳＫ123、ＳＫ010の上層と切り合い関係が見られる。ＳＫ212とＳＫ123とを比較した場合、ＳＫ123からは、他の遺構には見られない木葉が多く出土しており、これらは屋根の下地に使用されていたものと考えることができる。また、ＳＫ010からは建築部材が多く出土しており、この２遺構は本来は屋組等の建物の処理に伴う瓦溜まり的性格であったと推定される。従って、この２遺構から出土している木製品は基本的にはＳＫ212に帰属する遺物群であると言える。

遺構	供膳具					調度具				その他	計	備考
	椀身	椀蓋	皿	不明	小計	箱物	曲物	不明	小計			
ＳＫ０１０	5				5			2	2		7	※
ＳＫ０１４	2	2			4						4	
ＳＫ１１８	2			1	3						3	
ＳＫ１０１	4	2	1	2	9			2	2		11	
ＳＫ１２３	8	2		3	13		1		1		14	※
ＳＫ２１２	2	2	2	1	7	4	4	1	9		16	※
ＳＫ２０６	3			2	5						5	
ＳＫ２１０	10			5	15	1		2	3		18	
ＳＫ２１１				3	3						3	
ＳＫ３０４	9	2	1	6	18		1	1	2		20	
ＳＫ３３３	3		2	4	9					1	10	※
ＳＫ４０１	1			2	3	1		2	3		6	
ＳＤ１０４			2	2	4			2	2		6	
ＳＤ１０６	3			1	4						4	
他の遺構	12		1	12	25	5		1	6		31	
計	64	10	9	44	127	11	6	13	30	1	158	
検出	1			2				1			4	

表42　近世漆器集計表

遺構	漆絵				蒔絵				根来塗				計
	椀	蓋	不明	小計	椀	蓋	不明	小計	椀	蓋	不明	小計	
ＳＫ０１０	1			1	4			4					5
ＳＫ０１４					2	2		4					4
ＳＫ１１８			1	1	1			1	1			1	3
ＳＫ１０１	2		1	3		2	1	3		1	1	2	8
ＳＫ１２３	1		1	2	6	1	2	9		1		1	12
ＳＫ２１２					1	2		3		2		2	5
ＳＫ２０６	2		1	3	1			1					4
ＳＫ２１０	3		3	6	7		1	8					14
ＳＫ２１１							2	2					2
ＳＫ３０４		1	1	2	7		2	9	1	1		2	13
ＳＫ３３３					3			3		2	1	3	6
ＳＫ４０１			1	1	1			1					2
ＳＤ１０４							1	1		2		2	3
ＳＤ１０６	1		1	2	1			1	1			1	4
他の遺構	3		3	6	3	1	2	6	3	2	3	8	20
計	13	1	13	27	37	8	11	56	6	11	5	22	105

表43　漆器供膳具の細工分類一覧

また、今回木製品が出土した遺構の遺物の出土傾向と調査区内での検出位置から、判明している居住者との関係は、ＳＫ010、ＳＫ014、ＳＫ118は山澄氏の屋敷地に帰属すると思われ、ＳＫ210、ＳＫ401は竹腰氏以前の居住者の投棄したものと考えられる。さらに、ＳＫ211、ＳＫ212、ＳＫ304は熊谷氏以前、ＳＤ104、ＳＤ106は山澄氏以前の段階で投棄された遺物群と考えることができる。

（川井啓介）

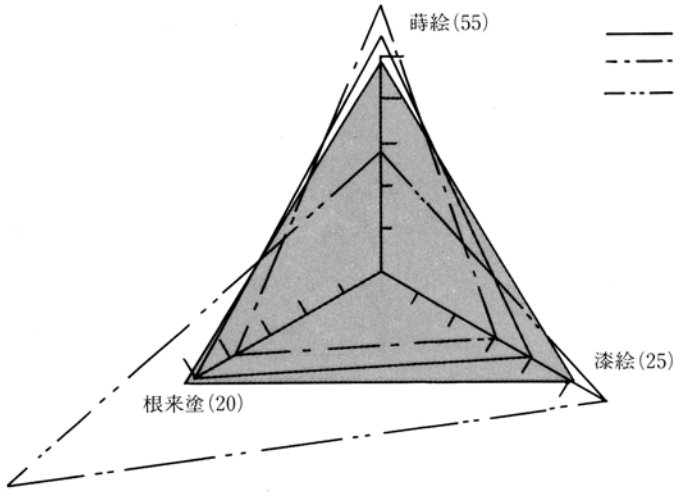


図230　漆器の出土傾向

番　号	分析番号	出　土　遺　構	備　　考	ＰＬ
1		ＳＫ123	漆椀蓋	52
2		ＳＫ002下層	漆椀	52
3		ＳＫ212	漆椀	
4		ＳＫ212	椀	
5		ＳＫ333下層	櫛	52
6		ＳＫ212	刷毛	
7		ＳＫ123	刷毛	
8		ＳＫ356	刷毛	

番　号	分析番号	出　土　遺　構	備　　考	ＰＬ
9		ＳＫ219	木札	
10		ＳＫ333	杓	
11		ＳＫ212	箒	
12		ＳＫ333	蓋	
13		ＳＫ212	曲物の底板	
14		ＳＫ333	下駄（一木造り）	
15		ＳＫ212	下駄（差し歯）	

表44　近世木製品一覧

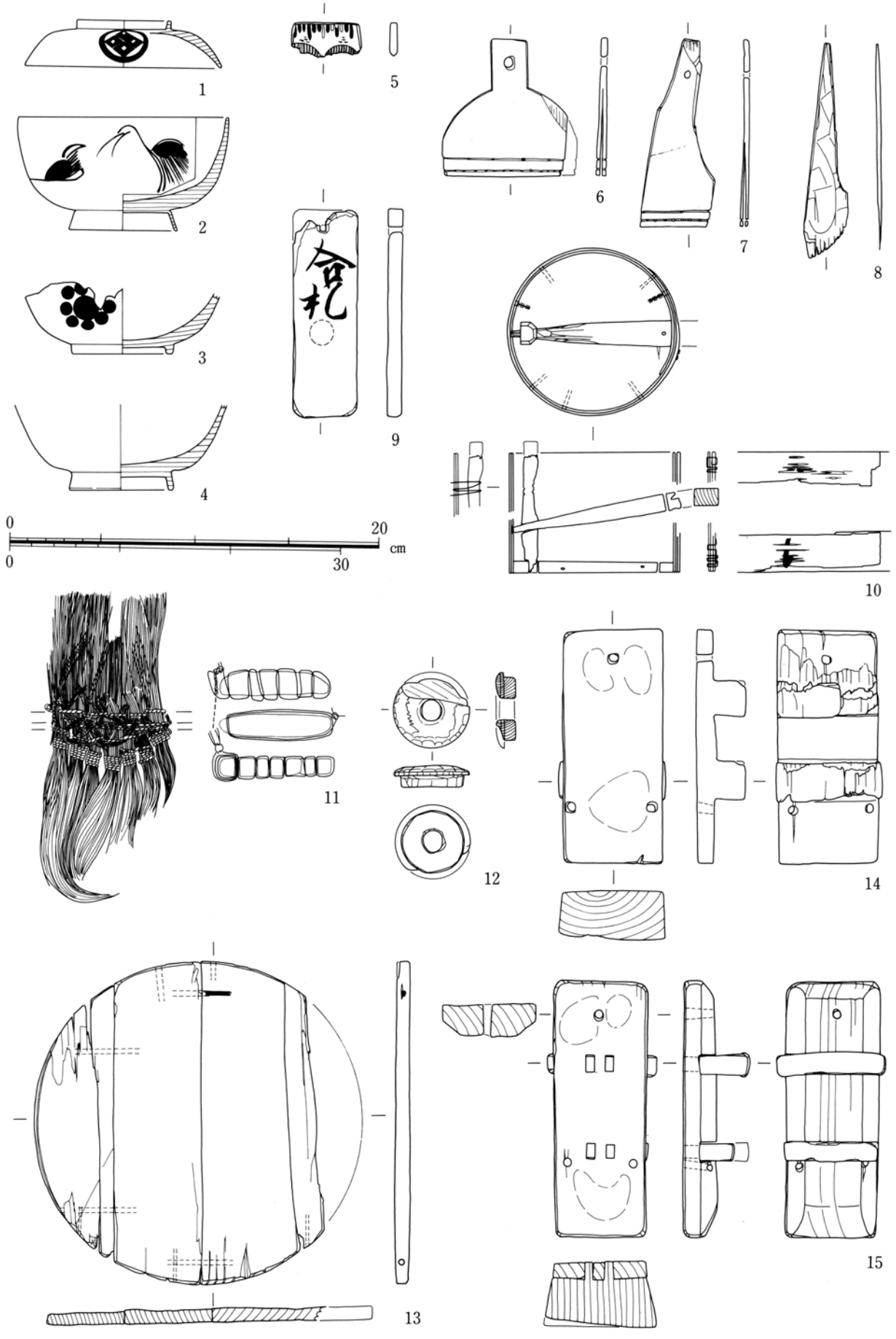
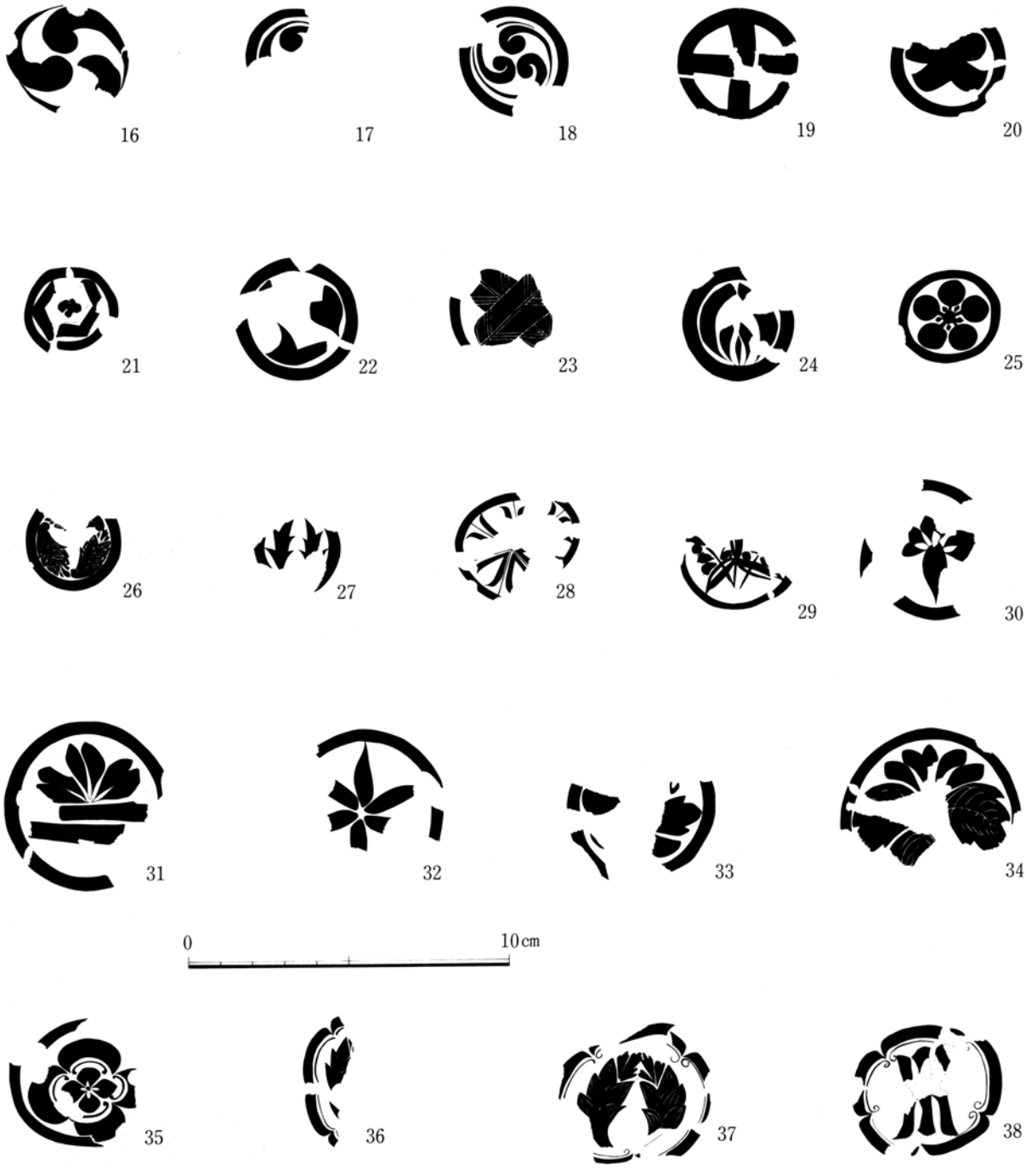


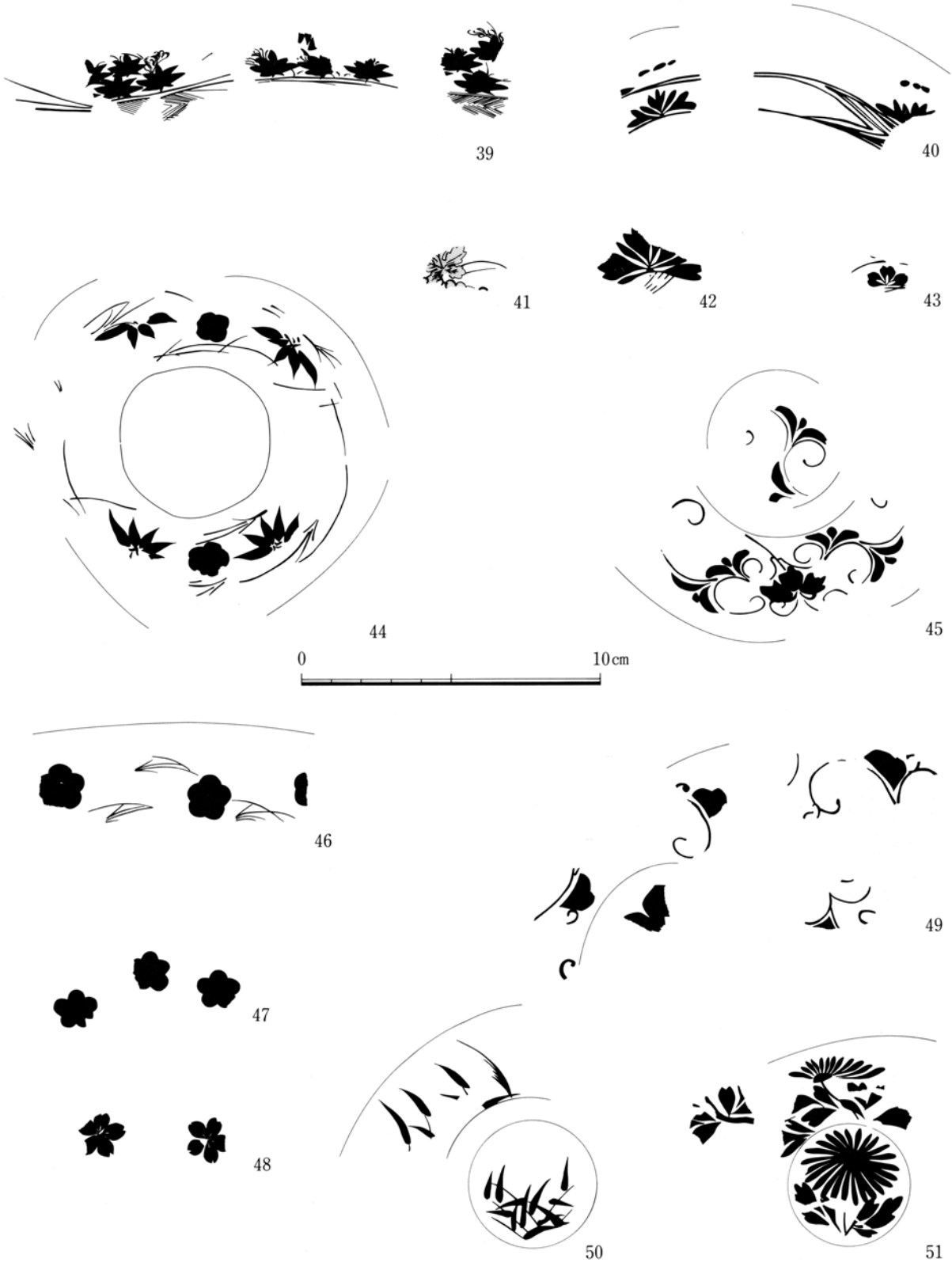
図231　近世木製品実測図



番　号	分析番号	出　土　遺　構	備　　考	PL
16	102	SK333		
17	128	SK210		
18	151	SK210		
19	38	SK202		
20	86	SK101		
21	93	SK210		
22	53	SK210		
23	149	SK202		
24	56	SK356		
25	25	SK101		
26	16	SK014		52
27	105	SK210		

番　号	分析番号	出　土　遺　構	備　　考	PL
28	76	SK304		
29	29	SD001		
30	121	SK210		
31	24	SK209		
32	15	SK210		
33	150	SK202		
34	152	SK210		
35	89	SK010		
36	97	SK304		
37	12	SK304		
38	97	SK304		

図232　加飾漆器の紋様集成(1)



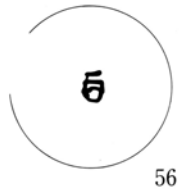
番　号	分析番号	出　土　遺　構	備　　考	PL
39	125	SK123		
40	160	SK401		
41	54	SK101		
42	139	SD106		
43	164			
44	50	SK304		
45	13	SK304		

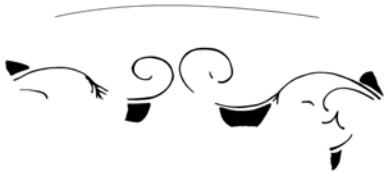
番　号	分析番号	出　土　遺　構	備　　考	PL
46	21	SK118		
47	51	SK304		
48	90	SK123		
49	55	SK014		
50	110	SK012		52
51	17	SK014		52

図233　加飾漆器の紋様集成(2)

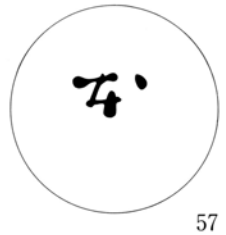
52

53


56

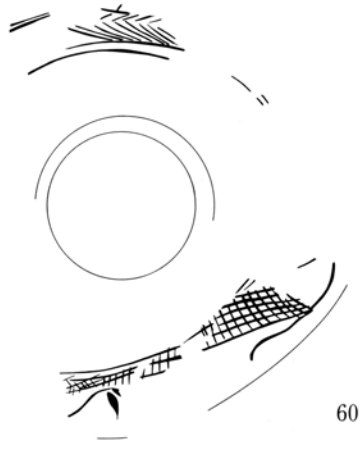

54

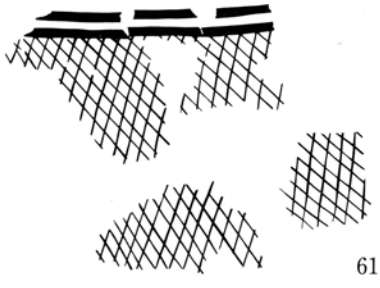
55


57

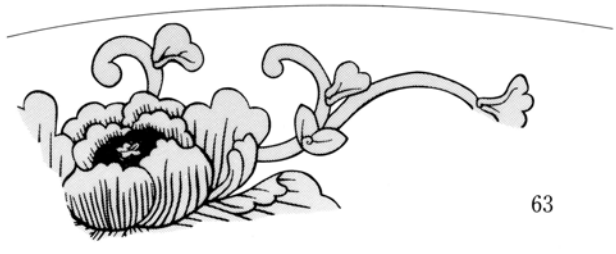
58

59


60


61

62


63

番　号	分析番号	出土遺構	備　考	PL
52	91	SK123		
53	95	SK210		
54	44(100)	SK123		
55	20	SK101		
56	81	SK101		
57	142	SD106		

番　号	分析番号	出土遺構	備　考	PL
58	62	SK123		
59	87	SK101		
60	112	SK123		
61	129	SK210		
62	14	SK009		52
63	42	SK356		52

図234　加飾漆器の紋様集成(3)

(7)　加飾漆器の製作技法

一般に漆器の製作は、原木から木地をつくり挽き物・板物の形態にする木胎製作の工程と、その木胎に下地および漆を塗布し、加飾・研磨作業を行う漆工の工程から成り立っている。この様な漆器資料の製作技法を調査することは、個々の資料の性格を正確に把握する上で有効な方法であり、それらが出土した遺構・遺跡の性格を考える上でも意味があると考える。本稿では、漆器資料の製作技法に関する調査として、まず形態・漆塗り表面の状況を表面観察した後、(1)用材選択（樹種鑑定）(2)木取り方法　(3)漆膜面の漆塗り構造　(4)色漆の使用顔料等の項目別に自然科学的な手法を用いた分析を行った(1．2．3．4)。

調査結果

本遺跡の場合、木質等有機質の残存状態がそれほど良好な方ではないため、漆器資料も漆膜面のみの資料が多かった。今回の調査で用いた漆器資料は合計181点である。これらを項目別に記した方法を用いて調査を行った。その結果を（表１）に示す。

まず挽き物類である本漆器資料の形態は、椀・蓋型を中心にしており、それぞれ当時の基本的な飲食器類である飯椀・汁椀・菜椀である壺・平椀に対応するものと考えられる。また板物類は、箱物・曲物の部材破片を中心としており、いずれも生活什器としての調度品類に対応すると考えられる。

資料総数に比較して調査可能な点数はあまり多くなかったが、材の利用（用材選択）の状況をみてみると、挽き物類では、広葉樹のトチノキ、ケヤキ材が、板物類では、針葉樹のヒノキ、スギ材が確認された（写真１．２）。

末沢（1975）の研究によると、近世以降のろくろ挽き物である漆器類の用材には、早晩材の組織の差が少ない広葉樹の散孔材もしくは環孔材であるが靱性がある材を適材としている(5)。これらの木材の組織、工作の難易、割れ狂い、色光沢、塗り等を考慮に入れて分類すると、（表２）に示すようになる。また、板物である漆器類の用材には、アテ（アスナロ）、ヒノキを最良材とし、ネズコ、サワラ、ヒバ、スギ、モミ、マツ等の針葉樹が適材であるとしている。この点を考慮に入れて、本漆器資料の用材選択の傾向をみてみると、挽き物類・板物類ともに最良材であるケヤキ、ヒノキ材などと、かたや加工や入手の容易さという大量生産の点からみて、一般性が高い適材のトチノキ、スギ材の２種類のグループに

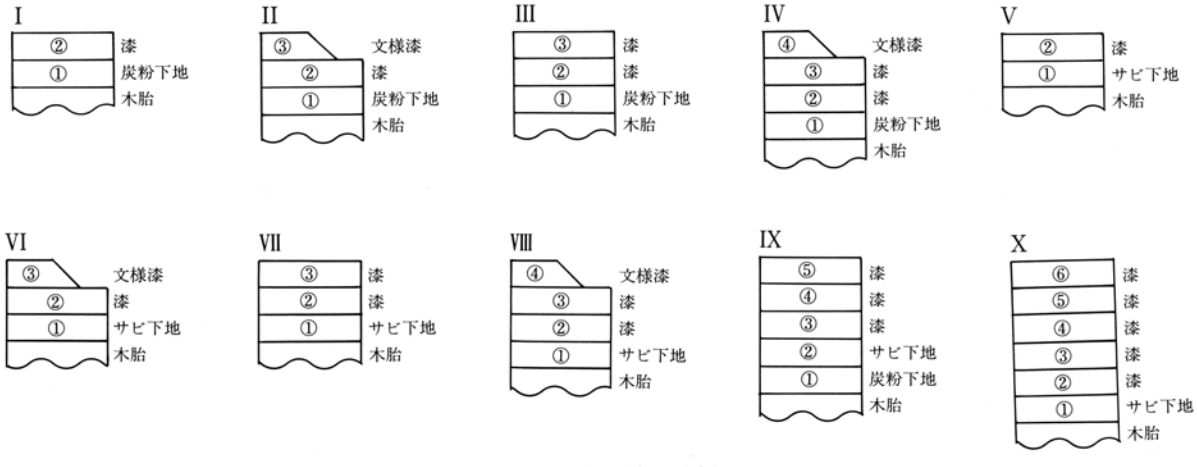


図235　漆塗り構造の分類

別れた。

次に、挽き物類である本漆器資料の木取り方法をみてみる。資料は、いずれも横木地であり、板目取りと柾目取りの２種類が見出だされた。須藤（1982）の調査によると、近世以降の近江系（小椋谷）木地師による挽き物類の木取り方法の場合、横木地板目取りはトチノキ地帯に、同柾目取りはブナ地帯に定着し、その細かい技術は、個々の集団に受け継がれてきたとされている(6)。一般にトチノキは、芯を中心として割れ狂いの多い赤味が広がり、表皮に近い部分にシラタとよばれる白い部分がある。シラタは、多く取れても四寸（約12cm）程度しか利用できないので、おのずと椀を伏せたような形で木地を取る板目取りの方法が適している。一方、ブナは、芯に近いところまで利用が可能なので、木の狂いが少なく木地が多く取れる柾目取りの方法が適していることは理にかなっているといえよう。この事例を考慮に入れて本漆器資料の樹種と木取り方法の関係をみてみると、トチノキ材は、いずれも横木地板目取りを用いており、木胎製作の工程が一貫してそれぞれの材の性質を考慮に入れたものであった可能性が理解される。

次に、個々の漆器表面の漆塗り技法をみてみる。塗りは、地と文様からなり、本漆器資料の場合、無文様で地塗りのみの資料と、家紋等の漆絵文様を地外面に描く資料、さらには梨子地、蒔絵等きわめて高度な漆工技法をもつ資料に分かれた。

漆塗り膜面の構造、特に、各漆器資料の堅牢性を知る目安となる木胎と漆塗り層との間の下地層を定性分析してみると、無機物を含んでいないためピークがほとんど見出だされない資料と、Al（アルミニウム）、Si（シリカ）、K（カリウム）、Ca（カルシウム）、Fe（鉄）など粘土鉱物もしくは珪藻土の構成要素に近いピークが認められる資料に分けられた（236—１．２）。

さらにこれらを顕微鏡観察し、前者を炭粉を柿渋などに混ぜて用いる炭粉下地(代用下地)、後者を細かい粘土もしくは珪藻土を生漆に混ぜて用いるサビ下地（堅下地もしくは本下地ともいう）と理解した。また、地の漆塗り層は、いずれも１層塗りから３—４層塗りまで見出だされ、文様等の加飾は、いずれも地の上塗り層の上に描かれていた(写真３、４、５、６、７)。また、梨子地、蒔絵等の加飾は朱漆や生漆の上に蒔くいわゆる高蒔絵の技法や研ぎだしの技法がいくつか見出だされた。

このような近世漆器の製作技法のあり方を示す民俗事例の１つに、新潟県糸魚川市大所のナカジマ家小椋丈助氏による実用に即した近世木地師の漆器椀の生産技法に関する口碑資料がある(7)。

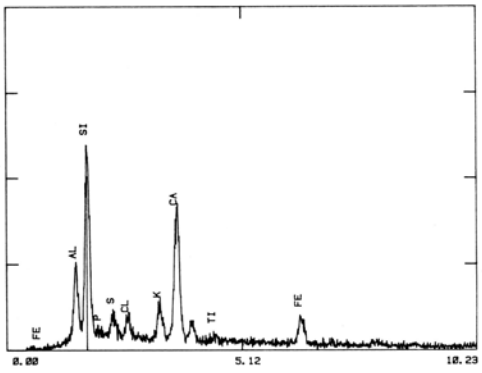
それによると、『[上品] 布着せ補強（椀の欠け易い縁や糸じりに麻布を巻く）～サビ下地（砥の粉を生漆に混ぜたサビを二回塗布）～下塗り（生漆）～上塗り（生漆に赤色系顔料もしくは黒色系顔料を混ぜた赤色系漆もしくは黒漆）の工程をふみ、人一代は持つ堅牢なもの。[下品] 炭粉下地（柳や松煙を柿渋に混ぜて用いるサビ下地の代用下地）～上塗り（生漆の使用量を節約するために偽漆である不純物や油分を多く混入して用いる粗悪な漆)。[中品] 下品とほぼ同様の工程をふむが上漆りの漆を濃く塗布したり、ミガキを丁寧にしたりする。下品よりかなり持ちが良い。』などとしており、各漆器ランク別の工程をよく示している。この事例を参考にして、本漆器資料の塗り構造をみてみると、きわめて簡素で一般的な日用漆器の塗り構造を持つ資料から、やや堅牢で複雑な多層塗り構造を持つ優品資料まで、いくつかのランク別資料に分類された（図235)。

次に、色漆の性質についてみてみる。赤色系漆の使用顔料の定性分析結果では、Fe（鉄）のピークが

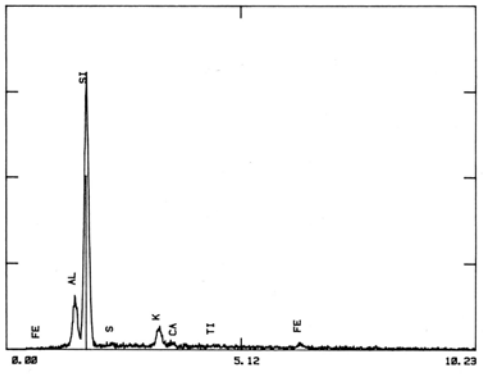
強く認められる資料（図236—3）、Hg（水銀）およびS（硫黄）のピークが強く認められる資料（図236—4）、その両者のピークが強く認められる資料(図236—5)、の三種類に分けられた。これをさらに顕微鏡観察し、それぞれベンガラ（酸化第二鉄 Fe_2O_3)、朱（辰砂もしくは水銀朱 HgS)、ベンガラ＋朱の三種類の異なる赤色系顔料を用いた赤色系漆であると理解した。ベンガラ、朱ともに赤色系顔料としての歴史は古い。近世漆器の顔料としては、幕府の統制物資であった朱に比較して、江戸時代中・後期以降人造ベンガラの工業生産化により量産体制が確立するベンガラ方が廉価で一般的であったようである(8)。本漆器資料の場合も、簡素で一般的な塗り構造を持つ資料にはベンガラを、堅牢で複雑な多層塗り構造を持つ資料には朱を使用する例や、地内面にはベンガラを地外面の家紋等の加飾部分のみに朱を使用する例が見出だされ、その状況が理解された。

金粉状装飾（金彩）の定性分析結果では、Au（金）のピークが認められる資料（図236—6）の他、Sn（スズ）や、As＋S（石黄、硫化ヒ素）のピークが強く認められる資料が確認された（図236—7・8)。この結果は、本漆器資料の金粉状装飾（金彩）として、金粉自体を使用する事例とともに、石黄粉や錫粉などの代用金粉を使用する事例の存在を示すものと理解しており、個々の漆器資料の性格を考える上で参考になろう。なお金粉（Au）を梨子地粉として用いる場合、若干銀（Ag）の含有が認められる資料もいくつか見出された（図236—8)。

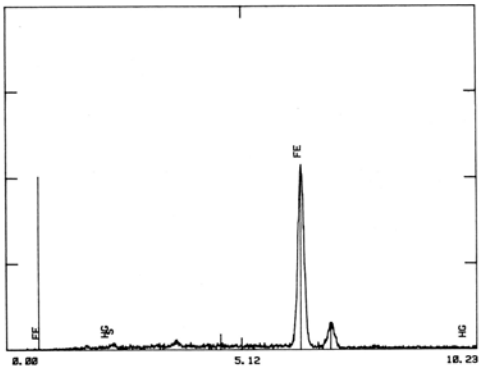
本漆器資料の場合、他遺跡と比較して、地外面の加飾として銀粉状装飾（銀彩）を施す資料が多い特徴を持つ。これらの定性分析結果では、Ag（銀）のピークが強く認められる例（図236—9）の他、Sn（スズ）のピークが強く認められる例（図236—10）も確認された。これなども、代用銀粉の使用を示す事例と考えられ、個々の漆器資料の性格を考える上で一つの指標となろう。



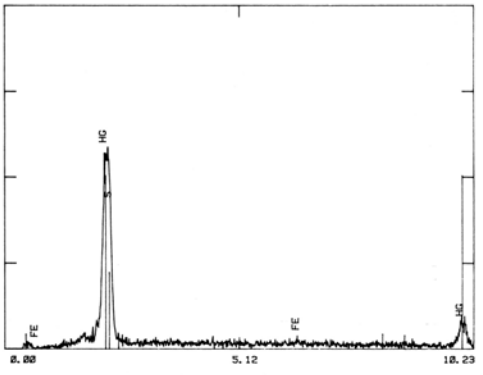
1　サビ下地(A)



2　サビ下地(B)

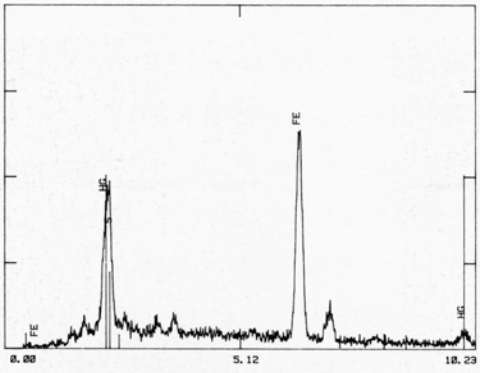


3　赤色系漆（ベンガラ　Fe_2O_3）

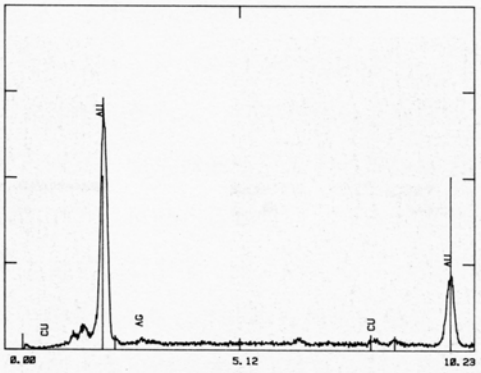


4　赤色系漆（朱　HgS）

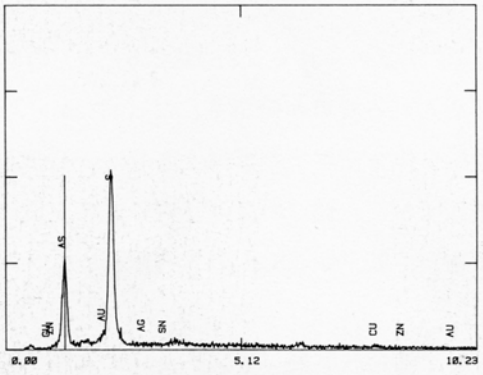
図236—1　漆器のX線分析結果(1)



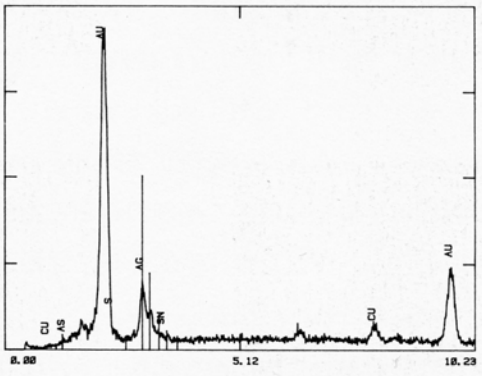
5　赤色系漆（ベンガラ十朱）



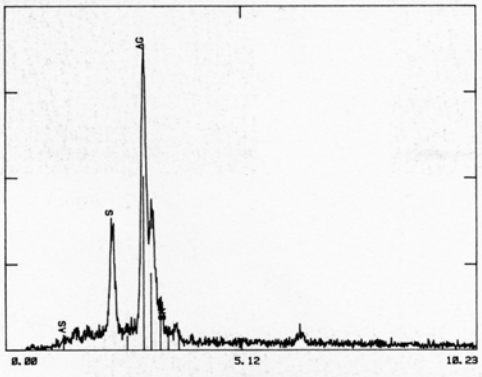
6　金粉状装飾（金　Au）



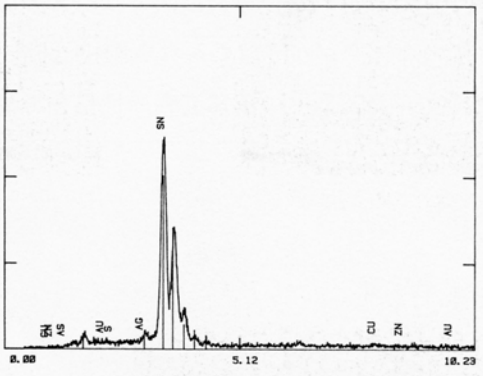
7　金粉状装飾（硫化ヒ素As＋S）



8　金粉状装飾（金＋銀）



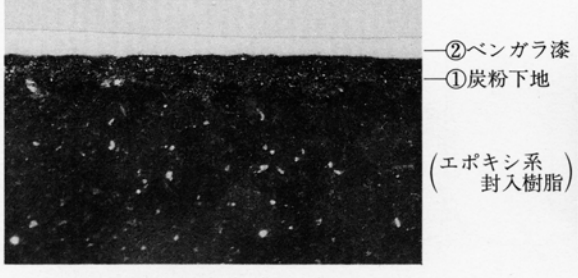
9　銀粉状装飾（銀　Ag）



10　銀粉状装飾（錫　Sn）

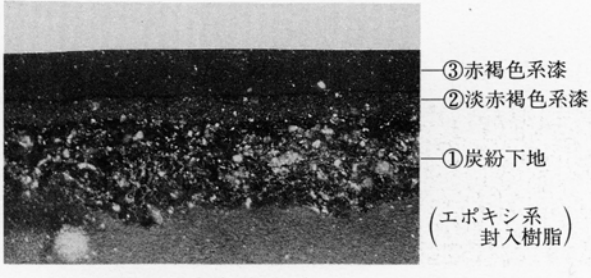
図236— 2　漆器のX線分析結果(2)

（写真３）　(73%縮尺)



赤色系漆器（Ⅰ）（100×）

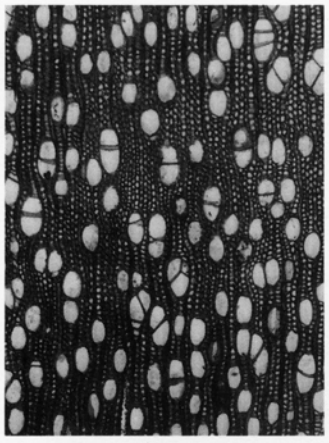
(4)　(73%縮尺)



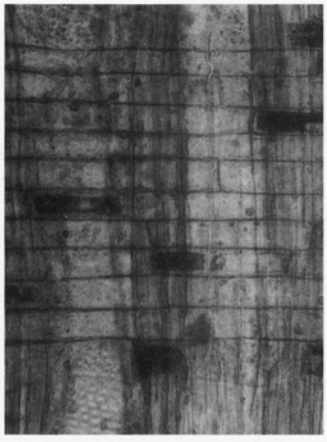
黒色漆器（Ⅲ）（100×）

漆塗り構造の顕微鏡写真

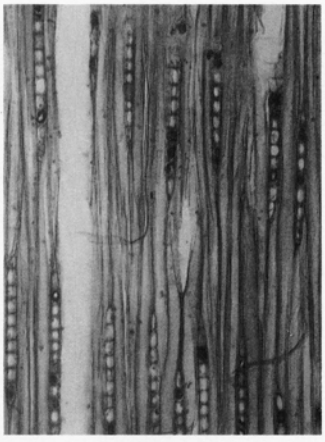
（写真１）とちのき科トキノキ



木口（30×）

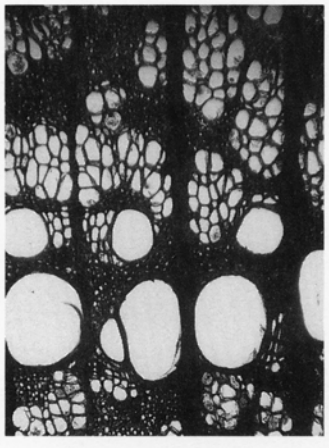


柾目（100×）



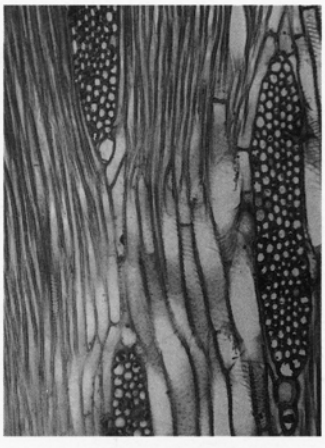
板目（50×）

（写真２）にれ科ケヤキ



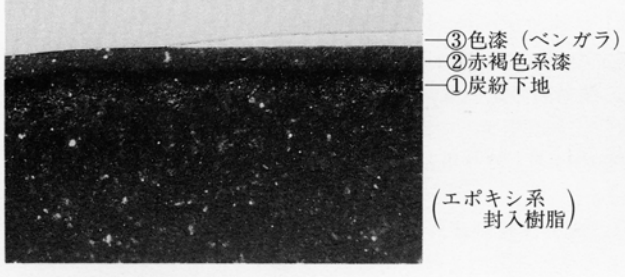
木口（30×）

柾目（100×）



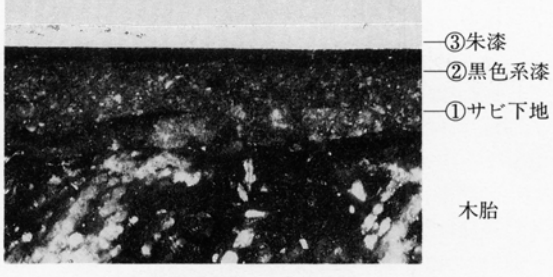
板目（50×）

(5)　（73%縮尺）



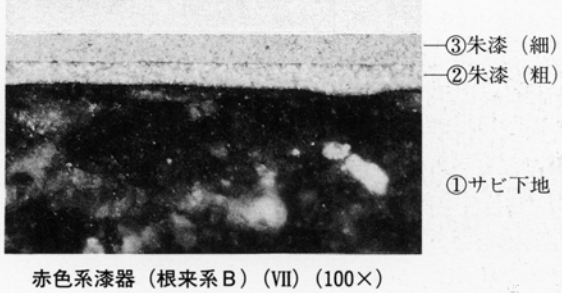
有加飾漆器（II）（100×）

(6)　（73%縮尺）



赤色系漆器（根来系A）（VII）（100×）

(7)



赤色系漆器（根来系B）（VII）（100×）

縮尺100%（そのまま）

考察

以上、前項では項目別に名古屋城三ノ丸遺跡出土漆器資料の製作技法をみてみた。その結果、本漆器資料は簡素で一般的な日用漆器資料から、やや堅牢で複雑な漆技法を持つ資料、さらには梨子地・金蒔絵等高度な加飾技法を持つ資料に至るまで、いくつかのランク別のグループに分類された。そしてこれらは文献資料等を参考にしてみると、基本的にはいずれも実用に即した生活什器（飲食器）類を中心としているものの、いわゆる大名道具と呼称されるきわめて高度な漆工技術を有する上級武家の調度品類の破片と考えられる資料も幾つか確認された（No.19、42、46、54、144等）(9)。

そしてこれら本漆器資料の製作技法を名古屋城下町関連の他遺跡のそれと比較してみると相対的にサビ下地の優占率が高く、高度な加飾を施すなど優品資料が多いこともわかった(図237)（註10)。この点が、本漆器資料の大きな特徴の一つとも言えよう。

なお本漆器資料の製作技法の傾向を、共伴の陶磁器類の年代観を参考として分類してみると、基本的には各年代を通してあまり大差がなくほぼ同様の傾向が認められた（図238)。

しかし個々の漆器資料の髹漆技法を細かく検討してみると、いわゆる「根来手もしくは根来塗」と呼称される地塗りのみの朱漆器類では、中塗の黒漆を省く簡便な技法が後期の資料を中心に認められる点、若干石黄を顔料として用いる例が前期の資料に多く、銀粉を用いる例が後出する点など漆工技術史上の特徴の一端が確認された。また本遺跡からは、飲食器等の漆器製品類ではないが、容器内に残存付着した漆紙および漆樹液塗料の固化膜面や寄った漆涸紙の残片など、実際の漆工作業に伴う資料(No.１、27、28、33、98、134、135）も同時に検出されている。これなどは、文献史料等で知られる武家の屋敷内に出向いて注文の婚礼道具の作成や什器塗り直し等の作業を行った江戸時代当時の漆工職人の仕事ぶりの一端が実際の出土資料からも理解され興味深い。

（北野信彦）

註

（1）樹種の同定作業は、出土木材の内部形態の特徴を顕微鏡で観察し、その結果を新材と比較することでなされる。試料上は、遺物本体をできるだけ損傷しないように破切面などオリジナルでない面から木口、柾目、板目の三方向の切片をカミソリの刃を用いて作成した。切片は常法に従い脱水し、検鏡プレパラートに仕上げた。

（2）挽き物である漆器資料の木取り方法の調査は、樹種鑑定の切片作成時に同時に行った。

（3）まず肉眼で漆器資料の漆塗り表面の状態を観察した後、簡易顕微鏡を用いて細部の観察を行った。次に漆器資料の表面洗浄作業の際に出た１㎜×３㎜程度の漆剝落片を採取し、合成樹脂（エポキシ系樹脂／アラルダイトＧＹ1251　Ｊ．ハードナーＨＹ837)に包理した後、断面を研磨し、漆膜の厚さ、塗り重ね構造、顔料粒子の大きさ、下地の状態について顕微鏡観察を行った。

（4）色漆に用いられた顔料の無機物に関する定性分析には、先の漆膜剝落片をカーボン台に取り付け、日立製作所Ｓ－415型の走査電子顕微鏡に堀場製作所ＥＭＡＸ－2000エネルギー分散型Ｘ線分析装置（Ｘ線マイクロアナライザー）を連動させてそれを用いた。分析設定時間は500ＳＥＣ．分析ポイントは30倍照射。なお、分析チャートの補正には、Geochemical Journal vol.8 p175-192「1974 compilation of data on The GSJ geochemical reference sample JG-1 grandiorite and JB-1 basalt」Atusi Ando and others の JG-1, JB-1 サンプルを用いた。

（5）末沢春一朗（1975)「近世以降木地師のロクロ製品製作技法の研究」『京都大学農学部林学科卒業論文』
橋本　鉄男（1979)『ろくろ　ものと人間の文化史31』法政大学出版局

（6）須藤　　護（1982)『日本人の生活と文化⑤　暮らしの中の木器』日本観光文化研究所編　ぎょうせい

（7）文化庁文化財保護部編（1974)『木地師の習俗　民俗資料選集２』国土地理協会

（8）『輪島市史　第六巻　資料編』(1973）輪島市教育委員会

（9）消費地における生活什器である漆器の販売状況を知る文献史料の一つとして『名古屋諸色直段集、寛延四末年小買物諸色直段帳』寛延四年（1751）の以下の記載がある。

「塗物

一、一匁一分	せしめ漆一匁	
一、三分七厘	こくその粉一袋	
一、二匁五分五厘	布着せ蠟色塗	一尺四方一坪
一、二匁	布なし　同	断一坪
一、二匁二分	上花	塗一坪
一、一匁五分	布なし堅地花	塗一坪
一、七分五厘	常花	塗一坪
一、二分五厘	上溜	塗一坪
一、一分七厘	常溜	塗一坪
一、三分	春慶	塗一坪
一、二分	常春慶	塗一坪
一、二分	上かき合	塗一坪
一、一分五厘	常かき合	塗一坪
一、八厘	拭	塗一坪
一、五厘	常拭	塗一坪　」

この記載内容から、当時、漆器の髹漆技法の程度別に、明確な価格のランク付けが存在していたことが理解される。

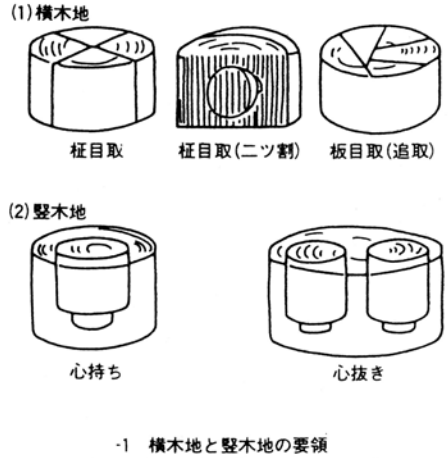
(10) 北野　信彦（1990）「近世尾張における生活什器としての出土漆器資料」『綜合郷土研究所　紀要35』愛知大学 P82—94

北野　信彦（1982）「近世武家社会における生活什器としての漆器資料」『綜合郷土研究所　紀要38』愛知大学 P115—134

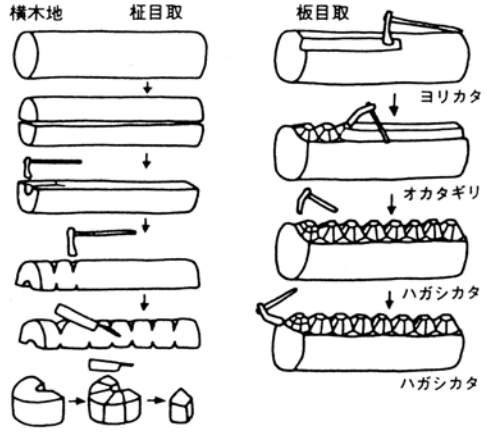
ろくろ挽き物の用材分類一覧表

A 環孔材	a．ケヤキ系 ニレ、ケヤキ、シオジ、ハリギリ、クリ、ヤマグワなど	木目が明瞭に表われる。堅硬であるが靭性もあり、木皿など薄手物に適する。
B 散孔材	b．サクラ、カエデ系 イタヤカエデその他のカエデ類、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、ミズメなど	白木で美しい光沢があり、白木地物にも適している。割れ狂いが少なくて、やや堅さはあるが、加工は容易。下地が少量で足りるので、塗り物にもっとも適する。
	c．ブナ、トチノキ系 トチノキ、ブナ、ミズキ、カツラ、ホオノキなど	軟かくて加工は容易であるが、乾燥が難しくて狂いも多い。しかし、大量に入手できるので使用量は大である。
	d．エゴノキ系 エゴノキ、アオハダなど	白い軽軟で加工が容易である。仕上げは見た目にもよく、彩色もし易いので、玩具、小物等に向いている。とくにエゴノキは大材を得られないが、入手が容易であり、割れにくいので使用に適する。

橋本鉄男「ろくろ、ものと人間の文化史31」1979などを参考にして作成



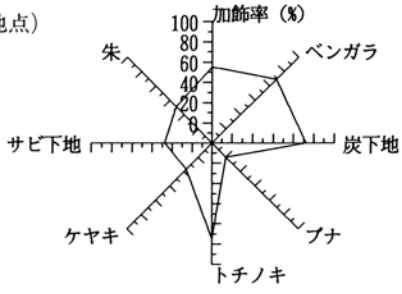
-1　横木地と竪木地の要領
（末沢春一郎「近世以降木地師のロクロ製品製作技術の研究」原図）



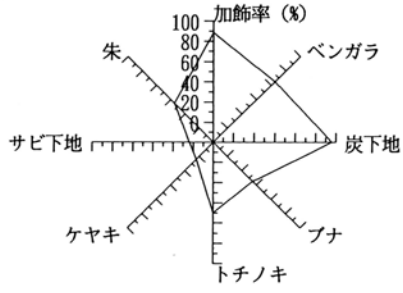
-2　近世会津木地師の木取りの方法
須藤（1982）より原図引用

近世以降の漆器(挽き物類)の木取り方法

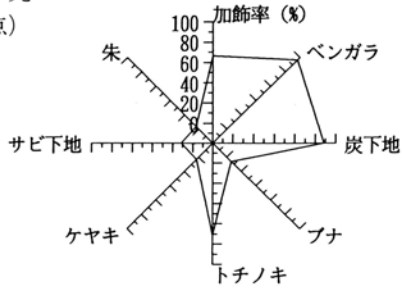
1．名古屋城三ノ丸
（県警本部地点）
資料数181点



3．幡下小学校跡
資料数26点



2．名古屋城三ノ丸
（市公館地点）
資料数35点



4．清洲宿場町
資料数10点

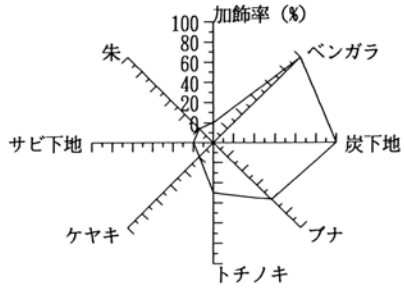
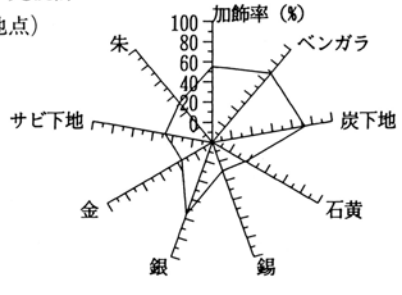
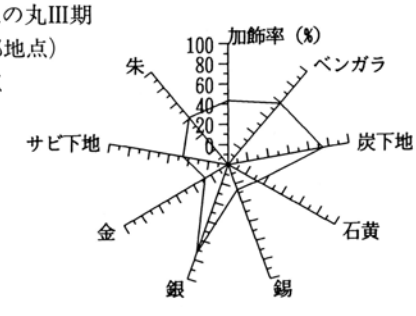


図237　遺跡別出土漆器資料の品質組成の傾向

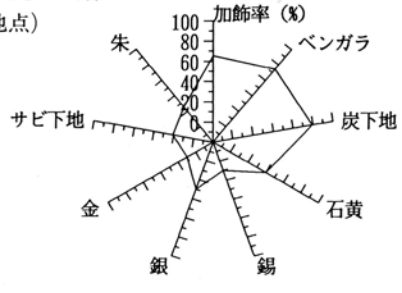
1．名古屋城三の丸統計
（県警本部地点）
資料数181点



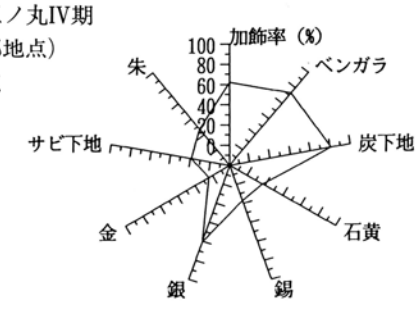
4．名古屋城三の丸III期
（県警本部地点）
資料数39点



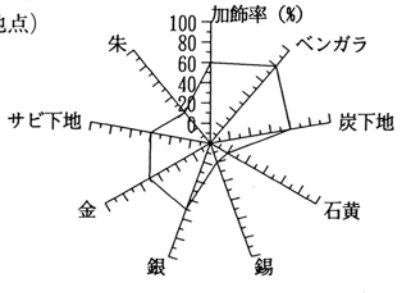
2．名古屋城三の丸・Ⅰ期
（県警本部地点）
資料数29点



5．名古屋城三ノ丸IV期
（県警本部地点）
資料数43点



3．名古屋城三の丸II期
（県警本部地点）
資料数５点



6．名古屋城三の丸年代不詳
（県警本部地点）
資料数65点

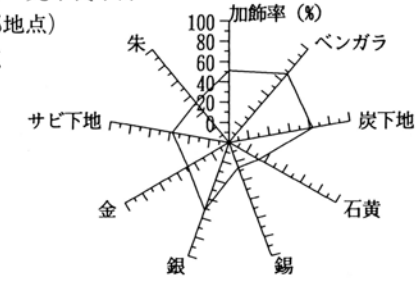


図238　年代別出土漆器資料の加飾技法の傾向

出土漆器資料観察表

名古屋城三ノ丸遺跡

No.	年	樹種	木取	表面塗りの技法 内	外	文様	使用顔料 内	外	文様	漆塗構造 内	外	備考
1				赤	赤		ベンガラ					
2	III	ケヤキ	B	赤	赤		朱	朱		V	V	
3	III	トチノキ	A	赤	黒	絵一銀	ベンベラ		Ag	III	IV	
5	III	ケヤキ	B	赤	赤		朱	朱		V	V	
6		トチノキ	A	赤	黒	絵一銀	ベンガラ		Ag	I	II	
7		トチノキ	A	赤	黒	紋一銀	ベンガラ		Ag、As+S	I	II	
8	III	トチノキ	A	赤	黒	紋一銀	ベンガラ		Ag	I	II	
9	IV	トチノキ	A	赤	黒	絵一銀	ベンガラ		Ag、As+S	I	II	
10	IV	トチノキ	A	赤	黒	紋一銀	ベンガラ		Ag	I	II	
11	IV	トチノキ	A	赤	黒	紋一赤	ベンガラ		ベンガラ	I	II	
12	III				黒	紋一銀			Ag		II	
13	III			赤	茶	絵一赤	ベンガラ		ベンガラ	I	II	
14				赤		絵-金、黒	朱		Au、Ag、Fe		VI	
15	I			赤	黒	紋-黄、赤	ベンガラ		As+S、ベンガラ	I	II	
16	IV			赤	茶	紋-黒、銀	ベンガラ		Sn	I	II	
17	IV				茶	絵一銀			Sn		II	
18	IV				黒	絵一赤			朱+ベンガラ		II	
19				梨子地	梨子地	有	Au+朱(Ag)	Au+Ag	Au+Ag、朱	VII	VII	布着せ
20				赤	暗紫	絵一銀	ベンガラ		Sn	I	II	
21	IV			赤	赤	絵-黒、銀	ベンガラ		Ag	I	II	
22	III			黒	黒					III	III	
23				茶	茶紫					V		
24				赤	黒	紋-黄、赤	ベンガラ		As+S、ベンガラ	I	II	
25				赤	茶	紋一赤	ベンガラ		ベンガラ	I	II	
26	III	トチノキ	A	赤	茶		ベンガラ			I	I	
27				赤	赤		ベンガラ					
28				赤	赤		ベンガラ					
29				紫	紫					VII	VII	
31				赤			ベンガラ			I		
32				赤	黒		ベンガラ			I		
32-2	IV			赤	黒		朱	Au+Ag	Au	X	X	
34-1	III			赤			朱			V		
34-2	III				黒						I	
35	III			赤	茶	紋一銀	ベンガラ			I	II	
37	I			赤	茶	紋一赤	ベンガラ			I	II	
38	I			茶	茶	紋一赤					II	
39				赤	茶	絵一赤	ベンガラ			I	II	
40				赤	黒	紋一銀	ベンガラ			I	II	
41				赤	黒		朱			I	I	
42					黒	絵一金					VIII	布着せ
43				赤	黒			ベンガラ		I	I	
44	IV			赤	黒	絵一銀	ベンガラ			I	II	
45-1	III			赤	暗紫		ベンガラ			I	III	
45-2	III			赤	暗紫		朱	朱・ベンガラ		V	VII	ベンガラ-朱
46					梨子地			Au+Ag(少)、朱		VII	VII	
47				赤	黒	絵一赤	ベンガラ		朱	I	II	
48	III			赤	赤		朱	朱		VII	VII	朱(細-粗)
49	IV			赤	赤		朱	朱		V	V	
50	III				暗紫	絵一銀			Ag		II	
51	III			赤	黒	紋一銀	ベンガラ		Ag	I	II	
52	III				金	文字一黒		ベンガラ、Au			II	
53	I			赤	黒	紋-黄、赤	ベンガラ		Au、ベンガラ	III	IV	
54				赤	金茶	絵一金	朱	Au+Ag?		V	VII	
55	IV				茶	絵一銀			Sn		II	
56-1				赤				朱		V		
56-2				赤	黒	紋一赤	ベンガラ		ベンガラ	I	II	
57	III			赤	茶		ベンガラ			I	I	
58				赤	黒	紋-黄、赤	ベンガラ		As+S、ベンガラ	I	II	
59				赤				朱		V		
60	III			赤	茶		ベンガラ			I	I	
61				赤	黒		ベンガラ			V	V	
62	IV			赤	暗紫	絵一銀	ベンガラ		Ag	I	II	
64					黒					V		
65	III			赤	赤紫		朱	朱		V		
66				赤	紫	紋一赤	ベンガラ		ベンガラ	I	II	
67				赤			朱			VII		黒一朱
68				赤			ベンガラ			I		
69				赤	茶	紋一銀	ベンガラ		Ag	I	II	
70	III				紫					I		
72					茶					V		
73	III			赤			ベンガラ			I		
74	III			赤	黒		ベンガラ			I	I	
75				赤	紫		ベンガラ	朱		III I	III I	ベンガラ-朱-ウルミ朱
76	III			赤	黒	紋-銀	ベンガラ		Ag	I	II	
77	I				茶					I		
78				赤	茶	？一銀	ベンガラ		Ag	I	II	
79				赤			朱	朱		V		
81				赤	紫	高台金字	ベンガラ	ベンガラ		I	I	
82	IV			赤	茶		ベンガラ			I	I	
83	IV			赤			ベンガラ			I		
84				赤	茶		ベンガラ			I	I	
85				赤	黒	紋一赤	ベンガラ		ベンガラ+朱	I	II	
86				赤	茶	紋一赤	ベンガラ		ベンガラ	I	II	
87				赤	茶	絵一銀	ベンガラ		Ag	I	II	
88				赤	茶	紋一銀	ベンガラ		Sn	I	II	
89	IV				茶	紋一銀			Sn	I	II	
90	IV			赤	茶	紋一銀	ベンガラ		Ag	I	II	
91-1	IV			赤	紫	絵-銀、赤	ベンガラ		Ag、ベンガラ	I	II	
91-2	IV				黒	絵一赤			ベンガラ		II	
92-1	IV				黒	紋一赤			ベンガラ		II	
92-2	IV							朱		V		
95	I			赤	茶	紋一銀	ベンガラ		Ag	I	II	
96				赤			朱				V	
97	III				茶	紋一銀			Ag		II	
98				赤			ベンガラ					
99	IV	トチノキ		赤	茶		ベンガラ			I	I	
100	IV			赤	紫	絵一銀	ベンガラ		Ag	I	II	
101	III			赤	黒	紋一赤	ベンガラ		ベンガラ	I	II	
102	III			赤	茶	紋一銀	ベンガラ		Ag	I	II	
103	III			赤	茶	紋一銀	ベンガラ		Ag	I	II	
104	III				茶	紋一黄			As+S		II	
105	I				茶	紋一赤			ベンガラ		II	
106	IV				黒					I		
107	IV			赤	赤		朱	朱		VII	VII	朱（粗一細）
108	I				黒						V	
109-1	I			赤	紫		ベンガラ			I	I	
109-2				赤			ベンガラ	ベンガラ		I		
111				赤	茶	紋-黒、銀	ベンガラ		Ag	I	II	
112	IV			赤	黒	絵一銀	ベンガラ		Ag	I	II	
113	IV			赤	黒	絵一銀	ベンガラ		Ag	III	II	
114				赤	茶		ベンガラ	ベンガラ		I	I	
115	IV			赤	茶	紋一赤	ベンガラ		ベンガラ	I	II	
116	IV				茶	絵-黒、金			Ag		II	
117	I			赤	茶	紋一赤	ベンガラ		ベンガラ	I	II	
118	IV			赤	茶	文字一銀	ベンガラ			X	I	
119	I			赤	茶	絵一銀	ベンガラ			I	II	
120				赤	茶		朱			VIII	VIII	黒-朱-朱
121	I			赤	黒	紋-赤、黄	ベンガラ		ベンガラ、As+S	I	II	
122	IV			赤	茶	絵-赤、黄	ベンガラ		Au、ベンガラ	I	II	
123				赤	茶		ベンガラ			I	I	
124				赤	茶		ベンガラ			I	I	
125	IV			赤	黒	絵一銀	ベンガラ		Ag	I	II	
126	I			赤	赤		朱	朱		VII	VII	黒一朱
127				赤			ベンガラ-朱			VIII	VIII	ベンガラ-朱-ベンガラ
128	I			赤	茶	紋-赤、銀	ベンガラ		ベンガラ	I	II	
129	I			赤	黒	絵一赤	ベンガラ		朱+ベンガラ	I	II	
130-1				赤			朱			V		
130-2				赤	茶	紋一銀	ベンガラ		Ag	I	II	
131				赤	茶	紋一黄	ベンガラ		As+S	I	II	
132	IV			赤	紫		朱			V	V	
133	IV									I		
134	IV			赤			朱					
135				赤			ベンガラ					
136	I			赤	赤		朱	朱		VII	VII	黒一朱
137	III	ヒノキ		紫	紫					I	I	
138	IV			赤	赤		朱+ベンガラ			V	V	
139	IV			赤	黒	紋-赤、黄	ベンガラ		ベンガラ	I	II	
140	III	ヒノキ		赤	黒		朱			V	V	
141				赤	紫		ベンガラ	朱		VII	V	ベンガラ-朱
142-1	I			赤	黒	絵一赤	朱		朱	III	II	
142-2	I			赤	黒		朱			VIII	VIII	黒-黒-朱
143	IV			赤	茶	紋-黒、銀	ベンガラ		As+S	I	II	
144	II			赤	茶		朱			多	多	
145	III	ヒノキ		赤	黒		朱			V	V	
146	III			赤	茶		朱	朱		V		
147	IV	ヒノキ		生漆	生漆					I	I	
148	I			茶紫	茶紫					V		
149					茶	紋一銀			Ag		II	
150				赤	茶	紋一赤	ベンガラ		ベンガラ	I	II	
151	I			赤	茶	紋一赤	ベンガラ		Ag	I	II	
152	I				黒	絵一赤			ベンガラ		II	
153	I				黒	紋-赤、黄			ベンガラ、As+S		II	
154-1	III			赤	茶	紋一銀	ベンガラ		Sn	I	II	
155	III				茶	紋一赤			ベンガラ		II	
156	I			赤	黒	紋-赤、銀	ベンガラ		ベンガラ、Sn	I	II	
157	I				黒	紋-赤、銀			ベンガラ、As+S		II	
158-1	II			赤	黒	絵一金	ベンガラ		Au	I	III	
158-2	II			赤			ベンガラ			多		
159	II			赤	黒	絵一赤	ベンガラ		ベンガラ	I	II	
160	II				茶	絵一銀			Ag		II	
161	IV			赤	茶		朱			V	V	
162	III			赤			ベンガラ				I	
163				赤	赤		朱	朱		V	V	布着せ
164	IV				黒	絵一銀			Ag		II	
165	I				茶	絵一赤			ベンガラ		II	
166	I			赤	赤		朱	朱		VII	VII	黒一朱
167				赤	赤		朱	朱		V	V	
169				生漆						I		
170	III			黒	黒					I	I	
172	I			赤			ベンガラ			I		
173	IV			赤	茶		ベンガラ	ベンガラ		I	III I	
174					茶	紋一銀			Ag		II	
175	IV	イスノキ			紫	絵-金、銀			Au+Fe、Ag	IV	IV	
A				赤	黒	梨子地	朱		Au+Ag、朱	VII	VIII	
B				赤	黒	梨子地	朱		Au+Ag、朱	V	VI	

年代
I—17世紀（中）
II—17世紀（末）
III—18世紀（前）
IV—18世紀（中）～19世紀（中）

表45　出土漆器資料観察表

(8) 金　属　器

今回の発掘調査で、金属製品が出土した遺構は90遺構である。その内、工具等下記の一覧に表示した各種の遺物が数点ずつ、合計10点未満の遺構が69遺構にのぼる。これに対し、合計10点以上出土した遺構は21遺構で、遺構出土の遺物の83%を占め、包含層出土を含めた全遺物量に対しても73%とその大半を占める。言い換えれば、金属製品の出土は限定された地点（遺構）に集中していると考えられる。この点については、個別製品についても、工具はＳＫ101・118に、武具はＳＫ118に、調度具はＳＫ206に、喫煙具はＳＤ106に、といった様に出土傾向に集中性を窺うことができる。

こうした出土傾向は、第一に、武具は比較的江戸時代でも早い時期の遺構から多く出土しており、遺構からの出土遺物はある程度、遺構が形成された時代差に基づくであろうことが推定される。第二に、例えば工具が多く出土しているＳＫ101は、隣接して瓦溜として使用されていたＳＫ123が存在し、同様にＳＫ210には瓦溜のＳＫ213が存在している。このように、瓦止めとして使用された工具（釘）は、当然のことながら瓦溜の周辺に位置している。つまり、遺構から出土する遺物は、各遺構の性格の差異に基づくものであると考えることができる。但し、この観点から各遺構の性格を考えた場合、ＳＫ118については工具に合わせて武具が大量に出土しており、単純にその性格を規定することは困難であり、一考を要する。

個別の遺物について、注目される点の一つは先述の釘と瓦の関係である。また、これ以外にも幾つかの点を挙げることができる。まず銭貨であるが、ＳＫ002・ＳＫ333からは「さし」の状態で出土している。その内の大半が寛永通寶であったが、他に２枚の元祐通寶が混入していた。これは「さし」状態で

遺　構	工具	武具	調度具	調理具	容器	装身具	喫煙具	その他	計	銭貨
ＳＤ１０４	37	6	3		1		1		48	
ＳＤ１０６	16	5			1		12		34	
ＳＤ２０３	16								16	
ＳＫ００２	16					1	2	1	20	74
ＳＫ００９	11								11	
ＳＫ０１４	29		1					1	31	1
ＳＫ１０１	140	3	8		1		4	11	167	2
ＳＫ１０３	16	1	1	2					20	2
ＳＫ１０５	18								18	
ＳＫ１１８	112	12					1	1	126	1
ＳＫ１２３	11	1		1	1		1	1	16	1
ＳＫ２０２	17		1					2	20	
ＳＫ２０６	88	2	13		1		1	1	106	
ＳＫ２１０	67	4	1				5	2	79	3
ＳＫ２１１	53		2					2	57	
ＳＫ２１７	6	4							10	
ＳＫ２１９	13	1	1						15	1
ＳＫ３０４	13		1				6	1	21	5
ＳＫ３１２	12		2				1	1	16	
ＳＫ３３３	57	1	1	1	1		5	5	71	47
ＳＫ４０１	36	2					1	5	44	1
小　計	784	42	35	4	6	1	40	34	946	138
計	1030	53	66	7	10	1	62	65	1294	209
小　計	246	11	31	3	4	0	22	31	348	71
その他	146	5	12	1	2	0	12	14	192	54
検　出	100	6	19	2	2		10	17	156	17

表46　金属製品出土遺構一覧

の貨幣取引が行われるとすれば、明らかな違法行為であり、武家の屋敷地から出土したことをどの様に解釈すればよいのであろうか。また、表46の一覧でその他として記載した銭貨の54点のうち、41点がＳＫ010から出土している。実際はＳＫ010とＳＫ002には切り合い関係があり、ＳＫ010からはこれ以外の金属製品は殆ど出土していない。この点から、ＳＫ010出土の銭貨は本来はＳＫ002に帰属するものと考えることが妥当であるとおもわれる。

いま一つ注目されることは、ＳＤ302から出土した溶鉱炉である(図239)。溶鉱炉の径が60～70cmあり、かなりの容量を有していたことが想像される。この他にフイゴの羽口やルツボ、鉄滓・銅滓の付着した椀の転用品も出土している。このことは屋敷地内で多様な金属製品の製造が行われており、それも簡単な修理の範囲を越えた製品の鋳造と言えるものであると理解し得る。

(川井啓介)

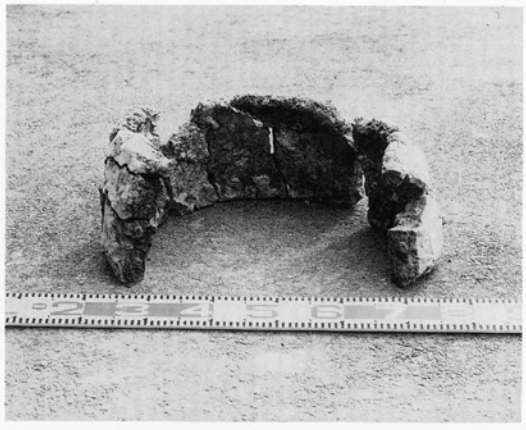


図239　出土した溶鉱炉

番　号	出土遺構	備　考	ＰＬ
1		鋲	
2	ＳＫ401	鋲	
3	ＳＫ333	鋲	
4	検Ｉ	鋲	
5	ＳＫ101	釘	
6	ＳＫ206	釘	
7	ＳＫ333	鎹	
8	ＳＫ263	ヤリガンナ	
9	ＳＫ010	鉈	
10	検Ｉ	(へらカ)	
11	南壁	蝶番	51
12	ＳＫ101	不明	
13	ＳＫ118	刀	

番　号	出土遺構	備　考	ＰＬ
14	ＳＫ333	刀装具	
15	検Ｉ	刀装具	51
16	検Ｉ	小柄	
17	ＳＫ210	小柄	
18	ＳＫ408	小柄	
19	ＳＫ014	火箸	
20	ＳＫ101	火箸	
21	検Ｉ	(火箸カ)	
22	検Ｉ	火箸	
23	ＳＫ306	掛金具	
24	ＳＫ103	飾金具	51
25	検Ｉ	簞笥取手	
26	ＳＫ361	飾金具	

番　号	出土遺構	備　考	ＰＬ
27	ＳＫ101	錠前	51
28	ＳＤ104	引き手	
29	検Ｉ０区	座金･割ピン	
30		飾金具	
31	南壁１区	飾金具	
32	ＳＫ408	不明	
33	ＳＫ333	銅線	
34	ＳＫ206	鎖	
35	ＳＫ117	鎖	
36	ＳＫ302	鎖	
37	南壁立会	ジャカゴ	52
38	ＳＫ208	火キリ金	
39	ＳＤ401	火キリ金	

番　号	出土遺構	備　考	ＰＬ
40	検Ｉ	(つまみ)	
41	ＳＤ103	注口	
42	ＳＫ333	筒型容器	
43	ＳＫ210	留金具	
44		把手	
45	検Ｉ３区	蓋置(蟹)	52
46	ＳＫ212	金箔(三葉葵)	52
47	検Ｉ２区	不明	51
48	ＳＫ346	(毛抜きカ)	
49		キセル	
50	ＳＫ206	キセル	
51	ＳＫ304	キセル	

表47　金属製品観察表

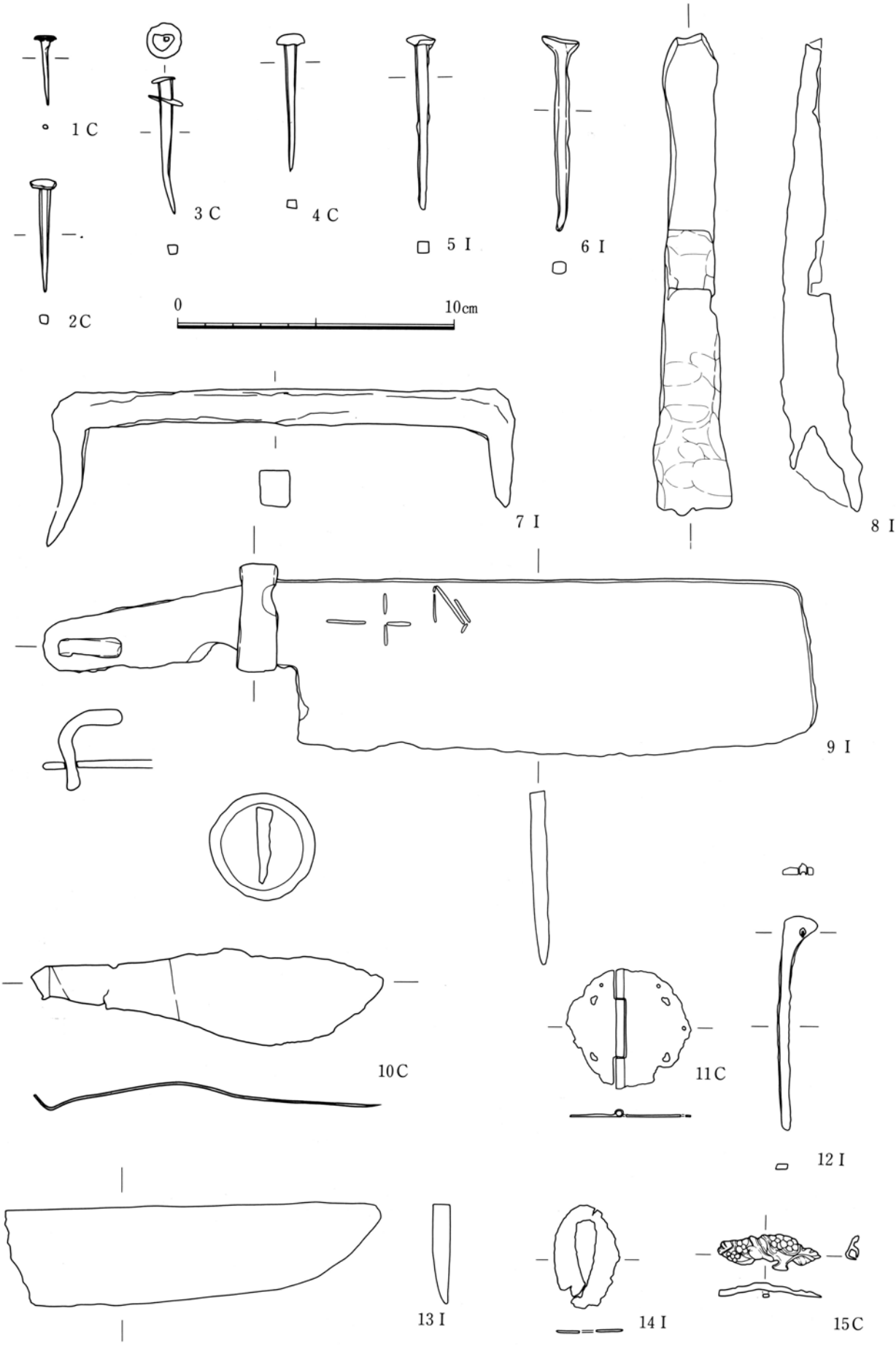


図240　近世金属製品実測図(1)

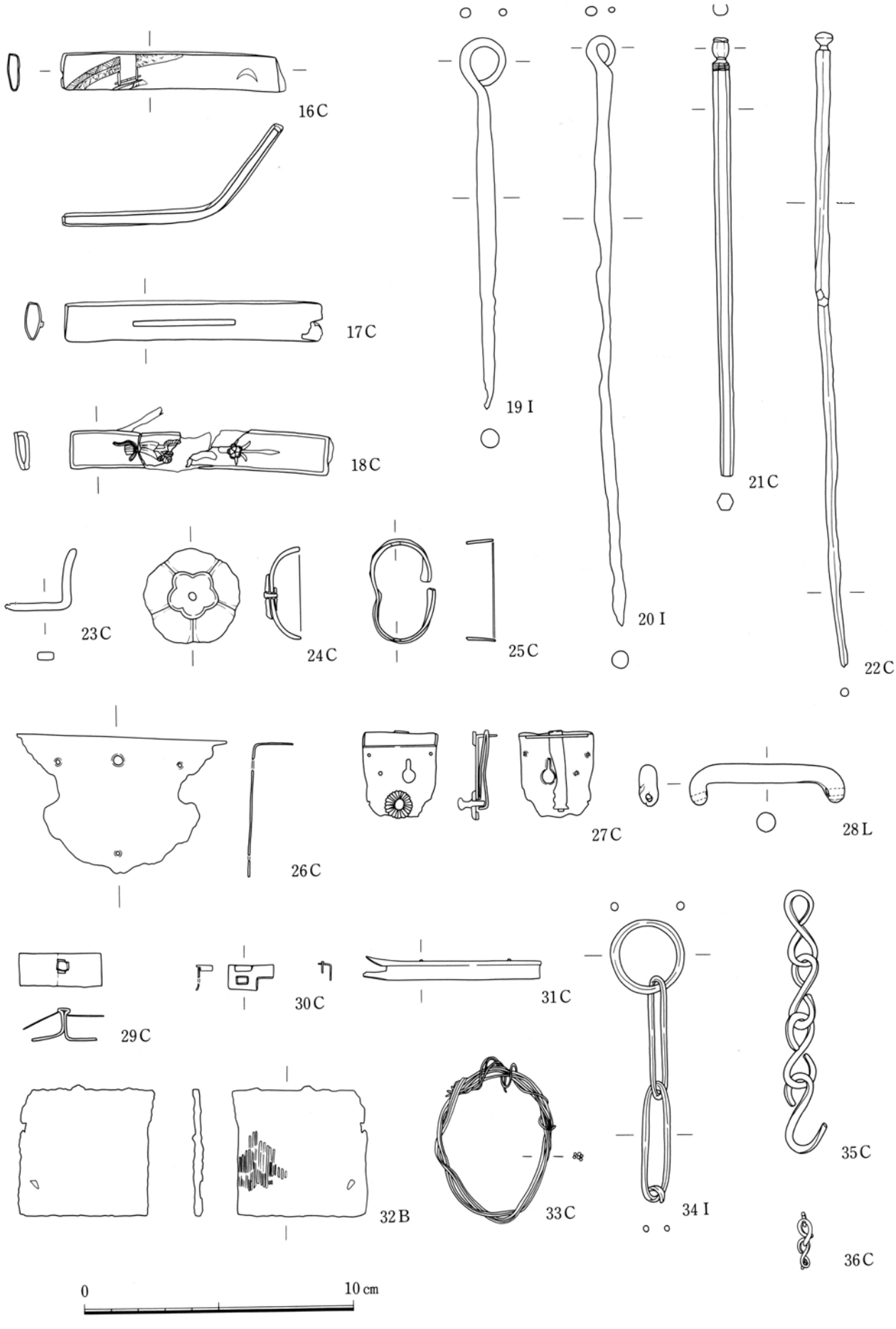


図241　近世金属製品実測図(2)

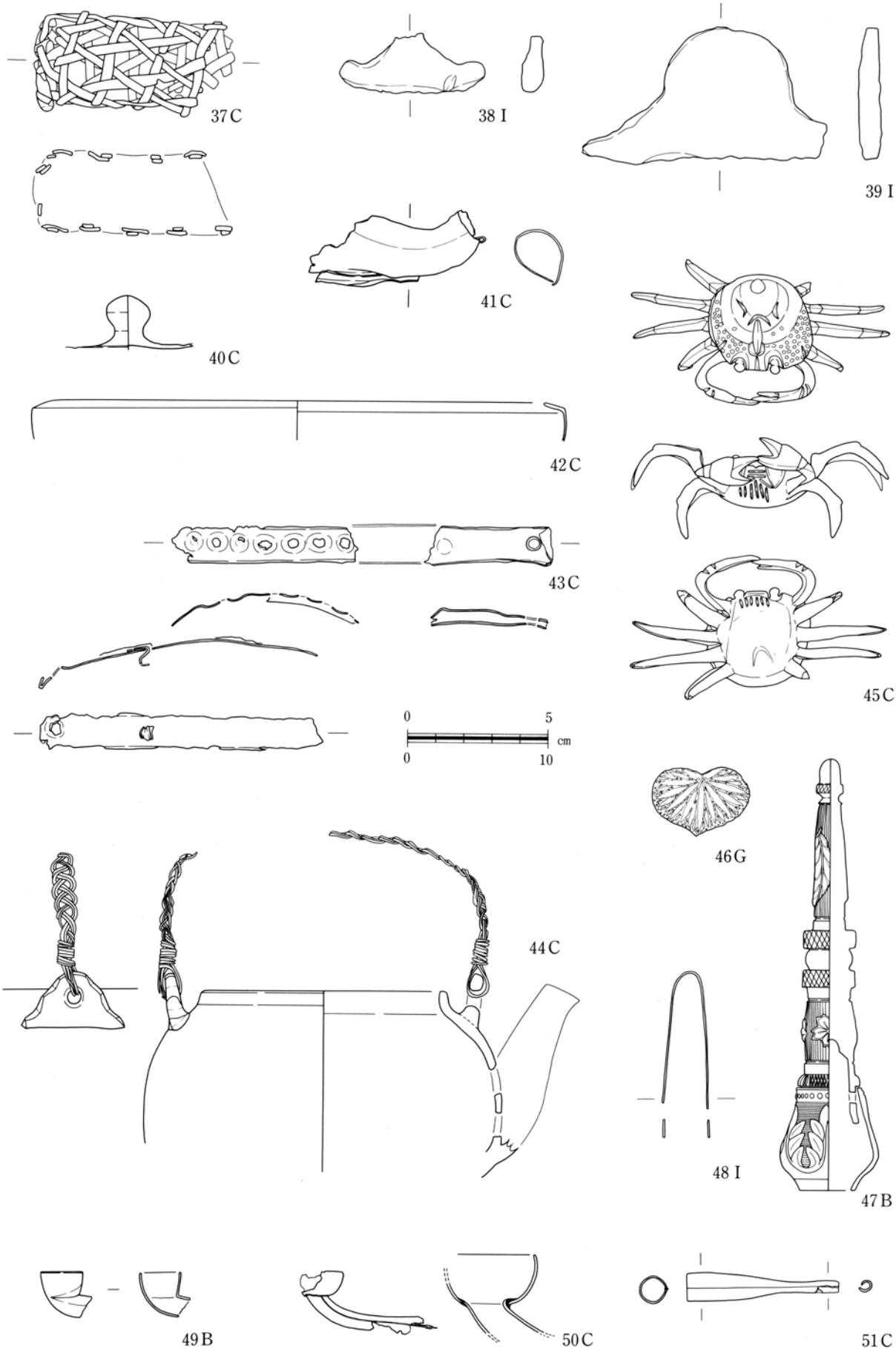


図242　近世金属製品実測図(3)

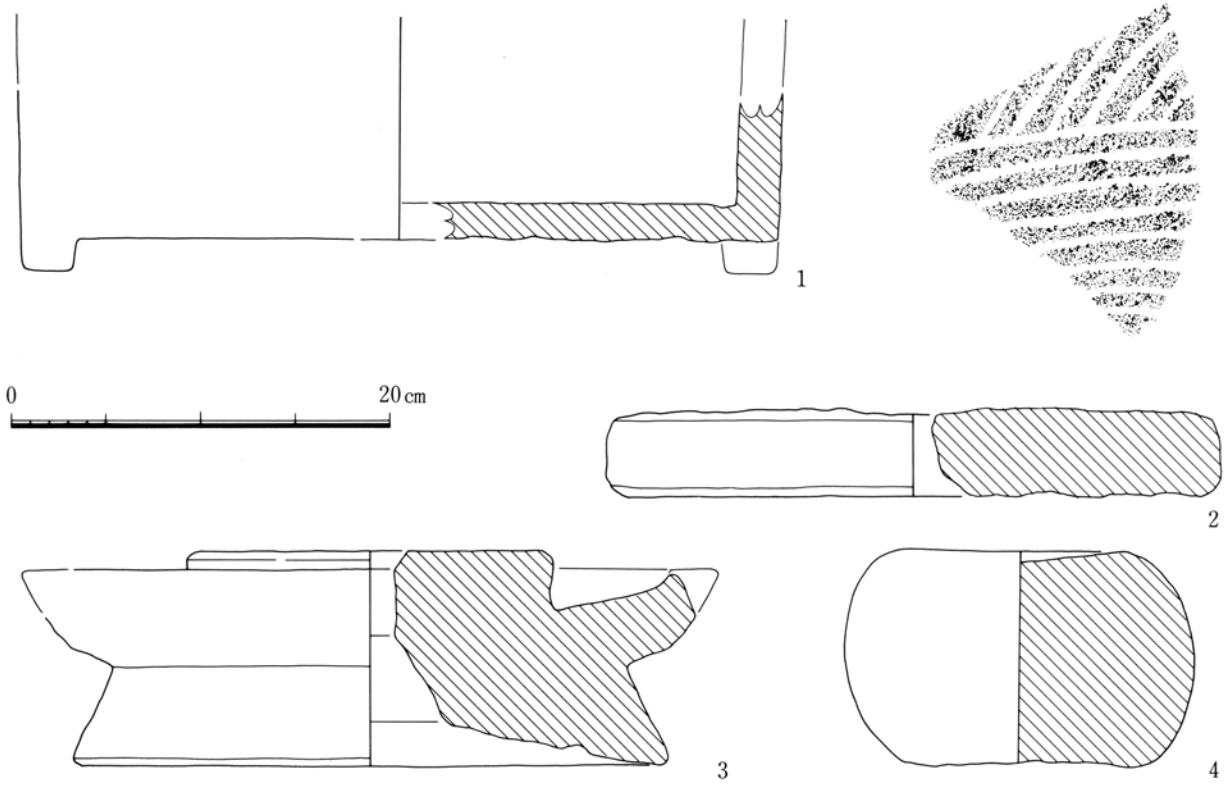
(9) ガラス・石製品

出土した石製品には、ガラス製品も含め、臼、かんざし、硯等がある。

（1）は不明石製品である。（2）は石臼、（3）は茶臼である。（4）は五輪塔の一部、水輪と思われる。（5）から（10）はガラス製のかんざし。（5）は断面が隅丸長方形で花（桜?）の細工が施されている。（6）・（7）は断面が花弁状に細工されている。（10）もかんざしの一部と考えられ、花（?）の細工が見られる。（11）はガラス製の合子の蓋と思われ、やはり上面に花の細工が施されている。

（12）から（19）はいずれも硯である。うち（12）と（14）の底部に線刻が認められる。

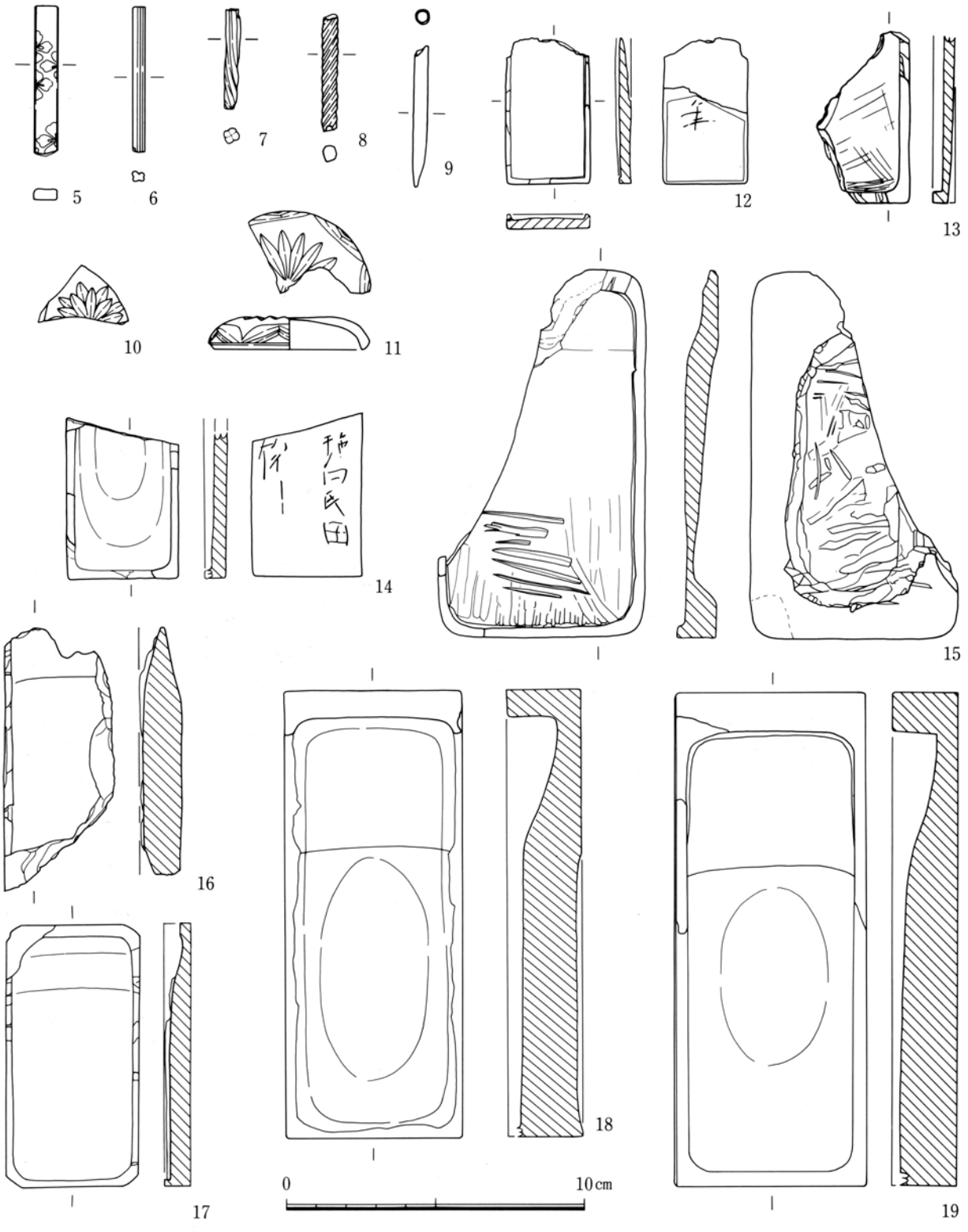
（川井啓介）



番　国	出土遺構	備　考	PL
1	SK123		
2	SK101	石臼	

番　号	出土遺構	備　考	PL
3	SK214	茶臼	
4	SK123	水輪	

図244　近世石製品実測図



番　号	出土遺構	備　考	PL
5	SK333	かんざし	53
6	SK333	かんざし	53
7	SK333	かんざし	53
8	SK333	かんざし	53
9	SK333	かんざし	53
10	SK206	かんざし	53
11	南壁	合子	
12	SK101	硯(線刻あり)	

番　号	出土遺構	備　考	PL
13	SK101	硯	
14	SK101	硯(線刻あり)	
15	SK101	硯	
16	検Ⅰ	硯	
17	SK321	硯	
18		硯	
19	SK202・207	硯	

図245　ガラス製品・石硯実測図

IV　補論とまとめ

1．補論　文献上からみた那古野城—戦国期を主に—

名古屋城は、戦国期に始まり、江戸時代初期徳川家康により「天下普請」として新たに築かれ、戦災によって本丸天守閣を始め多くの建物が焼失するまで、近世城郭の代表例として、「尾張名古屋は城で持つ」と世にうたわれるほどの著名な城郭の一つである。

従って、近世城郭としての名古屋城に関する史料は多大な量に及び、研究史の蓄積もまた厚い(1)。報告者としては、近世城郭としての名古屋城について、現在のところ、その力倆及び時間的余裕が不足しており、他日を期せざるを得ない。

そこで、本稿では、近世城郭以前の名古屋城——ここでは便宜的に那古野城と呼ぶことにするが——を主に取り挙げることとする。戦国期の那古野城についても、織田信秀・信長父子の事蹟との関連で、比較的よく知られており、『信長公記』などの関係文献も他の戦国期の城郭に比べて少ないとはいえない。

しかし、それらの関係文献の性格の持つ限界の故に、那古野城に関する諸事件、例えば、築城・攻防・廃城などの年代といった基本的情報すら、未確定な部分が多いと聞かれれば、驚かれる方も多いのではなかろうか。ましてや、城郭の規模・構成や城下町の様相などについては、文献上ではあたかも雲をつかもうとするが如く、謎にみちているといえよう。

そうした当時の城の状況については、考古学による発掘調査に期待するところが大きいのは勿論であるが、文献史料の上から、本稿では再検討を試み、出来る限り、那古野城の姿を明らかにしようとした。それが、同城の歴史のみならず、尾張地方の歴史の動き、さらには戦国織豊期の日本の歴史の転換に関係していると考えているからに他ならない。

今川氏と那古野城

尾張における室町期守護体制は、尾張国８郡のうち、知多・海東２郡を除く尾張国守護を斯波氏が、知多・海東両郡の「分郡守護」を一色氏が勤めるというものであった(2)。さらに、守護の支配下に属さず、将軍に直接奉任する奉公衆の存在も尾張では顕著であった(3)。

しかし、応仁・文明の乱により、斯波・一色氏という守護権力は失墜した。尾張国内においては、実権は守護代織田氏に移り、守護斯波氏を擁して清須城に拠る織田大和守家が「下四郡」を、その北の岩倉城に拠る織田伊勢守家が「上四郡」をと分裂対抗し、しばしば相戦う状況となった。

そのため、尾張国内の政治的分裂はさらに進行することとなる。岩倉系織田氏の支配する「上四郡」については、関係史料が乏しく、不明な点が多いが、守護代清須系織田氏の支配する「下四郡」については、その状況は比較的明らかである。よく知られる「清須三奉行」の台頭である。即ち、守護代の奉行を勤める織田一族、勝幡城に拠る織田弾正忠（備後守）家、小田井城に拠る同藤左衛門家、同因幡守家の３者が勢力を伸ばした。例えば、藤左衛門家の居城小田井城については、高田徹氏の研究によって、かなりの規模の城であったことが明らかになっている(4)。

さらに注目したいのは、勝幡系織田氏（弾正忠家）の台頭である。その本拠地、勝幡城は海東・海西・中島郡境に位置しており、その南にある津島を押さえ得る場所であった(5)。津島は牛頭天王信仰の中心であり、津島御師は尾張国外に広域的な活動をしたことが知られる。また、津島は、港町として重要であ

り、経済的に繁栄していた。勝幡系織田氏の台頭の背景に津島の存在があったことは、従来から指摘されている(6)。

しかし、勝幡系織田氏の勢力基盤はそれだけではない。まず、海東郡自体が、元来一色氏の領国であり、尾張守護斯波氏の被官織田氏の勢力の及ぶ領国内ではなかった筈である。ところが、応仁・文明の乱の結果、一色氏は尾張国内で影響力を喪失し、隣接する織田氏一族のうち、弾正忠家が進出してきたと考えられる。

また、妙興寺文書によれば、勝幡の北にある中島郡にも、勝幡系織田氏の進出がみられる。織田信秀の祖父西（材）岩が、中島郡内の妙興寺領花井・朝宮（以上現一宮市内）、矢合・鈴置・吉松（以上現稲沢市内）を押領したのは、恐らく応仁・文明の乱後の尾張国内の混乱に乗じてのことと思われる(7)。西岩が、守護代織田敏定の寺領安堵の措置を無視して、寺領の押領が可能であったのは、中島郡が本来岩倉系織田氏の支配地域であり、守護代家としばしば争ったという当時の政治状況が背景に存在したとしても、相当の実力をそなえていなければ、実行できなかったと思われる。従って、前述した『信長公記』のいう尾張国内の上・下4郡の分割という状況も(8)、実際には郡境（これ自体現在のところ確定し得ていないが）により明確に両勢力が分かたれていたわけではない。『信長公記』には、郡単位で、諸勢力の勢力範囲を説明しようとする傾向がみられることを留意せねばならない(9)。

いずれにしろ、中島郡のかなり北部にまで早くから勝幡系織田氏の勢力が及んでいたことは確実である。しかも、織田信秀が後述するように本拠を尾張東部に移した後も、蔵入地などの存在によって勝幡系織田氏の権力基盤たるを失わず、信長・信雄の時代にも依然として、同郡のあり方に変わりはなかった(10)。

以上のように、尾張西部において勝幡系織田氏の台頭がみられ、織田信秀は、1532年（天文元）に守護代家および三奉行家の1つ織田藤左衛門と抗争しており、守護代家の権威低下は明らかであった(11)。また、美濃・伊勢と接する西端の海西郡（川内）においては、美濃・伊勢・尾張の一向宗門徒の結集する長島願証寺が存在し、独自の勢力圏を築くに至った。ことに鯏浦を本拠とする服部水軍は有力門徒として知られていた(12)。

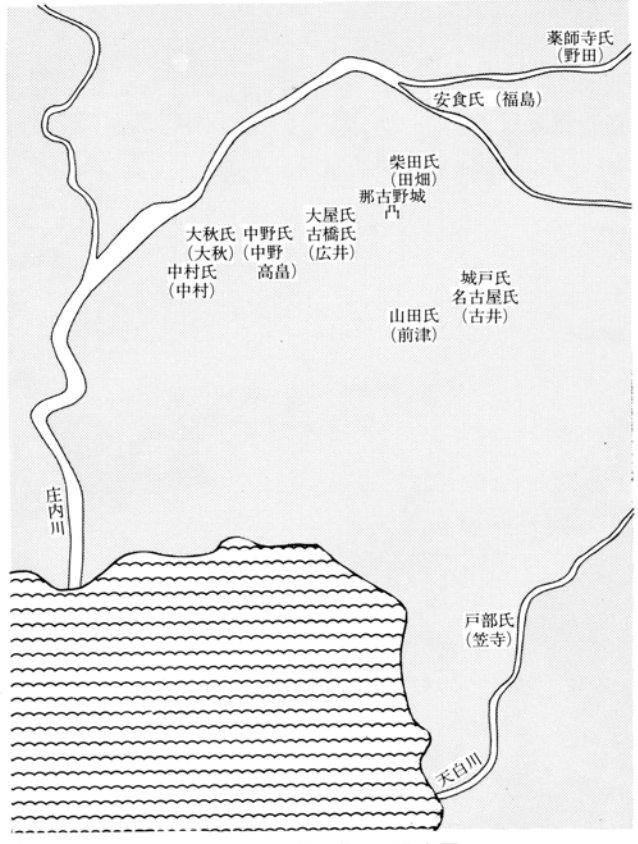
他方、尾張東南部においても、諸勢力の分立状況は同様にみられる。海東郡とともに、一色氏が「分郡守護」であった知多郡では、一色氏の被官佐治氏（大野）や水野氏（緒川）らの諸勢力が分立・抗争する場となった。愛知郡・春日井郡にかけては、先述の「清須三奉行」の一人、小田井城の織田藤左衛門家や、那古野城の那古野今川家の台頭が注目される。今川氏は、足利一族の名門で、その嫡流は駿河守護を世襲した。後述するように、織田信秀に那古野城を奪われた同城主今川左馬介氏豊が、駿河守護今川氏親(1471～1526)の末子で、同氏輝・義元の弟にあたるため、氏親が尾張守護斯波義達を遠江で降して尾張に送還する際に、氏豊を同行させ、那古野城を築いて城主としたとの説（『名古屋合戦記』）が伝えられている(13)。しかし、今川氏と那古野との結びつきは、さらにさかのぼることができる。1431年（永享3）7月、幕府御料所（直轄地）山田庄の百姓の逃散事件が起き、幕府は、尾張守護代に逃散した百姓をかくまう者を処罰することを告げ、近隣の領主にもその旨を伝えた(14)。その一人に、那古野の領主今川左京亮の名が挙がっている。他に名を連ねている諸領主のうち、寺院・公家を除くと、守護・奉公衆級の有力武士と考えられる(15)。当時の駿河守護は、今川民部大輔範政(1364～1433)であり、今川左

京亮とは別人物である。今川関口氏を始め今川氏一族で、奉公衆を勤める者がいたので(16)、左京亮も、系図上の位置づけは不明ながら、今川氏の一族で、奉公衆であったと推測される。

従って、那古野今川家は、今川氏の一族であっても、尾張の那古野を領地とした奉公衆に由来する家柄といえよう。元来尾張は、19家と、全国で4番目に奉公衆が多くみられるのである。

守護・奉公衆の多くが、応仁の乱により室町幕府と衰退を共にしたのに対し、那古野今川家は、乱後も那古野を本拠に、勢力を維持してきたと思われる。そして、小和田哲男氏が指摘するように(17)、本家である駿河守護今川氏親の末子氏豊が、同族ということで、那古野今川家へ養子として迎えられ、家督を継いだと考えるのが妥当であろう。今川氏親は、遠江を巡る斯波氏との戦いに勝ち、駿河・遠江両国の戦国大名としての地位を確立させることに成功したが、氏豊の那古野今川家相続により、直接その勢力を尾張に及ぼしたとは考え難い。駿河・遠江と尾張との間には三河があり、氏親は、やっと東三河の戸田氏・牧野氏を従わせるに至っただけで、西三河進出は果たせず、1526年（大永6）亡くなる。その後、幼少の氏輝のもとで駿河今川氏内部は混乱を生じ、同氏の勢力後退に乗じて、西三河の松平氏の急激な勢力拡大が始まっており、駿河今川氏と那古野今川家との連携ということは、実現困難であったと思われる。

しかし、那古野今川家が、室町幕府の奉公衆として那古野に長年培ってきた勢力は、氏豊の代に至っても、かなりの規模を持っていたと推測される。那古野城主今川氏豊の旧臣の氏名・在所を示した「今川氏豊旧臣分布図」を参照すれば、那古野城を中心として、愛知郡を主に、一部が春日井郡南部に及んでいるのがよみとれよう。氏豊旧臣分布図(18)は、江戸中期に成立していた「将士伝」(19)によるもので、いわば近世の伝承に類するものであるが、旧臣の一人、中村氏（中村居住、広井城主とも）について、後に詳述するように他にも関係史料があり、参考史料として、ある程度の信頼をおけるものと思われる。この推測が正しければ、那古野今川家は、庄内川と天白川に挟まれた、愛知郡・春日井郡南部のかなりの広範な地域を支配していたと考えられよう。



付図①　今川氏豊旧臣分布図
（「将士伝」より）

実際、織田信秀による那古野城攻略という事件のみが従来注目されてきたが、勝幡系織田氏の発展という視角から見た場合に重要な事柄は、この信秀の行動によって、尾張東部に勝幡系織田氏の支配が直接に及ぶことになった

点であり(20)、それは那古野今川家の勢力基盤の奪取に他ならなかったのである。熱田神宮寺座主・笠寺別当憲信が「当殿様(信秀)、愛智ニ多悉以御手ニ入候」と述べた事態は(21)、那古野今川家の信秀による打倒によって初めて実現し得たことを思えば、それ以前の愛知郡における那古野今川家の勢力の大きさを認めてもよかろう。

那古野城主今川氏豊は、連歌などの催しを通じて、勝幡城主織田信秀と対等の交際をしていたことはよく知られている(22)。先述の座主・別当憲信が、1527・28年（大永７、享禄元）ごろの笠寺寺僧たちの非法な行動を非難して、「彼在所」（笠寺）では、「国之御下知をもかろんし申たる事ニて候」と述懐している(23)ことは、後述するように、隣国西三河の松平氏の尾張進出という事態も付け加わっているにせよ、「下四郡」を支配していた筈の守護代織田大和守の権威の愛知郡における低下を如実に示すものといえよう(24)。応仁の乱後、尾張西部の中島郡において、守護代織田大和守の権威が勝幡系織田氏による妙興寺領押領を拒む何らかの力となり得なかったのと同様な事態が、尾張東部の愛知郡においても進行しつつあった。上司たる別当や守護代の命令を無視して憚らない笠寺寺僧とそれを支持する在地の勢力と、それと結ぼうとする那古野今川家(25)、さらに西三河の松平氏の進出にみられるように、尾張東南部においても、守護――守護代という伝統的支配体制からの離脱という諸勢力の分立状態が生まれていたことを、くり返し強調して置きたいと思う(26)。

松平氏の尾張進出

既に何度か触れたように、織田信秀の那古野城攻略に関係する時期、1526年（大永6）～1535年（天文4）にかけて、隣国西三河の松平氏による尾張進出の事実がみられる。

まず、連歌師宗長の『宗長手記』(27)によれば、1526年（大永6）３月27日に、宗長を招いて、守山の松平与一の館で、「新地の知行」の「祝言」に、千句興行が催され、守護代家の織田氏一族や被官も参集した。松平与一とは、桜井（現安城市）の松平信定にあたり、「新地の知行」とあるところからみて、この頃信定は、本拠三河の桜井に加えて、尾張守山の地を新たに得たものと思われる。知行入手の契機は不詳ながら、「新地の知行」とあり、守護代家一族・被官が出席していることからみて、武力征服などではなく、守護代家の承認を経た知行獲得であることはまちがいない。

次に、碧海郡佐々木（現岡崎市）の松平三蔵信次は、1533年（天文2）に愛知郡梅森（現日進町）の城主となった(28)。

また、先述したように、熱田神宮寺座主・笠寺別当憲信によれば、1527・28年（大永7・享禄元）ごろに、愛知郡南部の笠寺あたりは、「三州より知行」と述べられており、時期からみて、当時西三河で勢力を伸ばしつつあった松平氏の勢力が、愛知郡南部の地を知行したといわれるような事態が生じていたと思われる(29)。

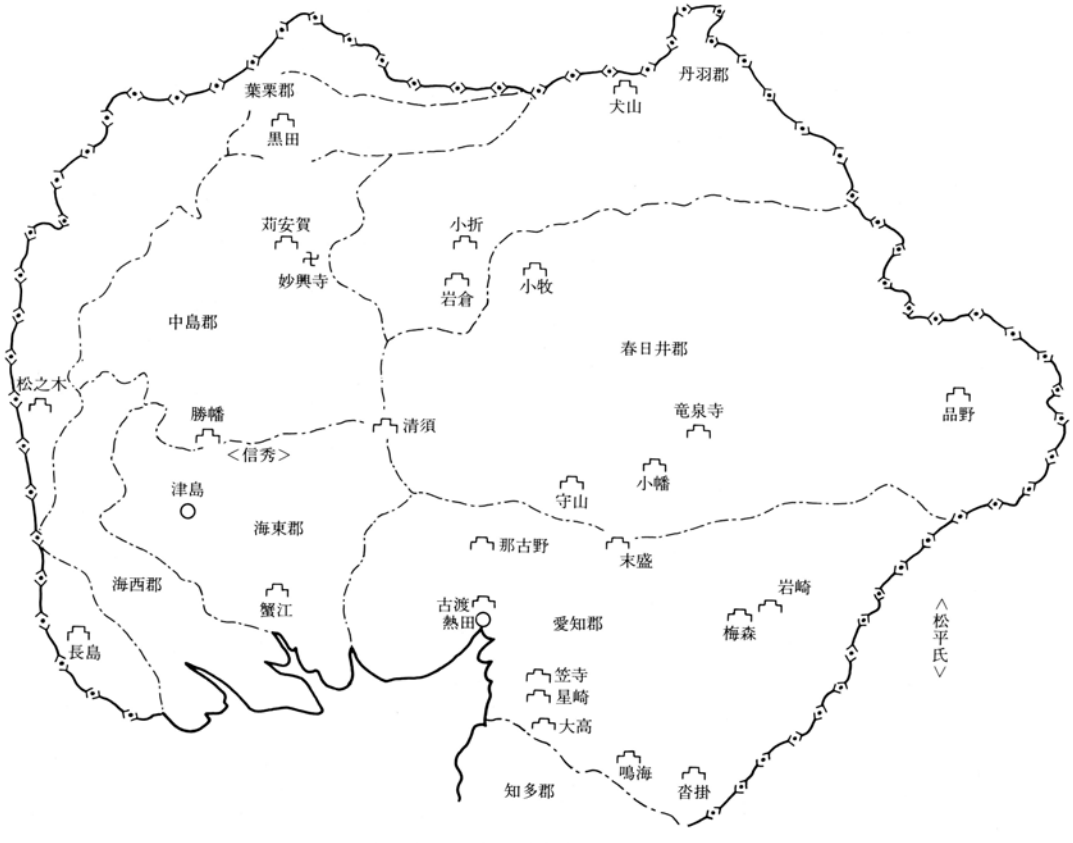
これらの事例をみてみると(30)、三河国境に近い梅森を別にすれば、守山・笠寺ともに、三河に隣接する愛知・春日井両郡内でも、比較的国境から隔たった内部の地であることと、「知行」という言葉からうかがえるように、武力征服ではない、いわば平和的・合法的な手段による獲得と思われることに注目したい。

こうした松平氏一族の尾張進出を経たのちに、松平氏惣領７代松平清康は、東三河征圧後、武力によ

る尾張進出を図る。1529年（享禄2）清康は、三河国境に近い、春日井郡品野・愛知郡岩崎の両城を攻略した(31)。品野城は、先述の桜井・守山城主松平信定に与えられたこと、岩崎城が梅森（城主松平信次）に近接する地にあることからみて、従来の松平一族による尾張進出を踏まえて、将来の尾張への本格的武力侵攻の準備を進めたものと思われる。

1535年（天文4）、ほぼ三河国内の統一を果たした松平清康は、尾張の織田氏との対決をめざし、守山まで侵攻する。ところが、大久保忠教の『三河物語』(32)によれば、当時守山城主は、松平信定の婿織田信光（信秀の弟）であり、信定は、清康の叔父ながら、今回の清康の出陣に参加せず、離叛の流言さえ流れたという。松平の陣中が動揺した結果、清康は横死して、清康による三河支配体制は瓦解した。

このよく知られた事件（守山崩れ）に関係した史料をみて、不思議に思われることは、織田氏の拠点として、守山・清須城については触れていても、那古野城に関しては何も言及されていないことである。従来の通説によれば、既に織田信秀の拠点となっていた筈の那古野城について、松平清康との対決の際に何らの役割も果たしていそうにみえないことは、奇異なことに思われる。この疑問を踏まえて、次項で、信秀による那古野城攻略について検討することにしたい。



付図②　織田氏時代の主要城館

信秀による那古野城攻略

織田信秀による那古野城攻略はよく知られている事件であるが、その年代については未確定な部分が多い。江戸時代以来伝えられてきたのは 1532年(享禄5・天文元)説で、天文元年２月11日(『明良洪範』)・同年３月11日(『名古屋合戦記』)と両説あるが、『言継卿記』(33)の記事によって、その信頼性が失われた。同記によれば、1533年（天文２）７月に、「在名なこや」の今川竹王丸（当時12才）が、勝幡に来て、飛鳥井雅綱のけまりの門弟となっており、この竹王丸が後の今川左馬介氏豊であるとすれば、前年の信秀による那古野城攻略説は成立する根拠を失う。従って、従来の通説では、攻略の年代を、1532年よりも新しい1534・35年（天文３・４）ごろとする場合が多かった。

しかし、近年新井喜久夫氏は、信秀による那古野城攻略の年代を、1538年（天文7）ごろとする新しい説を提起されておられる(34)。その根拠は、那古野城付近の天王社(現那古野神社)・若宮八幡社が兵火に焼亡して、1539年（天文8）に再建されたという社伝であり、兵火焼亡＝那古野城攻略戦として、その前年にあたる1538年ごろと同城の攻略の年代を推定されている。

新井喜久夫氏の指摘を踏まえて関係史料を再検討してみると、尾張東南部地域に出された織田信秀判物の初見は、1539年（天文8）の熱田加藤氏宛のものが初見であり(35)、尾張東部を抑えた信秀が、さらに東の三河へ進出して、松平氏の安祥城を攻略するのは、諸説あるうちの、最も早い年代を採用しても、1540年（天文9）である。1535年（天文4）の守山崩れから、本格的な三河侵攻の実施まで５ヶ年も遅れたのは、何か事情がありそうである。新井喜久夫氏の新説は、それを断定できる直接証拠はみられないものの、状況証拠は那古野城攻略が、従来の通説よりも、さらに新しくなることを示しているように思われる。

もし、新井氏の新説が正しいものとすれば、1534年（天文3）の織田信長の誕生地が勝幡城か那古野城かという従来からの議論以上に、大きな問題を新しく提起することになる。第１に、那古野城主今川氏豊の没落が、1534・35年（天文3・4）ごろではなく、早くとも1538年（天文7）以降となる。第２に、信秀による那古野城獲得の年代が遅くなるとともに、その後に築かれる古渡城の築城年代も必然的に遅くなることである。1544年（天文13）11月に、連歌師宗牧は織田信秀を那古野城に訪ねている(36)。古渡城については、宗牧は何も言及していないことからすると、信秀の古渡城移転はこの後である可能性すら生じてくる。

近世の文献(37)が何れも1532年（天文元）攻略説を採用しており、直接断定できる史料を見い出し得ていない段階では、慎重でなければならないが、上述したように新井喜久夫氏の新説は十分に検討に値する説と考えられる(38)。もし、新説が正しいとすると、尾張東部をめぐる状況は、従来の通説から一変してしまう。1526年（大永6）～1535年(天文４)にかけての西三河の松平氏の進出の際には、那古野城主今川氏豊は健在であったことになり、逆に今川氏豊と松平氏の対立を示すような史料がみえないことがなぜなのか、疑問が持たれることになる。

松平氏一族の進出が初期には「平和的」なもので、松平清康の武力侵攻においても、那古野今川家に対しては清康側では何らの懸念も記されていないことからすると、松平氏の尾張進出に対して、那古野今川家の協力、少なくとも黙認がなければ、これほどの成果を挙げることは難しかったのではないかと推測される。

又もや、推測の上に推測を重ねることになるが、那古野今川家の支持を受けた三河松平氏の尾張東部への積極的な進出、これに対し、1535年（天文4）の守山崩れを転機として、織田氏側の反撃が、信秀の那古野城攻略、さらに松平氏の本国西三河への進攻となっていったのではないか(39)。勝幡系織田氏の発展において、那古野城攻略は、尾張東部への勢力拡大へと位置づけられよう。

那古野城を攻略した織田信秀は、西部の勝幡城から、本拠を同城に移し、打倒した今川氏の旧領は信秀の手中に帰し、新たな勢力基盤を形成した。愛知郡御器所・山崎の佐久間氏、比良の佐々氏、などは譜代の老臣層となり、熱田豪商加藤氏も信秀と親密な関係を結ぶに至る。

しかし、那古野今川家旧臣の動向は複雑で、織田信秀も、笠寺観音と笠寺の有力在地勢力山口・成田氏を懐柔するなどの配慮をみせている(40)が、後述の中村（広井城主とも）の中村氏のように、終に信秀に属さなかったものもいる。

兼松正吉・生駒利豊らとともに、中村又三元勝は、歴戦の「尾張衆」として当時武名の高かった武士であるが、その父祖は那古野今川家の旧臣である。以下、関係史料を少々長くなるが引用する。

史料(A)　『士林沂洄』 3 (41)

（中村）元勝　又三　対馬

産干尾州愛智郡広江村、初薙髪禅刹。広江村有薬師仏、元勝護持(割註省略)。其姓[井]不好浮屠、截竹為弓、削木作刀、常[性]試射振剱、遂得弓術、其力超人。此寺乏朝夕之飡。一日奮然起遠遊之志、往清須府、買弓矢及靫、而帰、向仏曰、我給仕者有年未見利生、日々貧困何益、今我棄此寺赴他邦、故与一矢以為其験矣。若有霊、可罰我矣。已受仏体不保一寺、即奈何罰我耶。故矢射徹仏胸。其矢痕千今有之。肩弓腰靫而出寺、向フ東ニ。束髪名又三、往駿州属今川麾下、為歩弓士回。（中略）

慶長十二年未三月、忠吉卿即世、

敬公領尾州以　台命属

敬公、十五年戌十一月十三日卒、享年六十七、　（後略）

史料(B)　天野貞景『塩尻拾遺』16(42)

中村弥右衛門元親は（赤松家の庶流にや、享禄年中、中村弾正貞友等あり。）佐々木の流裔、父は対馬守某と称せし。曽て中国の勇士なりしが、文明年中尾州に来り、愛智郡中村の郷に住せし。元親いとけなき比より、今川左馬介氏豊朝臣に仕へて、名古屋にありし。薬師寺刑部大輔道元春日部野田村人の女を娶りて男子を生ぜり。享禄五年二月十一日、織田備後守信秀、今川殿を攻めて城を奪へりし時、元親力戦して討死せしにや。彼の男子身を隠し、広井村東光寺の僧となり、忠禅と称せし。壮年に及んで、奮然として志を発し、黒衣を脱して束髪せしかば、時の人皆是をあやしめり。然れども顧り屈せず。我男児たり、箕裘の業を継ぎて海に跨り嶽を揺（うごか）さんとおもふ。世人愚して浮屠を恐る故に予を訝（いかぶる）。又夫れ豈黠胡（きっこ）に畀々せんやと。即ち所持の弓をし張り、本尊の薬師を射て一笑、袂（たもと）を払って寺門を出、直（ぢき）に東国に下り、英雄の武将に謁し、志をのべて遂に功名を立てり。中村対馬守元勝也。

史料(C)　洲崎天王社家先祖書（文化11年）(43)

初代　長田甚右衛門

一、知多郡野間浦内海荘司長田四郎忠致後裔ニ付元祖広井村ニ住居仕、広井之城主中村氏之家ニ由緒有之、且天文年中此甚右衛門致継をハ広井村之支配を兼、天王并石神守護仕、（後略）

上記の史料のうち、A・Bは江戸中期の成立、Cはより降って江戸後期のものである。史料A・Bについては相補う関係にあり、両者に矛盾はなく、近世中期の成立ながら、その内容の大筋について信頼できるものと考えられる。本尊に矢を射るという行為は甚だ過激ながら、還俗して武士となることは当時珍しい事例ではない。しかし、元勝の出家は、織田信秀の那古野城攻略が原因であったことが注目される。即ち、父中村元親は、中村に居住し、今川氏豊に仕えて、那古野城攻防戦で討死し、子元勝も織田氏を憚って出家したとある。史料（C）のように、中村氏が広井城主であったとの伝承よりすれば、かなり有力な家臣の一人であったと思われる。

父元親を信秀のために失った中村又三元勝の思いは、還俗して武士となった後、尾張を去って、駿河の今川義元に仕えたことに明瞭にうかがえる。父を殺した織田氏（信秀・信長父子の時代）に仕えるを潔しとせず、旧主今川氏豊の実兄、嫡流の今川義元に仕えたのであり、その子今川氏真の没落の後に漸く尾張にもどったのである。那古野今川家の旧臣の動向で詳しい記事があるのは、この中村氏の例に限られるが、長年にわたって仕えた那古野今川家を倒した織田氏を嫌い、今川一族に親しみを感ずる旧臣たちは少なくなかったと思われる。

先述したように、愛知郡東南部に勢力を持った山口氏も同様の事例ではなかろうか。明証はないものの、笠寺の戸部氏が那古野今川家の旧臣との伝承を持っていたとする(44)と、山口氏も今川家に仕えていた可能性がある。しかし、今川氏豊没落後、山口左馬助は、織田信秀に仕えて、功績を挙げて有力家臣となった。山口左馬助とすれば、愛知郡を掌握した信秀に止むなく仕えただけの新附の家臣であり、信秀が弱体化すれば、再び離れる可能性があった。そして、東方より松平氏を服属させた今川義元が進出することにより、その恐れは現実のものとなった。山口左馬助は、既に信秀存命中に、今川義元の許へ走ったものと思われるが、その行為を太田牛一『信長公記』の如く「謀叛を企て」と非難する(45)には当たらない。山口左馬助は、信秀にとって新附の家臣に過ぎず、しかも、今川義元は旧主の実兄であった可能性が大きいのである。

この東からの重大な脅威に対して、織田信秀は、美濃攻略をあきらめて斉藤道三との同盟に踏み切り、さらに、今川義元とも講和を図った模様である。信秀はこの困難な状況の中で病死し、那古野城主織田信長が勝幡系織田氏の家督を相続する。

その後の那古野城

那古野城は、信秀の手により「丈夫に御要害仰せ付けられ(46)」、信秀が古渡へ移った際に嫡男信長に譲られた。信秀病死後、その後を継いだ信長は、暫く那古野城を自分の居城とした。そのためか、信秀死後、勝幡城や古渡城が、尾張諸地域の政治支配の拠点としての地位を急速に失ってしまった(47)のに対し、那古野城は依然として、尾張東部支配の拠点としての価値を減ずることはなかった。1555年（弘治元）に、信長は、父信秀の弟守山城主織田信光と協力して、守護代家を滅して清須城を奪取した。

『信長公記』によれば、信長は清須城に移り、事前の約束に従って、信光は那古野城に入って、小田井川（庄内川）を境に尾張下四郡を「川西」・「川東」に分割支配しようとしたと伝えられる(48)。この頃

まで、那古野城は、尾張東部支配の拠点として重視されていたと考えられる。

しかし、まもなく那古野城主織田信光が急死し、信長は那古野城をとりもどし、重臣林通勝を置いた。以後、那古野城の支配拠点としての地位は次第に低下するに至る。

清須城の信長に対し、「川東」即ち尾張東部に拠る勝幡系織田氏一族の挑戦は続いたが(49)、那古野城の地位は副次的なものにとどまった。信長の弟末盛城主織田信行は、兄に対抗するに至ったが、信行を支持する重臣、那古野城主林通勝は、「川東」の諸城を味方に引き入れ、信長に敵対した。結局、兄弟間の争いは林通勝ら家臣が信長に帰服し、信行が自害する結果となった(50)。

織田信長は、尾張を統一し、さらに上洛して天下制覇を目指していくが、尾張国内の状況は逆に史料が乏しくなる。那古野城については、1580年（天正8）に林通勝が往年の弟信行の謀反への加担の罪で追放されるまで、城主であったと思われるが(51)、重臣林通勝の地位ともども那古野城は影の薄い存在であった。確かに、ある程度の規模の城郭と城下町が存続していたことは推測させるものの、文献上では、尾張の政治支配の拠点としての地位を失わなかった清須城などに比べてこの間の史料に乏しい。

結局、那古野城は、今川氏豊から奪取した織田信秀と、それに続く、信長の初期の時代に歴史――主に文献からみて――に華々しく登場し、その後はほとんど忘れられたまま、徳川家康の名古屋城築城を迎えることとなったと述べてはいいすぎであろうか。文献のもの言わぬ部分に、考古学の発掘調査が新たな成果を蓄積されることを、強く期待するのもそれ故である。　（下村信博）

註

(1) 『名古屋城』「日本名城集成」（小学館）1985の関係文献目録などを参照。
(2) 佐藤進一『室町幕府守護制度の研究』上（東京大学出版会）1967、上村喜久子「尾張における守護支配」『清洲町史』（清洲町）1969
(3) 福田豊彦「室町幕府奉公衆体制」『室町幕府守護職家事典』下（新人物往来社）1988
(4) 『愛知県中世城館調査報告Ⅰ（尾張地区）』（愛知県教育委員会）1991　小田井城の項
(5) 『佐織町史』通史編第3編第2章（佐織町教育委員会）1989
(6) 小島廣次「勝幡系織田氏と津島衆――織田政権の性格をさぐるために――」『名古屋大学日本史論集』下（吉川弘文館）1975　なお、一向一揆との対抗関係から、勝幡系織田氏の勢力を低くみる議論もあるが、同氏の権力基盤の形成はより早くから進んでいたとみるべきである。
(7) 某書状草案（妙興寺文書504号）『新編一宮市史』資料編5（一宮市）1963
(8) 奥野高廣・岩沢愿彦校注『信長公記』（角川書店）1971
(9) 拙稿「文献史学からみた尾張城館史研究」『愛知県中世城館調査報告Ⅰ（尾張地区）』（愛知県教育委員会）1991
(10) 拙稿「織田政権と尾張武士――坂井文助利貞を例として――」『名古屋市博物館研究紀要』15　1993
(11) 山田栄女他校訂『言継卿記』（国書刊行会）1914
(12) 『信長公記』（註(8)）
(13) 『名古屋合戦記』「改訂史籍集覧」13（史籍集覧研究会）1968
(14) 『御前落居奉書』桑山浩然校訂「室町幕府引付集成」上（近藤出版）1980
(15) 土岐美濃守は美濃守護、畠山右馬頭持純は奉公衆五番頭、千秋刑部少輔も奉公衆である。三上・大草・加治3氏も奉公衆を一族から出している。また、守護代とは別個に、幕府から直接命令を受けていることからも、彼らは守護被官層ではないと考えられる。
(16) 前掲書（註(3)）
(17) 小和田哲男『国際情報人信長』28頁（集英社）1991
(18) 付図①参照
(19) 「将士伝」『国記叢』（徳川林政史研究所蔵）
(20) 勝幡系織田氏の勢力は、前掲論文（註(6)）によれば、従来東部の愛知郡には及んでいなかった。
(21) 天文19年12月17日付熱田座主憲信覚書（密蔵院文書、以下「覚書」と略）『春日井市史』資料編。但し、上村喜久子「中世地方寺院縁起の展開と地域社会――笠寺縁起と熱田――」『年報中世史研究』17　1992のいうように、同書はいくつかの誤読があるので、適宜訂正して用いた。「覚書」は、戦国期尾張の政治史を考える上でも、貴重な史料である。

(22) 前掲書（註(13)）に、信秀が連歌の会にしばしば那古野城に招かれたことを、同城奪取に利用した伝承を載せる。
(23) 「覚書」（註(21)）
(24) 『春日井市史』（註(21)）では、「其時分之大和守殿さま」とあるが、「其時今之大和守殿さま」と読む方が、字形や当時の表現方法からみて、妥当でなかろうか。もし、これが正しい読み方となれば、織田大和守達勝の生存は、従来の1544年（天文13）から1550年（天文19）まで延ばすことができよう。
(25) 「覚書」（註(21)）などにはみえないが、愛知郡の政治状況を考える上で、山口氏ら郷村規模の在地勢力の上に、郡規模のより広い地域を掌握しようとする那古野今川家などの存在を考える必要があろう。
(26) 「上四郡」を支配する岩倉系織田氏内部にも分立状態が生まれていたとの指摘がある。新井喜久夫「織田系譜に関する覚書」『清洲町史』（清洲町）1969
(27) 島津忠夫校訂『宗長手記』（岩波書店）1975
(28) 『日進町梅森の歴史』（梅森の歴史発行委員会）1985。三蔵信次の子孫は、尾張に数ヶ所の知行を維持した。
(29) 「覚書」（註(21)）
(30) 付図②参照
(31) 小野信二校注『三河物語』「戦国史料叢書6 家康史料集」（人物往来社）1965
(32) 前掲書（註(31)）
(33) 前掲書（註(11)）
(34) 『織田信長事典』出自（新人物往来社）1989
(35) 天文8年3月20日付織田信秀判物（西加藤家文書）
(36) 宗牧『東国紀行』『群書類従』紀行文
(37) 前掲書の他に、後述する『塩尻拾遺』（註(42)）や朝日重村（1714没）・重章（1674～1718）父子編の「塵点録」（名古屋市立鶴舞中央図書館蔵）も、同様に1532年としており、管見の限りでは、近世文献に異説はみられない。
(38) 但し、残る課題の一つとしては、今川氏豊の没年が、現存史料では天文5年となっていることである。関口宏行「今川彦五郎を追って」『駿河の今川氏』2（今川氏研究会）1977参照。
(39) 織田信秀が、天文8・同12年に熱田加藤氏に宛てた判物（西加藤家文書）に、守護代織田達勝の判物を添えていることは、一国規模の効力を期待するとともに、信秀側に、自己の愛知郡征服の「大義名分」として、守護代支配の復活をかかげることを意識していたとも考えられる。
(40) 年未詳12月20日付織田信秀判物（密蔵院文書）、前掲論文（註(21)）参照。
(41) 「名古屋叢書続編」19（名古屋市教育委員会）1968
(42) 「名古屋叢書」18（名古屋市教育委員会）1959
(43) 洲崎神社文書
(44) 前掲書（註(19)）参照。
(45) 前掲書（註(8)）
(46) 前掲書（註(8)）
(47) 『信長公記』（註(8)）によれば、信秀は古渡城を破却して、末盛城を築いて移ったとある。
(48) 前掲書（註(8)）
(49) 前掲論文（註(9)）参照。
(50) 前掲書（註(8)）
(51) 前掲書（註(8)）

2　ま　と　め

以上に、今回の名古屋城三の丸遺跡愛知県警地点3,600㎡の調査で明らかにしえたことがらを個別に記載してきたが、最後に戦国時代と江戸時代に分けて、各遺構と遺物のつながり、問題点について簡単にまとめておこう。

戦国時代

堀（溝）によって区画、防御された戦国時代の屋敷地が今回の調査においても発見された。

堀は、検出面での上端幅2.0～3.5m、深さ2.0～3.0m程を測る堅固なもので、断面U字形、あるいは薬研ないし箱薬研形態を呈している。切り合い関係と共伴遺物から、戦国時代の堀はさらに２時期に区分されるが、これまでに本遺跡の各所で検出されてきた中世の溝と比べてみると、規模、方向性共に異なりを見せている。大規模化し、方向もN－5°—W前後及びそれに直交する形態をとっていて、明らかにまとまりある空間設定と計画性とが表れているといえるのである。さらにII期になると、堀に土塁が伴い、虎口と曲輪を持つ構造へと変化していく。Ⅰ期とII期の時期的境界は明確ではないが、ここでは一応ＳＤ401の伴出遺物などからして、瀬戸美濃窯編年の大窯II期ごろと推測しておく。そして、これまでに名古屋城三の丸の合同庁舎地点や簡易・家庭裁判所地点で発見されてきた同類の堀の存在とも絡めて考えてみると、このような戦国時代の遺構群は複数の堀と郭とからなる複郭構造をとっていた城・屋敷群であると理解できる。

屋敷地内からは、ＳＢ001のような簡単な倉庫を思わせる建物や屋根の一部に使用されたとみられる瓦も発見された。小数ながら、瓦葺建物が存在していたことを窺わせている。また、堀（ＳＤ001）内からは投棄された墓の石塔が出土し、屋敷墓の破壊を想い起させる。出土した陶磁器類については、口縁部計測法による統計結果によれば、圧倒的に土器・陶器製品が多く、磁器は全体の14.4パーセントにとどまるという内容になっている。

すでに指摘されているように、これらの屋敷群が文献に現れる那古野城の遺構であることはほぼ間違いのないところとなったのであるが、今次調査の成果を加えても調査地点が限られているために城郭構造の全体把握に未だ至っていない。しかし、『金城温古録』に所収された「御城取大体之図」に暗示されているような現在の二の丸付近のみに限定して捉えることはもはや不可能であり、相当な広がりと規模を持つ城であることがいよいよ明らかになってきたといいうる。そして、構造が複雑化し、規模が発展していく契機は何か、今川氏親が建設した段階の城郭構造はどのようなものであったのか、下村信博が本書で論考している織田信秀の略奪・入城、尾張支配戦略とどのようにかかわるのか、これらの諸点は、本書において十分には分析できなかった遺構と遺物に関する今後の精緻で厳密な研究に委ねられた課題でもある。

江戸時代

江戸時代の屋敷にかかわる遺構群は厚さ30cmを前後する整地層の上面から検出された。このことは、少なくとも当該地区においては、地表面が多少の起状を持っていた熱田面に地業を加えて宅地造成が行

われたことを表している。もちろん、調査地点は既に那古野城の敷地内であったからその段階ですでに一定レベルに揃えられていたと推定されるが、屋敷地や建造物を築くために名古屋城域全体にわたって広範囲に計画的な整地がまず行われたことを表している。

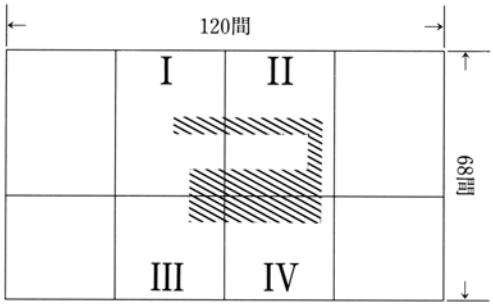
今回の調査では、共伴遺物との関わりから、検出された江戸時代の遺構について18世紀前半代までを前期、中ごろ以降を後期として取り扱った。この区分は、寛文３年（1663）に成瀬、竹腰の両付家老の屋敷地が二の丸地区から三の丸地区へと移動してきたことによって、屋敷地替えと屋敷地境界の変更とが展開したであろうと想定する区分と必ずしも整合性を持つものではない。むしろこの区分は、17世紀当初に三木、杉山、小笠原、平岩の４氏が屋敷地を構えた当該地区が、竹腰入居の時点で３屋敷地に区割り変更された後、幕末まで安定的に竹腰、山澄、熊谷の３氏の拝領地となっていくのが18世紀の中ごろであったことによるものである。

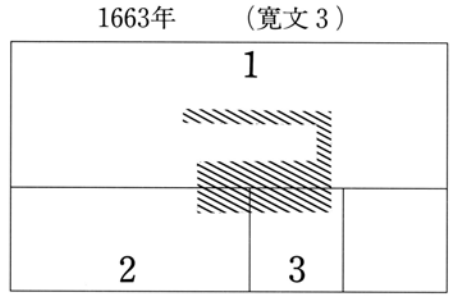
「御城絵図」「尾府名古屋図」「名古屋図」などの絵図に描かれている屋敷地境界線が具体的な遺構として検出されたことは、江戸期の遺跡を調査する上で、絵図や文献資料を援用あるいは検証していく必要性があることをよく表している。竹腰家の南境界線に当たるＳＤ202、山澄家と熊谷家との境界線に当たるＳＤ103は三の丸創建時から幕末まで江戸期を通じて変更がなく、しかも、その築造方法が当初の簡単な木柵から板塀や素掘り側溝形態を経て土塀へと変化していく様相がつかめたのも今時調査の成果の一つに挙げてよいかと思われる。

屋敷地内からは27リットル入りコンテナ換算で1000箱を越える大量の土器・陶磁器類、瓦片などが出土し、特に廃棄物処理用に設けられた大型土坑であるＳＫ101、212、333などからはおびただしい量の日常生活用品が出土した。日常的に生じるゴミ処分をまずは自分の屋敷地内で行っていかなければならなかった近世都市民の生活の一段面がよく表れていると言えよう。

これらの出土遺物の中には、竹腰家の家紋である梅鉢文をあしらった軒丸瓦、屋敷地２から出土した三ツ追茗荷文を描いた漆椀、18世紀初頭に屋敷地２に住んだことがある津田家と関わりがあるとみられる木瓜文の銀蒔絵などが含まれており、先の屋敷地境界の問題以上に居住者の生活実体を如実に示す資料となっている。これらに、口縁部統計法により算出した各遺構出土の土器・陶磁器を産地、編年別に絡めていくならば、それぞれの屋敷地内に居住していたどの人物がどの生活用品を使用していたかについて、おおよその推定が可能となってくるはずである。しかし、今回は時間の都合上そこまでの分析に至らなかった。

名古屋城跡の三の丸地区内の発掘調査は、今回で４回目を数えた。名古屋市教育委員会が調査を実施した３箇所を合わせると都合７地点となる。本センターでは、資料分析の点で、出土土器・陶磁器の口縁部統計法を共有化し、同類の他遺跡との比較に耐えうる基礎データを蓄積しつつあるが、この方法は名古屋市教育委員会調査においても応用されてこそ十全の意味を持って来ると言える。このこと一つ取り上げても、共通の認識に立つ調査体制が必要であると考える。とりわけ、謎めいた戦国時代の遺構理解に当たっては、その思いを強く感じる。（加藤）





屋敷地	I	II	III	IV
1600				
	三木　左京	杉山治郎太夫	小笠原治郎右衛門	平岩　主水 高木　図書 矢島　左京
25	小野沢吉清			（間島　重正）
	吉記	政武		
50	山下　氏昭	山澄新兵衛 小瀬　忠次	（半弥）	正重
	竹　腰　正　晴		（鈴木　外記）	
75		友　正	（伊達　半平） （山澄　英重）	正輝
			英貞	
1700				
	正　映 正　武		津田　高寛	（熊谷　宗実） 佐藤弥平治
25			寛当 （山澄　英貞）	（横井十郎右衛門）
			龍豊	（河村百之進） 松三郎
50	勝　紀			
			龍明	熊谷七郎左衛門
75	睦　群			
1800				
	正　定		豊尚	
25				（七四郎）
	（正　富）		龍騰	
50				
	（正　旧）		豊功 豊刊	（七郎）
75				
屋敷地	1		2	3

調査区内の屋敷地に居住した人々

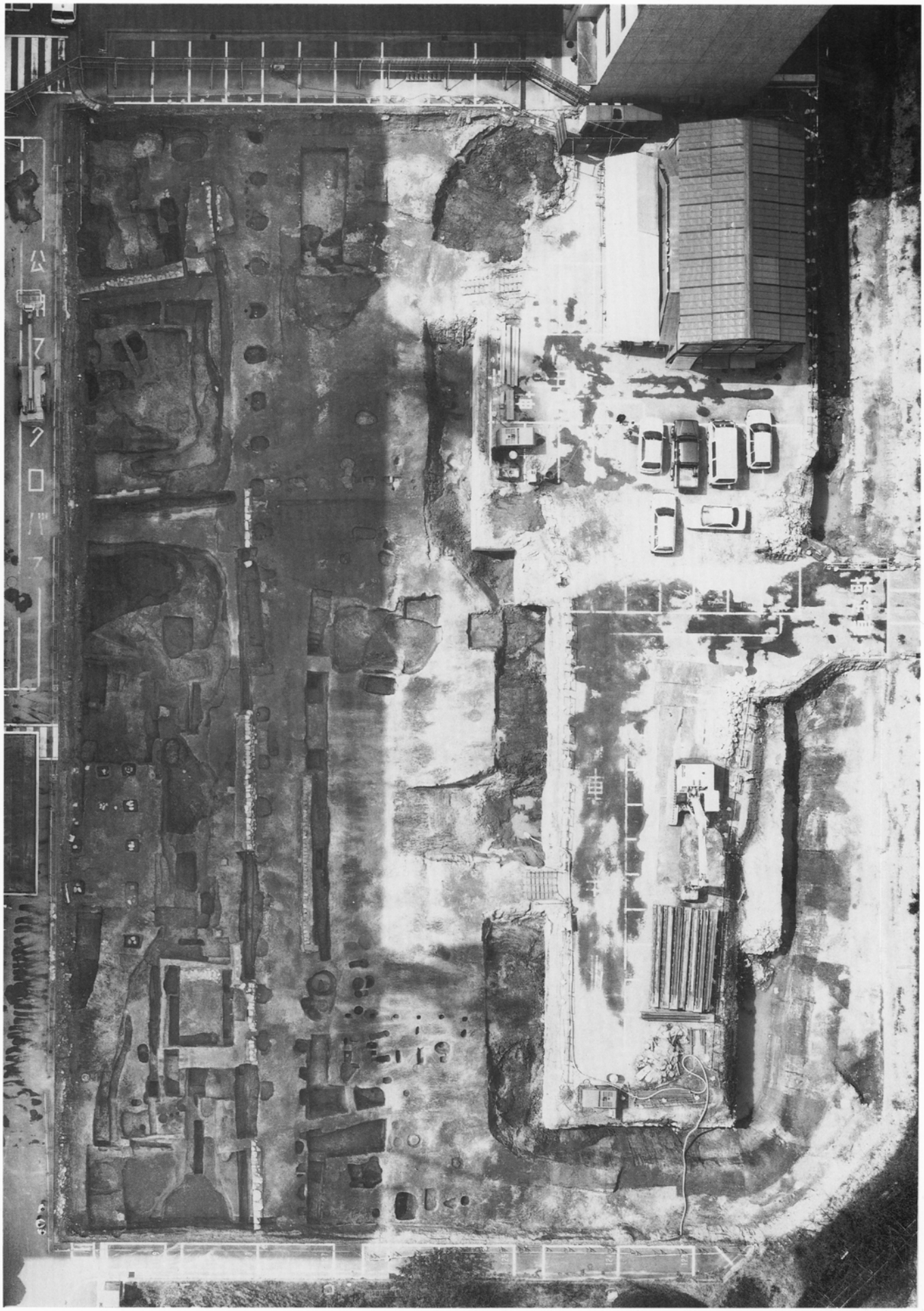
() は年代不詳

『金城温古録』『士林泝洄』による。

図　　版

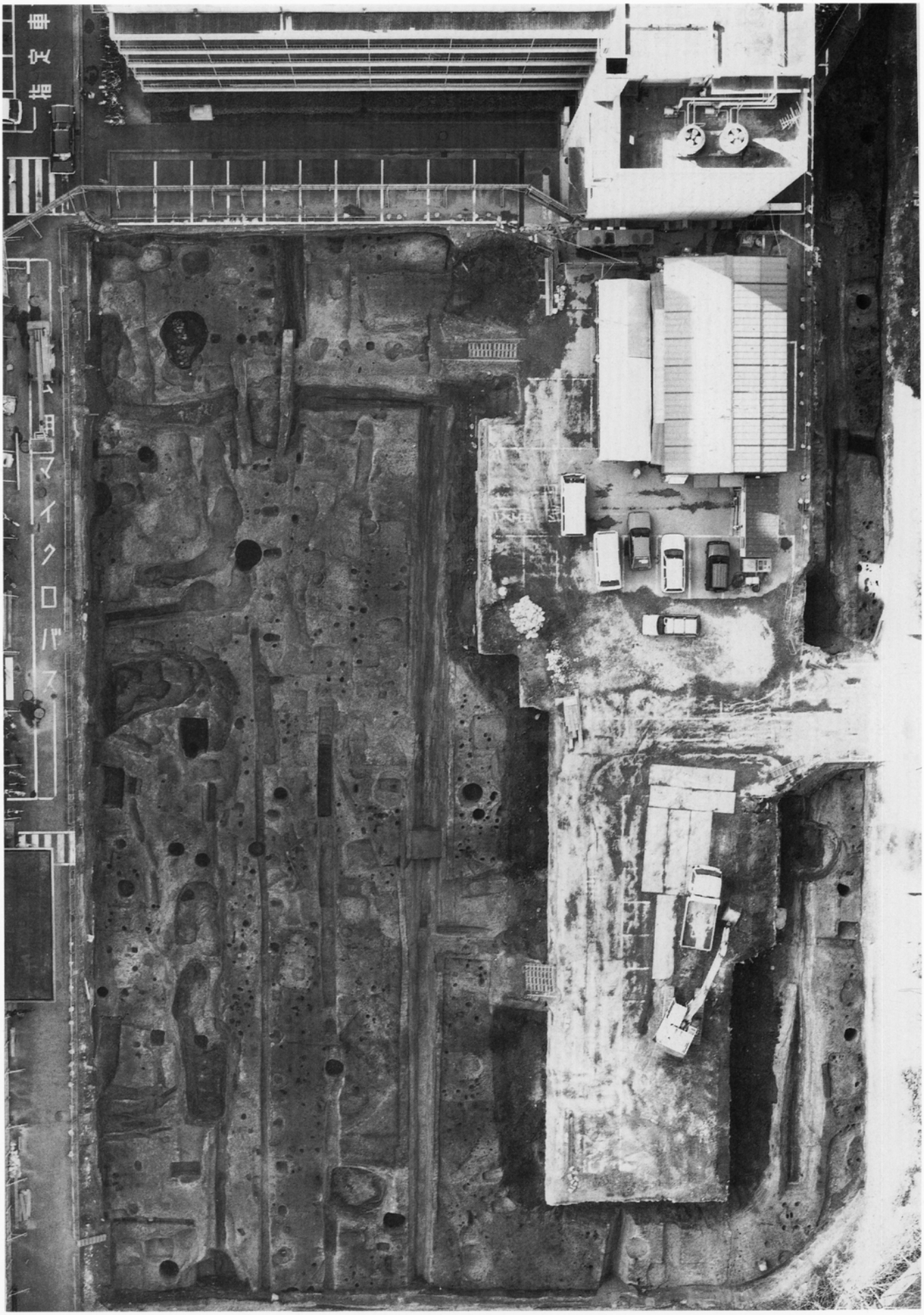
（注）

遺物図版の個別番号は、例言に記載した登録番号表示をとった。また、実測図未掲載の遺物は、各遺物の登録番号の続き番号で表示している。



上面遺構（近世）全景（右が北）

図版二



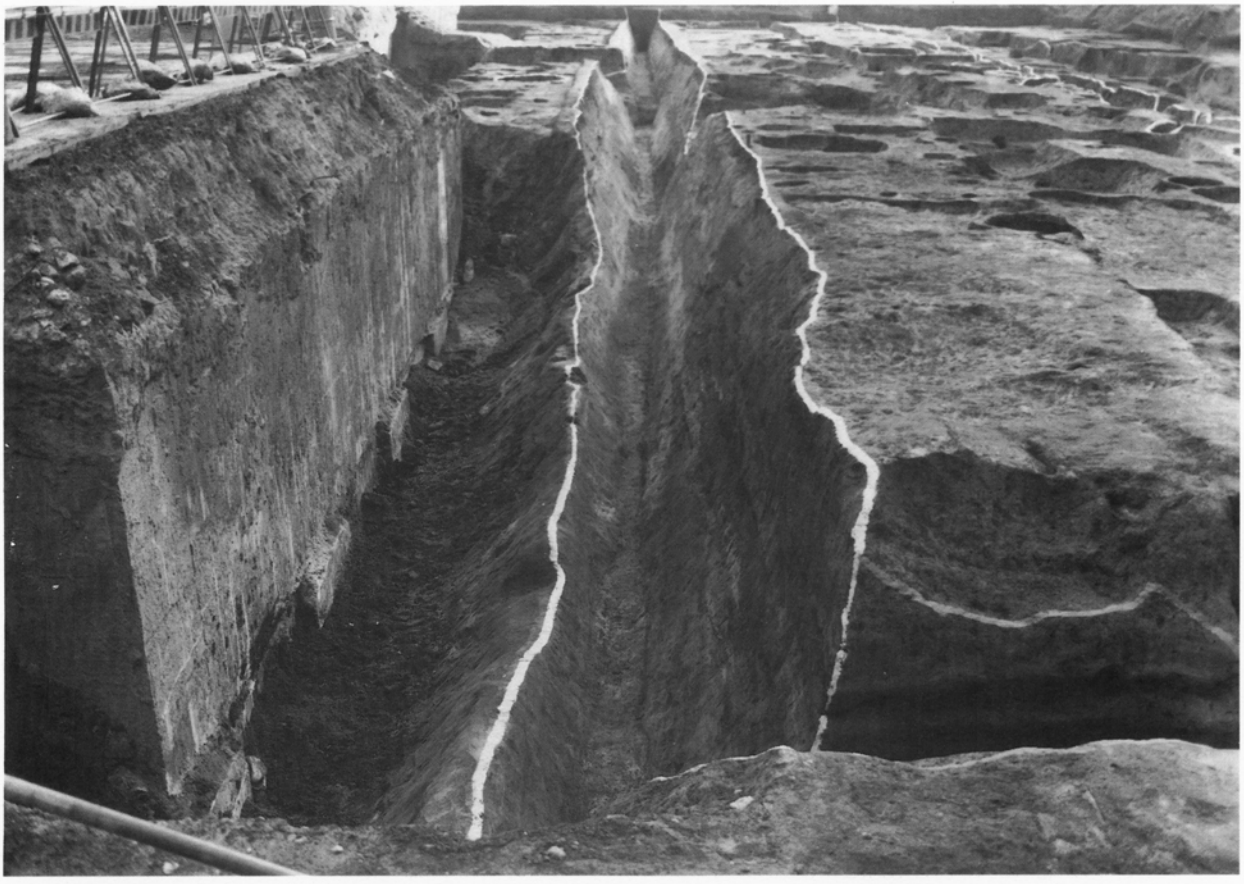
調査区完掘状態（右が北）

ＳＢ301完掘状態（東から）

ＳＢ301遺物出土状態（西から）

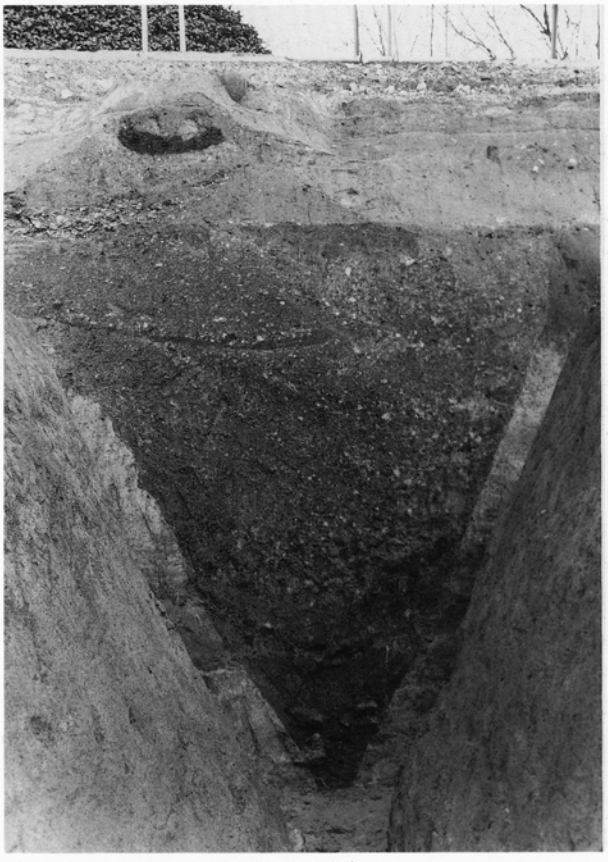
図版四

ＳＤ401全景（西から）



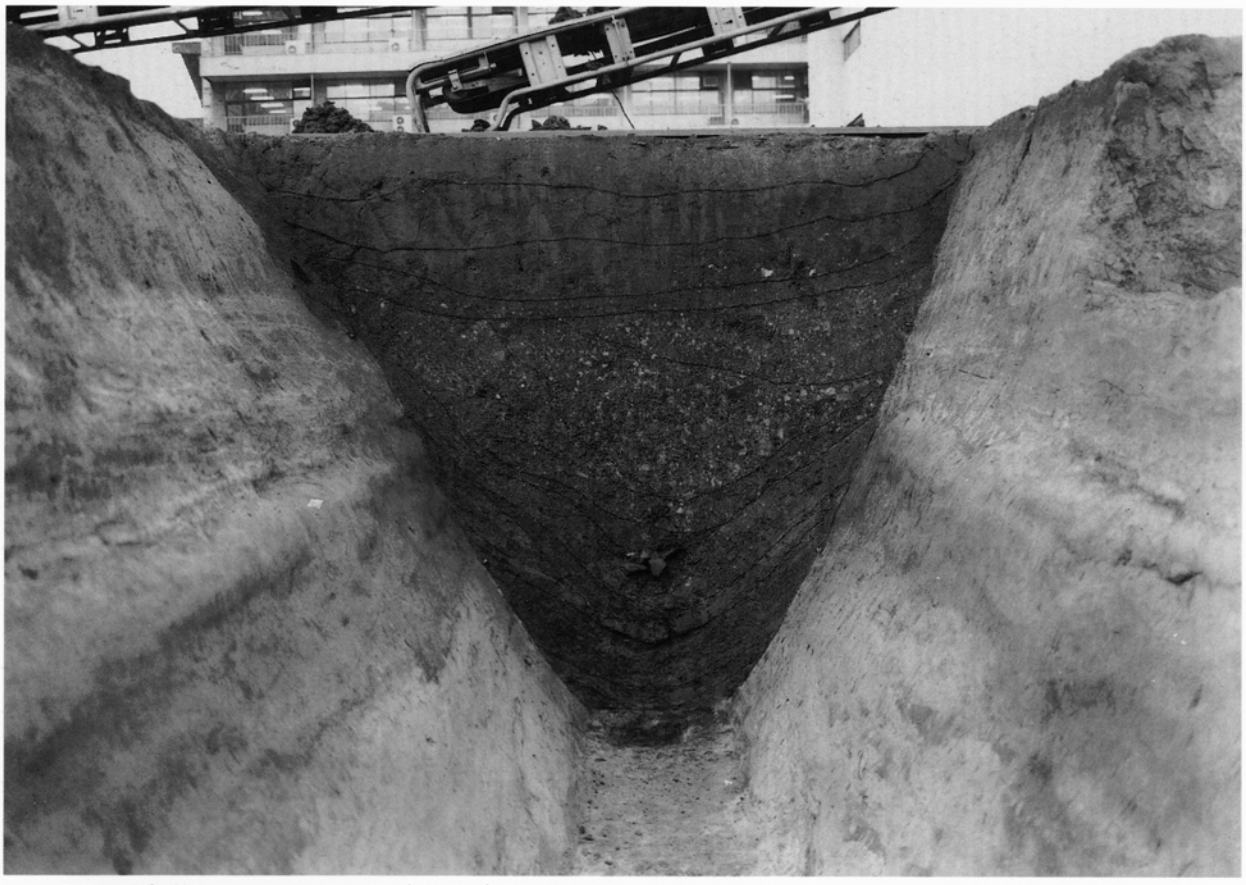
ＳＤ001全景（西から）

ＳＤ006全景（北から）



ＳＤ 407 断面（調査区東壁）

ＳＤ 009 断面（調査区西壁）



ＳＤ001中央セクションベルト（東から）

ＳＤ001分岐地点遠景（西から）

ＳＤ001分岐地点近景

ＳＤ 001 断面（調査区東壁）

図版八

ＳＡ101・102・103完掘状態（南から）

ＳＡ 301・302 完掘状態（南から）

ＳＫ229・228・304完掘状態（西から）

ＳＫ229・228・304完掘状態（東から）

ＳＢ001縁石検出状況（南から）

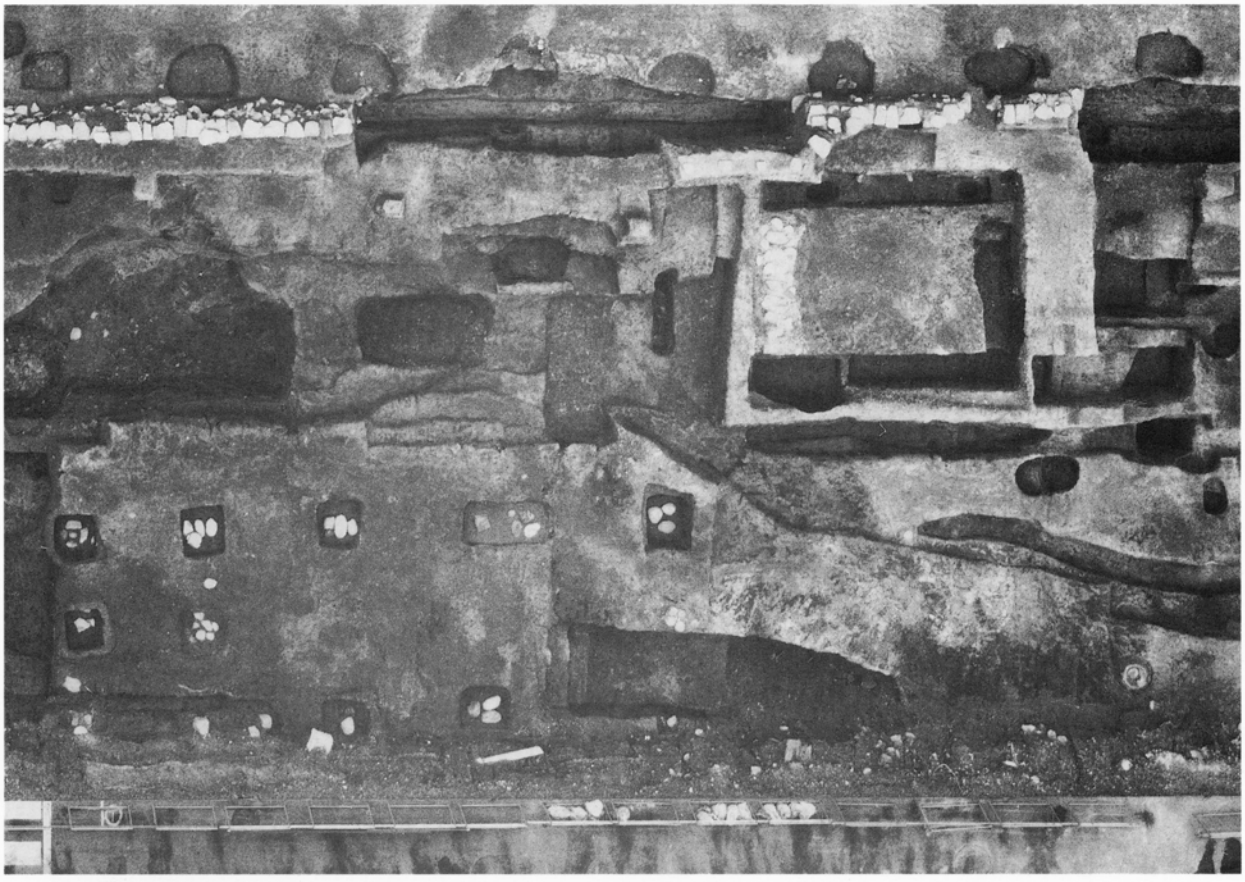
ＳＢ 001 縁石検出状況（東から）

ＳＢ001柱穴列検出状況（南から）

ＳＢ001柱穴列断ち割り状況（南から）

ＳＸ001検出状況（上が西）

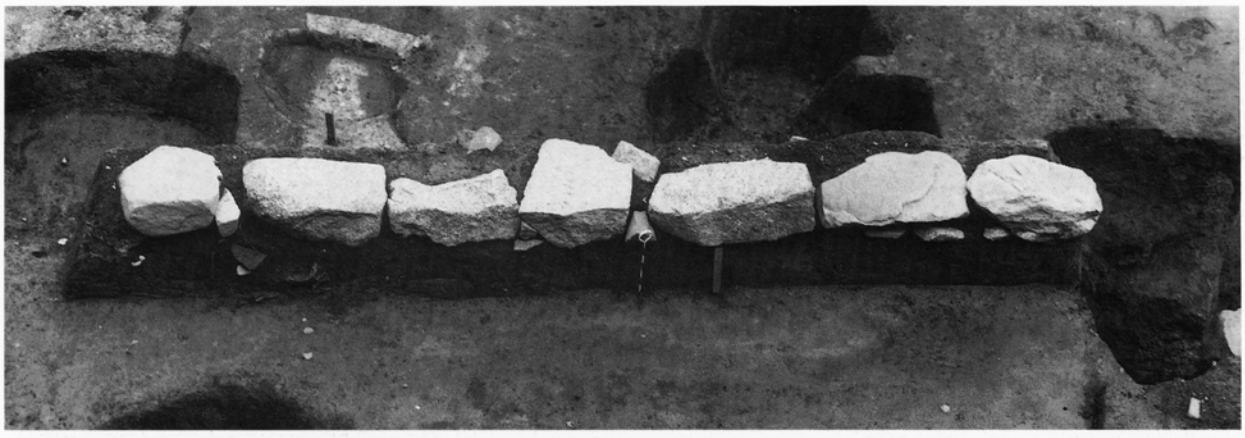
ＳＸ 001 検出状況（西から）



S B301・302完掘状態（上が北）

S B 301 近景

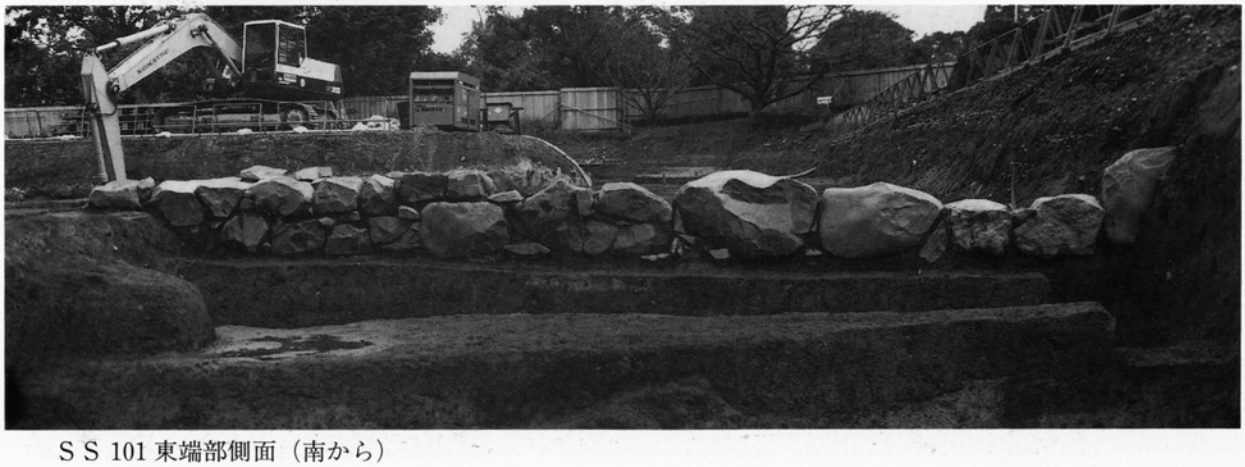
図版十四



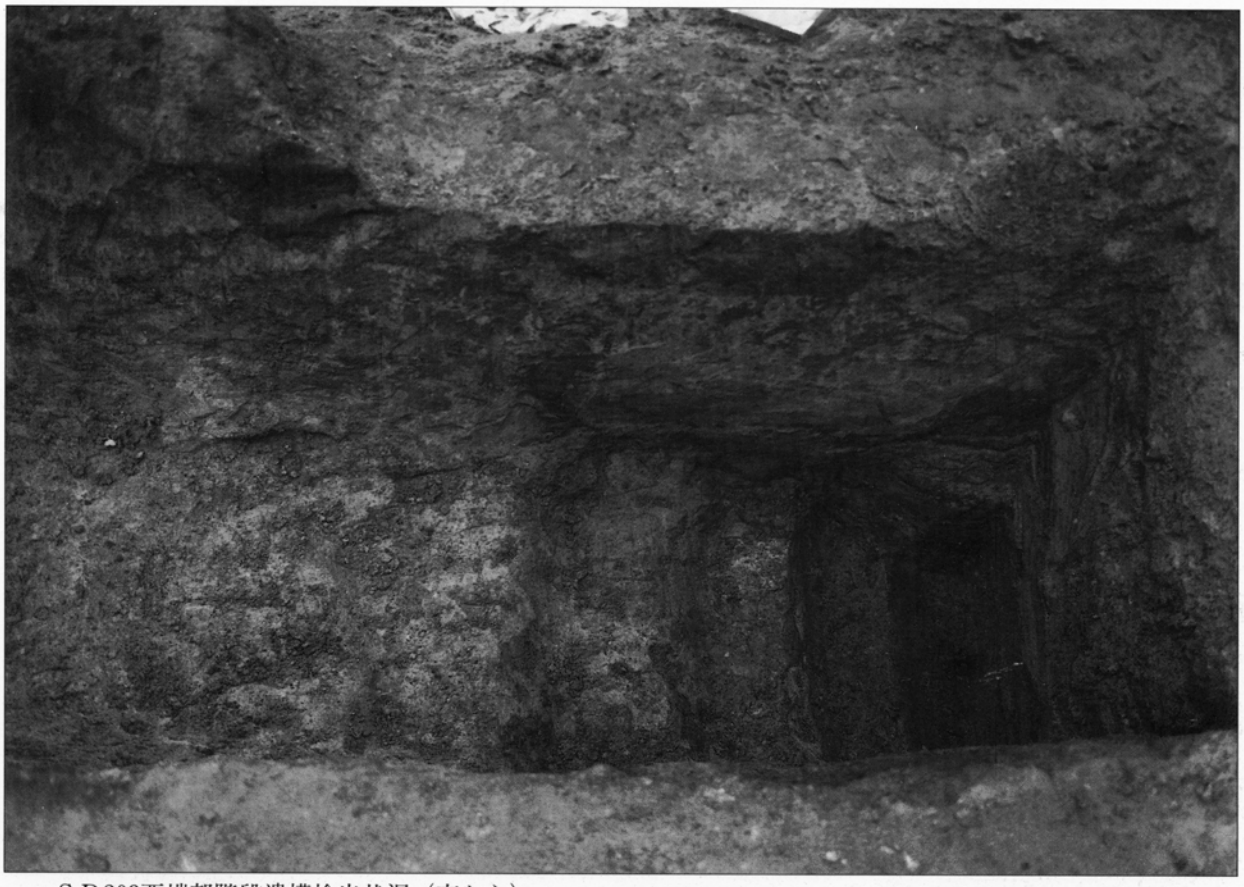
ＳＳ101西端部検出状況（南から）

ＳＳ101中央部検出状況（南から）

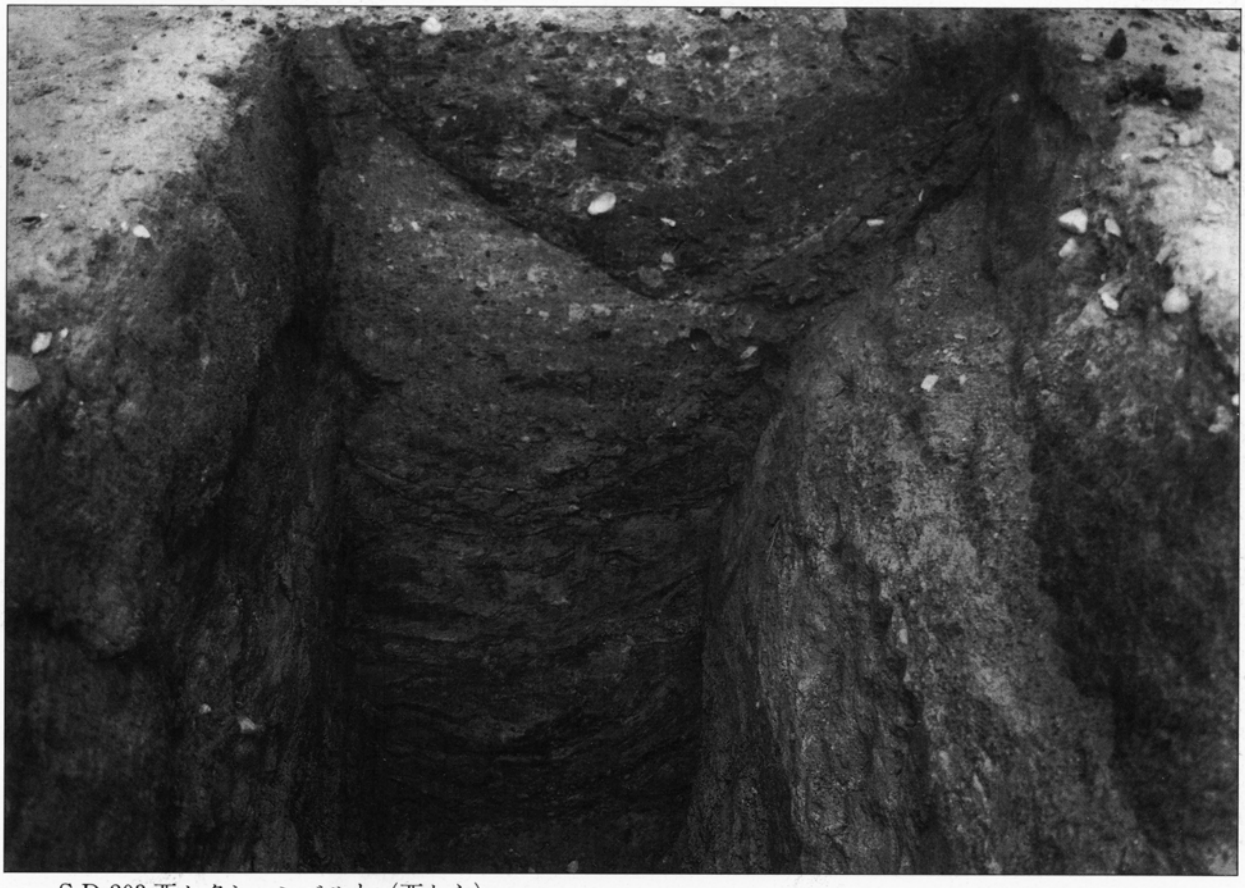
ＳＳ101東端部検出状況（南から）



ＳＳ 101 東端部側面（南から）

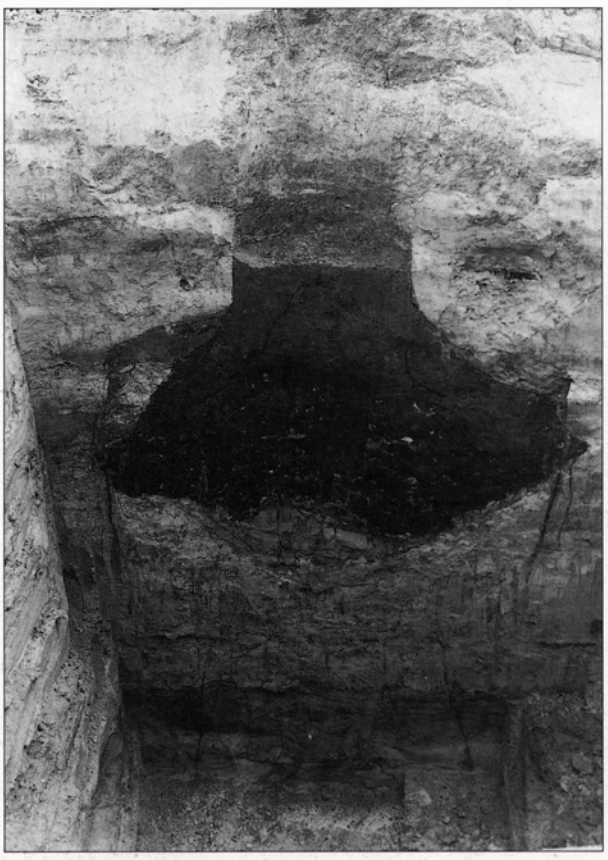


ＳＤ203西端部階段遺構検出状況（南から）



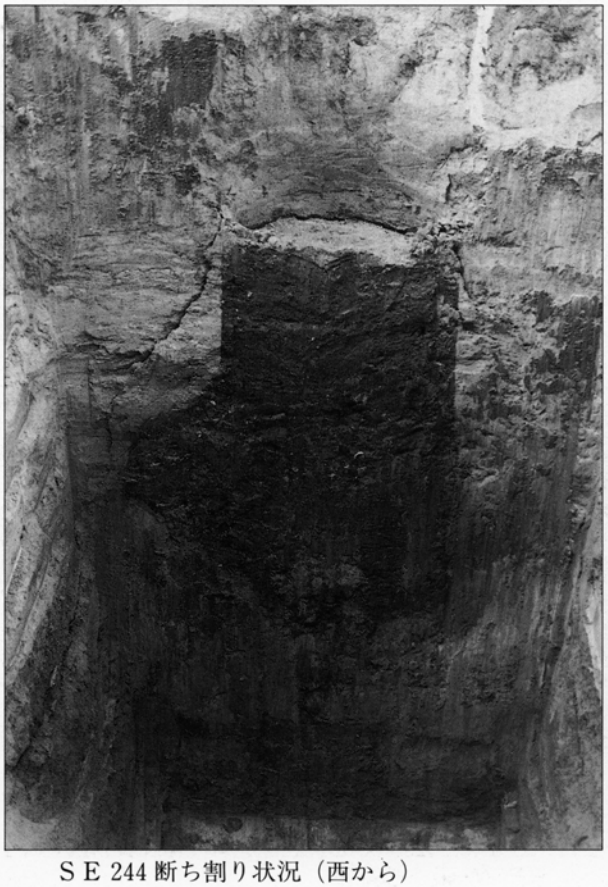
ＳＤ203西セクションベルト（西から）

図版十六

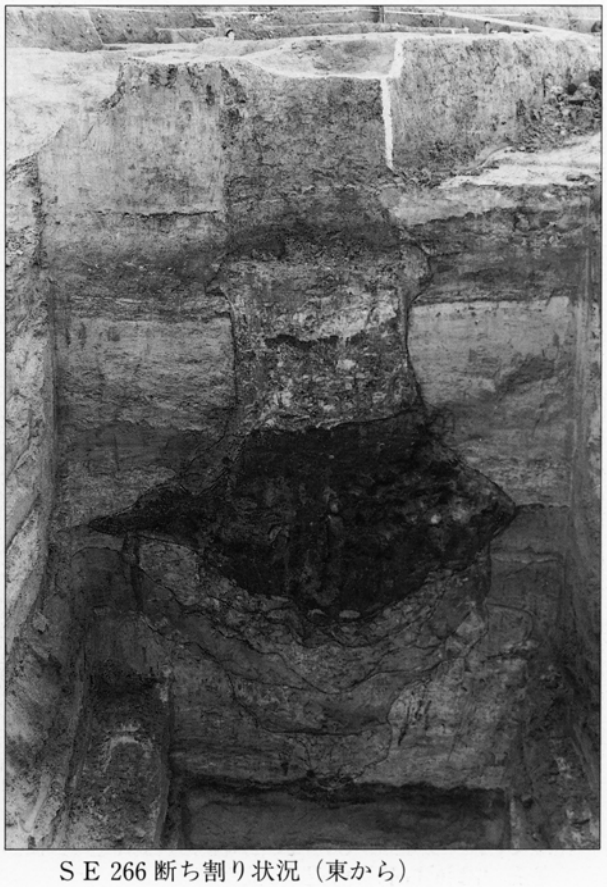


ＳＥ114断ち割り状況（北から）

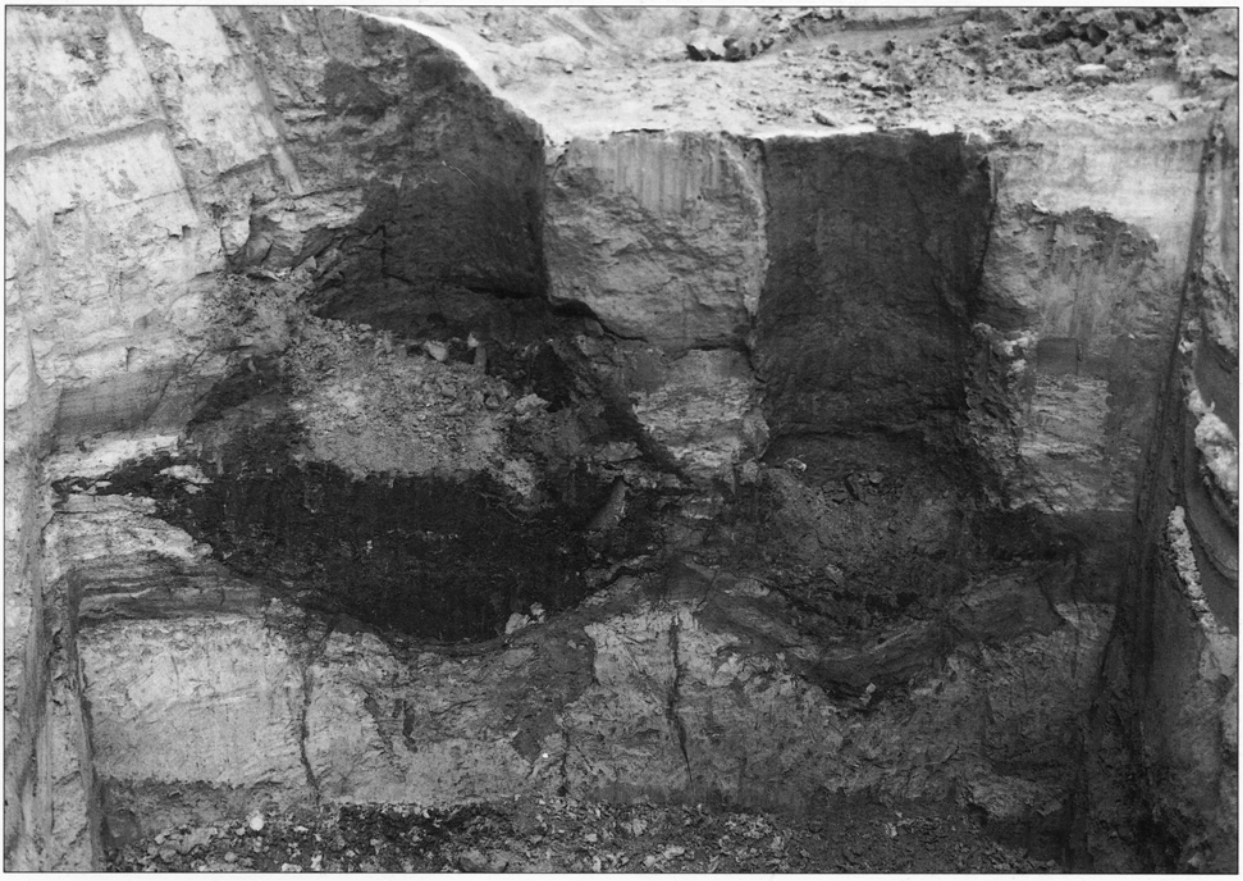
ＳＥ145断ち割り状況（西から）



ＳＥ 244 断ち割り状況（西から）



ＳＥ 266 断ち割り状況（東から）



ＳＥ223、227断ち割り状況（東から）

ＳＥ278断ち割り状況（西から）

ＳＥ278最下部近景

図版十八　近世遺物　供膳具（椀）

1490

1564

1565

1568

1570

1571

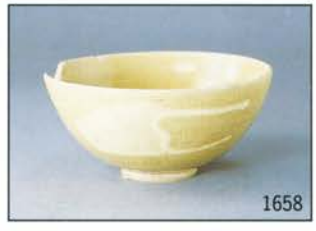
1573

1574

1632

1653

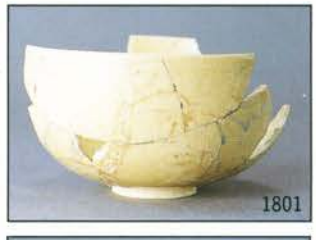
1634


1658

1695

1697

1736


1801

1803

1804

1806

1807

1827

1877

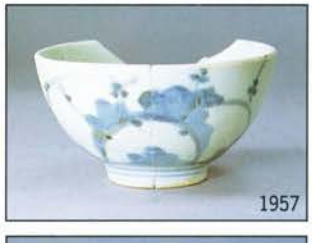
1878

1880

1907

1954

1955


1957

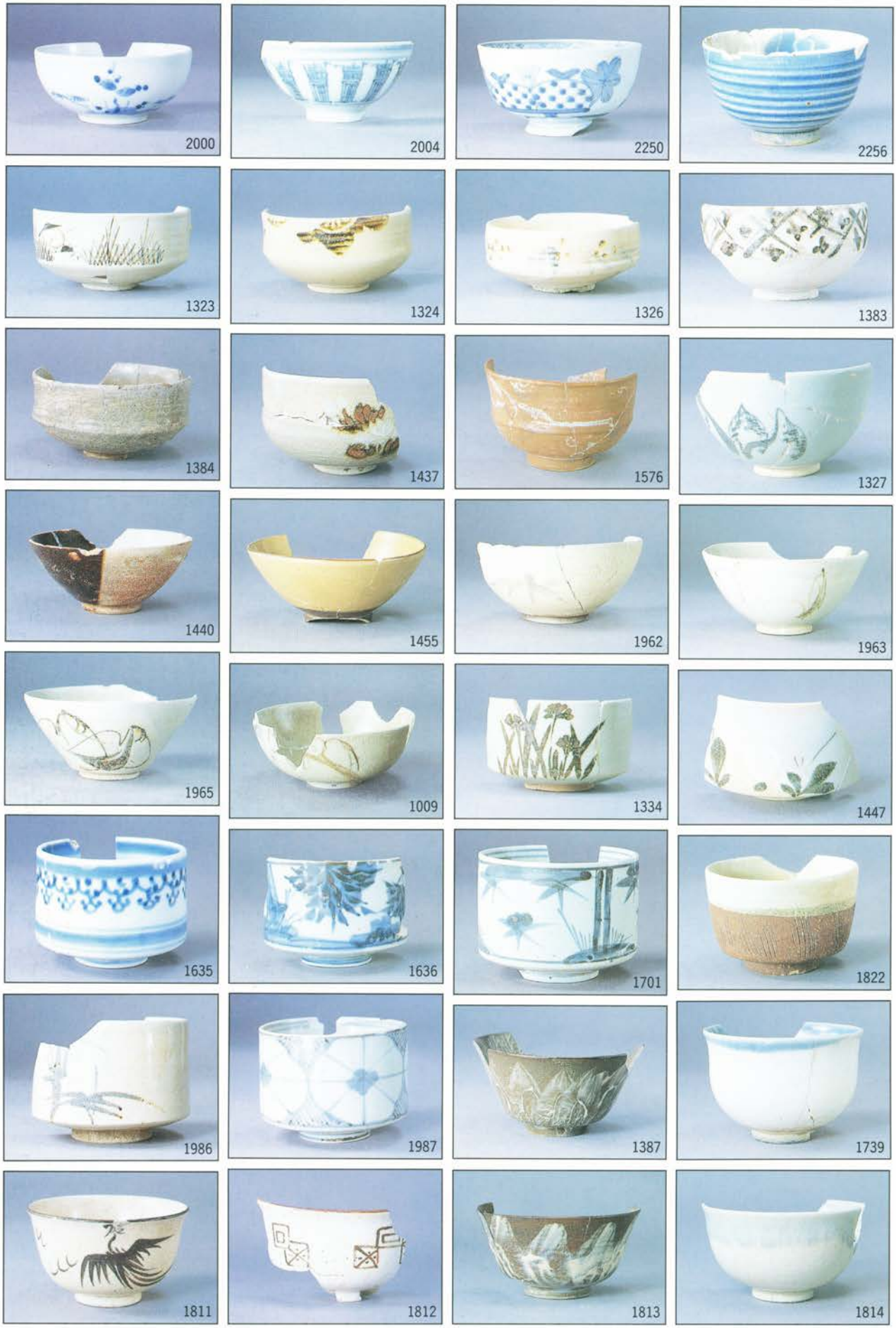
1974

1984

1985

1436

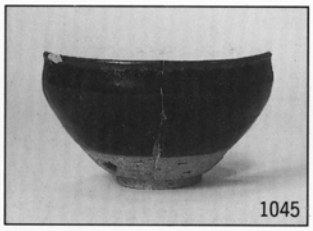
図版二十　近世遺物　供膳具（椀）

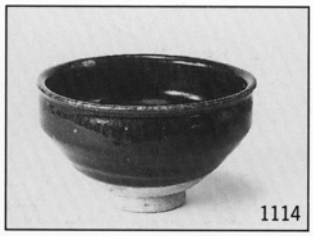


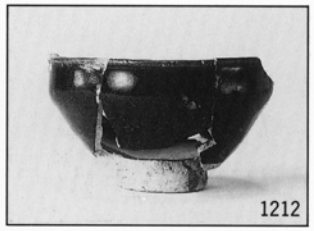
図版二十一　近世遺物　供膳具（椀）

図版二十二　近世遺物　供膳具（椀）

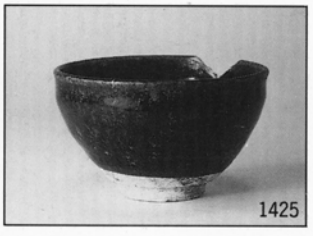
1019

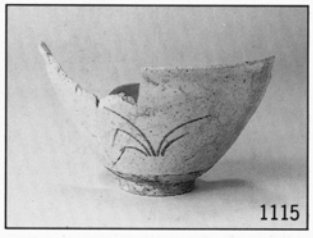

1045

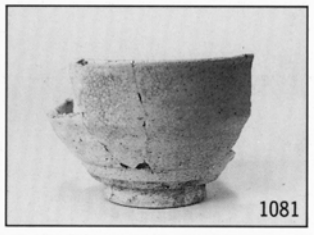

1114

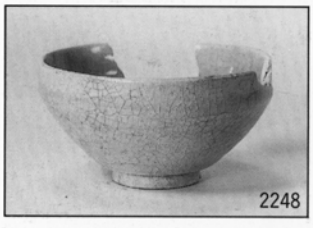

1212

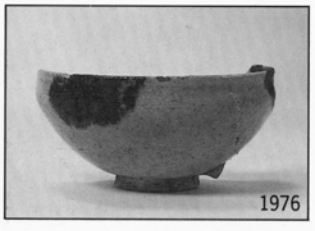
1242

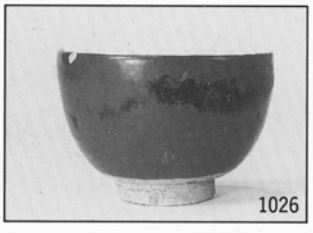

1425

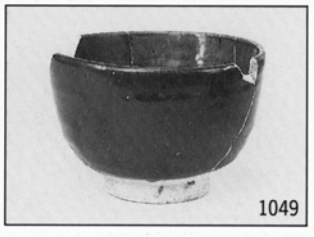

1115

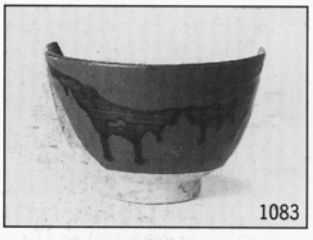

1081


2248

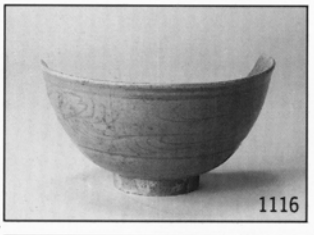

1976

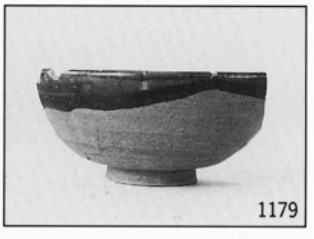

1026

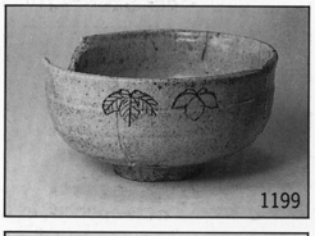

1049

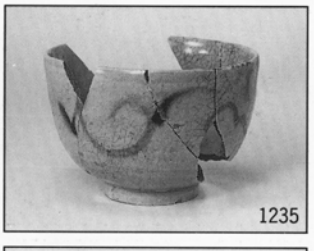

1083

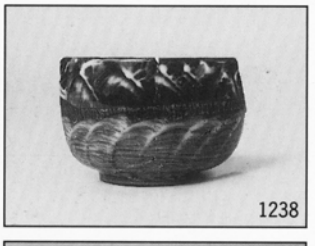
1048


1116

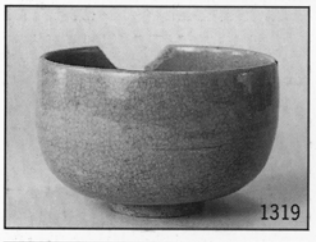

1179

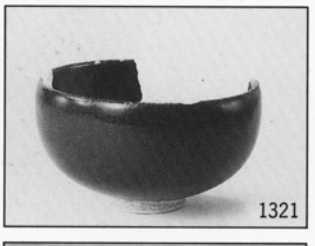

1199

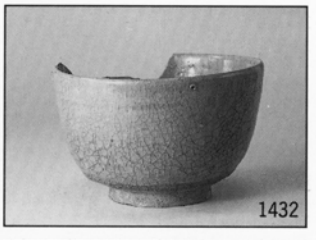

1235

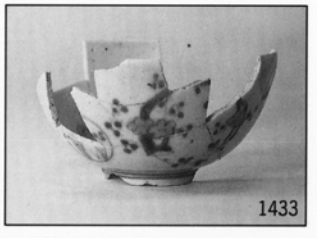

1238

1302

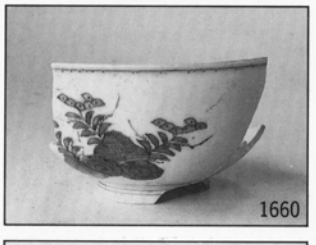

1319

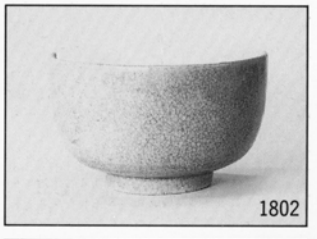

1321


1432

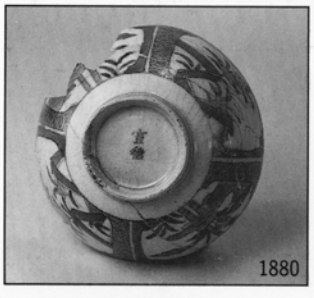

1433

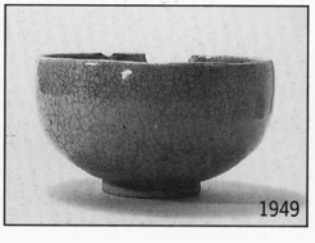
1572

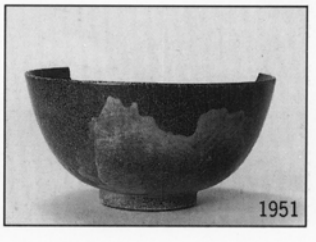

1660

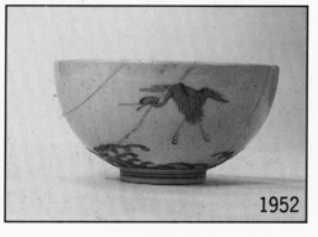

1802

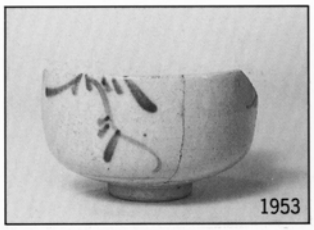
1876

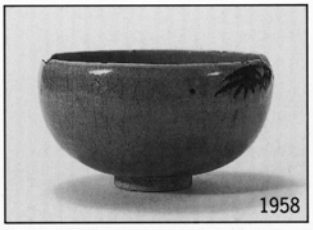

1880

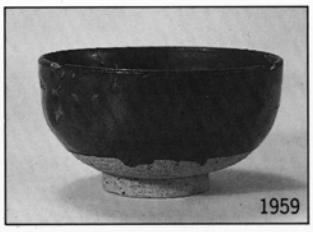

1949


1951

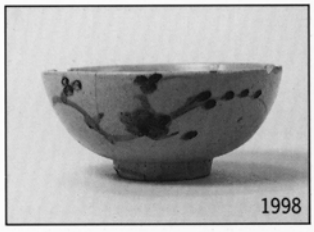

1952

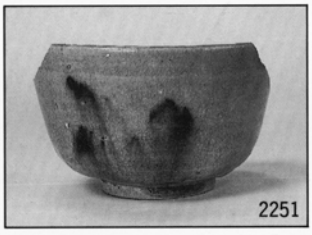

1953

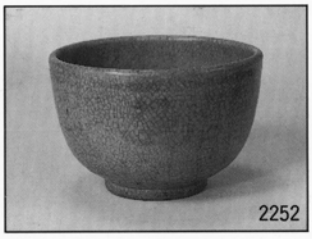

1958


1959

1961


1998

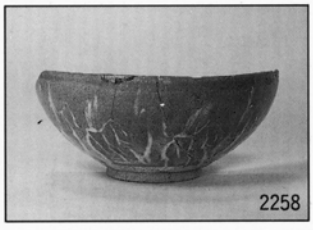

2251

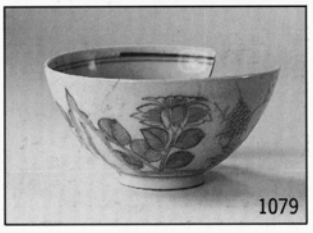

2252

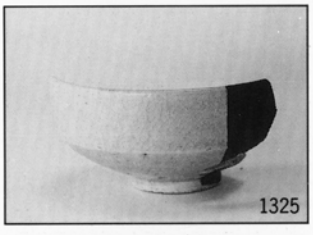
2254

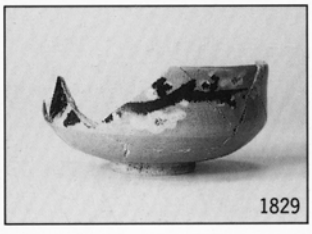
2255

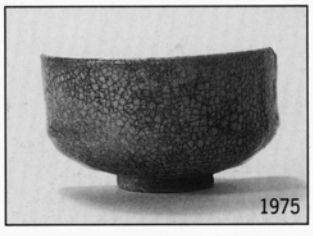
2257

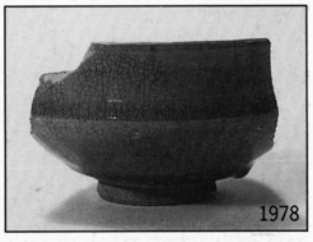

2258

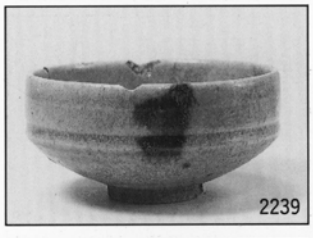

1079

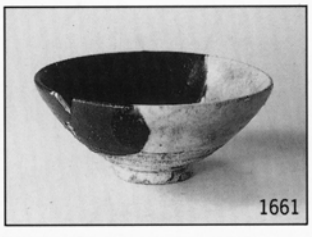

1325

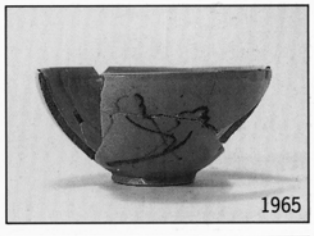

1829

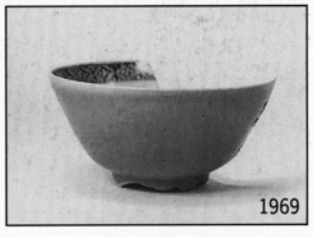

1975

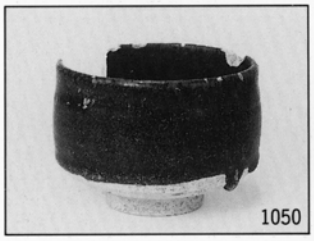

1978

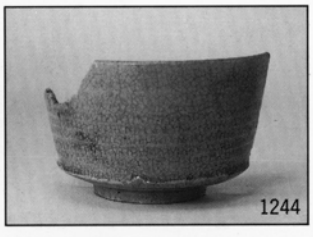

2239

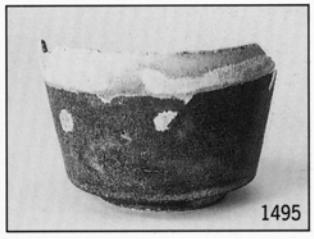

1661

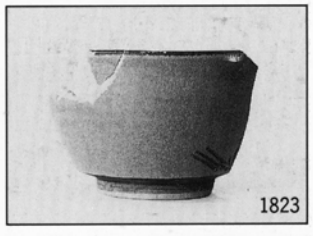

1965

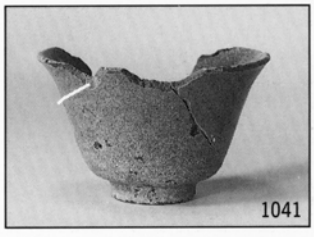

1969

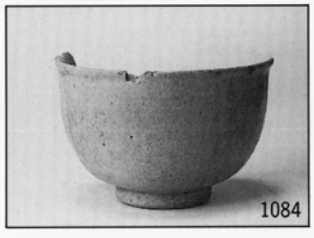

1050


1244

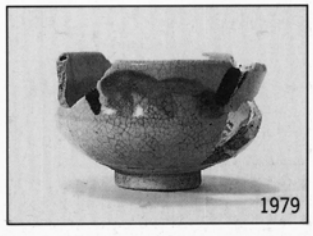

1495

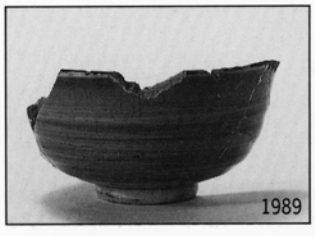

1823

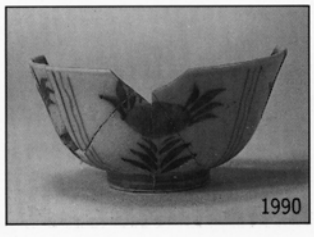

1041

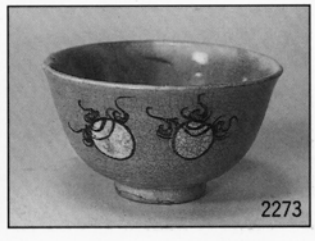

1084

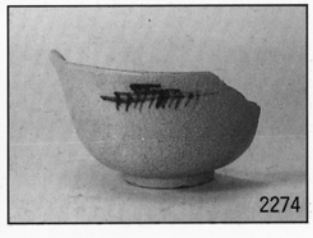
1688


1979

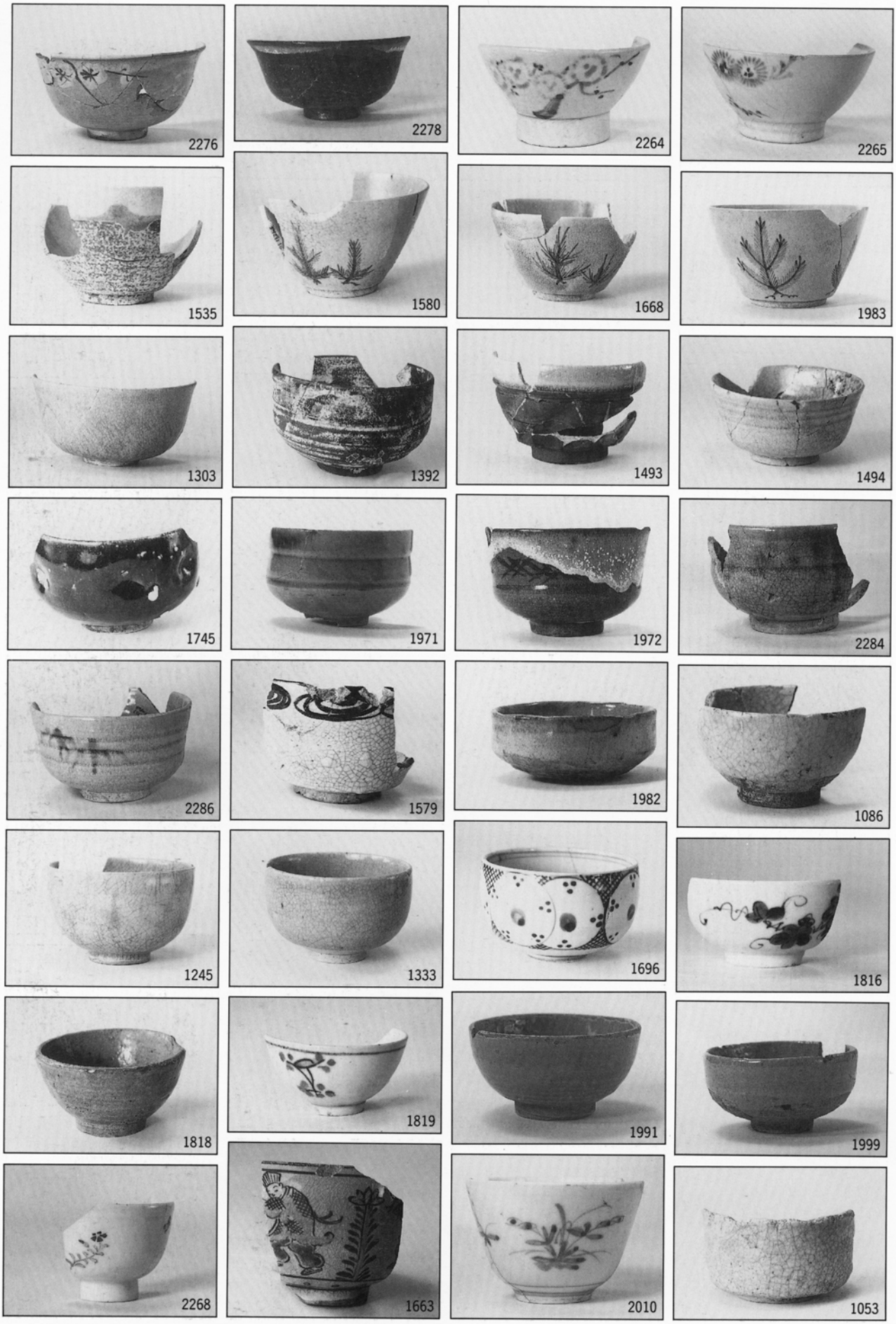

1989


1990

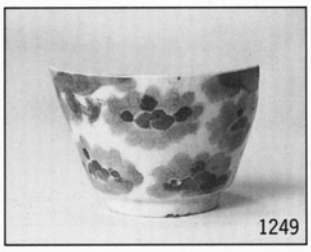

2273


2274

図版二十四　近世遺物　供膳具（椀・小椀）



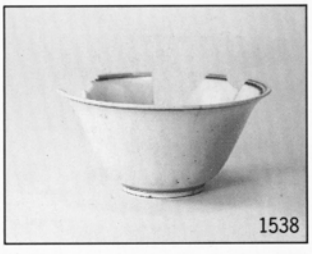
図版二十五　近世遺物　供膳具（小椀・皿）

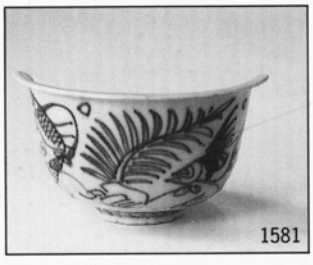

1249

1087

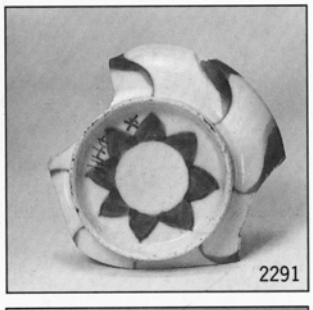
1252

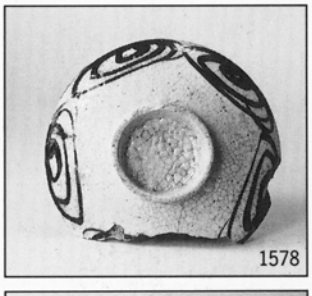
1445


1538

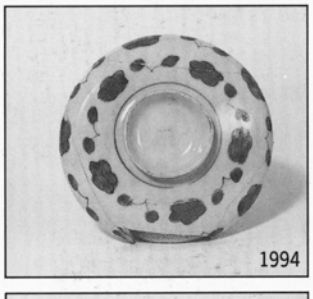

1581

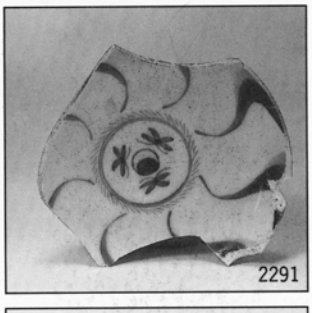
2008

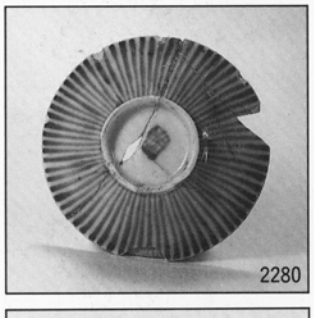

2291

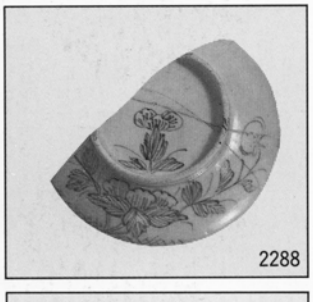

1578

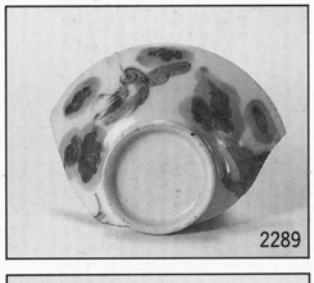
1992


1994

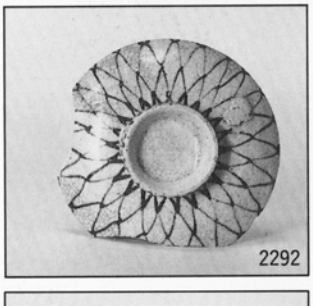

2291

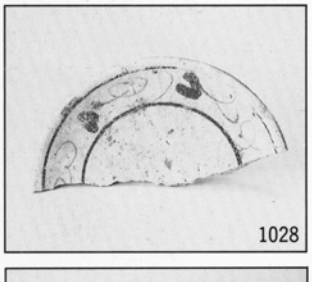

2280

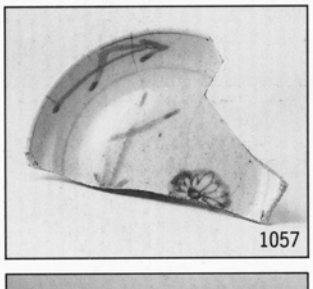

2288

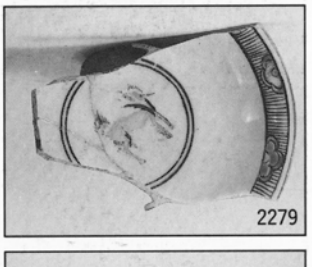

2289

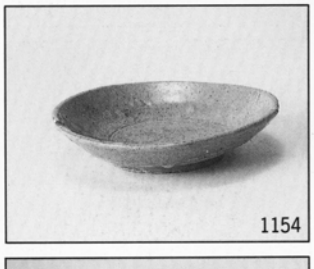
2279

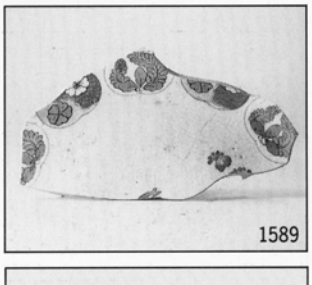

2292

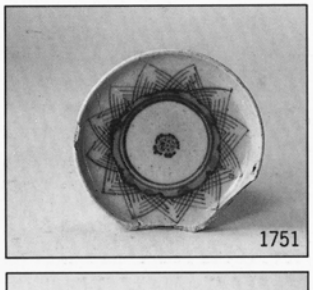

1028

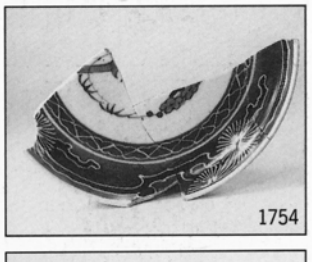

1057

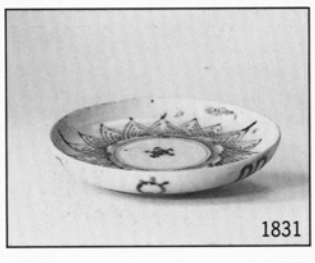

2279


1154

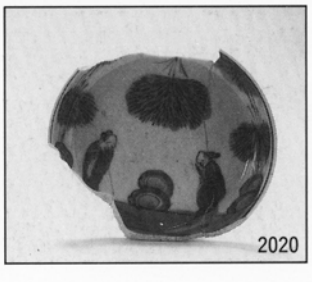

1589

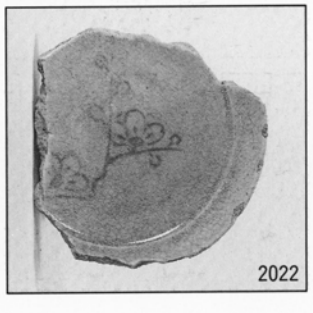

1751


1754


1831

1836


2020


2022

図版二十六　近世遺物　供膳具（小椀・皿）

1248

1200

1815

2285

1702

1058

1140

1136

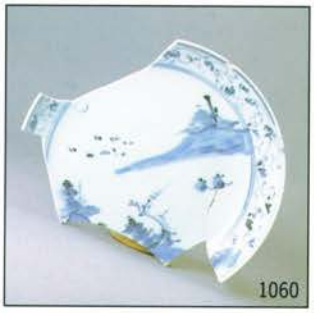
1443

1251

2016

1335

2009


1060

1182

1820

1446

2282

1498

2269

1894

1256

1980

1582

2283

1539

2496

1131

1255

1257

図版二十七　近世遺物　供膳具（皿）

1337

1338

1395

1451

1543

.585

1588

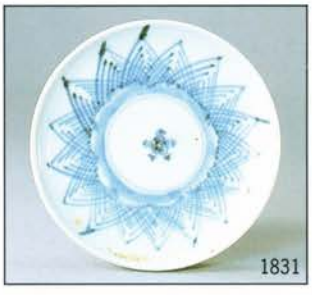
1638

1707

1749

1750

1753


1831

1831

1897

1837

1132

1896

1897

2499

2497

2498

2500

2501

2502

1305

1544

1746

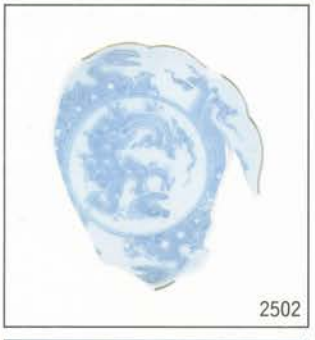
図版二十八　近世遺物　供膳具（皿・鉢）

1203

1310

1310

1310


2502

1094

1343

1341

1449

1755

1902

2503

1304

1583

1453

1450

1480

1841

1906

1708

1805

1995

1454

1900

1501

1901

2515

2515

2504

1065

1597

図版二十九　近世遺物　供膳具（鉢）・調理具

1596

1596

1267

1062

1595

1595

1035

1085

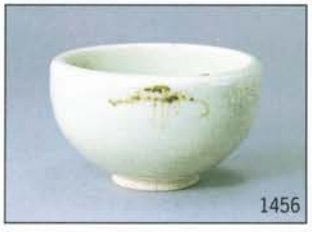
1106

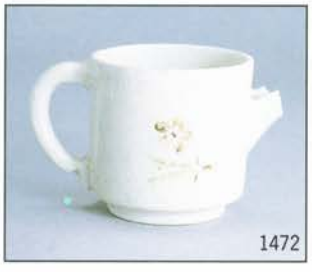
1268

1757

1757

1913


1456


1472

1085

1145

1549

1842

1067

1920

1709

1712

1104

1226

1912

2315

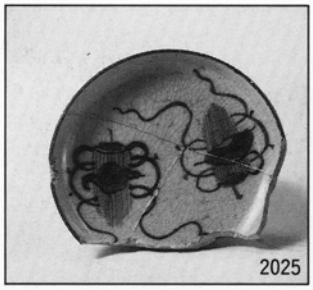
2314

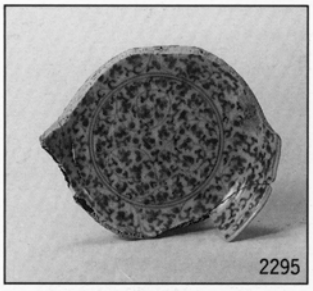
1011

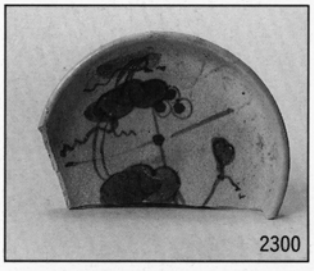
1760

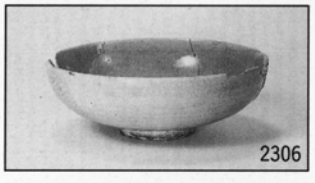
1600

図版三十　近世遺物　供膳具（皿）

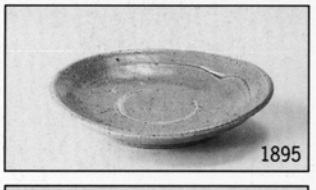

2025


2295


2300

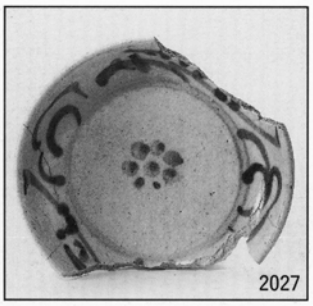

2306

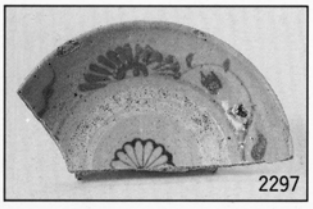
1030


1895

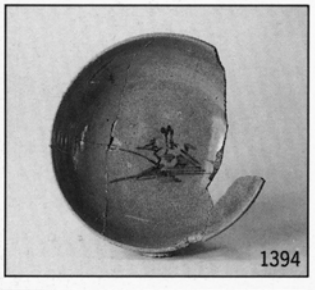
1147

2030

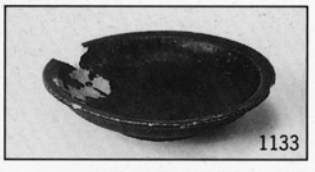

2027

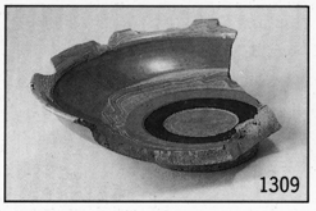

2297

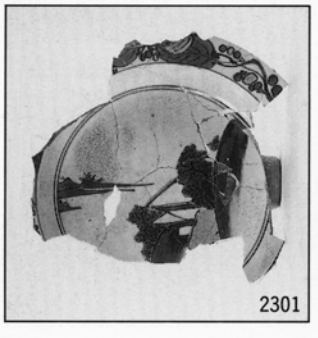
2308

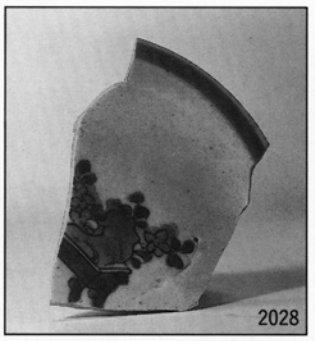

1394

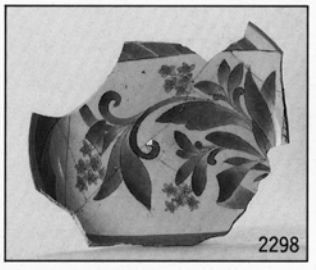
1137


1133

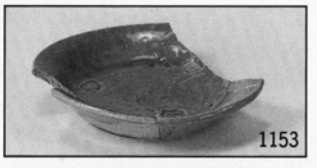

1309

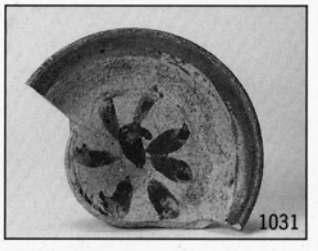

2301

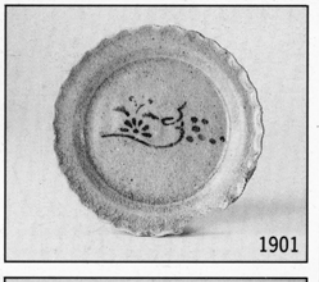

2028

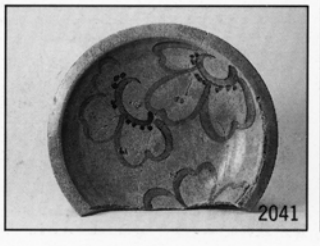

2298

2313

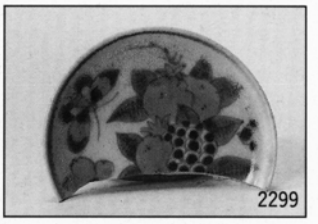

1153


1031


1901


2041

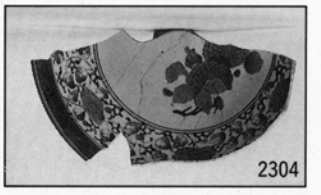
2031

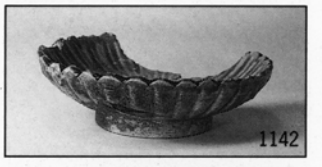

2299

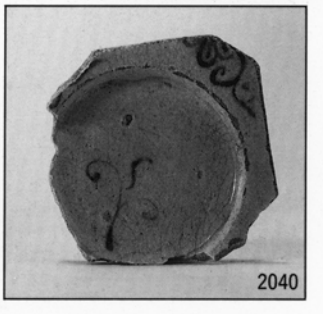
2019

1584

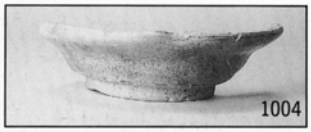
1899

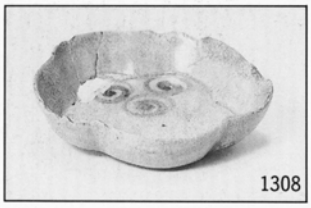

2304


1142

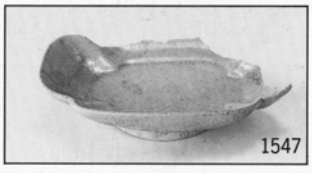

2040

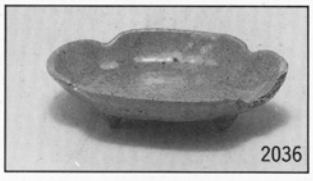
図版三十一　近世遺物　供膳具（皿・鉢）


1004

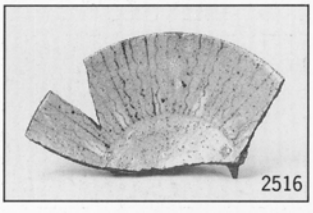

1308

1546


1547

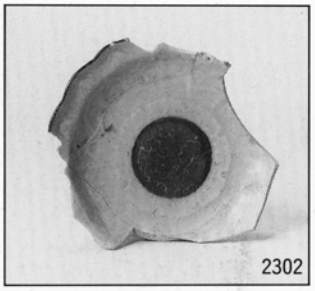

2036

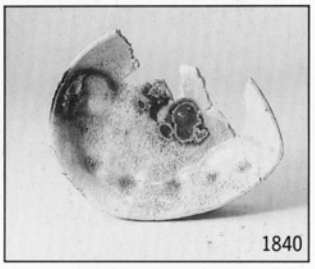
1034

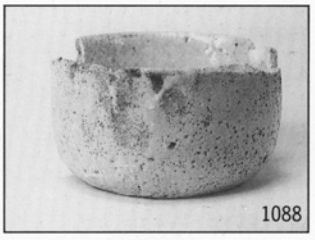

2516

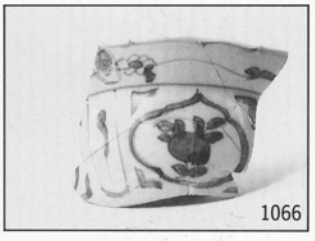
1343

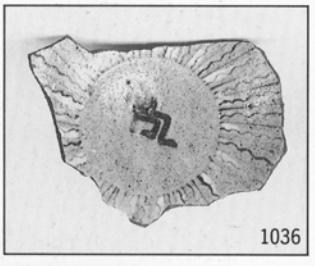
1343

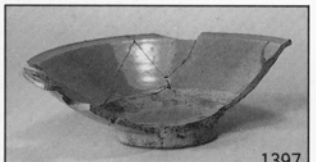

2302

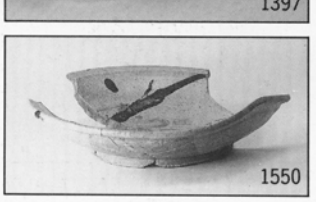

1840

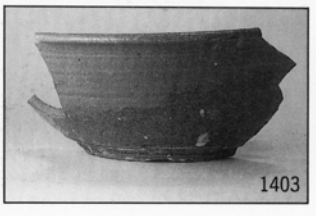

1088

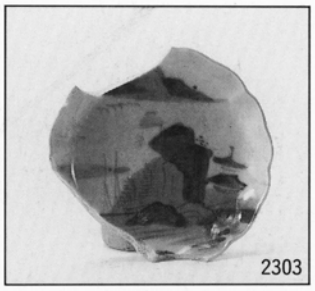

1066


1036


1397

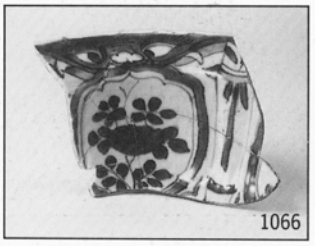

1550

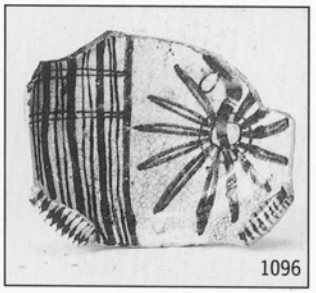

1403

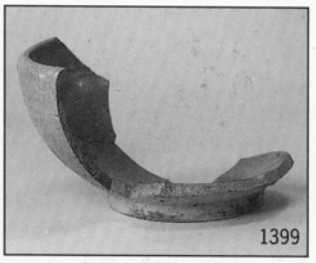

2303

2312

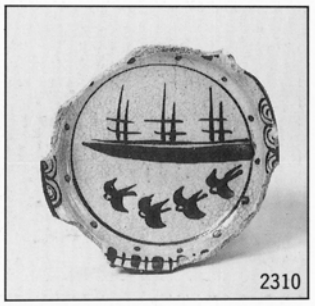
1032

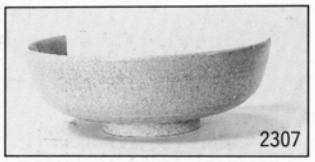

1066

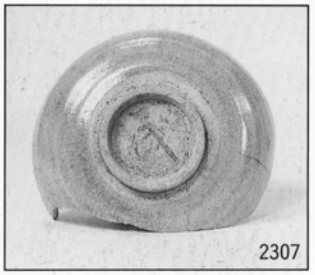

1096

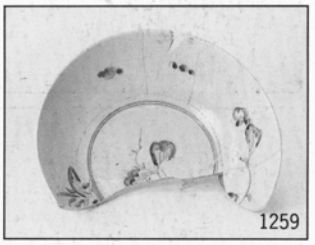

1399

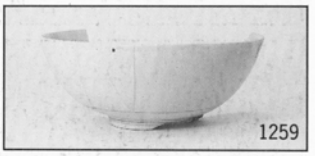
1399

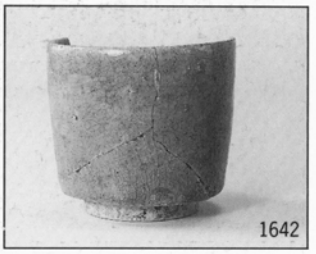

2310


2307

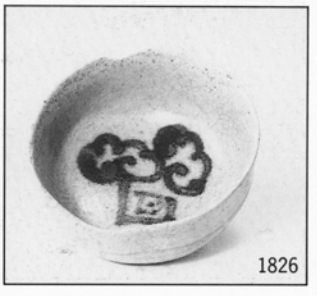

2307


1259

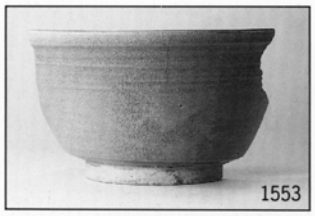

1259

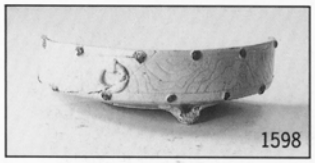

1642

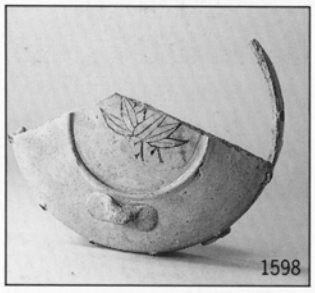
1463

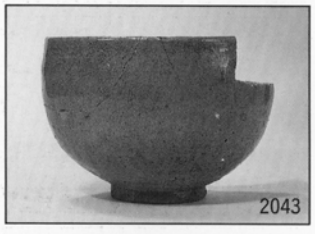

1826

図版三十二　近世遺物　供膳具（鉢）・調理具


1553


1598

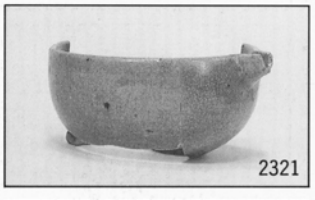

1598

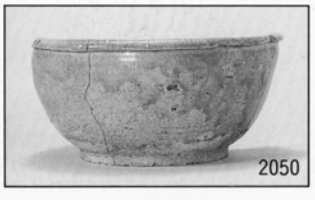

2043

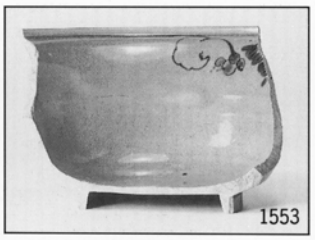
1347

1758

2332


2321


2050


1553

1705

1837

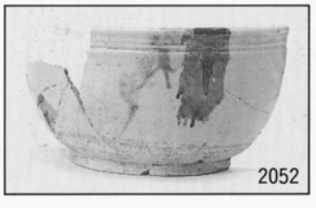
1290

1406

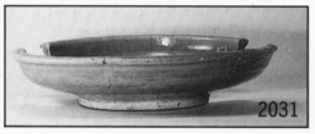
2079

2079

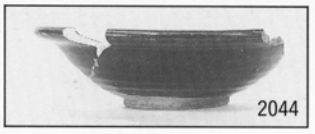
1345


2052

1551

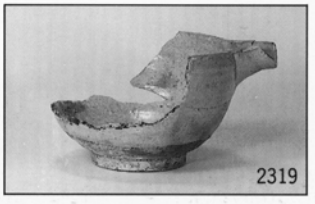

2031

2042


2044

1706

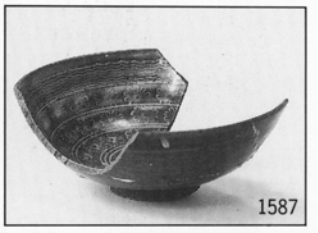
2078

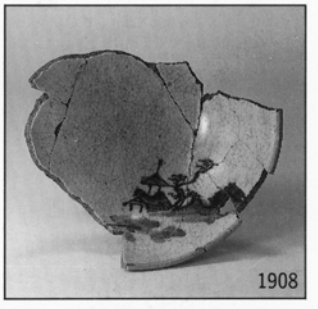

2319

1411

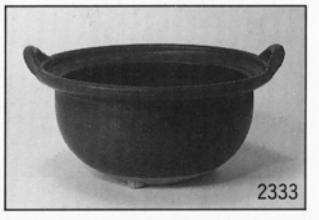
2324

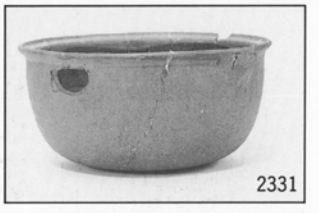
1587


1587

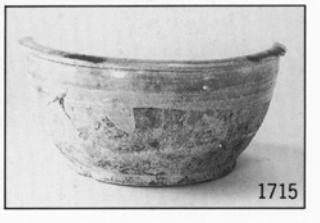

1908

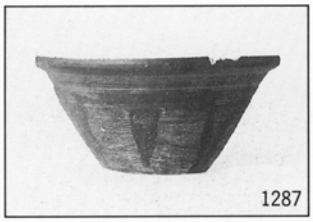
1908


2333

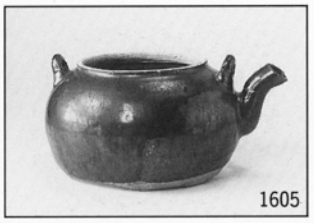

2331

2320

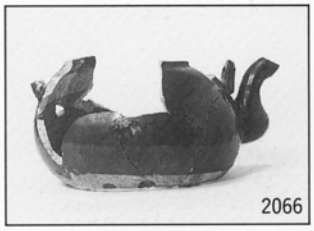

1715


1287

1422


1605

1759

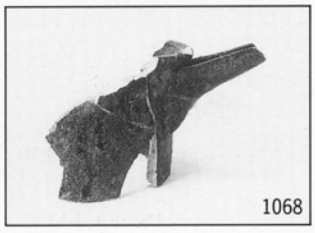

2066

2067

2342

2343

2344


1068

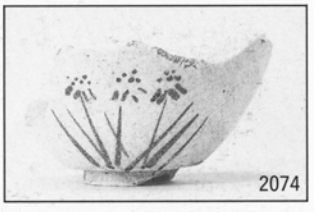
1348

1561

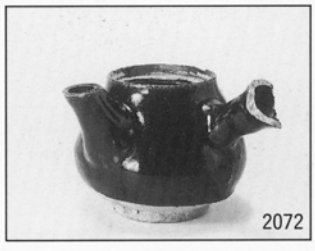
2070

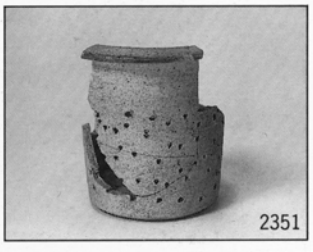
1646

2068

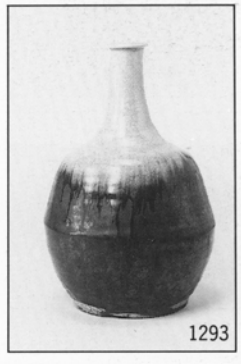

2074

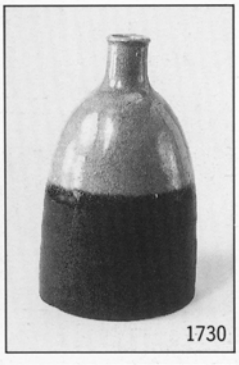
2340

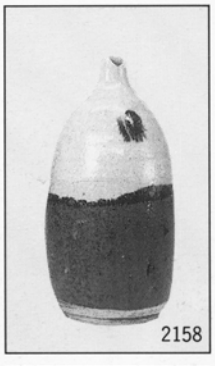

2072


2351

2074


1293

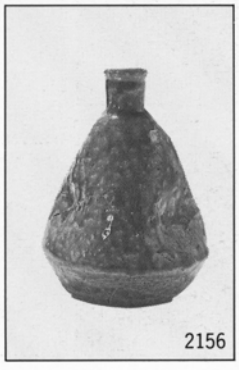

1730


2158

1923

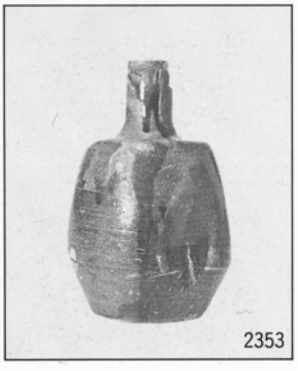
1292

2354

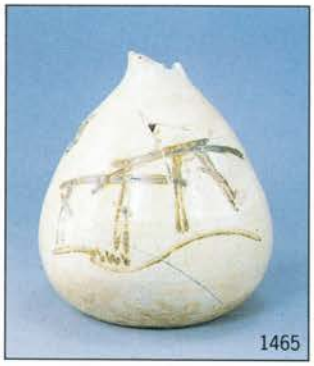

2156

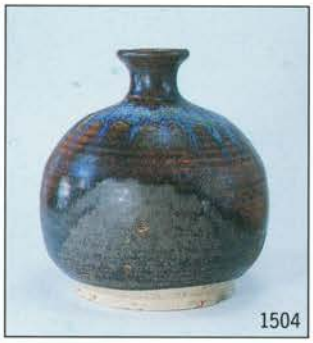
2157

1792


2353

図版三十四　近世遺物　貯蔵具（瓶・壺・鉢）


1465


1504

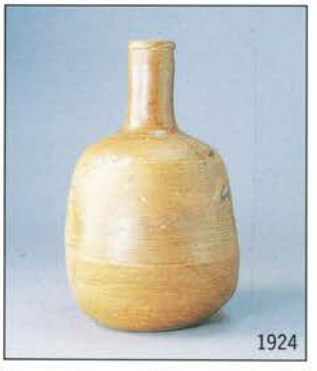
1650

1728

1729

1793

1731


1924

2505

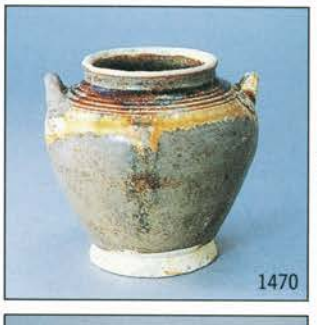
2506

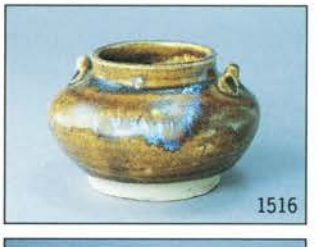
1210

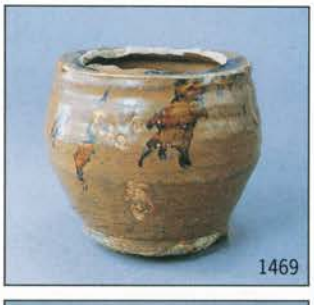
1732

1272

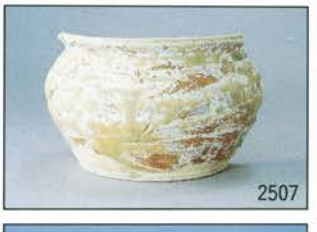
1467


1470


1516


1469

1468


2507

1366

1313

1350

1351

1355

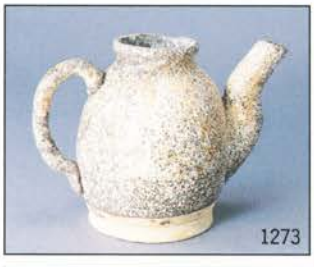
図版三十五　近世遺物　貯蔵具（鉢）・その他

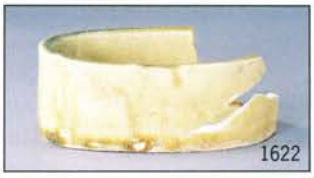
1353

2363

1078

1624


1273


1622

1473

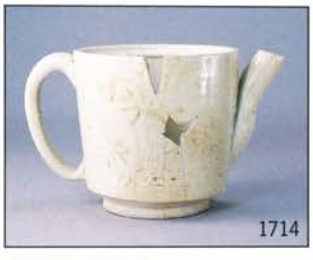
1285

1359

2367

1361

1640


1714

1277

1517

1645

1552

2508

2517

1719

2518

1623

1368

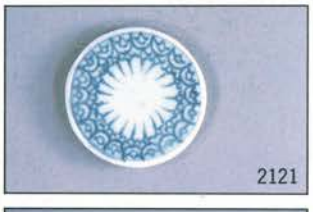
1676

1269

1781

2491

1374


2121

2426

1317

1684

図版三十六　近世遺物　貯蔵具（瓶・壺・甕）

2159

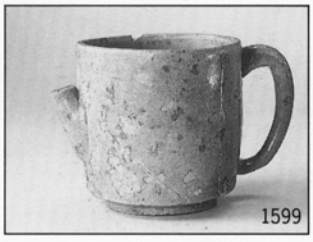
1416

2160

2359

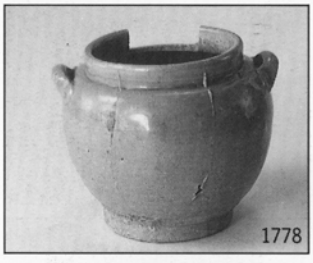
1506

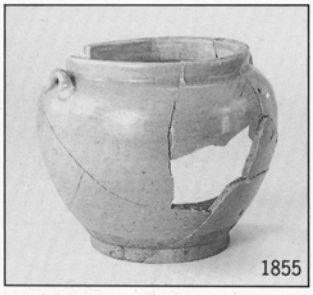
1404


1599

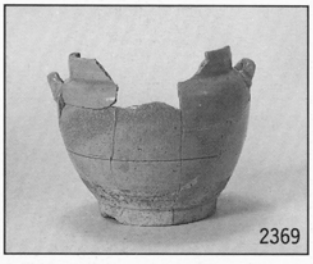
2069

2345

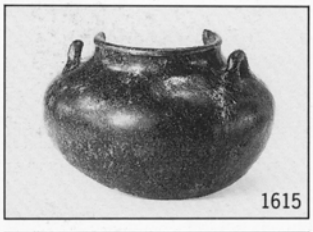

1778


1855

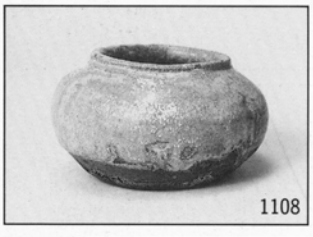
2151

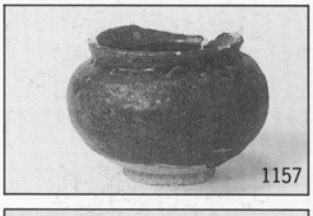

2369

1415


1615

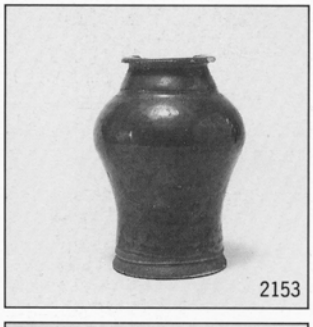
2152


1108

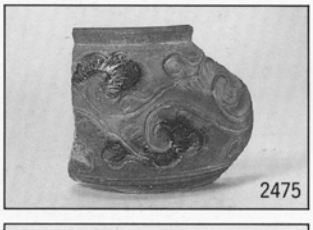

1157

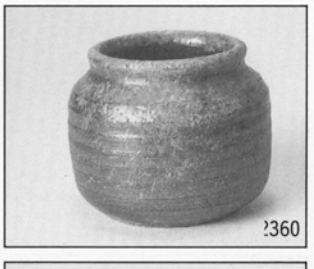
1156

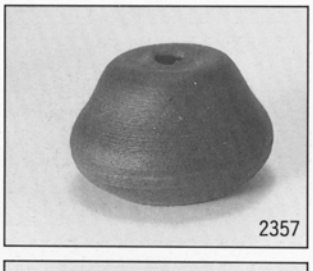
1614


2153

1733

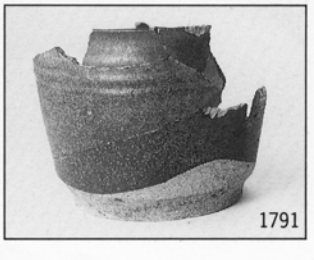

2475


2360


2357

2155

1734

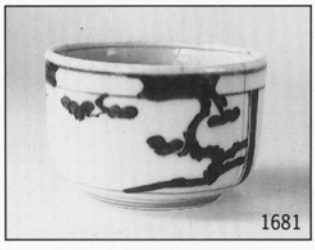

1791

2243

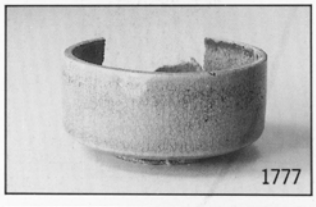
図版三十七　近世遺物　貯蔵具（甕・鉢）

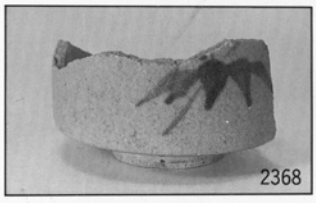
2437

2108


1681

2362

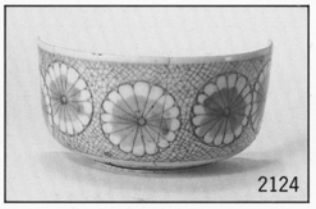

1777


2368

2368

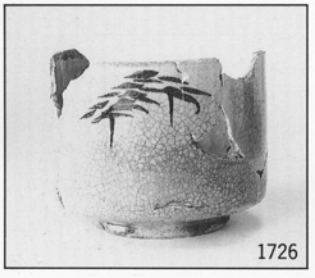
2463

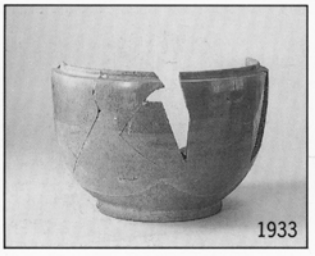
2433


2124

2374

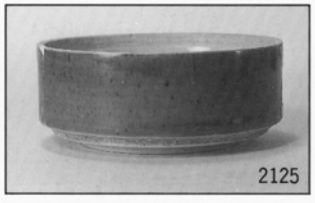
2126


1726

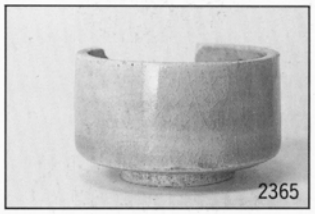

1933

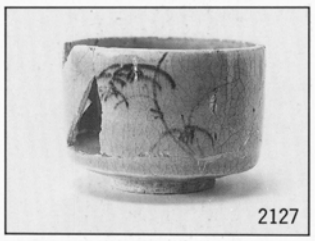
2464

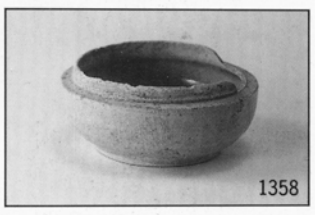
1856


2125

1477

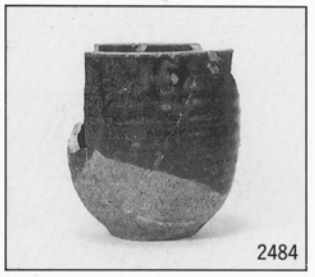

2365


2127

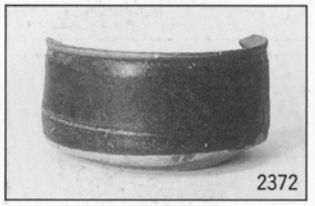

1358

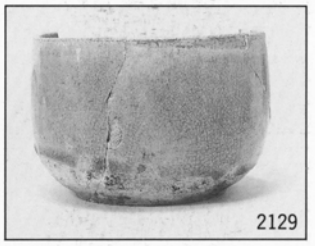
1780

1735

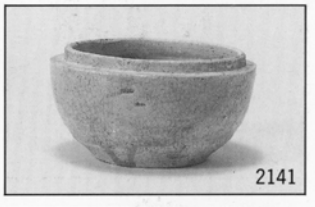

2484

2361


2372


2129

2131

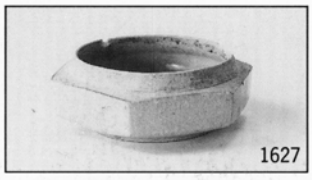

2141

2139

図版三十八　近世遺物　貯蔵具（鉢）・灯火具

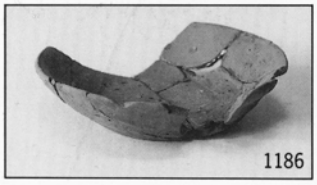
2415

2142


1627

1307

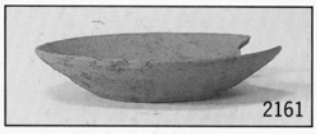
1150

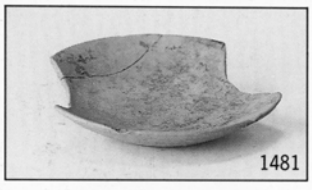

1186

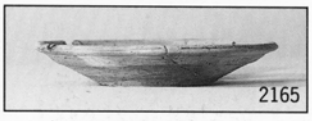
2162

1484

1918

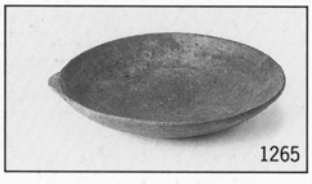

2161


1481

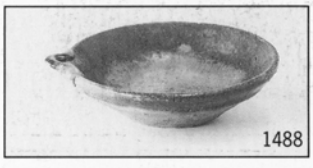

2165

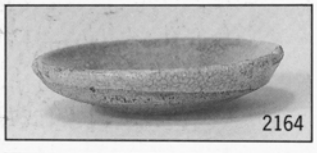
2176

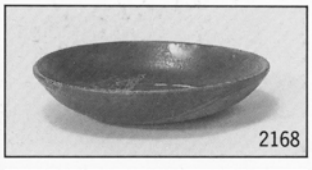
1152

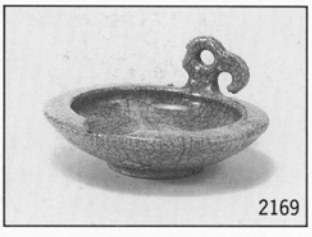

1265

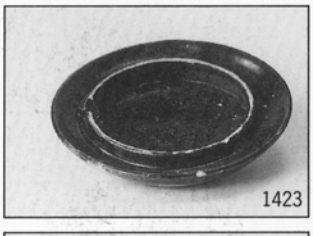
1485


1488


2164

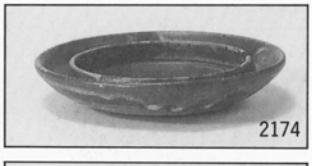

2168


2169

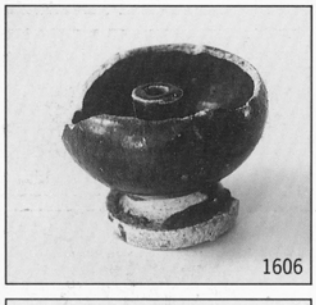

1423

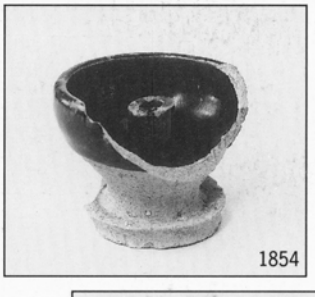
1765

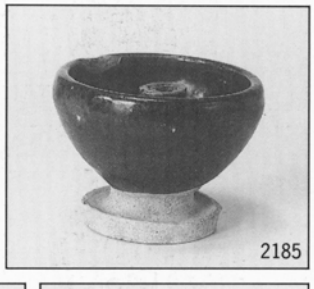
2173


2174

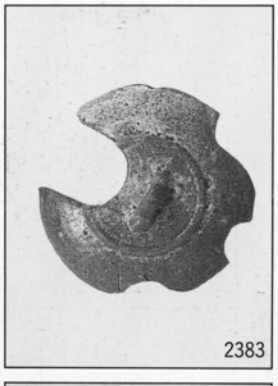
2509


1606


1854

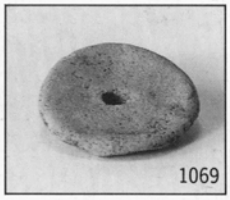

2185

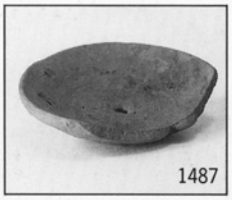
1479


2383

2178

1767

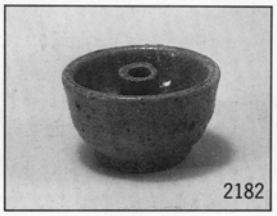

1069

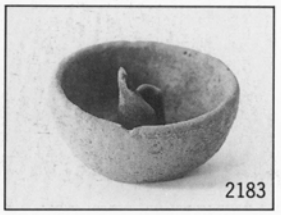

1487

1515

1766

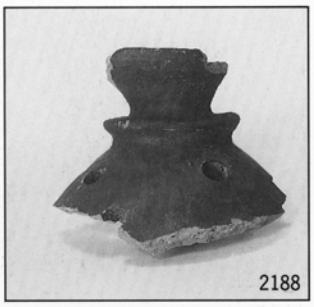
2396

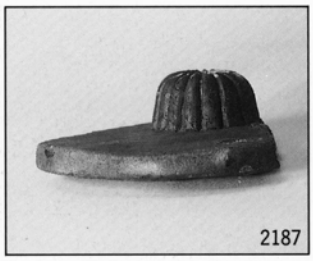

2182


2183

図版三十九　近世遺物　灯火具・火具・化粧具

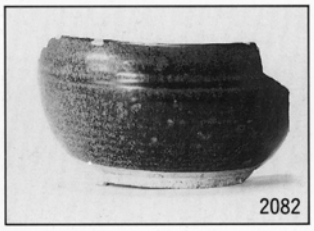
2179


2188


2187

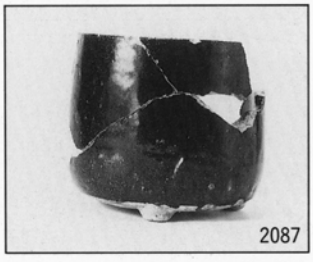
1295

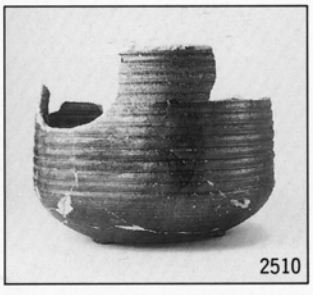
1794

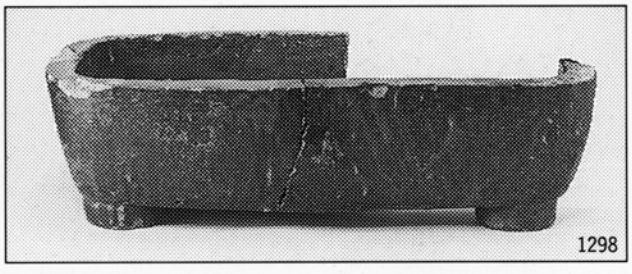

2082

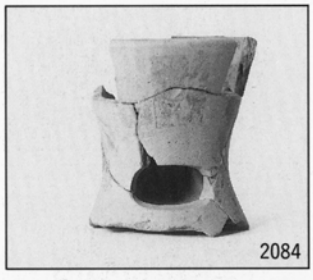
2081

2444

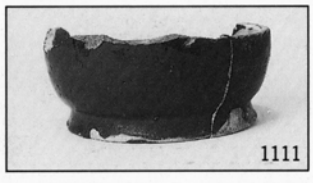

2087


2510


1298

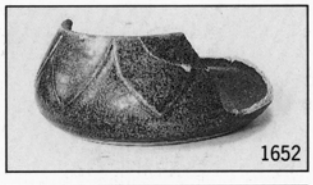

2084

1076

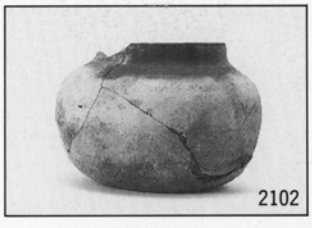

1111

2098

1297

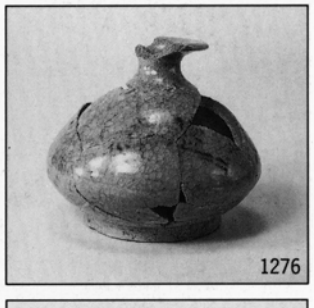

1652

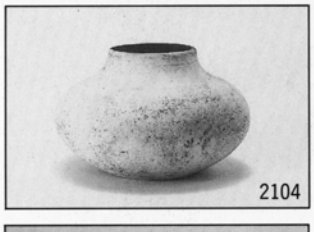
2099

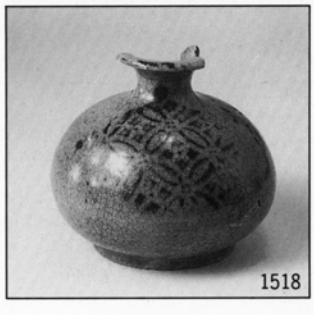

2102

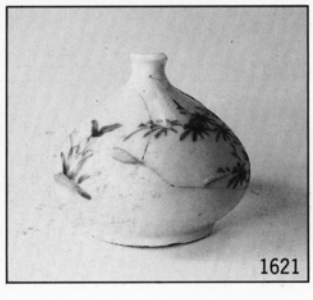
1413

1795

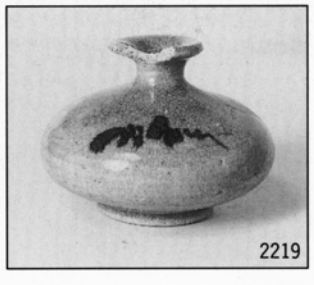

1276


2104


1518


1621

2217


2219

図版版四十　近世遺物　化粧具・喫煙具・調度具

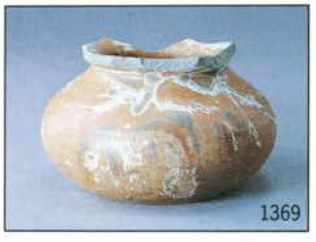
1519

2233

1283

1724

1362


1369

2519

2234

1284

1788

1363

2511

1419

2236

1785

1869

1654

2512

1278

1789

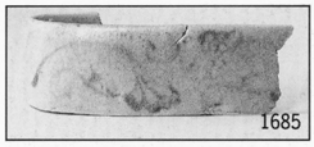
2520

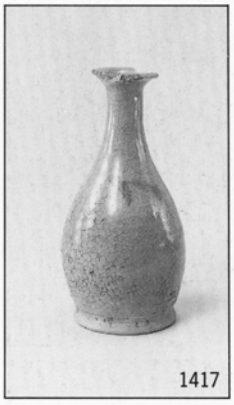
1704

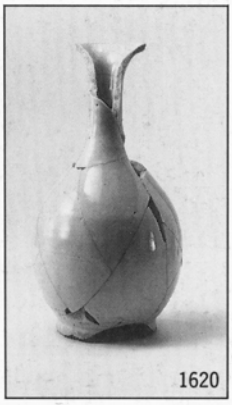
1948

2513

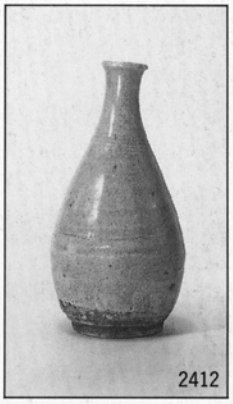
2424

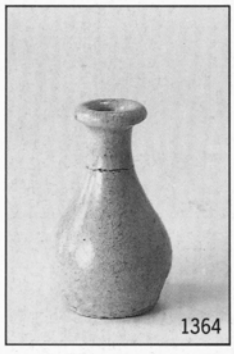

1685

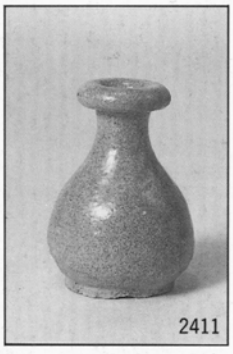

1417

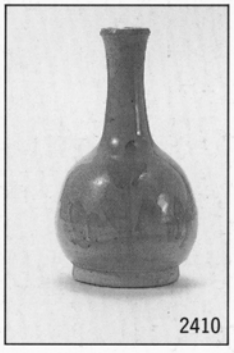

1620

1784

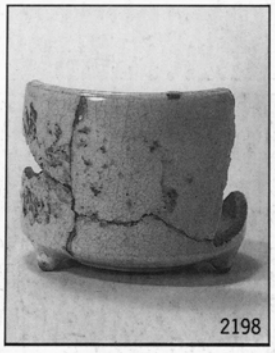

2412


1364

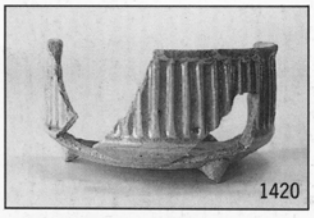

2411

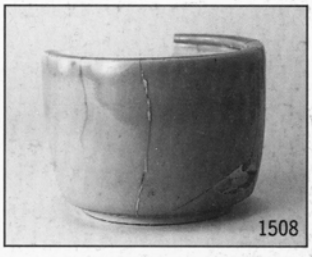

2410

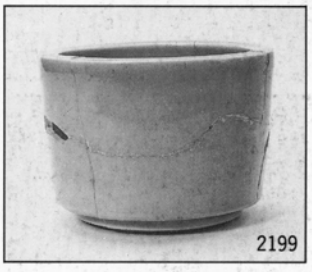
1278


2198

1274


1420

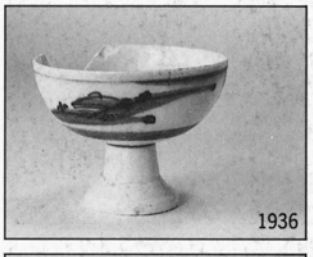

1508

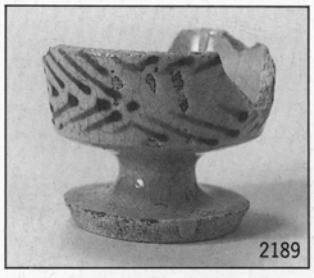

2199

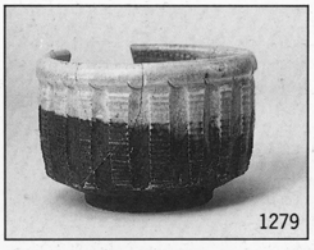
1286

1357

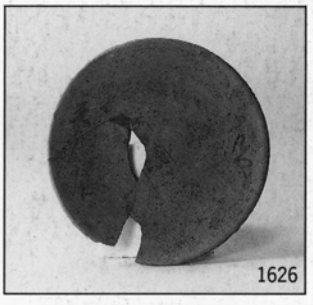
1677


1936


2189

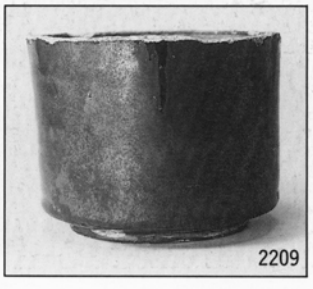

1279

2166

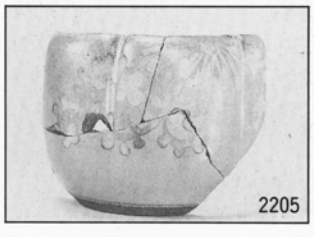

1626

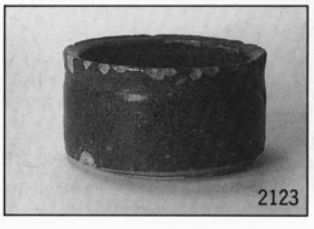
1783

1943


2209

2207


2205

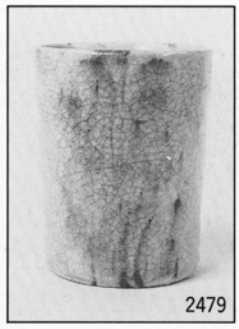

2123

図版四十二　近世遺物　喫煙具・調度具

1282

2206

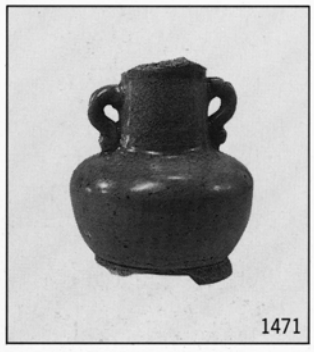
1418


2479

1163

1044

1315


1471

1679

1373

1868

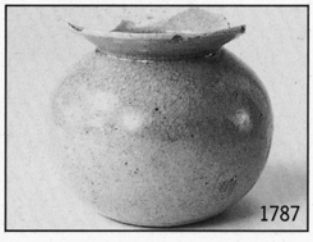
1630

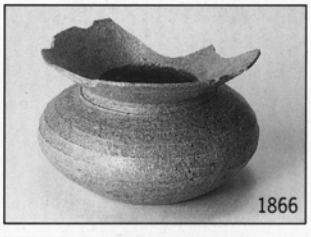
2476

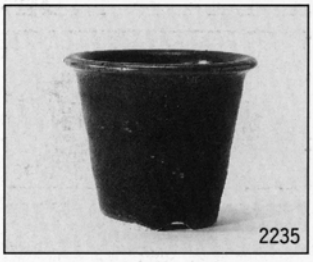
2222

2246

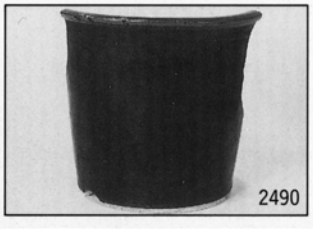
1288

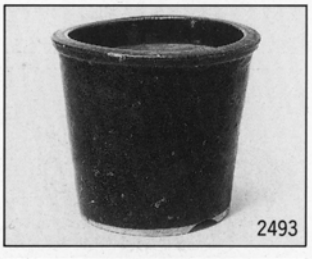

1787

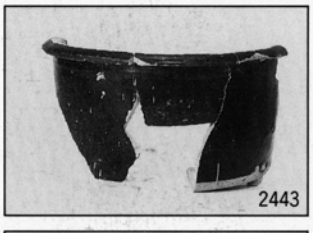

1866

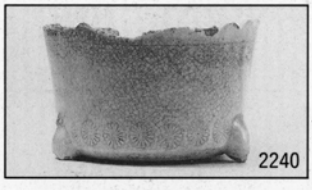

2235

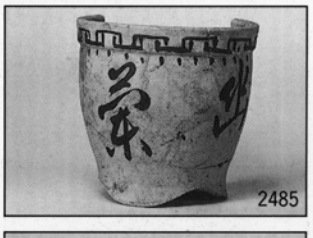
2238

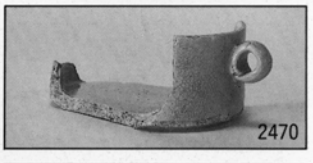

2490


2493

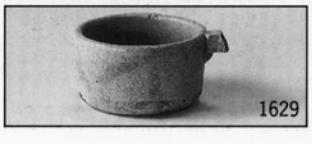

2443


2240


2485


2470

2210


1629

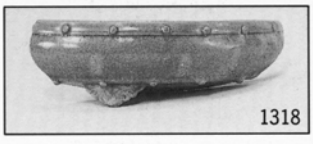
2211

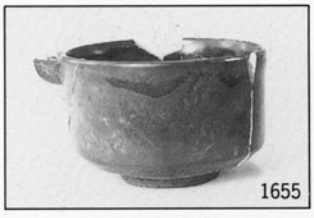
2470

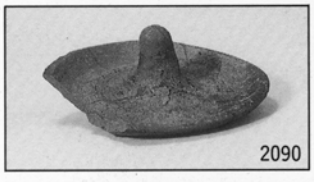
図版四十三　近世遺物　調度具・蓋類

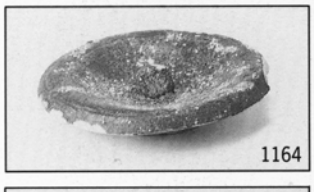
2113

2110

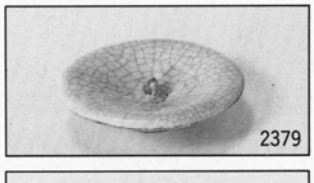

1318

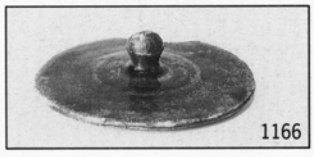

1655

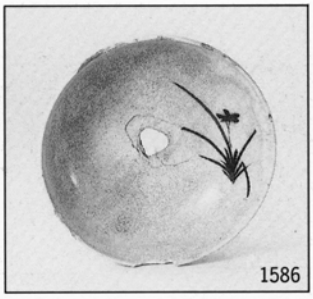

2090

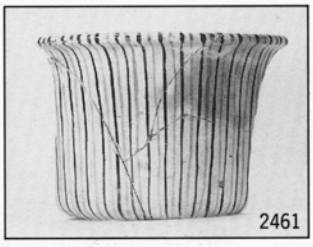

1164

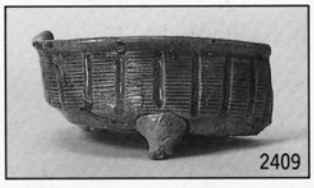
1510


2379


1166


1586


2461


2409

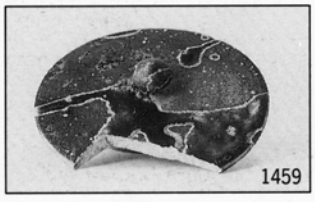
1867

2091

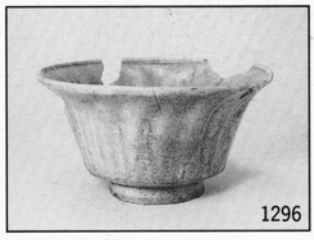
1414

1557

2347


1459

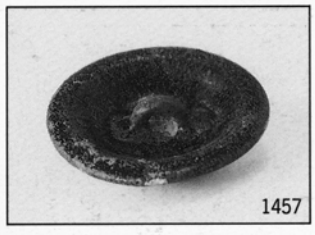
2482


1296

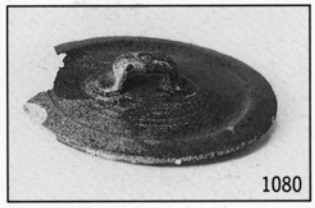
1073

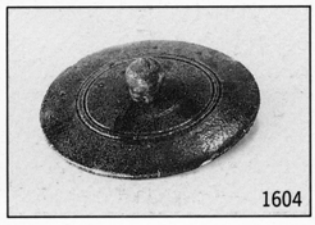
2245

2092

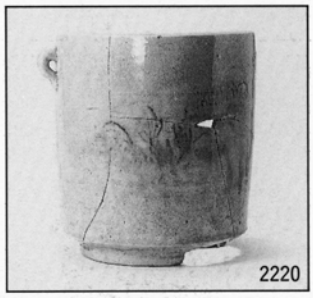

1457

2063

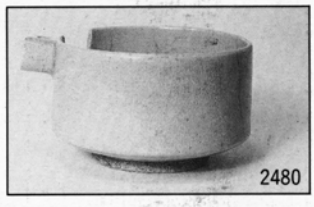

1080


1604

2483

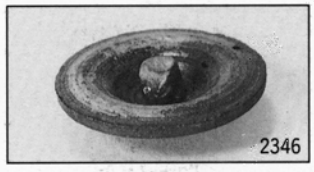

2220

2514

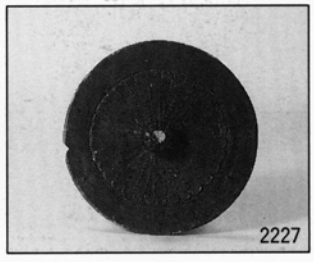

2480

2145

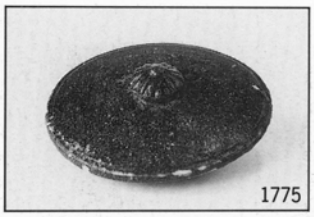
1616


2346

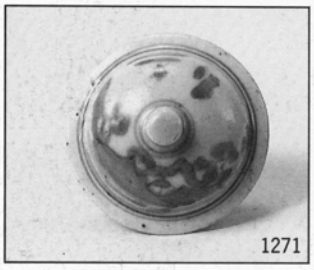
1165

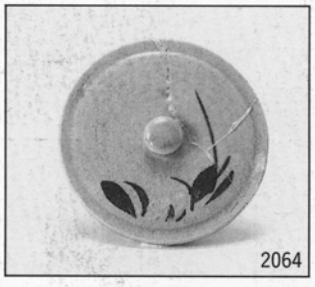

2227

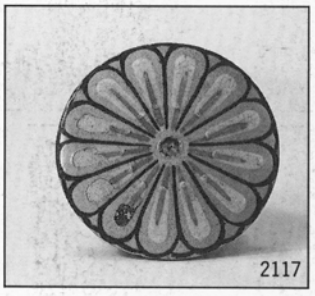
図版四十四　近世遺物　蓋類


1775

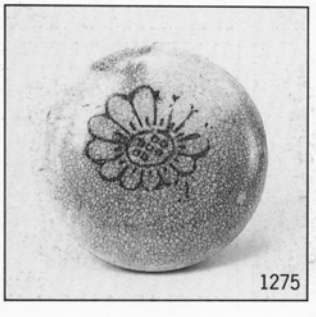
1223

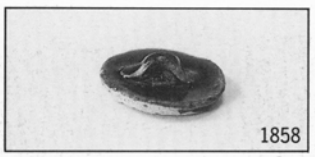

1271

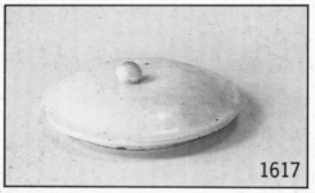

2064

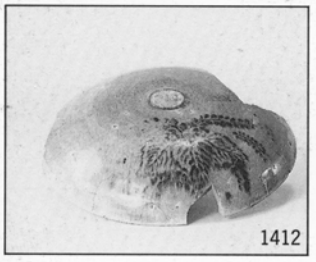

2117

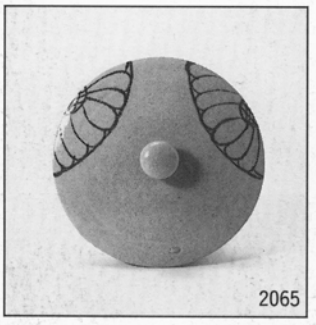
2136


1275

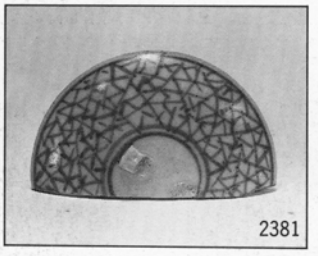

1858


1617

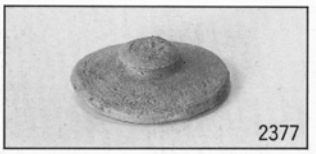

1412


2065

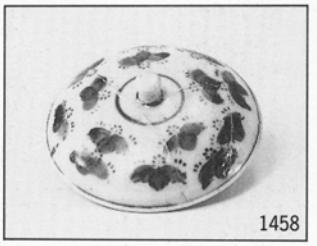
2118


2381

2419


2377

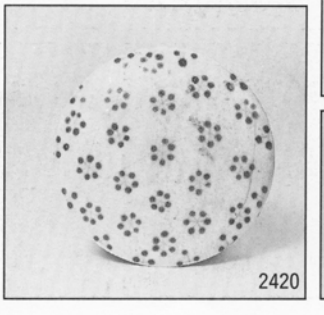
2521


1458

2115

2119

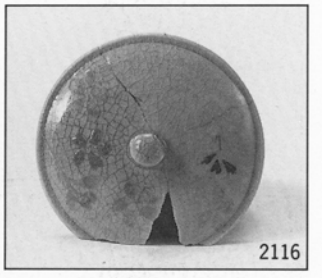
2382

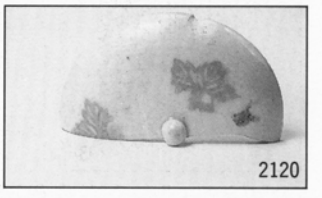

2420

2468

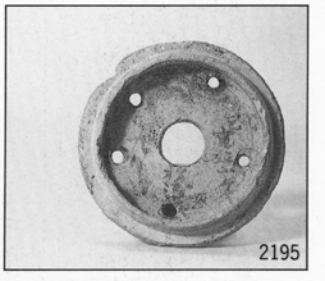
2103

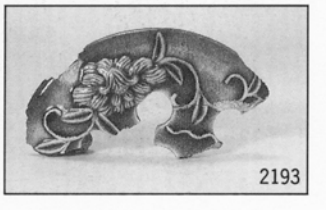
1675


2116


2120

2376


2195


2193

図版四十五　近世遺物　焼塩壺(1)

3002

3003

3008

3012

3016

3019

3022

3023

3024

3025

3027

3029

3031

3032

3033

3034

3036

3037

3038

3040

3043

3044

3046

3047

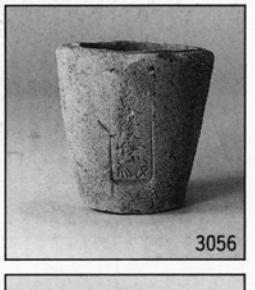
3048

3050

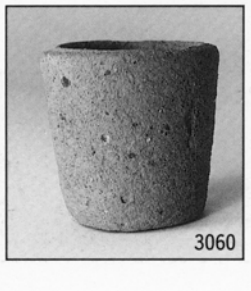
3053

3054

3055


3056

3059


3060

3063

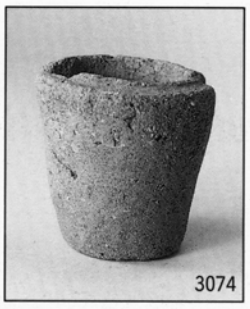
3067

3068

図版四十六　近世遺物　焼塩壺(2)

3069

3072

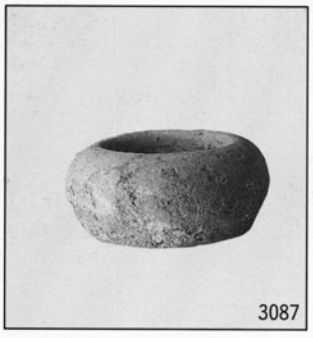

3074

3075

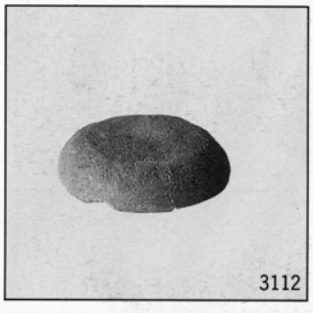
3077

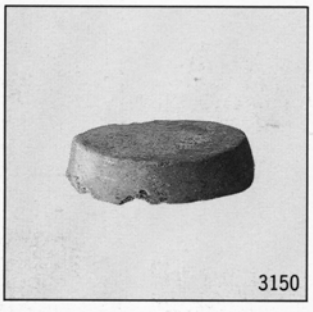
3079

3162

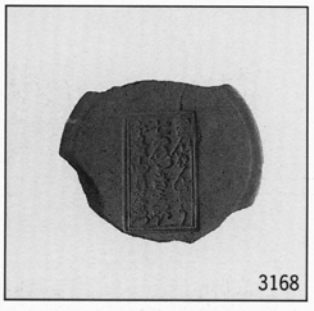

3087

3084


3112


3150

3120


3168

3169

3172

3174

3175

3177

3155

3156

3157

3158

3160

3161

3162

4001

4011

4021

4002

4012

4022

4003

4013

4024

4004

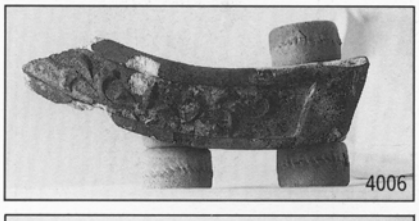
4015

4025

4005

4016

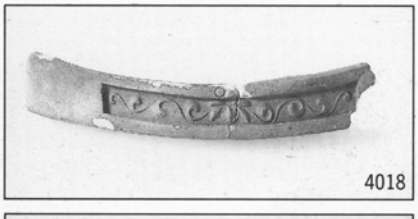
4038


4006

4017

4076

4008


4018

4077

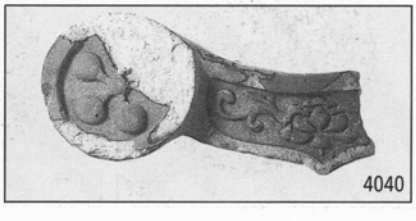
4009

4019

4039

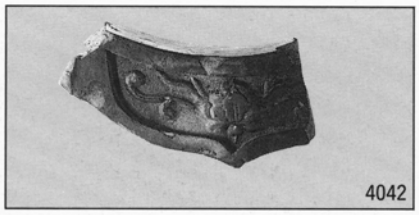
4010

4020


4040

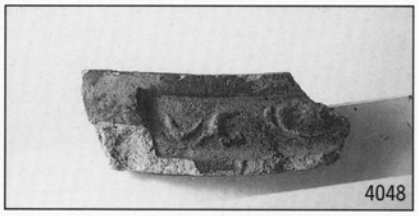
図版四十八　近世遺物　瓦(2)

4041

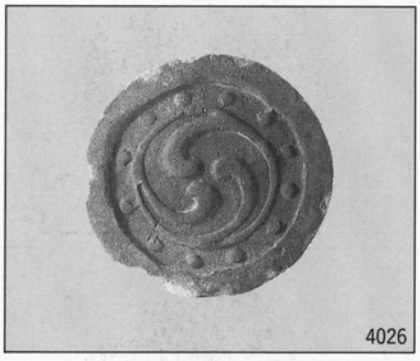

4042

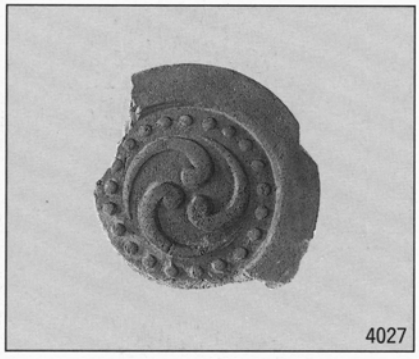
4043

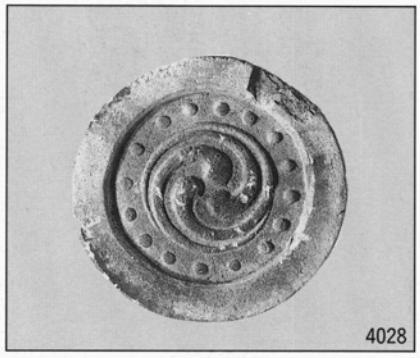
4047

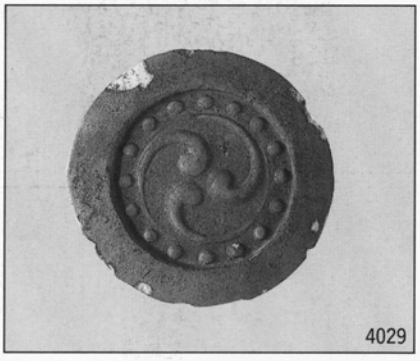

4048

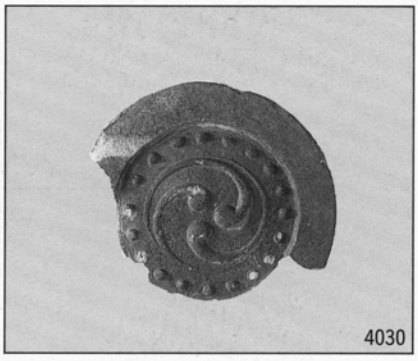
4049

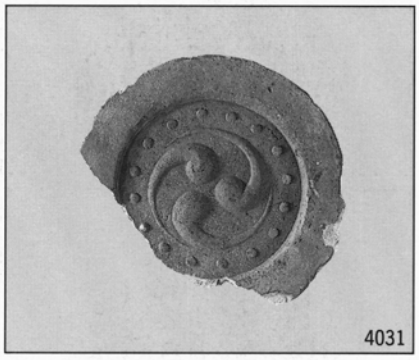

4026

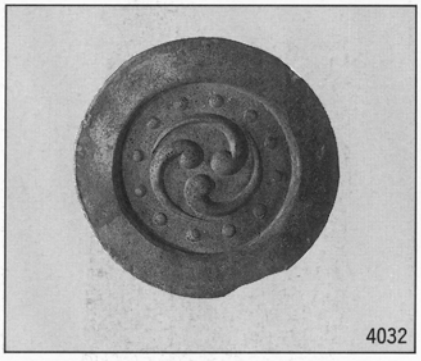

4027

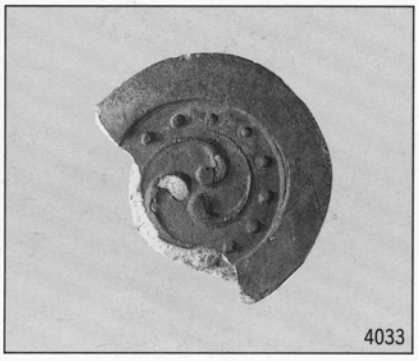

4028


4029

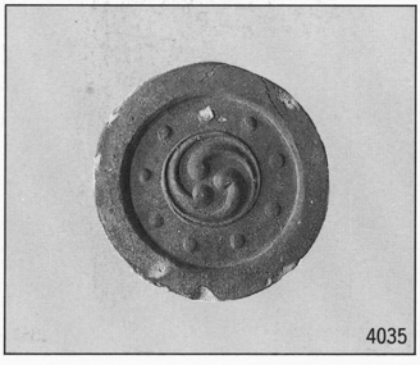

4030

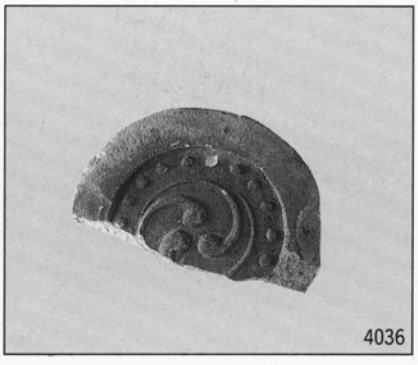

4031

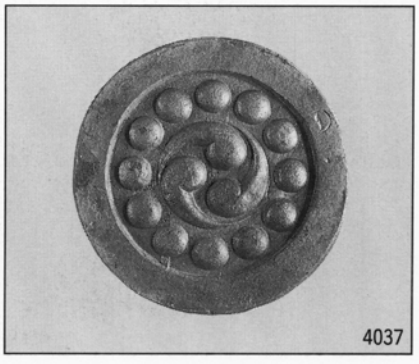

4032


4033

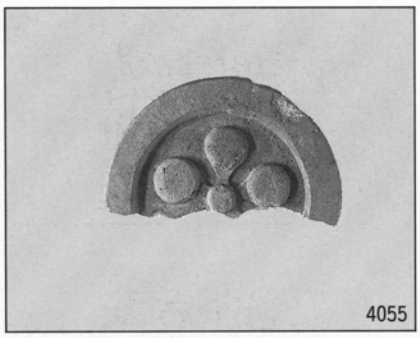
4034

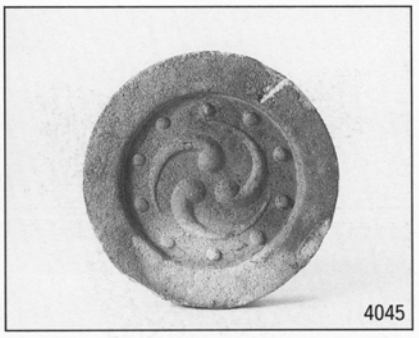

4035

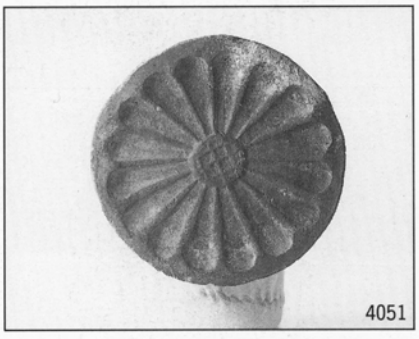

4036

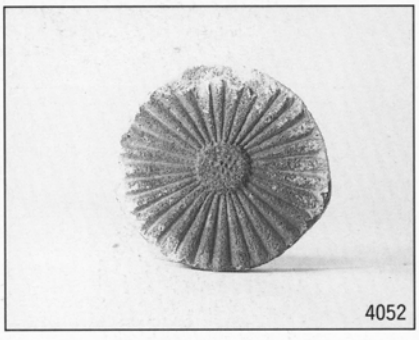

4037

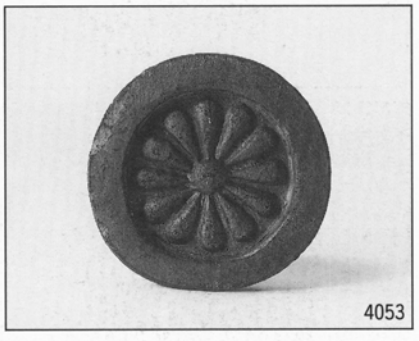
4044


4055

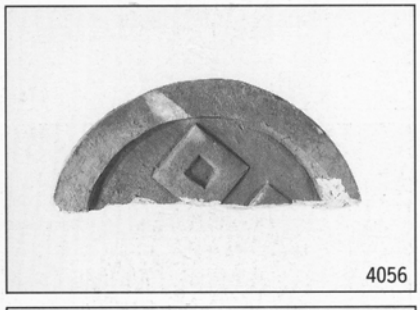

4045

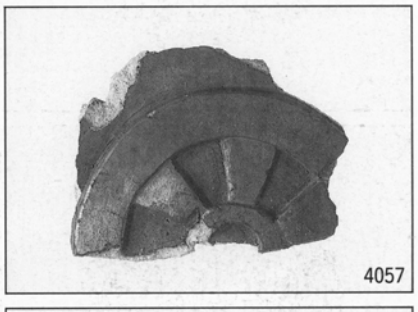

4051

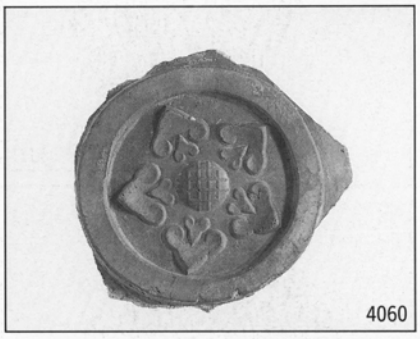

4052

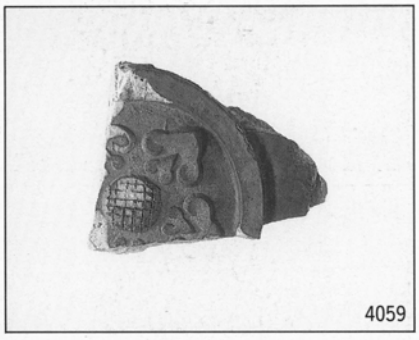

4053

4054

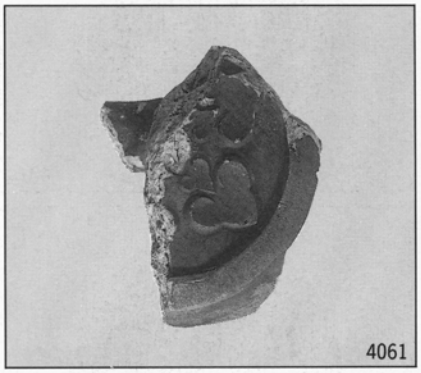

4056


4057

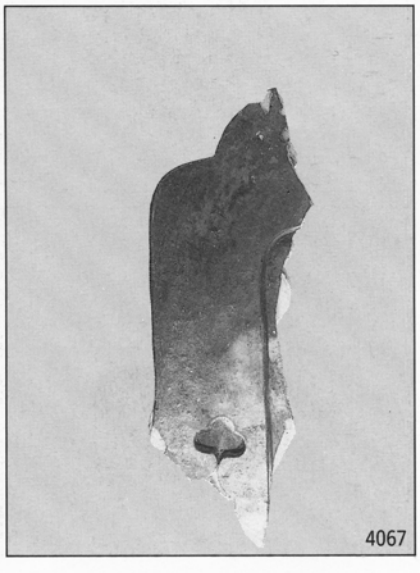

4060


4059

4067


4061

4069


4067

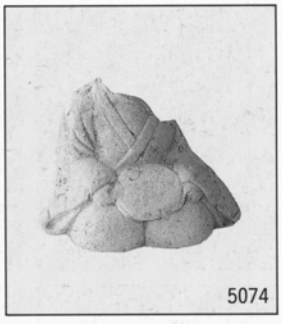
図版五十　近世遺物　人形類

5003

5007

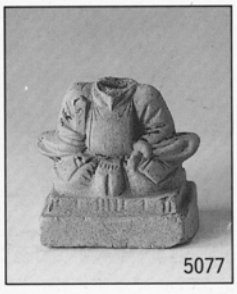
5072

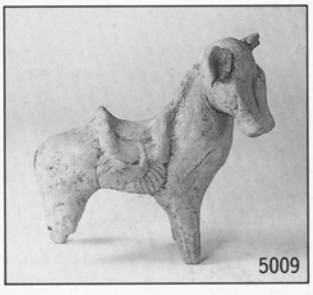
5073


5074

5075

5076


5077

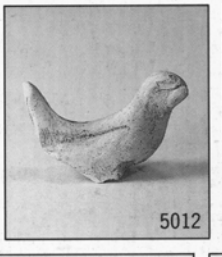

5009

5078

5013

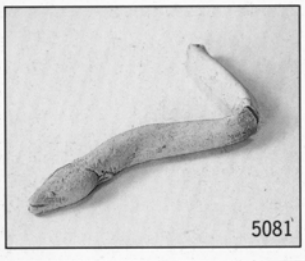
5014

5016


5012

5079

5080


5081

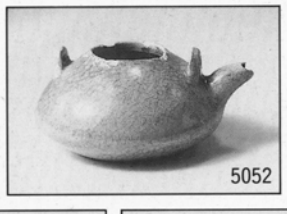
5017

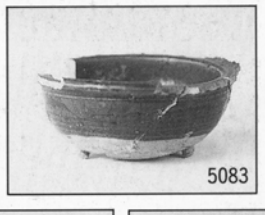
5082

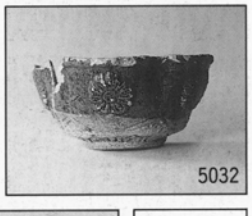
5001

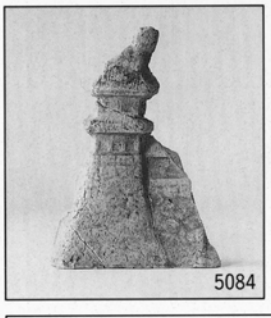
5038

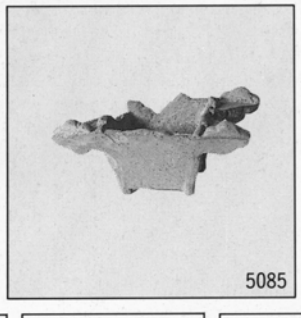
5039


5052


5083


5032

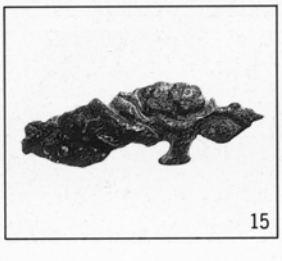

5084


5085

5054

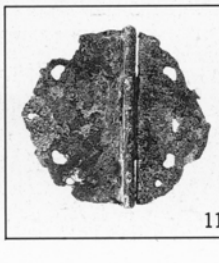
5049

47


15

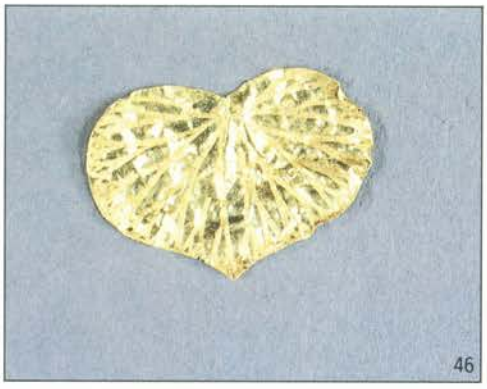
27

27


11

24

図版五十二　近世遺物　金属製品・木製品


46

46

37

45

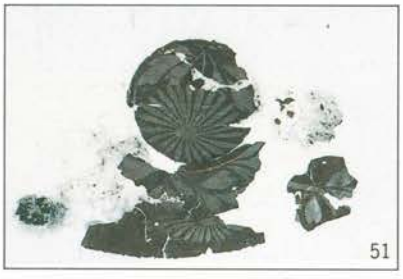
45

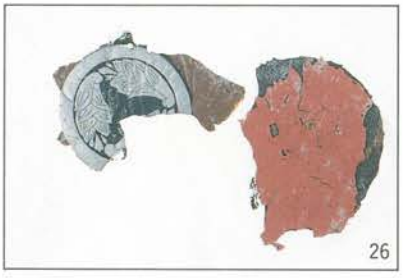
45

2

1

50


51

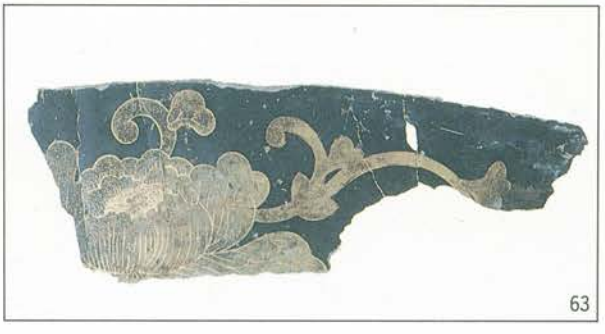

26

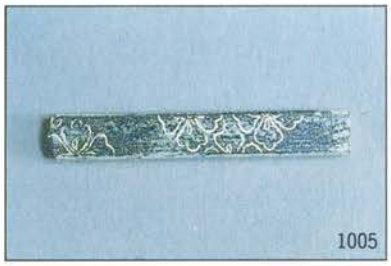
5

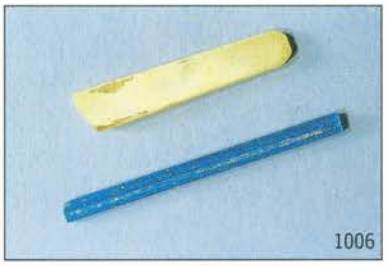
5

64

62


63


1005


1006

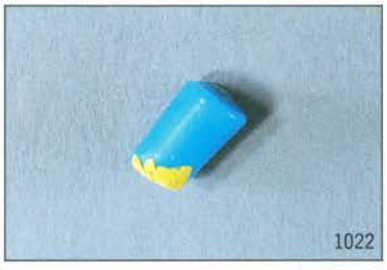
1007

1008

1009

1020

1021


1022

1023

1024

1025

1026

1027

1028

1029

1030

1031

1032

1033

1010

1034

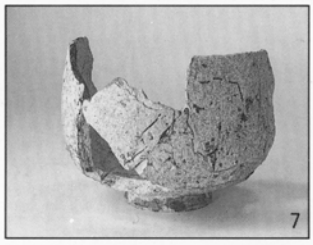
図版五十四　戦国遺物

164

166

168

169


7

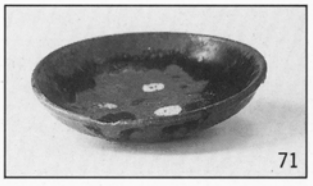
39

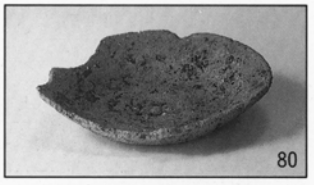
41

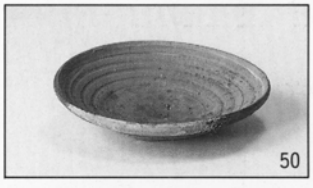
43

37

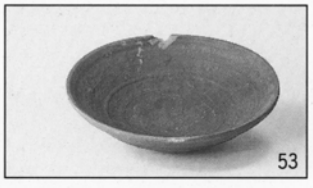
48


71


80

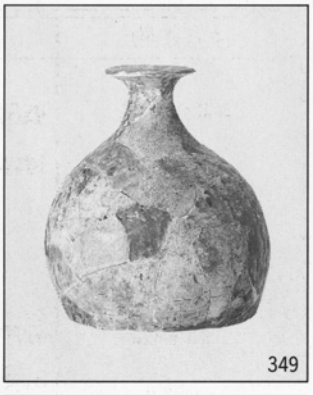

50

51


53

54

146

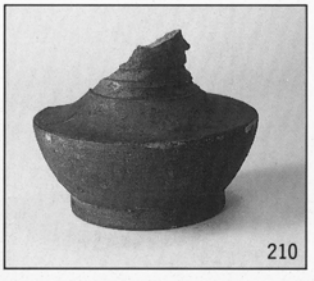

349

231

350

135

136


210

208

141

138

410

104

411

報告書抄録

フリガナ	ナゴヤジョウサンノマルイセキ
書名	名古屋城三の丸遺跡（IV）
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第44集
編著者名	遠藤才文，北野信彦，下村信博，川井啓介，松田　訓，加藤安信
編集機関	財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24
発行年	西暦1993年３月31日

フリガナ	フリガナ	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村　遺跡番号	°′″	°′″		m²	
名古屋城（ナゴヤジョウ） 三の丸（サンノマル）	名古屋市中区（ナゴヤシナカク）	23106　——	35°10′41″	136°54′16″	19910601 ～ 19911227	3600	建物建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
名古屋城 三の丸	中・近世 城館跡	中世	建物跡　4 堀・溝　21 井戸　11 柵列　2	中世陶磁器 瓦 石製品	戦国那古野城の 遺構
		近世	屋敷地　3 建物跡　3 柵・石列　10 井戸と土坑 多数	近世陶磁器 人形 木、漆製品 鉄製品 石製品	竹腰、山澄他 の武家屋敷地

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第44集

名古屋城三の丸遺跡IV

1993年3月31日

編集・発行　財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

印刷　西濃印刷株式会社